

Na                    Ka  
**那                玑            5**

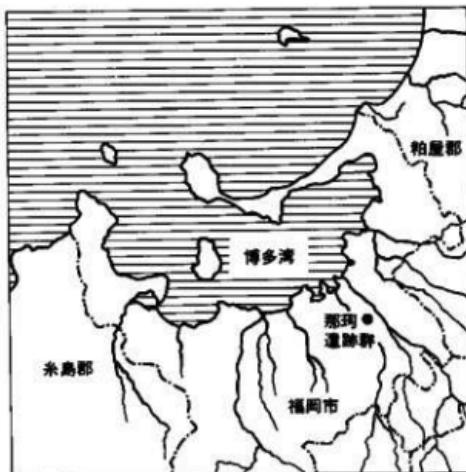
——第10・12・14・16・17・21次調査報告——

1992

福岡市教育委員会

Na                    Ka  
那                  珂 5

—第10・12・14・16・17・21次調査報告—



1992

福岡市教育委員会



1

8

1) 第21次調査検出SK-48出土箇形器台



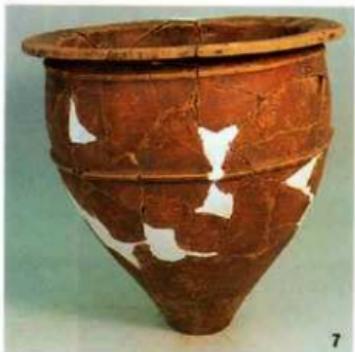
2

4

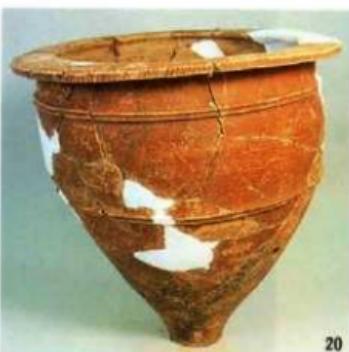
7

2) SK-48出土 A群土器

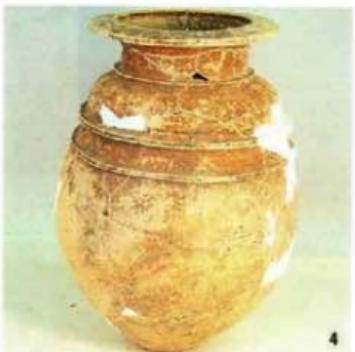
卷頭圖版 2



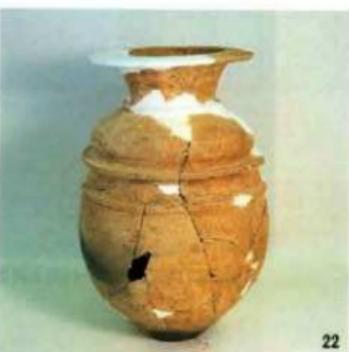
7



20



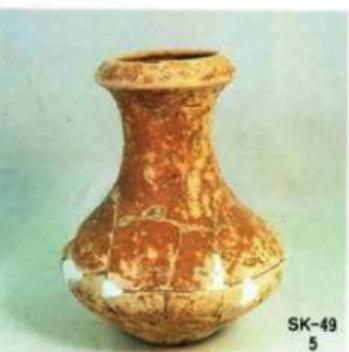
4



22



2



SK-49  
5

3) SK-48出土土器



16



12



98



64



13



24

4) SK-48出土土器

卷頭圖版 4



5) SK-48出土B群土器



6) SK-48出土C群土器

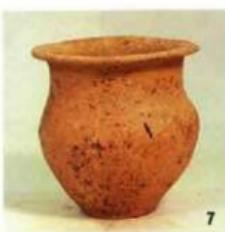


7) SK-49出土土器群

卷頭圖版 5



4



7



2



3



12



16



6

8) SK-49出土土器

卷頭図版 6



第10次調査



第21次調査：SC-71



第21次調査：SK-49

9) 出土青銅製鋸先



10 第21次調査：SC-64出土土器群

## 序

九州の中核都市福岡は大陸文化亨受の門戸とし、先史時代から栄えてきました。そのため市内には数多くの遺跡が分布しています。なかでも博多駅南部には那珂遺跡などの大規模な遺跡があります。

本市では特に文化財の保護・活用に努めてきていますが、市内の都市整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のため発掘調査を行なっています。

本書は、博多区竹下三丁目のアサヒビール株式会社の博多工場整備拡充に先だって発掘調査を実施した那珂遺跡の報告書です。

発掘調査の結果、弥生時代から古代にかけての墓地や集落の遺構を検出することができました。

アサヒビール株式会社をはじめとする関係各位の多大なるご協力に対し、深く感謝いたします。

本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

## 例　　言

1. 本書は、博多区竹下三丁目1番1号のアサヒビル株式会社の博多工場整備拡充に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、1987年・1988年・1989年に発掘調査を実施した那珂遺跡群第10~12・14・16・17・21次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治・吉留秀敏・城戸康利・牟田裕二・上方高弘・池ノ上宏・大塚恵治・屋山洋ほかがあたった。
3. 本書使用の遺物実測図は、山口謙治・吉留秀敏・常松幹雄・亀井明徳・田崎博之・屋山洋・平川敬治・浜右正子・久保寿一郎・樋篠久美子・井上加代子・井手かすみ・犬丸陽子があたった。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治・吉留秀敏・城戸康利・上方高弘・池ノ上宏・牟田裕二が、遺物を平川敬治が撮影した。
5. 本書使用の図面の整理は、山口謙治・吉留秀敏・杉山富雄・田崎博之・屋山洋・樋篠久美子・浜石正了・入江のり子・藤村住公恵・山口朱美があたった。
6. 本書使用の方位は磁北である。真北は西偏  $5^{\circ}21'$  である。
7. 第10・14・21次調査検出の赤色顔料については、本田光子氏および宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に、第14次調査採集の花粉については、北九州大学の野井英明先生にそれぞれ分析を依頼し、分析結果については第9章に収録した。
8. 第10・14・16・21次調査出土の金属器および第11・14次調査出土の木器の保存処理は、福岡市埋蔵文化財センターにて行ない、保存処理報告を本田光子氏にお願いし、第9章に収録した。
9. 本書の執筆は、各章の弥生時代前期の土器については田崎博之が、第5・8章の古代井戸の出土遺物については亀井明徳が、第5~7章および第10章2を吉留秀敏が、そのほかは山口謙治があたり、編集は亀井明徳・吉留秀敏との協議のもとに山口謙治があたった。
10. 本書収録の第10~12・14・16・17・21次調査の記録類や出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

## 本文目次

第1章 序説	(山口謙治)	1
1. はじめに		1
2. 調査体制		2
第2章 遺跡の位置と環境	(山口謙治)	3
1. 遺跡の位置と立地		3
2. 那珂遺跡群の調査		5
第3章 第10次調査の記録	(山口謙治)	7
1. 調査概要		7
2. 遺構と出土遺物		8
3. 包含層と出土遺物	(山口謙治・田崎博之)	12
4. まとめ		14
第4章 第11・12次調査の記録	(山口謙治)	15
1. 調査概要		15
2. 第11次調査検出井戸と出土遺物		15
3. 第12次調査検出井戸と出土遺物		20
4. まとめ		24
第5章 第14次調査の記録	(吉留秀敏)	25
1. 調査の経過		25
2. 調査地点の位置と環境		25
3. 調査の概要		25
4. 調査地点の土層堆積		27
5. 調査の記録	(吉留秀敏・龜井明徳・田崎博之)	28
6. まとめ		63
第6章 第16次調査の記録	(吉留秀敏)	69
1. 調査の経過とその位置		69
2. 調査の概要		69

3. 調査の記録	71
(1) 養棺墓	71
(2) 土壙墓	113
(3) 土壙	124
(4) 溝	125
(5) その他の遺構と採集遺物	131
4. まとめ	133
 第7章 第17次調査の記録	(吉留秀敏) 139
1. 調査と経緯と古墳の保存	139
2. 調査の概要	139
3. 剣塚北古墳	141
4. その他の遺構	148
5. まとめ	150
 第8章 第21次調査の記録	(山口謙治) 155
1. 調査の概要	155
2. 弥生時代前期の遺構と出土遺物	(山口謙治・田崎博之) 156
3. 弥生時代の墓地と山土遺物	177
4. 穫穴住居址(SC)と出土遺物	233
5. 古代の遺構と出土遺物	(山口謙治・龜井明徳) 243
6. その他の遺構と出土遺物	259
7. まとめ	259
 第9章 自然科学的分析	
1. 赤色顔料について	(本田光子・成瀬正和) 261
2. 那珂遺跡群第14次調査によって得られた試料の花粉分析	(野井英明) 266
3. 金属器の保存処理	(本田光子) 267
 第10章 結論	
1. 弥生時代初頭の土器	(田崎博之) 269
2. 福岡平野における首長系譜について	(吉留秀敏) 273
3. アサヒビール工場内遺跡の調査から	(山口謙治) 275

## 挿 図 目 次

Fig. 1	那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡	3	Fig. 49	第15号櫛立柱建物出土遺物	56
Fig. 2	那珂遺跡群調査地点	4	Fig. 50	第16号櫛立柱建物 (SB-16) 実測図	57
Fig. 3	第10次調査地点造構配図	6	Fig. 51	第17号櫛立柱建物 (SB-17) 実測図	58
Fig. 4	第20・21号櫛立柱建物 (SB-20・21) 実測図	9	Fig. 52	第18号櫛立柱建物 (SB-18) 実測図	59
Fig. 5	第16・18・22・23号櫛立柱建物 (SB-16・18・22・23) 実測図	10	Fig. 53	柱穴出土遺物(1)	60
Fig. 6	調查区谷部土層断面図(北から)	12	Fig. 54	柱穴出土遺物(2)	61
Fig. 7	第1文化層出土七器実測図	13	Fig. 55	柱穴出土遺物(3)	61
Fig. 8	出土青銅製先実測図	14	Fig. 56	包含層出土遺物	62
Fig. 9	第11次調査区	15	Fig. 57	第20号堅穴式住居跡(SC-20) の移動式竪設 籠遺構とその復元図	63
Fig. 10	第12次調査区	15	Fig. 58	第16次簡査地点全体図	70
Fig. 11	第11次調査検出第1号井戸 (SE-01) 実測図	16	Fig. 59	第1号櫛棺 (SK-01) 実測図	71
Fig. 12	第1号井戸出土上層土器実測図(1)	17	Fig. 60	第1号櫛棺出土遺物	72
Fig. 13	第1号井戸出土土器実測図(2)	18	Fig. 61	第3号櫛棺 (SK-03) 実測図	72
Fig. 14	第1号井戸出土木履実測図(1)	19	Fig. 62	第4・5号櫛棺 (SK-04・05) 実測図	73
Fig. 15	第1号井戸出土木器実測図(2)	20	Fig. 63	第4・5号櫛棺出土遺物	73
Fig. 16	第12次調査検出第1号井戸 (SE-01) 実測図	21	Fig. 64	第6号櫛棺 (SK-06) 実測図	74
Fig. 17	第1号井戸出土土器実測図(1)	22	Fig. 65	第6号櫛棺出土遺物	74
Fig. 18	第1号井戸出土上器実測図(2)	23	Fig. 66	第7号櫛棺 (SK-07) 実測図	75
Fig. 19	第14次調査地点全体図	26	Fig. 67	第7号櫛棺出土遺物(1)	76
Fig. 20	第14次調査地点模式土層断面図	27	Fig. 68	第7号櫛棺出土遺物(2)	77
Fig. 21	第3号井戸 (SE-03) 実測図	28	Fig. 69	第8号櫛棺 (SK-08) 実測図	78
Fig. 22	第3号井戸 (SE-03) 出土遺物	28	Fig. 70	第8号櫛棺出土遺物	78
Fig. 23	第4・5号井戸 (SE-04・05) 実測図	29	Fig. 71	第9号櫛棺 (SK-09) 実測図	79
Fig. 24	第4・6号井戸出土遺物	30	Fig. 72	第9号櫛棺出土遺物	79
Fig. 25	第6号井戸 (SE-06) 実測図	30	Fig. 73	第10号櫛棺 (SK-10) 実測図	80
Fig. 26	第7号井戸 (SE-07) 実測図	31	Fig. 74	第11号櫛棺 (SK-11) 実測図	80
Fig. 27	第7号井戸 (SE-07) 土層図	32	Fig. 75	第19号櫛棺 (SK-19) 実測図	80
Fig. 28	第7号井戸出土遺物(1)	33	Fig. 76	第10号櫛棺出土遺物	81
Fig. 29	第7号井戸出土遺物(2)	35	Fig. 77	第11号櫛棺出土遺物	82
Fig. 30	第7号井戸出土遺物(3)	36	Fig. 78	第19号櫛棺出土遺物	83
Fig. 31	第7号井戸出土遺物(4)	37	Fig. 79	第20号櫛棺 (SK-20) 実測図	84
Fig. 32	第19号井戸 (SE-19) 実測図	39	Fig. 80	第20号櫛棺出土遺物	84
Fig. 33	第19号井戸 (上層) 出土遺物(1)	40	Fig. 81	第21号櫛棺 (SK-21) 実測図	85
Fig. 34	第19号井戸 (中層) 出土遺物(2)	41	Fig. 82	第21号櫛棺出土遺物	85
Fig. 35	第19号井戸 (下層) 出土遺物(3)	42	Fig. 83	第22号櫛棺 (SK-22) 実測図	86
Fig. 36	第19号井戸出土遺物(4)	43	Fig. 84	第22号櫛棺出土遺物	86
Fig. 37	第19号井戸出土遺物(5)	44	Fig. 85	第23号櫛棺 (SK-23) 実測図	87
Fig. 38	第1号土壤 (SK-01) 実測図	44	Fig. 86	第24号櫛棺 (SK-24) 実測図	87
Fig. 39	第1号土壤出土遺物(1)	45	Fig. 87	第23号櫛棺出土遺物(1)	87
Fig. 40	第1号土壤出土遺物(2)	46	Fig. 88	第23号櫛棺出土遺物(2)	87
Fig. 41	第8号土壤 (SK-08) 実測図	47	Fig. 89	第24号櫛棺出土遺物	88
Fig. 42	第9号堅穴式住居跡 (SC-09) 実測図	48	Fig. 90	第25号櫛棺 (SK-25) 実測図	90
Fig. 43	第9号堅穴式住居跡出土遺物	49	Fig. 91	第25号櫛棺出土遺物	90
Fig. 44	第20号堅穴式住居跡 (SC-20) 実測図	50	Fig. 92	第26号櫛棺 (SK-26) 実測図	91
Fig. 45	第20号堅穴式住居跡出土遺物	51	Fig. 93	第26号櫛棺出土遺物	91
Fig. 46	第21~25号堅穴式住居跡 (SC-21~25) 実測図	52	Fig. 94	第27号櫛棺 (SK-27) 実測図	92
Fig. 47	第21・22号堅穴式住居跡出土遺物	53	Fig. 95	第27号櫛棺出土遺物	92
Fig. 48	第15号櫛立柱建物 (SB-15) 実測図	55	Fig. 96	第28号櫛棺 (SK-28) 実測図	94
			Fig. 97	第28号櫛棺出土遺物	94
			Fig. 98	第30号櫛棺 (SK-30) 実測図	96
			Fig. 99	第30号櫛棺出土遺物	96
			Fig. 100	第31号櫛棺 (SK-31) 実測図	96

Fig. 101	第31号 sondage出土遺物	96
Fig. 102	第33号 sondage (SK-33) 実測図	97
Fig. 103	第33号 sondage出土遺物	98
Fig. 104	第34号 sondage (SK-34) 実測図	99
Fig. 105	第35号 sondage (SK-35) 実測図	99
Fig. 106	第34・35号 sondage出土遺物	99
Fig. 107	第36号 sondage (SK-36) 実測図	100
Fig. 108	第36号 sondage出土遺物	100
Fig. 109	第38号 sondage (SK-38) 実測図	101
Fig. 110	第39号 sondage (SK-39) 実測図	101
Fig. 111	第38号 sondage出土遺物	102
Fig. 112	第39号 sondage出土遺物	103
Fig. 113	第40号 sondage (SK-40) 実測図	104
Fig. 114	第41号 sondage (SK-41) 実測図	104
Fig. 115	第40号 sondage出土遺物	105
Fig. 116	第41号 sondage出土遺物	106
Fig. 117	第42号 sondage (SK-42) 実測図	107
Fig. 118	第43号 sondage (SK-43) 実測図	107
Fig. 119	第42・43号 sondage出土遺物	108
Fig. 120	第44号 sondage (SK-44) 実測図	109
Fig. 121	第45号 sondage (SK-45) 実測図	109
Fig. 122	第44号 sondage出土遺物	110
Fig. 123	第45号 sondage出土遺物	111
Fig. 124	第56号 sondage (SK-56) 実測図	111
Fig. 125	第56号 sondage出土遺物	112
Fig. 126	第12号土壙墓 (SK-12) 灰陶瓦	113
Fig. 127	第13号土壙墓 (SK-13) 実測図	114
Fig. 128	第14号土壙墓 (SK-14) 実測図	114
Fig. 129	第15号土壙墓 (SK-15) 実測図	115
Fig. 130	第16号土壙墓 (SK-16) 実測図	115
Fig. 131	第17a号土壙墓 (SK-17a) 実測図	116
Fig. 132	第17b号土壙墓出土遺物	117
Fig. 133	第17b号土壙墓 (SK-17b) 実測図	117
Fig. 134	第18号土壙墓 (SK-18) 実測図	118
Fig. 135	第32号土壙墓 (SK-32) 実測図	119
Fig. 136	第46号土壙墓 (SK-46) 実測図	120
Fig. 137	第47号土壙墓 (SK-47) 実測図	120
Fig. 138	第48号土壙墓 (SK-48) 実測図	121
Fig. 139	第49号土壙墓 (SK-49) 実測図	121
Fig. 140	第54・55号土壙墓 (SK-54・55) 実測図	122
Fig. 141	第57号土壙墓 (SK-57) 実測図	123
Fig. 142	第53号土壙墓 (SK-53) 実測図	124
Fig. 143	第53号土壙墓出土遺物	125
Fig. 144	第2号井 (SD-02) 土層図	126
Fig. 145	第2号井出土遺物	126
Fig. 146	第37号井 (SD-37) 土層図	127
Fig. 147	第37号井出土遺物	128
Fig. 148	第50号井 (SD-50) 土層図	129
Fig. 149	第50号井 (上層) 出土遺物(1)	130
Fig. 150	第50号井 (中層) 出土遺物(2)	131
Fig. 151	表面採集遺物・その1	132
Fig. 152	第17次調査地点全体図	140
Fig. 153	古墳周溝土層図	141
Fig. 154	周溝出土埴輪(1)	142
Fig. 155	周溝出土埴輪(2)	143
Fig. 156	周溝出土埴輪(3)	144
Fig. 157	周溝出土埴輪(4)	145
Fig. 158	周溝出土埴輪(5)	146
Fig. 159	周溝出土埴輪(6)	147
Fig. 160	第2号井戸 (SE-02) 実測図	148
Fig. 161	第1号井 (SD-01) 上層図	149
Fig. 162	第1号井出土遺物	149
Fig. 163	刺根北古墳復元想定図	150
Fig. 164	第21次発掘記録図 (付図)	151
Fig. 165	第40号貯藏穴 (SK-40) 実測図	156
Fig. 166	第40号貯藏穴出土土器実測図	157
Fig. 167	第41号貯藏穴 (SK-41) 実測図	157
Fig. 168	第41号貯藏穴出土土器実測図	158
Fig. 169	第42号貯藏穴 (SK-42) 実測図	159
Fig. 170	第42号貯藏穴出土土器実測図	159
Fig. 171	第43号貯藏穴 (SK-43) 実測図	160
Fig. 172	第43号貯藏穴出土土器実測図	161
Fig. 173	第44号貯藏穴 (SK-44) 実測図	161
Fig. 174	第45号貯藏穴 (SK-45) 実測図	162
Fig. 175	第45号貯藏穴出土土器実測図	163
Fig. 176	第47号貯藏穴 (SK-47) 実測図	164
Fig. 177	第47号貯藏穴出土土器実測図(1)	165
Fig. 178	第47号貯藏穴出土土器実測図(2)	166
Fig. 179	第47号貯藏穴出土土器実測図(3)	168
Fig. 180	第50号貯藏穴出土土器実測図	169
Fig. 181	第51号貯藏穴出土土器実測図	169
Fig. 182	第51号貯藏穴 (SK-51) 実測図	169
Fig. 183	第52号貯藏穴 (SK-52) 実測図	170
Fig. 184	第52号貯藏穴出土土器実測図(1)	171
Fig. 185	第52号貯藏穴出土土器実測図(2)	172
Fig. 186	第53号貯藏穴出土七器実測図	172
Fig. 187	施道橋出土土器実測図	173
Fig. 188	第1～4号 sondage (SK-01～04) 実測図	178
Fig. 189	第1号 sondage 実測図	179
Fig. 190	第2号 sondage 実測図	180
Fig. 191	第3号 sondage 実測図	181
Fig. 192	第4号 sondage 実測図	181
Fig. 193	第5～8号 sondage (SK-05～08) 実測図	182
Fig. 194	第5号 sondage 実測図	183
Fig. 195	第6号 sondage 実測図	184
Fig. 196	第7号 sondage 実測図	185
Fig. 197	第8・9号 sondage 実測図	186
Fig. 198	第9～13号 sondage (SK-09～13) 実測図	187
Fig. 199	第10号 sondage 実測図	188
Fig. 200	第11号 sondage 実測図	188
Fig. 201	第12・13号 sondage 実測図	189
Fig. 202	第14～16号 sondage (SK-14～16) 実測図	190
Fig. 203	第14号 sondage 実測図	191
Fig. 204	第15号 sondage 実測図	192
Fig. 205	第16号 sondage 実測図	193
Fig. 206	第17～19・21号 sondage (SK-17～19・21) 実測図	194

Fig. 207	第17・18号墳棺実測図	196
Fig. 208	第19号墳棺実測図	196
Fig. 209	第20号墳棺墓 (SK-20) 実測図	197
Fig. 210	第21号墳棺実測図	197
Fig. 211	第20号墳棺実測図	198
Fig. 212	第22~25号墳棺墓 (SK-22~25) 実測図	199
Fig. 213	第22号墳棺実測図	200
Fig. 214	第23号墳棺実測図	201
Fig. 215	第26号墳棺墓 (SK-26) 実測図	201
Fig. 216	第24~26号墳棺実測図	202
Fig. 217	第27号墳棺墓 (SK-27) より墳棺実測図	203
Fig. 218	第28号墳棺墓 (SK-28) より墳棺実測図	204
Fig. 219	第29・32・34・38・53号土壤・土壤基 (SK-29・32・34・38・63) 実測図	205
Fig. 220	第48号祭祀土壤 (SK-48) 遺物出土状態 実測図	207
Fig. 221	第48号祭祀土壤 (SK-48) 土層断面図	208
Fig. 222	第48号祭祀土壤A群出土土器実測図(1)	209
Fig. 223	第48号祭祀土壤A群出土土器実測図(2)	210
Fig. 224	第48号祭祀土壤B群出土土器実測図(1)	211
Fig. 225	第48号祭祀土壤B群出土土器実測図(2)	213
Fig. 226	第48号祭祀土壤C群出土土器実測図(1)	214
Fig. 227	第48号祭祀土壤C群出土土器実測図(2)	215
Fig. 228	第48号祭祀土壤C群出土土器実測図(3)	216
Fig. 229	第48号祭祀土壤出土土器実測図(1)	217
Fig. 230	第48号祭祀土壤出土土器実測図(2)	218
Fig. 231	第48号祭祀土壤出土土器実測図(3)	219
Fig. 232	第48号祭祀土壤出土土器実測図(4)	220
Fig. 233	第48号祭祀土壤出土土器実測図(5)	221
Fig. 234	第48号祭祀土壤出土石器・土器品実測図	222
Fig. 235	第49号祭祀土壤 (SK-49) 土層断面図 (西北西から)	225
Fig. 236	第49号祭祀土壤出土土器実測図(1)	226
Fig. 237	第49号祭祀土壤出土土器実測図(2)	227
Fig. 238	第49号祭祀土壤出土土器実測図(3)	228
Fig. 239	第49号祭祀土壤出土土器実測図(4)	229
Fig. 240	第49号祭祀土壤出土遺物実測図(1)	230
Fig. 241	第49号祭祀土壤出土遺物実測図(2)	231
Fig. 242	出土青銅製鏡先実測図	232
Fig. 243	第60号壺穴式住居址 (SC-60) 実測図	233
Fig. 244	第60号壺穴式住居址出土土器実測図	234
Fig. 245	第62号壺穴式住居址 (SC-62) 実測図	234
Fig. 246	第62号壺穴式住居址出土土器実測図	235
Fig. 247	第64号壺穴式住居址 (SC-64) 実測図	235
Fig. 248	住居址内土壤遺物出土状態	236
Fig. 249	第64号壺穴式住居址出土土器実測図	236
Fig. 250	第67号壺穴式住居址 (SC-67) 実測図	237
Fig. 251	第67号壺穴式住居址出土遺物実測図	238
Fig. 252	第70号壺穴式住居址出土遺物実測図	239
Fig. 253	第71号壺穴式住居址出土遺物実測図(1)	240
Fig. 254	第71号壺穴式住居址出土土器実測図(2)	241
Fig. 255	第72号壺穴式住居址出土土器実測図	242
Fig. 256	第77号壺穴式住居址出土遺物実測図	242
Fig. 257	第55・56号井戸 (SE-55・56) 実測図	244
Fig. 258	第55号井戸出土遺物実測図(1)	245
Fig. 259	第55号井戸出土遺物実測図(2)	246
Fig. 260	第55号井戸出土遺物実測図(3)	247
Fig. 261	第56号井戸出土遺物実測図	249
Fig. 262	第61号井戸 (SE-61) 実測図	250
Fig. 263	第61号井戸出土遺物実測図(1)	251
Fig. 264	第61号井戸出土遺物実測図(2)	252
Fig. 265	第61号井戸出土遺物実測図(3)	254
Fig. 266	第61号井戸出土遺物実測図(4)	256
Fig. 267	第61号井戸出土遺物実測図(5)	257
Fig. 268	出土鐵器実測図	258
Fig. 269	第79号柱立柱建物 (SB-79) 実測図	258
Fig. 270	採集鉄器実測図	259
Fig. 271	各時期遺構分布図 (1/1000)	260
Fig. 272	アサヒビル工場内調査および周辺調査の 遺構分布図 (古墳時代後半期~古代)	
		(付録)
Fig. 273	福岡平野の首長基系譜	274
Fig. 274	第21次調査検出墳塚実測図	276
Fig. 275	第21次調査検出墳塚模式図 (1/8)	277

## 表 目 次

Tab. 1	第1文化層出土上層樹脂表	14
Tab. 2	第14次調査出土遺物觀察表	64
Tab. 3	第16次調査出土遺物觀察表	135
Tab. 4	第17次調査の埴輪・土器鉢表	152
Tab. 5	各野菜出土土器觀察表	173
Tab. 6	墳塚墓一覧表	177
Tab. 7	土壤・土壤基一覧表	206

## 図 版 目 次

卷頭		
1) 第21次調査検出 SK-48出土範形器台	6) SK-48C 出土土器	
2) SC-48A 出土土器	7) SK-49出土上層群	
3) SK-48出土土器	8) SK-49出土土器	
4) SK-48出土土器	9) 出土青銅製鏡先	
5) SK-48B 出土土器	10) 第21次調査: SC-64出土土器群	
PL. 1	1) 第10次調査全景 (南から)	

- PL. 2 2) 第2D号掘立柱建物検山状況（東から）  
   1) 第11次調査検出井戸（東から）  
   2) 井戸出土土器
- PL. 3 1) 第12次調査検出井戸  
   2) 井戸土層断面および土器出土状態  
   3) 井戸出土土器(1)
- PL. 4 1) 井戸出土土器(2)
- PL. 5 1) 第14次調査区全景（西から）  
   2) 調査区全景（西から）  
   3) 調査区全景（東から）  
   4) SE-03（西から）  
   5) SE-04（東から）
- PL. 6 1) SE-05  
   2) SE-06  
   3) SE-07（西から）  
   4) SE-07（観出土状態）  
   5) SE-19（中部土器群出土状態）（北から）  
   6) SE-19完掘状況（東から）
- PL. 7 1) SK-01（西から）  
   2) SK-01遺物出土状態（東から）  
   3) SK-01土層（西から）  
   4) SK-08（南から）  
   5) SK-08完掘状況（南から）
- PL. 8 1) SC-09（西から）  
   2) SC-09カマF（西から）  
   3) SC-20（西から）  
   4) SC-20カマF（北から）  
   5) SC-20～25（南から）
- PL. 9 1) SB-15・16（北から）  
   2) SB-15（東から）  
   3) SB-16（北から）  
   4) SB-16（北から）  
   5) 調査区北側包含層（東から）  
   6) 調査区北側包含層（南から）
- PL. 10 1) 第16次調査区全景（北から）  
   2) 調査区北半（北から）  
   3) 調査区9区（北から）  
   4) 調査区全景（南から）  
   5) 調査区南半（南から）  
   6) 作業風景
- PL. 11 7) SK-01（東から）  
   8) SK-04（北から）  
   9) SK-04（北西から）  
   10) SK-06（北西から）  
   11) SK-06（東から）
- PL. 12 12) SK-07（北東から）  
   13) SK-07（南から）  
   14) SK-08（東から）  
   15) SK-09（南から）  
   16) SK-10（東から）  
   17) SK-11（東から）
- PL. 13 18) SK-19（北から）  
   19) SK-20（北西から）  
   20) SK-20（北西から）  
   21) SK-21（南東から）  
   22) SK-22（北から）
- PL. 14 23) SK-24（北から）  
   24) SK-25（西から）  
   25) SK-25（西から）  
   26) SK-26（西から）  
   27) SK-27（西から）  
   28) SK-28（南から）  
   29) SK-28（西から）  
   30) SK-29（北から）
- PL. 15 31) (右) SK-30 (左) SK-31（東から）  
   32) SK-33遺物出土状態（南から）  
   33) SK-33（北から）  
   34) SK-34（北東から）  
   35) SK-35（東から）
- PL. 16 36) SK-36（東から）  
   37) SK-38（北西から）  
   38) SK-39（東から）  
   39) SK-40（東から）  
   40) SK-41（北から）  
   41) SK-42（西から）
- PL. 17 42) SK-43（南から）  
   43) SK-44（北東から）  
   44) SK-12（西から）  
   45) SK-12土層（北から）  
   46) SK-12完掘状況（北から）
- PL. 18 47) SK-13上層断面（南から）  
   48) SK-13完掘状況（東から）  
   49) SK-14土層断面（西から）  
   50) SK-14完掘状況（北から）  
   51) SK-15土層断面（北から）  
   52) SK-15完掘状況（東から）
- PL. 19 53) SK-16土層断面（西から）  
   54) SK-16完掘状況（北西から）  
   55) SK-17遺物出土状態（北東から）  
   56) SK-17完掘状況（西から）  
   57) SK-18完掘状況（北から）
- PL. 20 58) SK-32土層断面（南から）  
   59) SK-32完掘状況（東から）  
   60) (左) SK-47 (右) SK-48（西から）  
   61) SK-47完掘状況（西から）  
   62) SK-48完掘状況（西から）  
   63) SK-53（東から）
- PL. 21 64) SK-54・55（東から）  
   65) SK-56（北西から）  
   66) SD-37全景（北から）  
   67) SD-37遺物出土状態（南から）  
   68) SD-37土層断面（南から）  
   69) SD-37土層断面（北から）
- PL. 22 70) SD-02土層断面（東から）  
   71) SD-50（東から）  
   72) SD-50（西から）  
   73) SD-50土層断面（東から）
- PL. 23 1) 第17次調査古墳周溝土層断面（西から）  
   2) 古墳周溝土層断面（東から）  
   3) 古墳周溝内遺物出土状態（西から）  
   4) 古墳周溝完掘状況（西から）  
   5) 古墳周溝内遺物出土状態（西から）

- 6) 古墳周溝内埴輪第17群出土状態（北から）  
PL.24 1) 古墳周溝内遺物出土状態（西から）  
2) 振張区全景（東から）  
3) SD-01土壙断面（北から）  
4) 調査風景  
5) 後円部周溝確認状況（東から）  
6) 痕跡内周溝確認立会い調査風景
- PL.25 1) 第21次調査全景（西から）  
2) 弱光時代遺構分布状態（東から）  
PL.26 1) 第40号竪穴 sondage 状況  
2) 第41号竪穴遺物出土状態  
3) 第43号竪穴 sondage 状況  
4) 第45号竪穴 sondage 状況  
5) 第47号竪穴遺物出土状態  
6) 第52号竪穴遺物出土状態
- PL.27 1) 第1号要棺墓完掘状況（左：南西から  
右：南から）  
2) 第2号要棺墓完掘状況（左：南西から  
右：東から）  
3) 第3号要棺墓完掘状況（左：南から  
右：東から）  
PL.28 1) 第4号要棺墓完掘状況（南東から）  
2) 第5号要棺墓完掘状況（南東から）  
3) 第6号要棺墓完掘状況（左：東から  
右：南から）  
4) 第7号要棺墓完掘状況（左：北東から  
右：北西から）  
PL.29 1) 第8号要棺墓完掘状況（左：東から  
右：北東から）  
2) 第9号要棺墓完掘状況（北東から）  
3) 第10号要棺墓完掘状況（北から）  
4) 第11号要棺墓完掘状況（左：南から  
右：東から）  
PL.30 1) 第12号要棺墓完掘状況（左：北東から  
右：南から）  
2) 第13号要棺墓完掘状況（西から）  
3) 第14号要棺墓完掘状況（南東から）  
4) 第15号要棺墓完掘状況（左：南東から  
右：西から）  
PL.31 1) 第16号要棺墓完掘状況（左：南西から  
右：南東から）  
2) 第17号要棺墓完掘状況（左：南から  
右：東から）  
3) 第18号要棺墓完掘状況（北東から）  
4) 第19号要棺墓完掘状況（北から）  
PL.32 1) 第20号要棺墓完掘状況（北から）  
2) 第21号要棺墓完掘状況（東から）  
3) 第22号要棺墓完掘状況（北から）  
4) 第23号要棺墓完掘状況（北から）  
5) 第24号要棺墓完掘状況（北から）  
6) 第25号要棺墓完掘状況（南から）  
PL.33 1) 第26号要棺墓完掘状況（左：南東から  
右：北東から）  
2) 第27号要棺墓完掘状況（左：南東から  
右：南西から）  
3) 第28号要棺墓完掘状況（北東から）  
4) 要棺墓分布状況（東から）  
PL.34 1) 第48号祭祀土壤全景（東から）  
2) 第49号祭祀土壤断面（南から）  
PL.35 1) 第48号祭祀土壤 B 爪土器出土状態  
2) 第49号祭祀土壤遺物出土状態（西から）  
3) 第49号祭祀土壤遺物出土状態（南西から）  
4) 第49号祭祀土壤埴輪・壺出土状態  
5) 第49号祭祀土壤埴輪・高环出土状態  
6) 第49号祭祀土壤遺物出土状態
- PL.36 1) 第48号祭祀土壤出土土器  
2) 第48号祭祀土壤出土土器・土製品
- PL.37 1) 第49号祭祀土壤出土土器および土製品  
2) 第49号祭祀土壤出土石器  
3) 第71号壺穴式住居址出土青銅製鍬先  
4) 握奥板状铁斧
- PL.38 1) 第21次調査遺構分布状態（西から）  
2) 第60号壺穴式住居址完掘状況  
3) 第64号壺穴式住居址完掘状況  
4) 第64号壺穴式住居址内土壤遺物出土状態  
5) 第67号壺穴式住居址完掘状況  
6) 第70号壺穴式住居址遺物出土状態
- PL.39 1) 第55号井戸完掘状況  
2) 第55号井戸出土土器
- PL.40 1) 第56号井戸完掘状況  
2) 第56号井戸出土土器  
3) 第61号井戸土壤断面  
4) 第61号井戸完掘状況  
5) 出土鐵製鍬
- PL.41 1) 第61号井戸出土遺物

## 第1章 序 説

### 1. はじめに

博多区竹下三丁目1番1号のアサヒビール株式会社博多工場（以下、地権者とする）の整備拡充が計画された。地権者から福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に遺跡有無確認の依頼があった。この地は那珂遺跡群の北西部に位置すること、工場敷地内に東光寺剣塚古墳が所在していること、これまでの那珂遺跡群調査成果などから、埋文課は弥生時代から古代にかけての大遺跡が工場敷地内に所在しているとして、計画変更を重ね合わせて、地権者と協議を重ねた。その結果、試掘調査を実施し、協議することになった。

試掘調査および1989年に実施した東光寺剣塚古墳の重要確認調査から、東光寺剣塚古墳が三重周濠を巡らしており、南側の二重目の周堤帯に張り出し区画をもつことが確認された。東光寺剣塚古墳南側の地は、地権者によりゲストハウス建設が予定されていたが、埋文課との協議により現状保存することになった。1987年度の倉庫・貯蔵場建設予定地および工場増築予定地、1988年度の倉庫・工場・変電所建設予定地、1989年度の貯蔵場予定地は、それぞれ弥生時代から中世の遺構が試掘調査によって検出された。以上の試掘調査によって遺構が検出された地については、埋文課は重要な遺跡であり現状保存を望んだが、地権者との協議により、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

以上、調査決定を受け、地権者と埋文課は各年度ごとに協議を行ない、調査費・調査期間・出土遺物の扱いなど契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、各年度ごとに調査事務所設置、表土層のすき取り後、弥生・古墳・奈良・平安時代の各時期の様相把握を目的として下表のとおり実施した。

調査地地籍	博多区竹下三丁目1-1				分布地区番号	037-A-3	
調査名	第10次調査	第11次調査	第12次調査	第14次調査	第16次調査	第17次調査	第21次調査
遺跡調査番号	8727	8732	8733	8832	8849	8850	8923
遺跡略号	NAK-10	NAK-11	NAK-12	NAK-14	NAK-16	NAK-17	NAK-21
調査実施面積	862m <sup>2</sup>	5m <sup>2</sup>	20m <sup>2</sup>	1,180m <sup>2</sup>	240.5m <sup>2</sup>	176.7m <sup>2</sup>	2,167.5m <sup>2</sup>
調査期間	1987年8月17日 ～同年10月30日	1987年9月26日 ～同年10月1日	1987年10月1日 ～同年10月3日	1988年9月2日～ ～同年10月3日	1988年10月24日～ ～同年1月31日	1988年10月27日 ～同年11月5日 同年12月11日	1989年5月8日～ 同年9月16日

## 2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分な体制を組むことはできなかったが、アサヒビール株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行いたしました。なお、1988年度の東光寺剣塚古墳の重要確認調査実施に際して、アサヒビール株式会社の多大なる協力があり、1991年度には同古墳の整備をアサヒビール株式会社で実施されました。この場をお借りし、ご協力に謝意を表しますとともにお礼申し上げます。

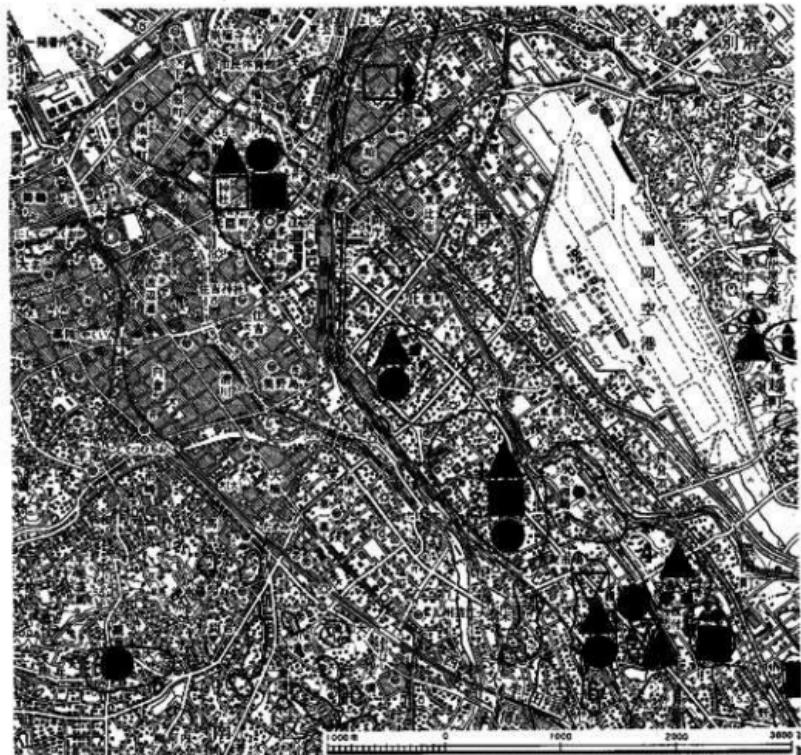
整理報告作業は調査担当者である山口・吉留の調査業務繁多により、1987年度の第10~12次調査から1989年度の第21次調査までをまとめて単年度で行なうことになりました。しかし、整理に必要な充分なる時間を得ることができず、各調査検出遺構・出土遺物の最低限のものを図化し、収録・掲載いたしました。未報告の遺構・遺物につきましては、今後、機会をみつけて紹介していくことにします。

調査主体	福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係 教育長 佐藤善郎（前） 井口雄哉 文化財部長 川崎賢治（前文化部長） 花田重一 埋蔵文化財課長 植田純孝（前） 折尾学 第二係長 飛高嘉雄（前） 塩屋勝利
調査担当	山口謙治（第10~12・14・16・17・21次） 吉留秀敏（第14・16・17次）
試掘調査担当	山崎純男（現文化財整備課主査） 横沢一男（前文化財主査） 横山邦輔（文化財主査） 小畠弘巳 米倉秀紀 常松幹雄 佐藤一郎 吉留秀敏
事務担当	松延好文（前） 中山昭則 吉田麻由美
調査指導員	小田富士雄（福岡大学教授） 龟井明徳（専修大学教授） 下條信行（愛媛大学教授） 田崎博之（愛媛大学助教授）
調査補助員	城戸康利（現太宰府市教育委員会） 上方高弘 池ノ上宏（現津屋崎町教育委員会） 牟田裕二（現佐賀市教育委員会）
整理補助員	平川敬治 山岸洋 兵石正子 握養久美子 井上加代子 入江のり子 藤村佳公恵
調査・整理協力者	常松幹雄 小林義彦 杉山富雄 松村道博 山崎龍夫 加藤良彦 沢皇臣 井手かすみ 山口朱美
調査協力者	大塚恵治 中村清治 川野圭司 石本恭二 清水健一 清川朋和 岡嶽安河内敏幸（以上、福岡大学） 松岡大介（明治大学） 萩野裕 松本直子（以上、九州大学） 石田晴美 尾崎君枝 甲斐田嘉子 牧井昭美 藤野洋子 早子輝美 松本幸子 山崎美枝子
整理協力者	池田礼子 井上マツミ 犬丸陽子 内尾トミ子 神谷玲子 木村厚子 小森佐和子 土斐崎つや子 横崎多佳子 能美須賀子 平野徳子 堀苑京美 松下節子 吉田祝子

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置と立地 (Fig. 1・2)

福岡平野のほぼ中央部には、北流し博多湾に注ぐ那珂・御笠川があり、両河川の中流域から下流域にかけて、春日丘陵から延びる中位あるいは低位の段丘が形成されている。中位・低位段丘は著しく開析され、南東から北西方向に断続的に延び徐々に低くなる高まりがある。この上には南から麦野・井相田・高畠・板付遺跡、諸岡・井尻・那珂遺跡が所在し、北端に比恵遺



- |          |          |        |       |       |
|----------|----------|--------|-------|-------|
| 1. 那珂遺跡群 | 2. 比恵遺跡群 | ▽先土器時代 | △縄文時代 | ▲弥生時代 |
| 3. 博多遺跡群 | 4. 板付遺跡  | ●古墳時代  | ■古代   | □中世   |
| 5. 高畠遺跡  | 6. 井尻遺跡  |        |       |       |
| 7. 諸岡遺跡  |          |        |       |       |

Fig.1 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡

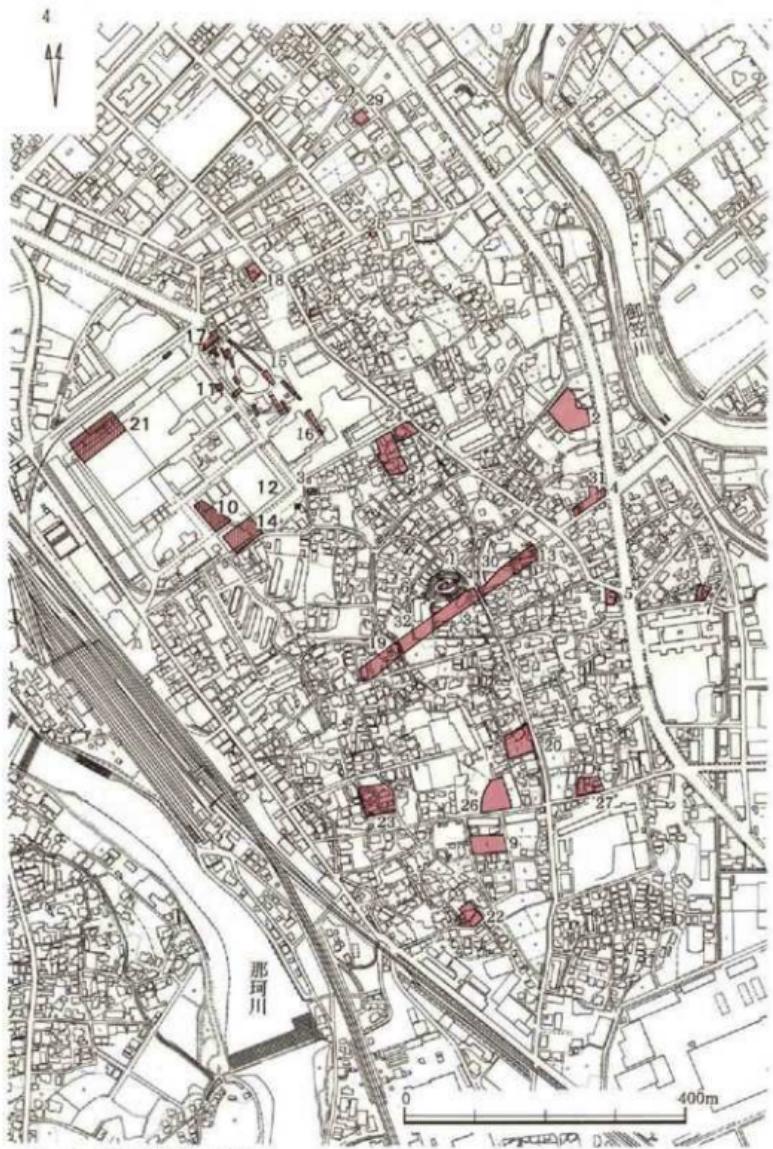


Fig. 2 那珂遺跡群調査地点

跡が位置しており、その北には砂丘が発達し、博多遺跡群が所在している。現在は、西鉄人牟田線・国道3号線・県道など主要道路が縦横に走り、宅地化が進み博多市街地と一体化しつつあり、標高13mから5m前後までのゆるやかな傾斜はもつものの、ほぼ平坦な地形となっている。

那珂遺跡は北端部の中位段丘：那珂・比恵丘陵（標高6～10m）に所在し、比恵遺跡の南にあたる。本書収録の調査地は、那珂遺跡北西部の標高8mに位置し、西側台地際にあたる。国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から21.5cm、東から12.2cmにあたる。

## 2. 那珂遺跡群の調査

那珂遺跡群は1992年1月までに34次の調査が実施され、各時代・各時期の様相がわかりつつある。那珂遺跡群は、これまでの調査成果から先土器時代から中世にかけての複合遺跡であるといえよう。ここでは、先土器時代・縄文時代をI期、弥生時代前期・中期前半をII期、弥生時代中期後半から後期前半をIII期、弥生時代後期後半から古墳時代前半をIV期、古墳時代後半から古代をV期、中世をVI期とし、V期までについてみていくことにする。

I・II期：第7次調査などで台形石器などの石器が出土していることから、先土器時代後期のナイフ形石器文化期に人の痕跡がみられるが、本遺跡で人の居住が確認できるのはII期の前期前半からである。第4・5・10・14・21・23・24次調査（以下、○次とする）でII期の土器などの遺物が出土し、第21次などで貯蔵穴、第4次などで甕棺墓・木棺墓が検出されている。II期の検出遺構・遺物出土は、那珂台地の東西の縁辺部に位置している。

III期：この時期になると、本遺跡群の各調査で井戸が、第8・13次などで竪穴式住居址が、第16・21次などで甕棺墓を主体とする墓地が検出され、第20・23次などでは環濠の一部も検出されている。出土遺物のなかに青銅製鋏先など青銅製品も各調査で出土し、第1・23次などで銅剣などの鋳型が出土していることから、青銅器生産も行われていたことがわかる。III期に本遺跡群が拠点化しているといえよう。

IV期：III期の延長上にあり、竪穴式住居址群が各調査で検出されるとともに、福岡平野最初の首長墓と考えられる那珂八幡古墳が、那珂台地の中央に築造されている。この時期の出土土器のなかには在地土器とともに、東九州・山陰・山陽・畿内系の土器があり、IV期には福岡平野の中心をなす地域となっていたことがわかる。

V期：IV期の延長上と考えられるが、第10・14・18・23次などの調査で、大規模の掘立柱建物群が出現する。隣接する比恵遺跡調査成果とかね合わせて推考すると、6世紀後半に比恵・那珂台地の最初の基盤整備が行なわれた可能性が高いといえると同時に、官衙的な様相をもっているといえよう。また、那珂台地北西部に首長墓東光寺剣塚古墳が築造されている。那珂郡衙も本遺跡群のなかに位置すると考えられるが、今まで確認されていない。

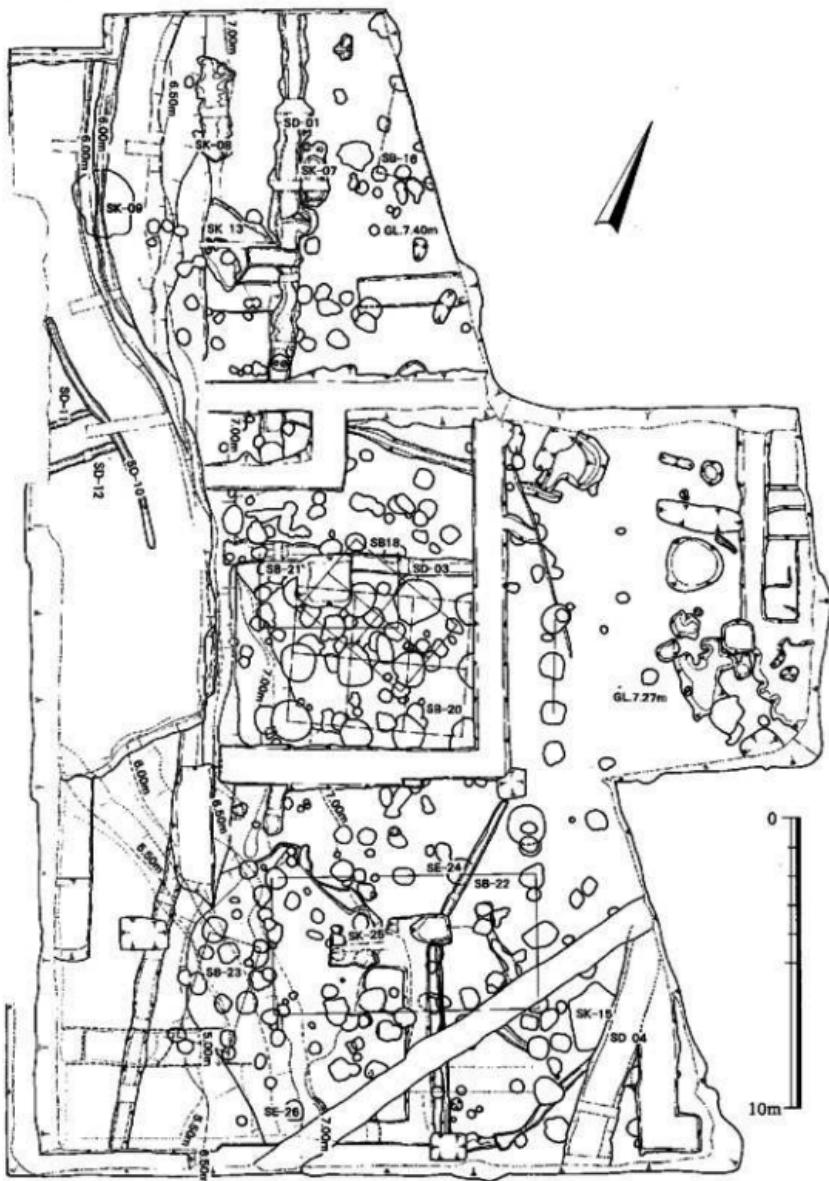


Fig. 3 第10次調査地点造構配図

## 第3章 第10次調査の記録

### 1. 調査概要 (Fig. 3, PL. 1)

本調査地は那珂遺跡群の北西部（那珂台地西縁辺）に位置し、東光寺剣塚古墳の南200m、第3次調査の西150mにあたる。本調査地は、アサヒビール株式会社による博多工場整備計画の第一期工事（1987年度）である倉庫建設予定地の一部にあたる。地権者の依頼を受け、埋文課は試掘調査を実施した。その結果、柱穴などの遺構が検出されるとともに、弥生時代から古代の土器などの遺物が多量に出土した。試掘調査結果および倉庫建設予定地が那珂遺跡群に位置することなどから、埋文課は遺構・包含層が遺存している台地際の調査が必要であると決定した。この決定を受け、弥生時代から古代の様相把握を目的として調査を実施した。

調査地はアサヒビール株式会社敷地の南に位置し、調査時は、北・西・南側に工場主幹道路、東側に工場建物があり、一辺40m前後の方形を呈している。地権者と埋文課の協議の過程で、南辺25m、北辺13m、南北42mの台形をなす範囲が調査対象地となっていた。調査対象地の西側は試掘調査結果から深くなると予想できたため、1m前後の引きを取り調査区を決定した。調査を実施した結果、遺構が東側へ延びていると考えられたので100m強の拡張区を設けた。

調査は、コンクリート舗装および整地層を重機を使用し除去することから始めた。その結果、調査区の北東部では現地表下80cm前後（標高7.2m）で鳥栖ロームを基盤とする遺構が検出できた。一方、南東部では地表下60cm前後で暗褐色土となり、古代の遺物が一面にみられるが遺構が検出できなかった。さらに10cm前後除去すると、東側は鳥栖ロームとなり、西側は暗褐色から黒褐色粘質土となり、柱穴などの遺構が検出できた。調査区北東部から南東部の鳥栖ローム層、および南部に分布する暗褐色から黒褐色粘質土の上面で検出できる遺構を第1面の遺構とした。調査区の北西部は地表下2m前後まで盛土で、ビール工場創建前の現代水田耕作土面となり、厚さ25cm前後の水田耕作土を除去すると八八花粘土層となる。

検出遺構として、弥生時代の井戸、古墳時代の掘立柱建物・土壤・溝・柱穴、古代・中世の土壤・溝がある。また、調査区南部では、弥生時代前期前半、同時代中期後半、古墳時代（6C末）・古代（8C前半）の遺物包含層を検出した。

検出遺構は遺構記号を使用し、掘立柱建物をSB、溝をSD、井戸をSE、土壤をSKとし、検出順に遺構記号の下に2桁の通し番号を付した（例：SD-01（溝）・SK-06（土壤）・SB-20（掘立柱建物）・SE-24（井戸））。なお、柱穴は建物として確認したものは、整理過程で遺構番号の後に2桁の通し番号を付した。調査時は、実測用の6m方眼を利用し、各方眼に通し番号を付し、その下に2桁の通し番号を付した。本書のなかでは遺構名・遺構記号を併記して使用した。出土遺物として、弥生時代各時期の土器・石器・金属器、古墳時代の土師器・須恵

器・金属器、古代の土師器・須恵器・瓦類、中世の陶磁器などがある。

本書は短期間の整理で製作しているため、本書のなかでは掘立柱建物と第1文化層出土土器を紹介して、第10次調査の報告とする。第2～4文化層や各遺構から多量の各時代・各時期の良好な遺物が出土しており、今後、機会をみつけて紹介していくことにする。

## 2. 遺構と出土遺物

本調査では、弥生時代の井戸2基、古墳時代の掘立柱建物7棟、土壙7基、溝3条、古代の溝2条、中世の土壙1基、溝4条の遺構を検出した。以下、遺構別にみていくことにする。

### 1) 掘立柱建物 (SB)

SB-16～18・20～23の7棟の掘立柱建物を検出した。

#### 第16号掘立柱建物 (SB-16) (Fig. 5)

調査区の北端部に位置し、SD-01の東にあたる。1×2間分の4個の柱穴を検出した。N-13°-W の主軸方位をもち、桁行3.4m、梁行1.7m、各柱間は1.7mである。柱穴は検出面で径50cm前後の掘り方をもち、25～40cmの遺存で、柱痕跡は14～25cmを測る。1×2間としたが、柱間が1.7mと一定しており2×2間の総柱の倉庫の可能性がある。

各柱穴からは少量の弥生式土器片が出土したが、時期を決定する遺物は出土しなかった。

#### 第17号掘立柱建物 (SB-17)

調査区中央部の拡張区との境付近に位置し、SB-20の東にあたる。一辺80cm前後の隅丸方形を呈し、1.7m（中心間）の間隔をもつ3個の柱穴を検出した。柱穴は35cm前後の遺存をもっていることから東側に延びると想定し、調査区を拡張したが検出できなかった。以上から、N-23°-W の方位をとる桁行3.4m、梁行2.2m前後の1×2間の建物で、西側は煉瓦造り建物基礎によって破壊されたと考えられる。柱穴からは少量の土師器と弥生式土器片が出土した。古墳時代のものか。

#### 第18号掘立柱建物 (SB-18) (Fig. 5)

調査区のほぼ中央部に位置し、SD-03・SB-20に切られ、煉瓦造り建物によって破壊されている。N-71°-W の方位をとり、桁行4.5m（柱間2.25m）、梁行2.8m（柱間1.4m）の2×2間の総柱の建物で、7個の柱穴を検出した。柱穴は径60cm前後を測り、20cm前後遺存し、柱痕跡は15cm前後を測る。柱穴からは少量の弥生式土器片が出土したが、時期は限定できない。古墳時代のものか。

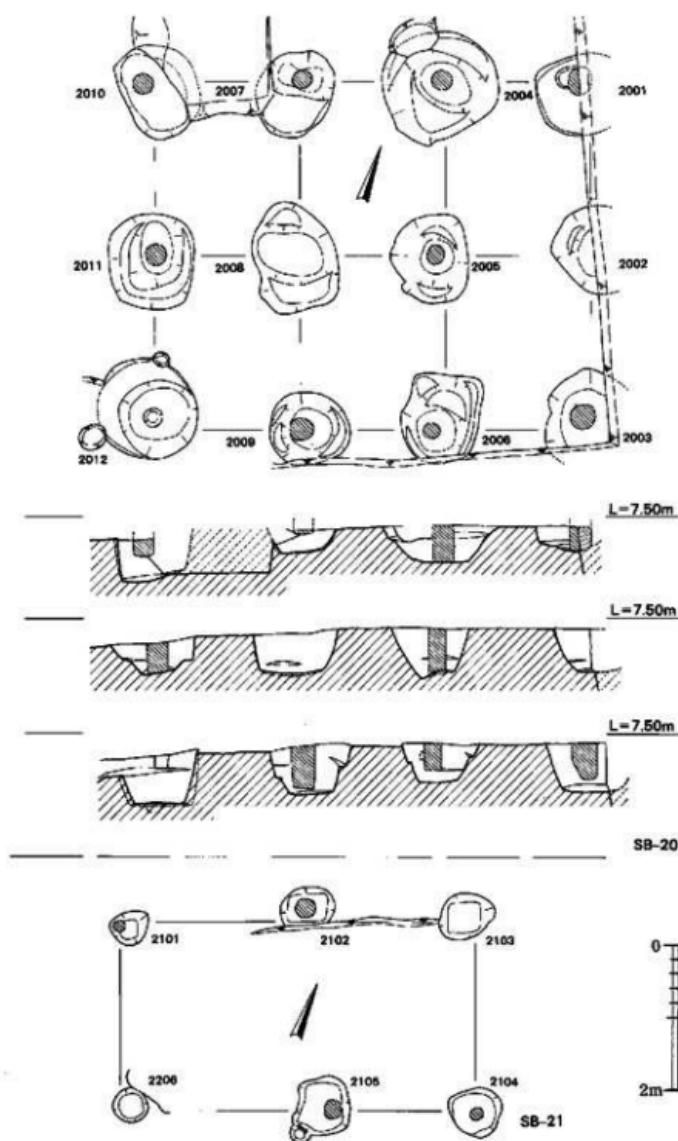


Fig.4 第20・21号掘立柱建物(SB-20・21)実測図

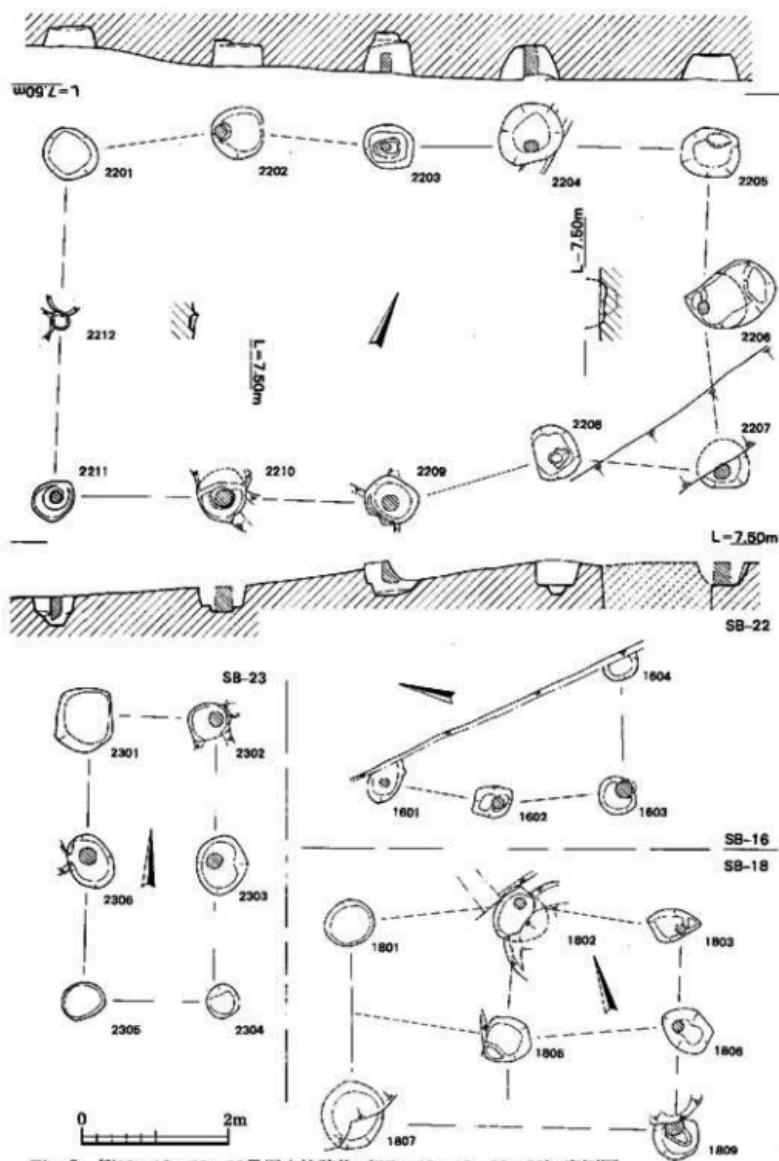


Fig. 5 第16・18・22・23号掘立柱建物 (SB-16・18・22・23) 実測図

### 第20号掘立柱建物（SB-20）(Fig. 4, PL. 1)

調査区のはば中央部に位置し、SB-18を切り煉瓦造り建物の基礎によって破壊されている。N-70.5°-E の方位をとる桁行 6m、梁行 4.5m の 2 × 3 間の総柱の建物である。柱穴掘り方は 1 ~ 1.5m を測る隅丸方形を呈し、30 ~ 70cm 遺存している。柱痕跡は 20 ~ 30cm を測り、暗茶褐色土・黒褐色土・黄褐色ロームを交互に版築状につき固め柱を固定している。なお、桁行柱中心間は 2m、梁行柱中心間は 2.25m である。

本建物の SP-01・04・07 の掘り方から須恵器坏身（小田富士雄氏縦年の III B）が、SP-02・05・08~10・12 の掘り方から須恵器壺の脣部片が出土した。SP-06・08~12 は、古代（8C 前半）の轟地層（包含層）と考えられる暗褐色土を除去した面で検出した。各柱穴の柱痕跡から少量の須恵器小片が出土したが、III B 以降のものは含んでいない。

以上から、本建物は 6 世紀末頃の 2 × 3 間の総柱の建物で倉庫といえよう。

### 第21号掘立柱建物（SB-21）(Fig. 4)

調査区のはば中央部に位置し、SD-03 に切られている。N-70°-E の方位をとる桁行 5m 前後、梁行 2.7m の 1 × 2 間の建物である。柱穴掘り方は 80cm 前後を測る隅丸方形を呈し、30cm 前後の遺存である。柱穴からは少量の弥生式土器片が出土したが、時期限定はできない。SD-03 との切り合い関係から古墳時代のものか。

### 第22号掘立柱建物（SB-22）(Fig. 5)

調査区の南側に位置し、SB-20 の南にあたり、SB-20 と 5m の間隔をもち桁行がほぼ平行している。SD-14 に切られ、擾乱によって破壊されている。なお、柱穴は暗褐色土を除去した暗褐色から黒褐色粘質土中で検出した。N-67°-E の方位をとる桁行 9m、梁行 4.6m の 2 × 4 間の建物で、桁行柱間は 2.25m、梁行柱間は 2.3m である。柱穴は 60cm 前後の隅丸方形を呈し、40cm 前後の遺存で柱痕跡は径 20cm 前後を測る。

SP-04・09 掘り方から須恵器坏身（III B）、SP-03 掘り方から須恵器壺脣部片が出土した。

以上から本建物は 2 × 4 間の側柱の建物で、SB-20 と同時期の 6 世紀末のものといえよう。

### 第23号掘立柱建物（SB-23）(Fig. 5)

調査区の南側の台地際に位置し、SB-22 の西に接している。本建物柱穴は暗褐色土を除去し、暗褐色から黒褐色粘質土中で検出した。N-4°-W の方位をとる桁行 4m、梁行 2m の 1 × 2 間の建物である。柱穴は 70cm 前後の隅丸方形を呈し、20cm 前後遺存し、柱痕跡は径 18cm 前後を測る。本建物の SP-06 掘り方から須恵器壺片が出土した。

本建物は柱間が 2m であり、2 × 2 間の総柱建物の可能性がある。

## 2) その他の遺構と出土遺物

本調査区では、弥生時代後期の井戸 2 基 (SE-24・26)、古墳時代の土壙 7 基 (SK-06~08・13・15・25・27)・溝 3 条 (SD-01・03・19)、古代の溝 2 条 (SD-04・14)、中世の土壙 1 基 (SK-09)・溝 4 条 (SD-02・10~12) を検出した。

SE-24は調査区の中央部からやや南に位置し、SD-14に切られている。径 85cm の円形を呈し、鳥栖ロームを掘り貫き八女粘土層まで達し 1.1m 遺存している。底面から複合口縁壺と鉢形土器各 1 点出土し、本井戸は弥生時代後期後半のものといえよう。SE-26は暗褐色粘質土層から鳥栖ローム層まで掘り込まれている。検出面径 50cm、底面径 65cm を測り、1.1m の遺存で断面形は袋状をなしている。弥生時代後期後半の變形土器・壺形土器が出土していることから、同時期のものと思われる。

SD-01は幅 1m で断面形は逆台形を呈し、N-22°-W の方位をとり、幅 60cm で N-70°-E の方位をとる SD-03 とほぼ直交し、出土須恵器から両溝とも 6 世紀末のものといえる。SD-04 は幅 1.2m で、断面形は逆台形を呈し 50cm 前後遺存している。N-7°-W というほぼ真北の方位をもち、出土須恵器から 8 世紀のものといえる。

## 3. 包含層と出土遺物 (Fig. 6)

本調査区南部の台地際から谷部にかけてのローム層上に、4 枚の文化層を検出した。第 1 層からは、8 世紀前半の須恵器などが出土した。第 2 層からは、6 世紀末の須恵器などの遺物が出土した。第 1・2 層は整地層の可能性が高い。第 3 層からは、弥生時代中期後半までの多量の遺物が出土した。第 10 層からは、弥生時代前期前半の土器・剝片・削片が出土した。他の堆積土層は無遺物である。第 10・3・2・1 層をそれぞれ第 1~4 文化層とした。

### 1) 第 1 文化層出土土器 (Fig. 7)

24 区の谷状の落ち込みの下層に堆積した黒色土層から、夜臼 II 式土器と板付 I 式土器が出土

L=7.50m

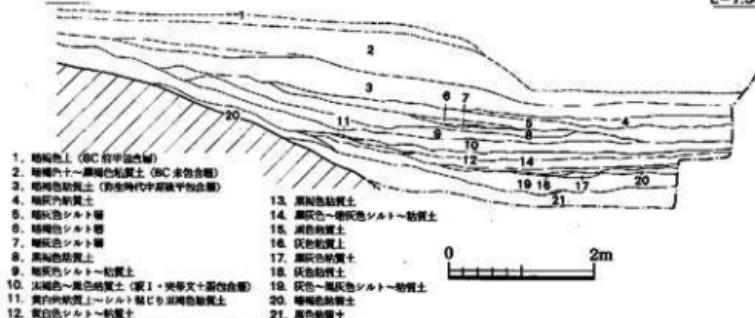


Fig. 6 調査区谷部土層断面図(北から)

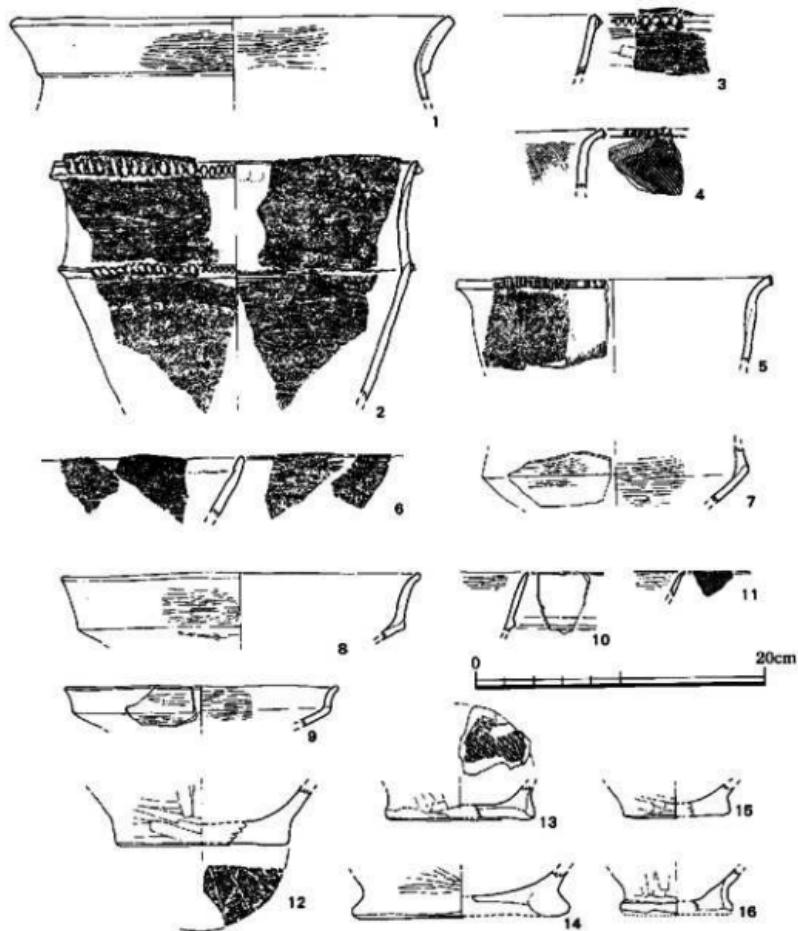


Fig. 7 第1文化層出土土器実測図

した。出土量は少なく、小片が多い。以下に報告するものが、図化したすべてである。

器形には、壺・壺・鉢がある。

1は、中形壺で、口縁部には粘土を貼付し肥厚させ、明瞭な段をつける。2・3は夜白Ⅱ式の壺で、2は口縁部、3は口縁部と胴部の屈折部分に突帯を貼付し、下から上へ棒状工具を擦りあげるようにしてキザミを施す。3と比較して、2のキザミは浅い。ともに粘土帯を積み上

Tab. 1 第1文化層出土土器観察表

Fig.	遺物 No.	肩位遺構	遺 物 の 特 徴		遺物 総数	
			器形	部位		
1			口縁部		内外面ともに横位の研磨	6
2			口縁部		外表面は貝殻条痕の後に板状工具でナデ、内面はナデ	13
3			口縁部		外表面は条痕の後にナデ、内面はナデ仕上げ、キザミは棒状工具	15
4			口縁部		口唇全周に「枚貝」でキザミ、外表面はハケメ、内面はハケメの後ナデ	2
5			口縁部		口唇全面のキザミはハケメ原体を押し引き、外表面はハケメの後ナデ	1
6			深鉢		外表面はケズリ、内面はナデ、口縁部は薄く折り返し仕上げる	12
7			口縁部		精製品。外表面は研磨、内面はケズリの後に研磨	3
8			浅鉢		外表面は時計回りにケズリの後に研磨、内面は荒れが進み細不明	16
9			口縁部		精製品、内外面ともに研磨	4
10			鉢		器体の傾きは不確実、外表面は丁寧なナデ、内面はケズリの後に研磨	5
11			鉢		輪形の精製品、内外面ともやや粗広の傾位の研磨	14
12			深鉢	底面	外表面はヘラ状工具でナデ、内面はナデ、外底面に木の葉の圧痕	9
13			深鉢	底面	外表面はヘラ状工具でナデ、内面は貝殻条痕	7
14			甌	底部	外表面はヘラ状工具でナデ、内面は比較的丁寧なナデ	10
15			深鉢	底部	外表面はヘラナデ、内面はナデ、外底の粘土円盤が接合面で削離	11
16			深鉢	底部	外底の粘土円盤が削離、外表面はヘラ状工具でナデ、内面は貝殻条痕	8

げてつくられている。4・5は、板付I式の甌で、口縁の屈曲度は、それほど強くない。4は口唇部前方から貝殻を押捺して、5はハケメ原体を押引きしてキザミを施す。

6は、夜臼II式に伴う粗製の深鉢である。2片あるが接合しない。ともに小片のために、器体の傾きは不確実である。

7～9は、浅鉢である。7は口縁部を欠失するが、胴部屈折部径と口径がほぼ同じものと考えられる。8・9は口縁が外方へ大きく傾く。10は小片のため全体の器形を知りえず、また、傾きも不確実であるが、鉢と考えた。つくりの丁寧な精製品である。11は輪形の小形鉢である。いずれも夜臼II式の範疇で考えてよい。

12～16は甌あるいは鉢の底部である。6は外底面に木の葉の圧痕が残る。如意形口縁をもつ鉢と考える。13・15・16は夜臼II式の甌の底部である。13の内底部には貝殻条痕が残る。いずれも小片ではあるが、底部の成形過程を観察できる良好な資料である。

## 2) 第2文化層出土遺物 (Fig. 8, 卷頭図版)

K17は青銅製鋸先で、基部・刃部など欠失し、約1/2遺存している。残存長5.3cm、袋部内法長(5cm)。弥生時代中期後半のものといえよう。

## 4. まとめ

本調査区では遺構と4枚の文化層を検出し、多量の遺物を得、多大なる成果を得た。ここでは建物群を中心に簡単にまとめる。SB-20・22は6世紀末の同時期の建物と考えられる。SD-03はSB-20の桁行に沿っており、SD-01・19は前者に直交している。これらの溝は建物と同時期のもので、建物群を区画するものといえる。遺構配置から豪族の居館と考えられる。

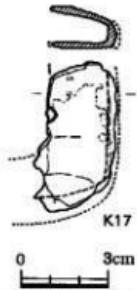


Fig. 8 出土青銅製鋸先実測図

## 第4章 第11・12次調査の記録

### 1. 調査概要 (Fig. 9 + 10)

第11次調査地は、前述したように東光寺剣塚古墳前方部の西にあたり、貯蔵タンク建設設計画があがったため、幅1.2mの試掘調査を実施した。その結果、井戸1基を検出したが、鳥居ローム層の中位まで削平を受けており他に遺構は検出できなかった。そのため井戸1基の調査を実施することとなった。

調査地は工場内主要道路として使用されているため、調査区は試掘調査幅で4.2×1.2mに設定し、試掘調査後の埋め戻し土を除去することから始めた。

第12次調査地は第11次調査の南南東約100mにあたり、工場建設拡張が計画されたため試掘調査を実施した結果、削平を受けたが隅丸方形の井戸と考えられる遺構が検出できた。この試掘調査結果を受けて、1基の遺構の調査を実施することになった。

遺構が井戸と考えられること、第11次調査で井戸の完掘ができなかったことを踏まえ、遺構を中心として5×4mの調査区を設定した。調査は、コンクリート舗装されているためコンクリートを切り、厚さ30cmのコンクリート、20cmの整地層を除去することから始めた。

両調査地はそれぞれ井戸1基ずつの調査で、遺物は、前者では弥生時代の土器・木器が、後者では土師器が出土した。

第11次調査出土遺物は、木器を873200001～873200020まで、土器は873200051から通し番号を付し、遺物登録番号とした。

第12次調査出土遺物は873300001から通し番号を付し、遺物登録番号とした。本書では、第11次調査については1から通し番号を付し、第12次調査についてはあらたに1から通し番号を付した。

### 2. 第11次調査検出井戸と出土遺物 (Fig.11～15, PL. 2)

本井戸は標高7.5m前後で検出した。検出面では径80cm前後で黒褐色から黒色粘質土を埋土とし、検出面から3.5m前後の深さまで調査を実施したが、崩落が激しいため完掘は断念した。

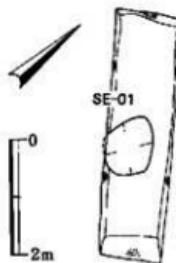


Fig. 9 第11次調査区

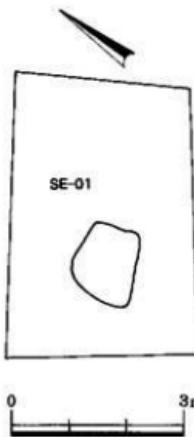


Fig. 10 第12次調査区

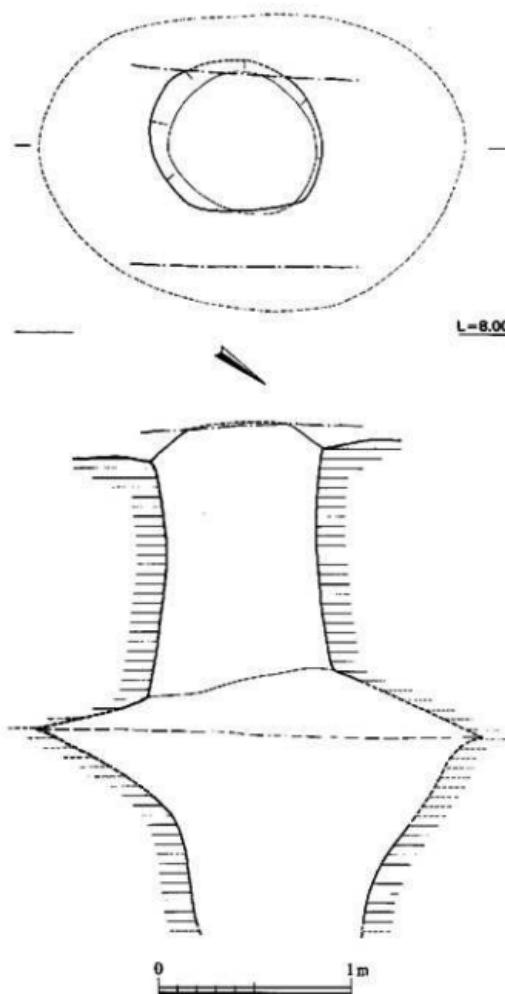


Fig.11 第11次調査検出第1号井戸 (SE-01) 実測図

• 7・11はすべて頭部に一对の焼成前の穿孔があり、3は頭部と胴部の境に焼成後の穿孔がある。外底にはモミ圧痕がみられる。口径15.3cm、器高18.3cm。8は平底。12も平底であるが、やや丸みをもっている。8は口径11cm、器高27.6cmである。9は頭部に2条の三角凸帯を巡ら

4.5m前後の遺存と考えられる。鳥栖ロームと八女粘土層の境界は標高5.9m前後で、ローム境界の湧水のため井戸径は広がっている。遺物は上からむらなく出土したが、標高5.5m前後から下で木製品が、同レベルと調査を断念した3.5m前後の面で完形に近い土器が出土したが、

L=8.00m 一部の土器は上げることができなかった。

#### 1) 出土土器 (1~13)

山土土器として、臺形土器・壺形土器・高坏・器台などコンテナ1箱分がある。

臺形土器 (1~4) : いずれもくの字状に縁をなし、内面の口縁の屈曲は明瞭で、小形・中形・大形のものがある。4は外面の口縁部直下に三角貼付け凸帯を巡らし、口径43.9cmともっとも大きい。3はもっとも小さく、口径18cm前後、器高14.5cm前後。2は口径27.6cm、器高23.6cm。

壺形土器 (6~12) : 比較的小型で、丸い頭部から直口する口縁をもつ短頸の壺 (6・7・11)、袋状をなす口縁をもつも

の (8・12)、その他がある。3

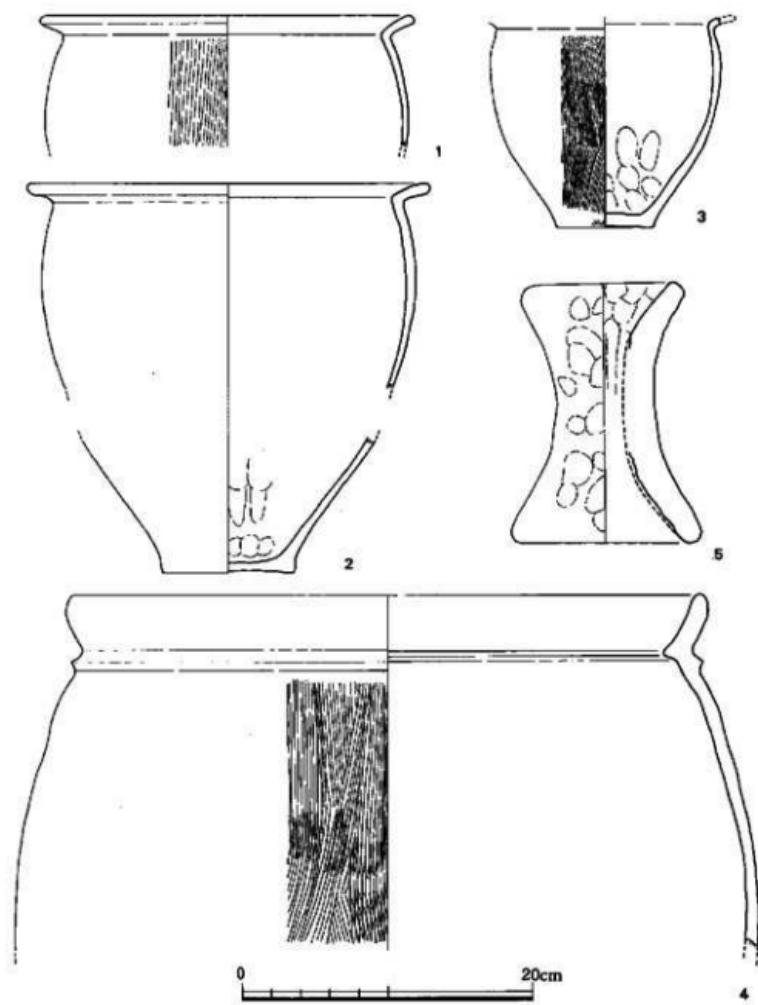


Fig.12 第1号井戸出土土器実測図(1)

している。凸帯が胸部・口縁部との境をなしている。径20.5cm。

その他(5・13)：5は器台で、口径11.3cm、器高17.75cm。13は高环の胸部で、研磨後丹が塗布されている。

18

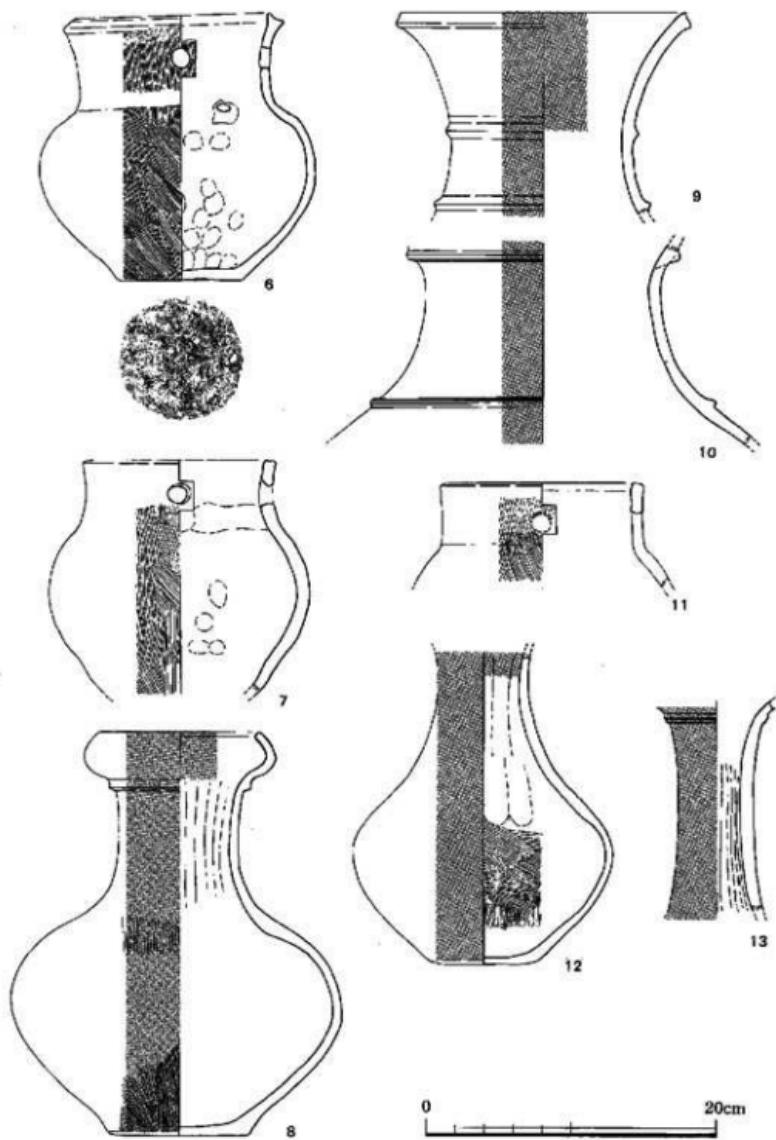


Fig.13 第1号井戸出土土器実測図(2)

## 2) 出土木器 (14~26)

本井戸では20点弱の木器と20点前後の自然木が出土した。22のみが完形品で、他は欠損品。14はショイコと考えられ、枝分かれ部を利用し、剖面には加工を加え平坦にし、横断面は蕪鉢状をなしている。15は炭化しているが、手斧の台部と考えられる。17も手斧柄で、カシの枝分かれ部を利用して丁寧な加工を加えているが、斧組合せ部が欠損している。16はカシの板目取り材を用材とした柄端部で、端部には面取り加工痕がみられる。19・20も柄の一部か。19は芯持ち材。20はカシの割材を用いている。18はカシの板目取り材を用いた板材で、21は芯持ち材を用いた杭である。22は土端撓状木器で、撓端部は使用によると考えられ凸レンズ状をなしている。器長137.7cm、撓部長27cm、撓部径16.35cm、柄部基部は一辺11.5cmの方形の断面形に整形し、柄端部に向かって細くなっている。剖材を用いている。23・24・26は建築材と考えられ、

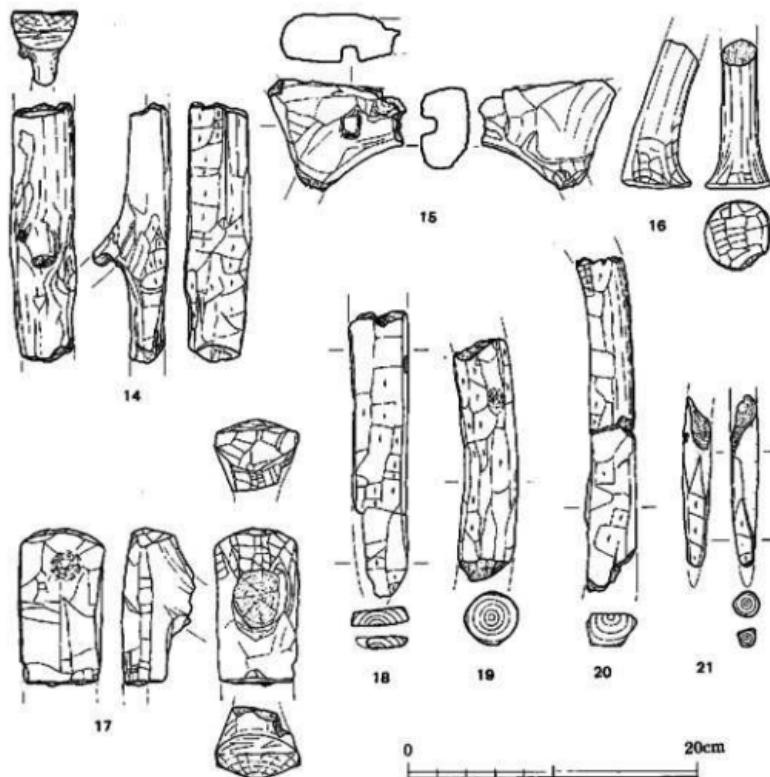


Fig.14 第1号井戸出土木器実測図(1)

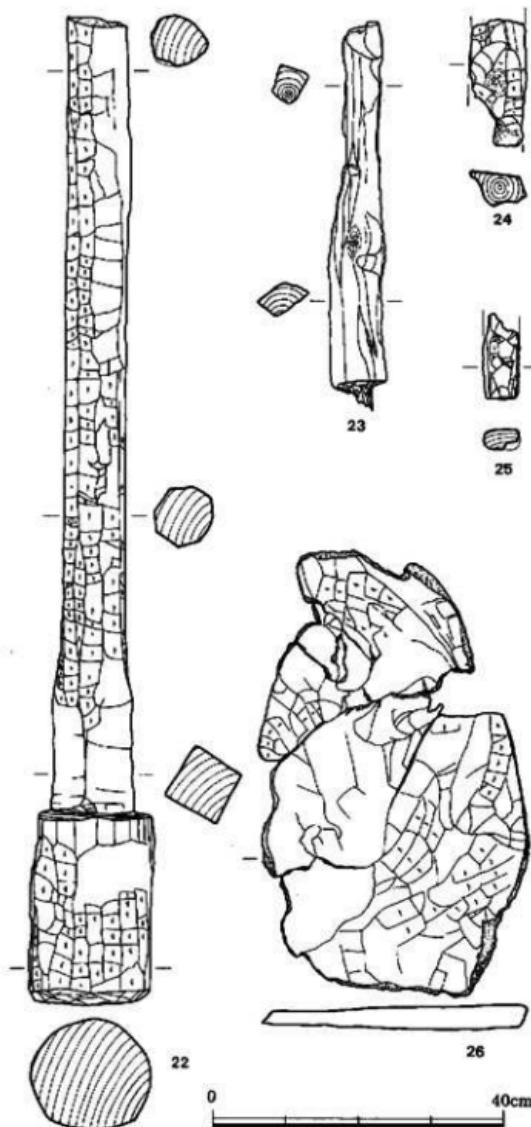


Fig.15 第1号井戸出土木器実測図(2)

23・24は柱材、26は板材である。25は断面長方形に加工している。

以上の出土遺物から本井戸は弥生時代中期末頃のものといえる。調査中湧水が激しかったことから、八女粘土層を掘り貫き、含水層である硬砂層まで達していたと考えられ、硬砂層の湧水利用の井戸であろう。

### 3. 第12次調査検出 井戸と出土遺物 (Fig.16~18, PL.3)

本井戸は検出面では一辺1.1cmの隅丸方形を呈し、鳥栖ローム層を掘り貫き、八女粘土層に達し1.6mの遺存である。雨水利用の井戸と考えられる。遺物は上から下までむらなく出土したが、1・2層が多く、床面で壺(9)と直口壺(15)が出土した。

1) 出土土器 (1~27)  
出土遺物として、土師器の壺・壺・高壺・器台・支脚、弥生式土器などの土器と蔽石など少量の石製品がある。

変形土器 (1~12) : 土師器と弥生式土器に大別できる。

土師器は1~3・5~7・12で、1・2・6・7は球状の調

部から屈曲して外反し口縁となり、器壁は薄く仕上げており、器面は黒褐色から淡灰褐色を呈している。1・2は口縁部は横ナデ調整、胴部外面は叩き、内面はヘラケズリが施されており、口縁端部は突起状をなしている。6・7も1・2に近いが、胴部外面にハケ目痕が残る。7は口縁端部が外反し突起がみられない。3は1・2などの器形に近いが、1・2よりやや器壁が厚く、胎土が異なり、器表面は明橙色を呈し、胴部外面には縱方向のハケ目調整が施されている。5は胴が張らず器壁は厚く、明橙色を呈している。口径は、5がもっとも小さく12.2cm、1が14cm、2・3・7が15cm弱前後、6は16.5cmである。12は大形の壺で、幅広のコの字形の凸帯を巡らし、凸帯上には叩き痕がみられる。

弥生式土器はいずれも明橙色を呈している。4は直口気味の口縁をもち砲弾形をなし、口径12.6cm、器高14.3cmである。8・9はくの字状をなす口縁をもち、胴部上位に最大径をもっている。11は壺。

**壺形土器（13～17）**：13・14は小形丸底壺。13は口径9cm、器高7.1cm。15は球状の胴部からやや開き気味に長く延びて口縁となり、器表面はハケ目調整後丁寧な研磨が加えられている。口径10cm、器高19.8cm。16は底部が凸レンズ状をなし、17は球形の胴部をもっている。

**高坏（18～22）**：18・19は坏底から開く土師器高坏の坏部で、器面は研磨されており、25.6cm、21cmの口径をもっている。20・22は土器器高坏の脚部で、軸部から屈曲して開き底部となる。屈曲部下に焼成前の4個の穿孔がみられる。21は弥生式土器高坏の脚部。

**その他の土器（23～27）**：23・24は支脚で、23は

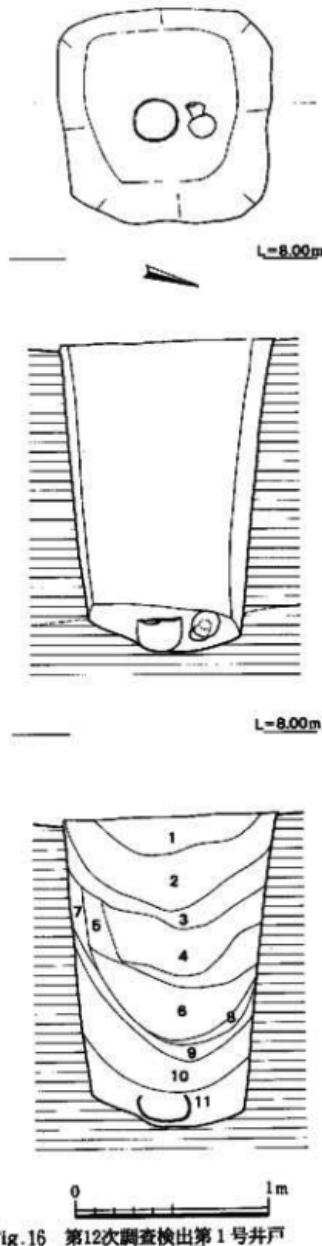


Fig. 16 第12次調査検出第1号井戸  
(SE-01) 実測図

22

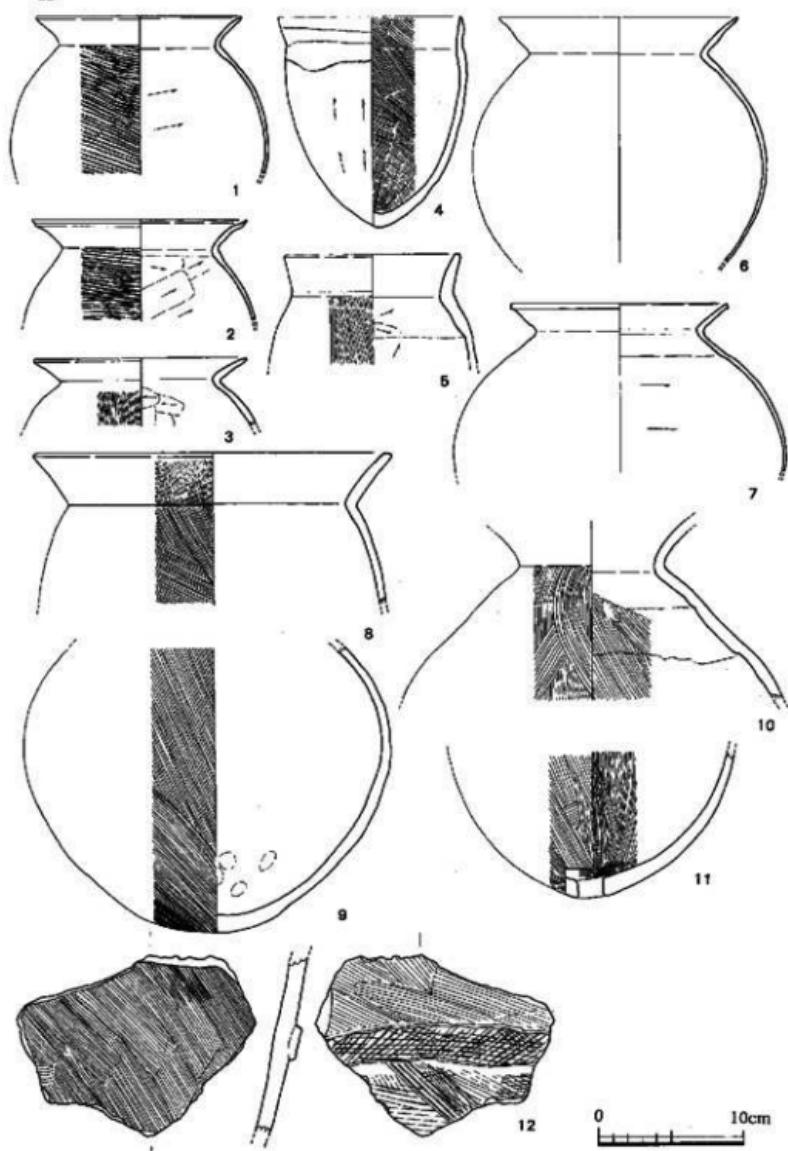


Fig.17 第1号井戸出土土器尖測図(1)

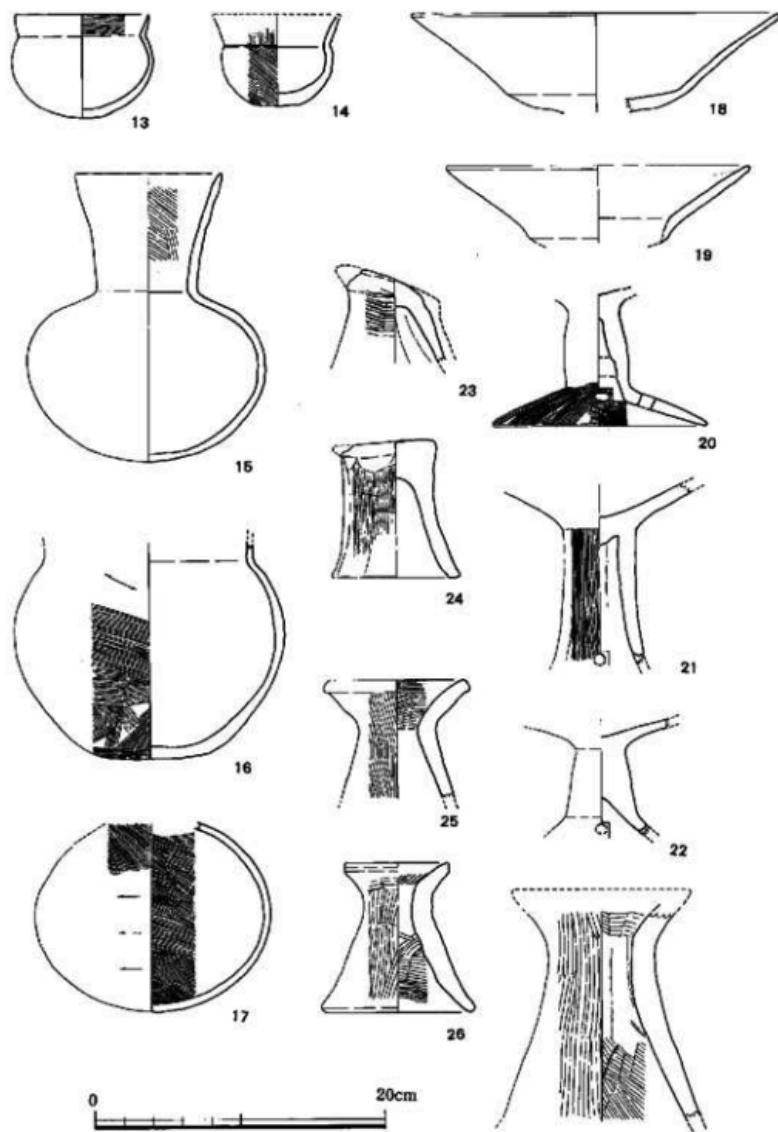


Fig.18 第1号井戸出土土器実測図(2)

叩き後ナデ調整を加え、24は叩き後ヘラケズリを行ない、ハケ目調整を施している。24は器高9.5cm。25～27は器台で、26は口径7.3cm、器高10.3cm。

以上の出土土器から、本井戸は古墳時代初頭の雨水を利用した隅丸方形の井戸であるといえよう。なお、本井戸出土の1・2・6・7は在地系の土器と胎土も異なることから移入土器と考えられる。

#### 4. まとめ

第11次調査検出の井戸は、弥生時代中期末から後期初頭のものと考えられる。本調査地周辺では、同時期の墳墓からなる墓地はあるものの削平を受けているため集落の実態がわからぬが、第14次調査検出の井戸とともに、この地域には同時期の集落があったことを示しているといえよう。

第12次調査検出の井戸は、古式土築器の古段階の時期のものである。本調査地周辺では前方後円墳である那珂八幡古墳があり、第21次調査をはじめ、各調査区で同時期の窓穴住居址群があり、第21次調査では本井戸と同様の移入土器と考えられるものも出土している。那珂遺跡群の広範囲に同時期の集落が広がっており、移入土器の出土は、同時期の那珂集落の人々の動静を知るうえで参考となろう。

## 第5章 第14次調査の記録

### 1. 調査の経過

1987年7月6日にアサヒビール博多工場から工場増設に伴う埋蔵文化財の事前審査願いが提出された。対象地点は那珂丘陵の西端にあたり、第10次調査地点の南20mに位置している。第10次調査地点と同様の状況であり、洪積台地が沖積地下に潜り込んでいく崖線を含んでいると推定された。このために同年7月8~14日に試掘調査を実施した。対象範囲は東西に長い長方形であり、南北24m、東西50mを測る。試掘調査地点は工場内施設の間を選び、対象範囲の北側に略東西に設定した。その結果、対象範囲のほとんどは、那珂丘陵と呼ばれる洪積台地上であり、住居跡、柱穴などの遺構が多数認められた。そして、西側端はしだいに下り、黒褐色の包含層が形成されていた。また、対象範囲の西端は急激な斜面となっている。こうした点から対象地点はほぼ全域に多数の遺構が分布していることが明らかとなった。

試掘調査の結果を踏まえて保存策についての協議を行なった結果、発掘調査を実施して記録に残すということになった。発掘調査は1988年9月2日から開始したが、並行して進めた第16・17次調査地点との調整のために、予定より遅れて1989年1月31日に全作業を終了した。

### 2. 調査地点の位置と環境 (Fig. 2, PL. 5-1~3)

対象範囲は那珂川の右岸に位置し、南北に延びる那珂丘陵の西側端部にあたる。那珂川によって侵食された段丘崖は比高差が2~4m程度である。対象地の周辺は現在市街化し、そうした旧地形をみると困難になってきている。段丘崖は造成などにより埋没し、宅地間に段差として残されている。この周辺では調査数は少ないが、隣接する第10次調査地点では古墳時代の大型建物が検出され、南側500mの第23次調査地点では古墳時代の集落と大型建物が検出されている。なお、調査範囲は、まだ一帯が畠と水田であった段階1920年代であるに大日本麦酒株式会社の工場用地として取得され、造成工事を経て、現在みられるようなほぼ平坦な地形面となったものである。工場用地の中では南端にあたり、かつて工場職員宿舎、門などがあり、第2次世界大戦以前はガラス瓶などを製造していた木造の工場建物があったという。今回の調査以前は建物などの施設はなく、アスファルト敷の大型運送車の駐車場であった。

### 3. 調査の概要 (Fig. 19)

調査範囲はおおよそ南北に24m、東西に50mの長方形である。調査にあたっては第10次調査と共に6m単位の地区割りを設け、調査区北東隅を基点に長軸方向に1、2、3…、短軸方向にA、B、C…とし、たとえばA1区、B3区と呼称することとした。なお、遺構について

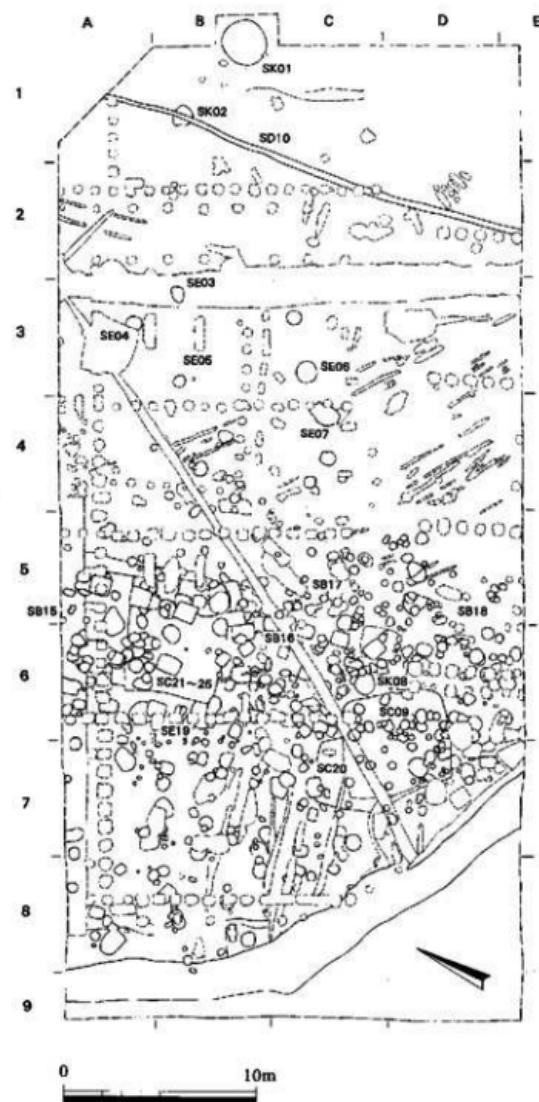


Fig.19 第14次調査地点全体図

は井戸を SE、土壤を SK、竪穴式住居跡を SC、掘立柱建物を SB とし調査区内での通し番号を付した。柱穴については調査範囲が広く、また、数も多いことから各地区ごとに番号を設けた。たとえば A1 区の12号柱穴を A1-12、B3 区の54号柱穴を B3-54とした。

本調査地点では井戸を 6 基、土壤を 2 基、竪穴式住居跡を 7 棟、掘立柱建物 4 棟を検出した。いずれの造構も造成工事などのために相当の削平を受けており、遺存状態は悪い。また、切り合いや擾乱が多く、検出と調査にかなりの時間を費やした。

#### 4. 調査地点の土層堆積 (Fig.20)

本調査地点の基本的土層について調査区北壁の観察状況を示す。調査区の東端は造成土の直下が地山である鳥栖ローム層となっており、本来の堆積は削平され遺存しない。西側は那珂丘陵の端部から段丘崖となり、厚い堆積が認められた。その土層は 6 層群 45 層に区分された。上部からみると、1 層群は近年の造成土であり、表面の舗装部分を含めると東端で 40cm、西端で 80cm の堆積がある。2 層群は茶褐色土であり、古墳時代から古代の包含層となっている。A8 区付近から堆積が始まり、西端では約 80cm の層厚になる。3 層群は暗褐色粘質土であり、弥生時代中期から後期の包含層である。A6 区付近から堆積が始まり、西側では 100cm 前後の堆積となる。4 層群は黒褐色粘質土であり、弥生時代前期の包含層である。西側の斜面に堆積しており、最大 40cm の層厚がある。5 層群は灰～黒色粘土層であり、水成作用を受けている。西側で最大 120cm の堆積がある。無遺物層である。6 層群は灰色砂層であり、水成堆積物である。最下部で 30cm 以上の堆積を確認した。さらに下位に続くとみられる。無遺物層である。

以上の観察を踏まえて、本調査地点の東西方向の土層堆積および地形を復元した。これからみると、台地上は約 40m で 2 m 程度になっている。調査区の東側では約 1.5m の削平が予測され、深い造構以外はすべて失われたと考えられる。また、時代が下ることに包含層が西へ拡がっており、崖線が前進している。本調査地点の古代の掘立柱建物は斜面に形成されながらも、柱の深さが共通

しており、第10次調査地点でもみられたように、斜面を削り出すようになんらかの

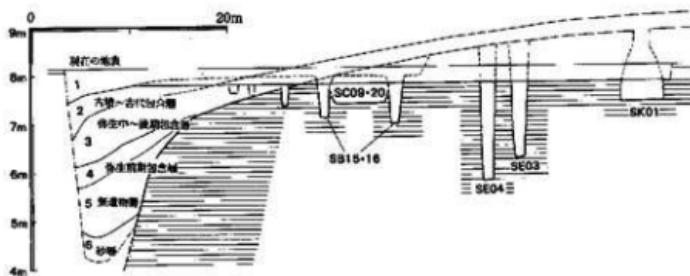


Fig. 20 第14次調査地点模式土層断面図

造成により階段状の平坦面を形成している可能性が高いと考えられた。こうした作業により、周辺の最初の人為的改变が始まったのであろう。

## 5. 調査の記録

### (1) 井戸

SE-03 (Fig.21, PL. 5-4)

B3区において検出した。西側に接して工場内の排水管が埋設され、遺構を大きく壊している。平面形は不整円形を呈し、径60~80cmである。深さは検出面から約140cmであり、八女粘土層には達していない。壁面はほぼ垂直に立ち上り、井筒等の痕跡はない。床面はほぼ平坦であり、床面に密着して土器類が多く出土した。

出土遺物 (Fig.22)

本遺構から出土した遺物は整理箱1箱程度である。壺・壺・

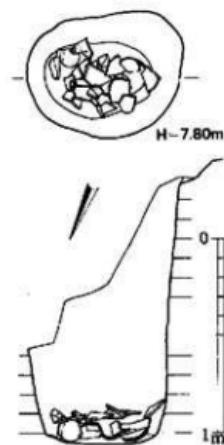


Fig. 21 第3号井戸(SE-03)実測図

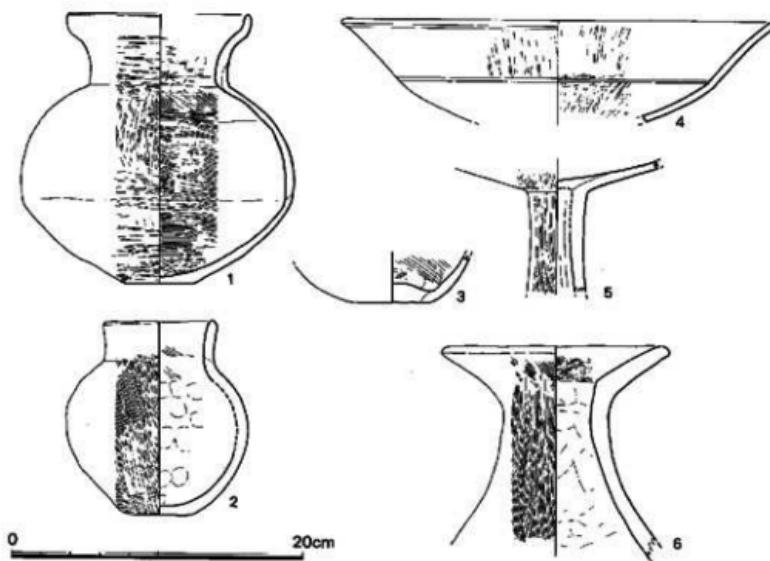


Fig. 22 第3号井戸出土遺物

高坏・器台

などがある。  
壺は小破片  
であり、図  
化はできな  
かった。1

～3は壺で  
ある。いず  
れも不安定  
ながら明瞭  
な底部をも  
つ。1は複  
合口縁壺で  
ある。屈曲  
の緩い口縁  
をもち、肩  
部最大径を  
胴部下半に  
もつ。2は  
直口壺であ  
る。4・5

は高坏である。4は壺部であり、半径の $\frac{1}{4}$ の位置で折れ外反する。5は軸部である。高脚であ  
り、壺部を粘土で充填して製作している。6は器台である。受部は鋭く折れ、内面にヘラ削り  
が使用されている。弥生時代後期後葉に比定される。

#### SE-04 (Fig.23)

A 3区において検出した。検出面ではほぼ円形をなし、径約80cmを測る。深さは195cmであり、  
壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はやや凹凸がある。埋土は全体にロームブロックを含む茶  
～黒褐色粘質土である。

#### 出土遺物 (Fig.24)

本造構からは整理箱 $\frac{1}{6}$ 程度の土器片が出土した。いずれも小片である。井戸底部に近い位置  
から壺2個体が出土した。7は長頸壺である。頸部は欠損する。胴部最大径は胴部下半にあり、  
14.7cmを測る。底部は径約4cmであり、丸みがあり、不安定である。外面は斜めハケ後ヘラミ  
ガキ、内面は指揮サエ後ハケである。これは弥生時代後期後葉に比定される。

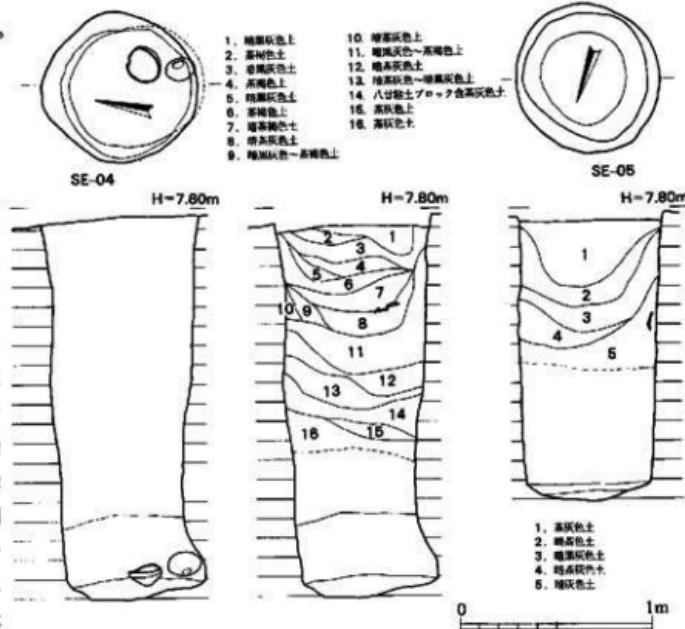


Fig.23 第4・5井戸 (SE-04・05) 実測図

## SE-05 (Fig. 23, PL. 6-1)

C3区で検出した。検出面ではほぼ円形を呈し、径約75cmを測る。深さは147cmであり、床面は中央に向って窪む。埋土はロームブロックを含む茶褐色粘質土であり、下位は水分を含み、グライ化している。埋土中に少量の土器片が出土したのみである。

## SE-06 (Fig. 25, PL. 6-2)

C3区において検出した。検出面ではほぼ円形を呈し、径約112cmを測る。深さは195cmであり、壁面は垂直に近い。底部から約55cm上位で壁面が大きく抉れている。この位置は八女粘土と鳥栖ローム層の境界部分となっている。なお、底部はやや東側に偏った位置に向って窪んでいる。埋土は中位までがロームブロックを含む黒～暗茶褐色粘質土であり、下位が粘土ブロックを含む暗灰褐色粘質土である。おもに上半部から土器片を少量出土した。底面から約140cm上位に完形に近い壺が一個体出土した。

出土遺物  
(Fig. 24)  
本遺構から  
は整理箱1/4程  
度の遺物が出  
土した。すべて  
弥生時代の  
土器片であっ



Fig. 24 第4・6井戸出土遺物

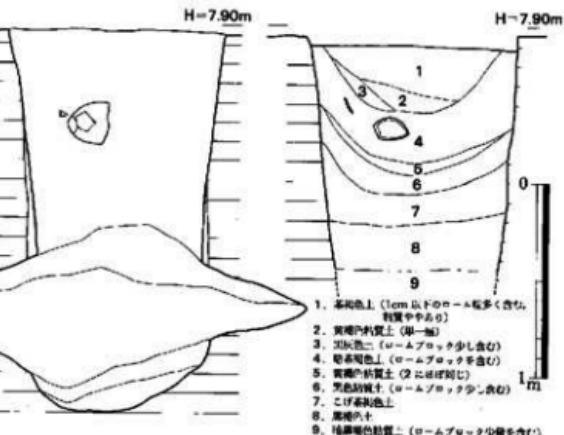


Fig. 25 第6号井戸 (SE-06) 実測図

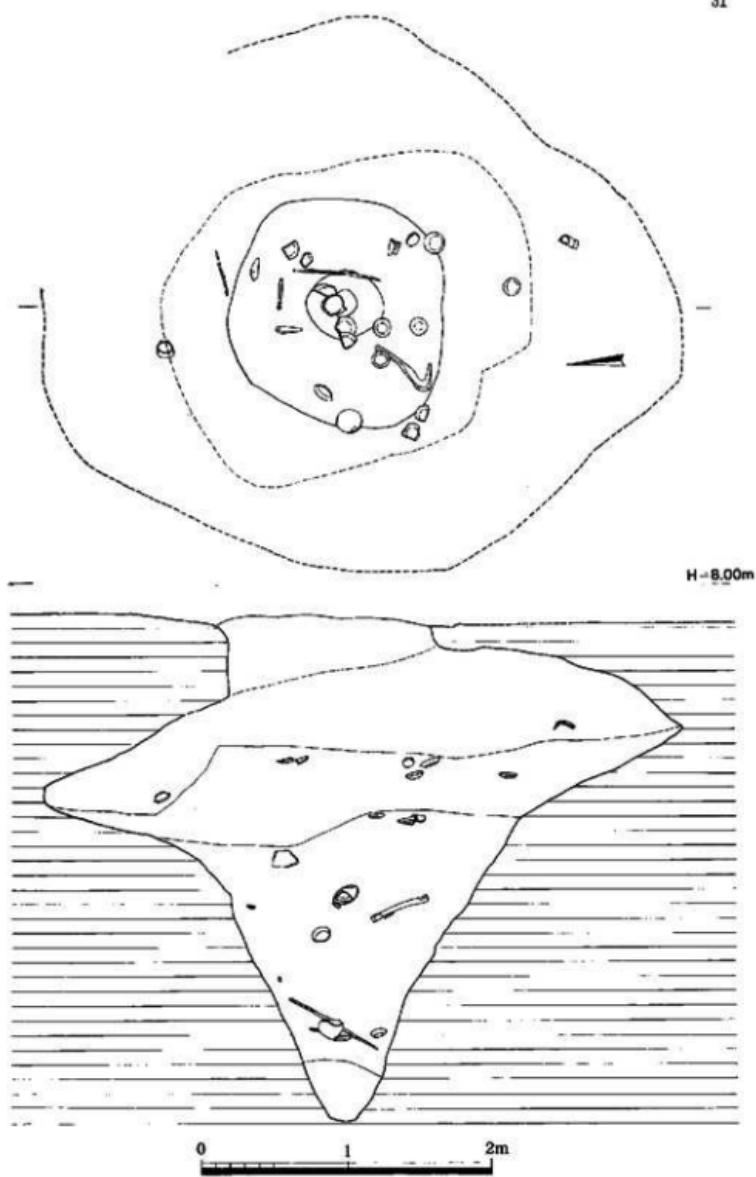


Fig. 26 第7号井戸 (SE-07) 実測図

た。8は壺である。口縁部から肩部を $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 程度欠損する。器高27.5cm、口径約15cmを測る。肩部最大径は胴部下半にあり、20.4cmを測る。頸部は短く、口縁は強く外反する。口唇部は厚し、端面を強くナデ、やや拡張気味となっている。肩部には断面三角形の突帯が1条巡る。底部は径8.5cmであり、安定した平底である。外面は継ハケ、内面は指押サエ後ヘラナデである。この壺はやや特異な形態であるが、底部が安定した平底である点、口縁部の特徴などから弥生時代後期前葉に位置付けられよう。

#### SE-07 (Fig. 26・27, PL. 6-3・4)

C4区において検出した。検出時点では南北に長い不整な橢円形を呈していた。最初に試掘溝を設けた結果、検出面から15～50cm下った位置から大きく抉れていますことが判明した。そのため、調査作業の安全のために、検出面での遺構平面を記録にとり、井戸の周囲の地山を除去しながら掘り下げ、調査を行なった。本遺構の平面規模は長さ150cm、幅115cmである。深さは検出面から285cmを測る。底部は径約50cmで中央に向って窪んでいる。底部から170～215cmの位置を最大径として抉れており、南北440cm、東西385cmまで拡がっている。底部と上部の残存する壁面からみると、本来はほぼ垂直に近い掘り方であったとみられる。底部から25cmほど上位の南側に弧状に巡る木質があり、径約50cm前後の規模で井筒があったとみられた。木質は遺存状態が悪く、取り上げることができなかった。埋土は大きく上・中・下に区分され、上層は茶褐色粘質土であり、少量のロームブロックを含む。中層は黒褐色土と茶褐色土の互層であり地山

H=8.00m

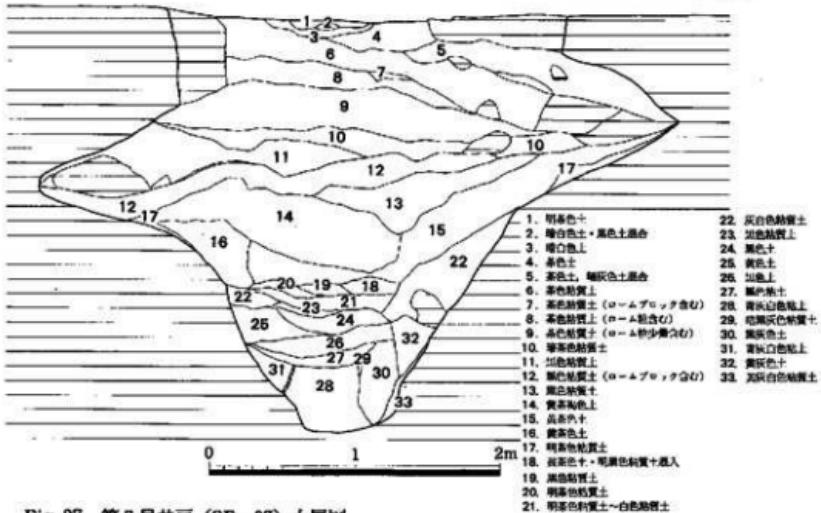


Fig.27 第7号井戸 (SE-07) 土層図

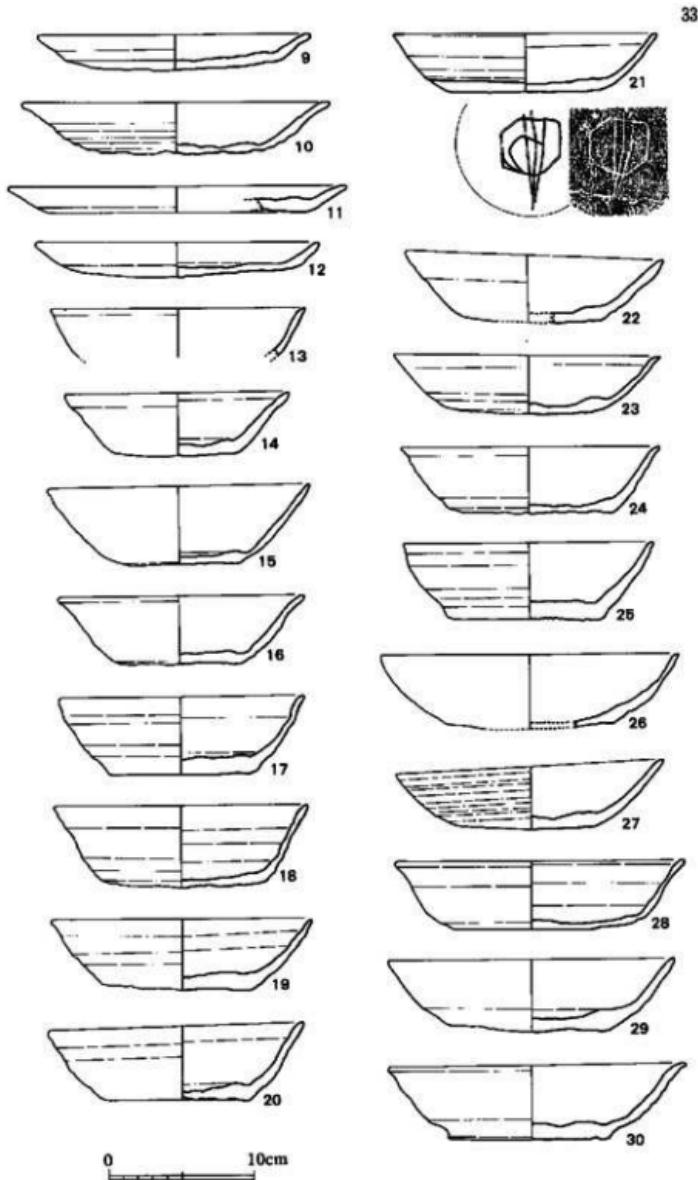


Fig. 28 第7号井戸出土遺物(I)

の崩落土を多く含む。下層は黒灰～黄灰色土であり、グライ化が進んでいる。これからみると、本井戸は下層が堆積した段階で埋め戻されることなく放置され、自然埋没と壁面の崩落が一定期間続き、最終的に埋没したものと考えられる。

#### 出土遺物 (Fig. 29~31)

本遺構からは整理箱7箱程度の遺物が出土した。遺物はおもに中～下層に多く出土した。出土遺物には弥生時代から古代の遺物が多く含まれている。以下では本遺構に伴う古代の遺物を報告する。遺物は土師器を主とし、須恵器、灰釉陶器、越州窯青磁、瓦、木製品などが出土した。このうち遺物の大部分を占める土師器は、皿、壺、瓶、黒色土器桙、高环、壺がある。

9～11は皿で、9は橙褐色を呈する完形品で、口径14.1cm、高さ1.8cm、体部はヨコナデ、底部はナデ調整されており、ヘラミガキはみられない。10は、やや深めの（高さ2.6cm）皿で、口縁を外反させ、外面にはかなり強くヨコナデの凹凸が残り、外底には板状の圧痕がみられる。赤橙色で、砂を含む胎土である。11は小片で、内外ヨコナデ調整、焼成がよく硬質になっている。12もヘラミガキ調整はみられない。9は中層、10・11は下層の出土である。

13～32は壺で、法量からみると、13～25の口径13cm以下のものと、26～32のようにこれをこえ15～17cmのものとに分けられる。器形からみると、19のように体部と底部の境が明瞭な形態と、21のように境を丸くつくる器形に二分できる。19では、体部を横ナデ、外底部は板状圧痕の上にナデがみられ、淡褐色で、焼成はよい。21は底部に記号様のヘラ書きがみられる壺であるが、内底にはヘラミガキが施され、体部はヨコナデ調整である。両形態とも体部内外はヨコナデ、内底はナデ、外底はヘラ切離しのままか、ナデ調整が多い。このなかにあって26、27の2例には体部内外と内底にヘラミガキが施されている。ヨコナデにより生ずる凸面を回転ヘラミガキしており、凹部にはヨコナデの痕跡がみられる。外底はヘラ切離しのままである。完形品の27は、口径14.0cm、高さ3.8cmを測り、橙色を呈し、19などの淡褐色とは色調を異にしている。32は墨書き土器で、口径16.7cm、高さ3.5～3.8cm、調整はヘラミガキではなく、外底は板状圧痕の上にナデ調整され、「大」の1字がみられる。30の底部は平高台状につくりだしている。21、23、29、30、31は中層、17、20、27、28、32は下層の各出土である。

33～44は高台をつける椀形品である。25と26は小形で、26の「大」字墨書き土器の内底の一部にヘラミガキが認められる。35以下はこれらより大形であり、全体がわかる42と43の法量は、口径16.5cm、底径7.7～8.2cm、高さ6.5～7.0cmである。高台を底部の端に貼りつけ、体部を直線的にのばしている。高台は44の特殊なものを除くと、比較的短く、肉厚で、直立している。調整についてみると、体部内外面はヨコナデ、内底はナデ、外底はヘラ切離しの未調整で、高台貼り付け付近にヨコナデ調整が施されている。41には板状の圧痕がみられる。このなかにあって、36と37の体部の外面にはヘラミガキがなされ、36では下部にコテ状の圧痕が残されている。この2片は赤褐色を呈する。椀においても少ないながらもヘラミガキのものが含まれて

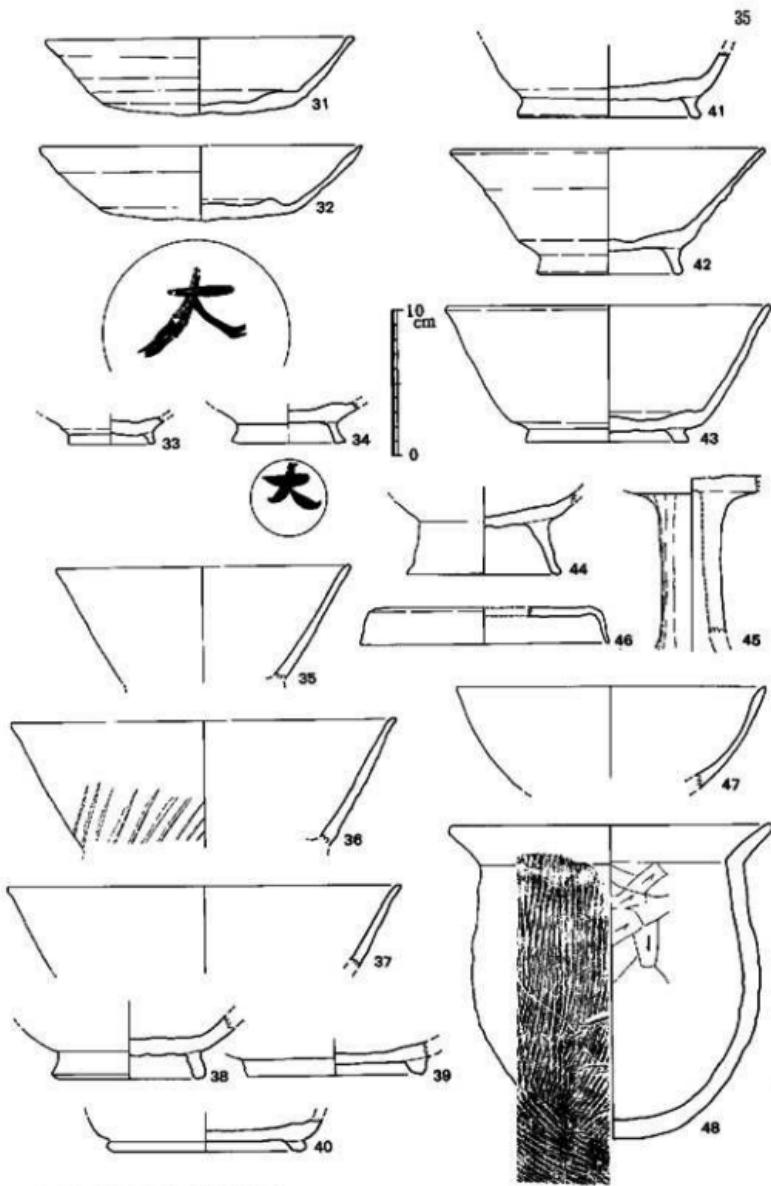


Fig. 29 第7号井戸出土遺物(2)

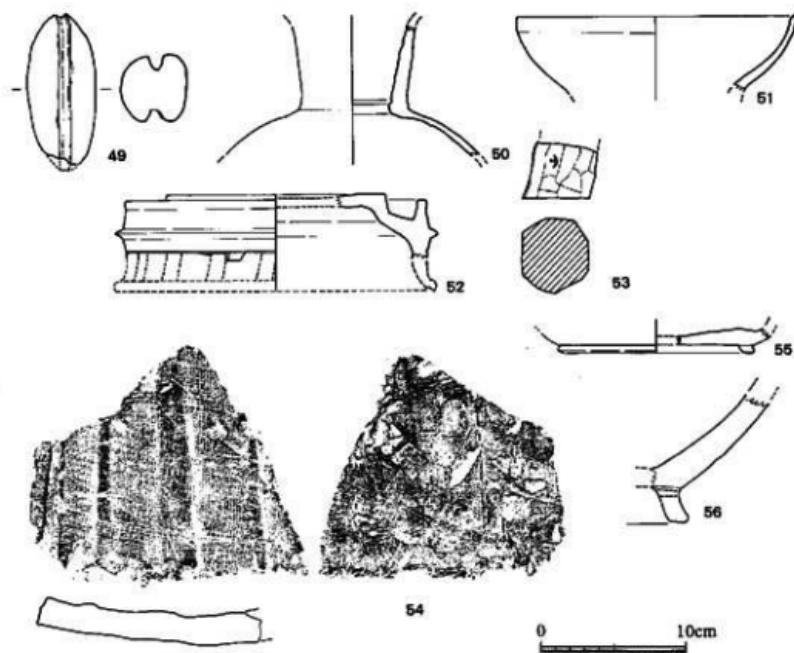


Fig. 30 第7号井戸出土遺物(3)

いるといえる。40は底部の小片であるが内面は黒灰色を呈する。椀のうち層位の確認のできるものは、38、41、42、43が中層、35、37、44は下層の各出土である。

このほかの土師器では、45の高環の脚部は赤褐色で、広狭13に面取りされている。46は坏蓋の小片で、精製された胎土で、赤褐色に焼成され、甲部はヘラケズリされている。47は黒色土器椀Aで、内弯する体部に、口縁をわずかに肥厚させ、横方向のミガキ痕が残る。外面は黄褐色を呈するが器面の摩滅がひどく調整は明瞭ではない。48は小形のほぼ完形の壺であり、下層から出土している。口縁の内外から外面すべてにハケ目がみられ、内面はヘラケズリである。49の土壺とともに細形のものも1点ある。

50は灰釉陶瓶の頸部破片で、灰色の精製土にかけられた灰釉は透明で薄緑色を呈するが、頸部では剥落している。51は越州窯青磁の坏と見られ、口径14.4cmをはかり、口縁を内弯し、白灰色の胎土にかけられた釉は黄緑色でカセており、口唇部ではほとんど剥落している。これとは別に椀の小片1も検出している。52は須恵器円面鏡で、海陸部全周の $\frac{1}{3}$ を残すが脚部はほとんど欠損している。径15.0cm、陸部径11.2cm、外堤は直立し丁寧にヨコナデされ、それよりわ

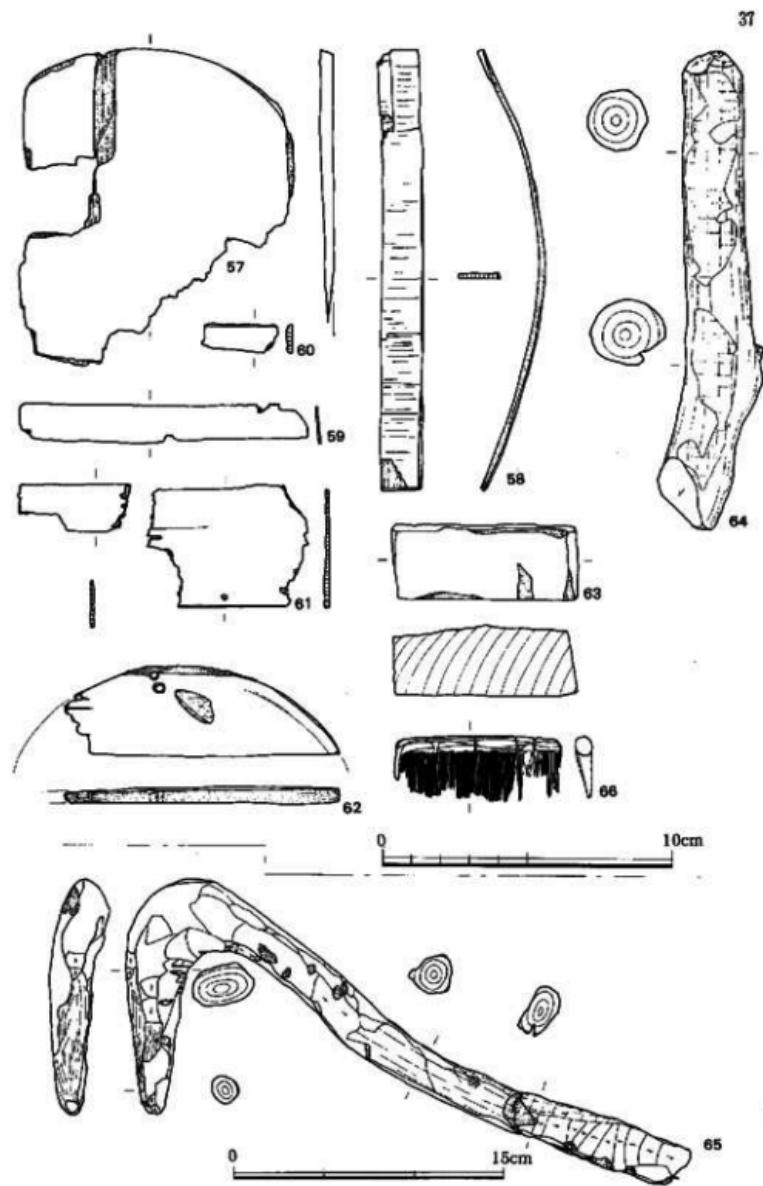


Fig. 31 第7号井戸出土遺物(4)

ずかに高い陸部はよく磨滅して、光沢が認められる。脚部は、透かしの上端で欠損しているが、幅9ミリとほぼ一定し、全体で16ヶ所に開いていたとみられる。透かしの上端の切開面は凹凸が多い。胎土は精製され内外ともに灰色を呈し、堅く焼成されている。53は磁石として使用されていたもので、下面是磨滅している。しかし、側面の不正8面形の面取りの一つに穿孔の痕跡があり、本来は別の用途であろう。黄白色の珪質岩である。54は平瓦で、凸面はナデ調整され、その下にわずかに斜格子文の叩きが認められる。須恵器は少なく、56は底部付近の破片で、内面に縦方向のナデ調整がみられ、高台の付け根近くに焼成前の穿孔がある。外面黒色、胎土中にゴマ様の粒が混ざるが胎土はよく、焼成も堅緻であり、鉢形品の可能性がある。55は坏身の小片であり、これら2点はいずれも下層から出土した。このほかに須恵器の大甌胸部の破片、ふいごの羽口、鉄滓が出土している。

57~66は木製品であり、その多くは下層から検出した。57は曲物の底板、杉材、58~60は曲物の側板で杉材、61も杉材の曲物の側板とみられるが、これには内側に漆が塗布されている。62も曲げ物の底板とみられ、2個の穿孔がある。63は面取りされた杉の加工材である。65は手斧の柄で、木の股を利用し、台の長さ19.5cm、断面は丸く、最小径は2.3cm、加工は丁寧とはいひ難い。柄の長さは46.5cm、櫛材を使用しているようである。66は、横櫛で一端を欠損し、全長はわからないが、幅は残存部で3.4cmをはかる。歯は細く厚みも1mmと薄い。柘植材で、なにも塗布されていないが磨かれて光沢がある。

上記のように、この井戸の出土品は時期差の少ないようにみられる。土師器碗の高台の形態、貼り付け位置、体部の形態にみられる諸特徴、調整方法においては、ヨコナデを多用するものが多い中に、少数とはいへラケズリとヘラミガキを施したもののが混在する状況、これらは、大宰府史跡SE400の出土品とよく似ており、その年代を9世紀初頭に位置づけている（横田賢次郎「人宰府出土の土師器に関する覚え書き」3、九州歴史資料館研究論集5、1979）。このSE-07は那珂遺跡群において、標識的遺物組成となりえる状況であり、既往の調査例としては、那珂第8次調査SE-01の出土品もこれに近い（『那珂遺跡－那珂遺跡群第8次調査の報告』1987）さらに、SE-07においては越州窯青磁、灰釉瓶、円面鏡が共伴していることに注意をはらっておきたい。とりわけ越州窯青磁の出土例としては初期にあたり、この時期の例は非常に少なく、上記の大宰府SE400でも報告されていない。人宰府史跡内のその他でも少数例があるにすぎず、越州窯青磁の需要時期として、この那珂において大宰府と並行していたといえるようであり、その歴史的意義は大きい。

#### SE-19 (Fig.32, PL. 6-5・6)

B6区において検出した。検出面は柱穴や攪乱のためにかなり壊されている。平面形はほぼ円形であり、径約145~155cmである。深さは検出面から328cmを測り、底部は径約30cmである。底部の位置が東側に偏っているために、壁面は東側ではほぼ垂直に、西側で75~80°の傾斜となっ

ている。底部から約2mの位置でやや抉れている。埋土は上～中層がロームブロック混りの暗～黒褐色粘質土であり、下層が黒色の粘土層である。本遺構からは多量の遺物が出土した。特に埋土中に集中する部分が5面あり、完全に復元できる個体を含んでいた。これらは井戸の埋没過程に人为的に投棄されたものと考えられる。A群

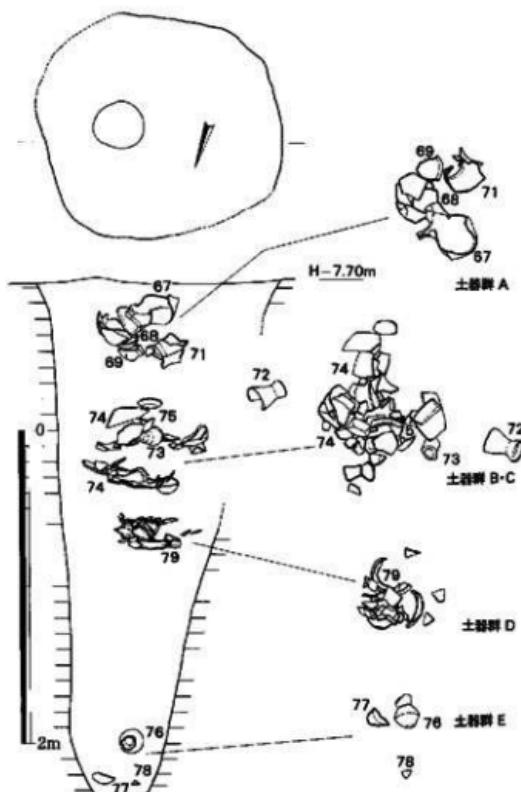


Fig. 32 第19号井戸 (SE-19) 実測図

は最上部の遺物群であり、底面から2.8～3.0mの位置にある。B～D群は中位にあり、底面からの高さはB群が2.2～2.5m、C群が2.0～2.1m、D群が1.6～1.8mの位置である。E群は最下部の遺物群であり、底面から0.4mの範囲にある。

#### 出土遺物 (Fig. 33～37)

出土遺物は整理箱で12箱程度である。ほとんどが弥生時代後期の遺物であるが、同中期の遺物も含んでいる。遺物群を構成するのは弥生時代後期の遺物であり、ここではその遺物を報告する。各遺物群の構成はA群に壺(67、70)、壺(68)、鉢(69)などがあり、B群の遺物には甕(74、75)、器台(72、73)などがある。C群の遺物には壺(71、82)などがある。D群には

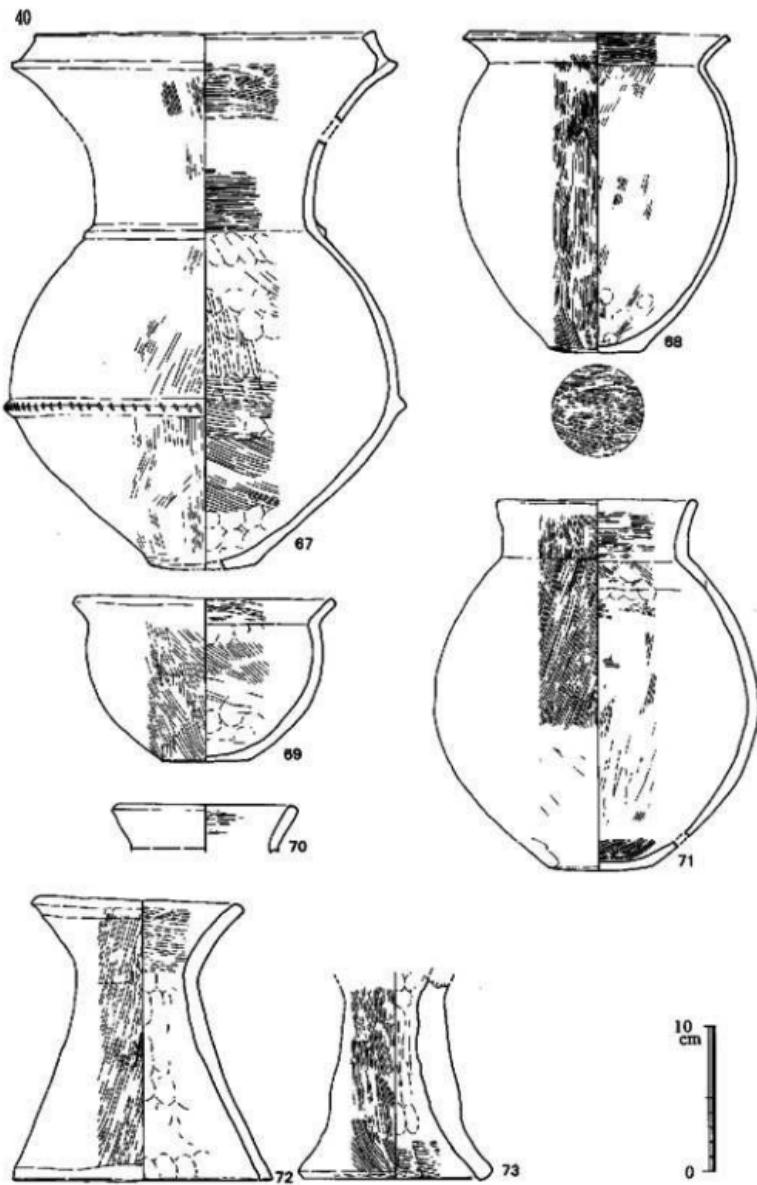


Fig. 33 第19号井戸（上層）出土遺物(1)

壺（81）、壺（79、80、83）があり、E群には壺（76～78）がある。この他にもおもに中層より上に多くの遺物が出土した。それらには壺（84、85、89、91、92）、鉢（86、90）、壺（87、88）、高杯（93、94）がある。また、石器として石庖丁が1点出土している（95）。

壺は小型のもの（68、81、89、91、92）

と大型のもの

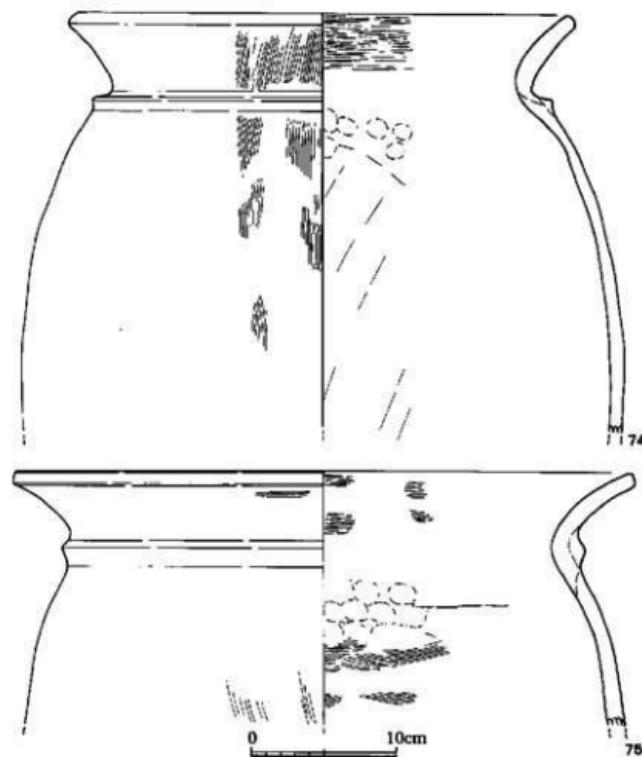


Fig. 34 第19号井戸（中層）出土遺物(2)

（74、75、81、82）がある。このうち89と92はより古い時期のものと考えられる。68は全体を復元できたものであり、器高21.8cm、口径18.2cmを測る。口縁部はく字形に外反し、端部は凹線が1条巡る。胸部最大径は胸部上半にあり、19cmを測る。底部は径6.5cmであり丸みをもつ不安定な平底である。口縁部から外面、底部はハケ調整であり、内面は指押さえ、ハケ後ナデている。81、91は底部であり、同様の特徴をもっている。大型の壺は口縁部がく字形に外反し、頸部に断面三角形の突帯が巡る。端面はナデ、面取り状をなす。81は口縁端部と突帯に、82は口縁端部にそれぞれ刻み目が施される。壺は複合口縁壺（67、79、80、87）、直口壺（71、83）、広口壺（70、82、88）、長頸壺（76～78）があり、複合口縁壺には中型のもの（67、79、87）、小型のもの（80）がある。67はほぼ全体を復元できた。器高約37cm、口径27cmを測る。口縁部

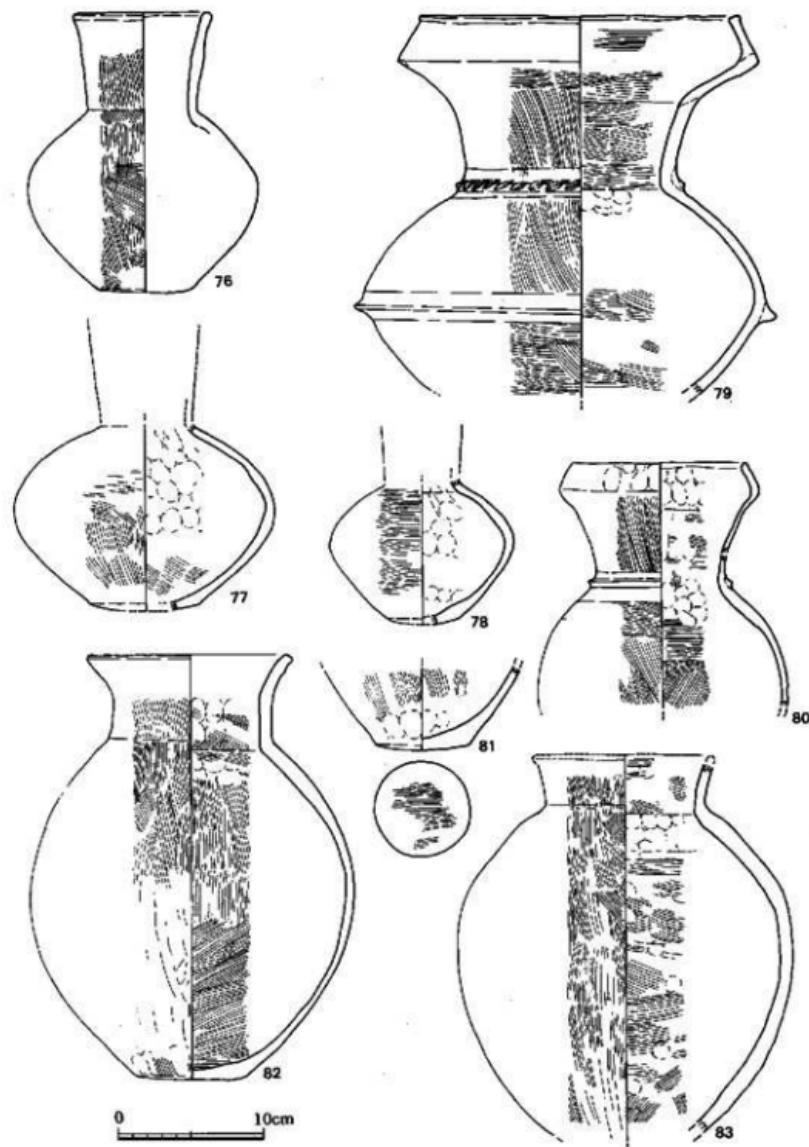


Fig. 35 第19号井戸（下層）出土遺物(3)

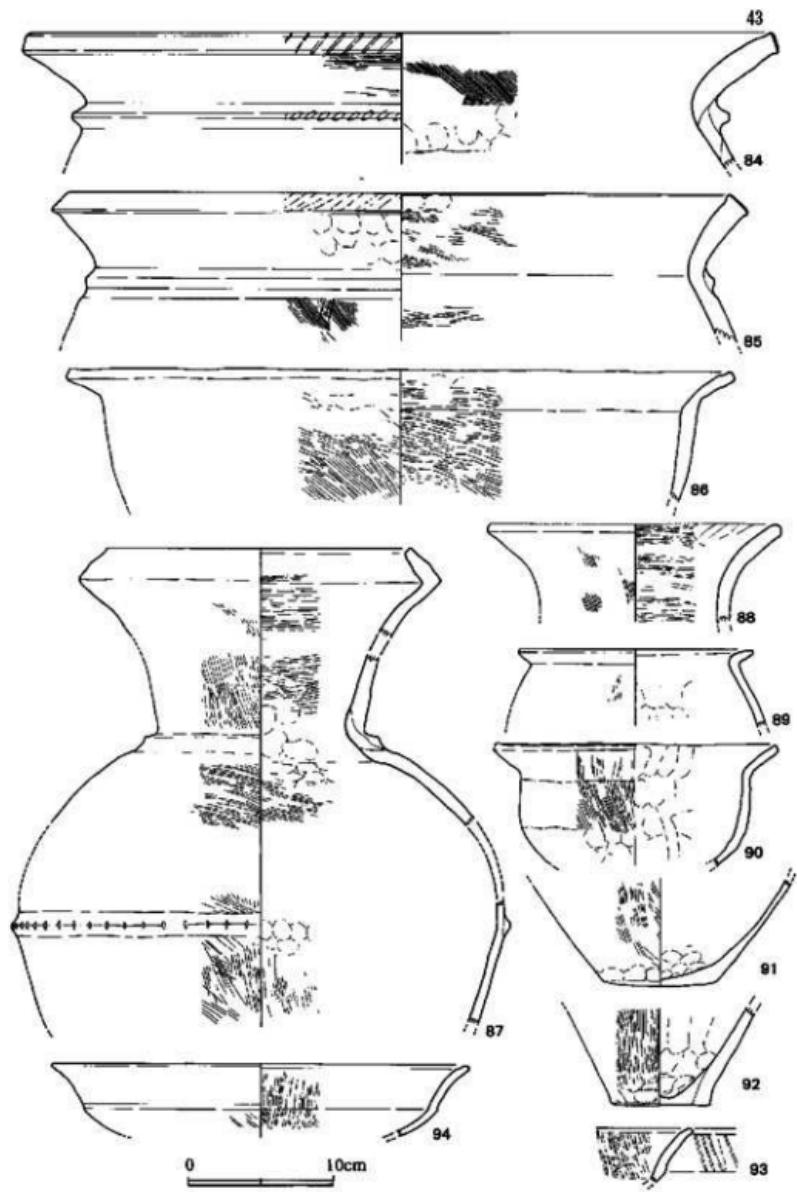


Fig. 36 第19号井戸出土遺物(4)

は逆く字形に内傾し、くびれ部と端部を外方に強く引き出す。頸部と胴部に断面三角形の突帯が巡り、胴部の突帯には刻み目が付く。87も同様の形態を取るが、口縁部の特徴が異なる。79は底部を欠くが、胴部が低平で算盤玉形を呈する。口縁端部のみ外方へ引き出す。頸部の突帯に刻み目が付く。80は器壁が薄く仕上げられ、口縁は袋状に内傾する。口縁部は指押さえ、ナデで調整される。頸部に断面三角形の突帯が1条巡る。鉢は大型のもの（86）と小型のもの（69、90）がある。

69は全体の復元ができた。器高11.2cm、口径18cmを測り、口縁部はく字形に外反する。端部はナデ、面取る。底部は径6cmを測り、わずかに丸みをもつ。高杯は口縁部の破片であるが、94は口径28.8cmに復元できた。口縁部は半径の約5%の位置で折れ、外反する。内外面は丁寧なミガキが施される。器台は器壁が薄く、丁寧な造りのもの（72）と、器壁が厚いもの（73）があり、72はほぼ完形である。器高の5%の位置でく字形に外反する。

これらの遺物は時期幅が少なく、弥生時代後期中葉に位置付けられる良好な一括資料である。

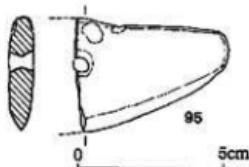


Fig. 37 第19号井戸出土  
遺物(5)

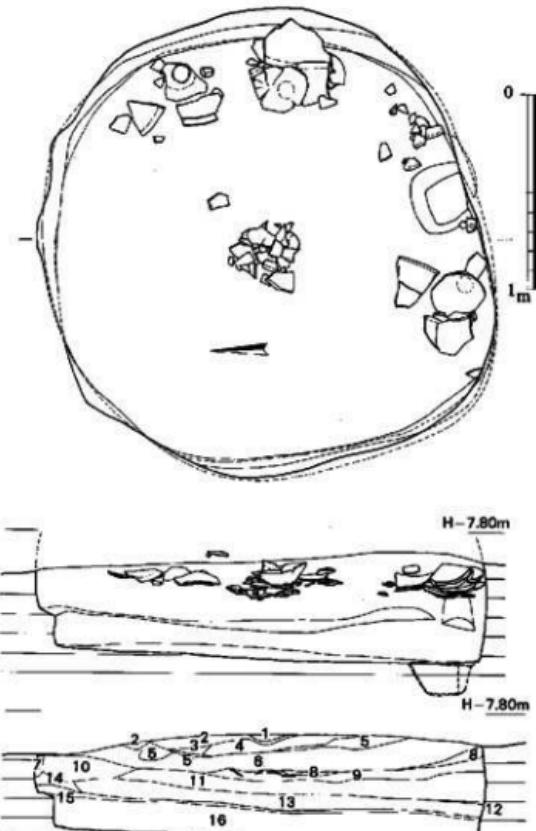


Fig. 38 第1号土壤 (SK01) 実測図

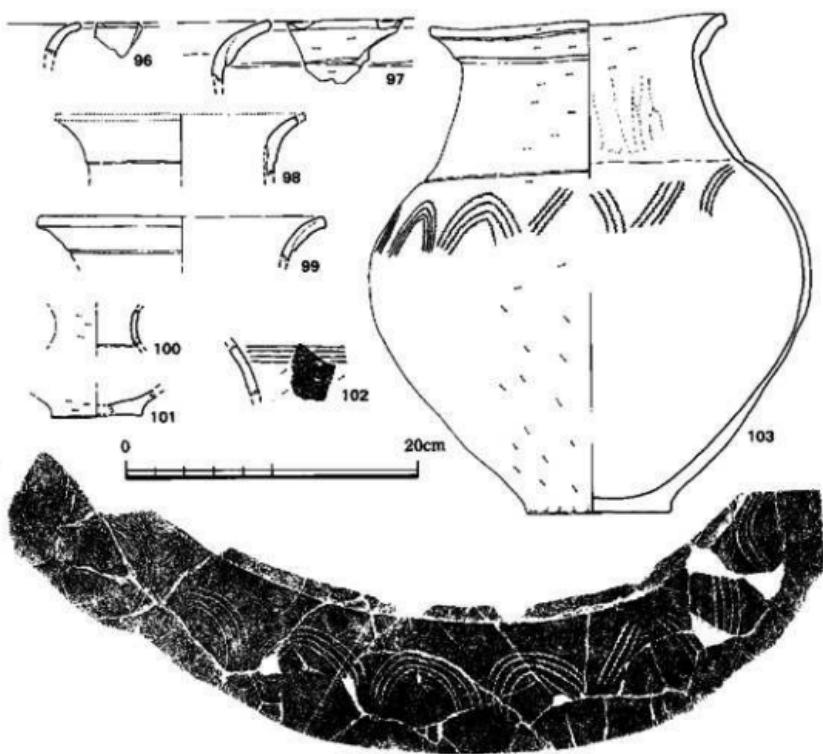


Fig. 39 第1号土壙出土遺物(I)

## (2) 土壙

SK-01 (Fig. 38, PL. 7-1~3)

B1区で検出した袋状竪穴の下部である。平面形は不整な隅丸方形を呈し、南北220cm、東西235cmを測る。削平のために底部付近が遺存するだけであり、深さは検出面から40~55cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、南側へ5°~3°の傾斜で下る。床面でもっとも低い南側の壁面直下に一辺約30cm、深さ15cmの方形の穴が掘られている。また、この穴の上の壁面に階段状の窪みが掘られている。これは床面から約15cm上位に幅36cm、深さ6cmの大きさである。埋土は3群に区分され、下の2群はロームブロックを多量に含み上面は固く締まっている。下部の埋土は南側の壁面を除く全周の壁面に10cm程食い込み、堆積している。中位の埋土の上面には多量の土器が貼り付くように出土した。こうした点から2回の床面の嵩上げがあり、最初の嵩上げ

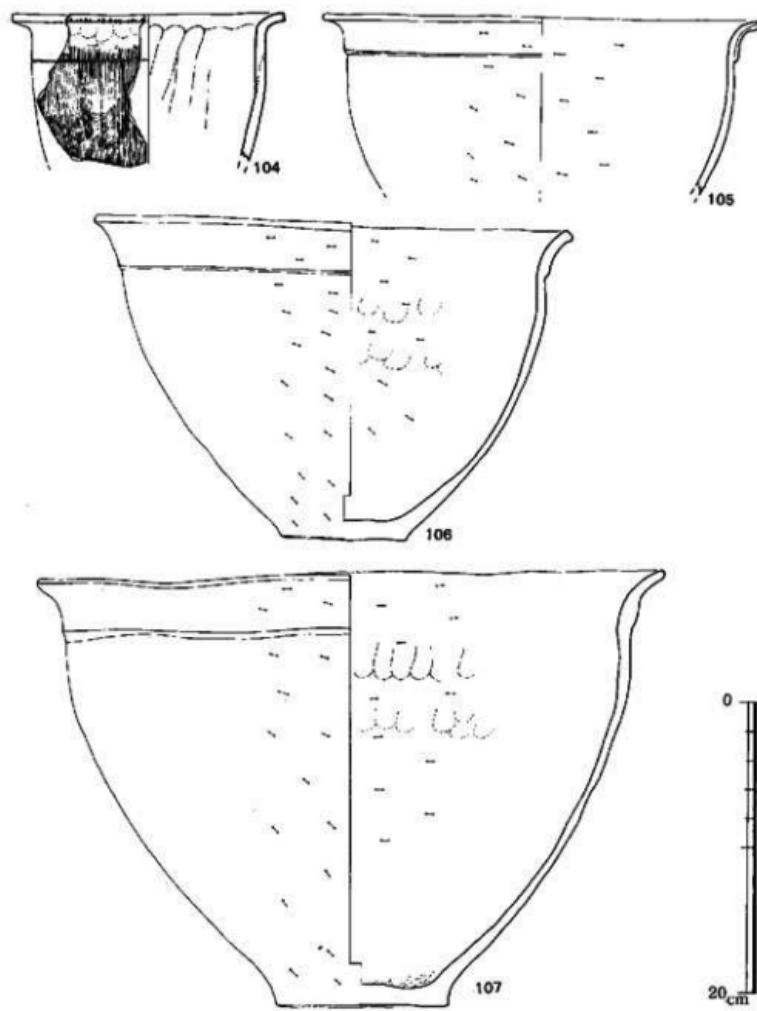


Fig. 40 第1号土壤出土遺物(2)

では壁面を掘削する作業もあったと考えられる。

## 出土遺物 (Fig. 39・40)

本遺構からは整理箱3箱程度の遺物が出土した。遺物には弥生時代前期の壺・甕・鉢がある。

96は壺としたが、鉢の可能性も残す。97～99は、口縁部と頸部の境に段が巡る。しかし、98の段部は、他と比べ浅く不明瞭である。また、99は口縁部の幅がやや狭い。100は小形の精製壺の頸部破片である。胴部との境には、内面に粘土帯接合のために生じた段が残る。102は中形壺の肩部破片で、ヘラ描きの4条の平行沈線文が巡る。101は壺の底部破片である。103はほぼ完形に復元できた中形壺である。口縁部下に粘土帯の貼り付けにより明瞭な段が、頸部と胴部の境には沈線状の段が巡る。肩部には重弧文が2枚貝の貝殻で施文されるが、最終段階で施文部分が足りなかったためか、短斜線を施文している。弧文は、右半分を時計まわりに、次に左半分を逆時計まわりに貝殻を回転押捺して描く。重弧は3～4条一組と一定せず、描き方もかなり難である。

104は、甕の胴部上半から口縁部にかけての破片である。如意形口縁をもつ。口唇下端にキザミを施し、口縁部にヘラ状工具で沈線1条を巡らす。

105～107は、如意形口縁をもつ鉢である。106・107はほぼ完形に復元できた。105は口縁の外側に粘土帯を貼付して明瞭な段をつくる。これに対して、106・107は器面をかなり丁寧な研磨調整で仕上げており、その過程で口縁下の段部は、かなり不明瞭なものとなっている。

以上は、いずれも板付II式の範疇で考えられる。

## SK-08 (Fig. 41, PL. 7-4~5)

本遺構はC6区において検出した。北側を擾乱により一部壊しているが、比較的保存状態は良い。検出面で東西に長い楕円形を呈し、長さ115cm、幅100cmを測る。深さは約70cmであり、床面はほぼ平坦である。埋土は黒色の粘質土を1枚挟み、上下は茶灰色粘質土である。遺物は少量の出土であり、図化できるものはない。ただし、弥生時代以降の遺物は認められず、おそらくは弥生時代中期以前に位置付けられる小型の袋状空穴であろう。

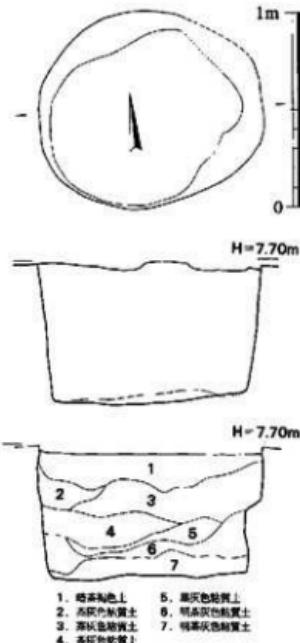


Fig.41 第8号土壙 (SK08) 実測図

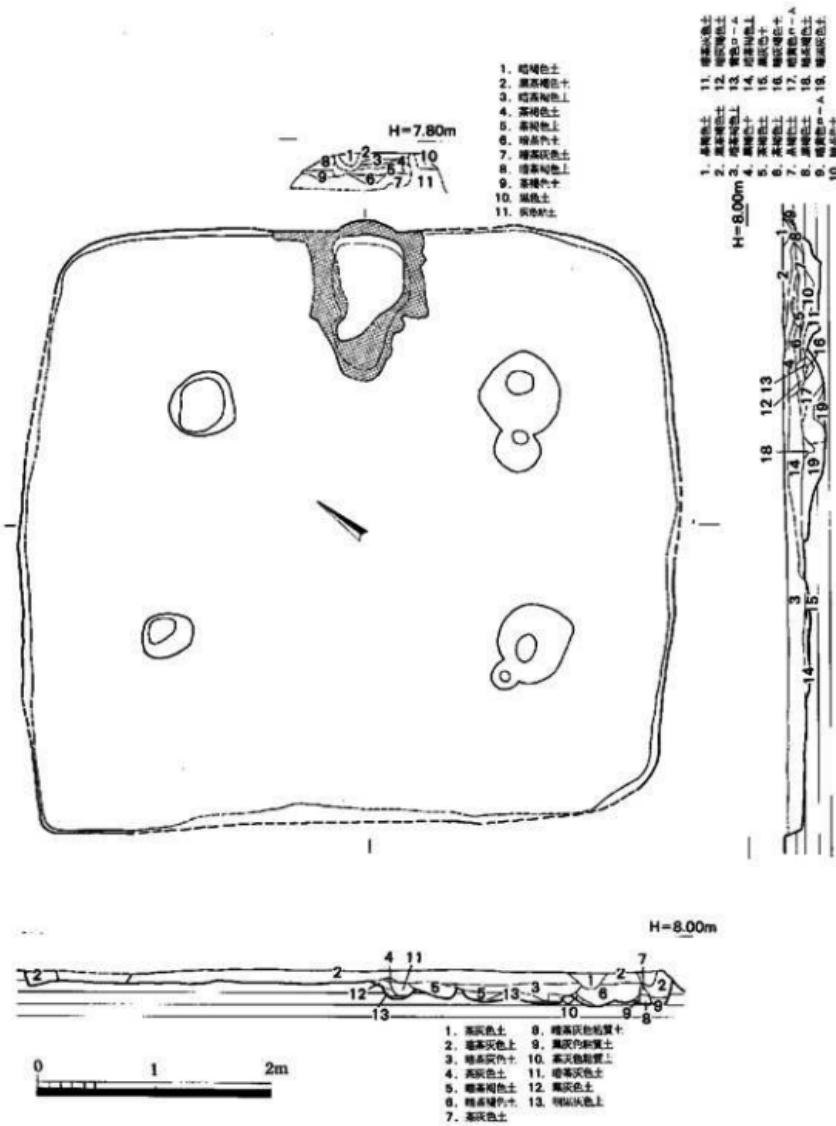


Fig. 42 第9号竖穴式住居跡 (SC-09) 実測図

## (3) 壺穴式住居跡

SC-09 (Fig. 42, PL. 8-1・2)

C・D、5・6区において検出した。全体として相当の削平を受けており、古代の柱穴、近代の溝、擾乱により各所が壊されている。また、西側でSC-20を切る。平面形は隅丸方形を呈し、おおよその主軸はN-53°-Eにとる。東西約5.1m、南北約5.6mを測る。深さは検出面から10~25cmあり、南側から東側の床面は一旦深く掘り込んだ後、埋土で整地し、床面を造っている。主柱穴は四本であり、それぞれ2個の柱穴からなる。1回の建て替えが予測される。壁溝は検出できなかったが、南北の壁直下が土層観察ではやや下り、その痕跡かと思われる。東壁の中央に竈が造り出されている。検出段階で基底部のみの遺存であり、一部に擾乱もあることから復元は困難となっている。構築はまず壁に近い床面を一辺1m前後、深さ15cm程度掘り下げ、その後水成粘土により壁面を構築したものとみられる。煙道などの施設は認められないが、壁面に対して10cm程度弧状にせり出していることから、この上部に設けられたものと考えられる。竈内壁の規模は幅約55cm、長さ70cm程度であり、焚口を含めた長さは120cm程度とみられた。竈内床面は窪み、灰、炭化物が多く認められた。住居跡内の埋土はロームブック混りの茶褐色土である。床面は薄層によって二分される場所があり、1回の貼り替えが予測される。なお、竈と対面する壁面近くに水成粘土塊が集中して分布したが、その性格は不明である。

## 出土遺物 (Fig. 43)

住居跡内埋土中からは整理箱1箱程度の遺物が出土した。この中には新旧の遺物が少量含ま

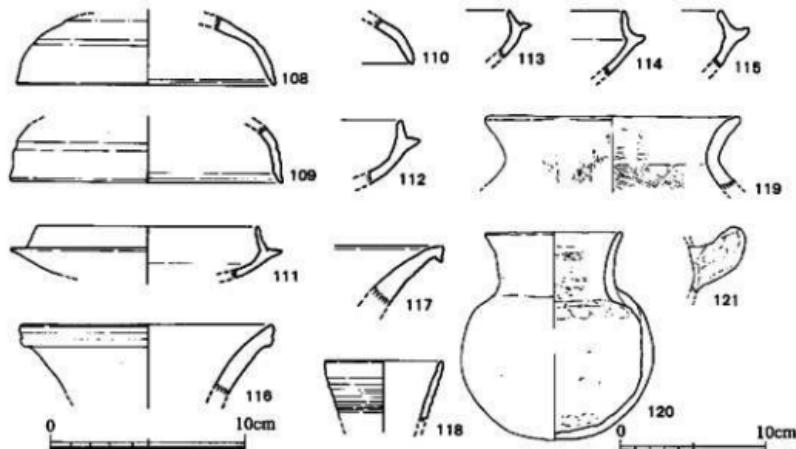


Fig. 43 第9号壺穴式住居跡出土遺物

れどおり、調査時点で多少の混在があったとみられる。遺物には須恵器、土師器のほか、弥生時代から古式土師器の破片も多く含まれている。須恵器には杯蓋（108～110）、杯身（111～115）、壺（116～118）があり、土師器には壺（119）、壺（120）、壺の把手（121）などがあ

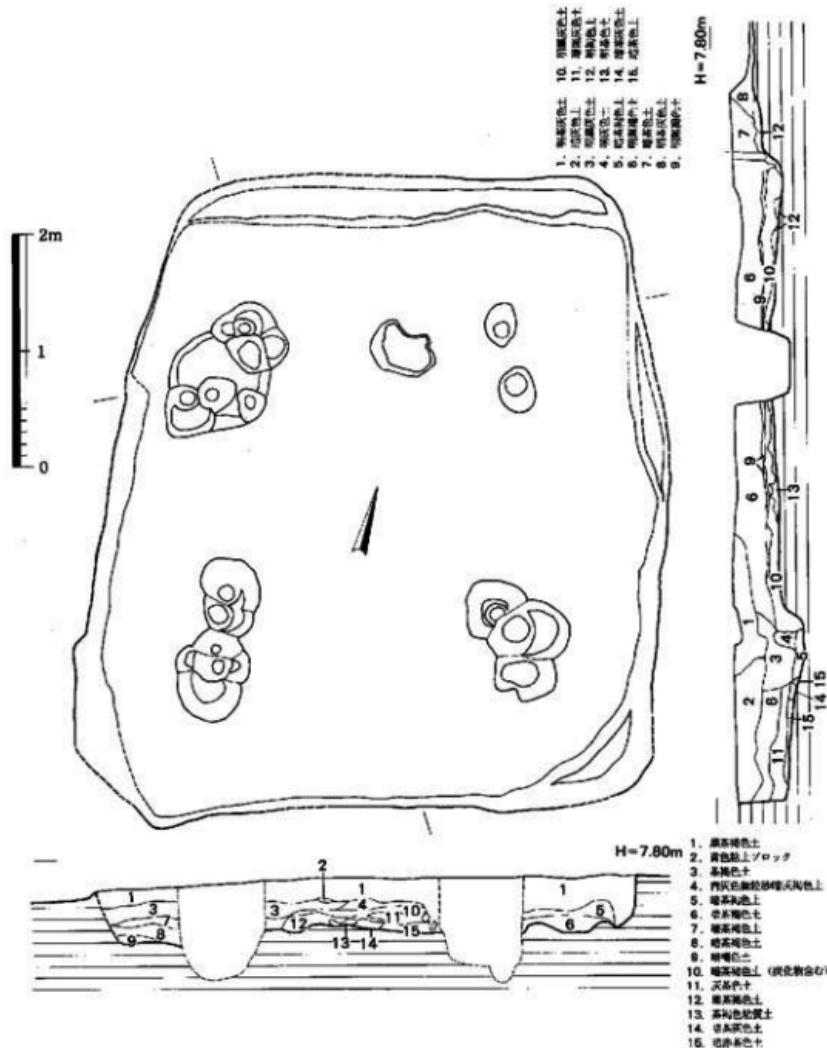


Fig. 44 第20号堅穴式住居跡 (SC-20) 調査図

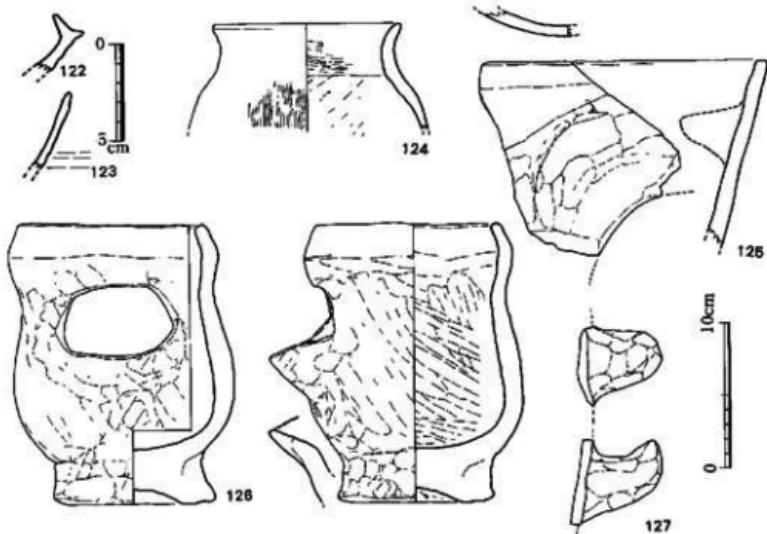


Fig. 45 第20号竪穴式住居跡出土遺物

る。108、109はやや古い特徴をもつが、他は小田富士雄編年のⅢb～Ⅳa期に位置付けられる。

SC-20 (Fig. 44, PL. 8-3・4)

本遺構はC6・7、D7区において検出した。SC-09の西側に位置し、切られている。全体に古代の柱穴や近年の擾乱などによりかなり壊されている。平面形は南辺がやや広い隅丸長方形を呈し、主軸はN-58°-Eである。北壁と東壁に床面から10cm前後上に段があり、建て替えに伴う住居掘り方の拡張があったとみられる。外側の規模は長さ5.4m、幅4.9mを測り、内側の規模は長さ約5.0m、幅4.8mとみられる。掘り方の最深部は約30cmを測るが、住居の中央部はやや高く削り残されている。主柱穴は四本柱であり、それぞれに4～7個の柱穴が切り合っている。最低3回の建て替えが予測される。壁溝は確認できなかった。壁面へ造り付けの竈は存在しないが、北側の主柱穴間の床面に焼土面を確認した。これは2面の焼土面が南側に開く馬蹄形状の溝に囲まれていた。その規模は長さ約40cm、幅約35cmである。また、この焼土面の上部から異形土器が出土した。後述するが、これは移動式竈の設置跡と考えられた。住居跡内の埋土は茶褐色土と黒褐色土の互層状をなし、3面の貼り床が認められた。

#### 出土遺物 (Fig. 45)

本住居跡からは整理箱4箱程度の遺物が出土した。いずれも小片が多く、また、多くの柱穴などの切り合いのために遺物の混入した疑いもある。出土遺物には須恵器、土師器があり、他に弥生時代の遺物も含まれている。須恵器には环身(122)、楕円高环(123)があり、土師器に

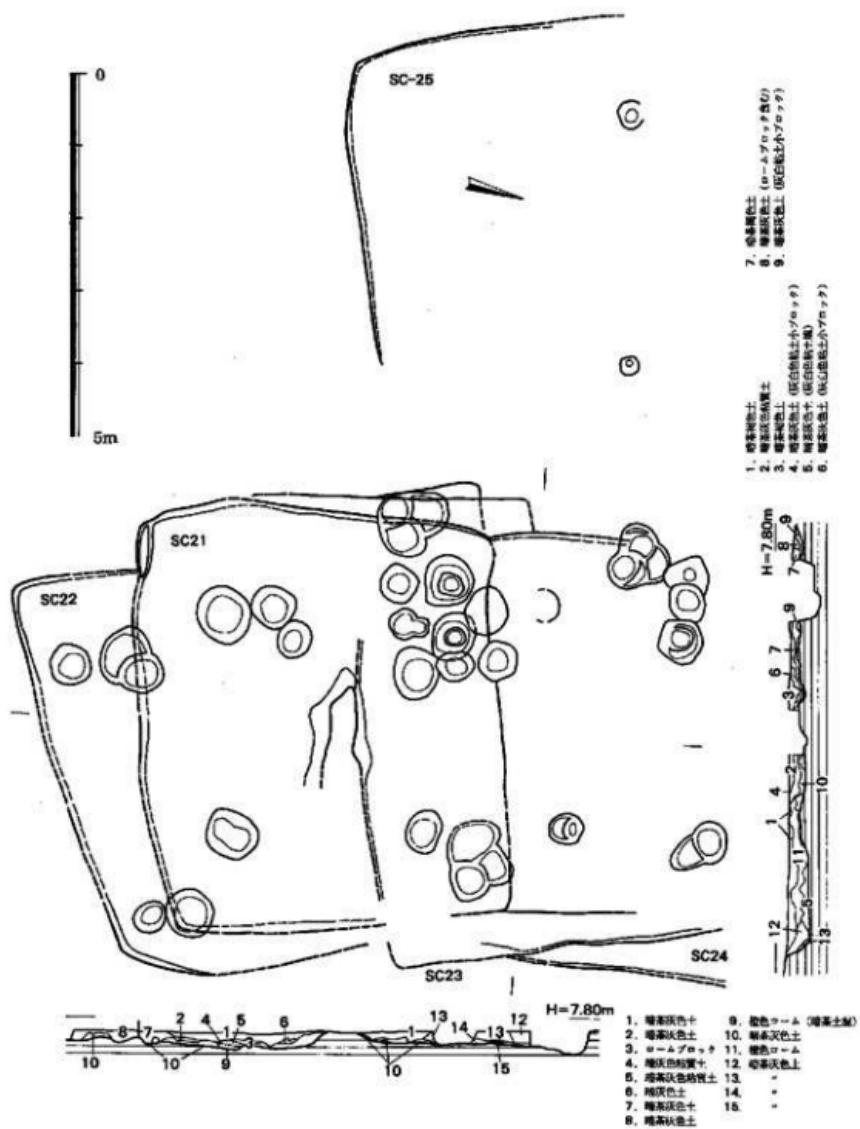


Fig. 46 第21~25号竪穴式住居跡 (SC-21~25) 実測図

は壺（124）、甕（125）、異形土器（126）、壺か瓶の把手（127）がある。122の須恵器坏身は小破片であり、本住居跡を切るSC-09との時期に矛盾が生じることから、混入品とみられる。126の異形土器はほぼ完形品であり、器高19cm、口径12.5cmを測る。口縁部はゆるく字形に内湾し、胴部上位に横広の窓が開き、下方を注口状に引き出す。底部は径約11cmであり、上底をなす。全体に荒い造りであり、出土位置からみても実用品か疑問である。

#### SC-21 (Fig. 46, PL. 8 - 5)

A・B、5・6区において検出した。他の遺構との切り合いが著しく、また、削平や擾乱のために遺存状態が甚だしく悪い。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈し、おおよその主軸はN-25°-Wをとる。規模は復元から南北約5.0m、東西5.4-5.9mを測る。主柱は四本柱である。住居跡の掘り方は約15cm遺存するが、住居中央部は地山が露出しており、四周のみ深く掘削したとみられる。埋土はロームブックを含む茶灰色土であり、床面より下位の埋土が遺存しているとみられる。したがって、床面は削平のために既に失われていると考えられる。

#### 出土遺物 (Fig. 47)

本遺構からは少量の遺物が出土した。遺物には須恵器、土師器、玉類がある。ただし、新旧の遺物の混入も予測される。須恵器には坏蓋（128、129）、坏身（130）、壺の把手（131）があ

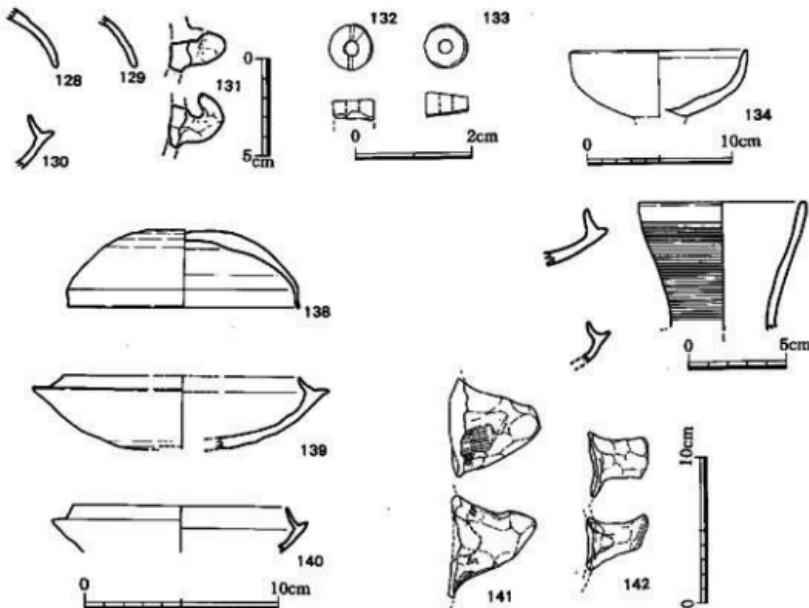


Fig. 47 第21・22号竪穴式住居跡出土遺物

る。玉には滑石製の白玉（123、133）がある。坏類はⅢb期からⅣa期に位置付けられる。この他に、本遺構とSC-22を検出時に遺物を探査している。これには須恵器、土師器があり、須恵器には坏蓋（138）、坏身（139）があり、土師器には壺か瓶の把手がある。これらの所属する住居跡は不明であるが、本住居跡の時期と矛盾しない。

#### SC-22 (Fig. 46, PL. 8-5)

A・B、5・6区において検出した。SC-21と重複し、やや南側にずれている。住居の南側の二隅とその延長を一部確認したのみである。主軸はN-30°-Wにとる。その規模は東西約5.7m、南北3m以上である。主柱は四本柱であり、2穴からなる柱があることから、建て替えの可能性もある。埋土は断片的に遺存しているが、床面下の整地土とみられる。床面は削平のために失われている。

#### 出土遺物 (Fig. 47)

本遺構からは少量の遺物が出土した。遺物には須恵器、土師器があり、須恵器には坏身（135、136）、壺（137）がある。土師器には高坏（134）がある。これらの遺物は混入品の恐れもあり、小片であることから断定しかねるが、Ⅲb～Ⅳa期に位置付けられよう。

#### SC-23 (Fig. 46, PL. 8-5)

A 6、7区においてSC-21の西側に検出した。弥生時代後期の包含層である3層群上面に南西側の隅部を確認した。北側は試掘溝に切られ、さらに調査区外に延びるものとみられた。検出面では土色の変化に乏しく、また、削平のために埋土が10cm以下であったために全体は不明であった。主軸はおおよそN-23°-Wであり、確認できる規模は南北3m以上、東西4.2m以上を測る。柱穴などについては不明であった。本住居跡に伴うと判断できる遺物は検出できなかった。

#### SC-24 (Fig. 46, PL. 8-5)

A・B、5・6区において検出した。南側はSC-21に切られ、東側でSC-25を切る。北側は試掘溝に切られ、さらに調査区外に延びる。主軸はN-22°-Wをとる。規模は東西約5.7m、南北4.2m以上である。主柱は四本柱であり、1回以上の建て替えが予測される。埋土は10～20cm遺存しているが、いずれも床面下の整地層と考えられる。出土遺物は土師器、須恵器片が少量であり、図化できるものはない。

#### SC-25 (Fig. 46, PL. 8-5)

A 5区において検出した。SC-24にはほとんど重複し、東側の壁面が遺存しているだけである。主軸はN-10°-Wであり、周囲の住居跡の中ではもっとも真北に近い。壁面は南北に2.8m以上であるが、その他の規模は不明である。深さは検出面から15cm以下であり、すべて床面以下の整地層であるとみられた。本住居跡に伴うとみられる遺物は少量の土師器片のみであり、図化できるものはない。

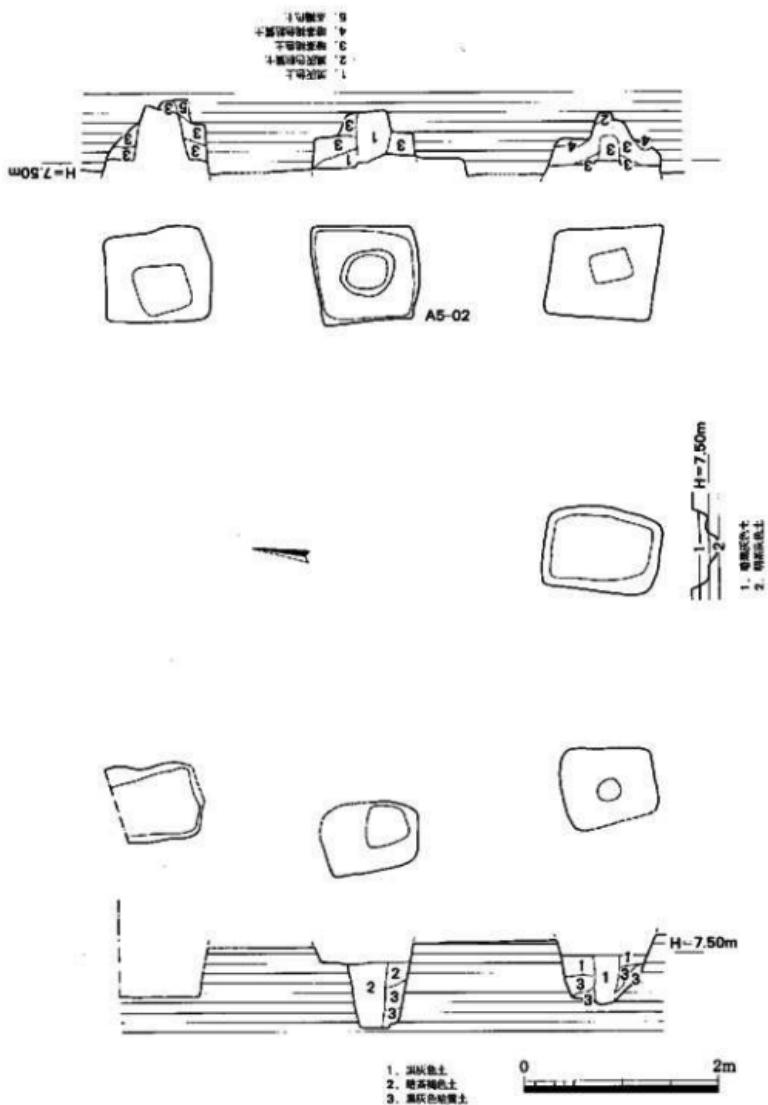


Fig. 48 第15号据立柱建物 (SB15) 実測図

## (4) 挖立柱建物

SB-15 (Fig. 48, PL. 9-1~3)

A・B、5・6区において検出した。SC-21~25を切る。また、北側は試掘溝に切られ、調査区外に延びている。検山できた範囲では二間二間以上となる。主軸はN-8°-Wであり、真北に近い。柱穴掘り方は主軸方向に長い長方形をなす。

掘り方の平面形は規格性が高く、長さでは1~1.2m、幅では0.8~1.0mの範囲に含まれる。このうち東側と南側の柱穴には柱痕があり、それらの径は25~35cmである。建物の規模は桁行485cm以上、梁行540cmを測る。柱痕の中心で測った桁行方向の柱間は240cmと194cmがあり、梁行方向の柱間は267mと258cmを測る。

## 出土遺物 (Fig. 49)

柱穴内と柱痕からは土器器と須恵器片が少量出土している。このうち時期を推定できる資料は桁行側の柱A 5-02の掘り方から出土した須恵器である。須恵器には壺蓋(143)と壺身(144)がある。小破片からの復元であるが、143は口径約14.5cmを測り、口縁端部を短く折る。端面は丸く仕上げられている。144は比較的大きい部類であり、底部の屈曲部よりやや内側に断面台形の高台を貼り付けている。高台での径は約12cmと復元した。これらの時期は厳密でないが、8世紀代でも後半を中心とする時期と考えられる。柱穴掘り方内からの出土であることから、本建物の構築は8世紀後半以降であると考えられる。

SB-16 (Fig. 50, PL. 9-1~4)

B・C、5・6区において検出した。多くの柱穴と攪乱によって壊されているが、おおよそ復元できる。SB-15の南側2mに位置する二間四間以上の建物である。もっとも南側の棟柱が不明であり、さらに桁が延長する可能性もある。主軸はN-13°-Wであり、SB-15とは5°の差がある。柱穴掘り方は建物主軸に沿った長方形をなすものが多いが、中には軸を異にするものや、橢円形に近いものもある。掘り方の長さは80~105cmに、幅は65~75cmにそれぞれ集中する。ほとんどの柱穴には柱痕があり、その径は20cm前後で揃っている。建物の規模は桁行約760cm、梁行480cmを測る。柱痕の中心で測った桁行の柱間は北から一番目までが188~193cmであり、三番目は175cmと177cmである。梁行方向の柱間は243cmと234cmである。

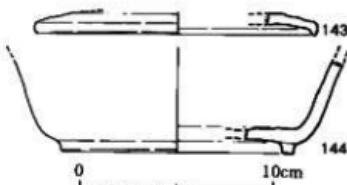


Fig. 49 第15号掘立柱建物出土遺物

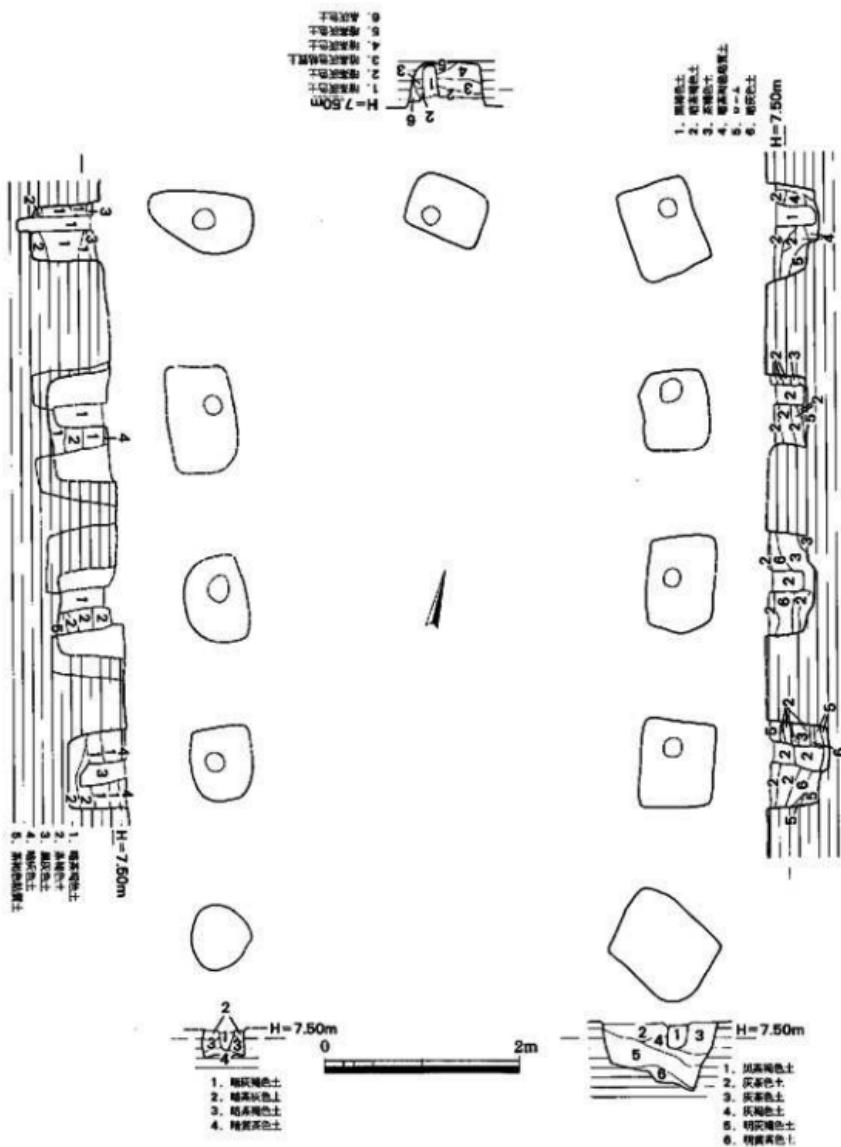


Fig. 50 第16号掘立柱建物 (SB-16) 実測図

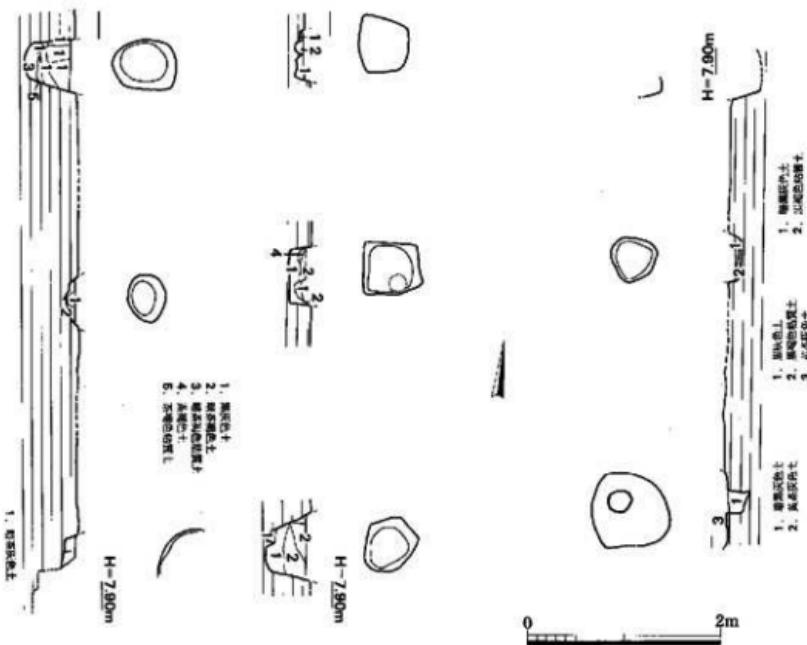


Fig.51 第17号掘立柱建物 (SB17) 実測図

## SB-17 (Fig.51)

B・C、5・6区において検出した。多くの柱穴と搅乱によって壊されている。SB-16と重複しているが、柱穴間の切り合いはない。二間二間の鉛直の建物である。やや不整形であるが、中心軸でみるとN-7°-Wである。柱穴掘り方は隅丸方形や不整円形があり、長辺で80~50cm、短辺で40cm程度を測る。柱痕を残す例があり、それは径17~22cmを測る。建物の規模は桁行450~500cm、梁行470~500cmを測る。

## SB-18 (Fig. 52)

D・E、5・6区において検出した。SC-09の東側に位置している。二間二間以上の建物である。南側は調査区外に延びると考えられる。現存する柱痕は5個である。建物はやや歪むがN-9°-Wにとる。削平のために掘り方の底面のみ遺存する。柱穴の掘り方は不整円形から整円形を呈し、長辺は58~36cm、短辺は53~35cmを測

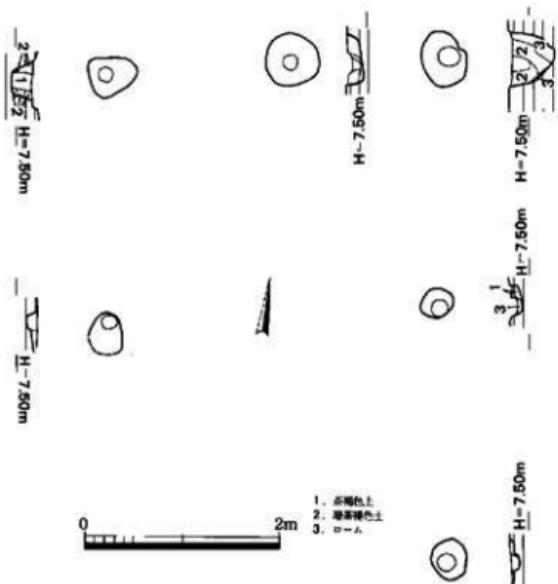


Fig. 52 第18号掘立柱建物 (SB18) 実測図

る。すべてに柱痕を残し、径15~18cmを測る。建物の規模は桁行518cm以上、梁行353cmである。柱間は桁行が255cm~262cmであり、梁行は163cmと190cmを測る。

## (5) その他の遺構と遺物

## 柱穴 (Fig. 53~55)

これまでに示した各遺構のほかに、調査区内でおおよそ650に達する柱穴を検出した。すべてが建物を構成する柱穴であるかは疑問であるが、平面形が方形や正円形を呈し、柱痕を有するものが多く、かなりのものがなんらかの構造物を構成するものとみてよからう。柱穴の分布は1~3区にはほとんど検出されず、4区から西に向って急増する。これは本来の分布状態を示すとは考えられず、東側が1m以上の削平を受けたために失われたためと考えられる。検出した柱穴では建物を構成した柱穴以外にも2~3の柱穴に柱筋の通る例もあるが、建物としての抽出は困難であった。

柱穴の時期を知るのはかなり困難であるが、ここでは出土遺物を目安に通観してみたい。ほとんどの柱穴内からはなんらかの遺物が出土しているが、ある程度時期を判断できる例は364しかない。それぞれの柱穴内遺物のなかでもっとも新しい時期を示す遺物を、その柱穴の築造時期と仮定して分類すると次のようになる。1) 弥生時代129例(35.4%)、古墳時代188例

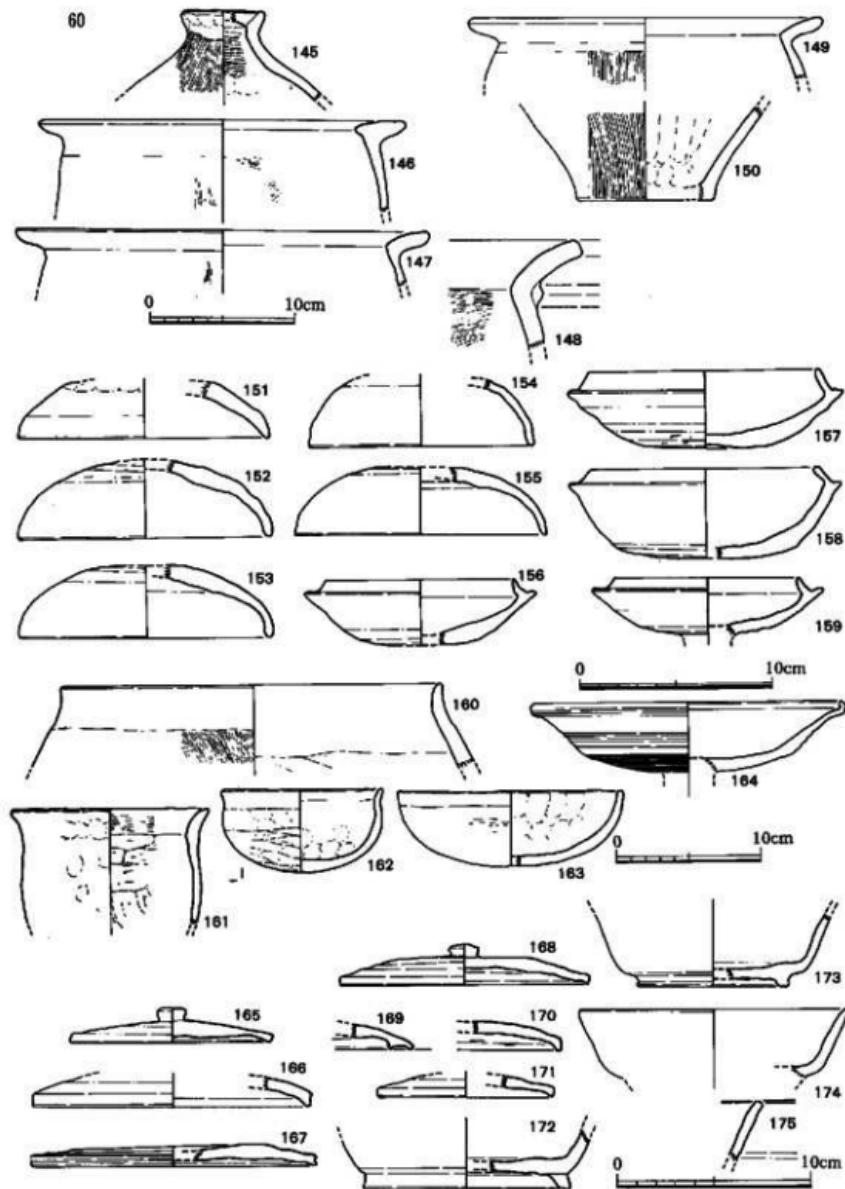


Fig.53 柱穴出土遺物(1)

(51.6%)、古代43(11.8%)、中世4(1.1%)。これらは少ない遺物からの検討であり、あくまでこの時期比定はそれぞれの柱穴の築造時期の上限を示すに過ぎない。しかし、この数値は先に示した本調査区における各遺構の数量と共通しており、おおまかには遺構分布、密度を反映していると考えられる。さらに各時期を詳細にみると、弥生時代は中期が26例、後期が54例ある。古墳時代では前半～中頃が極端に少なく、同後期(6C代)112例、末(7c代)10例となる。古代では8世紀代40例、9世紀代3例となる。これからみると7世紀代の減少を除くと、弥生時代後期と古墳時代後期の二時期をピークとする柱穴の増加を伺うことができる。これは本調査地点の北方約500mの位置にある比恵跡群第18次調査地点の柱穴の様相と異なり、この場所独自の土地利用の変化を現わしていると考えられる。

柱穴内から出土した遺物には弥生土器、須恵器、土師器、磁器、土製品、石製品、石器、金属器などがある。弥生土器には蓋(145)、壺(146～150)がある。これらは中期前半(145・146)、中期後半(147～150)、後期(148)などがある。須恵器のうち古墳時代のものには環蓋(151～155)、环身(156～158)、高环(159)がある。古代の須恵器には环蓋(165～171)、环身(172～175)、硯(176)がある。硯は低平な蓋状のもので、幅4cm、高さ1cmほどの高台を貼り付けている。

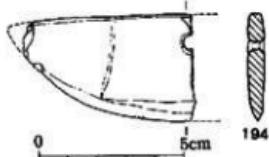


Fig. 54 柱穴出土遺物(2)

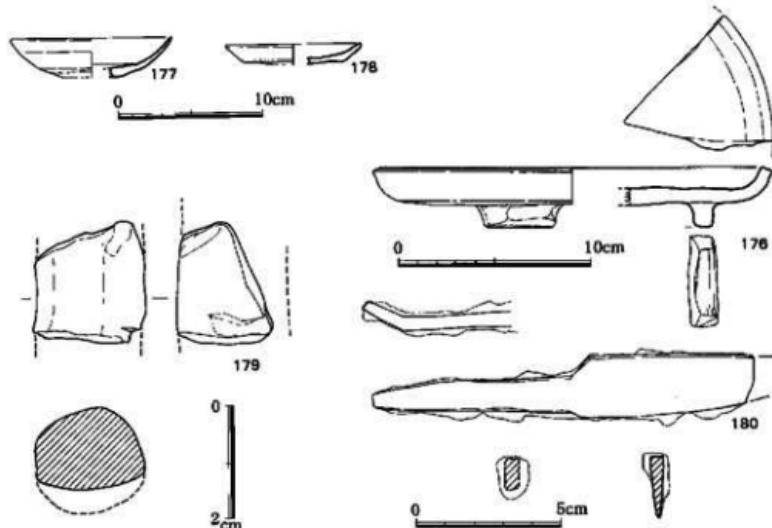


Fig. 55 柱穴出土遺物(3)

内面に海陸の境はなく、中央部分は研磨痕とわずかな墨痕が認められる。図では円形に復元しているが、形態から風字觀となる可能性が高い。土師器では古墳時代の壺（160・161）、碗（162・163）、高坏（164）がある。高坏はロクロ造りであり、須恵器を模倣したものである。ほかに中世の小皿（178）がある。磁器には白磁皿（177）がある。土製品として鋳型の中子とみられるもの（179）がある。石器には石庖丁（194）などがある。金属器には鉄製の刀子（180）がある。

#### 第4層群包含層出土の土器 (Fig. 56)

第10次調査地点で検出された谷状の落ち込みの南側にあたり、第10次調査地点24区の黒色土層とほぼ対応する土層中から、夜臼II式と板付I式土器が出土している。第10次調査地点とくらべ、土器の出土量は少なく、図示したもの以外には、小形壺の胴部小片が1点あるのみで、他は胴部の細片ばかりである。また、第10次調査地点の土器と比較して、板付I式の量が多く、やや新しい様相が読みとれる。器形には壺・鉢・壺・高坏がある。

181～185は、夜臼II式の壺である。185を除き、細片のために器体の傾きは不確実である。185は外開き気味の筒状の頭部をもち、口縁端部をわずかに折り曲げる。内外ともベンガラを塗布している。186は板付I式の小形壺である。胴部中位の沈線の上方に羽状文を部分的に施す。外面は斜め方向の研磨調整で仕上げられる。

187は高杯の杯と脚の接合部付近の破片である。

188は夜臼II式の楕形の小形精製鉢である。口縁部を成形の最終段階に強く横ナデを施すために、若干反転気味の口縁端部となっている。内外面ともにベンガラを焼成後に塗布している。

189～191は板付I式の壺の底部破片である。190は焼成後に底部穿孔を施し、瓶としている。192は鉢と考えられる。

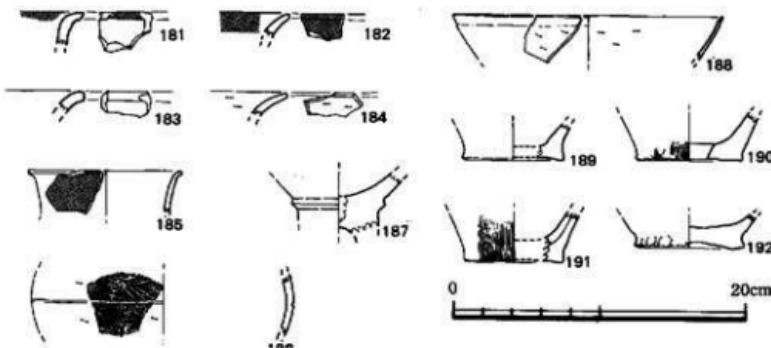


Fig. 56 包含層出土遺物

## 6.まとめ

本調査地点は那珂丘陵の西側端部にあたる。これまでに実施された那珂遺跡群における調査でももっとも面積の広いものであった。しかし、調査区の東半分は造成などにより相当の削平を受け、井戸や貯蔵穴の底部など深い造構しか遺存しないことが判明した。しかし、西側では多数の造構や包含層が遺存していた。ここではそれらの成果に基づき、本調査区の時期別の動向についてまとめてみたい。

弥生時代前期はまず、西側斜面に形成された第4層群の包含層がある。ここでは夜白Ⅱ式と板付Ⅰ式の遺物が出土している。同様の包含層は北側に隣接する第10次調査地点にもあり、遺物量も北側が多い。この時期の台地上の造構は未検出であったが、本調査区から北側に分布している可能性が高い。次に調査区東端のSK-01がある。これは比較的大型の貯蔵穴であり、2回の床面の貼り替えが認められた。出土遺物から板付Ⅱ式の中段階に比定され、前期前半を通じて一帯に集落の成立があったと考えられる。

弥生時代中期の造構は明確でないが、SK-08は小型の貯蔵穴であり、この時期と推定される。他に柱穴や包含層から中期前半から中期末に至る遺物が出土しており、ふたたびこの時期から集落の形成が始まったとみられる。弥生時代後期には調査区中央部分に井戸群が形成される。その他の造構は柱穴以外に明確でないが、厚い包含層もあり、純統的な集落が存在したと考えられる。井戸は5基あり、後期前半からSE-06・SE-05→SE-19→SE-03→SE-04の順に設けられ、後期後半までにおおよそ一時期に一つの井戸が設けられていたとみられる。

古墳時代前期は集落が一旦途絶え、後期になってふたたび集落の形成が始まる。7棟の竪穴式住居跡を確認したが、いずれも保存状態が悪い。他に多くの柱穴を検出した。これらは6世紀後半から7世紀前半にかけてのものである。隣接する第10次調査地点の大型建物との関係も考慮すべきである。

なお、竪穴式住居跡SC-20において確認した焼土面は移動式竈の設置造構と考えた。住居内床面における位置と構造については類例を集成し、再度検討したい(Fig.57)。

古代には掘立柱建物と井戸がみられる。建物は比較的大

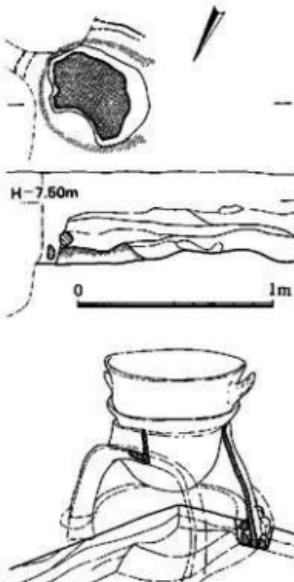


Fig.57 第20号竪穴式住居跡  
(SC-20) 内の移動式竈  
設置造構とその後元図

型であり、真北を意図した施設となっている。また、建物の建築に先立って大規模な地山整形を行なった可能性が高い。井戸は円形で井筒を有するものであり、埋土から越州窯青磁、灰釉瓶、円面鏡などが出土している。これらは8世紀後半から9世紀前半の間に位置付けられるものである。遺構や遺物からみて一般的な集落とは考えられないが、その性格については今後の周辺の調査成果を踏まえた、慎重な検討が望まれる。

Tab. 2 第14次調査出土遺物観察表

( ) は推定値 幅口径・高さの単位はcm

番号	出土遺物	器種	遺存状態	口径	基高	遺物の特徴
1	SE-03	壺	口縁、脚部上半1/2欠損	12	18.5	外縁は口縁部が壊ナデではミガキ、内面は指オサエの後剥ハケ
2	SE-03	短頸壺	完存	8	13.5	外縁は上半部が壊ハケ下半部が壊ミガキ、内面は指オサエ後ナデ
3	SE-03	壺	底部のみ	—	—	外縁は壊ハケ後ミガキ、内面はハケ
4	SE-03	高杯	環壠1/5残存	(36)	—	外縁は壊ハラミガキ、内面は壊ハケ後剥ハラミガキ
5	SE-03	高杯	輪部上半、环壠下半1/2残	—	—	外縁は壊ハラミガキ、輪部内面はシボリ、ナデ、环壠はナデカミガキ
6	SE-03	砾台	上部1/2残存	16	—	外縁は壊ハケ、内面は口縁部が壊ハケ、後はヘラ削り
7	SE-04	壺	断端完存	—	—	外縁は上部がハケ後剥ミガキ、下半部は壊ミガキ、内面は壊ハケ
8	SE-06	壺	口縁、肩部1/2~1/3欠損	(35)	27.5	外縁は壊ハケ、内面は壊部が指オサエ・ナデ、肩部がヘラナデ後ナデ
9	SE-07	土師器皿	完形	14.1	1.8	内外面とも壊ナデ、底部はナデ剥離
10	SE-07	土師器皿	完形	16	2.5	外縁に堅く横ナデの凹凸がある、外底は板状圧痕が見られる
11	SE-07	土師器皿	小片	(16)	11.6	内外面とも壊ナデ剥離
12	SE-07	土師器皿	2/3残存	(15)	11.5	内外面とも壊ナデ、外底はヘラ切削調整
13	SE-07	土師器皿	1/5残存	(13)	—	内外面とも壊ナデ
14	SE-07	土師器皿	1/3残存	(12.7)	13.2	内外面とも壊ナデ、内外底とも未調整
15	SE-07	土師器皿	1/3残存	(12.8)	14.3	内外面ともナデ、内底はナデ、外底は未調整
16	SE-07	土師器皿	2/3残存	(12.8)	13.5	内外面とも壊ナデ、内底はナデ、外底は未調整
17	SE-07	土師器皿	1/3残存	(12.5)	14.1	内外面とも壊ナデ、内外底とも磨滅の為、調整不明
18	SE-07	土師器皿	1/2残存	(13.4)	14.2	内外面とも壊ナデ、内底はナデ、外底は未調整
19	SE-07	土師器皿	1/2残存	(13.4)	13.5	内外面とも壊ナデ、外底部は板状圧痕の上に壊ナデ
20	SE-07	土師器皿	3/4残存	(13.5)	13.5	内外面とも壊ナデ、内底はナデ、外底は未調整
21	SE-07	土師器皿	完形	13.7	3.5	内外面とも壊ナデ、外底部にヘラ記号あり、内底はヘラミガキ
22	SE-07	土師器皿	底盤欠損	(13.3)	3.5	内外面とも壊ナデ、外底はヘラ削り
23	SE-07	土師器皿	完形	(13.8)	(3.1)	内外面とも壊ナデ、外底は未調整
24	SE-07	土師器皿	2/3残存	(13.8)	(3.0)	内外面とも壊ナデ、内底はナデ
25	SE-07	土師器皿	3/4残存	(12.9)	(3.0)	内外面とも壊ナデ、内底は指圧痕で外底にはすこ状圧痕が見られる
26	SE-07	土師器皿	1/3残存	(15.4)	—	内外面とも壊ナデの上からヘラミガキ、内底はヘラ削り、外底部に墨書文字有り「大」
27	SE-07	土師器皿	完形	14.9	3.8	内外面とも壊ナデ、ミガキ、外底はヘラ切り未調整
28	SE-07	土師器皿	完形	15.9	3.5	内外面とも壊ナデ、外底は未調整
29	SE-07	土師器皿	2/3残存	(14.2)	13.7	内外面とも磨滅で調整不明、内底はナデ、外底はヘラ切り
30	SE-07	土師器皿	完形	15.5	3.8	内外面とも壊ナデ、内底はナデ剥離
31	SE-07	土師器皿	2/3残存	(16.0)	14.2	内外面とも壊ナデ、内底はナデ、外底は粘土質板未調整
32	SE-07	上部器皿	—	(15.7)	—	内外面とも壊ナデ、外底は板状圧痕の上にナデ調整をした後墨書文字有り「大」
33	SE-07	土師器皿	底部のみ	—	—	底部は壊ナデ、外底部はナデ
34	SE-07	土師器皿	底部のみ	—	—	内外底とも壊ナデ、内底部に磨状圧痕あり、外底部に墨書文字有り「大」

番号	出土遺構	器種	進存状態	口径	器高	遺物の特徴
35	SE-07	土器基盤	上半部1/6残存	15.2	—	内外面とも横ナデ、外面の一部にヘラミガキの痕跡有り
36	SE-07	土器基盤	上半部1/6残存	20.0	—	外面はヘラミガキ、下部にコナ状圧痕が残る
37	SE-07	土器基盤	上半部1/6残存	20.0	—	内外面とも横ナデの上からヘラミガキ
38	SE-07	土器基盤	底部と胴部下半	—	—	内底部はナデ、外底部は横ナデ
39	SE-07	土器基盤	底部のみ	—	—	底底により調整不明
40	SE-07	土器基盤	底部のみ	—	—	内底部はナデ、外底部は横ナデ
41	SE-07	土器基盤	底部と胴部下半	—	—	内外面とも横ナデ、内底部はナデ、外底部はヘラ切り未調整
42	SE-07	土器基盤	1/2残存	26.0	6.0	内外面とも横ナデ、内底部はナデ
43	SE-07	土器基盤	1/2残存	26.7	—	内外面とも横ナデ、内底部はナデ、外底部は未調整
44	SE-07	土器基盤	高台と胴部下半	—	—	高台内外面とも横ナデ
45	SE-07	土器基盤	脚部のみ	—	—	外面は広径13に面取りされている
46	SE-07	土器基盤	1/4残存	(33.0)	(1.0)	内外面とも横ナデ、上部はヘラ削り
47	SE-07	地土層	1/4残存	26.0	—	外面は磨拭で調整不明、内面は横ミガキ
48	SE-07	土器基盤	ほぼ完形	(5.0)	(6.0)	口縁の内外と外面はハケ目、内面はヘラケズリ
49	SE-07	土盤	先端を欠く	—	—	—
50	SE-07	灰陶陶瓶	頸部と胴部上半	—	—	外面は施釉、内面は横ナデ
51	SE-07	地土層	底部欠損	14.4	—	内外面とも施跡有り
52	SE-07	陶器円筒	脚部欠損 口周の1/3残存	25.0	—	内外面とも横ナデ
53	SE-07	砾石	—	3.5	3.9	珪質岩
54	SE-07	平瓦	—	—	—	凸面はナゲ調整だが部分的に斜格子文を残す、凹面は布目
55	SE-07	須恵器環	底部のみ	—	—	内外面とも横ナデ
56	SE-07	須恵器底	底部と胴部下半	—	—	外面は横ナデ、内面はナデ
57	SE-07	動物の骨板	—	—	—	杉材
58	SE-07	動物の骨板	—	—	—	杉材
59	SE-07	動物の骨板	—	—	—	杉材
60	SE-07	動物の骨板	—	—	—	杉材
61	SE-07	動物の骨板	—	—	—	杉材 内面に漆を擦布
62	SE-07	動物の骨板	—	—	—	2個の穿孔有り
63	SE-07	加工材	—	—	—	杉
64	SE-07	杭	—	—	—	径3 cm程度
65	SE-07	手斧の柄	—	—	—	櫛材
66	SE-07	機器	一端を欠く	—	—	柘麻材
67	SE-19	盃	口縁・胴部未接合	27.0	(27.0)	外面は口縁が横ナデ、胴部は縦ハケ後ナデ、内面は腹部がハケ調整
68	SE-19	甕	胴部上半～口縁2/3残	19.0	21.8	内外面とも横ハケ、口縁の内面が横ナデ、外底部はハケ
69	SE-19	甕	胴部上半～口縁1/2残	(37.0)	(31.0)	内外面ともハケ、口縁内面は横ハケ外面は横ナデ、底部は指オサエ・ナデ
70	SE-19	盃	口縁1/3残存	32.0	—	外面は横ナデ、内面は縦ハケ後横ナデ
71	SE-19	盃	胴部中～下半2/3残	13.0	(13.0)	外面上部は縦ハケ下部は横ナデ、内面は縦ハケ後ナデ
72	SE-19	器台	ほぼ完形	13.7	13.2	外面上部は縦ナデ下部は斜めハケ後ナデ、内面は上部が横ハケ後ナデ
73	SE-19	器台	軸部完存 脚部1/3残存	—	—	外面は縦ナデ、内面は施オサエ・シボリ、底部は横ハケ後ナデ
74	SE-19	甕	口縁1/3胴部1/4残存	33.0	—	外面は縦ハケ後ナデ、内面はヘラによる斜めハケ

番号	出土遺物	基準	遺存状態	口縁部	高さ	遺物の特徴
75	SE-19	壺	口縁1/4残存	37.0	—	外表面は縦ハケ後ナデ、内面と口縁は横ハケ後ナデ
76	SE-19	長頸壺	口縁1/次復	(9.0)	18.0	外表面は縦ハケ、肩部下半に一部横ハケ、内面は肩部が指オサニ後ナデ
77	SE-19	長頸壺	肩部1/4残存	—	—	外面上部はヘラミガキ、下半は縦ハケ、内面は上部が指オサエ・ナデ
78	SE-19	長頸壺	肩部2/4残存	—	—	外面上部はヘラミガキ、下半と内面は指オサエ・ナデ
79	SE-19	壺	肩部下半欠損	(22.0)	—	内外面ともハケ調整、突唇は横ナデ
80	SE-19	壺	口縁1/肩部1/4残存	(22.0)	—	内外面ともハケ調整、突唇部の上下1cmは貼り付け後剥離ナデ
81	SE-19	壺	底部のみ	—	—	外表面は指オサエ・ナデ、内面は底部が指オサエ・肩部が縦ハケ、底部ハケ
82	SE-19	壺	肩部下半一部欠損	13.5	29.0	外面上部は縦ハケ下部縦ハケ後ヘラ削り、内面は上部が縦ハケ下部横ハケ
83	SE-19	壺	口縁部欠損 肩部下半欠損	12.0	—	外表面は縦ハケで一部横ハケ、内面は指オサエ・後横ハケ
84	SE-19	壺	口縁の1/5残存	15.0	—	口縁と突唇はナデ後キザミ、外唇は横ハケ後剥離ナデ、内面は横ハケ
85	SE-19	壺	口縁1/10残存	16.5	—	口縁はナデ後キザミ、突唇は後ナデ
86	SE-19	壺	口縁1/4残存	15.0	—	内外面ともハケ調整、口縁は外表面が指オサエ、内面が指オサエ後横ハケ
87	SE-19	壺	口縁1/6肩部1/4肩部1/8	20.0	—	肩部は内外面ともハケ調整、口縁部は内外面とも横ナデ
88	SE-19	壺	口縁部のみ	20.0	—	外表面は斜めハケ、内面は横ハケ
89	SE-19	壺	口縁1/4肩部1/5残存	15.0	—	外表面は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ、口縁部は横ナデ
90	SE-19	鉢	口縁1/4残存	19.0	—	外面上部は縦ハケ、下半部と内面は指オサエ・ナデ、口縁外周は横ナデ
91	SE-19	壺	底部のみ	—	—	外表面は縦ハケ後ナデ、内面と外底部は指オサエ・ナデ
92	SE-19	壺	底部のみ	—	—	外表面は縦ハケ、内面と底部は指オサエ・ナデ
93	SE-19	高环	口縁1/4残存	—	—	外表面は横ナデ後斜めのミガキ、内面は横ハケ後縦のヘラミガキ
94	SE-19	高环	口縁1/8残存	25.0	—	外表面はヘラミガキ、内面は横のヘラミガキ
95	SE-19	石底丁	1/3残存	—	—	安山岩質ホルンシュイス
96	SK-01	壺	口縁1/8残存	—	—	内外面とも横ナデ
97	SK-01	壺	口縁1/4残存	—	—	口縁下に段が通る、外底は横位の研磨、内面は横ナデ
98	SK-01	壺	口縁のみ	64.0	—	口縁下にあまい段が通る、内外面とも荒れが通み、謹慎の子細不規
99	SK-01	壺	口縁のみ	(39.0)	—	口縁下に沈線状の段が通る、内外面とも横ナデ
100	SK-01	壺	ほぼ完形	60.0	67.0	箱型の小形品、外面は研磨、内面はナデ、肩との境に接合による段
101	SK-01	壺	肩部のみ	—	—	肩部にヘラ括きの4条の浅い平行沈線文、外面は横位の研磨
102	SK-01	壺	肩部のみ	—	—	外表面は横位の研磨、内面は荒れが通む、つくり自体は丁寧
103	SK-01	壺	底部のみ	—	—	肩部で2枚貝で仕切りに重複文を施文、口縁下と肩に明顯な段
104	SK-01	壺	肩部下半を欠く	37.0	—	口縁下端にハケ・原体を押抜してキザミ、外面はハケメ、煤が付着
105	SK-01	鉢	肩部下半を欠く	50.0	—	口縁下に粘土貼付けの段、周辺は横ナデ、他は内外ともも亂雜な研擦
106	SK-01	鉢	完形	61.0	43.0	口縁下に明顯な段、器面調整は基本的には底から口縁へ向かう研擦
107	SK-01	鉢	完形	65.0	39.0	口縁下にあまい段、器面調整は基本的には研磨、内底面には指潤痕
108	SC-09	須恵器环身	口縁の1/4残存	18.0	—	内外面とも横ナデ、外面上部にヘラ削りが見える
109	SC-09	須恵器环身	口縁の1/10残存	18.0	—	内外面とも横ナデ
110	SC-09	須恵器环身	口縁幅3cm残存	—	—	内外面とも横ナデ
111	SC-09	須恵器环身	口縁1/4残存	—	—	内外面とも横ナデ
112	SC-09	須恵器环身	口縁幅3cm残存	—	—	内外面とも横ナデ
113	SC-09	須恵器环身	口縁幅2cm残存	—	—	内面と外面受け部は横ナデ、外面は横時発泡
114	SC-09	須恵器环身	口縁1/9残存	—	—	内外面とも横ナデ、外面上部はヘラ削り

番号	出土遺物	器種	遺存状態	口径	器高	遺物の特徴
115	須恵器环身	口縁1/6残存	(11.3)	—	—	内面と外面の受部は横ナデ、外面は自然形
116	須恵器環	口縁1/8残存	(11.8)	—	—	外外面とも横ナデ、内面は灰を被っている
117	須恵器環	幅5cm残存	—	—	—	外表面はカキ目、内面は横ナデ
118	須恵器環	口縁1/3残存	(16.0)	—	—	外表面は横ナデ後凹線、内面は横ナデ、ヘラ記号有り
119	土師器環	口縁1/3残存	(17.9)	—	—	外表面は横ナデ後ナデ、内面は横ナデ
120	土師器環	脚部中央1/2欠損	9.4	14.0	—	口縁内面はミガキ外表面は横ナデ、脚部内面はヘラ削り、底は指オサエ・ナデ
121	土師器環	把手のみ	—	—	—	指オサエ・ナデ
122	須恵器环身	口縁幅3cm残存	—	—	—	内外面とも横ナデ
123	SC-20	須恵器环身	口縁幅3cm残存	—	—	内外面とも横ナデ
124	SC-20	土師器環	口縁1-脚部1/6残存	(12.9)	—	口縁内面は横ナデ内面は横ナデ
125	SC-20	電	小破片	—	—	内外面とも指オサエ・ナデ、口縁は横ナデ
126	SC-20	瓦形土器	ほぼ完形	12.5	19.0	外表面は斜めヘラナデ、内面はヘラ削り後ヘラナデ、口縁は横ナデ
127	SC-20	土師器環	把手のみ	—	—	指オサエ・ナデ
128	SC-21	須恵器环身	口縁幅3cm残存	—	—	内外面とも横ナデ、外面上部はヘラ削り
129	SC-21	須恵器环身	口縁幅2cm残存	—	—	内外面とも横ナデ
130	SC-21	須恵器環	口縁幅2cm残存	—	—	内外面とも横ナデ
131	SC-21	須恵器環	把手のみ	—	—	指オサエ・ナデ
132	SC-21	滑石製玉	—	—	—	—
133	SC-21	滑石製玉	—	—	—	—
134	SC-22	土師器環	口縁1/9残存	(13.2)	—	内外面とも横ナデ
135	SC-22	須恵器环身	口縁幅3cm残存	—	—	内外面とも横ナデ、外底底部はヘラ削り
136	SC-22	須恵器环身	口縁幅3cm残存	—	—	内外面ともナデ
137	SC-22	須恵器環	口縁1/7残存	(8.5)	—	外表面はカキ目、内面は横ナデ
138	SC-21-22	須恵器环身	1/2欠損	(11.8) (4.0)	—	内面と外下面下半部は横ナデ、外面上部は回転ヘラ削り
139	SC-21-22	須恵器环身	口縁～底部1/4残存	(12.2)	—	内部と外上面がナデ調整、外底底部は回転ヘラ削り
140	SC-21-22	須恵器环身	口縁幅2cm残存	(11.0)	—	内外面とも横ナデ
141	SC-21-22	土師器環	把手のみ	—	—	指オサエ・ナデ
142	SC-21-22	土師器環	把手のみ	—	—	指オサエ・ナデ
143	SB-15	須恵器環	口縁1/10残存	(14.5)	—	内外面とも横ナデ
144	SB-15	須恵器環	底部1/6残存	—	—	内外面とも横ナデ、外底部はヘラ削り後ナデ、脚部指オサエ・ナデ
145	C-6P-13	蓋	1/8残存	—	—	外表面は横ナデ、内面は横ナデ、外面上部に指オサエ・ナデ
146	A-7P-16	蓋	口縁1/10残存	25.0	—	外表面は横ナデ後横ナデ、内面は横ナデ後指オサエ・ナデ、口縫横ナデ
147	D-4P-32	蓋	口縁1/10残存	28.2	—	外表面は横ナデ後ナデ、内面は横ナデ
148	B-6P-6	蓋	口縫幅10cm残存	—	—	内面は横ナデ後ナデ、口縫外表面は指オサエ・ナデ、突部は横ナデ
149	C-6P-13	蓋	口縁1/10残存	(24.1)	—	外表面は横ナデ、内面は横ナデ、口縫は横ナデ
150	B-7P-17	蓋	底部1/3残存	—	—	外表面は横ナデ、内面は指オサエ・ナデ
151	C-6P-46	須恵器环身	口縁1/6残存	(13.0)	—	内外面とも横ナデ、外面上部は指オサエ・ナデ
152	A-6P-25	須恵器环身	1/4残存	(13.2)	H.11	内外面とも横ナデ、外面上部はヘラ削り
153	B-5P-10	須恵器环身	1/6残存	(22.6)	(3.7)	内面と外下面下半部は横ナデ、外面上部はヘラ削り、ヘラ記号有り
154	C-7P-05	須恵器环身	1/8残存	(11.4)	—	内外面とも横ナデ、外面上部はヘラ削り

番号	出土遺物	器種	遺存状態	寸法等	基調	遺物の特徴	
						外	内
155	C-TP-65	須恵器环	1/8残存	(12.8)	D.6	内外面とも横ナメ、外面上部はヘラ削り	
156	A-6P-09	須恵器环	1/4残存	(9.8)	D.3	内外面とも横ナメ、外底底部にヘラ削り後ヘラ記号	
157	B-6P-11	須恵器环	全体の1/4残存	(11.8)	D.9	内外面ともナメ、外底底部へラ削り	
158	B-6P-38	須恵器环	全体の1/2残存	(11.9)	D.9	内外面とも横ナメ、外底底部はヘラ削り	
159	C-6P-13	須恵器环	环部の1/4残存	(9.9)	-	外面はヘラ削り後ナメ、内面底部ナメ、口縁横ナメ	
160	C-6P-57	土師器環	L縁1/10残存	(26.0)	-	外面は継ハケ、内面はヘラ削り、口縁横ナメ	
161	B-6P-5	甕	口縁1~胴部中央1/3残存	(18.5)	-	外面は指サエ・ナメ、内面上部は横ヘラ削り、下部は継ヘラ削り	
162	B-7P-17	土師器環	全体の1/3残存	(10.0)	D.6	外底底部はヘラ削り後ナメ、上部と内面は指サエ・ナメ	
163	A-6P-46	土師器環	口縁1/4残存	(15.4)	-	外面は横ナメガキ、内面は指サエ・ナメ	
164	C-7P-65	土師器環	环部1/4残存	(21.5)	-	外面上部はヘラによる凹痕下部はカキ目、内面はナメ調整	
165	B-7P-14	須恵器環	口縁端1/2欠損	(20.5)	D.75	外面はヘラ削り後横ナメ、口縁は横ナメ、つまる横ナメ	
166	D-7P-36	須恵器環	L縁1/10残存	(14.4)	-	内面と口縁は横ナメ、外面はヘラ削り	
167	D-7P-46	須恵器環	全体の1/4残存	(14.8)	-	外面はヘラ削り後ナメ、内面は指サエ・ナメ	
168	C-6P-35	須恵器環	全体の1/10残存	(12.8)	D.2	外面はヘラ削り後ナメ、内面はナメ、口縁は横ナメ	
169	C-6P-55	須恵器環	L縁端3 cm残存	-	-	内外面とも横ナメ、外面上部はヘラ削り	
170	B-7P-14	須恵器環	L縁端3 cm残存	-	-	外面上部はヘラ削り、L縁は横ナメ	
171	A-6P-09	須恵器環	L縁1/10~1/8残存	(9.8)	-	外面はヘラ削り後横ナメ、内面は横ナメ	
172	B-7P-15	須恵器環	底部1/3残存	-	-	外面は横ナメ、製造内面は横ナメ、底部はナメ調整、赤須恵器	
173	D-7P-266	須恵器環	底部1/3残存	-	-	全面に横ナメ	
174	D-7P-268	須恵器環	口縁1/4残存	(11.0)	-	内外面とも横ナメ	
175	C-6P-56	須恵器環	口縁幅3 cm残存	-	-	内外面とも横ナメ、内面に自然物がかかる	
176	B-7P-48	扁平碗	1/8残存	(20.8)	B.8	内面は横ナメ、副底指サエ・ナメ、底部底に板目	
177	B-7P-21	内縁	1/6残存	(11.1)	D.7	底部内面はナメ外面は凹痕削り	
178	B-7P-46	土師器環	1/4残存	(9.3)	D.2	外底底部へラ切り後ナメ、内面は横ナメ	
179	B-6P-58	巾子	-	-	-	径2 cm	
180	C-7.13	鉄製刀子	先端を欠損	-	-	-	
181	包合層	壺	口縁幅5 cm残存	-	-	内外面ともに横ナメ、口縁端の内外に赤色顔料が付着	
182	包合層	壺	口縁幅5 cm残存	-	-	外面は丁寧な横ナメ、内面は研磨、内外に赤色顔料が部分的に付着	
183	包合層	壺	口縁幅5 cm残存	-	-	内外面ともに横ナメ、部分的に赤色顔料が付着	
184	包合層	壺	口縁幅8 cm残存	-	-	内外面ともに横位の研磨、赤色顔料が付着、つくりは丁寧	
185	包合層	壺	L縁幅7 cm残存	(21.0)	-	帶製品、内外面ともに丁寧な横ナメ	
186	包合層	壺	断端のみ	-	-	調節中段に1条の沈線文、上方に羽状文を神狀工具で部分的に施文	
187	包合層	高杯	底端下半のみ	-	-	牙部と調節の縫に断面三角形凸部が進る、表面の黄れが進む	
188	包合層	鉢	口縁幅6 cmのみ	(36.8)	-	複数の帶製品、内外面ともに横位の研磨、赤色顔料が付着	
189	包合層	壺	底部小片	-	-	内外面ともにナメ、外底面はケズリ	
190	包合層	壺	底部小片	-	-	外面は指標で考え方メの後にナメ、外底面から抜成後に穿孔	
191	包合層	壺	底部小片	-	-	外面はハケメ、内面はナメ	
192	包合層	壺	底窓のみ	-	-	外底窓には指標圧痕、内面は窓面が薄く剥離	
193	A-7包合層	石底丁	2/3欠損	-	-	砂岩質ホルンフェルス	

## 第6章 第16次調査の記録

### 1. 調査の経過とその位置

1988年9月にアサヒビール博多工場より、工場敷地内にある清涼飲料水の工場建物の改築に伴う埋蔵文化財の事前審査願いが提出された。その場所は東光寺剣塚古墳の南東側50~100mの位置にあり、建物と貯瓶場に挟まれた幅2~8m、長さ50mの帯状の土地である。埋蔵文化財課では審査願いを受け、1988年10月に試掘調査を実施した。その結果、敷地内に弥生時代の壺棺墓を主体とする埋葬構造が多数遺存していることが確認された。その保存策について両者は協議を行なった。その結果、発掘調査を実施し、記録に残すこととなった。なお、併せて改築工場内、工場周辺の削削工事に伴い1988年11月より1989年2月にかけて数回の試掘、立会調査を実施した。特に調査地点西側に隣接する工場建物内は、壺棺墓の分布が予測されたために、工場内床面を除去して試掘したが、工場建築に際して旧地表から2m前後の削平がなされており、少量の壺棺片、須恵器片を採集したのみで遺構は存在せず、すでに破壊されたものとみられた。

なお、調査期間中に聞き取りを行なった結果、本工場が建設された1960年代以前の本調査地点と建物のある場所は雑木林であり、西側の貯瓶場は空地であったという。雑木林の中には低い土盛りをもつ近世墓が無数にあり、円礎を用いた墓碑が立てられていたという。しかし、その墓碑は本工場建築に際して集められ、東光寺剣塚古墳のわきに運び無縫仏として合葬したという。運ばれた墓碑を探査した結果、東光寺剣塚古墳の後円部東側に慶應年間の銘文をもつ墓碑を確認した。今回の調査範囲内の1~2区で20基程度の近世墓を検出したが、これらもその一部と考えられる。

### 2. 調査の概要 (Fig.58)

本調査地点は周囲を削平され、土壁状の土地として遺存していた。現在の道路面から1m程度高くなっていた。地表にはクロボク質の表土が遺存し、保存状態は予想以上に良好であった。

調査の方法は、本調査区がほぼ南北に長い敷地となっているために、敷地に沿って測量主軸線を設けた。さらにそれを北側から6m単位に区分し、1、2、3…区と呼称した。弥生時代壺棺墓は1~7区に分布しており、4区の溝SD-02を境に北側を北群、南側を南群とした。調査範囲が狭く、機械の使用が困難であったため、ほとんどを手作業とした。

検出した遺構は壺棺墓、木棺・土壤墓、土壙、溝3条、柱穴多数であった。

遺構の時期は弥生時代、古墳時代、古代、中~近世の4時期に分けられる。

弥生時代の遺構がもっとも多く、壺棺墓35、木棺・土壤墓14、土壙1がある。

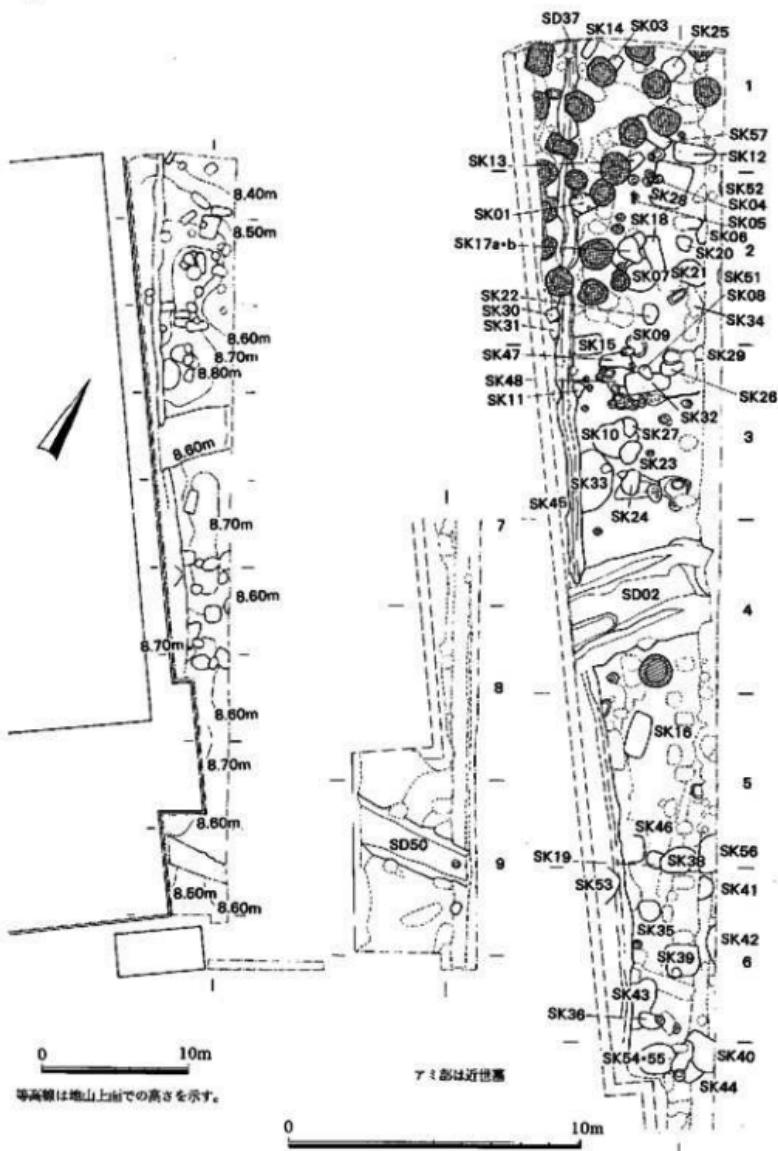


Fig.58 第16次調査地点全体図

古墳時代の遺構としては溝1、柱穴がある。溝SD-37は古墳時代初頭に位置付けられる。古代の遺構としては土壙1、溝1、柱穴などがある。

中、近世の遺構は土壙墓20、土壙5、溝1などがある。なお、この時期の遺構については溝以外を紙数の都合から省いた。

### 3. 調査の記録

#### (1) 銀棺墓

SK-01 (Fig. 59, PL. 11-7)

北群にあり、2区西寄りに位置する。西側の墓壙部分を溝SD-37に、東側の銀棺部分を近世墓により切られている。主軸をN-2°-Eにとる成人用銀棺であり、単棺使用である。墓壙は痛んでおり正確ではないが長さ約130cm、幅約100cmを測る。床面はほぼ水平であり、検出面から85cmの深さである。北側壁から50cm以上掘り込み、銀棺を差し込んでいる。埋置角度は下方へ約18°を測る。墓壙壁や床面に木蓋等の痕跡は確認できなかった。

#### 出土遺物 (Fig. 60)

出土した遺物は銀棺に使用した土器1点である。

1は後世の攪乱により大きく破損している。特に底部付近を欠いている。他は復元によりおおよそを知ることができる。器高90cm以上、口径71.9cmを測る。胴部最大径は胴部上位にあり、74cmを測る。口縁部の断面形は逆L字形を呈し、口唇部はわずかに外傾する。口縁直下に1条、胴部下半に2条の断面台形の突帯を巡らす。突帯は貼り付け後三方を強くナデている。全体に丁寧なヘラ、ナデ仕上げであるが、胴部下半の内外面に綴ハケ調整痕跡がある。

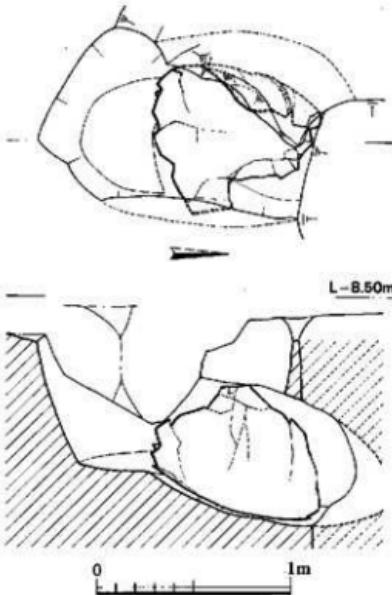


Fig. 59 第1号銀棺 (SK-01) 実測図

SK-03 (Fig. 61,  
PL. 11-8)

北群にあり、1区北側に位置する。南部の墓壙部分を近世墓に、上部の喪棺部分を最近の機乱に切られている。墓壙の下部と喪棺の胸部の一部が残存している。主軸はおおよそN-88°-Eにとる小児用喪棺である。遺存状態が悪く、墓壙は痛んでおり正確ではないが、長さ約43cm、幅48cmを測る。床面は胸部上方の方が低く、検出面から12cmの深さである。

出土遺物

出土した遺物は喪棺に使用された喪形土器1点である。口縁部と

底部を欠き、取り上げ Fig. 60 第1号喪棺出土遺物

時点で数cm以下に小片化しており、図化は困難であった。

SK-04 (Fig. 62 PL. 11-9)

北群にあり、2区北側に位置する。成人棺 SK-28の上部、墓壙埋土を掘り込んで設けられている。墓壙の平面形の識別が困難であり、東側を大きく掘りすぎてしまった。墓壙の下部と喪棺の胸部の一部が残存している。主軸はおおよそ N-56°-E にとる小児用喪棺である。遺存状態はあまり良くない。単棺か合口式喪棺かは不明である。墓壙の規模は長さ約42cm、幅約34cmを測る。床面は一部を掘りすぎたが、底部の方が低く、検出面から15cmの深さである。埋置角度は49°を測る。

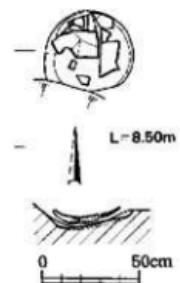
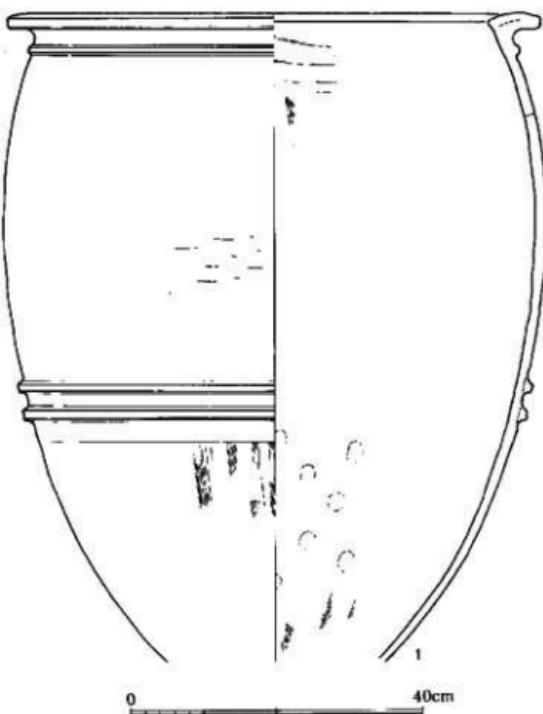


Fig. 61 第3号喪棺  
(SK-03)実測図

### 出土遺物 (Fig. 63)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器 1 点である。2 は底部以外の保存状態が悪く、小片化しており、全体を復元することはできなかった。器高約 30cm、口径 23.1cm と推定した。底径 8cm を測る。口縁部はく字形に外反し、口唇部はやや肥厚し面取り状となる。底部は平底である。外面は縦ハケ、内面は指オサエ、ナデである。

### SK-05 (Fig. 62, PL. 11-10)

北群にあり、2 区北側に位置する。成人棺 SK-28 の西側に検出した。上部を大きく削られているために保存状態は悪い。墓壙の下部と壺棺の胴部の一部が残存している。主軸をおおよそ N-46°-E にとる小児用壺棺である。合口式壺棺であり、上棺に広口壺、下棺に壺を使用している。墓壙

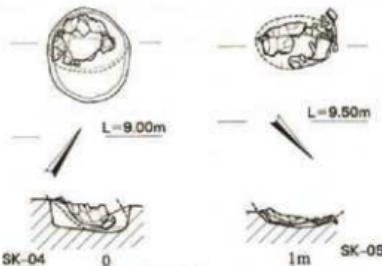


Fig. 62 第 4・5 号壺棺 (SK-04・05) 実測図

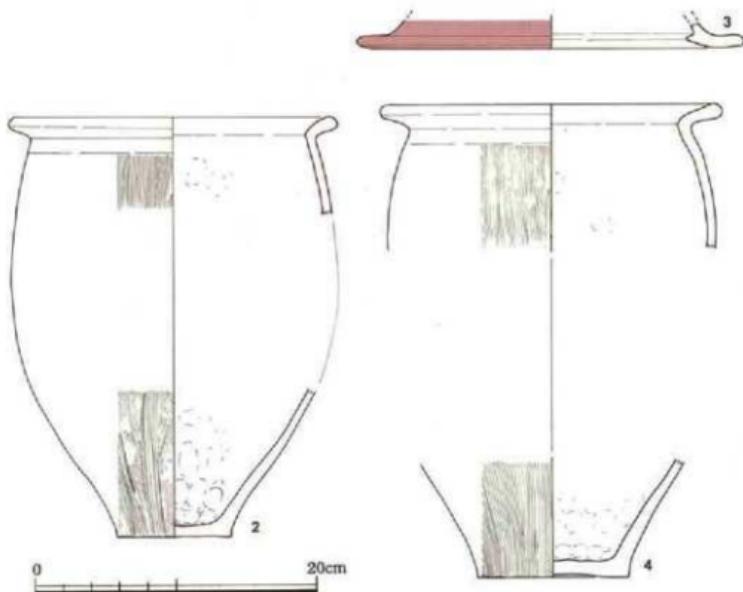


Fig. 63 第 4・5 号壺棺出土遺物

の規模は長さ約39cm、幅約28cmを測る。床面は胸部中央が低く、検出面から8cmの深さである。埋置角度は23°を測る。

#### 出土遺物 (Fig.63)

出土した遺物は甕棺に使用された広口壺1点、甕形土器1点である。3は口縁部5分の1程度が残存している。口縁部は鋸先状を呈し、口唇部は若干外傾する。復元口径は27.3cmを測る。口縁部外面に赤色顔料を塗布する。4は保存状態が悪く、特に胸部は小片化しており、全体を復元することはできなかった。器高約35cm、口径24.1cm、底径10.7cmを測る。口縁部はく字形に外反し、口唇部はやや肥厚し丸くおさまる。底部はわずかな上げ底である。外面は継ハケ、内面は指オサエ、ナデである。

#### SK-06 (Fig.64, PL.11-11)

北群にあり、2区東側に位置する。墓壙の東側半分は調査区外にあり、西側には電柱の掘り方とみられる擾乱により破壊されている。墓壙の下部と甕棺が部分的に残存している。主軸はおよそN-60°-Eにとる呑口式の成人用甕棺である。遺存状態はあまり良くない。墓壙の規模は長さ30cm以上、幅約85cmを測る。床面は部分的に遺存

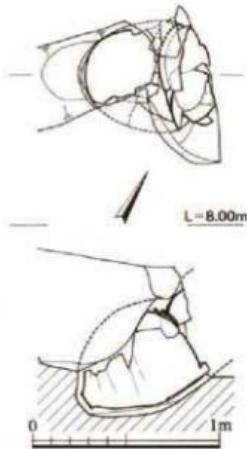


Fig.64 第6号甕棺 (SK-06)  
実測図

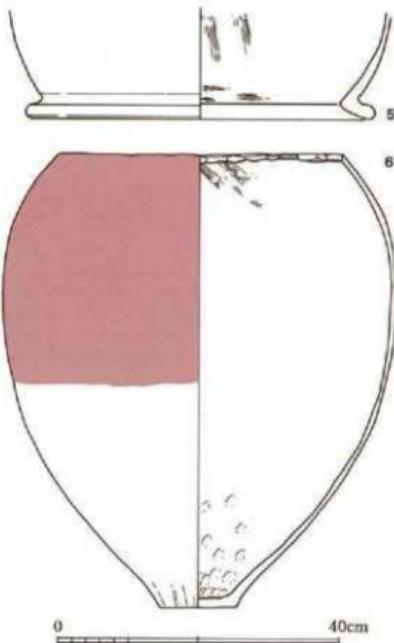


Fig.65 第6号甕棺出土遺物

し、検出面から58cmの深さである。墓壙の西壁を57cm掘り込み、甕棺を差し込んでいる。下棺の埋置角度は36°を測る。

#### 出土遺物 (Fig.65)

出土した遺物は甕棺に使用された甕形土器2点である。5は上棺に使用された甕である。口縁部から肩部までが残存している。口径は49.3cmを測る。口縁部はく字形に外反し、口唇部は肥厚し丸くおさまる。外面は丁寧なナデ、内面にはハケ調整が残る。6は下棺に使用された甕である。口縁部は打ち欠いてあり、現状での器高約65cm、打ち欠いた部分での径約40cm、底径11.1cmを測る。底部はほぼ平底である。胴部最大径は胴部上半にあり、55.6cmを測る。また、胴部上半の外面に赤色顔料の塗布痕があるが、これは口縁部を打ち欠く前に塗布されている。外面は丁寧なナデ、内面は斜めナデ後ハケ、下半は指オサエ、ナデである。

#### SK-07 (Fig.66, PL.12-12・13)

北群にあり、2区南側に位置する。北側で木蓋土壙墓SK-18を切り、墓壙の南側を近世墓などにより破壊されている。甕棺上半部は地表から比較的浅い位置にあったために細かく破碎している。主軸をおおよそN-5°-Wにとる成人用甕棺である。墓壙の規模は長さ約100cm以上、幅約102cmを測る。檢

出面から73cmの深さである。墓壙の北壁を約40cm掘り込み、甕棺を差し込んでいる。ただし、土壤墓SK-18の土壤下部に達しているために、掘り方が不明瞭であった。その埋置角度は51°を測る。本甕棺は調査開始時には单棺と考えていたが、棺内部に中型の甕が1個体入り込んでいた。これは口縁部を上に向け、棺底面に近い位置に出土した。出土状況や甕の大きさからみて、上甕が落ち込んだとは考え難い。むしろ、本甕棺の上部に設

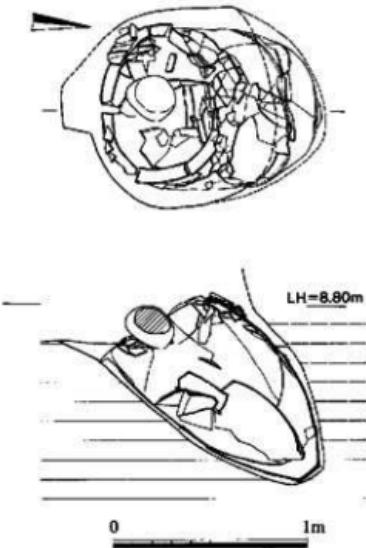


Fig.66 第7号甕棺 (SK-07) 遺構図

けられた小児棺が、内部へずれ落ちたと考えた方が理解しやすい。ただし、棺内埋土が少ない段階で落ち込んだ点に問題が残る。また、別個体の甕片が本甕棺の口縁部に沿って点在している。これは甕の胴部より上半の破片であり (Fig.68)、蓋として使用されていたものとみられる。

なお、棺内埋土の上部に人頭大の花崗岩の円礫が1個検出された。調査時点はこれに標石の可能性を考えた。しかし、先述したとおり、かつて周辺に点在していた近世墓には円礫を用いた墓碑があったという。甕内部の円礫は、工場内に現存する墓碑と石材、大きさなどが共通している。したがって、本例は甕棺に伴う標石ではなく、近世墓の墓碑が落ち込んだものと考えられる。

#### 出土遺物 (Fig.67・68)

出土した遺物は甕棺に使用された甕形土器3点である。この他に炭化はできなかったが、小型の長頸甕1個体分がある。外面に赤色顔料を塗布したもので、棺内埋土中から出土した。7はほぼ完全に復元できた。胴部に膨らみの少ない長胴形のものである。器高は117.

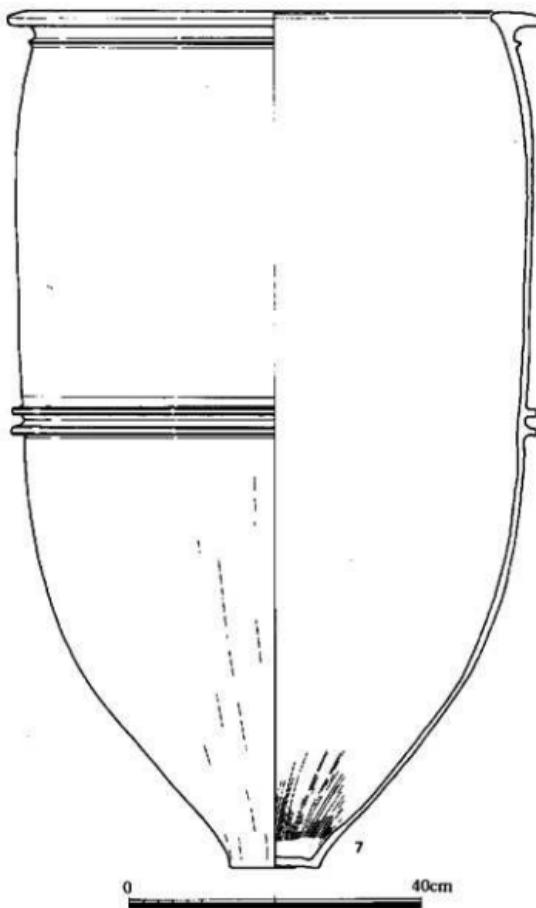
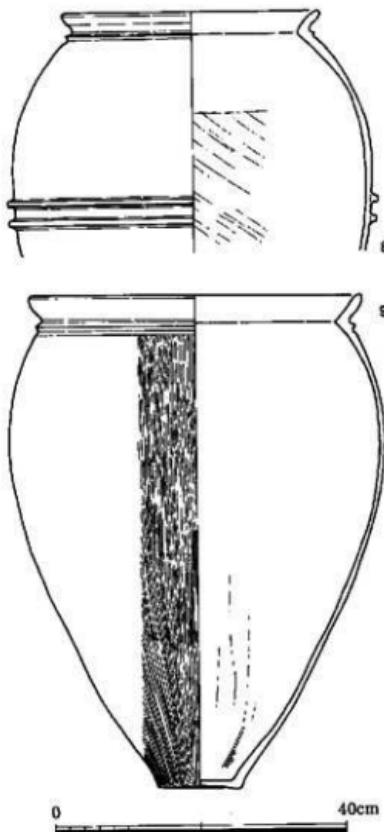


Fig.67 第7号甕棺出土遺物(1)

2cm、口径は73.3cmを測る。胴部最大径は口縁部下約20cmの位置にあり、71.3cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、口唇部は若干下がる。口縁直下に断面三角突帯1条、胴部に断面コ字状突帯2条をもつ。外内面は丁寧なナデであり、内面下部にはハケ調整が残る。底部は径約12.2cmであり、浅い上げ底である。9は7の棺内から出土したものである。ほぼ完形に復元できた。器高67.7cm、口径46.1cmを測る。胴部最大径は胴部上位にあり約52cmを測る。口縁部はく字形を呈し、口唇部は肥厚し、丸くおさまる。底部は径11.6cmでわずかに上げ底である。外面は継ハケ、口縁部～内面は丁寧なナデである。8は7の口縁部付近に密着し点在して出土したものである。接合の結果、壺胴部上半の3分の1程度の破片となつた。図はそれから復元したものである。現存高33.2cm、口径34.8cmを測る。胴部最大径は胴部中位にあり約49cmを測る。口縁部はく字形を呈し、口唇部は薄く丸くおさまる。口縁直下に断面三角突帯1条、胴部に断面台形の突帯2条をもつ。外内面は丁寧なナデである。

#### SK-08 (Fig. 69, PL. 12-14)

北群にあり、3区東側に位置する。東側半分は土壤墓SK-32の埋土上にあり、これを切る。南側を新しい掘り方により破壊されている。遺構検出段階で上壺の半分は存在せず、かなりの削平が行なわれたとみられる。主軸はおよそN-89°-Eに沿う合口式の小児用壺である。墓壙は削平されているが、現存する規模は長さ57cm、幅約42cmを測る。床面は西側に下り、検出面から22cmの深さである。さらに墓壙の西壁を20cm掘り込み、壺を差し込んでいる。下棺の埋置角度は37°を測る。



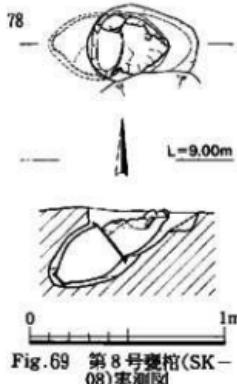


Fig. 69 第8号壺棺(SK-08)実測図

出土遺物 (Fig. 70)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器 2 点である。10は上棺に使用された壺である。口縁部から肩部までが残存している。胴部下半が接合困難となっている。器高は推定 37 cm、口径は 29.6 cm を測る。胸部最大径は胸部上半にあり、29.7 cm を測る。口縁部はく字形に外反し、口唇部は肥厚し丸くおさまる。口縁部上面の 4 分の 1 の範囲にヘラ描きの沈線が 8 本描かれている。底部は径 9 cm であり、僅かに上げ底をなす。外面は縦ハケ、内面指オサエ、ナデである。11は下棺に使用された壺である。ほぼ完全に復元できた。器高 33.0 cm、口径 31.2 cm を測る。胸部最大径は胸部上半にあり、28.9 cm を測る。口縁部は逆 L 字形を呈し、口唇部は僅かに跳ね上げ気味に仕上げる。底部は径 8.3 cm を測る。やや厚く、凹凸をもつ浅い上げ底である。外面は縦ハケ、内面は指オサエ、ナデである。

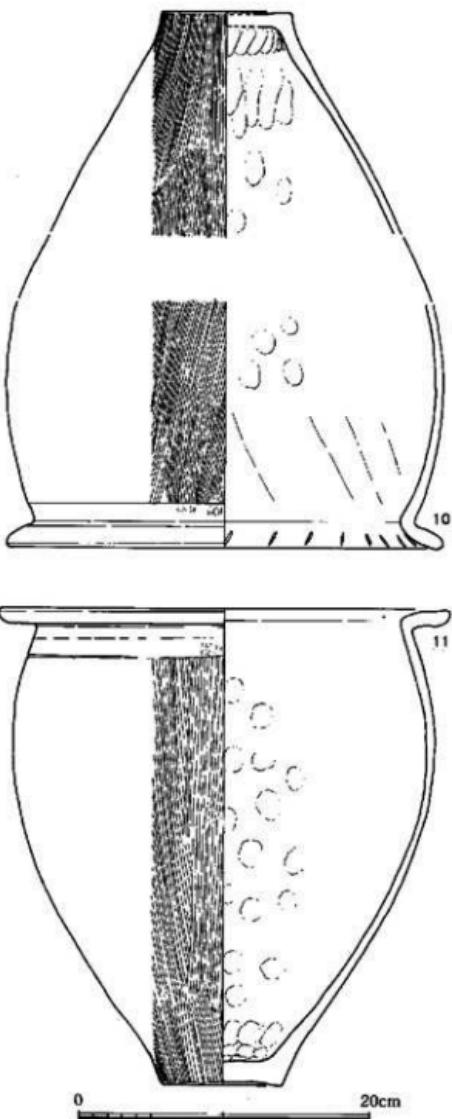


Fig. 70 第8号壺棺出土遺物

## SK-09 (Fig. 71, PL.12-15)

北群にあり2、3区にまたがる調査区中央付近に位置する。墓壙南側を小ピットが切り、棺の一部が破壊されている。壺、甕を縦位に半裁し、墓壙内に伏せて設けた特殊な埋葬施設である。土器蓋土壤墓としてもよいかかもしれない。土壤床面に底板などの痕跡はない。SK-20も本例と同形態である。土壤は東西に長く、伏せた甕棺の主軸はおよそN-72°-Wである。墓壙の規模は東西77cm、南北57cmを測る。床面はほぼ平坦であり、西側にわずかに下がる。検出

面から床面まで25cmである。壁面は垂直に近いが東側は4cmほど掘り込む。まず、壺胸部下半の半裁品(13)を東壁に底部を接して置き、次に西側の開口部と南側の隙間を甕の半裁品(12)で覆っている。

## 出土遺物 (Fig. 72)

出土した遺物は甕棺に使用された壺形土器1点と甕形土器1点がある。12は上部を覆っていた甕である。口縁部から底部直上が残存している。底部はない。ほぼ縦位に二分割されているが、分割面が敲打、調整され、接合しない。器高は現存27cm、口径は31.2cmを

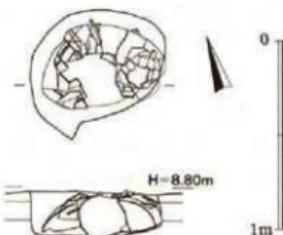


Fig. 71 第9号甕棺 (SK-09)  
実測図

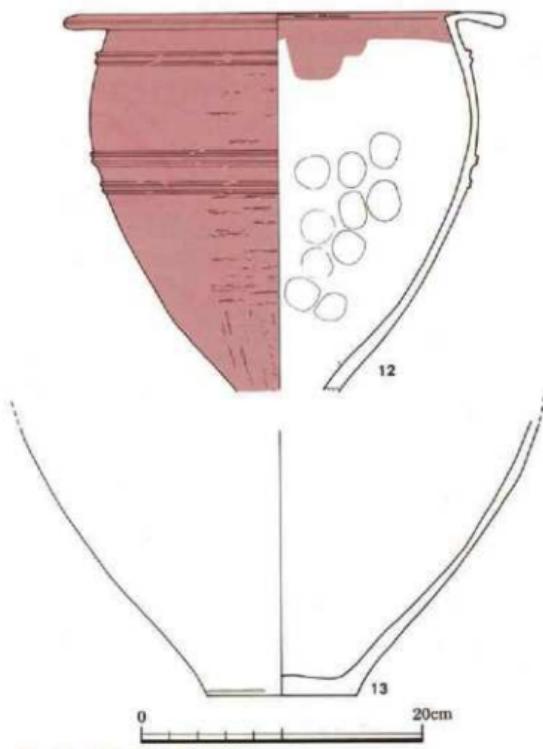


Fig. 72 第9号甕棺出土遺物

測る。胸部最大径は胸部上半にあり、27.6cmを測る。口縁部は逆し字形であり、口唇部はわずかに外傾し、肥厚し丸くおさまる。口唇部に凹線1条が巡る。口縁直下に1条、胸部上位に2条の断面M字形突帯を巡らす。外面は口縁から胸部3分の2まで横位のヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキ、内面は指押サエ、ナデである。外面と口縁内側に赤色顔料を塗布する。13は下棺に使用された壺である。胸部中位から下半である。同一個体とみられる突帯の破片があるが、接合しない。現存する器高19.0cm、底径10.8cmを測る。底部は平底である。外面はミガキ、内面は指オサエ、ナデである。

#### SK-10 (Fig. 66, PL. 12-16)

北群にあり、3区西側に位置する。墓壙の東側を小児用壺棺SK-23、27が切る。壺棺上半部は削平のために墓壙上部と共に失っている。主軸をおおよそN-62°-Wにとる単棺の成人用壺棺である。墓壙の規模は長さ145cm以上、幅約133cmを測る。墓壙底面はほぼ平坦であり、検出面から56cmの深さである。墓壙の南西壁を約35cm掘り込み、壺棺を差し込んでいる。墓壙底に口縁部の位置に沿った溝状の落ちが認められる。壺の固定とともに木蓋の設置に関わる遺構とみられる。壺棺の埋置角度は24°を測る。

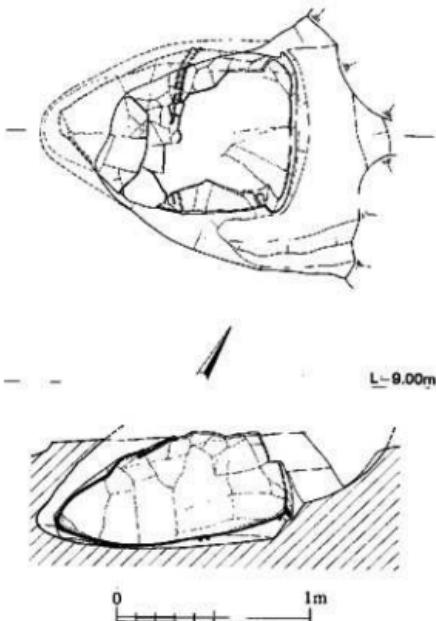


Fig. 73 第10号壺棺 (SK-10) 実測図

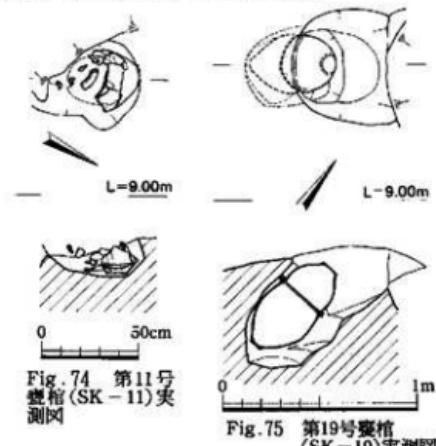


Fig. 74 第11号壺棺 (SK-11) 実測図

Fig. 75 第19号壺棺 (SK-19) 実測図

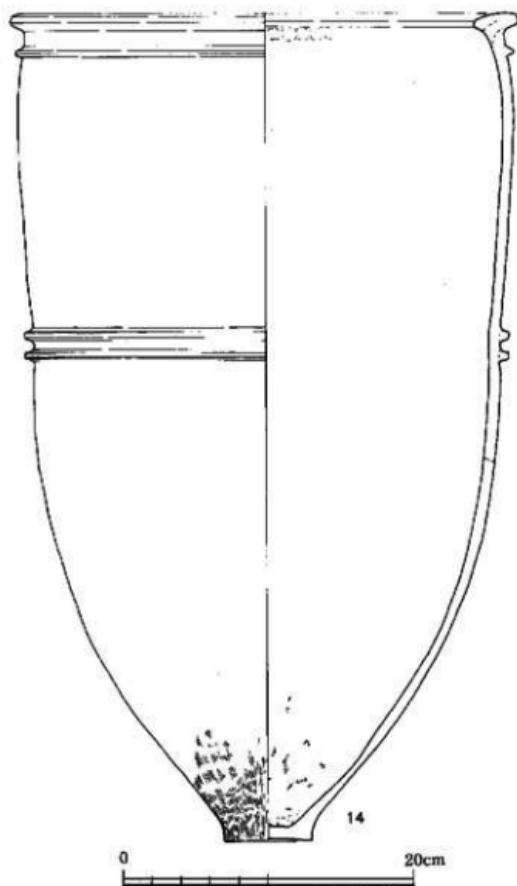


Fig. 76 第10号壺棺出土遺物

**出土遺物 (Fig. 76)**  
出土した遺物は壺棺に使用した壺形土器 1 点である。胸部を 3 分の 1 欠損する。胸部に膨みの少ない長胴形のものである。器高は 113.6 cm、口径は 69.4 cm を測る。胸部最大径は口縁部下約 15 cm の位置にあり、67 cm を測る。口縁部は T 字形を呈し、口唇部は肥厚し、若干内傾する。口縁直下に断面台形突帯 1 条、胸部に断面台形突帯 2 条をもつ。底部は径約 11.8 cm であり、ゆるい上げ底である。外内面は丁寧なナデであり、外内面下部にはハケ調整が残る。

**SK-11 (Fig. 74,  
PL. 12-17)**

北群にあり、3 区西側に位置する。西側半分は溝 SD-37 により

切られる。また、上部を近世の擾乱によって破壊されている。遺構検査段階で下壺の半分まで破壊されていたが、埋土中に口縁部や上壺の破片が混入していた。おおよそ N-32°-W にとる合口式の小児用壺棺である。墓壙は西～南側が破壊されているが、現存する規模は長さ 58 cm、幅約 46 cm を測る。床面はほぼ平坦で北側にわずかに下る。検出面から 20 cm の深さである。さらに墓壙の北壁を 3 cm 割り込み、壺棺を差し込んでいる。下棺の埋置角度は 40° を測る。

## 出土遺物 (Fig. 77)

出土した遺物は壺棺に使用した壺形土器 2 点である。15は上棺に使用された壺である。口縁部から胴部までの径の 3 分の 1 程度が残存している。器高は現存 16.2cm、口径は 33.0cm を測る。胴部最大径は胴部上半にあり、30.0cm を測る。口縁部は逆 L 字形であり、口唇部は僅かに外傾し、口唇部に凹線 1 条が巡り、刻み目が入る。口縁直下に 1 条、胴部上半に 2 条の断面 M 字形の突蒂を巡らす。外面は横位のヘラミガキ、口縁部上は暗文風に仕上げる。内面は指オサエ、ナデである。16は下棺に使用された壺である。胴部上位を失っている。復元される器高約 35 cm、口径 28.5cm を測る。胴部最大径は胴部上半にあるようだ。口縁部はく字形を呈し、口唇部はやや肥厚し、丸くおさめる。口縁直下に段がある。底部は径 9.7cm を測る。やや薄く、浅い上げ底である。外面は継ハケ、内面は指オサエ、ナデであり、口縁部の内面直下は横位のヘラ削りである。

SK-19 (Fig. 75, PL. 13-18)

南群にあり、5 区南側に位置する。墓壙の東側は壺棺 SK-38 の墓壙を切る。しかし、保存状態は比較的よい。使用した壺、鉢は完形で出土

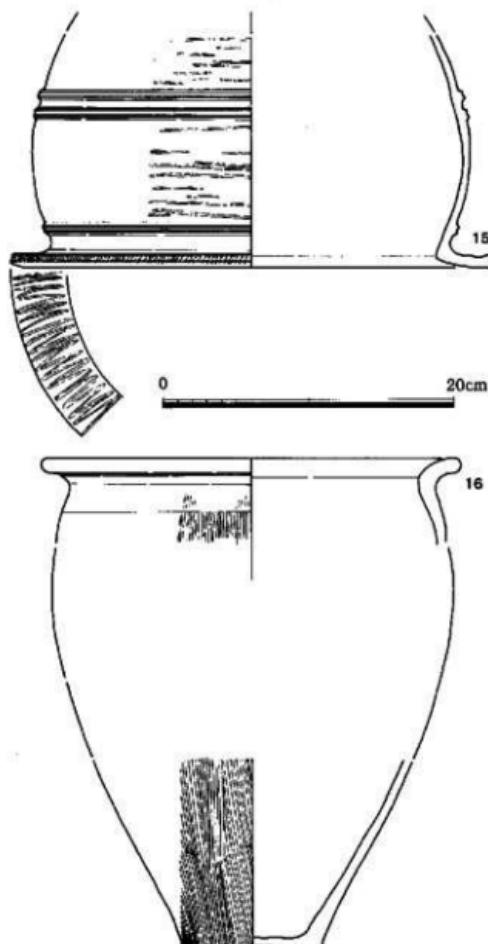


Fig. 77 第11号壺棺出土遺物

した。棺内は埋土が少量入っていたが、人骨などは遺存していない。およそ N-53°-E に立る合口式の小児用壺棺である。墓壙は東側を失っており、現存する規模は長さ 53cm、幅 59cm を測る。床面は南西側に傾斜している。検出面から 37cm の深さである。さらに墓壙の南西壁を 25cm 剥り込み、壺棺を差し込んでいる。下棺の埋置角度は 46° を測る。

#### 出土遺物 (Fig. 78)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形上器 1 点と鉢形下器 1 点である。17 は上棺に使用された鉢である。完形品である。器高は 22.3cm、口径は 30.2cm を測る。胴部最大径は口縁下 5cm 付近にあり、27.3cm を測る。口縁部はく字形に外反し、口唇部は肥厚し、丸くおさまる。口縁部上面の 9 分の 1 の範囲にヘラ描きの沈線が 8 本描かれている。底部は径 9.7cm であり、わずかに上げ底をなす。外面は紙ハケ、内面指オサエ、ナデである。18 は下棺に使用された壺である。ほぼ完形である。器高 35.6cm、口径 31.2cm を測る。胴部最大径は胴部上半に

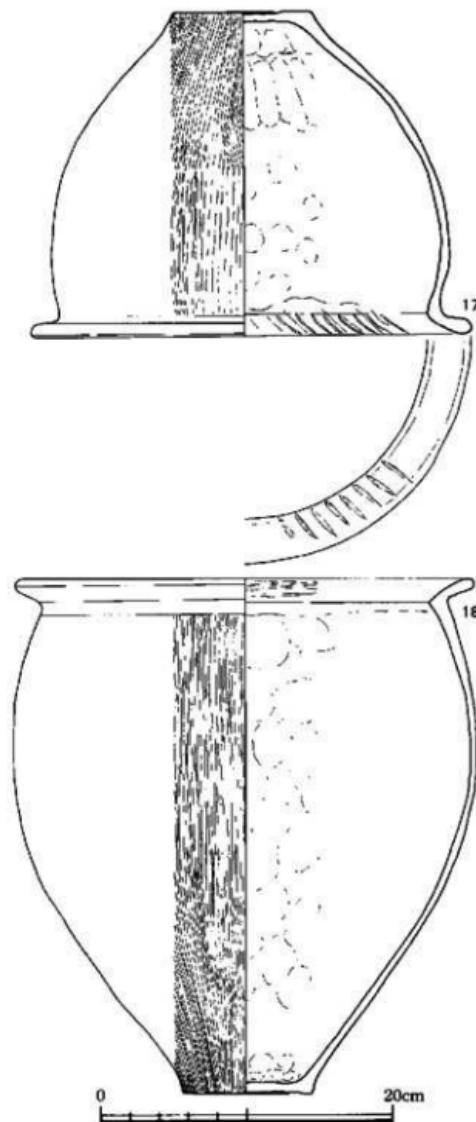


Fig. 78 第19号壺棺出土遺物

あり、31.8cmを測る。口縁部はく字形を呈し、内面に縫をもつ。底部は径8.9cmを測る。やや薄く、浅い上げ底である。外面は縦ハケ、内面は指オサエ、ナデである。

SK-20(Fig. 79, PL. 13-19-20)

北群にあり、2区東側付近に位置する。基壇の保存状態は良好である。1個体の瓢形土器を縦位に半裁し、墓壇内に伏せて設けた特殊な埋葬施設である。土器蓋土壤墓としてもよいかもしれない。土壤床面に底板などの痕跡はない。

SK-09も本例と同形態である。伏せた壺棺の主軸はおおよそN-37°-Wである。墓壇の規模は長さ54cm、幅57cmを測る。床面は中央部がやや陥る。検出面から床面まで37cmを測る。南側の壁面を23cm程掘り込む。まず、頸部を除去した瓢形土器を二分割し、底部のない半裁品を両側の掘り込み部分に頸部を先に差し込み、次に北側の隙間を底部のある半裁品を横位にして覆っている。

出土遺物 (Fig. 80)

出土した遺物は壺棺に使用された瓢形土器1点がある。19は口縁部を打ち欠いている瓢形土器である。接合すると頸部より下位がほぼ完形となった。底部には焼成後の穿孔がみられる。これは外方より刺突して設けた径約2cmのものである。ほぼ縦位に二分割され、分割面は一部が敲打、調整されている。現存する器高は38.5cm、打ち欠いた部分での頸部径は14.6cmを測る。胴部は球洞

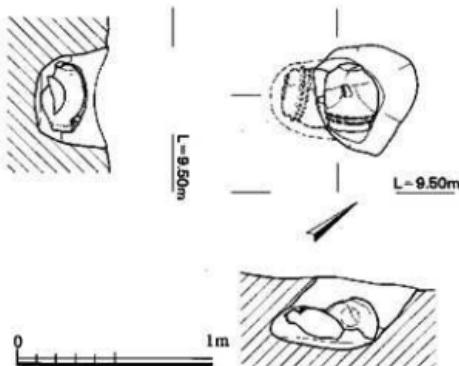


Fig. 79 第20号壺棺 (SK-20) 実測図

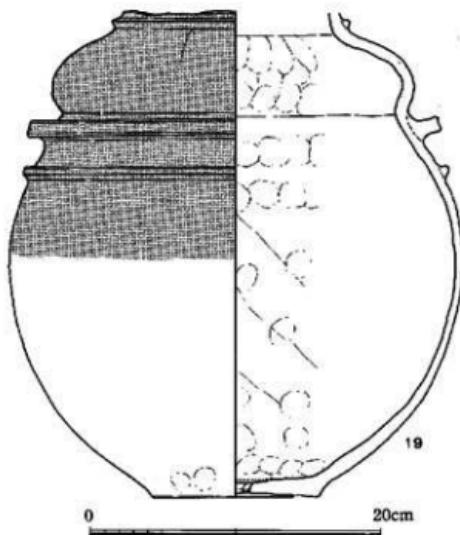


Fig. 80 第20号壺棺出土遺物  
り刺突して設けた径約2cmのものである。ほぼ縦位に二分割され、分割面は一部が敲打、調整されている。現存する器高は38.5cm、打ち欠いた部分での頸部径は14.6cmを測る。胴部は球洞

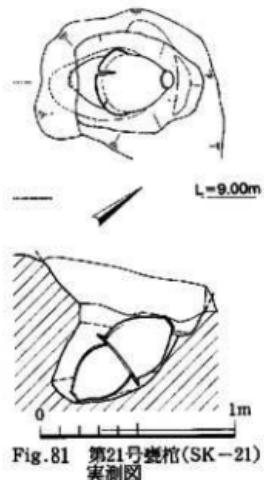
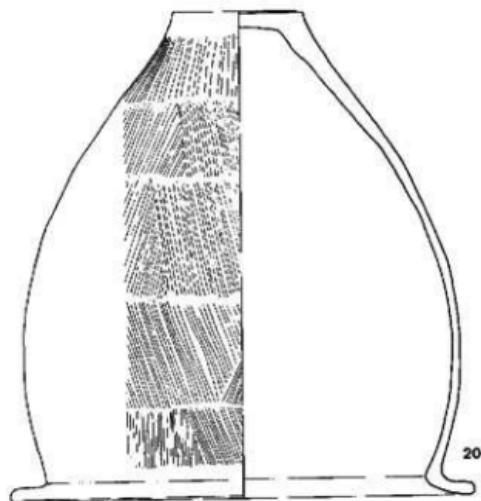


Fig. 81 第21号墓棺(SK-21)  
実測図



形を呈し、最大径は胴部上半にあり、30.7cmを測る。頸部に三角突帯1条、胴部上位に断面台形突帯2条を巡らす。台形突帯のうち上位のものは高さ2cmほどあり、突帯上面を強くナデている。底部は径11.2cmを測り、弱い上げ底となっている。外面は丁寧なナデ、内面は指押サエ、ナデである。外面の胴部最大径の位置より上位に赤色顔料を塗布する。

SK-21 (Fig. 81, PL. 13-21)  
北群にあり、2区東側に位置する。東側半分は近年の造成のために上部が削平されている。全体として保存状態はよい。主軸をおおよそ N-37°-E にとる合口式の小児用墓棺である。墓墳は一部が削平されているが、その規模は長さ90cm、幅約88cmを測る。検出面

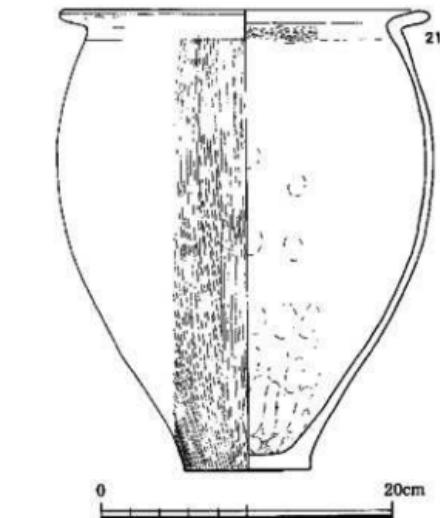


Fig. 82 第21号墓棺出土遺物

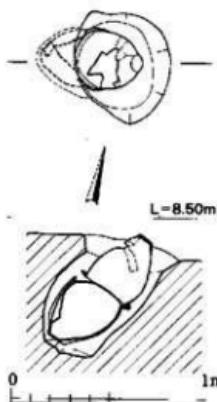


Fig. 83 第22号墓棺  
(SK-22)実測図

から約40cmの位置で段があり、そこからさらに墓壙の南西壁に15cm掘り込み、壺棺を差し込んでいる。最深部まで75cmを測る。壺棺の埋置角度は39°を測る。

#### 出土遺物 (Fig. 82)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器 2 点である。20は上棺に使用された壺である。ほぼ完形品である。器高は33.4cm、口径は31.9cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、30.0cmを測る。口縁部は逆L字形に強く外反し、口唇部は丸くおさまる。底部は径9cmであり、僅かに上げ底をなす。外面は縦ハケ、内面指オサエ、ナデである。21は下棺に使用された壺である。ほぼ完形品である。器高31.8

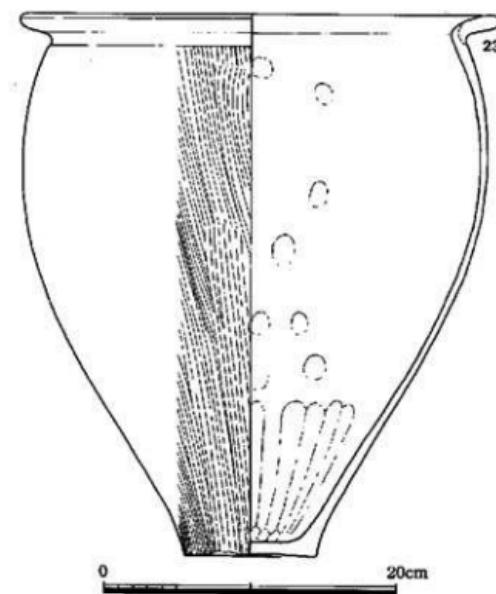
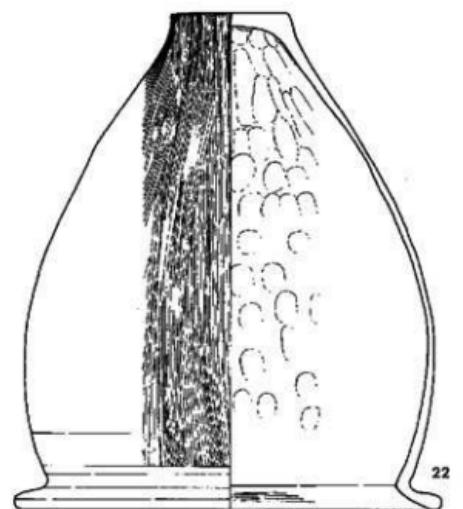


Fig. 84 第22号墓棺出土遺物

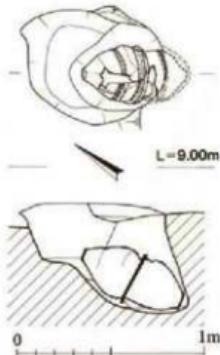


Fig. 85 第23号壺棺 (SK-23) 実測図

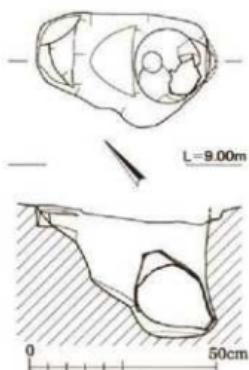


Fig. 86 第24号壺棺 (SK-24) 実測図

cm、口径25.4cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、25.9cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、口唇部は丸くおさまる。口縁部上面にヘラ描きの沈線が1本描かれている。

底部は径8.5cmを測る。やや厚く、わずかな上げ底である。外面は縦ハケ、内面の口縁直下は横ハケ、その他は指オサエ、ナデである。

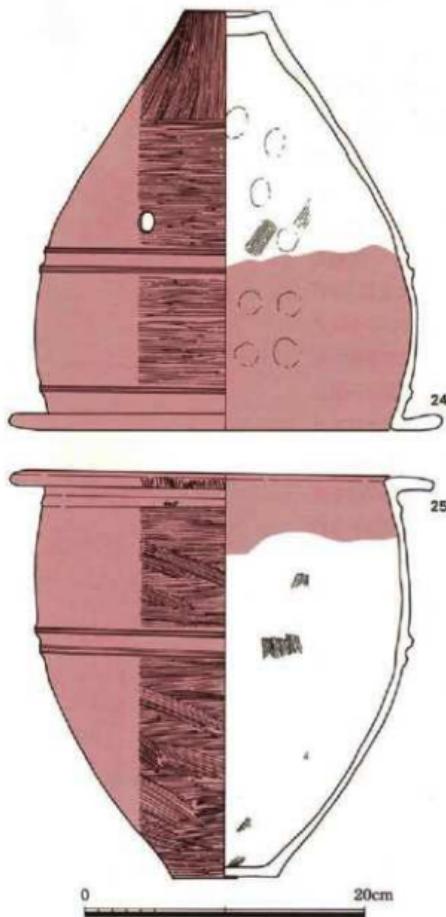


Fig. 87 第23号壺棺出土遺物(1)

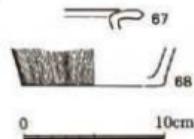


Fig. 88 第23号壺棺 出土遺物(2)

SK-22 (Fig.  
83, PL. 13-22)

北群にあり、2  
区東側に位置する。  
東側半分は近年の  
造成のために上部  
が削平されている。  
全体として保存状  
態はよい。主軸を  
おおよそ N-77°  
-E にとる合口式  
の小児用壺棺である。壺棺は一部が  
削平されているが、  
その規模は長さ49  
cm、幅約57cmを測  
る。検出面から約  
15cmの位置で段が  
あり、そこからさ  
らに壺棺の西壁に  
21cm掘り込み、壺  
棺を差し込んでい  
る。最深部まで63  
cmを測る。壺棺の  
埋置角度は48°で  
ある。

#### 出土遺物

(Fig. 84)

出土した遺物は  
壺棺として使用さ  
れた壺形土器2点  
である。22は上棺  
に使用された壺で

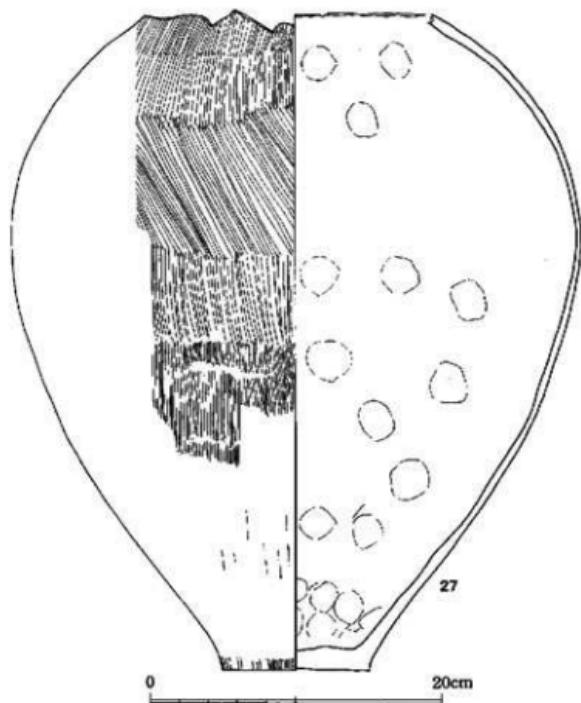
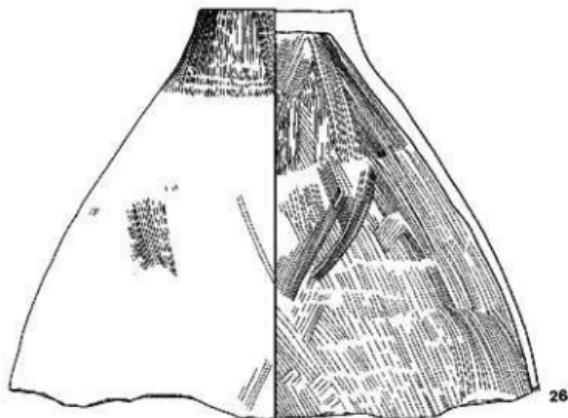


Fig. 89 第24号壺棺出土遺物

ある。ほぼ完形品である。器高は34.4cm、口径は28.7cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、27.9cmを測る。口縁部は逆L字形であり、口唇部は肥厚し、丸くおさまる。底部は径8cmであり、ほぼ平底をなす。外面は縦ハケ、内面指オサエ、ナデである。23は下棺に使用された甕である。ほぼ完形品である。器高37.5cm、口径32.8cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、31.7cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、口唇部はやや肥厚し、丸くおさまる。底部は径8.9cmを測る。わずかな上げ底である。外面は縦ハケ、内面は指オサエ、ナデである。

#### SK-23 (Fig. 85)

北群にあり、3区中央に位置する。成人棺SK-10の墓壙を切り設けられている。全体として保存状態はよい。主軸をおおよそN-34°-Wにとる合口式の小児用甕棺である。墓壙の保存状態は良い。その規模は長さ74cm、幅62cmを測る。検出面から約32cmの位置で段があり、そこからさらに墓壙の南東壁に13cm掘り込み、甕棺を差し込んでいる。最深部まで58cmを測る。甕棺の埋置角度は25°である。

#### 出土遺物 (Fig. 87-88)

出土した遺物は甕棺に使用された甕形土器2点と、墓壙埋土中より出土した甕底部破片がある。24は上甕に使用された甕でありほぼ完形品である。器高は29.5cm、口径は31.0cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、27.4cmである。口縁部は逆L字形を呈し口唇部は肥厚し、外傾する。口縁直下と胴部中位に2条の断面M字形突帯を巡らす。底部は径6.2cmを測り、厚くゆるい上げ底である。外面は上位3分の2が横ヘラミガキ、以下は縦ヘラミガキである。内面は指押サエ、ナデである。なお、胴部突帯下1cmに焼成前穿孔が1ヶ所認められる。これは外側から刺突されたものである。25は下甕に使用された甕であり、胴部の4分の1を欠損する。器高は28.4cm、口径は27.9cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、26.9cmである。口縁部は逆L字形を呈し、口唇部は肥厚し、やや外傾する。口縁直下と胴部中位に2条の断面M字形突帯を巡らす。底部は7.7cmを測り、わずかな上げ底である。外面は横～斜めヘラミガキ、内面は指押サエ、ナデである。外面と内面の上位約5cmまでに赤色顔料を塗布する。67は甕口縁部、68は甕底部の破片である。

#### SK-24 (Fig. 86, PL. 13-23)

北群にあり、3区南側に位置する。浅く東西に延びる溝状遺構内に検出したが、溝としたものは検出面から5cm以下の深さしかなく、遺構であるかは断定できない。甕棺の主軸はおおよそN-49°-Wにとる小児用甕棺である。墓壙は長さ92cm、幅60cmを測る。床面は検出面から10cmと50cmの位置に段があり、さらに南東側の壁面を掘り込んで下甕を差し込んでいる。

#### 出土遺物 (Fig. 89)

出土した遺物は甕棺に使用された甕形土器2点である。26は上甕に使用されたもので、甕の胴部下半を打ち欠いたものである。現存器高約28cm、打ち欠いた部分での径約37cmを測る。底

部の径10.5cmで厚い平底である。外面はナデで底部付近に縦ハケが残る。内面は縦ハケである。27は下壺に使用された壺で、頸部より打ち欠いてある。現存器高44.8cm、打ち欠いた部分での径約20cmを測る。底部は径10.2cmで、ほぼ平底である。外面は縦ハケ、内面は指押サエ、ナデである。

SK-25 (Fig. 90, PL. 14-24・25)

北群にあり、1区北側に位置する。調査区北端にあり、崖面に検出した。そのため墓壙の上部と上壺の胴部下半は失っている。墓壙の下部より以下が残存している。主軸はおおよそ N-86°-W に沿う呑口式の小児用壺棺である。残存する墓壙の規模は長さ約70cm、幅約85cmを測る。床面は東側に傾斜し、検出面から43cmの深さである。さらに東側の墓壙壁に68cm掘り込み、下壺を差し込んでいる。埋置角度は18°を測る。

出土遺物 (Fig. 91)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器 2 点である。28は口縁部から胴部上位が残存する。器高約23cm、口径41.6cmを測る。

口縁部はく字形に外反し、内側に突き山す。口唇部はやや肥厚し丸くおさまる。口縁部直下に三角突帯が巡る。外面は縦ハケ、内面は指押サエ、ナデである。29は下壺であり、ほぼ完形品である。器高61.0cm、口径50.8cmを測る。胴部最大径は胴部上

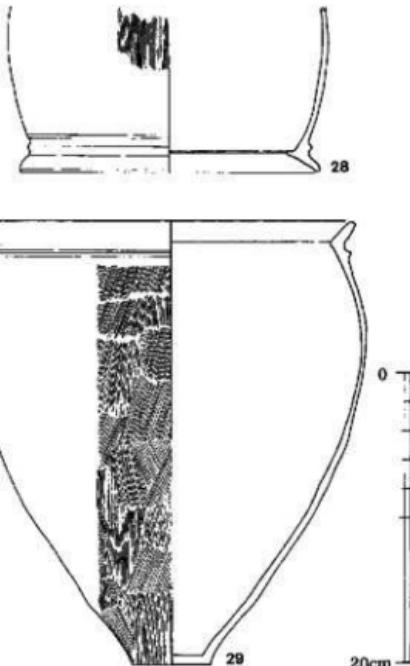
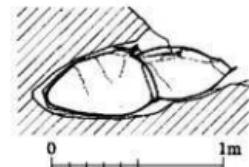
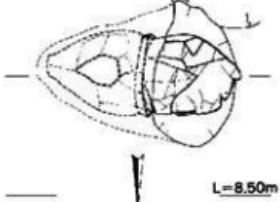


Fig. 90 第25号壺棺(SK-25)  
実測図

Fig. 91 第25号壺棺出土遺物



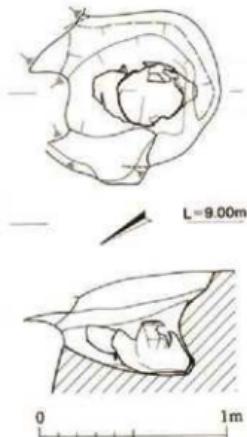


Fig. 92 第26号壺棺(SK-26)  
実測図

位にあり、径53cmである。口縁部はく字形に立ち上り、口唇部は肥厚し、丸くおさまる。口縁直下に三角突帯が1条巡る。底部は径10.6cmを測り、平底である。外面は縦ハケ、内面は指押サエ、ナデである。

SK-26(Fig. 92, PL. 14-26)

北群にあり、3区北側に位置する。墓壙は土壙墓SK-32の北端部を切る。また、北側は擾

乱により墓壙と上塗のはとんどを破壊する。主軸をおおよそ N-30°-E にとる呑口式の小児用壺棺である。墓壙の規模は長さ102cm、幅約90cmを測る。床面は南側に向って低く、検出面から55cmの深さである。埋置角度は28°を測る。

#### 出土遺物 (Fig. 93)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器2点である。30は口縁部3分の2程度が残存している。口縁部は逆L字形を呈し、口唇部は若干外傾する。復元口径は33.4cmを測る。口縁部外面と内面約2cmに赤色顔料を塗布する。31は口縁部を打ち欠いて使用されている。現存する器高約40cm、打ち欠いた部位での径21.5cm、底径約11cmを測る。底部はわずかな上げ底である。

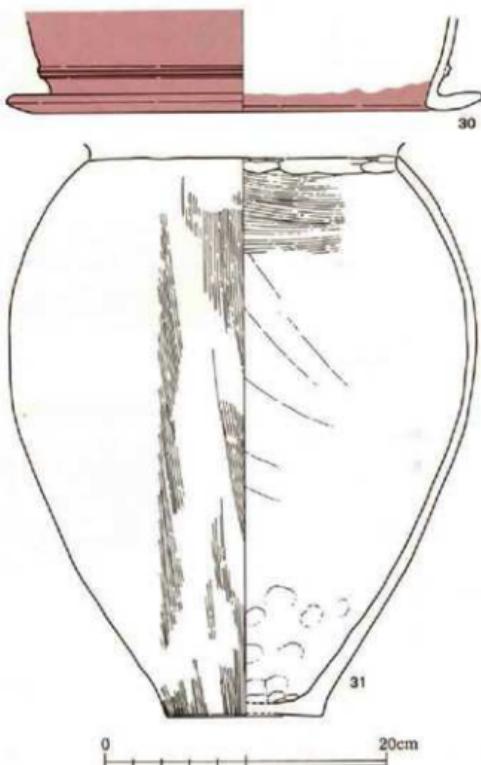


Fig. 93 第26号壺棺出土遺物

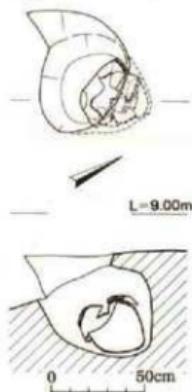


Fig. 94 第27号墓棺  
(SK-27) 実測図

外面は縦ハケ、内面は上部が横ハケ、その他は指オサエ、ナデである。

SK-27 (Fig. 94, PL.  
14-27)

北群にあり、3区中央に位置する。成人棺SK-10の墓壙を切り設かれている。全体的に保存状態はよい。主軸はおよそ N-32°-E にとる呑口式の小児用壺棺である。墓壙の規模は長さ55

cm、幅約65cmを測る。床面は遺存せず、墓壙北東壁に穿たれた横穴部と直結している。これは壁を22cm掘り込み、壺棺を差し込んでいる。底面の深さは56cmである。埋置角度は36°を測る。

#### 出土遺物 (Fig. 95)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器2点である。32は上棺に使用された壺である。胴部中央で打ち欠き、下半部を使用している。現存する器高23cm、打ち欠いた部位での径約37.5cmを測る。胴部中央に断面M字形の突帯1条が巡る。底部は径9.3cmであり、わずかな上げ底となる。外面は縦ハケ後ナデ、内面は縦ヘラ削り後、指压サエ、ナデである。胴部より上位に

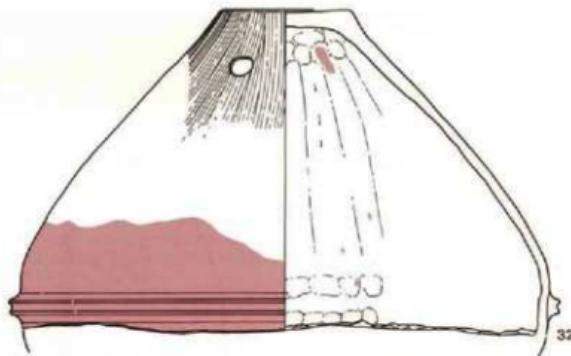


Fig. 95 第27号墓棺出土遺物

赤色顔料が塗布されている。底部から 5 cm の位置に焼成後の外方からの穿孔がある。33は下窓に使用された壺であり、ほぼ完形品である。器高は 27.5 cm、口径は 30.9 cm を測る。胴部最大径は胴部上半にあり、27.4 cm である。口縁部は逆 L 字形を呈し、口唇部は外傾する。端面に凹線が 1 条巡り、刻み目を施す。口縁直下と胴部に断面 M 字形突帯を巡らす。底部は径 7.9 cm を測り、ゆるい上げ底である。口縁直下と胴部上半の突帯間に継位の暗文風のヘラミガキを施す。胴部下半は横ヘラミガキ、底部 8 cm は継位ヘラミガキである。内面は指押サエ、ナデである。なお、胴部突帯下 2 cm に焼成前穿孔が 1 ケ所認められる。これは外方から刺突されたものである。外面と内部約 1 cm 程度に赤色顔料を塗布している。

#### SK-28 (Fig. 96, PL. 14-28・29)

北群にあり、1 区と 2 区の境界付近に位置する。墓壙の上部に小児用壺棺 SK-04 が切る。壺棺の保存状態は良好である。主軸をおおよそ N-26°-W にとる単棺の成人用壺棺である。墓壙は主軸に沿った長方形であり、その規模は長さ 168 cm、幅約 136 cm を測る。墓壙の北西隅に階段状の段が削り出されている。墓壙底面は南側に傾斜し、中央付近で検出面から約 80 cm の深さである。墓壙の南東壁を約 40 cm 削り込み、壺棺を差し込んでいる。壺棺の下部での深さは 112 cm を測る。墓壙底に木蓋の痕跡を示す遺構は認められない。壺棺の埋置角度は 35° を側る。

#### 出土遺物 (Fig. 97)

出土した遺物は壺棺に使用した壺形土器 1 点である。34 はほぼ完形品である。器高は 97.8 cm、口径は 63.7 cm を測る。胴部最大径は胴部中央にあり、72 cm を測る。口縁部は逆 L 字形を呈し、内側に少し張り出す。口唇部は肥厚し、若干内傾する。端面は強くナデられ、やや窪む。口縁直下に 1 条、胴部に 2 条の断面台形の突帯をもつ。底部は径約 10.6 cm であり、ゆるい上げ底である。外内面は丁寧なナデである。

#### SK-30 (Fig. 98, PL. 15-31)

北群にあり、3 区南側で検出した。墓壙東側で小児用壺棺 SK-31 を切り、北側では溝 SD-37 に切られる。また、工場建設の際に墓壙と壺棺を大きく欠損している。主軸をおおよそ N-12°-E にとる合口式の小児用壺棺である。墓壙床面のみが遺存しており、その長さは 50 cm、幅 50 cm を測る。最深部は検出面から 31 cm を測る。墓壙南壁を削り込み、壺棺を差し込んでいるとみられた。壺棺の埋置角度は約 30° を測る。

#### 出土遺物 (Fig. 99)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器 2 点である。36 は上窓に使用された壺である。胴部上半は打ち欠き、胴部下半のみを蓋として使用する。現存器高は 18.8 cm であり、打ち欠いた部位での径は 28.2 cm を測る。断面 M 字突帯 1 条が巡る。底部は径 6 cm であり、上げ底である。底部中央に径 1.6 cm、胴部下半に径 1.9 cm の焼成後穿孔が認められる。いずれの穿孔も外方より刺突して施される。外面の底部より 8 cm までは横位、以下は継位のヘラミガキ、内面は指押サ

Fig. 96 第28号墳前 (SK-28) 実測図

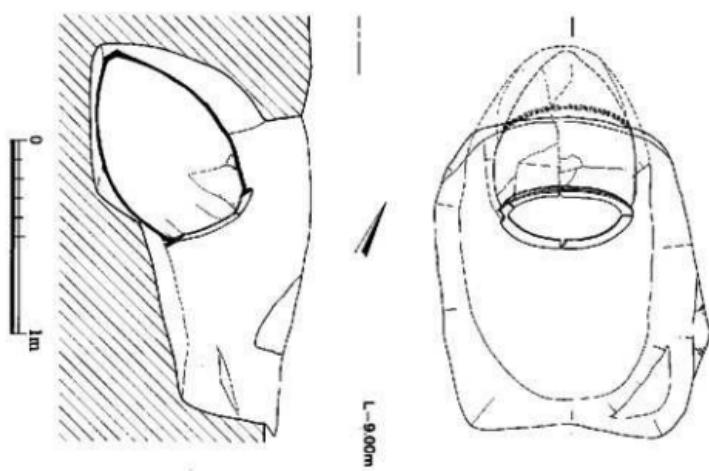
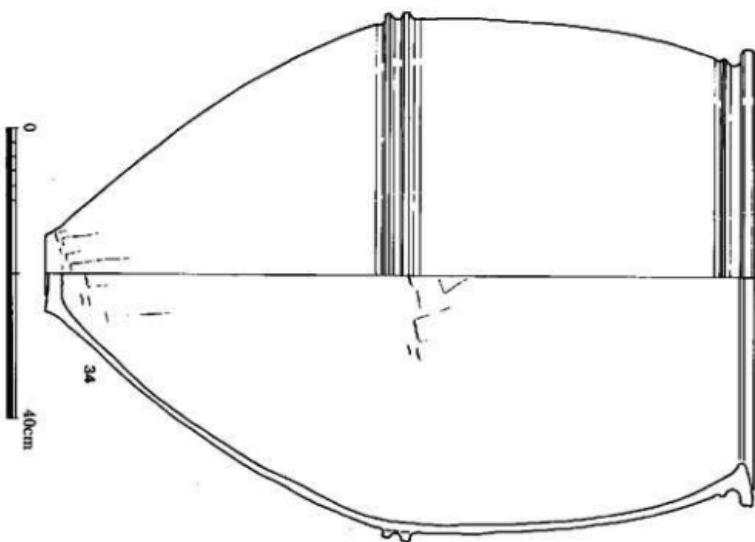


Fig. 97 第28号墳出土遺物



エ、ナデである。外面には赤色顔料を塗布する。37は下蓋に使用された蓋である。底部と胴部の2分の1は欠損する。現存器高約26cm、口径31.2cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、28.4cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、口唇部端面を強くナデて僅かに窪み、刻み目を施す。口縁直下に1条、胴部中央に1条の断面M字形の突帯が巡る。胴部下半まで横位のヘラミガキ、以下は縦位のヘラミガキ、内面は指押サエ、ナデである。外面と口縁上面に赤色顔料を塗布する。

#### SK-31 (Fig.100, PL.15-31)

北群にあり、SK-30の東側に位置する。墓壙西側は小児用甕棺SK-30に、北側は溝SD-37に切られる。また、工場建築時の地下げのために甕棺と墓壙の約半分を失っている。おおよそN-60°-Wにとる合口式の小児用甕棺である。墓壙は破壊が著しく、壁面部分のみが遺存する。その長さ58cm、幅約25cmを測る。最深部は検出面から45cmの深度である。墓壙の東壁を掘り込み、甕棺を差し込んでいる。甕棺の埋置角度は44°を測る。

#### 出土遺物 (Fig.101)

出土した遺物は甕棺に使用された變形土器2点である。38は上蓋に使用された蓋である。胴部上半の2分の1が残存する。現存する器高は14.5cm、口径は34.3cmを測る。

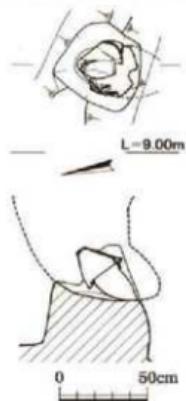


Fig.98 第30号甕棺  
(SK-30)実測図

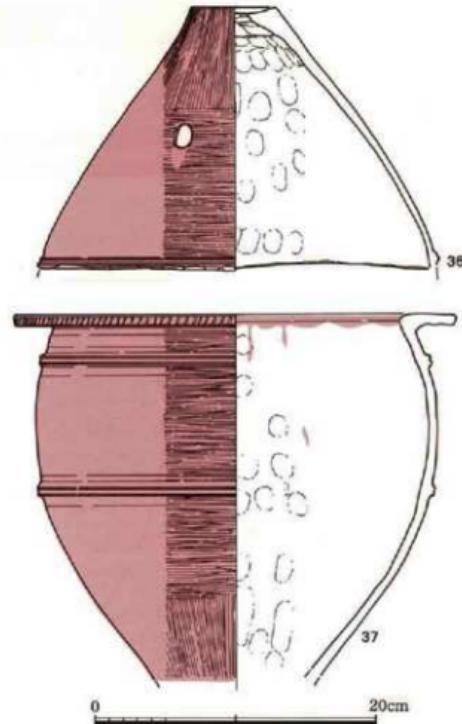


Fig.99 第30号甕棺出土遺物

る。胸部最大径は口縁下7cm付近にあり、32.1cmを測る。口縁部は逆L字形に外反し、口唇部はやや肥厚する。端面は凹線を1条巡らし、刻み目を施す。口縁部上面には暗文風のヘラミガキを施す。口縁直下に1条と胸部中央に2条の断面M字形突帯を巡らす。胸部の突帯間には暗文風のヘラミガキを施す。その他の器表はナデである。外面と口縁部内面に赤色顔料を塗布する。39は下棺に使用された甕である。口縁部と底部以外は風化が著しい。器高約35cm、口径30.1cmを測る。胸部最大径は胸部上半にあると推定される。口縁部は逆L字形を呈し、口唇部は丸まる。底部は径9.7cmを測る。やや薄く、わずかな上げ底である。外面は継ハケ、内面は指オサエ、ナデである。

SK-33 (Fig.102,  
PL.15-32・33)

北群にあり、3区南側に位置する。西側は近年の造成のために上部が削平されている。

墓壇北端で成人棺SK-10と切り合うが、前後関係は不明である。

墓壇は隅丸長方形を呈するが、長軸は西側の溝SD-37と平行する。全体として保存状態は

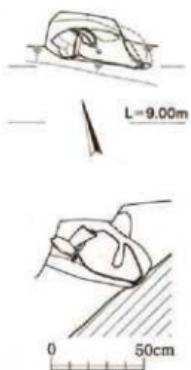


Fig.100 第31号甕棺  
(SK-31)実測図

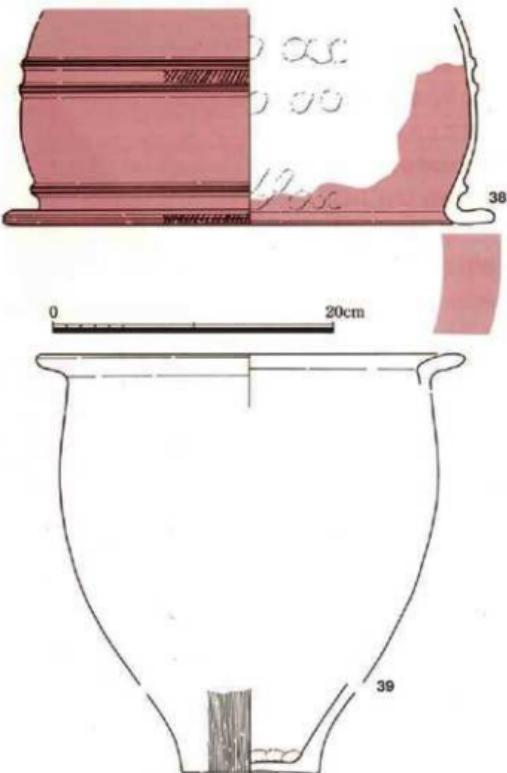


Fig.101 第31号甕棺出土遺物

よい。主軸はおおよそ N-48°-W にとる単棺式の成人用壺棺である。墓壙の規模は長さ158cm、幅112cmを測る。北側は二段の階段状となり墓壙底に達する。墓壙床面は検出面から約90cmの深さがあり、南側に傾斜している。そこからさらに墓壙の南東壁に50cm掘り込み、壺棺を差し込んでいる。最深部まで104cmを測る。壺棺の埋置角度は35°を測る。木蓋などの痕跡は未検出である。なお、本壺棺墓の墓壙埋土上部から壺、壺の破片が多く出土した。その性格は不明である。

#### 出土遺物 (Fig. 103)

出土した遺物は壺棺に使用された變形土器 1 点と墓壙埋土上部から出土した土器片である。40は壺である。ほぼ完形品である。器高は96.8cm、口径は59.3cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、66cmを測る。口縁部は逆L字形に強く外反し、口縁部は肥厚し、端面は強くナテる。口縁直下に 1 条、胴部中央に 2 条の断面台形の突帯を巡らす。底部は径11cmであり、わずかに上げ底をなす。外面の底部付近と内面にハケが残るが、他はナデである。41~45、48は壺、46、47は壺である。いずれも全体を復元することはできない。なお、48の壺は外面に赤色顔料を塗布したものである。

#### SK-34 (Fig. 104)

北群にあり、2区東端に位置する。中央部に電柱跡とみられる擾乱により切られ、上壺の下半部と上壺の一部のみが遺存する。主軸をおおよそ N-30°-E にとる合口式の小児用壺棺とみられる。墓壙の保存状態は悪い。墓壙の南西壁に壺棺を差し込んでいる。検出面から最深部まで43cmを測る。壺棺の埋置角度は約35°である。

#### 出土遺物 (Fig. 106)

出土した遺物は壺棺に使用された變形土器 2 点である。しかし、上壺とみられる破片は胴部片が少量あるのみで、図化することは困難であった。49は下壺である。胴部上半部を失うが、棺内埋土中に口縁部小片があ

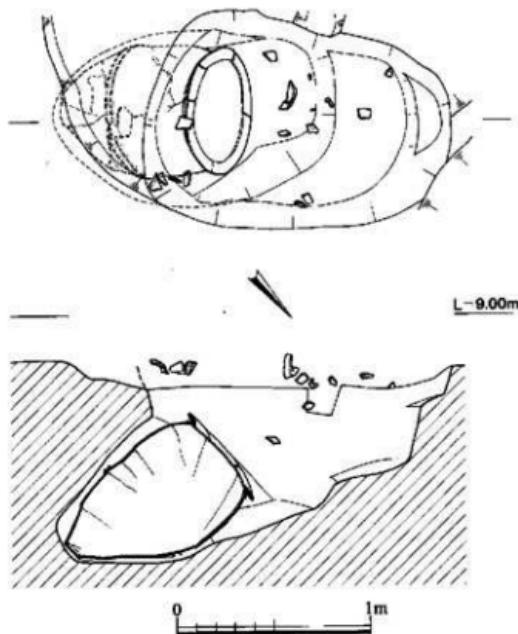


Fig. 102 第33号壺棺 (SK-33) 実測図

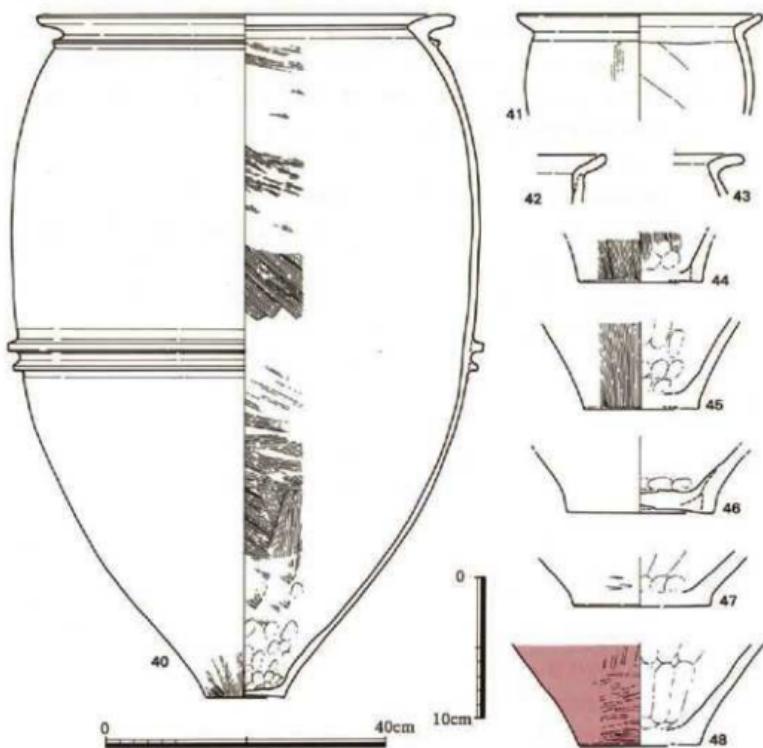


Fig. 103 第33号壺棺出土遺物

り、図上で復元した。これによると器高約35cm、口径約29cmである。口縁部はく字形を呈し、口唇部は肥厚し、丸くおさまる。底部は径8.8cmを測り、ほぼ平底である。外面は縦ハケ、内面は指揮サエ、ナデである。

## SK-35 (Fig. 105)

南群にあり、6区中央に位置する。削平のため上半部を失う。主軸をおおよそ N-59°-E にとる小兒用壺棺である。削平が下壺口縁部に達しており、上壺が存在したかは不明である。しかし、墓壙の形状から単棺であった可能性が高い。墓壙は不整形であり、長さ70cm、幅75cmを測る。床面には北東側に段があり、壺棺を南西方向に差し込む。最深部は検出面から25cmを測

る。壺棺の埋置角度は約40°である。

#### 出土遺物 (Fig. 106)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器1点である。しかし、保存状態が悪く胴部付近の破片が細片化しているため復元することができなかった。図は

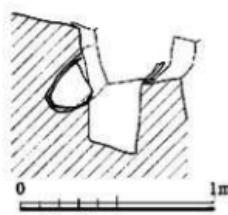
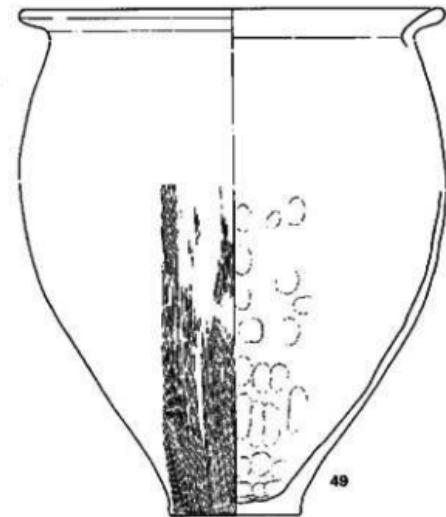
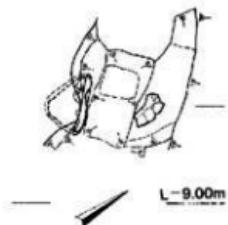


Fig. 104 第34号壺棺 (SK-34) 実測図

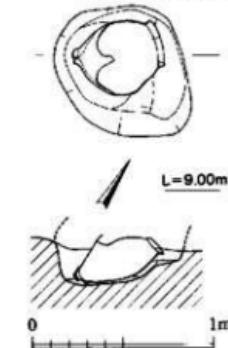


Fig. 105 第35号壺棺 (SK-35) 実測図

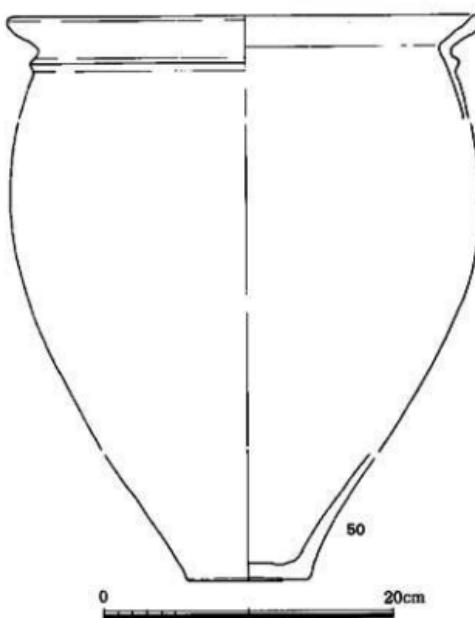


Fig. 106 第34・35号壺棺出土遺物

口縁部と底部を復元したものである。これによると器高約39cm、口径約32cmである。口縁部はく字形に外反し、口唇部は肥厚する。頸部に断面三角形の突帯が1条巡る。底部は径8.6cmを測り、わずかな上げ底である。内外面の調整は風化のために不明である。

SK-36 (Fig.107, PL.16-36)

南群にあり、6区南端に位置する。成人壺棺SK-43の墓壙を切る。主軸をN-85°-Wにとる合口式の小児用壺棺である。墓壙の東側を柱穴が切り、墓壙および壺棺の上部を削平により失う。現存する墓壙の規模は長さ56cm、幅74cmである。墓壙底は西に向って下り、最深部で検出面から38cmを測る。壺棺の埋置角度は約46°である。

出土遺物 (Fig.108)

出土した遺物は壺形土器1点と鉢形土器1点である。

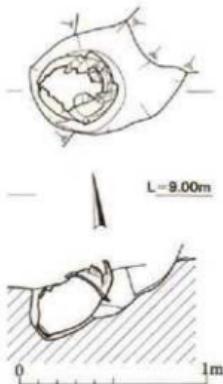


Fig.107 第36号壺棺  
(SK-36)実測図

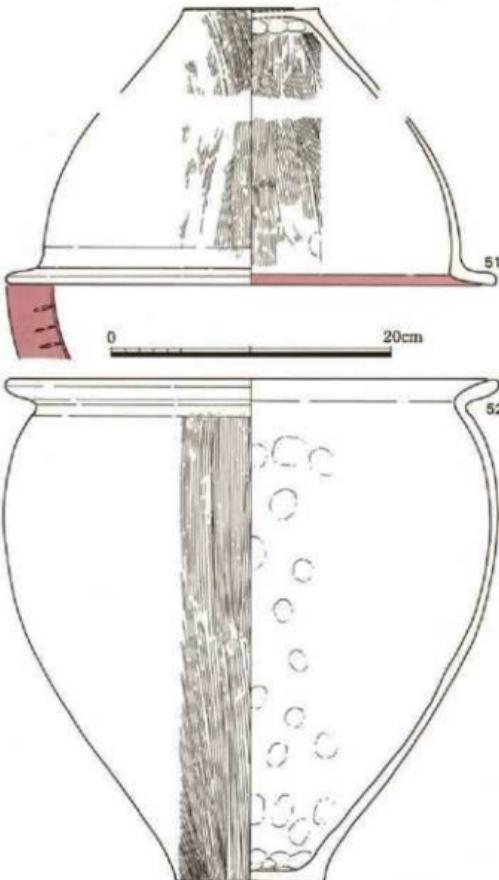


Fig.108 第36号壺棺出土遺物

51は上棺に使用された鉢である。底部は部分的に遺存している。器高は推定20cm、口径36.5cmである。口縁部は逆し字に折れ、端部は丸くおさめる。口縁部上面にヘラ書きによる沈線が3条描かれる。底部は径約9.6cmであり、薄く、わずかに上げ底となる。内外面共に紙ハケである。52は下蓋に使用された甕である。ほぼ完形に復元できた。器高36.0cm、口径35.6cmである。口縁部はく字状に強く外反し、口唇部は肥厚し、端面は丸くおさめる。胴部最大径は胴部上位にあり、35.1cmを測る。底部は径10.5cmでありほぼ平底となる。

FIG.109 第38号甕附 (SK-38) 実測図

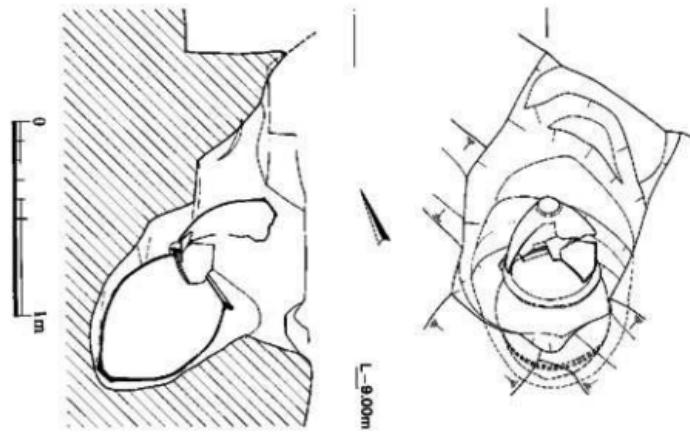
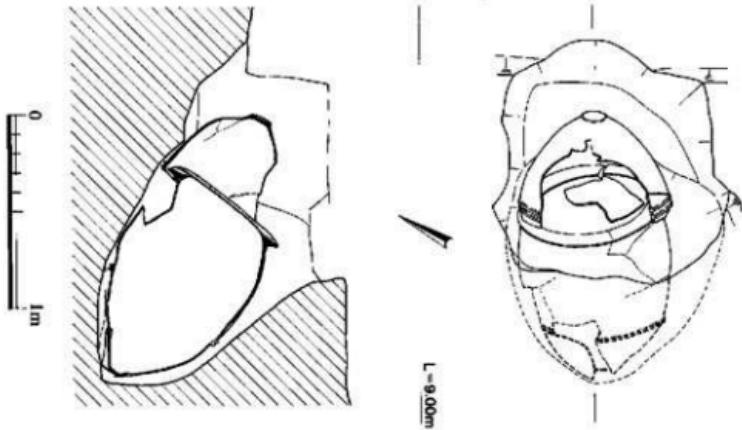


FIG.110 第39号甕附 (SK-39) 実測図



## SK-38 (Fig. 109, PL. 16-37)

南群にあり、5区南側にある。小児用壺棺 SK-19の墓壙が切る。主軸を N-24°-E にとる呑口式の成人用壺棺である。墓壙東側は近年の造成により壊されている。上蓋上部は崩落していたが、全体として保存状態はよい。現存する墓壙は隅丸長方形を呈し、長さ155cm、幅94cmを測る。墓壙の東側は階段状の段がある。床面はほぼ平坦であり、検出面から約55cmを測る。南側の墓壙壁に28cm掘り込み、壺棺を差し込んでいる。最深部は検出面から111cmである。壺棺の埋置角度は約45°である。

## 出土遺物 (Fig. 111)

出土遺物は壺棺に使用された壺形土器2点である。53は上蓋に使用された壺である。口縁部は打ち欠いてある。現状での器高約58cm、打ち欠いた部位での径約33cmを測る。胴部最大径は胴部上位にあり、44.4cmである。口縁部はく字状に外反し、内面に稜をもつ。頸部に三角突帯を1条巡らす。底部径は10.8cmであり、僅かな上げ底である。外面と内面の下部はハケ、他はナデである。54は下蓋に使用された壺である。ほぼ完全形に復元された。器高74.1cm、口径50.5cmを測る。胴部最大径は胴部中位にあり、58.5cmである。口縁部はく字形に強く外反し、口縁部は肥厚する。端面は強くナデている。口縁部直



Fig. 111 第38号壺棺出土遺物

下に三角突帯1条、  
胸部下半に断面台形  
突帯2条を巡らす。  
底部は径12cmあり  
僅かな上げ底である。

SK-39 (Fig.  
110, PL. 16-38)

南群にあり、6区  
中央に位置する。墓  
壙の南、東側を近年  
の擾乱によって壊さ  
れているが、全体に  
遺構の保存状態はよ  
い。主軸をN-60°-  
Eにとる合口式の成  
人用壺棺である。現  
存する墓壙は長さ12  
3cm、幅122cmを測る。  
床面はほぼ平坦であ  
り、検出面から75cm  
の深さである。墓壙  
西壁に55cmほど掘り  
込み、壺棺を差し込  
んでいる。最深部は  
検出面から127cmを  
測る。壺棺の埋置角  
度は約36°である。

#### 出土遺物

(Fig. 112)

出土遺物は壺棺に  
使用された壺形土器  
2点である。55は上  
蓋に使用された壺で

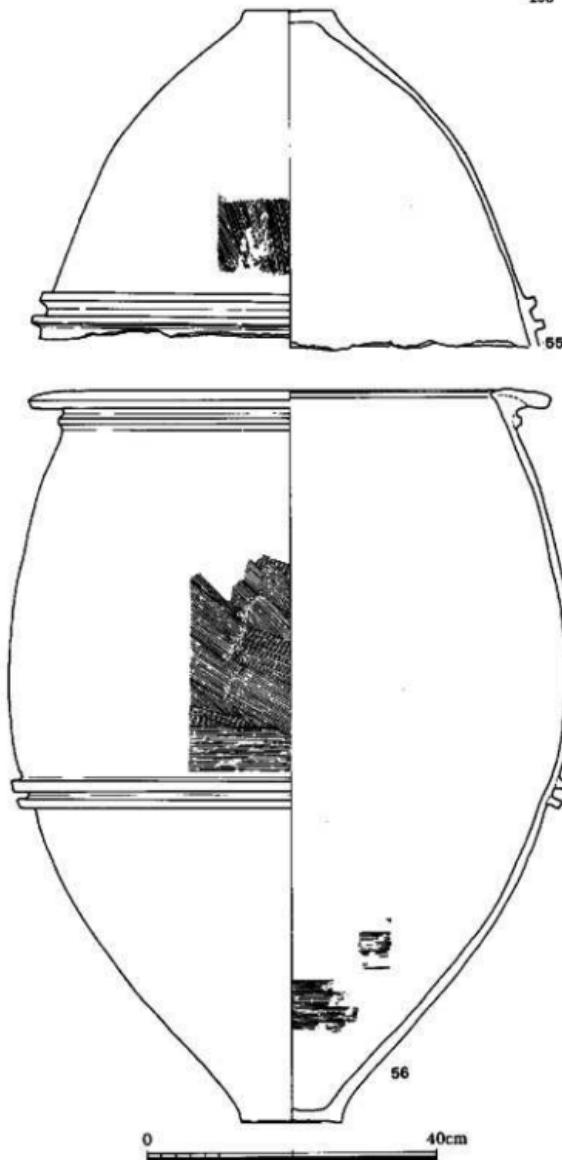


Fig. 112 第39号壺棺出土遺物

ある。胸部中位、2条の突帯より上を打ち砕き、下部のみを使用している。現存する器高45~46cm、打ち欠いた部位での径約69cmを測る。突帯は断面台形である。底部径は12.5cmであり、ほぼ平底である。外面に縦ハケが残るが、他はナデである。56は下棗に使用された棗である。ほぼ完形に復元された。器高は99.8cm、口径は73.2cmを測る。胸部最大径は胸部中位にあり、78cmである。口縁部は逆J字形を呈し、わずかに外傾する。口唇部は強くナデしている。口縁直下に断面台形の突帯1条、胸部下位に断面コ字形の突帯2条を巡らす。底部は径14cmであり、わずかな上げ底である。外面上位と内面下部は横~斜ハケ、他は指押サエ、ナデである。

SK-40 (Fig.113, PL.16-39)

南群にあり、6区と7区の境界付近に検出した。成人用棗棺SK-44を切る。墓壙の東側は工場内排水溝などにより破壊されている。主軸をN-77°-Wにとる呑口式の成人用棗棺である。現存する墓壙の長さ142cm、幅108cmを測る。床面はほぼ平坦であり、検出面から73cmを測

る。墓壙西壁を60cmほど掘り込み、棗棺を差し込んでいる。最深部は検出面から103cmを測る。棗棺の埋置角度は22°である。

出土遺物 (Fig.115)

出土遺物は棗棺に使用された橢形土

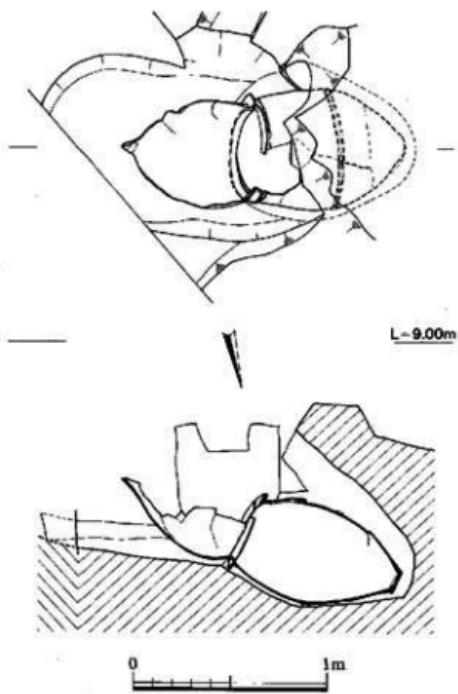


Fig.113 第40号棗棺 (SK-40) 実測図

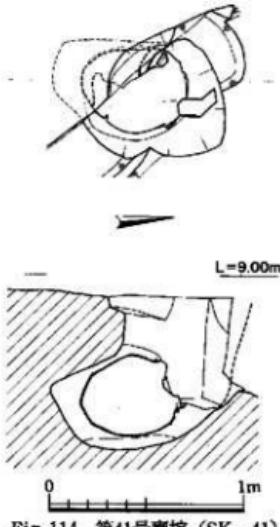


Fig.114 第41号棗棺 (SK-41) 実測図

器 2 点である。57は上蓋に使用された蓋である。胸部下半を欠失する。口径41.7cmである。胸部最大径は胸部上位にあり、50.4cmを測る。口縁部はく字形を呈し弱く内傾する。口唇部は肥厚し、端部は丸くおさまる。頸部に断面三角形の突帯が1条巡る。外面は縦ハケ、内面は指押サエ、ナデである。58は下蓋に使用された蓋である。ほぼ完形に復元できた。器高は81.0cm、口径は55.4cmを測る。胸部最大径は胸部上位にあり、59.6cmである。口縁部は逆L字形を呈し、わずかに外傾する。口縁直下に断面三角形の突帯1条、胸部中位に断面台形の突帯2条を巡らす。底部は径12.8cmであり、ほぼ平底である。外面下半部には縦ハケが残るが、他は丁寧なナデ、内面はヘラナデ、指押サエ後ナデである。

#### SK-41 (Fig.114, PL.16-40)

南群にあり、6区北端に検出された。墓壙は、工場内排水溝などにより破壊されている。主軸をN-5°-Eにとる呑口式の小児用壺棺である。上蓋の上部は欠失している。現存する墓壙の長さは73cm、幅61cmを測る。床面は緩く南側に下降する。墓壙南壁を約55cmほど掘り込み、壺棺を差し込んでいる。最深部は検出面から80cmを測る。壺棺の埋置角度は25°である。

#### 出土遺物 (Fig.116)

出土遺物は壺棺に使用された壺形土器1点、瓢形土器1点である。59は上蓋に使用された蓋である。口縁から肩部のみが残存する。口径32.8cmである。胸部最大径は胸部上位にあるとみられる。

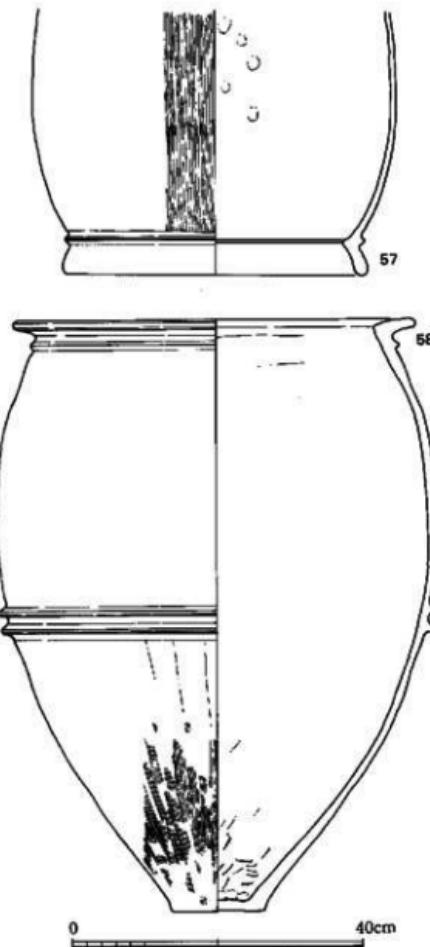


Fig.115 第40号壺棺出土遺物

口縁部はく字形を呈し、強く外反する。口唇部は丸くおさめる。口縁上面にヘラ描きによる沈線が3条施される。外面は綫ハケ、口縁部内外面は横ハケ後ナデ、内面は綫ハケ後ナデである。60は下臺に使用された瓢形土器である。本器種としては大形の部類に入る。肩部より上部を打

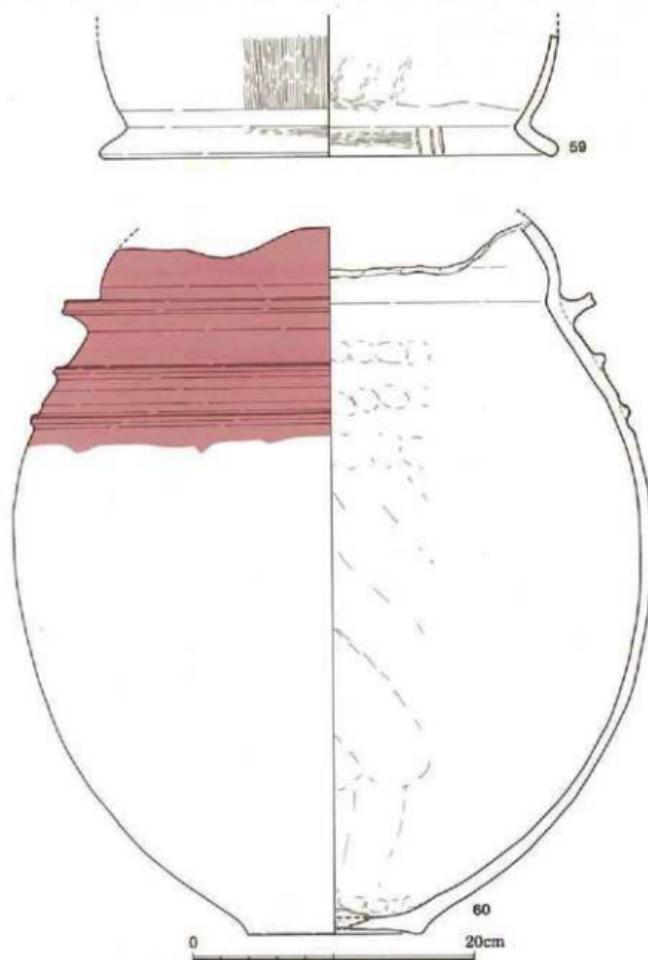


Fig.116 第41号櫛棺出土遺物

ち欠いている。現存する器高50.5cmを測る。胴部最大径は胴部中位にあり、44.5cmである。胴部上位に括れ部を設け、高さ2.3cmの断面台形の突帯を巡らせ、腰部の擬口縁としている。また、この突帯の下位に断面台形の突帯2条巡らす。底部は直径12.7cmを測り、緩い上げ底である。底部中央に直径3cmの穿孔が施される。穿孔は外方から刺突して施される。外面は丁寧なナデ、内面は指押サエ、ナデである。外面の計3条の突帯直下までに赤色顔料が塗布される。

#### SK-42 (Fig.119, PL.16-41)

南群にあり、6区中央東側に検出した。墓壙部分のほとんどは工場内道路下にある。また、蓋棺の上部は工場内排水溝によって壊される。主軸をN-41°-Eにとる単棺の成人用蓋棺である。墓壙の形状、規模は不明であり、床面は検出面から80cmの深さにある。墓壙の南西壁を35cm以上掘り込み、蓋棺を差し込んでいる。最深部は検出面から125cmを測る。蓋棺の埋置角度は47°である。

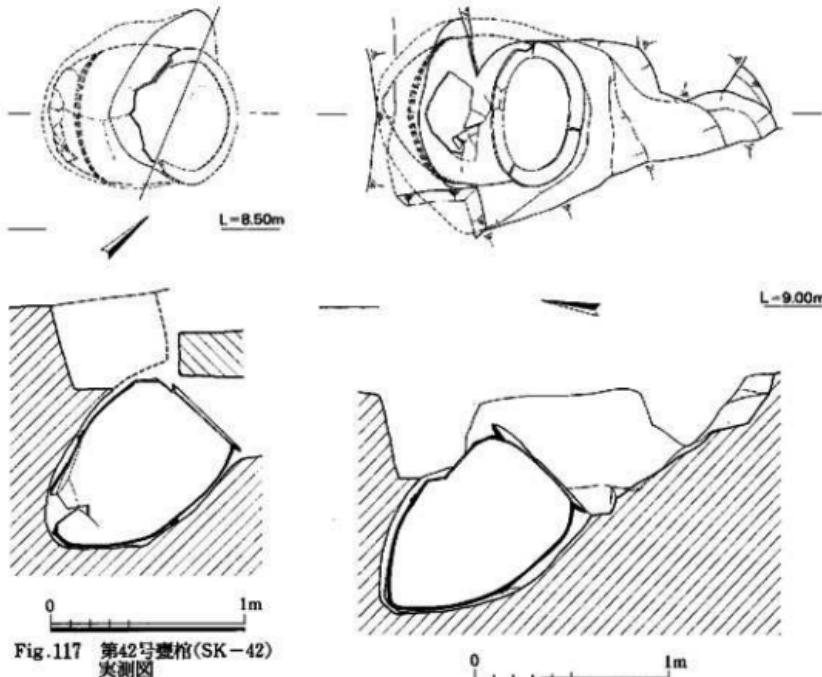
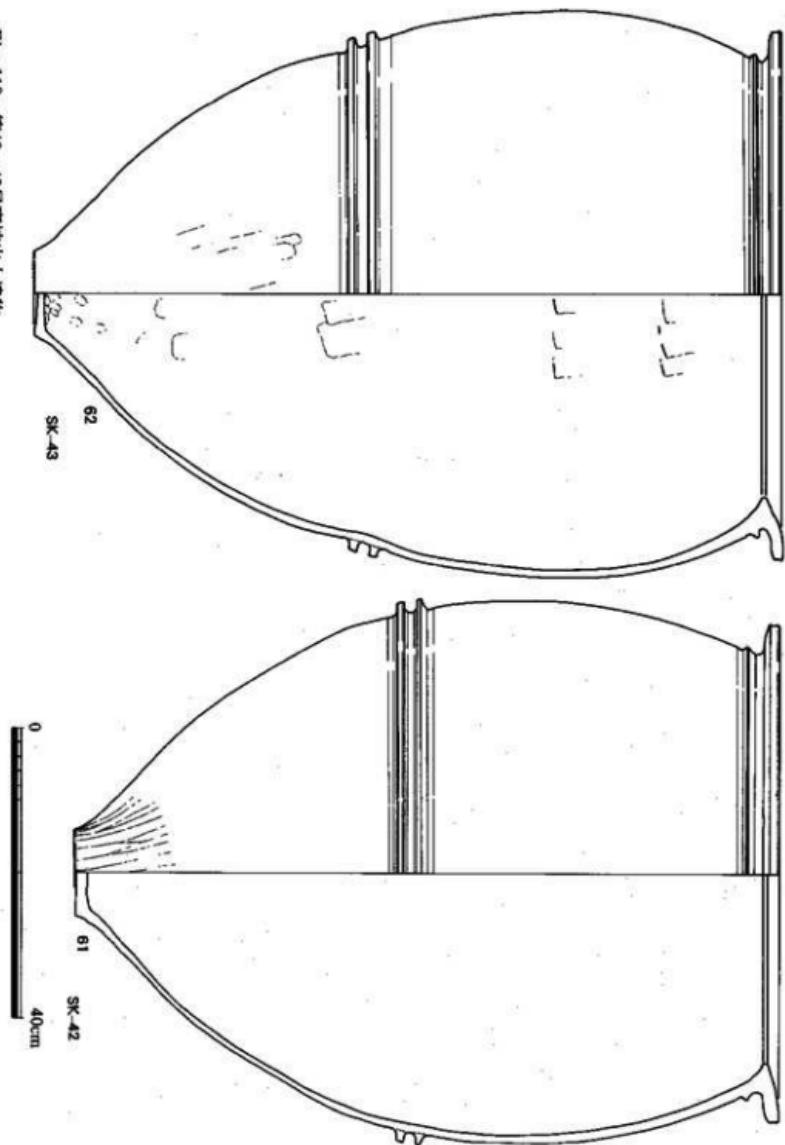


Fig.117 第42号蓋棺(SK-42)  
実測図

Fig.118 第43号蓋棺 (SK-43) 実測図

FIG. 119 第42、43号墓出土遺物



## 出土遺物 (Fig.119)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器 1 点である。61は口縁部を半分ほど欠損する。器高97.7cm、口径67.6cmを測る。胴部最大径は胴部中位にあり、73.5cmである。口縁部は逆 L 字形を呈し、強く外反する。口縁部は肥厚し、端面を強くナデる。口縁直下に断面三角形突帯 1 条、胴部中位に断面台形の突帯 2 条を巡らす。底部は径11.8cmであり、わずかな上げ底である。内外面共に丁寧なナデで仕上げる。

## SK-43 (Fig.118)

南群にあり、6 区南側に検出した。墓壙の東側を小児用壺棺 SK-36が切る。西側は工場建設時に削り取られている。主軸を N-A-W にとる単棺の成人用壺棺である。現存する墓壙は長さ185cm、幅97cmを測る。床面は南側から階段状に下り、検出面から65cmで平坦となる。さらに墓壙北壁に20cm以上振り込み、壺棺を差し込んでいる。最深部は検出面から115cmを測る。壺棺の埋置角度は44°である。

## 出土遺物 (Fig.119)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器 1 点である。62はほぼ完形品である。器高103.5cm、口径71.4cmを測る。胴部最大径は胴部上位にあり、77cmである。口縁部は逆 L 字形を呈し、強く外反する。口縁部は肥厚し、端面を強くナデる。口縁直下に 1 条、胴部中位に 2 条の断面台形の突帯を巡らす。底部は径11.7cmであり上げ底である。内外面共に強いナデで仕上げる。

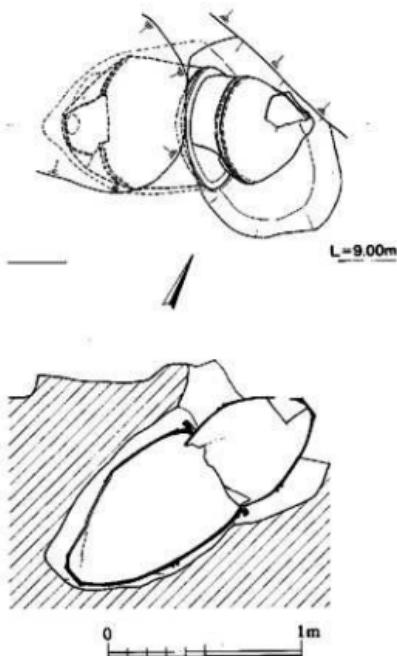


Fig.120 第44号壺棺 (SK-44) 実測図

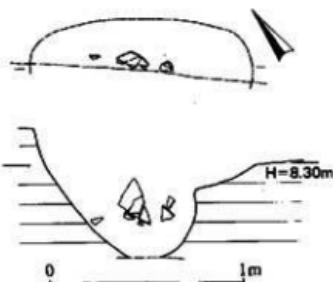


Fig.121 第45号壺棺 (SK-45) 実測図

## SK-44 (Fig. 120, PL. 17-43)

南群にあり、7区北側に出土した。墓壙の北側を成人用壺棺SK-40が切る。また、東側は工場内排水溝により壊される。SK-40と共に本調査区においてもっとも両側で検出した壺棺である。主軸をN-65°-Eにとる合口式の成人用壺棺である。残存する墓壙は長さ80cm、幅103cmを測る。床面は西側に向って下り、検出面から83cmの位置でやや平坦となる。さらに墓壙西壁に74cm程掘り込み、壺棺を差し込んでいる。最深部は検出面から118cmである。壺棺の埋置角度は36°である。

## 出土遺物 (Fig. 122)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器2点である。63は上壺に使用された壺であり、胸部上位で打ち欠いている。現存する器高は54cm、打ち欠いた部位での径約48.2cmを測る。胸部最大径は胸部上位にあり、51.1cmである。胸部中位に断面台形の突帯が2条巡る。底部は径12.3cmで、わずかに上げ底である。外面ナデ、内面指押サエ、ナデである。胸部上位に赤色顔料の塗布痕がある。64は壺形土器

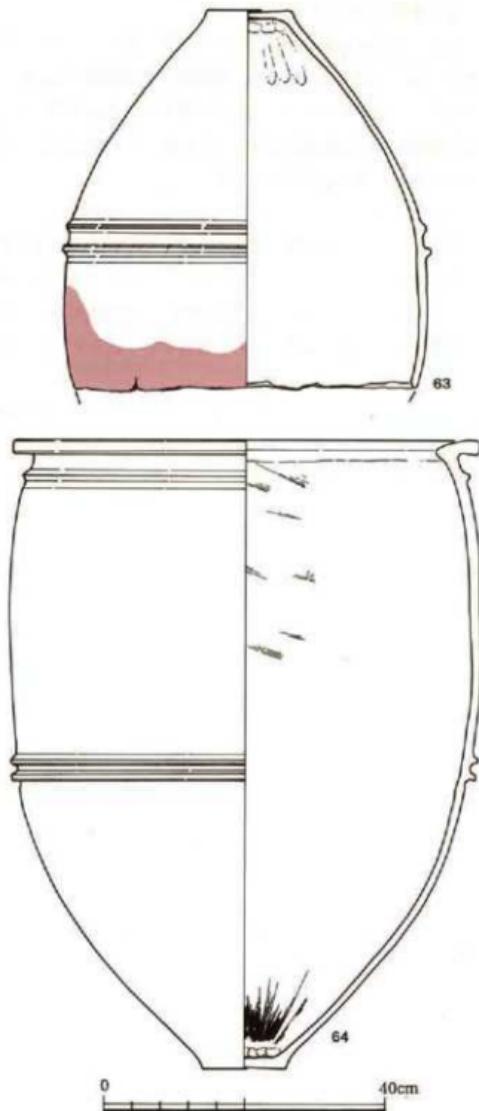


Fig. 122 第44号壺棺出土遺物

である。ほぼ完形で器高90cm、口径65.7cmを測る。胸部最大径は胸部上位にあり、66.3cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、強く外反する。口縁部は肥厚し、端面を強くナデる。

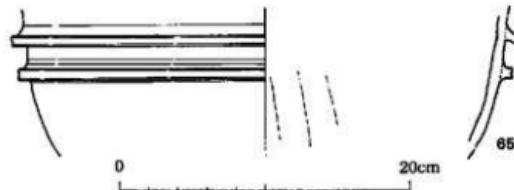


Fig. 123 第45号壺棺出土遺物

口縁直下に断面三角形の突帯1条、胸部下位に断面台形の突帯2条を巡らす。底部は径12.1cmであり、わずかに上げ底である。内外面共に強いナデで仕上げるが、内面にハケ調整痕が残る。

#### SK-45 (Fig. 121)

北群にあり、3区南端に検出した。工場建設の際に墓壙の大部分を破壊され、部分的な遺存となっている。また、墓壙の東側を溝SD-37が切っている。墓壙の主軸はおおよそN-50°Wにとり、長軸113cm、短軸26cm以上の規模である。深さは検出面から65cm以上あり、床面は確認できていない。壺棺は破碎した胸部破片が墓壙壁面に貼り付くように出土したが、現位置にあるかは疑問である。墓壙の規模と出土した壺棺の人大きさから、成人棺であると推定される。

#### 出土遺物 (Fig. 123)

出土した遺物は壺棺に使用された甕形土器1点である。胸部中位付近の破片が少量である。65は胸部下位の突帯部分の破片から復元した図である。断面台形の突帯2条が巡る。この部分での径は約67cmである。比較的大形の部類に入るとみられる。内外面ともに丁寧なナデで仕上げられる。

#### SK-56 (Fig. 124, PL. 21-65)

南群にあり、5区南端に検出した。墓壙の約半分は調査区外の道路上にあり、残りも工場内排水溝の下部で検出した。主軸をN-8°-Wにとる単棺の小児用壺棺である。墓壙は測定できる範囲で長さ108cm以上、幅90cm以上を測る。墓壙床面は北側から階段状に下る。床面はほぼ平坦であり、検出面から104cmである。墓壙南壁に23cm以上掘り込み、壺棺を差し込んでいる。

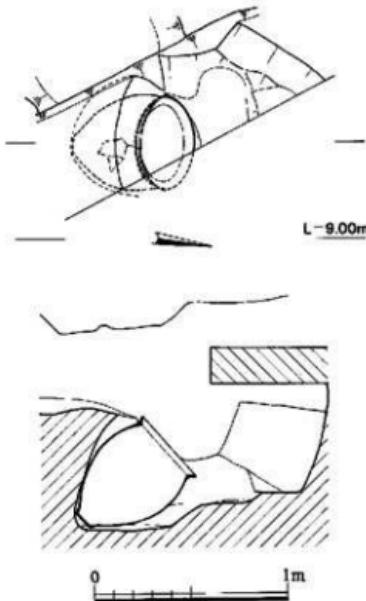


Fig. 124 第56号壺棺 (SK-56) 実測図

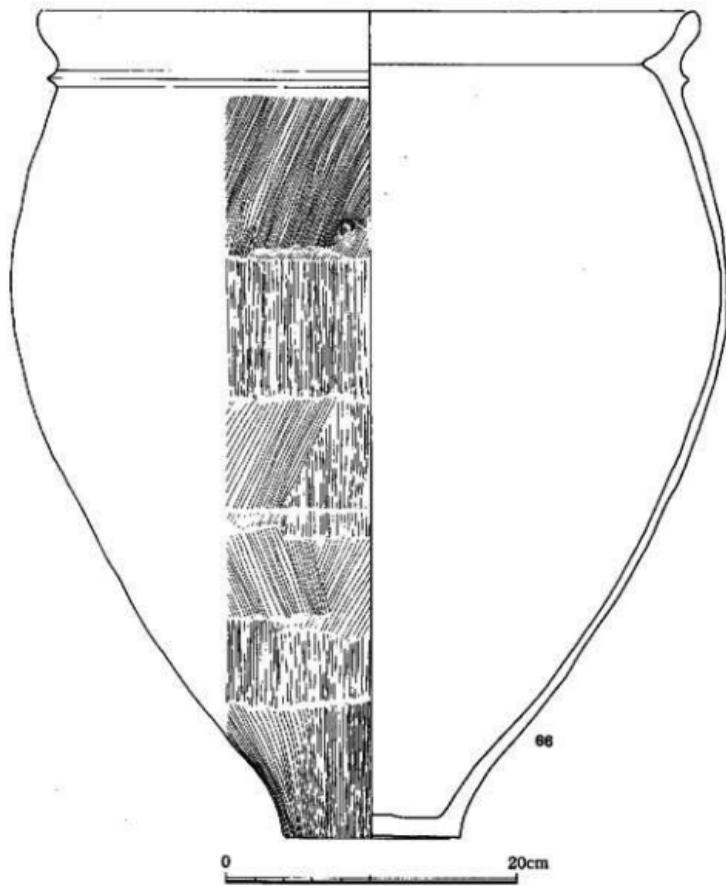


Fig. 125 第56号壺棺出土遺物

最深部は検出面から約120cmを測る。壺棺の埋置角度は41°を測る。

#### 出土遺物 (Fig. 125)

出土した遺物は壺棺に使用された壺形土器1点である。ほぼ完形に復元された。器高56.3cm、口径45.7cmを測る。胴部最大径は胴部上位にあり、49.5cmを測る。口縁部はく字形に外反し、口唇部は肥厚しやや内傾する。口縁部直下に断面三角形の突帯が1条巡る。底部は径12.2cmで

あり、ほぼ平底である。胸部外面は縦ハケ、口縁部と内面はナデである。

## (2) 土壙墓

SK-12 (Fig. 126, PL. 17-44~46)

1区東側に検出した。主軸をN-53°-Eにとる土壙墓である。東端は工場内排水溝により、上部を切られる。平面形は長楕円形を呈し、西側がやや広くなる。墓壙の上面は長さ143cm、幅70cmを測る。墓壙側壁南側に幅5~7cmの段が検出された。対面側で未検出であるが、木蓋設置に関する遺構と推定される。床面はほぼ平坦であり、西側にわずかに下る。また、西側で墓壙壁を13cm程度掘り込む。床面での長さ149cm、幅49cmである。最深部は検出面から約70cmを測る。墓壙内埋土はクロボク質土を主とする。

SK-13 (Fig. 127, PL. 18-47~48)

1区南側に検出した。主軸をN-13°-Eにとる土壙墓である。南側は近世墓により切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、南側がしだいに幅広くなっている。現存する長さ78cm、幅43cmを測る。床面はほぼ平坦であり、現存する長さ62cm、幅32cmである。最深部は検出面から55cmを測る。

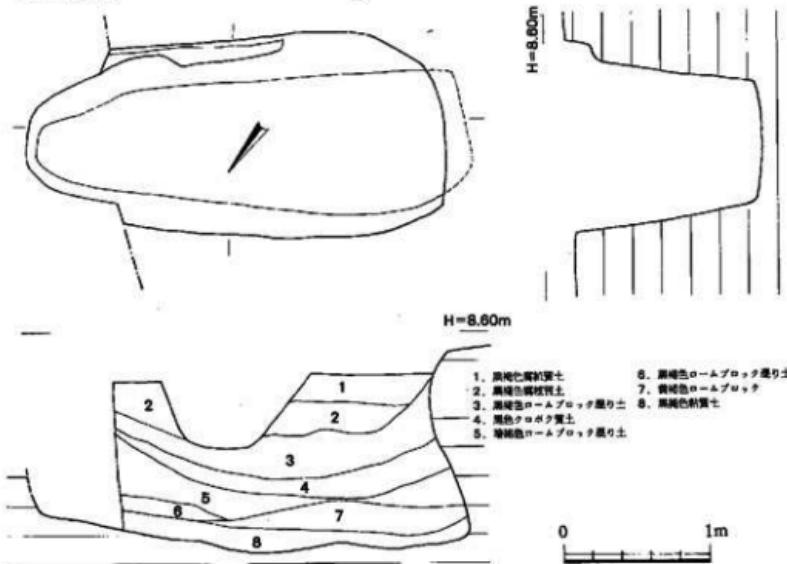


Fig. 126 第12号土壙墓 (SK-12) 実測図

SK-14 (Fig.128, PL.18-49・50)

1区北側で検出した。主軸をN-10°-Wにとる土壤墓である。北側は調査区外にある。平面形は隅丸長方形を呈し、北側にわずかに拡がる。現存する長さ67cm、幅35cmを測る。最深部は検出面から23cmであり、床面は北側にわずかに下る。

SK-15 (Fig.129, PL.18-51・52)

3区南側に検出した。主軸をN-27°-Eにとる土壤墓である。墓壙南側を溝SD-37に切

られる。また、西壁を擾乱により削られている。平面形は隅丸長方形を呈し、やや歪んでいる。現存する長さ97cm、幅72cmを測る。北側小口と東側は一段掘りとなり、5~10cmの段が設けられている。床面はほぼ平坦であり、わずかに北側に下る。床面は長さ80cm、幅40cmを測る。検出面からの深さは最深部で35cmである。小兒用の木蓋十壤墓とみられる。

SK-16 (Fig.130, PL.19-53・54)

5区南側に検出した。主軸をN-29°-Wにとる土壤墓である。墓壙西側は削平されている。墓壙は二段掘りであり、掘り方の長さ167cm、幅79cm、深さ10cm、その中央に長さ146cm、幅50~57cmの墓壙を穿っている。墓壙は両小口側が広く、中央が狭い。壁面の傾斜は両側が70°前後、小口側が82~88°を測る。床面は緩かに中央に下がる。床面は長さ139cm、幅31~36cm、深さ38cmを測る。木蓋土壤墓とみられるが、小口板を有する可能性がある。

SK-17a (Fig.131, PL.19-55・56)

2区中央に検出した横口式の土壤墓である。検出段階に下位遺構との識別が困難な部分があり、埋土の観察などから復

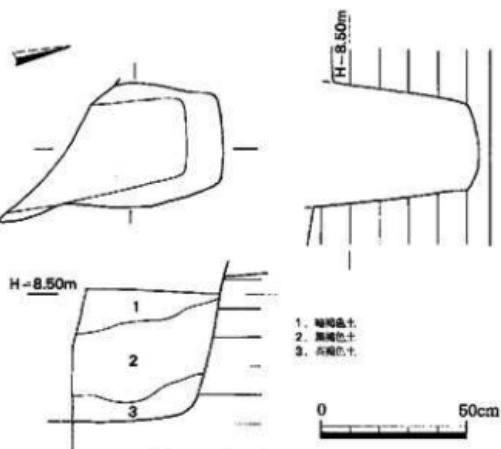


Fig.127 第13号土壤墓 (SK-13) 実測図

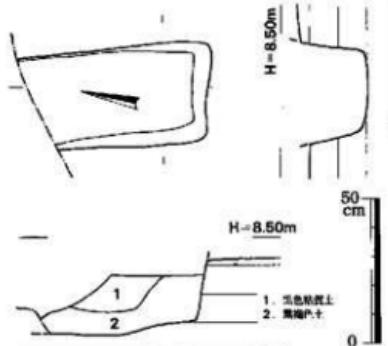


Fig.128 第14号土壤墓 (SK-14) 実測図

元した。喪棺 SK-07 および土壙墓 SK-17 b、SK-18を切る。墓 壇は不整形であるが、 およそその主軸は N - 90° - E をとる。平 面形は東側に突出する 瓢箪形を呈する。規模 は長さ 110cm、幅 90cm であり、西側へしだい に下る。検出面から約 40cm でほぼ平坦な床面 となり、さらに西壁下 方を 25cm ほど掘り込ん でいる。最深部は検出

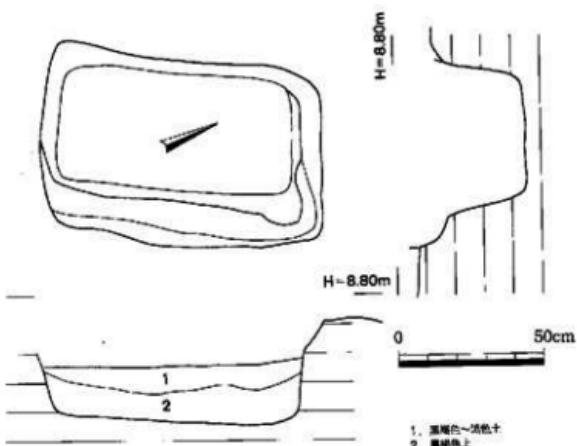


Fig. 129 第15号土壙墓（SK-15）実測図

面から 66cm を測る。埋土中位に須恵器坏身が 2 点並んで出土した。なお、本墓壇南側 20cm に径 約 30cm の小穴があり、その床面上に須恵器坏蓋 1 点が出土した。関連遺構の可能性がある。

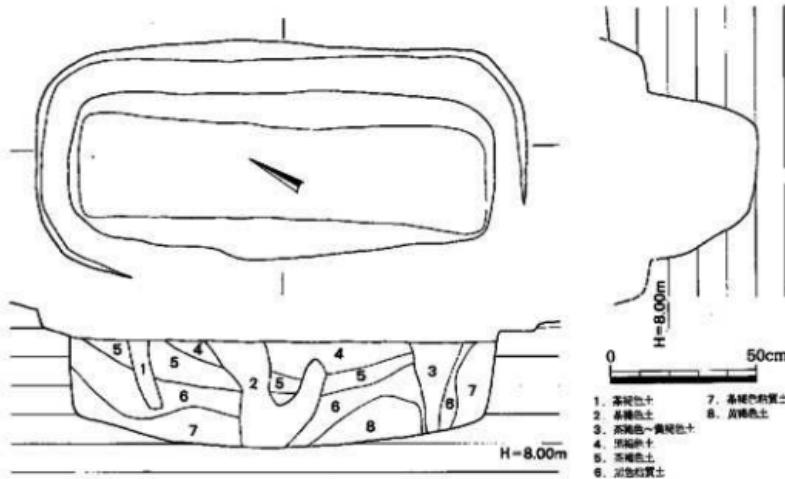


Fig. 130 第16号土壙墓（SK-16）実測図

## 出土遺物 (Fig. 132)

67はSK-17a南側の小穴から出土した完形の須恵器杯蓋である。宝珠つまみが付き、口縁部内面にかえりがある。68、69は墓壙埋土中位から出土した完形の坏身である。口径、器高に若干の差異があるが、共通した特徴をもち、同一型式とみられる。これらは7世紀後半に位置付けられる。

## SK-17b (Fig. 133, PL. 19-55・56)

土壙墓 SK-17a の西側部分と重複する。そのため墓壙の大半を失っている。主軸を N-12°-W にとる土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、北側が幅広い。長さ141cm、幅76cmを測

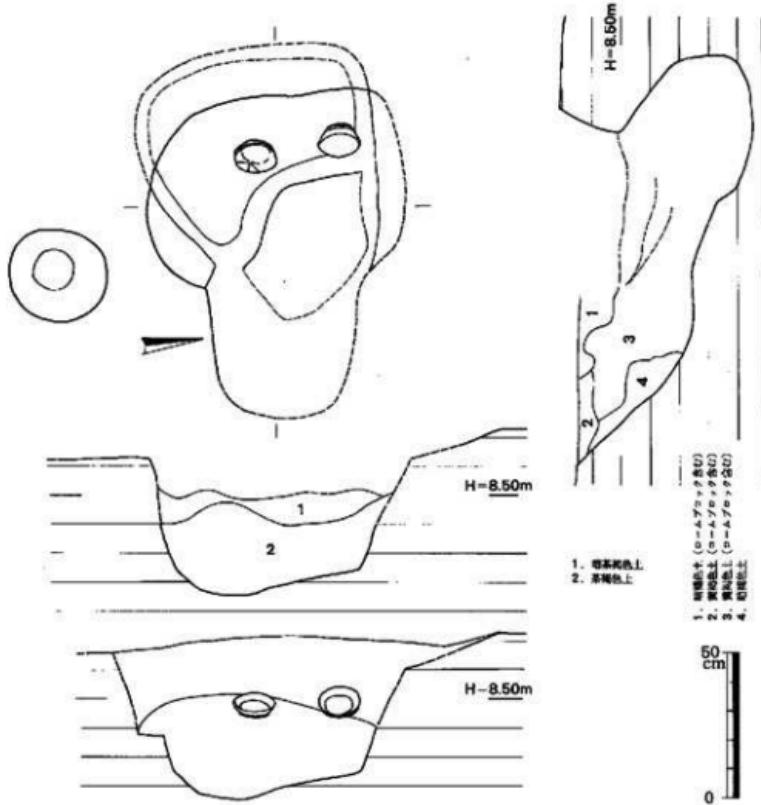


Fig. 131 第17a号土壙墓 (SK-17a) 実測図

り、深さは検出面から約30cmである。床面はほぼ平坦であり、緩やかに中央へ下る。

SK-18 (Fig. 134, PL. 19-57)

2区中央に検出した。主軸を N-58°-W にとる土壙墓である。基壙西側を土壙墓 SK-17a・b が切り、南側を甕棺 SK-07 が切る。そのため基壙の南西側側壁を失っている。基壙はほぼ長方形であり、長さ153cm、幅約85cmを測る。基壙は二段掘りであり、検出面から約40cmで段がある。二段目は長さ130cm、幅65cm、深さ55cmを測る。床面はほぼ平坦であり、わずかに東側に下る。壁面はほぼ垂直であり、隅部も明瞭であった。木蓋土壙墓とみられるが、箱形の木棺の可能性もある。埋土下半部は地山土であり、上部は腐植土であった。床面上に若干の赤色顔料が認められた。

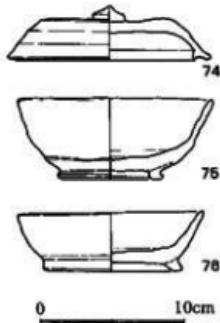


Fig. 132 第17a号土壙墓  
出土遺物

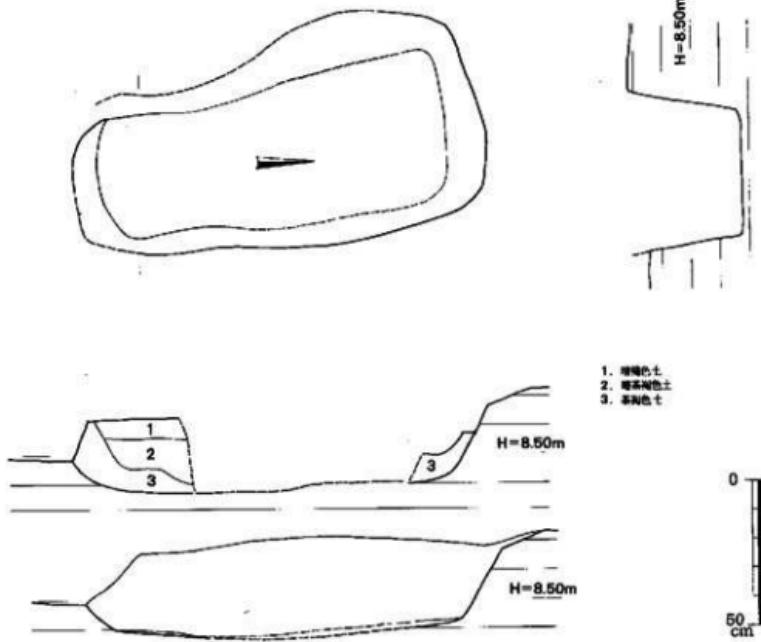


Fig. 133 第17b号土壙墓 (SK-17b) 実測図

## SK-32 (Fig. 135, PL. 20-58・59)

3区北側に検出した。主軸を N-44°-E にとる土壙墓である。墓域北側を甕棺 SK-08、SK-26が切る。また、西側で土壙墓 SK-48を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、南側がやや広い。長さ158cm、幅78cmを測る。墓壙は二段掘りであり、検出面から10~20cmで段がある。二段

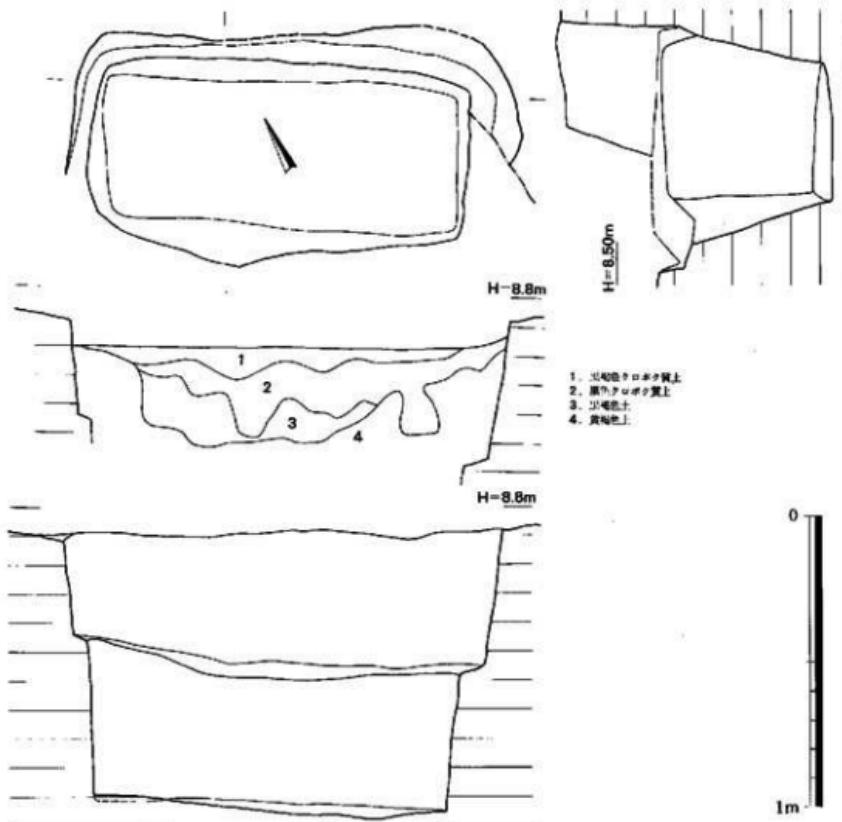


Fig. 134 第18号土壙墓 (SK-18) 実測図

目は長さ140cm、幅約60cmを測り、深さは20~30cmである。床面は南側に下り、両端で10cm前後 の高低差がある。木蓋土壤墓とみられる。

SK-46 (Fig.136)

5区南側に検出した。主軸をN-60°-Eにとる土壤墓である。西側の大半を工場建設に伴い 破壊されている。二段掘りの墓壙をもち、上部は長さ96cm以上、幅82cm以上を測る。検出面か ら12cmで段がある。二段目は長さ64cm以上、幅42cmを測る。深さは約60cmであり、床面はほぼ 平坦である。木蓋土壤墓とみられる。

SK-47 (Fig.137, PL.20-60・61)

3区北側に検出した。主軸をN-32°-Eにとる土壤墓である。南東側を土壤墓SK-48が切 る。二段掘りの墓壙をもち、長さ106cm、幅77cm以上を測る。検出面から約7cmで段がある。二 段目は長さ80cm、幅35cmであり、北東側が若干広い。床面は中央に向って下り、最深部は深さ 28cmを測る。床面での長さ66cm、幅24cmである。小児用の木蓋土壤墓とみられる。

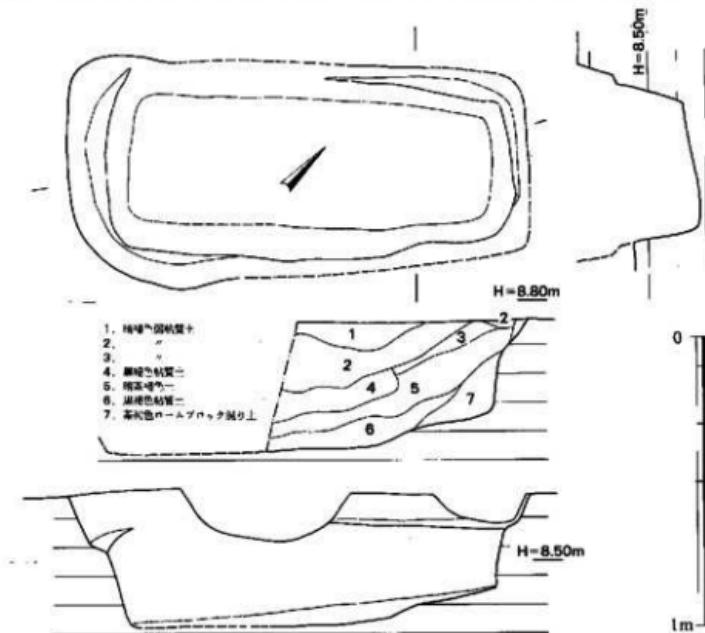


Fig.135 第32号土壤墓 (SK-32) 実測図

SK-48 (Fig. 138, PL. 20-60・62)

3区北側で検出した。主軸をN-53°-Eにとる土壌墓である。北側で土壌墓SK-47を切り、東側小口を土壌墓SK-32に切られる。そのため全長は不明である。やや歪んだ隅丸長方形を呈し、長さ110cm以上、幅59cmを測る。深さは検出面から約20cmであり、床面はほぼ平坦である。

SK-49 (Fig. 139)

2区南東端に検出した。上部は近年の攪乱が多く、当初墓壙平面形の検出に戸惑った。横口式の土壌墓であり、東側から西側に掘り込んでいる。墓壙の主軸はN-14°-Eをとり、反さ169cm、幅57cmを測る。上部は崩落しているが、西側壁側へ最大22cmの掘り込みが認められる。また、両小口側も床面で最大10cm抉り込んでいる。床面はほぼ平坦であり、北側へわずかに下る。床面の長さ167cm、幅78cmを測る。最深部は検出面から深さ77cmを測る。木蓋などの痕跡は認められなかった。

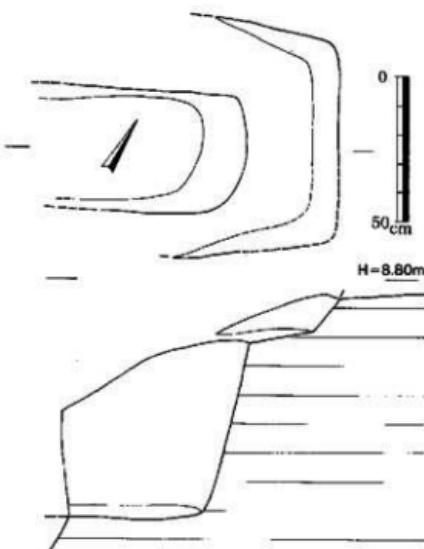


Fig. 136 第46号土壌墓 (SK-46) 実測図

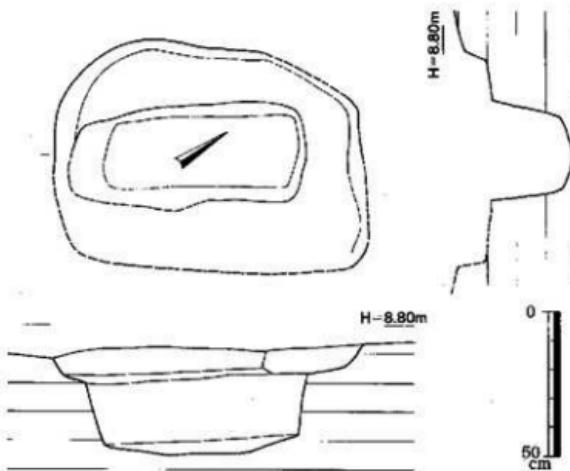


Fig. 137 第47号土壌墓 (SK-47) 実測図

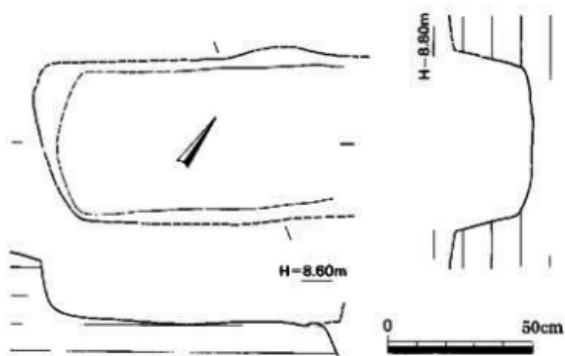


Fig.138 第48号土壤墓 (SK-48) 実測図

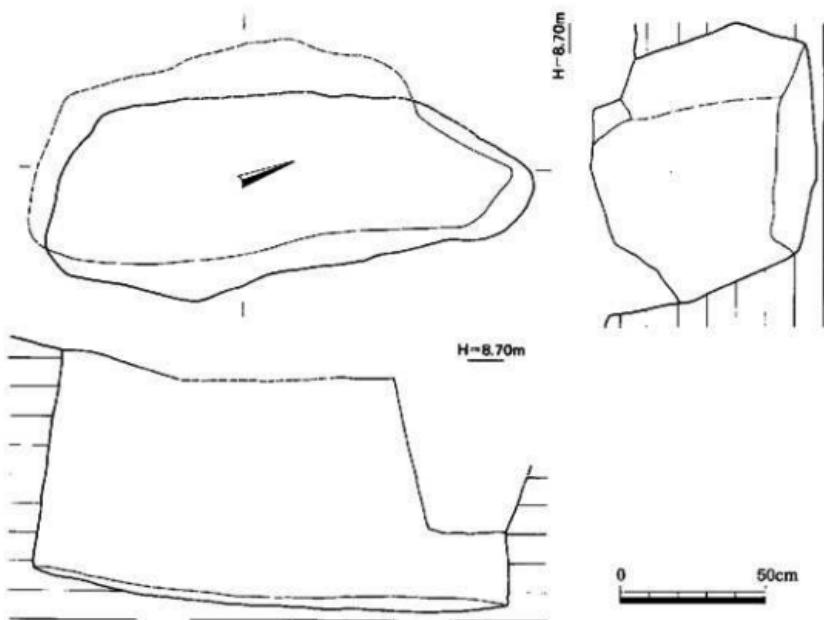


Fig.139 第49号土壤墓 (SK-49) 実測図

## SK-54・55 (Fig.140, PL.21-64)

7区北側に検出した横口式の土壙である。二段の掘り方をもち調査当初は別造構の可能性を考えたが、切り合いがないことや埋土の状態から同一造構であると判断した。土壙の東側を甕棺SK-44が切る。掘り方は東西125cm以上、南北98cmを測り、検出面から30cmではほぼ平坦な床面となる。さらにその西側壁から下へ横口部を深さ40cm、西へ32cm掘り込んでいる。床面は中央部へ緩かに下り、検出面から73cmを測る。埋土は横口部が茶褐色粘質土、上部がクロボク質土であった。本造構はその形態が甕棺の墓壙と共通しており、なんらかの埋葬関連造構と推定される。

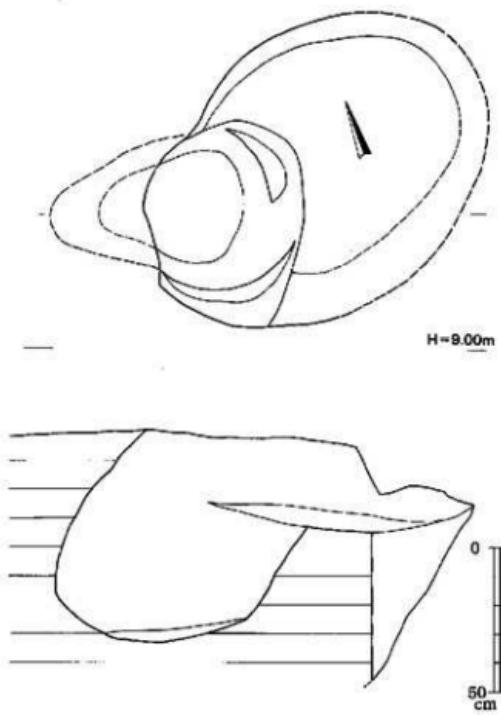


Fig.140 第54・55号土壙 (SK-54・55) 実測図

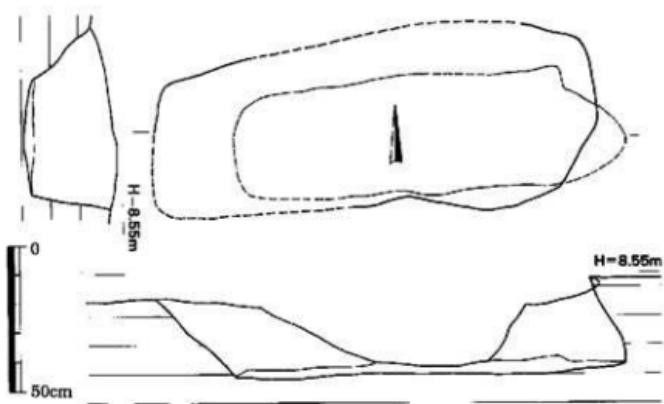


Fig.141 第57号土塙墓（SK-57）実測図

## SK-57 (Fig.141)

1区中央に検出した。主軸を N-90°-E にとる土塙墓である。墓塙北側と南西側を近世墓が切る。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ153cm、幅約65cmであり、深さは検出面から31cmを測る。床面は平坦であり、東側小口側を15cmほど掘り込む。床面での長さ135cm、幅40cmを測る。

## (3) 土壌

SK-53(Fig. 142, PL. 20-63)

6区西端で検出した。工場建設の際に南側全部と残存部分の上部を失っている。本来の平面形状は不明であるが、南北に細長い平面形態が復元される。残存部分での規模は長さ165cm以上、幅約120cmである。深さは削平面から45cm、北側崖面に残る土壤壁面の痕跡を含めると深さ127cmを測る。土壤内の埋土はローム、ブロックを含むクロボク質土であり、上半部から少量の土器片を出土した。

## 出土遺物 (Fig. 143)

本土境内からは数十点の土器片が出土した。甕、壺、筒形土器などの破片を含むが、復元、汎化できるものは多くない。69~71は甕である。69は口縁部であり、逆L字形を呈する。70、71は底部であり、平底とわずかな上げ底である。72、73は筒形土器であり、同一個体とみられる。72は口縁部であり、突帯部分から緩かに内傾し、外面に暗文風のヘラミガキを施す。73は胸端に近い部分であり、前者と同様の器面調整を施す。この2点には外面に赤色顔料が塗布されている。

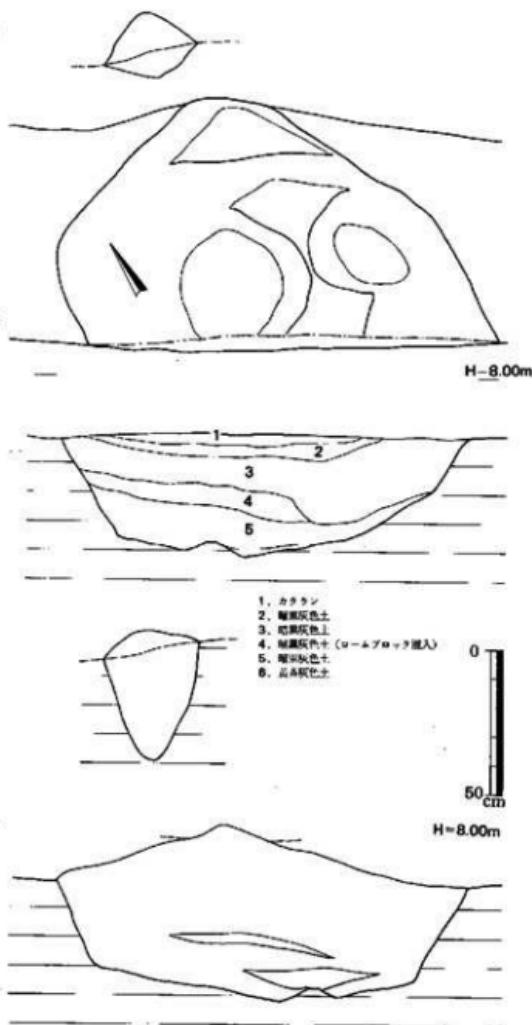


Fig. 142 第53号土壌 (SK-53) 実測図

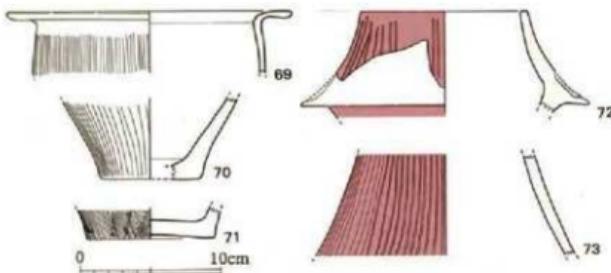


Fig. 143 第53号土壤出土遺物

## (4) 溝

SD-02 (Fig. 144, PL. 22-1)

4区において検出した。調査区を二分するように N-34°~41°-E に方位をとる溝状遺構である。西側で SD-37 を切る。全体で約 5m 検出した。溝の両端は工場の地下と道路の下方に延びており、その深さからなお、一部は遺存している可能性が高い。溝の規模は検出面において幅 3.3~3.5m を測り、断面は逆台形を呈する。壁面中段に段があり、幅 20~30cm 程度の平坦面を造り出している。全体として深さは 2.0~2.2m あり、段は深さ 1.0~1.1m の位置である。溝底は北東から南西へ緩かに下っている。底面は多少の凹凸がみられる。溝の最下部は八女粘土層に達している。埋土は流入土、自然堆積土からなり、砂質土は含まれず、流水の痕跡は認められない。各所の埋土の観察から 1 回の掘り替えが推定された。掘り替えに際して溝は断面 V 字形となり、中心が南側に偏っている。また、深さは約 50cm 浅くなる。掘り替え後の上部の埋土中には近世から中世の遺物が含まれ、それより下位の掘り替え以前の埋土中からは中世以降の遺物は検出されなかった。

## 出土遺物 (Fig. 145)

溝内の埋土中からは整理箱 1 箱程度の遺物が出土した。ほとんどが弥生時代の甕棺片などの土器類であったが、古代以降の遺物が少量認められた。埋土の下位からは須恵器壺、壺身、腹や須恵質の丸瓦片などが出土し、上部からは染付、土師器皿、瓦質のこね鉢などが出土した。111は須恵器壺の口縁～頸部片である。113は須恵器壺の頸部である。これらは 6 世紀後半に位置付けられる。112は須恵器壺身の底部である。8 世紀代とみられる。116、117は瓦片である。内面に布目を残し、外面を丁寧にナデている。焼成が良好な須恵質である。小片であり、明確でないが、7 世紀から 8 世紀代に位置付けられよう。114は土師器皿である。口径は 7.7cm に復元される。115は瓦質のこね鉢片である。これらは明確でないが 14~16 世紀におさまるものである。なお、これら以外に図化できなかったが、18~19 世紀に位置付けられる染付片も出土して

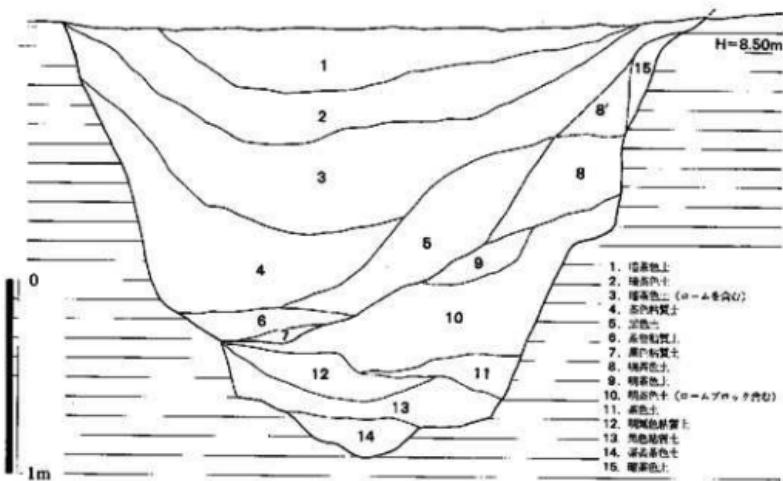


Fig. 144 第2号溝 (SD-02) 土層図

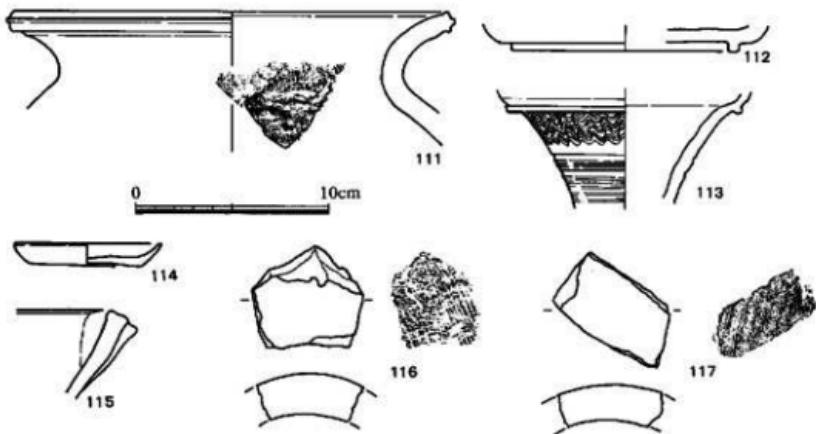


Fig. 145 第2号溝出土遺物

いる。

以上の結果からみて、この溝は古代に掘削されたものが一度埋まり、中世後期に再度掘り直されたものと考えられる。なお、溝は埋没しながら近世後期にもその痕跡を留めていたとみられる。

#### SD-37 (Fig. 146, PL. 21-66~69)

1区から4区の西側を通る溝状遺構である。なお、5区から7区の調査区西端は本溝の東壁が部分的に遺存している。その方向は1区から3区までがN-27°-Wであり、そこからわずかに折れ、N-85°-Wとなる。調査区内で約35mを検出した。多くの壺棺墓、土壙墓、土壙を切り、また、溝SD-02、近世墓に切られる。溝は検出面で幅50~70cm、深さ55~70cmを測り、断面形は中途から上方へ拡がる漏斗状(Y字形)をなす。厳密には両壁面は床面から40~60cmまでは幅20~30cmではほぼ垂直に掘られ、そこから40°~60°の傾斜となる。床面は凹凸があり、掘削時の工具痕とも推定された。溝内埋土は下部がロームブロックを含む褐色土、上部はクロボク質土であり、いずれも自然堆積とみられた。流水などの痕跡は認められなかった。全体として埋土中からの出土物は少なく、埋土上部から少量の土器などが出土した程度である。

本溝の延長とみられる遺構は、南に約40m離れた那珂遺跡群第15次調査地点において検出している。これは同調査地点第4、5、15cトレーニチにおいて検出したものであり、溝の規模、形態、方向が一致している。これらを繋ぐと現在約150mの長さを確認したことになる。溝は那珂丘陵の最高所を縦断するように設けられ、現時点ではほぼ直線である。環溝などの施設になるかは不明である。

#### 出土遺物 (Fig. 147)

溝内から出土した遺物は少ない。整理箱で1/2箱程度である。その中には壺棺片などが多く含まれている。しかし、数量は少いものの弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土した。これらが本遺構の時期を示すとみられる。出土遺物には壺、蓋などがある。いずれも小片となっていたが、外来系の土器があり、全体を復元できたものもある。77は溝内上

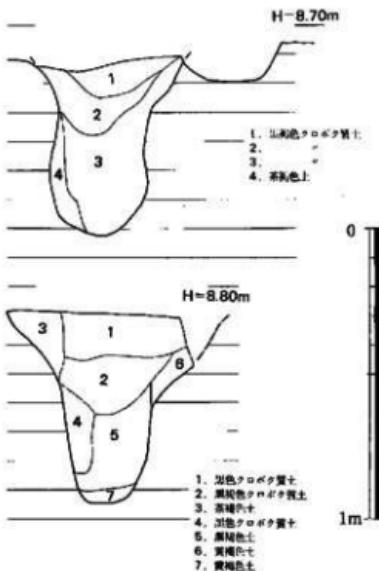


Fig. 146 第37号溝 (SD-37) 土層図

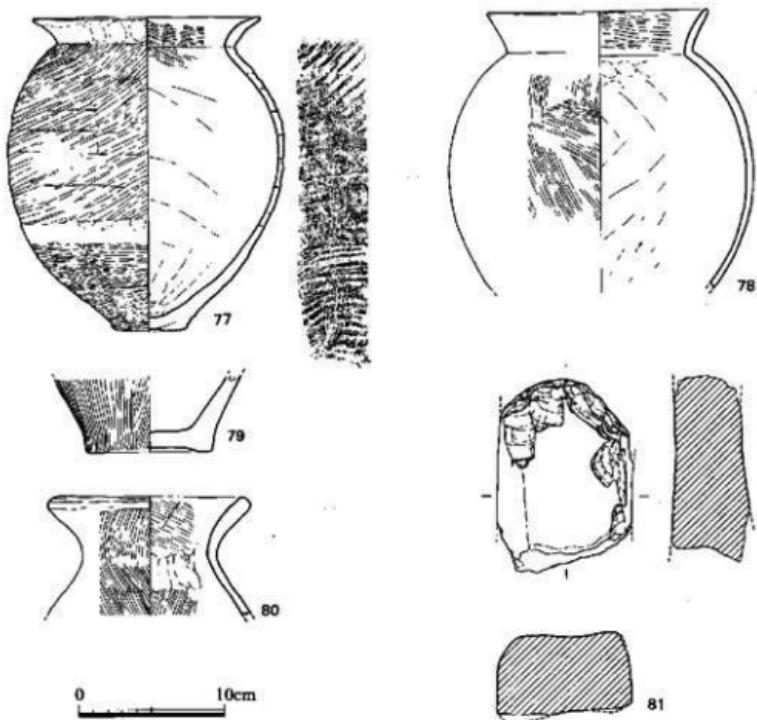


Fig.147 第37号溝出土遺物

部に完形で倒置、出土したものである。近畿五様式系の壺であり、胴部最大径が18.8cmあり、球形に近い体部をなす。器高21.3cm、口径15.6cmを測る。外面は胴部より上が斜めタタキ、胴部より下が横タタキとなる。この調整の変わる部位に粘土の貼付けがある。底部と胴部上位は分割製作とみられる。底部は不安定ながら粘土環貼付けにより形成される。78は庄内式系の壺である。胴部より上が三分の一程度残存する。口径15.2cm、胴部最大径21.3cmに復元される。口縁部はく字形に外反し、外面はナデ、内面は横ハケである。胴部外面はハケ、内面はヘラ削りである。79は壺底部であり、80は壺の口縁部である。81は砥石を敲石に転用したものである。

出土遺物の時期は、77、78が弥生時代終末から古墳時代初頭に、79が弥生時代中期、80が同後期に比定される。本造構の埋没時期は77、78の外来系土器の時期と考えられる。

SD-50 (Fig. 148,

PL. 22-2 ~ 4)

9区中央において検出した。N-84°~88°-Eに方位をとる溝状遺構である。調査区の周囲は工場建設により大きく破壊され、遺構上面も削平されている。検出面は鳥栖ローム層上位であり、1m前後の削平が予測される。遺構はほぼ直線であり、約4.5mの長さを調査した。その規模

H=8.70m

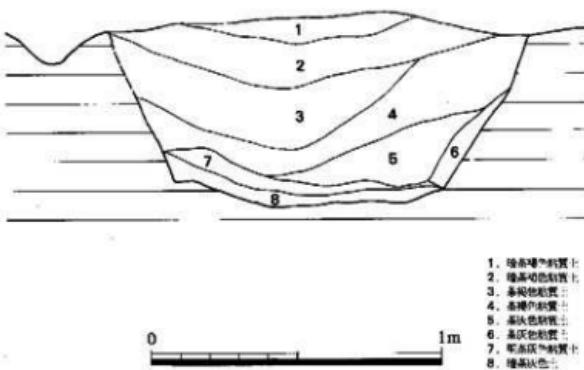


Fig. 148 第50号溝 (SD-50) 土層図

は検出面において幅150~162cmを測り、断面は逆台形を呈する。残存する深さは50~65cmであり、床面はほぼ平坦であるが多少の凹凸がみられる。床面の幅は80~95cmを測る。埋土は全体に暗褐色の粘土質であるが、上部にやや黒味を帯びる。埋土中からは整理箱2箱程度の遺物が出土した。堆積する土層に対応して1~3層を上層、4~6層を中層、7、8層を下層として遺物の取り上げを行った。下層からは遺物はほとんど出土しなかった。

#### 出土遺物 (Fig. 149・150)

出土遺物は須恵器と土師器が主体であったが、弥生時代の遺物もかなり含まれている。ここでは前者について報告する。上層では須恵器の環頬(82~93)、高环(95、96)、壺(94)、土師器の塊(99)、壺(97、98)、瓶(100、101)、甕(104)などがあり、他に少量の瓦片(103)がある。82、83は須恵器环蓋である。82は环身の可能性もある。83は口縁部がく字形に折れる。84~90は須恵器环身である。その形態から三種に分けられ、かえりの付くもの(84、85)、口縁は外反し高台の付かないもの(86~90)、口縁が外反し高台の付くもの(91~93)がある。94は須恵器壺の口縁部である。口縁端部が小さく外反する。102は土師質の手捏ね土器である。103は須恵質の瓦片である。丸瓦の端部であり、内側に布痕、外面は丁寧なミガキが認められる。中層では須恵器环頬(105~109)、土師器壺(110)がある。105~107は須恵器环蓋であり、105は口縁端部がく字形に折れるもの、106、107は宝珠つまみが付き、口縁内面にかえりがあるもの。108、109は須恵器环身であり、108は高台の付くもの、109は口縁にかえりのあるものである。これらの遺物は多少の時期幅や、古い遺物の混入があるものの、およそ7世紀後半に位置付けられるものである。

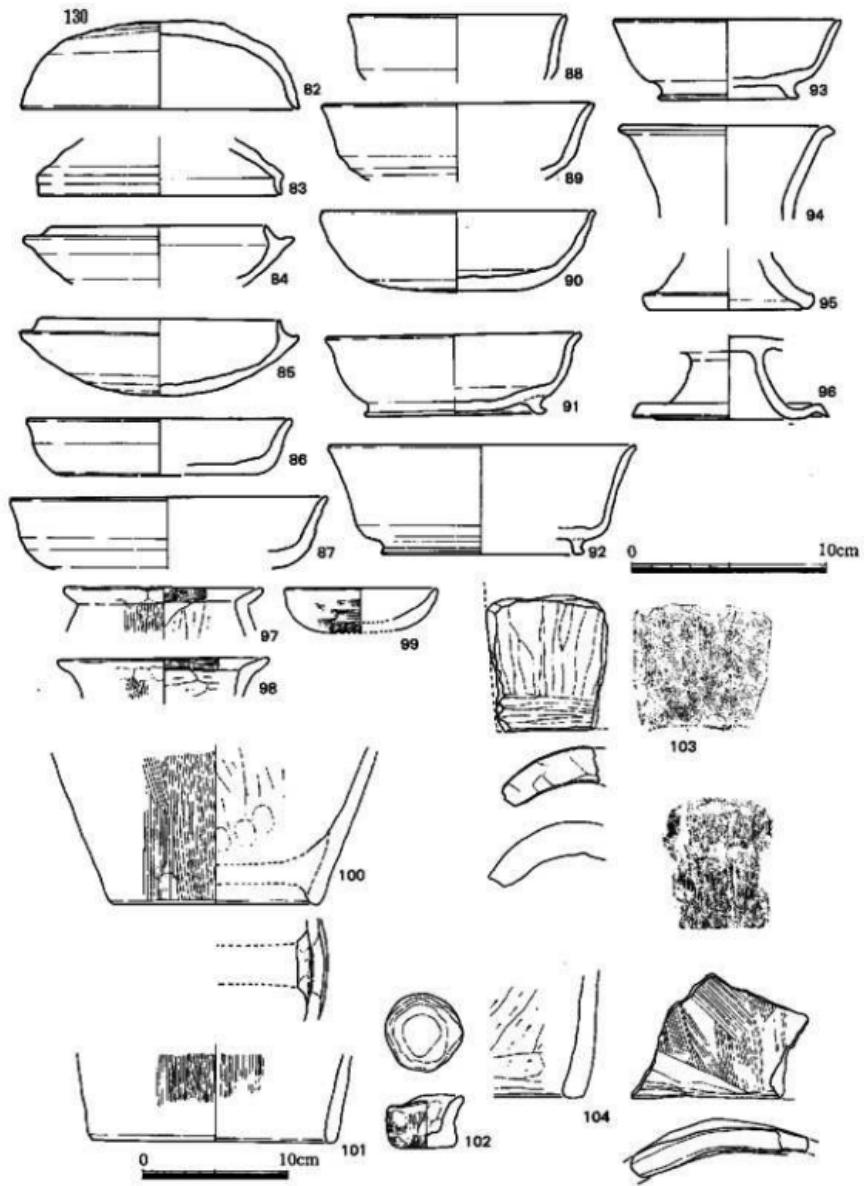


Fig. 149 第50号溝（上層）出土遺物(1)

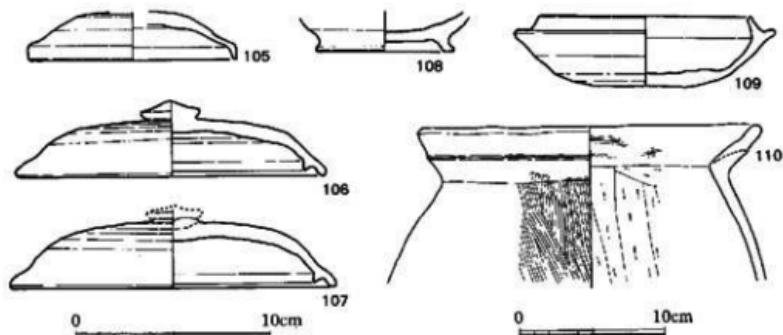


Fig. 150 第50号溝（中層）出土遺物(2)

## (5) その他の遺構と採集遺物 (Fig. 151)

以上、おもな遺構を紹介したが、この他にも調査区の各所で柱穴とみられる遺構を検出した。その数は全部で数十個であるが、調査区が狭く、また、遺構の切り合いや、近世から近年の擾乱により建物として復元することができなかった。それらの柱穴の時期は出土遺物が少なく、明確でない。118は6区の壺棺SK-39を切る柱穴から出土した須恵器環蓋である。これは古墳時代後期に位置付けられる。このほかにも同時期とみられる須恵器片や土師器片を出土する柱穴があり、のことから、柱穴の多くは古墳時代後期以降の所産と考えられる。

また、本調査地点および周辺では、多数の遺物を採集した。いずれも遺構や包含層から離れていたものであるために、帰属時期、性格などの検討は困難となっている。ただし、遺構の拡がりや、時期幅を考える上で参考になると思われる所以、ここにその一部を紹介する。

121、126、129、130は本調査地点の西側にある工場内の床面を除去して試掘した際に出土した資料である。121は古墳時代後期の須恵器盤である。125、130は壺棺片である。129は筒形土器の輪部破片であり、四方に透かしをもつてみられる。また、122～124、126は工場内に保管されているものであり、工場建設に際して各所から出土したものとされている。本調査地点周辺から出土したものと断定はできないが、いずれも壺棺の破片である。これらからみて、壺棺墓はさらに周辺に拡がっている可能性が高い。

119は須恵器環蓋であり、8・9区の擾乱中から出土した。低平な造りであり、口縁部が短く折れる。120は須恵器環身であり、1区の表土中採集品である。これらは古墳時代後期でもより新しい時期のものである。128、129は白磁であり、8・9区の擾乱土から出土した。両者は別個体であり、128は玉縁の口縁部、129は削り出しの高台の底部であり、11世纪後半から13世纪前半の間に位置付けられる。

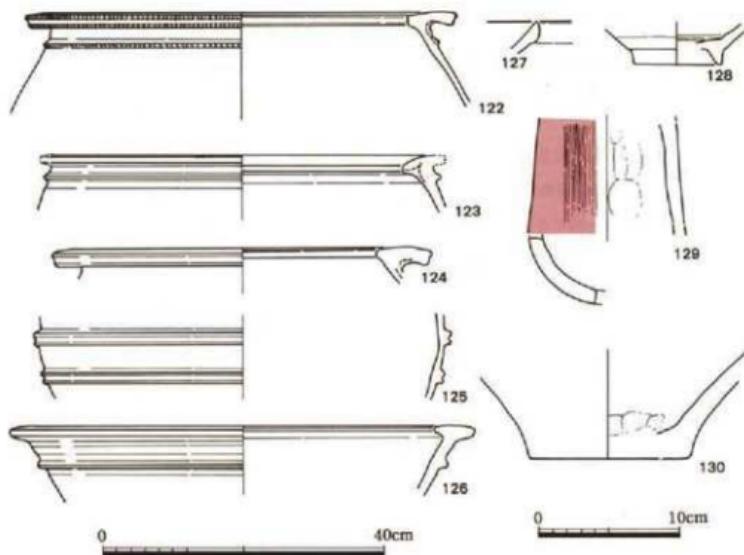
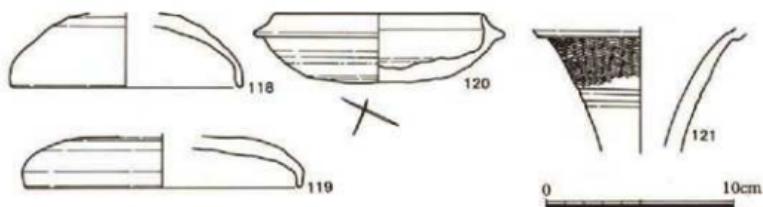


Fig. 151 表面採集遺物・その他

#### 4. まとめ

本調査区は那珂丘陵の最頂部にあたる。北側約50mには古墳時代後期の前方後円墳である東光寺剣塚古墳がある。本調査区はおおよそ南北に細長い範囲であり、調査面積は約240m<sup>2</sup>を測る。周囲が工場関係施設により大きく破壊されていたのに比べて、調査区内の破壊は比較的少なかった。しかし、検出した遺構は切り合いが多く、また、ほとんどなんらかの擾乱を受けている。ここではそれらの成果に基づき、本調査区の時期別のまとめを行なう。

本調査区では1) 弥生時代中期～後期初頭、2) 弥生時代終末～古墳時代初頭、3) 古墳時代後期～末、4) 古代～中世、5) 近世の五時期の遺構が複合している。そのうち、1)、3)、5) の時期は埋葬遺構が主である。これらは時期幅があり、直接関係するとは思われないが、この場所がなんらかの要因により埋葬地（墓域）として永く意識されていた可能性を示している。

弥生時代中期から後期初頭には甕棺墓35基、木棺・土壙墓14基があり、ほかに祭祀土壙1基がある。周辺の試掘、立会調査や、第3・15次調査地点の成果からこうした埋葬遺構はさらに南北に拡がっていることが判明しているが、その分布状態は今回の調査だけでは明らかにできない。埋葬遺構は、調査時に便宜的に二群に区分したが、この南北二群は有効であると思われる。つまり、4区には埋葬遺構がなく、周辺も少なくなる傾向がある。つまり、3区でもっとも南側はSK-24であり、ほとんど単独に近い分布を示している。また、5区でもっとも北側にあるSK-16も同様の状況を示している。4区には略東西方向に古代の溝SD-02が掘削されているが、ちょうどこの埋葬遺構の少ない部分を貫いている。こうした点からみて、それぞれの埋葬遺構の分布を表示する施設が存在した可能性が考えられる。甕棺墓と木棺・土壙墓の関係は、すべて前者が後者を切ることからみて、まず木棺・土壙墓が先に造られ、その後甕棺墓に变成了と考えられる。木棺・土壙墓の造られた時期は副葬品や土壙内埋土からの遺物がほとんどないことから不明である。しかし、先の分布状態からみて、両者がまったく無関係に造られたとは考えられず、一部は併存していた可能性も考えられる。したがって、甕棺墓のなかでもっとも古い時期に一部重複すると考えたい。土壙墓は遺存状態の良いものは二段掘りとなっており、おそらく、木蓋土壙墓とみられる。また、SK-16、SK-18には側板や小口板を設置した痕跡があり、木棺を構成したものと考えられる。これらの土壙墓は棺底の長さにおいて大きく二分され、120cm以上のものと、100cm以下に区分される。前者は9例、後者は4例ある。前者が成人棺、後者が小児棺と考えられるが、成人棺はその内法規模からみて、遺体をなんらかの屈葬状態においてとみられる。甕棺墓は成人棺13基、小児棺22基からなる。分布は南群が成人棺6基、小児棺5基があり、北群が成人棺7基、小児棺17基がある。小児棺数に差があるのは、南群側に造成による上部の削平がみられたことによるかもしれない。これらはいずれの群にも甕棺の配列に規則性を見出すことができなかった。さて成人棺は单棺が7基あり、過半

数を占める。その他に合口式1基、呑口式5基があるが、これらはすべて上縁に口縁部を打ち欠いたものを使用している。このように合口式をもたず、單棺を主体とする整棺墓群は本地域ではやや特殊な方を示している。こうした傾向は小児棺にもうかがうことができる。小児棺は合口式が13基で過半数を占め、この他に呑口式4基、單棺3基がある。このうち合口式の1基、呑口式4基の計5基は口縁部を打ち欠いたものを使用している。また、合口式の6基、呑口式の3基には赤色顔料を塗布した土器を使用している。これらの多くはいわゆる祭祀用の土器であり、底部もしくは胴部に焼成後穿孔を施している。ただしこの穿孔は埋置状態で下方を向かず、排水等を意図したとは思われない。穿孔は外方からの刺突によるものであり、なんらかの祭祀に使用したものと想定して用いたものと考えられる。また、特異な例としてSK-19、20がある。これは土器蓋土壤墓とすべきものである。以上の整棺墓の編年的位置付けは弥生時代中期後半から同後期初頭に位置付けられる。概要は第10章2で示すが、やや特異な個体を含むことから厳密には再度の検討を要する。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構としてSD-37がある。これは那珂丘陵の頂部に沿って略南北方向に設けられている。第15次調査地点の成果と合わせて現在約150mを確認している。時期、断面形状は那珂18次調査地点の溝SD-01に類似するが、その関係は不明である。溝内から出土した土器は近畿圏の影響を強く受け、本地域で製作されたものであり、この溝の性格と併せて今後検討していかたい。

古代の遺構には土壙墓SK-07aと溝SD-50がある。いずれも7世紀後半に位置付けた。土壙墓は横口式で須恵器环身を供獻している。周辺にも埋葬遺構が分布していると考えられる。溝SD-50は調査区南端で検出したが、ほぼ東西方向に向く。流水の痕跡はなく、地割に係わる遺構と考えられる。溝の形態、規模からみて、周辺では第8次調査地点のSD-01に近似する。この溝はほぼ南北方向であり、本調査地点SD-50の東側約110mに位置している。出土遺物は7世紀後半を主体とし、少量の8世紀代遺物を含む。瓦片の出土もある。このSD-01の床面の標高は約8.2m、SD-50が約7.8mであり、両者は0.4mの差がある。これは地形と距離をみるとなるべき差とはいえない。以上の点から両者は連続し一つの区画を構成する可能性が高い。この場合、南北60m以上、東西105m以上の規模の真北を向く方形区画であると考えられる。これはなんらかの官衛的遺構の一部とみられるが、その性格の検討には今後の調査が必要であろう。

古代から中世にかけての遺構として溝SD-02がある。先のSD-50とは方位を異にする。この溝も流水の痕跡がなく、地割に関する考えたいが、溝は掘り替えを通じて近世まで遺存しており、この地域の土地区画を含めての検討が必要となろう。

Tab.3 第16次調査出土遺物観察表

( )は推定値 幸口径・器高の単位はcm

番号	出土遺物	器種	遺存状態	口径( )	器高( )	遺物の特徴
1	SK-01	壺	口縁～肩部1/5と底部欠損	71.9	—	外面上部は横へら、下部は縦ハケ後ナデ、黒斑あり
2	SK-04	壺	底部1/2 口縁1/3残存	23.1	—	外面上部は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ
3	SK-05上部壺	壺	口縁1/5残存	27.3	—	後ナデ調整、上面に赤色顔料塗布
4	SK-05下部壺	壺	口縁～肩部1/4 底部1/2 残	24.1	—	外面上部は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ 内面下部に黒斑あり
5	SK-06上部壺	壺	口縁～肩部3/4残存	49.1	—	外面上部はナデ、内面はハケ後ナデ
6	SK-06下部壺	壺	口縁打ち欠く 1/4欠損	—	—	外面上部はナデ、内面は指オサエ・ナデ 肩部上半に赤色顔料塗布、黒斑あり
7	SK-07下部壺	壺	ほぼ完形	73.2	117.2	外面上部はナデ、下部底ナデで黒斑あり、内面下部は縦ハケ後ナデ
8	SK-07上部壺	壺	肩部より上半1/3残存	64.6	—	内外面ともナデ
9	SK-07中間壺	壺	ほぼ完形	46.1	67.7	外面上部は縦ハケ、内面はナデ調整、外面上部に黒斑あり
10	SK-08上部壺	壺	口縁～肩部4/5 底部1/3 残	29.5	—	外面上部は縦ハケで黒斑あり、内面は指オサエ、口縁上面に7条の沈線あり
11	SK-08下部壺	壺	ほぼ完形	—	31.2	33.0 外面上部は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ、口縁から2cm下に沈線
12	SK-09上部壺	壺	1個体に復元不可能	31.2	—	外面上部はヘタミガキ調整、内面は指オサエ・ナデ、外面上部に赤色顔料塗布
13	SK-09下部壺	壺	上半分は復元不可能	—	—	外面上部はヘタミガキで黒斑あり、内面は指オサエ・ナデ
14	SK-10壺	壺	肩部1/2欠損	69.4	113.5	内外面とも上部はナデ、下部は縦ハケ後ナデ、外面上部に黒斑あり
15	SK-11上部壺	壺	口縁～肩部1/3～1/4 残存	33.8	—	外面上部は横ナデ後横1ガキで赤色顔料塗布、内面はナデ調整
16	SK-11下部壺	壺	底部と口縁1/5残存	28.5	35.8	外面上部は縦ハケ、内面は指オサエ後ナデ、捺ね等内面は横のへら削り
17	SK-19上部壺	壺	ほぼ完形	69.2	22.3	外面上部は縦ハケ黒斑あり、内面指オサエ後ナデ、口縁内面に沈線が8条ある
18	SK-19下部壺	壺	ほぼ完形	31.2	35.6	外面上部は縦ハケ、内面はオサエ、口縁上部は縦ハケ後ナデ
19	SK-20壺	壺	口縁部欠損	—	—	外面上部に赤色顔料塗布、一整体を1/2とし、上部・下部に分割、黒斑有
20	SK-21上部壺	壺	ほぼ完形	31.9	33.4	外面上部は縦ハケ、内面は指オサエ後ナデ、はざ全面に幕が付着
21	SK-21下部壺	壺	ほぼ完形	25.4	31.5	外面上部は縦ハケで黒斑あり、内面は指オサエナデ、口縁上部に沈線1条あり
22	SK-22上部壺	壺	ほぼ完形	28.7	34.4	外面上部は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ、外面上部に指圧痕あり
23	SK-22下部壺	壺	ほぼ完形	32.8	37.5	外面上部は縦ハケで黒斑あり、内面は指オサエ後ナデ、下部は縦の長いナデ
24	SK-23上部壺	壺	ほぼ完形	31.9	29.5	外面上部は横1ガキ下部は縦1ガキ、内面は横ナデ、肩部に径約1.9cmの穿孔
25	SK-23下部壺	壺	肩部の1/4欠損	27.9	28.4	外面上部は横1ガキ、内面は横ナデで一部縦ハケがある、口縁に刺目あり
26	SK-24上部壺	壺	口縁打ち欠く	—	—	外面上部はハケ後ナデ、内面はハケ調整、底部外面はハケ後ナデ外面上部に黒斑あり
27	SK-24下部壺	壺	口縁～肩部上半を打ち欠く	—	—	外面上部はハケで黒斑あり、内面は指オサエ・ナデ
28	SK-25上部壺	壺	底部欠損	41.6	—	外面上部はハケ調整だが黒斑のため不鮮明、内面はナデ
29	SK-25下部壺	壺	ほぼ完形	50.8	61.0	外面上部は縦のハケ、内面はオサエ・ナデ、外面上部に黒斑が付着している
30	SK-26上部壺	壺	口縁のみ2/3残存	33.4	—	外面上部は縦ナデ、内面は縦ハケ、外面上部に赤色顔料塗布
31	SK-26下部壺	壺	口縁打ち欠く	—	—	外面上部は縦ハケ、内面上部は横ハケ、下部は指オサエ・ナデ

番号	出土遺構	器種	遺存状態	D番号	器高	遺物の特徴
32	SK-27上層	壺	底部下半1/3残存	—	—	外表面は縦ハケ後ナデで赤色顔料塗布、内面はヘラ削りで赤色顔料の零
33	SK-27下層	壺	腹部を僅かに欠損	39.9	27.5	外表面部上には縦の略文區ミガキ、下は擦磨き、底部は縦ミガキ、赤色顔料
34	SK-28	壺	ほぼ完形	63.7	37.8	外表面上部はナデ、下部は縦のヘラナデ、内面はヘラナデ、外面上黒斑あり
35	SK-29	壺	變形したが、復元か	—	—	—
36	SK-30上層	壺	腹部上半を打ち欠く	—	—	外表面上部は横ヘラミガキ、下部は縦ヘラミガキ、焼成後穿孔
37	SK-30下層	壺	底部欠損・腹部1/2残存	31.2	—	外表面上部は横ヘラミガキ、下部は縦のヘラミガキ、口縁に刮みと赤色顔料あり
38	SK-31上層	壺	口縁～底部の約1/2残存	34.3	—	外表面は突起の間に略文あり、赤色顔料塗布、口縁上面に縦の略文
39	SK-31下層	壺	口縁・底部の1/3残存	30.1	—	外表面は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ
40	SK-33	壺	ほぼ完形	59.3	36.8	外表面はナデ調整、黒斑あり、内面はハケ調整後ナデ、口縁は横ナデ
41	SK-33	壺	口縁～底部上半1/4残存	35.3	—	外表面は縦ハケ後ナデ、内面はナデ
42	SK-33	壺	口縁幅4cm残存	—	—	内外面とも指オサエ・ナデ
43	SK-33	壺	口縁幅5cm残存	—	—	外表面は縦減のため不明、内面は横ナデ
44	SK-33	壺	底部1/6残存	—	—	外表面は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ
45	SK-33	壺	底部1/4残存	—	—	外表面は縦ハケ、内面は指オサエ・ナデ
46	SK-33	壺	底部3/4残存	—	—	外表面はナデ、内面は指オサエ・ナデ
47	SK-33	壺	底部1/4残存	—	—	外表面はミガキ、内面はヘラナデ、底部は指オサエ・ナデ 外面上に黒斑あり
48	SK-33	壺	底部1/6残存	—	—	外表面はヘラ磨きで赤色顔料塗布、内面は指オサエ・ナデ
49	SK-34	壺	腹部中位～底部2/3残存	29.2	—	外表面は縦ハケで黒斑あり、内面は指オサエ・ナデ
50	SK-35	壺	全体の1/2欠損	32.0	—	内外面とも化粧のため調整不明、外表面部に黒斑あり
51	SK-36上層	鉢	腹部下半～底部4/5欠損	36.5	—	内外面とも横ハケ、外表面黒斑あり、口縁上面に3条の沈線と赤色顔料あり
52	SK-36下層	壺	ほぼ完形	35.8	36.8	外表面は縦ハケで黒斑あり、内面は指オサエ・ナデ
53	SK-38上層	壺	口縁打ち欠く・脚3/3欠損	—	—	外表面は縦ハケ、黒斑あり、内面は指ナデ
54	SK-38下層	壺	ほぼ完形	50.5	74.1	外表面上部はナデ、下部は縦ハケ後ナデ、内面は指オサエ・ナデ、黒斑あり
55	SK-39上層	壺	口縁～底部を打ち欠く	—	—	外表面は一部縦ハケ後残ナデ、内面はナデ調整
56	SK-39下層	壺	ほぼ完形	73.2	59.8	外表面は一部縦ハケ後残ナデ、黒斑あり、内面は一部横ハケ後残ナデ
57	SK-40上層	壺	腹部より上半1/3残存	41.1	—	外表面は縦ハケ、斜片状、内面は指オサエ・ナデ、剥落少し
58	SK-40下層	壺	ほぼ完形	55.4	81.0	外表面上部はナデ、下部は縦ハケ後ナデ、内面はヘラナデ後ナデ、黒斑あり
59	SK-41上層	壺	口縁～背部のみ・全周残存	32.8	—	外表面は縦ハケ、内面は斜めハケ後残ナデ、口縁上面に3条の沈線あり
60	SK-41下層	壺	腹部1/2、口縁～背部欠損	—	—	外表面上部は赤色顔料塗布、下部は黒斑有り、底部に穿孔あり
61	SK-42	壺	口縁1/2欠損	47.4	37.7	外表面下部は上部はナデ、下部は縦ハケ、内面はナデ、外面上黒斑あり
62	SK-43	壺	ほぼ完形	71.4	102.5	外表面は縦のヘラナデ、部分的に墨色顔料残存、内面はナデ調整
63	SK-44上層	壺	周部で打ち欠く	—	—	外表面はナデ、赤色顔料付着で黒斑あり、内面は指オサエ・ナデ
64	SK-44下層	壺	ほぼ完形	65.7	90.0	外表面はナデ、縦張口縁あり、内面はナデ

番号	出土遺構	器種	遺存状態	口径	器高	遺物の特徴
65	SK-45	壺	胴部のみ1/8~1/10残存	—	—	外面は横ナデで黒產生り、内面は縦のヘラナデ
66	SK-58	壺	ほぼ完形	45.7	56.3	外面は縦ハケ、内面はナデ
67	SK-22	壺	口盤幅5cm残存	—	—	規化強のため調整不明
68	SK-23	壺	底部の1/4残存	—	—	外面は縦ハケ、内面は縦ハケ後横ナデ
69	SK-53	壺	口盤の1/8残存	20.3	—	外面は縦ハケ、内面は横ハケ
70	SK-43	壺	底部の1/10残存	—	—	外面は縦ハケ、内面は黒化のため調整不明
71	SK-53	壺	底部のみ	—	—	外面は斜めハケ、内面は指オサエ
72	SK-53	器台	台部の1/4残存	111.9	—	外面は縦とガキ、内面は横ハケ、内外面とも赤色顔料塗布
73	SK-53	器台	台部の1/6残存	—	—	外面は縦とガキ、内面は横ハケ、外面に赤色顔料塗布
74	SK-17	須恵器蓋	完存	14.1	3.6	外面は横ナデ、内面はナデ、つまみは指オサエ・ナデ
75	SK-17	須恵器蓋	口縁1/6欠損	13.6	5.5	口縁は横ナデ、高台は指オサエ・底部はヘラ切り後ナデ
76	SK-17	須恵器蓋	ほぼ完存	13.1	4.0	口縁・高台は横ナデ、底部はヘラキリ後ナデ、高台は朱漆2本入れ貼付
77	SD-37	五瓣式蓋	完形	15.6	21.3	外面上部は斜めタスキ、下部は横タスキ、内面はナデ調査、口縁は横ハケ
78	SD-37	壺	胴部上半1/3・口縁1/8残存	15.2	—	外面はハケ調査、内面はヘラ削り後ナデ、口縁上面は横ハケ
79	SD-37	壺	底部の3/4残存	—	—	外面は縦ハケ、内面は指オサエ・縦ハケ
80	SD-37	壺	口縁～肩部1/6残存	14.9	—	外面は斜めハケ、内面は底が指オサエ・ナデ 口縁・肩部はハケ
81	SD-37	砾石	—	—	砂岩	—
82	SD-50 上部須恵器環	口縁約1/2欠損	14.4	4.4	—	口縁は内外とも横ナデ、上部は外表面がヘラ切り後ナデ、内面はナデ
83	SD-50 上部須恵器環	口縁1/8残存	12.4	—	—	全面ナデ
84	SD-50 上部須恵器環	口縁1/6残存	11.1	—	—	全面に横ナデ
85	SD-50 上部須恵器環	全体の1/2残存	12.4	3.9	—	口縁は横ナデ、底部外表面はヘラ削り、赤焼け
86	SD-50 上部須恵器環	口縁の1/8残存	16.0	—	—	口縁は横ナデ、外底底部は指オサエ・ナデ
87	SD-50 上部須恵器環	全体の1/2残存	13.0	3.9	—	口縁は横ナデ
88	SD-50 上部須恵器環	口縁の1/8残存	11.0	—	—	全面に横ナデ
89	SD-50 上部須恵器環	口縁の1/8残存	14.2	—	—	全面に横ナデ
90	SD-50 上部須恵器環	口縁1/6欠損	14.3	4.1	—	口縁は横ナデ、底部外表面は静止ヘラ削り後ナデ
91	SD-50 上部須恵器環	口縁1/2欠損	13.0	4.1	—	口縁は横ナデ、高台は指オサエ後・ナデ 内底底部はナデ
92	SD-50 上部須恵器環	1/5残存	16.1	5.8	—	口縁・高台ともに横ナデ
93	SD-50 上部須恵器環	全体の1/3残存	10.1	4.1	—	口縁・高台は横ナデ、底部外表面はヘラ切り後ナデ
94	SD-50 上部須恵器蓋	口縁の1/4残存	11.1	—	—	全面に横ナデ
95	SD-50 上部須恵器蓋	口縁1/4残存	—	—	—	調査全面に横ナデ
96	SD-50 上部須恵器蓋	調査完形	—	—	—	調査全面に横ナデ
97	SD-50 上部土師甕	口縁1/5残存	13.0	—	—	外面は縦ハケ、内面はヘラ削り

番号	出土遺構	器種	遺存状態	口径	基高	遺物の特徴
98	SD-50上層	土師壺	口縁1/7残存	04.6	—	外面は縦ハケ、内面は横へラ削り、口縁は内面が横ハケ後ナデ
99	SD-50上層	土師壺	口縁1/2残存	08.9	(3.0)	外面はナデ後ハケ、内面はナテ
100	SD-50上層	土師壺	底部1/4残存	—	—	外面は縦ハケ、内面は縦のへラ削り
101	SD-50上層	土師壺	底部1/6残存	—	—	内外面とも縦ハケ
102	SD-50上層	手掘ね上器	完全	4.9	3.4	外面は指オサエ後縦ハケ、内面は指オサエ、外面上部に施斑あり
103	SD-50上層	須恵瓦片	小破片	—	—	外面はヘラナゲ、内面は布目をヘラでナデ消す、底部はヘラ切り
104	SD-50上層	甕	小破片	—	—	外面は縦～横のハケ、内面は縦へラ削り
105	SD-50中層	須恵器環状	口縁1/6残存	08.0	—	口縁は横ナデ、底部外面はヘラ削り
106	SD-50中層	須恵器环状	完全	16.1	3.8	口縁は横ナデ、外面上部はヘラ削り、つまみはナデ
107	SD-50中層	須恵器环状	口縁1/4欠損	08.0	(4.0)	口縁は横ナデ、外面上部はヘラ削り、つまみは横ナデ
108	SD-50中層	須恵器环状	底部1/4残存	—	—	全面にナデ調整
109	SD-50中層	須恵器环状	全体の1/4残存	02.0	(3.5)	口縁は横ナデ、底部外面はヘラ削り、内面はナテ
110	SD-50中層	土師壺	口縁～肩部1/4～1/3残存	22.9	—	外面は縦ハケ、内面は縦のへラ削り、口縁・肩部に施斑あり
111	SD-02	須恵器環	口縁～肩部1/6残存	02.0	—	外面はタタキ、内面はタタキ後ナデ、口縁は横ナデ
112	SD-02	須恵器環	底部1/3残存	—	—	全面にナデ調整
113	SD-02	須恵器環	腹部1/3残存	—	—	外面は上部に波状文、下部にカキ目、内面には絞りと仄かぶりが見られる
114	SD-02	土師壺	口縁の1/4欠損	(1.7)	(1.0)	内外面とも横ナデ、底部に丸切り痕
115	SD-02	こね跡	口縁幅3cm残存	—	—	外面は指オサエ・ナテ
116	SD-02	須恵瓦片	小破片	—	—	外面はナテ、内面は布目仕痕
117	SD-02	須恵瓦片	小破片	—	—	外面はナテ、内面は布目仕痕
118	表裏	須恵器环状	底部欠損	02.0	—	全面にナデ調整
119	表裏	須恵器环状	1/5残存	04.0	—	口縁は横ナデ、上部外面はヘラ削り、内面はナテ
120	表裏	須恵器环状	1/5残存	01.0	(3.0)	全面にナデ調整、底部外面にヘラ記号
121	表裏	須恵器環	底部1/2残存	—	—	外面は上部に波状文、中央に2条の凹線、下部にシボリ、内面は横ナデ
122	表裏	甕	口縁のみ	08.0	—	外面は横ナデ、口縁・突堤に刻み目あり、口縁上面に赤色顔料施付
123	表裏	甕	小破片	08.0	—	内外面とも横ナデ
124	表裏	甕	小破片	07.0	—	全面に横ナデ
125	表裏	甕	胴部1/8残存	—	—	外面の2木の突堤は横ナデ、その間はハケ後ナテ、内面は横ナデ
126	表裏	甕	小破片	02.0	—	全面に横ナデ
127	表裏	器台	袖の径1/5残存	—	—	外面は縦のヘラミガキ後赤色顔料塗布、内面は指オサエ、透かしあり
128	表裏	白壁	口縁幅3cm残存	—	—	性が厚い
129	表裏	白壁	底部1/4残存	—	—	外面底部と高台に浮きがわからない
130	表裏	甕	底部1/7残存	—	—	内外面ともナテ、底部内面は指オサエ・ナテ

## 第7章 第17次調査の記録

### 1. 調査と経緯と古墳の保存

1988年9月にアサヒビル博多工場からT場敷地内にある特別高庄変電施設の改築工事に関する埋蔵文化財の事前審査の依頼があった。これを受けて1988年10月7日に試掘調査を実施した。対象地点は既設の変電施設のほか、工場内の廃材置場として使用された際に大きく掘削された跡があり、遺構の遺存状態は悪いとみられたが、東光寺剣塚古墳の北側50mの位置にあたり、なんらかの関連遺構の存在も予測された。

試掘調査の結果、対象地内に多量の埴輪を含む古墳周溝を発見した。このために、遺構の保存に関する協議を行った。しかし、変電施設の他所への移設が困難なために、発掘調査を実施して記録に残すことになった。調査は1988年10月28日から一週間の予定であった。

発掘調査の過程で、遺構が掘削を免れ対象地南側に偏って分布し、保存状態が予測以上に良いこと、東光寺剣塚古墳とは別の古墳周溝である可能性がでてきたことなどのために、改めて工場側と協議し、新設の変電施設を2m程北側にずらし、盛土の上に工事をすることで遺構の保存を計るという合意に達した。このため、対象地内の調査は盛土により破壊の可能性のある部分に留め、調査終了後同年11月6日から川砂を入れ埋め戻した。

なお、変電施設西側部分の地下埋設の高電圧ケーブル部分についての発掘調査を1988年12月6日から4日間実施した。ここでは保存状態は悪かったが、古墳周溝の延長を確認した。また、1989年1月21日から3日間にわたりて旧変電施設の解体工事の立会調査を実施し、同様に周溝の延長を確認した。これらの調査を経て、本調査地点の古墳が小規模な前方後円墳であることが分った。

本古墳は通称として「剣塚北古墳」とした。なお、その後1991年にはこの保存された周溝部分が工場側の整備計画に含まれ、芝張りにより表示されて、東光寺剣塚古墳とともに現地で見学することができるようになった。

### 2. 調査の概要

試掘調査と南側の第15次調査地点の成果から、この地点が鳥栖ロームを基盤とする洪積台地上であり、既に相当の削平を受け、各種の遺構も基礎部を残すのみの状態になっていることがわかっていた。表土と造成土を機械で剥いだ時点では地山面となっていた。調査範囲内で検出した遺構は古墳周溝1と古代の井戸1、中世の溝1、柱穴5であった。

調査にあたっては東光寺剣塚古墳と共に多角測量基準点を設けた。調査区は調査地形に沿った東西方向に一辺6mの方眼を設け、北東端を1区とし、南北方向に向って千鳥状に2、3、4…区と区分した。

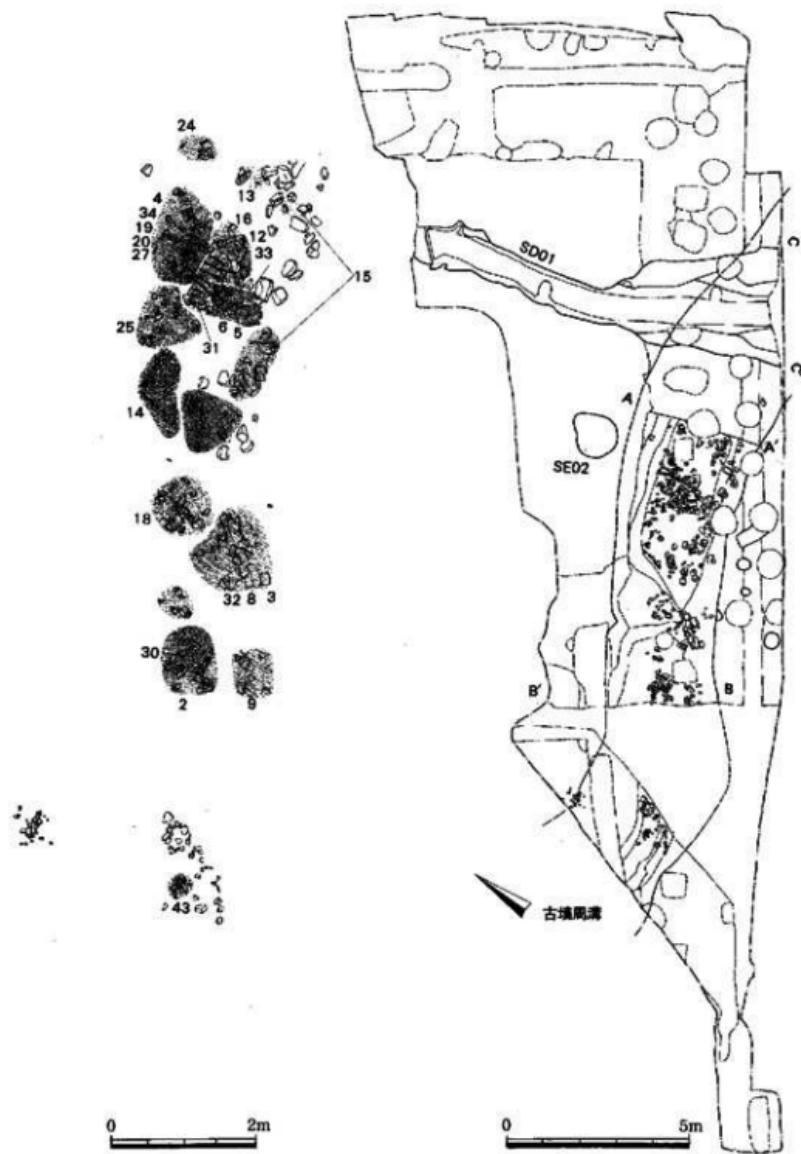


Fig. 152 調査区全体図

### 3. 剣塚北古墳

#### (1) 調査前の状況

調査区の南側で発見したものであり、表土除去後に周溝の一部と埴輪を検出し、古墳の存在を確認した。調査前には古墳の存在を示すような地形の高まりや周溝の落ち込みは認められなかった。古墳の立地する位置は、南側にある東光寺剣塚古墳と同様に那珂丘陵の中央付近、最高所にあたる。しかし、この位置に古墳が存在することに関する記録は残されていない。貝原益軒によって1704年に記された「筑前國統風土記」には「剣塚」として東光寺剣塚古墳の紹介はあるものの、周辺に他の古墳の記載はない。後述するように中世後期に掘削された溝SD-01が、古墳周溝を利用している点からみると、この時期までは周溝の痕跡が存在したと考えられる。したがって、本古墳は中世後期以降、近世以前に削平されたものとみられる。

#### (2) 墓丘、周溝

周溝は地山である鳥栖ローム層を掘り込んで設けられている。周溝は中世の溝SD-01のか、多くの擾乱のために遺存状態は必ずしも良くない。また、調査区内には墓丘盛土は残存しない。2、4、6、8区ではゆるくカーブを描きながら調査区外に延び、7～9区ではそのカーブに斜交して連続し、さらに西側調査区外に延びている。8区内においてくびれ部があると推定される。周溝の規模は後円部側で幅約3.6～3.0m、深さ0.9～0.8m、前方部側で3.5～3.2m、深さ0.6～0.7mを測る。肝心のくびれ部が調査できなかったので厳密でないが、周溝の墓丘側のラインは明瞭なくびれをもち、外側のラインはゆるい曲線をもっていると推定される。全体

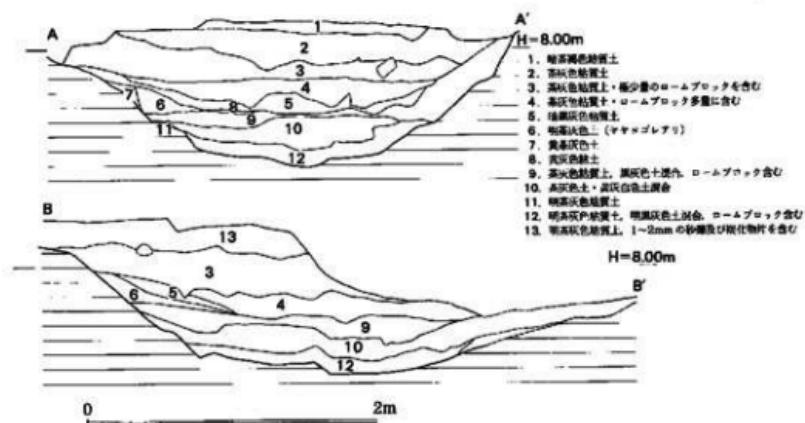


Fig.153 古墳周溝土層図

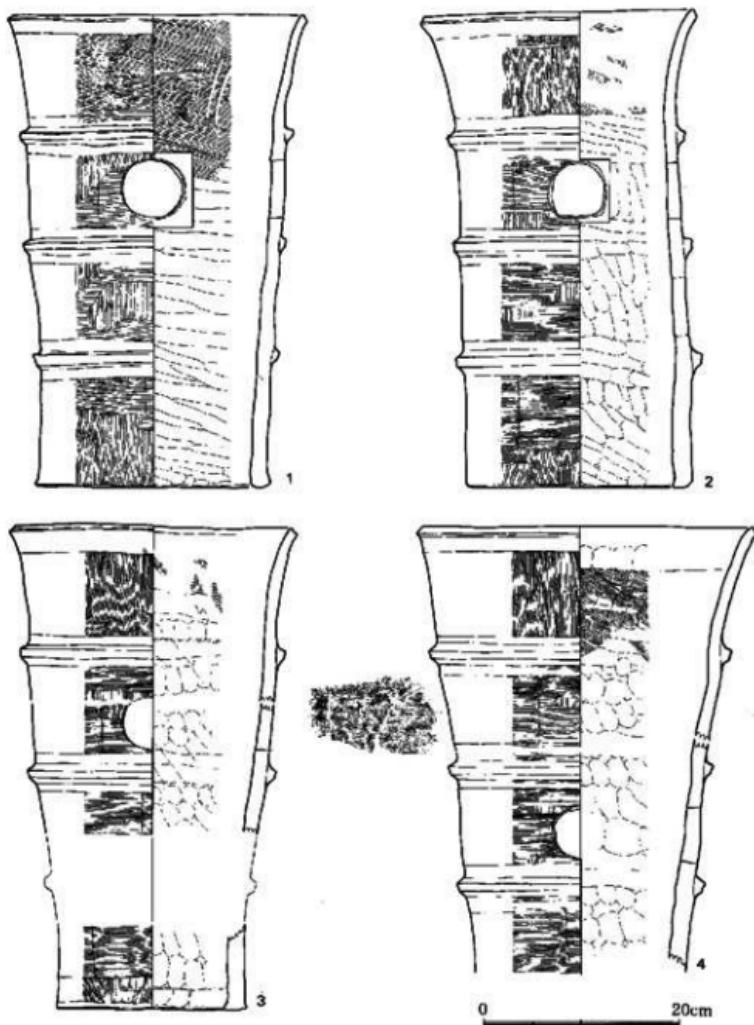


Fig. 154 周溝出土埴輪(1)

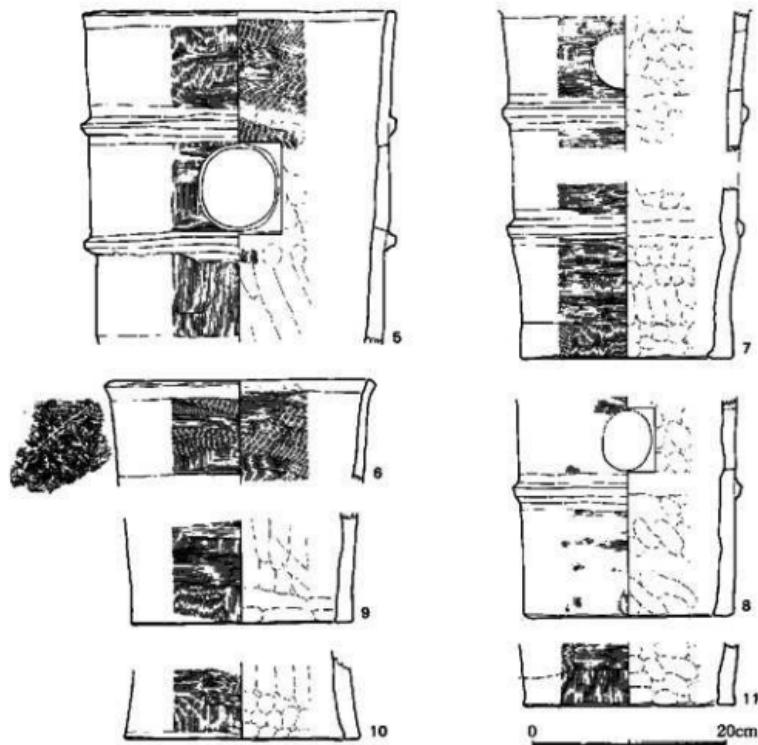


Fig.155 周溝出土埴輪(2)

として縫穴形の周溝を呈している。

周溝内埋土は12層に区分されたが、1～4層と5～12層の大きく上下に二分された。下層は0.3～0.4mの厚さであり、ローム塊と水成粘土を混える明茶色の粘質土である。上部に黒色の腐植土が形成され、ある時期までの早い速度での周溝の埋没と、その後の安定した腐植の形成期間があったと推定される。上層は現状で約0.6m堆積し、全体に暗褐色の粘質土からなる。詳細にみるとより暗色の強い部分と、ローム塊を含むやや明るい部分がある。これは埴丘の崩壊と腐植の形成により周溝が埋没していく過程を示している。

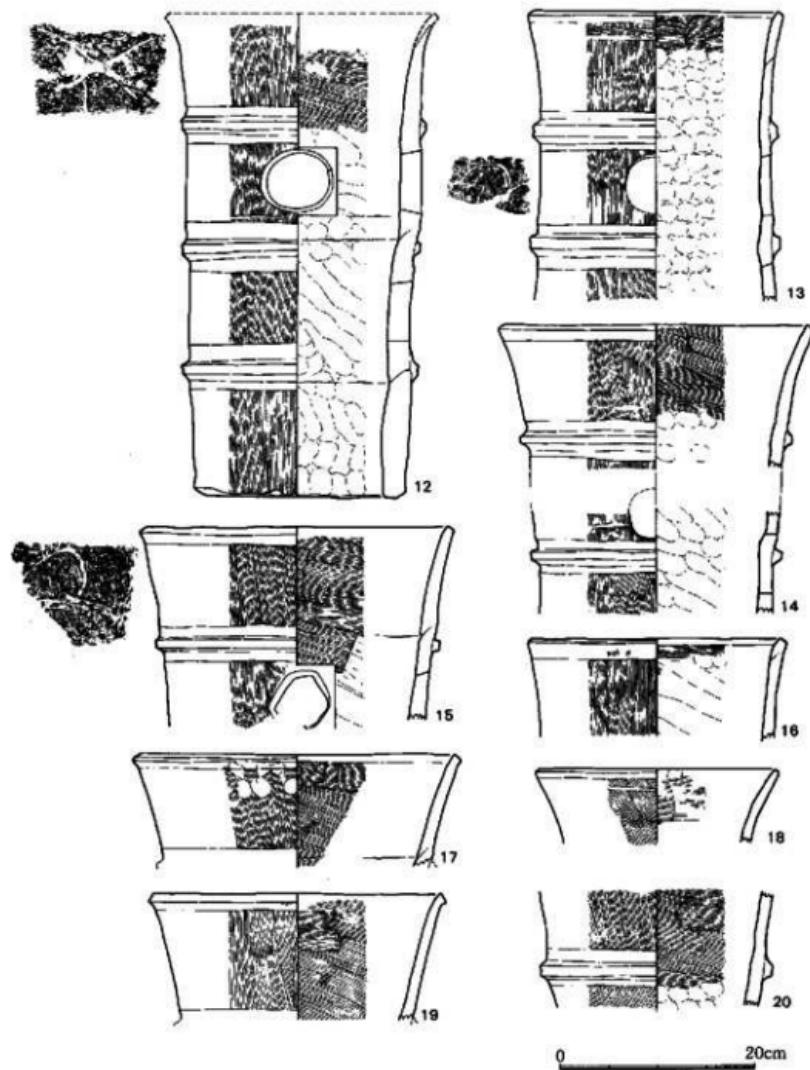


Fig.156 周溝山土壤輪(3)

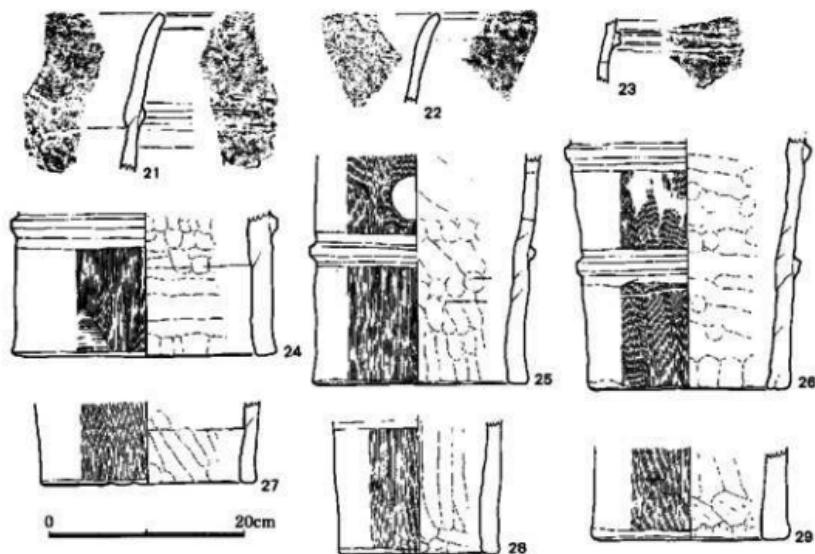


Fig.157 周溝出土埴輪(4)

## (3) 遺物の出土状態

周溝内には埴輪、礫、水成粘土塊が多く含まれていた。埴輪は周溝全体に分布するが、特に中央部分に完形品や大きな破片が比較的集中していた。礫は人頭大以下の大きさであり、周溝の中央線より埴丘側に多く分布し、また、出土位置も埴輪より下位に包含するもの多かった。水成粘土塊は礫よりさらに埴丘寄りに分布し、礫と同一レベルか、より下位に包含する。したがって、最初に埴丘側から水成粘土塊が流れ込み、次いで礫が流入、最後に埴輪が転落、埋没したと推定される。

## (4) 出土遺物

周溝内から出土した遺物はすべて埴輪であり、その量は整理箱で20箱程度である。埴輪には円筒形埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。1~29は円筒形埴輪、30~34は朝顔形埴輪、35~50は形象埴輪である。ただし、円筒形埴輪としたもののうち、7~11と24~29は底部であり、朝顔形埴輪が計3個体程含まれている可能性が高い。これらの埴輪はすべて無黒斑であり、胎土は二種類ある。それは砂粒の少ない白色気味のもの(a種)と、0.1~0.3cmの石英などの砂粒を多く含む茶色気味のもの(b種)がある。焼成は前者のものが悪く、後者のものが良い。

円筒形埴輪は29個体を識別、図化した。他に口縁部と底部に別個体の可能性のある小破片が

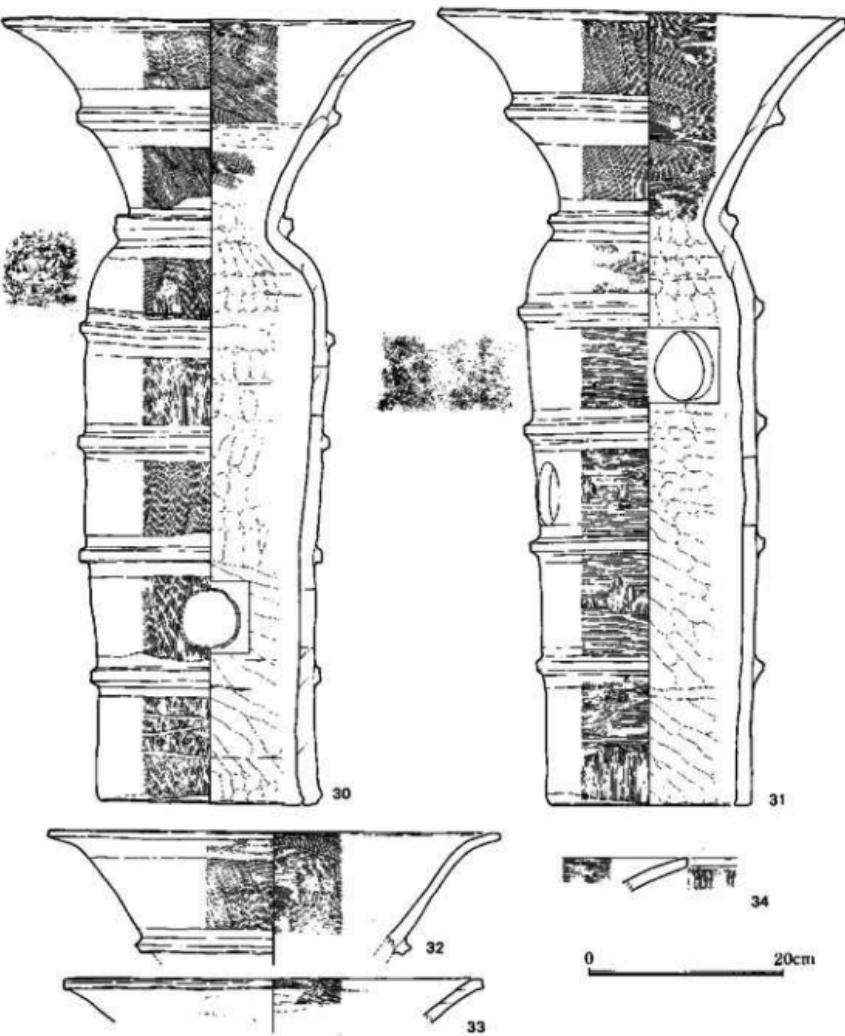


Fig. 158 周溝出土埴輪(5)

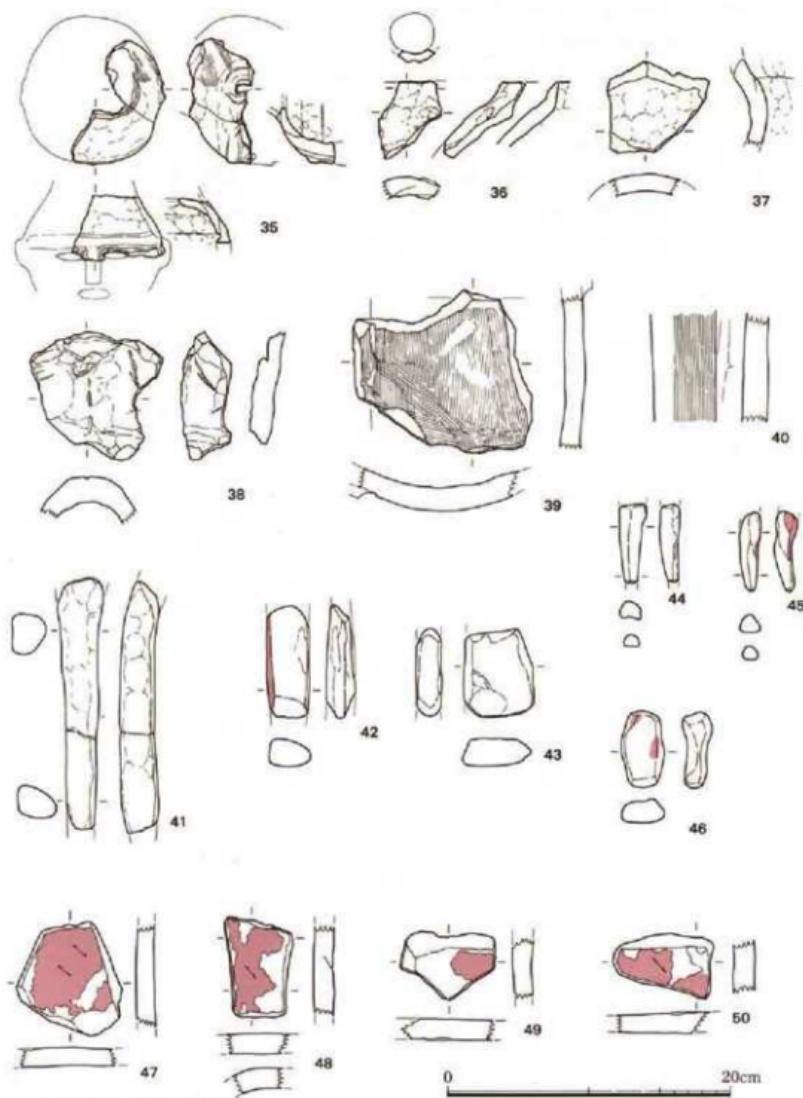


Fig. 159 周溝出土埴輪(6)

数個体ある。29個体のうち3個体は全体を知る程度に復元できた。基本的に3本のタガを巡らせ、2、3段目に円形透孔を二方に直交してもつ。底部はさほどしまらず、直線状に立ち上り、口縁部でわずかに外反する。口縁端は強い横ナデで面取りがなされる。底部調整はみられない。この円筒形埴輪は外面の調整手法で二群に区分され、二次調整に断続横ハケを用いるもの（1～11）【これを“円筒1類”とする】と、縦ハケ一次調整のみのもの（12～29）【これを“円筒2類”とする】がある。胎土は円筒1類がa種4点、b種7点あり、円筒2類がa種7点、b種11点がある。なお、円筒2類のうち13、20、23の3個体にのみ赤色顔料の塗布痕がある。なお、ヘラ記号が7個体に観察される。これは、円筒1類に2個体、円筒2類に5個体があり、胎土a種に2個体、b種に5個体を数える。

朝顔形埴輪は5個体を図化した。口縁部でみると限り、調査区内ではこれすべてである。このうち2個体は全体を知る程度に復元できた。31は周溝内埋土中に倒置状態で出土した。32～34は口縁部の破片であり、下半部は円筒形埴輪と分離できなかった。円筒形埴輪と同様の調整をもつことから、同一の基準で調整手法を朝顔1類、朝顔2類とした。30は朝顔2類、31は朝顔1類であり、この2点は胎土がb種である。32～34は口縁部の破片であり、胎土はa種である。

形象埴輪はすべて小破片であり、全体を復元できるものはない。35～38は人物形の埴輪とみられる。35は頭部左側の破片で耳、目、鼻の一部が遺存する。眉と鼻を連続させ、粘土紐で表現している。頭部には粘土により、帽子か、髪の表現がある。36、37は部位不明である。38は胸部の破片とみられるが、全体に小さく疑問が残る。前面に被服の表現がみられる。39と40は動物の一部と推定される。39は粘土紐の剥落痕があり、胸部破片か。40は足の破片とみられる。41～46は胎土、特徴が類似する棒状のもので、器種は不明である。一部に赤色顔料の塗布痕がある。47～50は胎土、特徴が類似し、同一個体とみられるものである。全体に平板なもので外面に赤色顔料を塗布する。器財形埴輪の可能性がある。

#### 4. その他の遺構

##### (1) 井戸 SE-02

古墳周溝に近接し、4、6区にまたがって検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈する。南北1.4m、東西1.1mを測る。調査途中

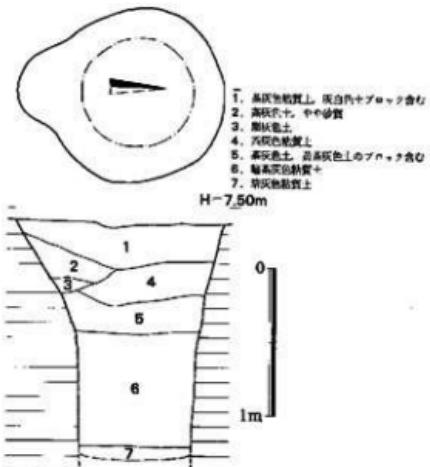


Fig. 160 第2号井戸 (SE-02) 実測図

に保存案が出されたため、0.8m程掘り下げた段階で調査を中断し、埋め戻した。埋土は水分の多い粘質土であり、少量の遺物が出土した。図化できるものはないが、黒色土器A類の小片があり、古代の井戸と推定された。

#### (2) 溝 SD-02

古墳周溝を切り、4区から3区へ略北方向に流走する断面逆台形の溝である。北側で削平を受けているが、保存の良い南側で幅3.3m、深さ約1.6mを測る。埋土下半に砂層が形成されていて、流水の痕跡が認められる。この溝の南側への延長は那珂遺跡群第15次調査の10トレンチおよび、防火用水改築工事立会地点(Ⅲ)において確認している。これからみると、東光寺剣塚古墳の内濠を貯水起点とし、剣塚北古墳の後円部側周溝を再掘削し、那珂丘陵北側へ水を送る用水路とみられる。埋土中から埴輪片や14~15世紀代の中世土器類が出土した。

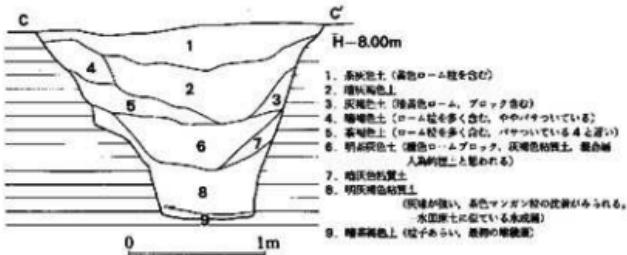


Fig. 161 第1号溝 (SD-01) 実層図

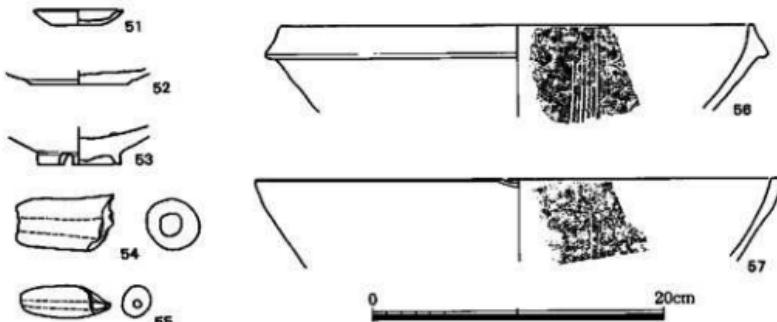
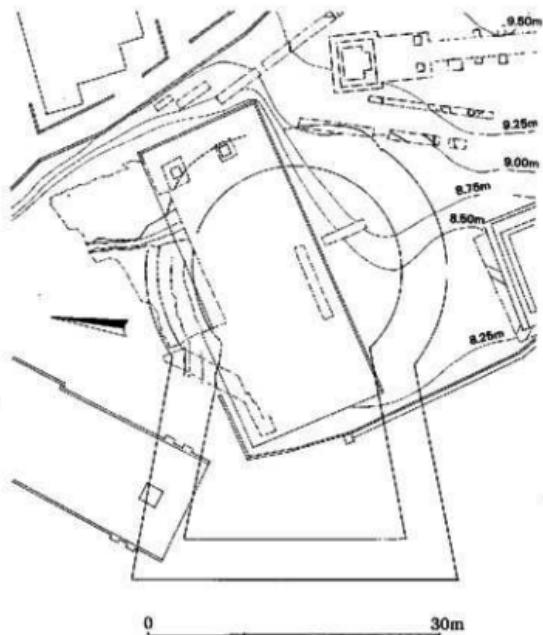


Fig. 162 第1号溝出土遺物

## 5. まとめ

本調査において那珂丘陵にこれまで知られていなかった前方後円墳を確認することができた。「剣塚北古墳」と名付けたこの古墳は周溝の一部を検出したのみであり、全体像を明確にすることはできなかった。ここでは本調査および、隣接して調査した第15次調査地点の成果を合わせて、剣塚北古墳の可能な限りの復元を試みることにする。

まず、調査において検出したのは周溝のみであり、墳丘、主体部については既に削平され遺存しない可能性が強い。周溝は本調査地点以外では第15次調査地点、特別高压変電所解体工事立合調査地点（I）において確認した。これらは後円部付近であり、図上でおおよその規模を復元できる（Fig. 163）。周溝内墳丘側下場で計測すると、後円部直径は約24m、前方部は形態、



※ 17次調査地西以外のトレンチについては「山形市歴史的資源会議『山形市歴史古墳』(1991)」を参考。  
※ 本図は後出面におけるプランを使用し、後方部は量に長さ17m幅23mとして復元した。

Fig.163 剣塚北古墳復元想定図

規模とも不明であるが、5m以上はあることから、墳丘全長は30m以上になるとみられる。周溝はおおよそ縦穴形を呈し、幅3.0m～3.6m、深さ0.6～0.9mを測るが、相当の削平を受けていることから、本来はより大きなものであったと考えられる。

周溝内から礎、埴輪が出土し、墳丘外表施設の存在を示した。これらは分布に大きな偏りがない、墳丘側から自然崩落したものと考えられる。これを前提とし、外表施設の復元を試みた。礎は葺石としては量が少なく、埴輪より早く周溝へ転落しているところからみると、おそらく墳端に外護列石として巡らせてあったものと考えられる。また、水成粘土塊はこの列石の個定用に使用されたとみられる。埴輪は周溝の約10分の1を調査した結果、円筒形埴輪29個体、朝顔形埴輪5個体を確認した。口縁部の特徴を重視し、同一個体の重複を排除すると、円筒形埴輪は最低19個体、最大26個体、朝顔形埴輪5個体となる。周溝上部を削平され、包含されていたかなりの埴輪片を失っていると考えるならば、調査範囲に存在した埴輪はその最大値かそれ以上の数を考えねばならない。なお、本古墳で使用された円筒形埴輪と朝顔形埴輪の比率はおおよそ4：1から5：1と考えてよからう。後円部の直径が24mであり、その円周は約75.4mとなる。約10分の1の調査であるので、約7.5mの間に円筒形19～26個体、朝顔形5個体を並べるとなると、1個体あたりの占有幅は0.24～0.31mとなる。円筒形埴輪の口径は24cmから34cmあり、円筒形の口縁部高にあたる朝顔形埴輪の4段目付近で径24～25cm程である。これからみて墳丘端部にしき、出土した埴輪をすべて並べて樹立することは不可能である。出土状態からみて、実際にはより墳丘内側に樹立されていたとみられるので、本古墳での埴輪は多重にめぐらされていたと考えられるのである。本古墳の規模をみると、墳丘中段と墳丘頂部の二段に埴輪が巡らされていたと推定される。これは、周溝内から出土した埴輪の遺存状態が完形に近いものと小破片となっているものに二分されることからも了解される。形象埴輪は小破片となっていることから、墳頂部にあった可能性も考えられる。

埴輪は製作技術において円筒形、朝顔形ともに二種類に分類した。この二種類は二次調整の有無に留まらず、詳細にみると幾つかの異なる特徴を認めることができる。これは埴輪製作工人の差と考えているが、これについては別に述べる予定である。

本古墳の築造時期は墳形、主体部、副葬品などが不明な現状では、明確でない。出土した埴輪からみると、縦ハケ一次調整のみの個体が過半数を占め、二次調整として断続横ハケを含む点、人物埴輪を含む点などからみて、5世紀後半から6世紀初頭の間に位置付けられよう。

Tab. 4 第17次調査の埴輪・土器観察表

( ) は推定値 壺口径・器高の単位はcm

番号	器種	遺存状態	口径	器高	土器の特徴
1	円筒	全体の1/3残存	(30.8)	(49.0)	底部から垂直に立上り、口縁で短く外反。突帯は3本で2・3段目に不整円形透穴を2方にもつ。調整は、外面は継ハケ、その後突帯貼付け、断続横ハケ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は口縁直下横ナデ、下は継ナデ
2	円筒	口縁1/8 底部1/2 胸部1/3残	—	(49.3)	底部から垂直に立上り、口縁で短く外反。突帯は3本で2・3段目に不整円形透穴を2方にもつ。調整は、外面は継ハケ、その後突帯貼付け、断続横ハケ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は口縁直下斜めハケ、下は継ナデ
3	円筒	口縁1/4 肩部1/6 底部1/3残	(28.3)	—	口縁は短く外反。突帯は2段目以上が残存し、3段目に円形透穴を1方に持つ。調整は1・2・3段目は継ハケ後突帯貼付け、断続横ハケ。4段目は継ハケのみ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は口縁直下斜めハケ後ナデ、下は指オサエ後ナデ
4	円筒	1段目2/3欠損	(34.1)	—	口縁は短く外反。突帯は3本で2・3段目に不整円形透穴を持つ。調整は、外面は、2・3段目は継ハケ後断続横ハケ。4段目は継ハケのみ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は全体的に指オサエ・横ナデ、4段目下半のみ指オサエ後斜めハケ
5	円筒	2段目下半以下 欠損	(32.4)	—	口縁は垂直。3段目に円形透穴を持つ。調整は外面は3・4段目は継ハケ後断続横ハケ、2段目は継ハケのみ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は口縁直下指オサエ後横ナデ、3段目指オサエ・横ナデ、2段目指オサエ後荒い継ナデ
6	円筒	口縁1/7残存	(28.0)	—	口縁は短く外反。調整は外面が継ハケ後斜めハケ～断続横ハケ、ヘラ記号あり。外面は横～斜めハケ
7	円筒	底部1/4 胸部1/3残存	—	—	底部は垂直に立上る。2・3段目に円形透穴を持つ。調整は外面は1・3段目が継ハケ後断続横ハケ、2段目は断続横ハケ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は指オサエ後横ナデ、突帯部は強い横ナデ
8	円筒	底部1/4残存	—	—	底部は垂直に立上る。2段目に不整円形透穴を持つ。調整は外面が断続横ハケ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は指オサエ後斜めナデ、突帯部は指オサエ後横ナデ
9	円筒	底部1/4残存	—	—	底部は垂直に立上る。調整は外面が継ハケ後断続横ハケ、内面は指オサエ後横～斜めナデ
10	円筒	底部1/8残存	—	—	底部はやや内側に立上る。調整は外面が継ハケ後断続横ハケ、内面は底部直上が指オサエ・ナデ、上が継ナデ
11	円筒	底部1/7残存	—	—	底部はやや外に立上る。調整は外面が継ハケ後断続横ハケ。内面が指オサエ後横ナデ
12	円筒	底部1/8 口縁～胸部1/2 欠損	(30.0)	—	底部から垂直に立上り、口縁で短く外反。2・3段目に不整円形透穴を2方に持つ。調整は外面が継ハケ、4段目にヘラ記号あり。突帯は高さ約1cm、断面台形、強く横ナデ。内面は口縁直下横ナデ、下は強い斜めナデ、突帯部は指オサエ・ナデ
13	円筒	口縁1/8 胸部1/4残存	(25.7)	—	口縁はやや外反。3段目に不整円形透穴を2方に持つ。調整は外面が継ハケ、赤色顔料塗布。3段目にヘラ記号あり。突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は口縁直下横ハケ、下は指オサエ後斜めナデ

番号	器種	造存状態	口径率	器高	土器の特徴
14	円筒	口縁1/3 胴部1/2残存	(32.2)	—	口縁は外反。2・3段目に不整円形透穴を2方に持つ。調整は外面が縦ハケ、突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は口縁直下斜めハケ、下は指オサエ後横ナデ
15	円筒	口縁1/5残存	(32.3)	—	口縁は外反。3段目に不整円形透穴を持つ。調整は外面が縦ハケ、ヘラ記号あり。突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は口縁直下横ハケ、下は斜めヘラ削り
16	円筒	口縁1/6残存	(26.5)	—	口縁はやや外反。調整は外面が縦ハケ、内面は口縁直下指オサエ後横ハケ、下が斜めハケ
17	円筒	口縁1/8残存	(33.5)	—	口縁は外反。調整は外面が縦ハケ、内面は横~斜めハケ
18	円筒	口縁1/10残存	(24.9)	—	口縁は外反。調整は外面が斜めハケ、内面が横ハケ後横ナデ
19	円筒	口縁1/10残存	(24.9)	—	口縁は短く外反。調整は外面が斜めハケ、内面は横ハケ後横ナデ
20	円筒	径の1/3残存	—	—	調整は外面が縦ハケ、突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は突帯上が指オサエ後横ハケでヘラ記号あり、下は指オサエ・ナデ 内外面ともに赤色顔料塗布
21	円筒	幅7cmの破片	—	—	外面は縦ハケ、口縁から1.5cmの所に沈線が1条。突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は上部が横ハケ、下が指オサエ・斜めハケ
22	円筒	口縁幅7cm残存	—	—	口縁は外反。調整は外面が縦ハケ、内面は斜めハケ
23	—	幅8cmの破片	—	—	円形透穴を持つ。調整は外面が縦ハケ、突帯は高さ約0.5cm、断面台形、強い横ナデ。内面は指オサエ後横ナデ
24	—	底部1/6~1/7残存	—	—	底部は垂直に立てる。調整は外面が横ハケ後横ナデ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は突帯部指オサエ、下は横ナデ
25	—	底部2/3残存	—	—	底部は垂直に立てる。2段目に不整円形透穴を持つ。調整は外面が縦ハケ。突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は指オサエ・ナデ、2段目が斜めナデ
26	—	底部~胴部1/2残存	—	—	底部は垂直に立てる。調整は外面が縦ハケ、突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ、内面は指オサエ・横ナデ
27	—	底部1/3残存	—	—	底部はやや外側に立てる。調整は外面が縦ハケ、内面は底部直上が指オサエ後斜めナデ、上はナデ
28	—	底部1/4残存	—	—	底部は垂直に立てる。外面は縦ハケ。内面は縦の強いナデ
29	—	底部1/4残存	—	—	底部は垂直に立てる。調整は外面が縦ハケ、内面は底部直上が縦のヘラナデ、上が斜めのヘラ削り、その上は斜めナデ
30	朝顔	口縁1/6 底部1/4 胴部1/8残	(42.0)	(80.5)	底部は垂直に立てる。2・4段目に不整円形透穴を2方に持つ。調整は外面は縦ハケ、1段目はその後横ミガキ、5段目にヘラ記号あり。突帯は6条あり、高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は口縁直下斜めハケ、下は横ナデ、頸部~底部は指オサエ・ナデ
31	朝顔	口縁1/2欠損	(42.1)	(80.8)	底部は垂直に立てる。3・4段目に不整円形透穴を持つ。調整は1~5・7段目が縦ハケ後断続横

番号	器種	遺存状態	口径値	器高	土器の特徴
31	朝顔				ハケ、6段目は縦ハケのみ。4段目にヘラ記号あり。突帯は高さ約1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は口縁直下指オサエ・斜め～横ハケ、頸部～底部は指オサエ・ナデ
32	朝顔	口縁1/4残存	(46.6)	—	口唇部は短く外反する。調整は外面が縦ハケ、赤色顔料塗布。突帯は高さ1cm、断面台形、強い横ナデ。内面は横ハケ、一部縦ハケ
33	朝顔	口縁1/10以下残存	(43.2)	—	調整は外面が縦ハケ後強いナデ、赤色顔料塗布。内面は横ハケ後一部ナデ
34	朝顔	口縁幅7cmの破片	—	—	外面は縦ハケ、内面は横ハケ
35	人物	頭部破片	—	—	外面はハケ後指オサエ・ナデ。内面は指オサエ・ナデ
36	不明	破片	—	—	外面はナデ。内面は指オサエ・ナデ
37	動物	小破片	—	—	内外面とも指オサエ・ナデ。内面に赤色顔料塗布
38	人物	脣部	—	—	内外面とも指オサエ・ナデ
39	不明	破片	—	—	外面は縦ハケ後横～斜めハケ。内面は縦のヘラ削り後ナデ
40	不明	破片	—	—	外面は縦ハケ。内面は縦ナデ
41	不明	破片	—	—	指オサエ・ナデ
42	不明	破片	—	—	ナデ・ヘラ削りで一部平坦面を作り、底に赤色顔料を塗布
43	不明	破片	—	—	
44	不明	破片	—	—	指オサエ・ナデ
45	不明	破片	—	—	指オサエ・ナデ。赤色顔料塗布
46	不明	破片	—	—	指オサエ・ナデ。赤色顔料塗布
47	不明	破片	—	—	外面はヘラ削り後ナデ、赤色顔料塗布。内面は斜めナデ
48	不明	破片	—	—	外面は斜めナデ、赤色顔料塗布。内面は指オサエ後・斜めナデ
49	不明	破片	—	—	外面はナデ、赤色顔料塗布。内面は調整不明
50	不明	破片	—	—	外面はヘラ削り後ナデ、赤色顔料塗布。内面は斜めナデ
51	土師皿	口縁1/4欠損	(6.2)	(1.1)	口縁は横ナデ。内面底部はナデ、外面底部は糸切り痕
52	土師皿	底部の2/3残存	—	—	内外面とも横ナデ、底部には糸切り痕
53	白磁	底部のみ	—	—	外面は回転ヘラ削り、高台底部を除いて全面に釉がかかる。砂目が4個付く
54	羽口	基部を欠く	—	—	指オサエ・ナデ 先端部に滑津付着
55	土鏡	一方の邊を欠く	—	—	指面指オサエ・ナデ
56	備前焼す り鉢	口縁幅5cm	(32.6)	—	外面は横ナデ、内面は横ナデ後縦にヘラガキの沈線8條
57	瓦質すり 鉢	口縁幅12cm残存	(36.4)	—	内外面とも風化のため調整不明であるが内面にヘラガキの沈線が微かに見える

## 第8章 第21次調査の記録

### 1. 調査の概要 (Fig.164, PL.25)

アサヒビル工場敷地内の西側（貯蔵タンク建設予定地）と東側（工場建物建設予定地）部分について調査を実施した。前者をI区とし、後者をII区とする。

I区は調査前には煉瓦造りの建物があったので、建物間の路地で試掘調査を実施した。その結果、壺棺墓などの遺構を検出したため、1,900m<sup>2</sup>について本格的な発掘調査を実施することになった。まず、地権者に建物解体およびアスファルト舗装の除去をお願いし、瓦礫の搬出をしていただいた。また、調査中の廃土も搬出していただいた。

調査区は、調査対象地とした1,900m<sup>2</sup>全域とし、調査は重機を使用し、アスファルト舗装下の盛土、煉瓦造りの基礎を除去することから始めた。その結果、標高7.7m前後の鳥栖ロームの面で遺構を検出した。また、調査は工事工程の都合により西側から実施した。

検出遺構として、弥生時代前期後半の貯蔵穴13基、弥生時代中期後半を主体とした壺棺墓28基、同時期の祭祀土壙2基、古墳時代前半期の竪穴式住居址13基、古代の井戸3基と各時期の土壙・溝・柱穴などがある。検出遺構は遺構記号を頭に使用し、検出順に2桁の通し番号を付した。遺構記号は、掘立柱建物をSB、竪穴式住居址をSC、溝をSD、井戸をSE、貯蔵穴・祭祀土壙を含む土壙・壺棺墓・土壙墓をSKとした（例：SK-01（壺棺墓）・SK-29（土壙墓）・SK-45（貯蔵穴）・SK-46（土壙）・SK-48（祭祀土壙）・SE-55（井戸）・SC-60（竪穴式住居址）・SD-68（溝））。柱穴についてはSPの遺構記号を頭に使用し、4桁の通し番号を付した。（例：SP-0001～）。なお、本書のなかでは、遺構名・遺構記号を併記して使用する。

出土遺物として、突帯文土器・弥生式土器・土師器・須恵器などの土器・瓦・土製品・石器・鉄器・青銅製鋏先・木製品などがある。出土遺物は、遺跡番号（8923）の下に5桁の通し番号を付し登録番号とした。なお、本書中では遺構ごとに通し番号を付した。ただし、石器はS、土製品はD、金属器はKを番号の頭に付した。壺棺については遺構番号を使用し、合口壺棺については上壺・下壺とする（例：1（土器・瓦）・D2（土製品）・S3（石器）・K4（金属器）・第1号壺棺上壺・下壺（合口壺棺墓）・第2号壺棺（單棺墓））。

II区は、I区調査中に建設が計画された。埋蔵文化財課は、那珂遺跡群の範囲内であり第16次調査地の東側に位置するため、壺棺墓の所在が予想されたため全面調査対象地となるとして地権者と協議を重ねた。今回は基礎部分以外は掘削しないことを条件として、9ヶ所の基礎部分の277m<sup>2</sup>について調査を実施した。検出遺構として、中世から近世の溝や古墳時代以降の柱穴があり、出土遺物としては青磁片などがある。今回は調査を実施したことを明示しておく。

## 2. 弥生時代前期の遺構と出土遺物

本調査区では、弥生時代前期前半から後半の貯蔵穴13基を検出した。この時期の貯蔵穴は1.5m以上の深さをもち、形がフラスコ状をなすが、ほとんどのものは50cm前後の遺存である。床面の平面形は、方形・長方形をなすものと円形をなすものがある。

貯蔵穴は、本調査区の南西隅付近に平面形方形のものが集中して分布し、円形のものは集中地区を大きく開む形で点的に分布している。

本調査区では、本時期の他の遺構は検出できなかった。SK-48・49から突堤文土器や弥生時代前期の土器が出土しており、貯蔵穴を破壊したためと考えられ、貯蔵穴は本調査区内で削平を受けたものが数基あると考えられる。また、貯蔵穴群は調査区の南西部に集中しており、南西部の調査区外に分布集中の中心をもつと考えられる。

### 1) 第40号貯蔵穴 (SK-40) と出土遺物 (Fig.165・166, PL.26)

本貯蔵穴は調査区の南西部に位置し、SK-45を切っている。平面形は不整長方形を呈し、長軸2m強、短軸1.3m前後を測り、25~35cm遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は床からほぼ垂直に立ち上がっている。3層中の南側では、10cm前後の厚さで炭化米が15kg前後出土した。

出土土器：図示した中形の壺以外には壺あるいは鉢の脚部破片が10数点出土したのみである。1は壺の口縁破片で、外面に粘土を貼付して段を形成する。器面を研磨調整で仕上げるが、段部に小まめに原体をナデつけていたため不明瞭なものとなっている。

以上の出土土器およびSK-45との切り合い関係から、本貯蔵穴は前期後半のものといえよう。

### 2) 第41号貯蔵穴 (SK-41) と出土遺物

(Fig.167・168, PL.26)

本貯蔵穴は調査区の南西部に位置し、SK

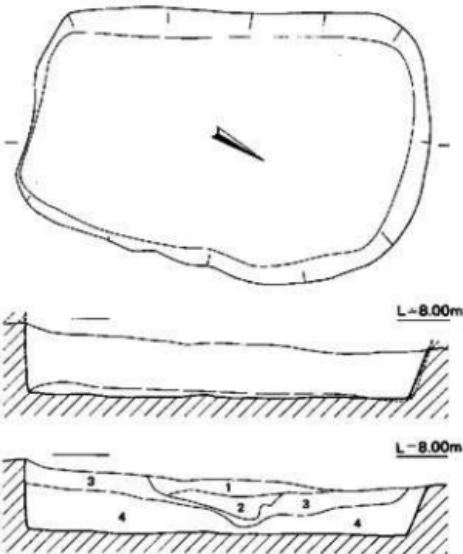


Fig.165 第40号貯蔵穴 (SK-40) 実測図



Fig. 166 第40号貯蔵穴出土土器実測図

-40と1.6mの間隔をもち、SK-42と並んでいる。平面形は不整長方形を呈し、長軸2.2m、短軸1.5m強を測り、15~25cmの遺存である。床面はほぼ平坦で、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。北壁側の中央部の床面から壺形土器1個体（胴部のみ）が出土した。

出土土器（1~10）：図化できたのは、報告したものがすべてである。壺・壺・鉢がある。

1は、口縁部と頸部の境に不明瞭な段が巡る。2の肩部には沈線状の段が巡る。やや肩の張ったプロポーションを呈する。内面の頸部と胴部の境界部付近には、指頭によるナデ圧痕が集中して残る。

3は、亀の甲式の壺で、口縁部凸帯の爪で浅いキザミを施す。4は板付式I式、5は、板付式II式の如意形口縁をもつ壺である。4は口唇全面にキザミを施すが、かなり浅い。5のキザミは小さく間隔は密である。

6は貝殻条痕を施す粗製の深鉢と考えた。外面に薄く煤が付着する。7は夜臼II式の壺の胴部片か。8は板付I~II式の壺の底部片である。焼成後に外底側から穿孔を施し、瓶としている。9は小形の粗製鉢である。口唇下半にキザミを施す。外面には煤が付着する。10は器体の傾きが壺に近い深さの大形鉢である。内外面とも研磨調整で仕上げる。

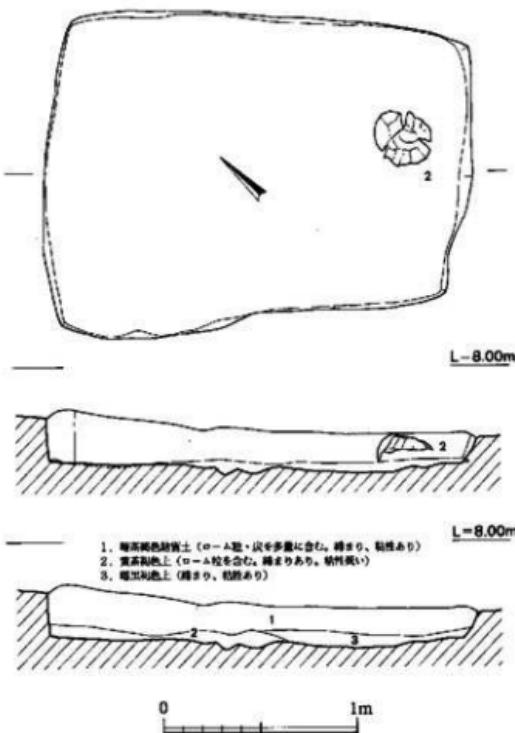


Fig. 167 第41号貯蔵穴（SK-41）実測図

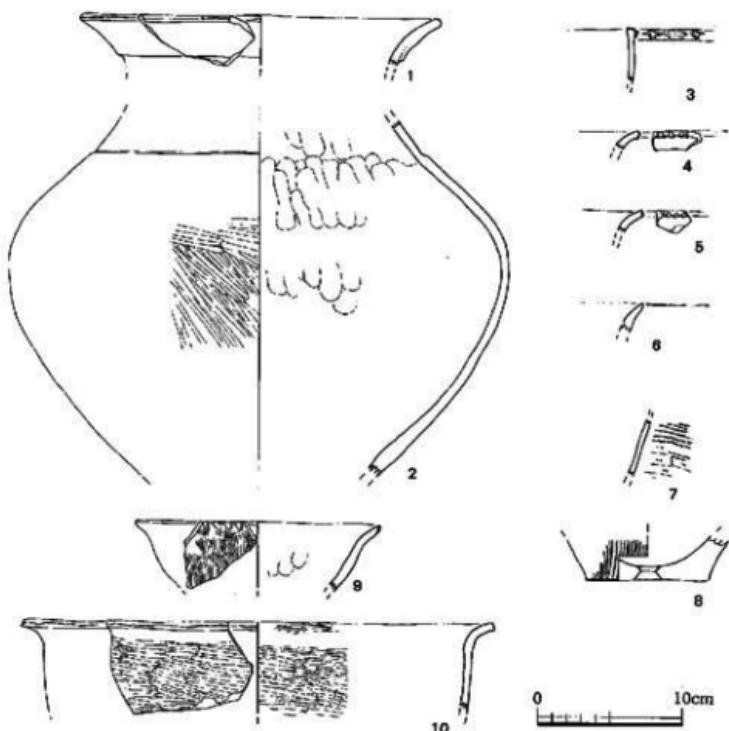


Fig. 168 第41号貯蔵穴出土土器実測図

以上の土器のほか、9点の石製品が出土した。黒曜石（以下、Obとする）製の打製石器未製品・安山岩（以下、Anとする）製石斧片各1点と、Ob製の剥片2点、削片3点、石核2点である。

以上の出土遺物から、本貯蔵穴は前期後半のものといえよう。

### 3) 第42号貯蔵穴 (SK-42) と出土遺物 (Fig. 169・170)

本貯蔵穴はSK-41の西側に並んだ状態で近接して位置し、北側中央部を柱穴1個に切られている。平面形は不整長方形を呈し、長輪1.95m、短軸1.6mを測り25~47cm遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は床面から垂直に立ち上がっている。

**出土土器**（1~9）：図示した遺物以外には、壺の胴部破片が少量出土したのみである。壺・鉢・甕がある。

1・2は、色調・焼成・胎土から同一個体と考えられるが、接合しない。口縁部と頸部、頸部と胴部の境に段が巡る。3も口縁部と頸部の境段が巡るが、1にくらべ浅い。板付I式に比定できる。4は如意形口縁をもつ鉢である。板付I式土器の範疇にあてはまろう。5・6は口縁部が胴部屈折部より外方に傾く浅鉢である。6の胴部の屈折は、ゆるやかで既も不明瞭である。夜臼II式に分類できる。

7は夜臼II式の壺である。口縁部凸帯は小さくキザミは浅い。8・9は板付I式に分類できるであろう。

以上の土器のほか、安山岩質凝灰岩ホルンフェルス（以下、AnTHとする）製の石庖丁、砂岩製砥石各1点とOb製・An製剥片が各1点出土している。

以上の出土遺物から、本貯蔵

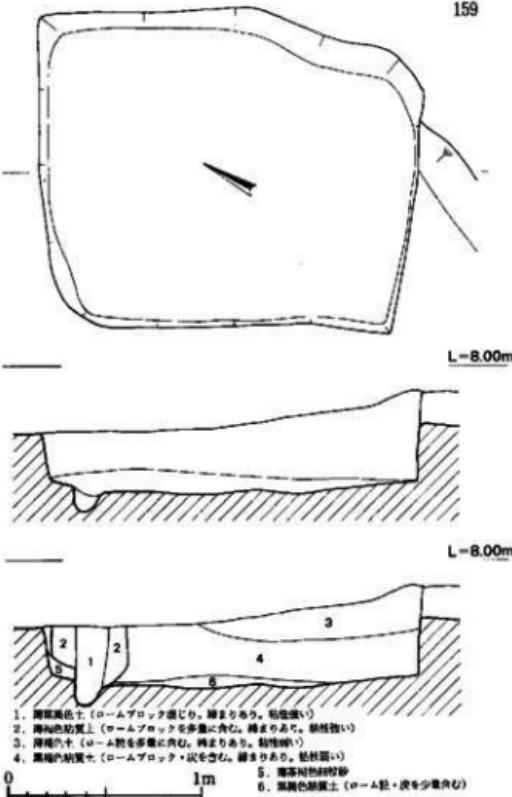


Fig. 169 第42号貯蔵穴 (SK-42) 実測図

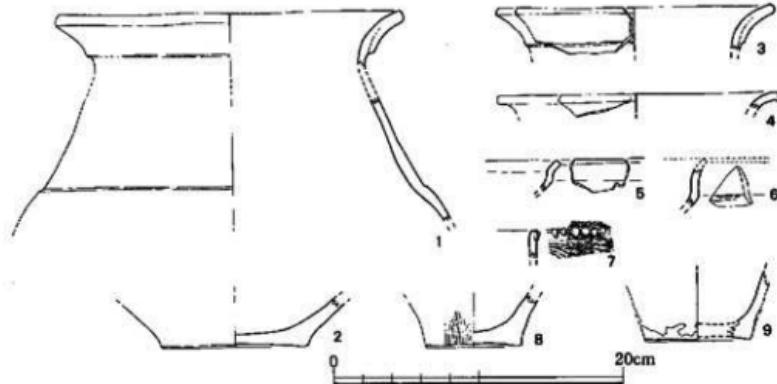


Fig. 170 第42号貯蔵穴出土土器実測図

穴は前期前半のものといえる。

#### 4) 第43号貯蔵穴 (SK-43) と出土遺物

(Fig. 171・172, PL.26)

本貯蔵穴は調査区の南西部隅に位置し、西側半分は調査対象地外へ延びている。SK-50を切っている。平面形は長方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.6mを測り80cm前後の遺存である。床面はほぼ平坦で、東側中央部に長軸40cm、短軸35cm、深さ15cmの平面形橢円形の皿状をなす掘り込みがみられる。壁は南側壁がやや開き気味に立ち上がるのに反し、他の3壁は内傾している。

出土土器（1～7）：壺・鉢・甕があるが、いずれも小片である。他に小形壺の底部破片1点、壺・鉢・甕の胴部破片が出土したのみである。

1・2は、如意形口縁をもつ鉢である。2の内外面には部分的に赤色顔料が付着する。

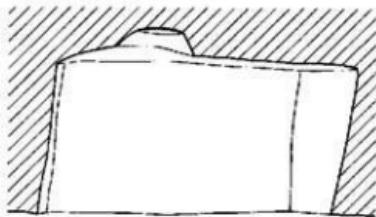
3は肩部に3条の平行沈線文を施し、その上部に3条の沈線文を棒状工具で施す。

4の内底面は研磨調整で仕上げており、夜臼II式の浅鉢と考えた。

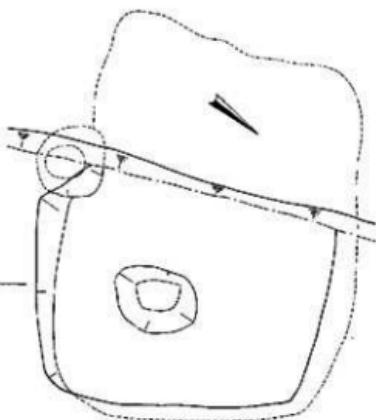
5は夜臼II式の甕である。口縁部凸帯はやや太く、棒状工具を下から上へ押し上げるようにキザミを施す。6・7も夜臼II式の甕の底部である。ともに外底面はヘラ状工具でケズリを施す。6は内底部にあたる粘土塊が接合面で剝離している。

以上のほか、Ob製打製石鎌が出土している。

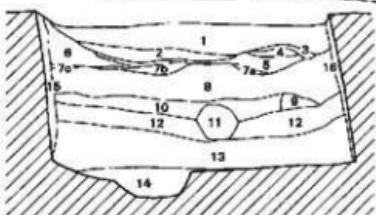
以上の出土遺物から、本貯蔵穴は前期前半から中頃のものといえよう。



w008-1



L=8.00m



1. 基本的泥質土 (ローム層)
2. 基本的泥質土 (ローム層より黒色がかった土を含んでいた)
3. 黒色土
4. 黑色土
5. 基本的泥質土 (ローム層を含む)
6. 1種のローム層 (表面は黒色土層が多くなる)
7. 黑色土
8. 基本的泥質土 (ローム層を含む)
9. 基本的泥質土 (ローム層を含む)
10. 基本的泥質土
11. 黑色土
12. 黑色土 (表面は黒色土層が多くなる)
13. 基本的泥質土 (表面は黒色土層多くなる)
14. 黑色土
15. 基本的泥質土 (表面はローム層と黒色土層)
16. 基本的泥質土

Fig.171 第43号貯蔵穴 (SK-43) 実測図

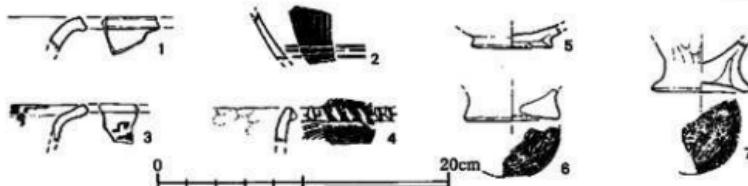


Fig. 172 第43号貯蔵穴出土器実測図

## 5) 第44号貯蔵穴 (SK-44) (Fig. 173)

本貯蔵穴は調査区の南西隅に位置し、SK-50を切り、東側を建物基礎によって破壊され、西側は調査区対象地外へ延びている。平面形は長方形を呈すると考えられ、短軸1.6mで60cm前後の遺存である。床面はほぼ平坦で、南・北側の壁は床面からやや開き気味に立ち上がっている。

本貯蔵穴からは、少量の土器細片とAn製剤器1点が出土したのみである。SK-43と並んでおり、ほぼ同時期のものか。

## 6) 第45号貯蔵穴 (SK-45)

と出土遺物 (Fig. 174・175, PL.26)

本貯蔵穴は調査区の南西部に位置し、SK-78を切り、SK-40や柱穴に切られ、さらに建物基礎によって南東部コーナーを破壊されている。平面形は不整長方形を呈し、長軸2.5m、短軸1.8mを測り50~70cmの遺存である。床面はほぼ平坦で、壁は床面からやや開き気味に立ち上がっている。

出土土器 (1~32) : 出出土器には壺・甕・鉢がある。

壺は2点が出土した。1は肩部に浅い段が巡る中形壺である。外面は研磨、内面はハケ目調整で仕上げる。他の1点は図示していないが、口縁部の細片である。ともに板付I式である。

2~13・23は夜臼II式、14~18・24~27は板付I式の甕である。

2・3は直口縁の端部に直接キザミを施すものである。2は棒状工具を斜め上方から刺突し、3はヘラ状工具を押しつけるようにキザミを密に施している。9は胴部上半が屈曲するタ

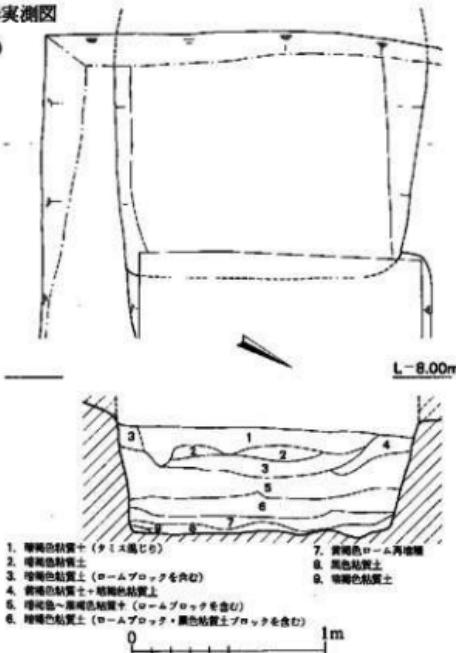


Fig. 173 第44号貯蔵穴 (SK-44) 実測図

イブの壺である。屈曲部にヘラ状工具で直接キザミを施している。他は口縁端外面に凸帯を貼付し、キザミを施すが、6～8・10は凸帯は小さく、キザミは浅く小さい。これに対しで、4・5・11～13の凸帯は大きめで、キザミも大きくやや深めに施されていく。13のキザミはとくに深い。

14～18は口唇部へのキザミの入れ方から3者がある。14は口唇全面にキザミを施す。17・18は口唇全面にキザミを施しているように見えるが、断面を見ると口唇部を斜め方向から切るように口唇下半にキザミが施される。15・16は口唇下端にキザミを施す。板付

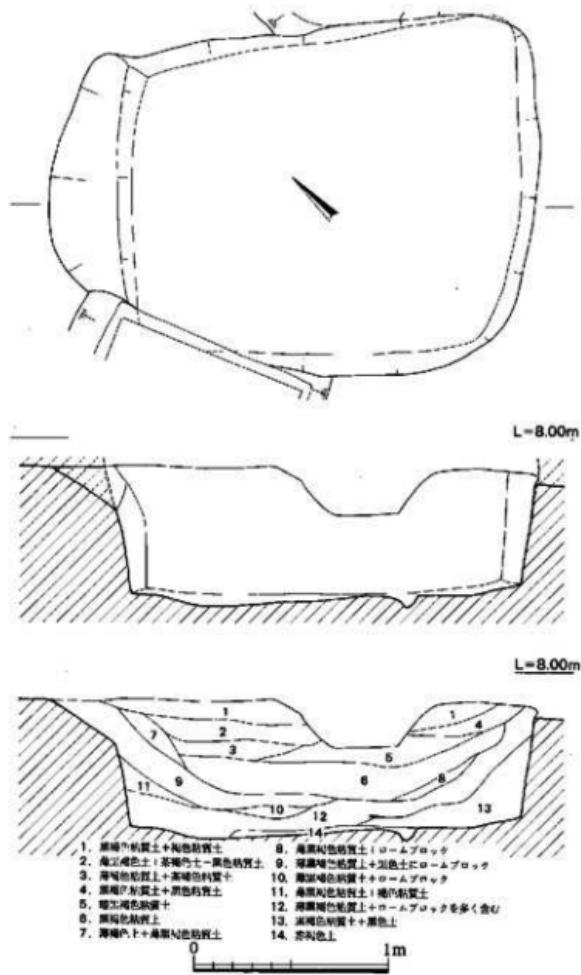


Fig.174 第45号貯藏穴 (SK-45) 実測図

II式の如意形口縁の壺と比較して、キザミは大きめで間隔は密である。器面の調整は、ハケ目調整を施しナデ仕上げるものが多い。

この他、図示していないが、口唇下端にキザミをもつ如意形口縁の板付I式と、口縁部凸帯のキザミがやや深い夜日II式の壺の口縁部細片が各1点ある。

19～22は板付I式の鉢である。19・20は器面調整・胎土は壺と同様である。19は口唇下間に、

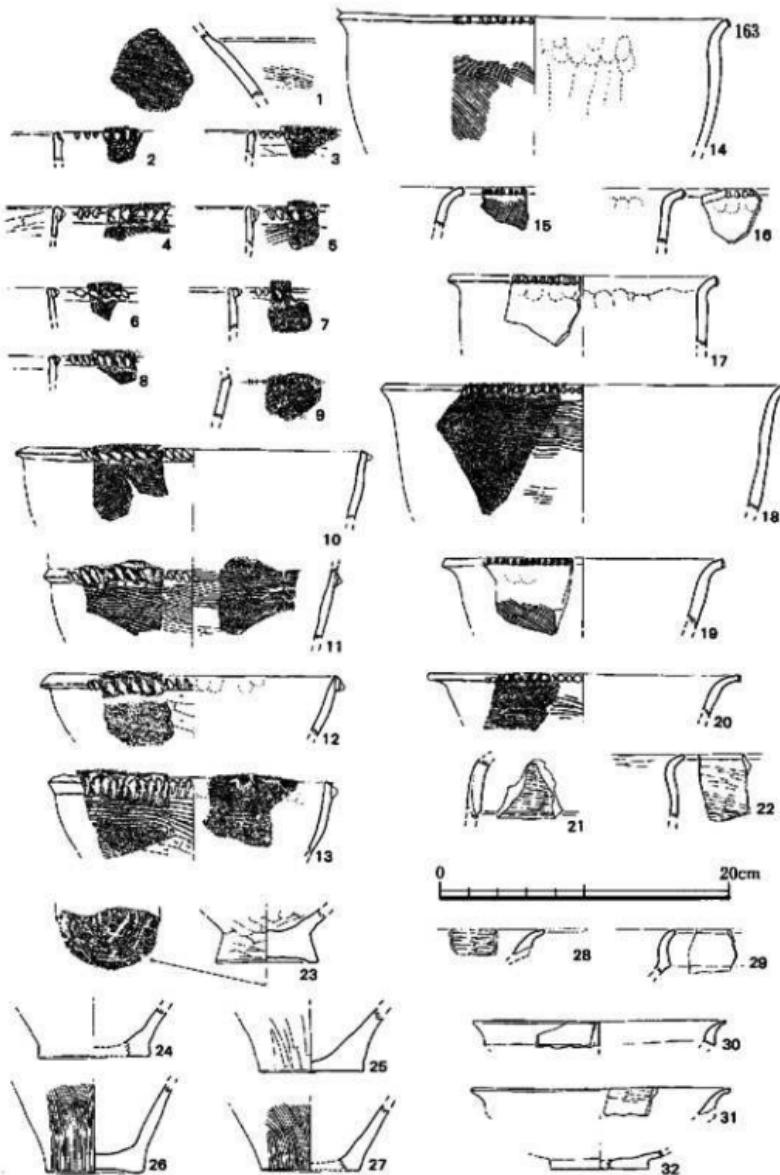
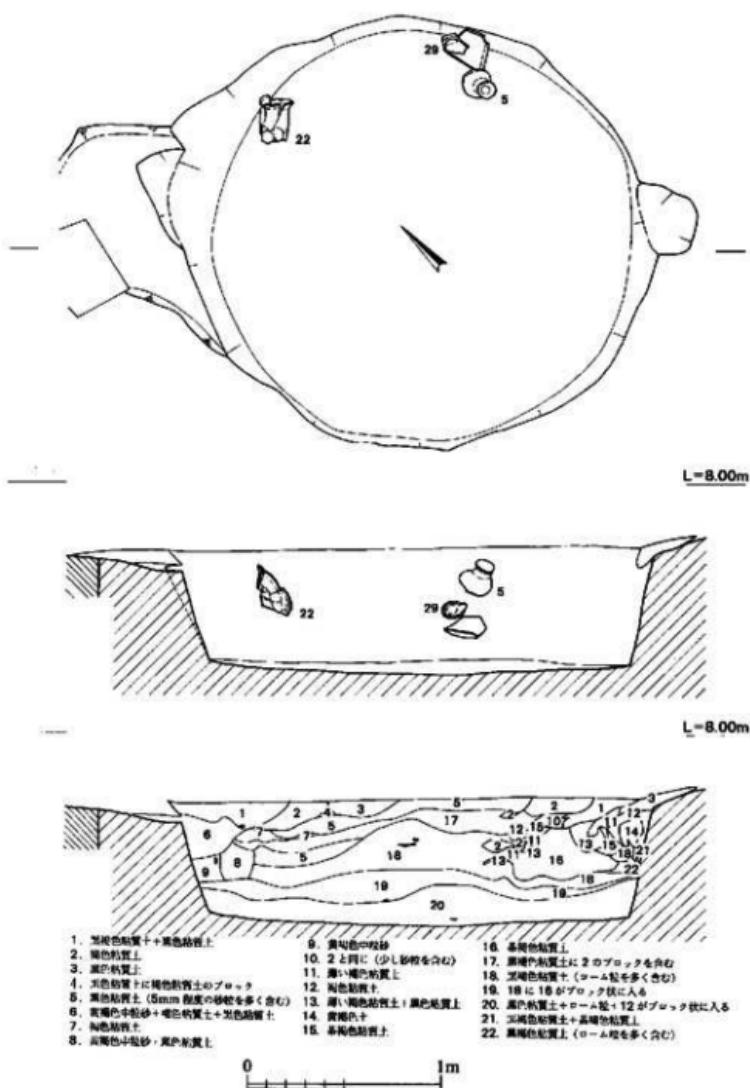


Fig. 175 第45号贮藏穴出土土器实测图



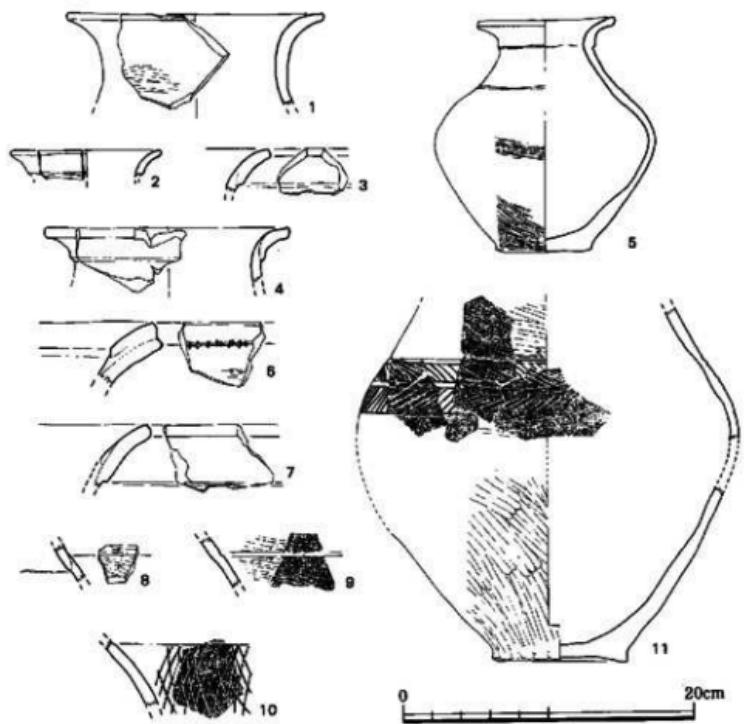


Fig.177 第47号貯蔵穴出土土器実測図(1)

20は口唇全面にキザミを施す。20の胴部外面は貝殻条痕調整であり、珍しい例である。21・22の器面は研磨調整で仕上げられ、胎土には砂粒が少なく、つくりは丁寧である。22は破片が小さいうえに器体が歪み、傾きは不確実である。

28~31は夜臼II式の浅鉢である。すべて口縁部周辺の小破片である。器体の傾きが不確実なものも含まれるが、口縁部径が胴上半の屈曲部径より大きく、口縁が外方に傾くタイプである。32は内底面を丁寧に研磨調整で仕上げており、28~31のような口縁部をもつ浅鉢を考えた。

以上のほかの出土土器は壺・甌・鉢の胴部破片だけである。

本貯蔵穴からは、土器のほかに砂岩製砥石1点、Ob製の剝片3点、削片1点、石核1点、An製の剝片・削片各1点が出土した。

以上の出土遺物から、本貯蔵穴は前期前半のものといえる。

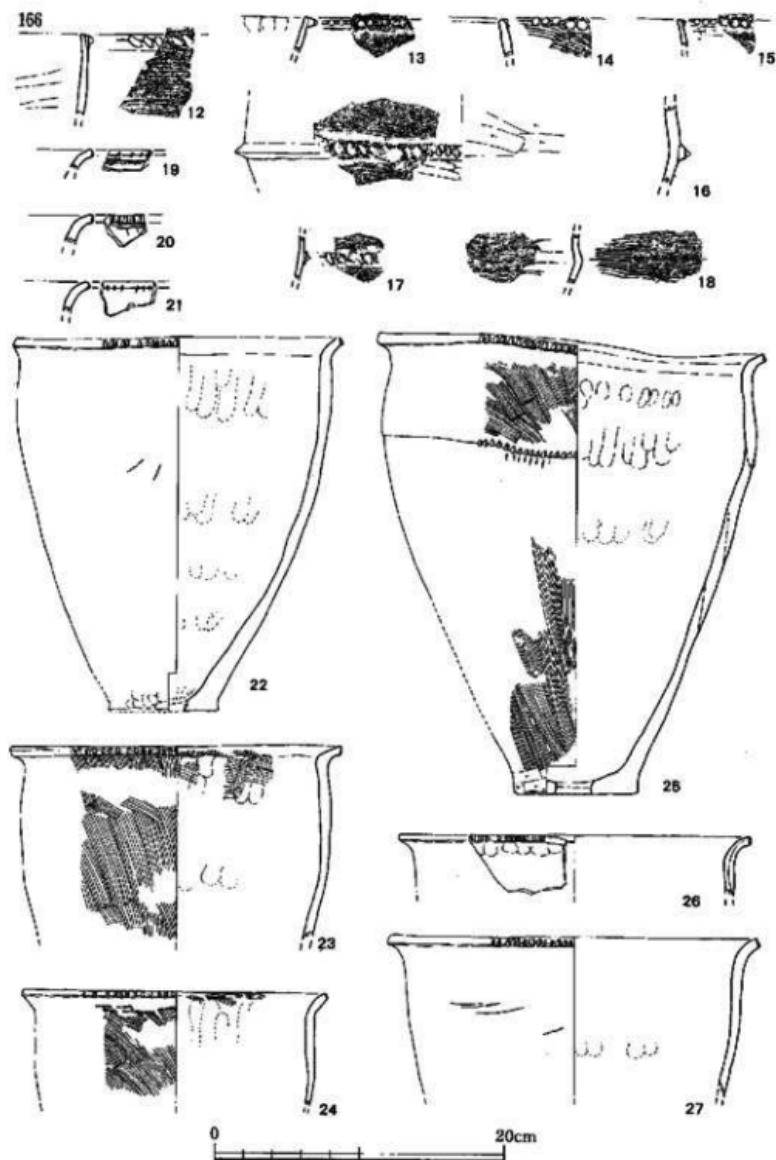


Fig.178 第47号貯藏穴出土土器実測図(2)

7) 第47号貯蔵穴 (SK-47) と出土遺物 (Fig.176~179, PL.26)

本貯蔵穴は、貯蔵穴集中区から離れて、調査区の南側中央部に位置している。平面形は円形を呈し、長径2.5m、短径2.2mを測り65cm前後遺存している。床面は径2.1m前後を測り、ほぼ平坦で、壁はやや開きながら立ち上がっている。床面から40~50cm上に小形壺と甕の完形品が出土したほか、本貯蔵穴の18層から20層にかけて比較的まとまった遺物が出土した。

**出土土器 (1~41)**：第21次調査で検出された弥生時代前期の貯蔵穴のなかで、出土土器の量がもっとも多い。図示したもの以外に、壺の口縁部破片3点、如意形口縁甕の口縁部破片3点、壺または甕の底部破片5点、胴部破片がある。

壺には大・中・小形品がある。1は口縁部が緩やかに広がる。2~5・7は口縁部と頸部の境に段を有する。2の口縁部下の段は不明瞭で稜線化している。7の口縁部下の段は、3・4が粘土を貼り付け形成されたとは異なり、削り出しに近く浅くあまい。口縁の屈曲度をみると、4・5は他と比べて端部付近でさらに強く曲げられる。6は口縁内面に粘土を貼り付けて段状に肥厚させたものである。他の貯蔵穴から出土した同じタイプの壺から考えて、口縁部と頸部の境に浅い段がつくと考えられる。

8は胴部と頸部の粘土帯の接合部分にあたる肩部に明瞭な段が巡る。また、内面にも接合線が段として残っている。5・9・11は、肩部にヘラ状工具で幅が広めの沈線を巡らせて、段風の効果を出している。11はその下に短斜線で2条の平行沈線文の間を充たした文様帶を上下2段に施文している。10は沈線を巡らせるのみで、その下に斜格子文を乱雜にヘラ状工具で施している。

以上の壺は、1が亀の甲式と考えられる以外に、いずれも板付I式~II式の範疇で捉えられる。甕には、夜臼II式・板付I~II式・亀の甲式に分類されるものが含まれている。夜臼II式・亀の甲式は小破片ばかりで、量も少ない。12・14・15・16・17は夜臼II式に分類される。12の口縁部凸帯や、16・17の胴部凸帯は大きめで、キザミも大きく深い。15は凸帯は小さく、キザミは棒状工具を刺突して施し、12より後山の様相をもつ。14は直口縁の端部に先端の丸い棒状工具を刺突する。いずれも胴部外表面は、2枚貝やヘラ状工具を擦過する条痕、またはケズリ調整が施されている。

13は深鉢に近い器形で、口縁凸帯は断面コの字形である。キザミは浅く小さい。亀の甲式に分類できる。

18は夜臼II式に伴う粗製の深鉢である。胴部上半がわずかに屈曲して反転する。器面は2枚貝の条痕調整され、内面のみ部分的にナデ調整が加えられる。

19~29は、如意形口縁の甕である。24・26は口唇全面にヘラ状工具でキザミを施す。19~23・25・27・28は、口唇下半にキザミが施される。22・25は、口縁部の屈曲が強く、内面に不明瞭ながら稜線が走る。25は胴部上半の粘土帯接合部が段として残り、そこにヘラ状工具でキザミを施す。キザミは浅いが大きめで、間隔も密である。板付I式の範疇で考えてよかろう。

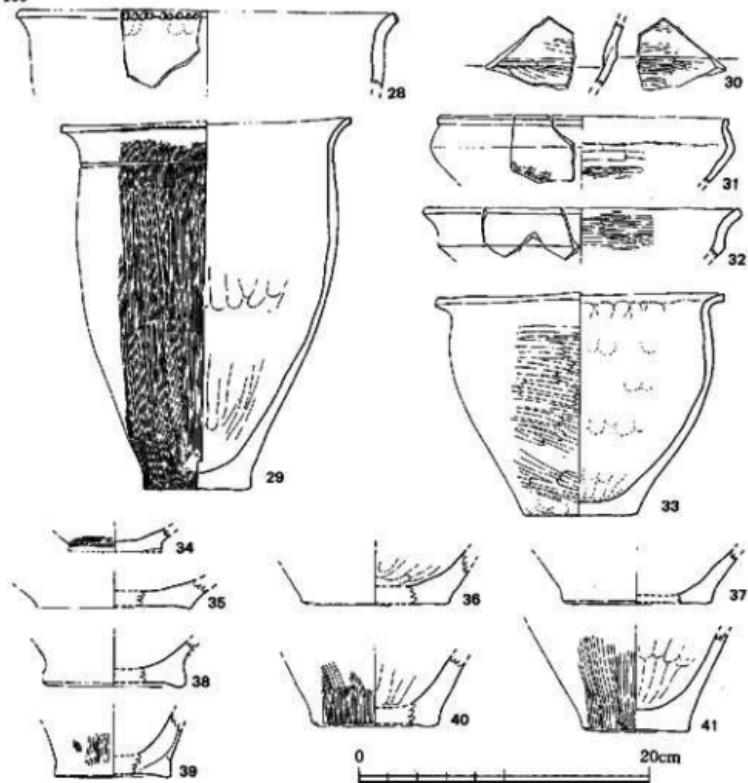


Fig. 179 第47号貯蔵穴出土土器実測図(3)

これらに対して、29は口唇下端に小さなキザミを間隔を密にいれている。胴部中位が張り、他と比較して全体に膨らみをもつプロポーションである。口縁部下に棒状工具で1条の沈線を巡らせている。板付II式の古段階に位置づけられる。

30・33は板付I式もしくはII式の鉢である。30は胴部上半の粘土帯接合部が段として残されている。如意形口縁がつくものと考えられる。33は如意形口縁が指頭で強く折り曲げられ、内面に不明瞭な稜線がつく。板付II式の範疇で考えることが適当であろう。

32は口縁が胴屈曲部より外方に傾く夜臼II式の典型的な浅鉢である。31は胴部上半がくの字形に屈曲するが、口縁は内傾する。口縁部の直下に浅い段が巡り、口縁部が強調される。この種の浅鉢は、北部九州の玄海灘沿岸や西北九州地方では、その系譜を辿れない。北部九州地方でも遠賀川流域以東から瀬戸内地方で、刻み目突堤文土器に伴う浅鉢と考えられる。当該時期

の西日本の土器編年併行関係を考える手がかりとなる資料である。

34~41は壺・甕・鉢の底部破片である。

以上の土器のほかに、AnTH 製で断面が凸レンズ状をなす磨製石劍、頁岩製の柱状片刃石斧・扁平石斧・An 製の削器各 1 点と花崗岩・石英・An 製の敲石各 1 点が出土している。

以上の出土遺物から、本貯蔵穴は前期後半のものといえる。

#### 8) 第50号貯蔵穴 (SK-50) と出土遺物 (Fig. 180)

本貯蔵穴は調査区の西南部側に位置し、SK-43・44に切られている。南北を前述貯蔵穴に切られ、西側が調査区外となっているため規模はわからないが、平面形は方形を呈すると考えられ25cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、径40cmで70cmの深さをもつ柱穴状の掘り込みがある。壁は床面からやや開きながら立ち上がっている。

出土土器 (1・2) : 図示した以外には、甕の胴部の小破片が 7 点あるのみである。1 は如意形口縁の下に断面三角形凸帯を貼り付けた鉢と考えられる。2 は如意形口縁の甕で、口唇下に浅い幅広のキザミを施している。板付 I 式土器の範疇に属そう。

以上の出土土器および切り合い関係から、本貯蔵穴は前期前半のものといえよう。

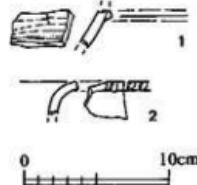


Fig. 180 出土上器実測図

#### 9) 第51号貯蔵穴 (SK-51) と出土遺物

(Fig. 181・182)

本貯蔵穴は調査区の西側中央部に位置し、SK-49に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、径1.6m前後を測り30cm前後遺存している。床面はほぼ平坦である。

出土土器 (1) : 出土した土器は小破片で、図化できたものは 1 点だけである。1 は比較的大形の丹塗り磨研壺の口縁端部である。口縁端付近が鉗錐状にわずかに肥厚するものであろう。ほかには壺・甕の胴部破片が 10 数片あるが、ハケ目調整が施されたものはない。

出土量がごく少量であるが、以上から夜白 II 式と考えておきたい。



Fig. 181  
出土土器実測図

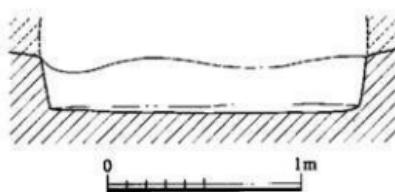
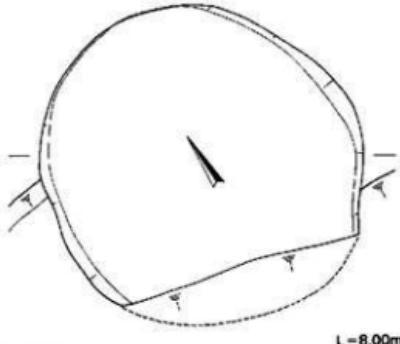


Fig. 182 第51号貯蔵穴 (SK-51) 実測図

以上の出土遺物から、本貯蔵穴は前期前半のものか。

## 10) 第52号貯藏穴 (SK-52) と出土遺物 (Fig.183~185, PL.26)

本貯藏穴は貯藏穴集中区から離れ、調査区の西側中央部のSK-51の北3mに位置している。平面形は円形を呈し、検出面では1.6m前後、床面は1.8m前後の径を測り80cmと比較的の遺存状態が良く、断面形はフラスコ状をなしている。床面はほぼ平坦である。遺物は上から床面までむらなく出土したが、第1層と床面がもっとも多く出土した。出土土器（1～32）：山土器のほとんどを図示している。

壺には、口縁部外面に粘土を貼付して肥厚させたものと、内面を段状に肥厚させたものがある。前者には口縁部の屈曲が強い1・4、口縁の幅が狭い2がある。また、後者のなかで、5・7は口縁部と頸部の境に沈線あるいは浅い段を巡らせる。3は肩部に先端の丸い棒状工具で浅い平行沈線文を2条巡らせている。

8・9は蓋である。外面はナデ調整で仕上げ、縫部周辺は横ナデ調整、内面には指頭によるナデ調整痕が明瞭に残る。

10～13は如意形口縁の壺である。10は破片が2点あるが、接合できない。11とともに、口縁部下に段を巡らせる。11にはヘラ状工具で小さく浅いキザミを施す。12は口縁部下端に浅いキザミをつける。13は口縁部の屈曲が強く、内面には不明瞭ながら継がつく。

14～20は鉢である。すべて如意形口

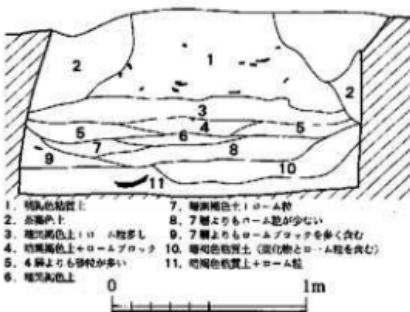
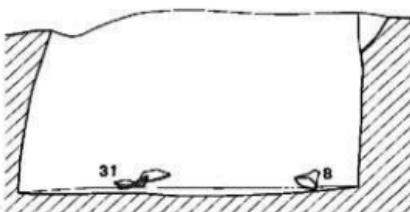
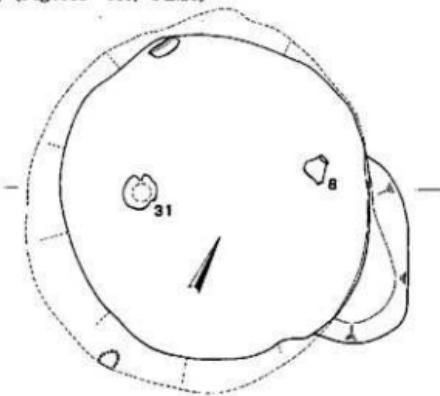


Fig.183 第52号貯藏穴 (SK-52) 実測図

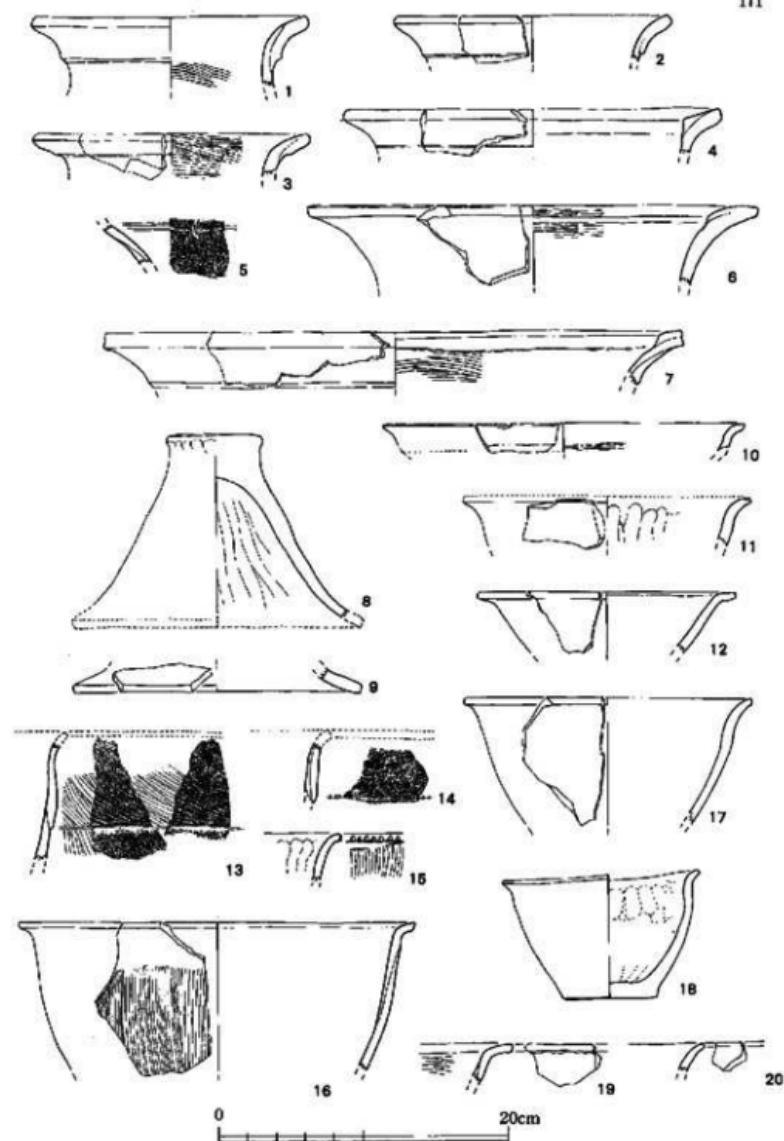


Fig. 184 第52号貯蔵穴出土土器実測図(1)

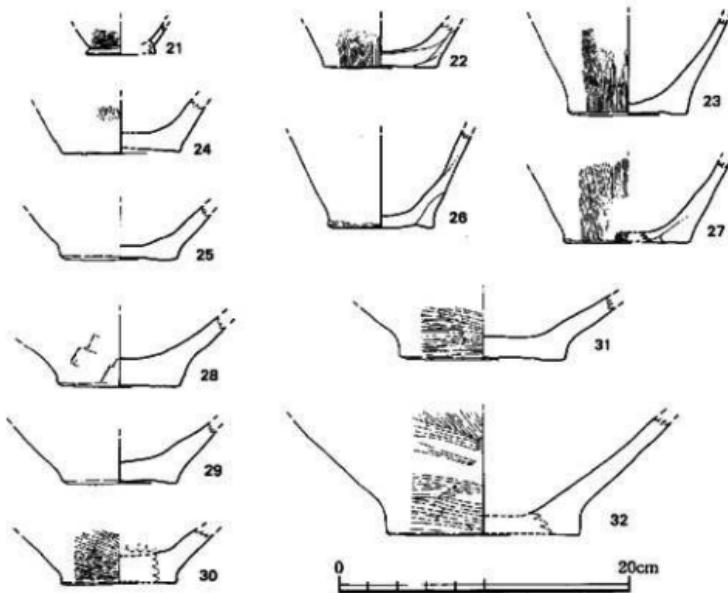


Fig. 185 第52号貯蔵穴出土土器実測図(2)

縁部をもち、口唇部にはキザミをもたない。14・16・19は端部の屈曲が強く内面に稜がつく。

21は精製の小形壺の底部破片である。底部と胴部の境に沈線を巡らせている。内面には赤色顔料が部分的に付着している。22~27は壺、28~32は鉢の底部破片である。

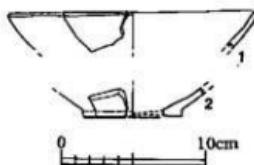
以上は、前述した SK-47 と比較して、時間的にやや後出する様相が読みとられ、板付Ⅲ式の範疇でとらえることができよう。

以上のはか本貯蔵穴からは、Ob 製打製石鏃・頁岩製柱状片刃石斧・An 製蛤刃石斧・An 製削器各 1 点と敲石 4 点、磨石 2 点、Ob 製削片 3 点が出土した。

以上の出土遺物から、本貯蔵穴は本調査区検出の貯蔵穴のなかではもっとも新しい時期のもので、前期後半のものといえる。

#### 11) 第53号貯蔵穴 (SK-53) と出土遺物 (Fig. 186)

本貯蔵穴は調査区の西側中央部に位置し、貯蔵穴の大半は調査区対象地外に属している。平面形は方形を呈すると考えられ、30cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は床面から開き気味に立ち上がっている。

Fig. 186  
第53号貯蔵穴出土土器実測図

出土土器（1・2）：1は壺形の小形鉢である。器面は荒れが著しいが、胎土や焼成から精製品と考えられる。2は浅鉢の底部と考えた。このほか、壺・壺の肩部破片が7点ほど出土している。壺の破片にはハケ目調整でつくられたものが含まれる。1・2ともに夜臼

II式の範疇と考えられるが、時期

的には夜臼II式と板付I式共併期でおさえることができよう。

以上の出土土器から、本貯蔵穴は前期前半のものか。

#### 14) その他の貯蔵穴と他遺構出土遺物 (Fig. 187)

SK-54は調査区の北西部に位置し、平面形は方形を呈すると考えられ、5cm前後遺存している。SK-78は調査区の南西部に位置し、SK-45に切られている。平面形は方形を呈し、一边は2.2mを測り10cm前後の遺存で前期前半のものか。

他遺構出土土器（1～5）：いずれもSK-48出土の壺形土器である。1は如意形口縁をもち、口縁下に沈線を巡らせており、口唇下にキザミを施している。2～4はキザミ目凸帯をもつ口縁部である。5の内外底とも条痕が施されている。1は板付II式、他は夜臼式土器である。

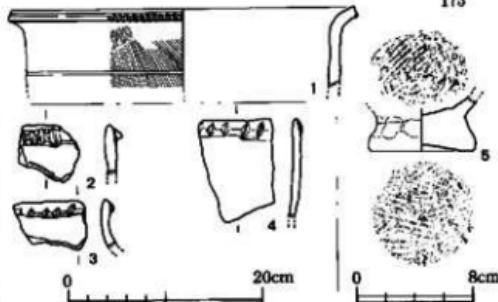


Fig. 187 他遺構出土土器実測図

Tab. 5 各貯蔵穴出土土器観察表

Fig.	遺物 No.	層位 遺構	遺 物 の 特 徴				遺物 登録 番号	遺物 実測 登録 番号
			器形	部 位	調 整 /	そ の 他		
166	1	SK-40	壺	口縁部	口縁下に研磨用の工具を撫でつけて底を成形、内外面ともに研磨		1009	1
	1		壺	口縁部	口縁下に明瞭な段、内外面ともに丁寧な横ナタ仕上げ		1021	2
	2		壺	肩部	外面は研磨、器面の荒れが進む、内面には指壓痕がかなり多く残存		1028	3
	3		壺	口縁部	内外面とも荒れが進む、口縁凸帯に爪によるやや浅めのキザミ		1027	2
166	4	SK-41	壺	口縁部	口縁を丸く仕上げ、全面にキザミを施す、内外面ともに横ナタ		1026	2
	5		壺	口縁部	口唇下半に浅めのキザミ、内外面ともに横ナタ		1025	2
	6		深鉢	口縁部	外面は2枚貝による条痕、煤が薄く付着、内面はナデ、粘土紐づくり		1024	2
	7		壺	肩部	外面は2枚貝による条痕の後にケズリ、内面はナデ		1022	2

Fig.	造物 No.	部位追跡	造 物 の 特 徴			造物 登録番号	造 物 実測 登録 番号
			器形	部 位	調 整 / そ の 他		
168	8	要	底部	外表面はハケ目、部分的に荒れ、内面はナデ、外底面から焼成後に穿孔		1023	2
	9	SK-41	鉢	口縁下半に大きいが浅いキザミ、外表面はハケ目、内面はナデ		1020	2
	10	鉢	口縁部	胴内外面は研磨、口縁部内面にはハケ目が部分的に残る、内面黒変		1019	2
170	1	壺?	口縁部	内外面ともに表面の荒れが著しく、調整の手細不明		1015	4
	2	壺?	底部	1と同一個体の可能性が強い、内面は黒変		1015	4
	3	壺?	口縁部	口縁下に浅い段が進る、内外ともに表面が荒れ、調整の手細不明		1017	4
	4	鉢	口縁部	外表面ともに横ナデ		1016	4
	5	SK-42	浅鉢	精製品、外表面ともに丁寧な横ナデ		1012	4
	6	浅鉢	脚部	精製品、口縁端を欠失、外表面ともに研磨		1011	4
	7	要	口縁部	外表面は2枚目による条痕、口縁部凸帯には浅い棒状工具で押捺キザミ		1145	4
	8	要	底部	外表面は荒れが進むが、部分的にハケ目が残存、内面は不明		1014	4
	9	要	底部	外表面は表面のほとんどが黒變、内面はナデ		1013	4
172	1	壺?	口縁部	内外面ともに荒れが著しく調整の手細不明		1003	5
	2	壺?	肩部	2条の平行沈線文を廻らし、上方に3条+αの平行範線をヘラ施文		1001	5
	3	壺?	口縁部	内外面ともに横ナデ仕上げ、小色顔料が部分的に付着		1002	5
	4	SK-43	壺?	口縁部凸帯に深めのキザミ、外表面は2枚目による条痕、内面は指ナデ		1007	5
	5	浅鉢	底部	精製品、外表面は荒れが著しく調整の手細不明、内面は研磨		1004	5
	6	要	底部	外表面はナデ、外底面は2枚目による条痕、内面は粘土帶が剥離		1006	5
	7	要	底部	外表面はヘラ状工具によるナデ、外底面はケズリ、内面はナデ		1005	5
175	1	壺?	肩部	肩部に不明瞭な段が進る、外表面は研磨、内面は指捺えの後にハケ口		1120	6
	2	要	口縁部	口縁端部に直接竹管状工具で浅い刺突キザミ、器面は荒れが進む		1128	8
	3	要	口縁部	口縁端部に直接ヘラ状工具で浅いキザミ、外表面はケズリに近いナデ		1127	8
	4	要	口縁部	口縁部凸帯にやや深い押捺キザミ、外表面は荒れが進む、内面はナデ		1126	8
	5	要	口縁部	口縁部突端にやや浅いキザミ、外表面は2枚目の条痕、内面はナデ		1129	8
	6	要	口縁部	口縁部凸帯に棒状工具でやや浅い押捺キザミ、器面は荒れが著しい		1123	8
	7	要	口縁部	口縁部凸帯にやや浅い押捺キザミ、外表面はヘラ状工具でナデ		1122	8
	8	要	口縁部	口縁部凸帯のキザミはやや深め、外表面はナデ?、内面は荒れが進む		1125	8
	9	要	脚部	脚部に浅いキザミを直接施す、外表面はナデ、内面は荒れが進む		1124	8
	10	要	口縁部	口縁部凸帯に深い押捺キザミ、器面は荒れが進み、調整の手細不明		1140	9
	11	要	脚部	脚部凸帯にはやや浅い押捺キザミ、外表面と内面ともに2枚目の条痕		1130	8
	12	SK-45	要	口縁部凸帯のキザミはやや浅め、外表面はケズリに近いナデ		1112	7
	13	要	口縁部	器面は2枚目による条痕の後に外表面はケズリ、内面はナデ		1111	7
	14	要	口縁部	口縁全面にヘラ状工具でキザミ、胴外面はハケ目の後にナデ		1113	6
	15	要	口縁部	口唇下半にハケ目原体で押捺キザミ、口縁周辺~内面は横ナデ		1118	6
	16	要	口縁部	口唇下端にヘラ状工具でキザミ、口縁部は横ナデ、胴内外面はナデ		1114	6
	17	要	口縁部	口唇下半にキザミ、口縁内外には指頭痕が残る、脚はナデ仕上げ		1115	6
	18	要	口縁部	口唇下端にヘラ状工具でキザミ、脚外面はハケ目の後にナデ		1110	7
	19	鉢	口縁部	口唇全面にハケ目原体で押捺キザミ、脚外面はハケ目、脚はナデ		1109	7
	20	鉢	口縁部	口唇全面に押捺キザミ、外表面は只詰条痕、内面は荒れが進む		1139	9
	21	鉢	口縁部	口縁端を欠失、外表面は研磨、内面は丁寧な横ナデ		1119	6
	22	鉢	口縁部	口縁端~脚外面は研磨、脚内面は丁寧なナデ		1116	6
	23	要	底部	外表面はかなり乱雑なヘラ状工具によるナデ、外底面はケズリ		1138	9
	24	要	底部	外表面は荒れが進み調整の手細不明、内面は乱雑なナデ		1135	9

Fig.	遺物 No.	部位 部位追跡	遺物の特徴			遺物 登録 番号	遺物 図 版 登録 番号
			器形	部 位	調 整 / そ の 他		
175	25	SK-45	壺	底部	外面はヘラ状工具によるナデ、内面には炭化物が付着	1136	9
	26		壺	底部	外面はハケ目、内面は荒れが著しく調整の子細は不明	1137	9
	27		壺	底部	外面はハケ目、内面はナデ	1134	9
	28		浅鉢	口縁部	外面は横ナデ、内面は研磨	1132	8
	29		浅鉢	口縁部	内外面ともに器面の荒れが著しく、調整の子細不明	1131	8
	30		浅鉢	口縁部	内外面ともに荒れが著しく調整の子細不明	1117	6
	31		浅鉢	口縁部	外面は荒れが著しく調整の子細不明、内面は研磨	1121	6
	32		浅鉢	底部	外面は荒れが著しく調整不明、内面は不定方向の研磨	1132	9
	1	SK-47	壺	口縁部	口縁～内面は横ナデ、頸部は研磨痕が部分的に残る	1092	16
	2		壺	口縁部	精製小壺、内外面ともに丁寧な横位の研磨	1084	17
	3		壺	口縁部	内外面ともに横ナデ	1100	21
	4		壺	口縁部	口縁下に粘土帯貼付の明瞭な段、内外面ともに丁寧な横ナデ仕上げ	1068	4
	5		壺	略完形	肩部に段状の沈線、口縁周辺は横ナデ、頸部は研磨、他はナデ	1064	15
	6		壺	L縁部	L縁下端に密にキザミを施す、口縁周辺は横ナデ、頸部は研磨	1080	17
	7		壺	口縁部	内外面ともに器面の荒れが著しく調整の子細不明	1079	17
	8		壺	肩部	外面は研磨、内面には粘土帶の接合部分が段状となる	1101	21
	9		壺	肩部	肩には段状の沈線、外側は研磨、内面はナデ	1074	18
	10		壺	肩部	肩に沈線1条、下方に斜格子文をヘラ状工具で施文	1065	15
	11		壺	頸脚部	肩に沈線状の段、外側は研磨、内面には指頭痕が多く残る	1088	16
178	12	SK-47	壺	口縁部	口縁部凸帯にやや深めの押捺キザミ、外側は貝殻条痕、内面はナデ	1069	14
	13		壺	口縁部	口縁部凸帯に浅いキザミ、ナデ仕上げ、内面には指頭痕が残る	1067	14
	14		壺	口縁部	口縁端部に棒状工具で刺突してキザミを施す、外側は貝殻条痕	1087	17
	15		壺	口縁部	口縁凸帯は小さく、キザミは浅い刺突風のキザミ、外側はヘラナデ	1066	17
	16		壺	口縁部	外側はヘラ状工具でナデ、内面にはケズリに近い強いナデ	1085	17
	17		壺	肩部	肩部凸帯にはやや深めの押捺キザミ、外側は板状工具によるナデ	1082	17
	18		壺	肩部	内外面ともに貝殻条痕、内面はその後に部分的にナデ	1083	17
	19		壺	口縁部	口縁下端にヘラ状工具でキザミ、外側はハケ目の後にナデ	1089	16
	20		壺	口縁部	口縁下半にヘラ状工具で密にキザミ、外側はヘラ状工具でナデ上げ	1090	16
	21		壺	口縁部	口縁下端にヘラ状工具で不規則にキザミを施す、内外面とも横ナデ	1091	16
	22		2/3残存	口縁部	口縁下半にキザミ、外側は観定向へのナデ、部分的にヘラ痕が残る	1093	20
	23		壺	口縁部	口縁下半にヘラ状工具でキザミ、外側はハケ目の後にナデ、煤付着	1096	19
	24		壺	口縁部	口縁全面にキザミ、肩外面はハケ目、一部剥離、内面は指ナデ	1094	19
	25		壺	略完形	口縁全面に押し引き風のキザミ、肩上半のキザミは刺突風	1073	18
	26		壺	口縁部	口縁全面にヘラ状工具でキザミ、内外面ともにナデ仕上げ	1066	14
179	27	SK-47	壺	口縁部	口縁下半にヘラ状工具でキザミ、内外面ともナデ、部分的にヘラ痕	1095	19
	28		壺	口縁部	口縁下半にヘラ状工具で切り聞くようなキザミ、外側は荒れが進む	1097	19
	29		壺	略完形	口縁下端にヘラ状工具で浅く小さなキザミ、口縁下に幅広で浅い沈線	1063	15
	30		鉢	肩部	内外面ともに研磨	1078	18
	31		浅鉢	口縁部	口縁周辺は荒れが著しい、肩外面は研磨	1070	14
	32		浅鉢	口縁部	外側は横ナデ、内面は研磨	1081	17
	33		鉢	略完形	外側は研磨、内面はナデ仕上げ、内面と外底側面には指頭痕が残る	1071	14
34	34	SK-47	壺	底部	外側は研磨、内面は荒れが著しく調整の子細不明	1075	18
	35		壺	底部	外側はナデ仕上げ、内面は指頭によるナデのまま	1077	18

Fig.	遺物 No	部位造構	遺物の特徴			遺物 登録 番号	遺物 実測 図 番号
			器形	部 位	調 整 / そ の 他		
179	36	SK-47	鑿	底部	外面はナデ、内面は指頭によるナデ	1105	21
	37		鉢	底部	内外面とも二次的な火熱を受け器面が荒れ、調整の子細は不明	1102	21
	38		鉢	底部	外面は器面の剥離が進む、内面は板あるいはヘラ状工具によるナデ	1076	18
	39		鑿	底部	外面は器面の荒れが進み、部分的にしかハケ目残らず	1104	21
	40		鑿	底部	外面はハケ目、内面は指頭によるナデ	1103	21
	41		鑿	底部	外面はハケ目、内面は指頭によるナデ	1072	14
180	1	SK-50	鉢?	肩部	断面三角形突帯が1条進る、外面は横ナデ、内面は研磨	1149	22
	2		鑿	口縁部	口縁下半にヘラ状工具で浅いキザミを施す、内外面ともに横ナデ	1148	22
181	1	SK-51	壺	口縁部	人形巻、内外面とも月塗り研磨	1146	22
184	1	SK-52	壺	口縁部	内外ともハケ目仕上げ、頸部内面には部分的にハケ目が残る	1042	10
	2		壺	口縁部	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細不明	1050	12
	3		壺	口縁部	外表面は研磨、内面は研磨	1049	12
	4		壺	口縁部	内外面とともに横ナデ仕上げ	1053	13
	5		壺	肩部	肩に2条の浅いヘラ書きの平行流線文が進る、外表面は研磨	1052	12
	6		壺	口縁部	外表面は荒れ、調整の子細は不明、内面は研磨	1043	10
	7		壺	口縁部	外表面は荒れが進み調整の子細は不明、内面はハケ目の後に横ナデ	1060	13
	8		壺	略完形	瓶底部を欠損、外表面はナデ仕上げ、内面には指痕痕が残る	1041	10
	9		壺	肩部	内外面とも横ナデ、口径は小破片のため不確実	1055	13
	10		浅鉢	口縁部	外表面は荒れが進み、内面に一部削磨痕が残る	1058	13
	11		鉢	口縁部	口縁先端を欠損、外表面はナデ仕上げ、内面は指頭ナデ	1056	13
	12		鉢	口縁部	口縁周辺は横ナデ、肩外面は横位の研磨、内面はナデ	1046	12
	13		鉢	肩部	口縁先端を欠損、外表面はハケ目、内面はナデ	1044	10
	14		壺	口縁部	口縁を欠損、内外面ともにナデ仕上げ	1047	12
	15		壺	口縁部	口唇下部に浅いキザミ、外表面はハケ目、内面は指頭によるナデ	1051	12
	16		鉢	口縁部	口縁端が荒れ、キザミの有無不明、外表面はハケ目、内面はナデ	1045	12
	17		鉢	口縁部	外表面は荒れて調整の子細は不明、内面は丁寧なナデ	1048	12
	18		鉢	略完形	外表面はナデ?、二次的な火熱を受ける、内面は指頭によるナデ	1057	13
	19		鉢	口縁部	口縁~外表面は横ナデ、内面は研磨	1054	13
	20		鉢?	口縁部	内外面とともに横ナデ仕上げ	1061	13
185	21	SK-52	壺?	底部	肩部との境に沈線状の凹部が進る、外表面は研磨、内面に赤色顔料	1059	13
	22		壺	底部	外表面はハケ目、内面はナデ、炭化物が付着	1033	11
	23		壺	底部	外表面はハケ目、内面は器面の荒れが進み調整の子細は不明	1030	11
	24		壺	底部	器面の荒れが著しく、外面上に部分的にハケ目が残るのみ	1038	10
	25		鉢	底部	内外面とともに2次的な火熱を受け、器面が荒れ調整の子細は不明	1040	10
	26		壺	底部	内外面とともにナデ仕上げ、外表面には煤が付着	1031	11
	27		壺	底部	外表面はハケ目、内面はナデ	1032	11
	28		鉢	底部	外表面はヘラ状工具によるナデ、ヘラ痕が残る	1034	11
	29		鉢?	底部	内外面とともに2次的な火熱を受け、器面が荒れ調整の子細は不明	1036	11
	30		鉢	底部	外表面は研磨、内面はナデ	1035	11
	31		壺	底部	外表面は研磨、内面はナデ、黒変	1039	10
	32		鉢	底部	大形鉢、外表面は研磨、内面はナデ	1037	11
186	1	SK-53	鉢	口縁部	塊形の精製小鉢、内外面とも荒れが著しく調整の子細は不明	1152	22
	2		鉢	底部	1と同一個体か? 内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	1151	22

### 3. 弥生時代の墓地と出土遺物

本調査区では、28基の壺棺墓と6基の土塚墓および8基の甕棺墓墓壙と考えられる土壙を検出した。甕棺墓は、小児棺が1基あるのみで、他は成人棺である。時期は中期前半から後期初頭のものまであり、中期後半のものが主体をなしている。切り合ひ関係をもつ甕棺墓は少なく、甕棺墓の遺存状態は良好とはいえないが、多量の甕棺墓からなる大墓地ではなく、小規模の墓地である。

甕棺墓を取り囲むようにくの字状に位置する幅3m前後、長さ25mの溝状をなす2基の土壙（SK-48・49）からは、多量の完形に近い丹塗りの土器が出土した。特にSK-48からは床面の三ヶ所に遺物の完形の集中があられ、墓地祭祀と考えられる。SK-48・49は祭祀土壙といえるとともに、墓地を区画している可能性が高いといえよう。

甕棺墓は、SK-48を意識したような形で分布している。中期前半の甕棺墓は調査区中央部の北側に分布し、中期後半の甕棺墓はSK-48に接するような形で分布している。

Tab.6 甕棺墓一覧表

No.	合口型式	器 形		埋置方位	埋置角度	時 期	攝図番号
		上甕	下甕				
SK-0 1	呑口式か	甕	甕	S -55° - E	50°	中期末	188 189
SK-0 2	単式棺か	-	甕	S -75° - E	27°	中期後半	188 190
SK-0 3	接口式	甕	甕	S -82° - E	40°	中期末	188 191
SK-0 4	単式棺か	-	甕	S -47° - E	52°	中期末	188 192
SK-0 5	単式棺か	-	甕	S -82° - E	44°	中期後半	193 194
SK-0 6	呑口式	甕	甕	N -86° - W	42°	中期末	193 195
SK-0 7	接口式	甕	甕	N -21° - W	42°	中期後半	193 196
SK-0 8	不明	-	甕	S -70° - E	33°	中期後半?	193 197
SK-0 9	不明	-	甕	S -71° - E	-	-	198 197
SK-1 0	単式棺か	-	甕	S -75° - E	47°	-	198 199
SK-1 1	接口式	甕	甕	N -69° - E	38°	中期後半	198 200
SK-1 2	単式棺	-	甕	S -71° - W	36°	中期後半	198 201
SK-1 3	不明	-	甕	S -48° - E	-	中期中葉	198 201
SK-1 4	接口式か	甕	甕	N -5° - E	57°	後期初頭	202 203
SK-1 5	単式棺か	-	甕	S -45° - E	-	中期後半	202 204
SK-1 6	単式棺	-	甕	S -70° - E	27°	中期中葉	202 205
SK-1 7	呑口式	甕	甕	N -87° - E	24°	中期末	206 207
SK-1 8	合口	-	甕	S -8° - W	-	中期中葉	206 207
SK-1 9	接口式	甕	甕	N -88° - E	3°	中期前半	206 208
SK-2 0	接口式	甕	甕	N -62° - E	-1°	中期前半	209 211
SK-2 1	不明	-	甕	N -16° - W	36°	中期後半	206 210
SK-2 2	接口式	甕	甕	S -68° - W	-8°	中期前半	212 213
SK-2 3	合口か	-	甕	S -86° - W	29°	中期中葉	212 214
SK-2 4	不明	-	甕	S -80° - E	-	後期初頭	212 216
SK-2 5	不明	-	甕	N -59° - E	-	-	212 216
SK-2 6	単式棺	-	甕	N -72° - E	27°	中期後半	215 216
SK-2 7	単式棺	-	甕	S -58° - E	22°	中期後半	217 217
SK-2 8	不明	-	甕	S -87° - E	39°	-	218 218

## 1) 第1号壺棺墓 (SK-01) (Fig. 188 + 189, PL.27)

調査区の南西部に位置し、攢乱に切られている。標高7.6m前後の検出で、大半は欠損し、墓

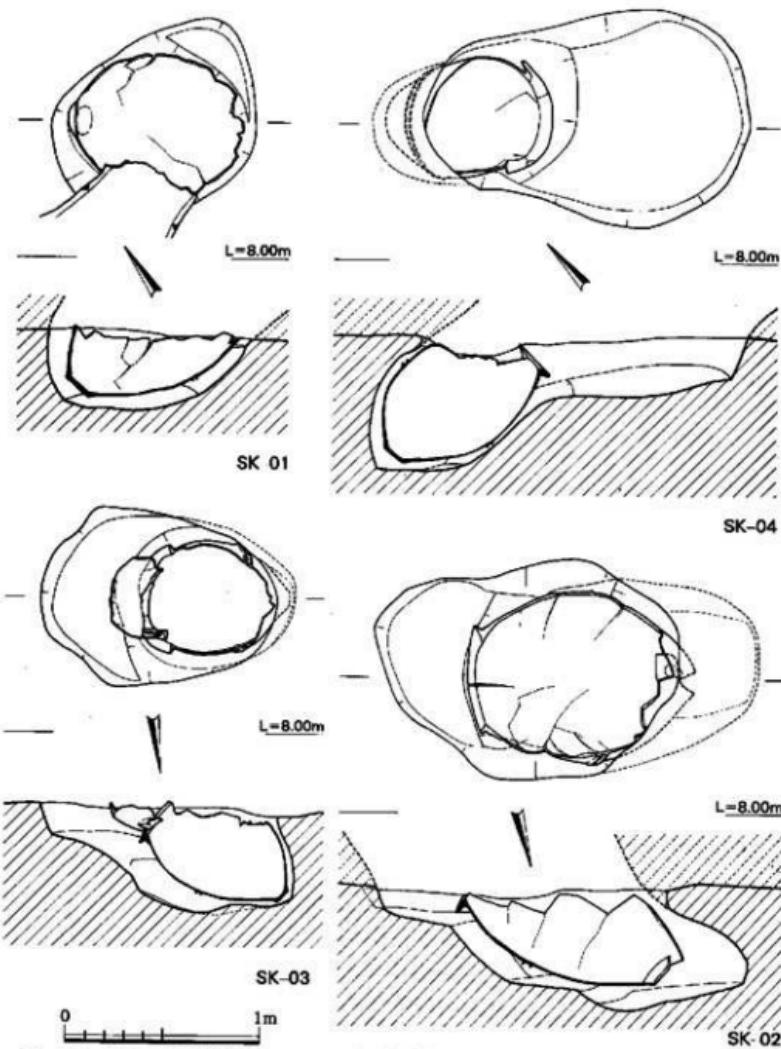


Fig.188 第1~4号壺棺墓 (SK-01~04) 実測図

墳は40cm前後の遺存で、底部から胴部中央部まで遺存している。調査中は単棺と考えていたが、棺内出土の土器が復元でき、大形壺と中形壺を組合せた合口壺棺の可能性が高いといえよう。口径が異なることから、組合せ方は呑口式か(偶発的に他の壺棺が落ち込んだ可能性もある)。

**上壺：**口縁部はくの字状をなし、口縁部下に三角の貼付け凸帯を有し、胴上半部に最大径をもっている。内面の口縁と胴部の境は明瞭で、胴部下半から底部は欠損している。胴部上半部外面にはハケ目調整が残り、口縁内面は工具による横ナデ調整、口縁部・凸帯貼付け部は横ナデ調整を施し、胴部外面下半はハケ目調整後ナデを加えている。口径44cm、最大径47.3cm、残存高33.7cm。

**下壺：**胴部中央よりやや下に、コの字形のシャープで端部が垂れぎみの2条の貼付け凸帯を巡らしており、底部より16cm前後のところが0.6cm前後と極端に薄くなっている。逆L字形の口縁をもつタイプと考えられるが、胴上半部から上は削平を受け欠失しているためわからない。器面はナデ調整が施され、凸帯から上部および底部近くに黒斑がみられる。最大径は凸帯にあり82.2cm、底径14cm、残存高79.7cm。

上壺と下壺はタイプが異なり、時期差が考えられ、口径も極端に違うことから分けて考えるべきかもしれないが、ここでは呑口式の合口壺棺墓としておく。上壺は中期末から後期初頭、下壺は中期後半のものと考えられることから、本壺棺墓は中期の終わり頃のものといえよう。

## 2) 第2号壺棺墓 (SK-02)

(Fig.188・190, PL.27)

調査区の南西部のSK-01・03・04の間に位置し、削平を受け口縁部の3/4が欠失している。墓壙は平面形隅丸方形を呈し、床面から斜めに横穴を掘ったと考えられる。60cm前後

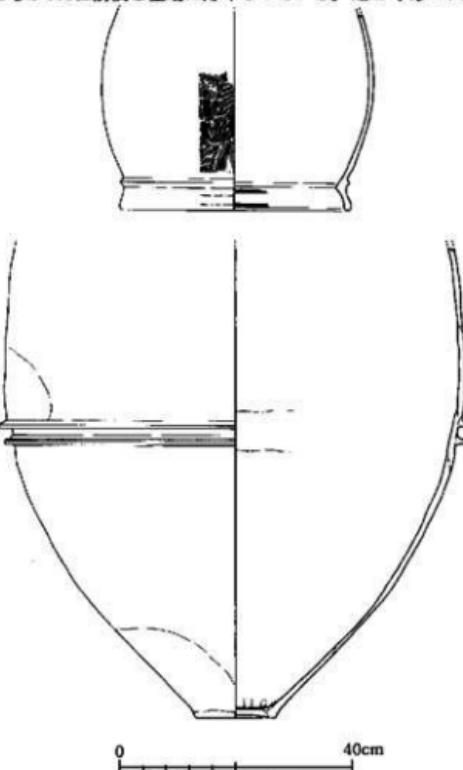


Fig.189 第1号壺棺実測図

遺存している。墓壙断面は階段状をなしている。木蓋等の痕跡はないが、1個体の甕しかなく单棺と考えられる。

甕：逆L字状口縁をもち、口縁直下で径がすばまり、三角形の張付け凸帯を1条巡らせている。胴部中央よりやや上に、2条のコの字の凸帯を巡らせている。口縁端部はやや垂れ、最大径は口縁部と胴部凸帯にあり、底部近くの器壁が薄い。全体の形は丸みがある。器面は、口縁部が横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整後ナデを加えている。肩下半部に2ヶ所、胴上半部に1ヶ所黒斑がみられる。口径と胴部最大径が同じで88.6cm、底径12.6cm、器高107cm。

以上から、単式甕棺墓で中期後半から終り頃のものといえる。

### 3) 第3号甕棺墓 (SK-03) (Fig.188・191, PL.27)

調査区の西南部から中央部寄りのSK-04の南に位置し、削平を受け、上甕の一部が残り、下甕の口縁部から胴部の一部が甕底に落ち込んだ状態で検出された。墓壙は50cm前後遺存し、上甕埋置部が壠状をなしている。大形の甕を下甕とし、中形の甕をその上に被せた接合式の甕棺墓で、接合部は黄褐色ロームで目張りしている。甕棺はS-82°-Eの方位をとり40°の角度で埋置している。

上甕：口縁部から胴上半部は下甕に落ち込んでおり、胴上半部から上は復元でき、下半部が欠失し約1/2の遺存である。くの字状をなす口縁部をもち、口縁直下に1条の貼付け凸帯を巡らせている。内面の口縁部と胴部の境界の稜線はやや不明瞭である。口縁部は横ナデ調整、胴部外面はナデ調整が施されている。胴部中央部に黒斑がみられる。最大径は胴上半部にあり44.9cm、口径42.6cm、残存高29.6cmである。

下甕：やや内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁部下に1条の貼り付け三角凸帯をも

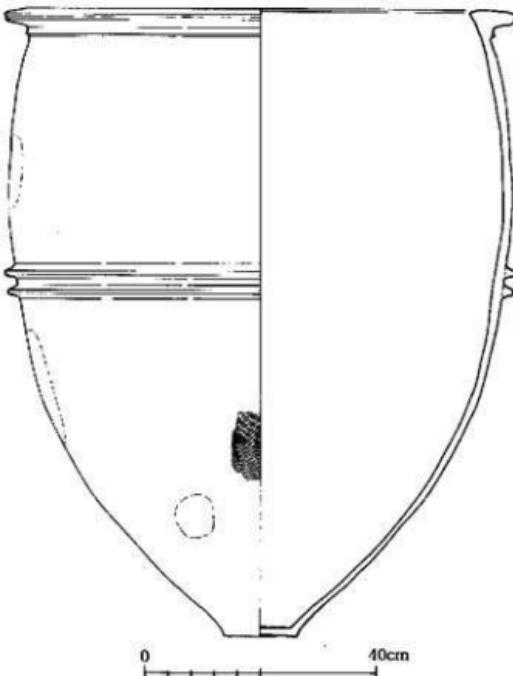


Fig.190 第2号甕棺実測図

ち、胸部中央にやや垂れるコの字状凸帯を2条巡らせている。口縁端部はやや垂れ気味で、最大径は胴部上半にあり、U縫部下がすぼまり、全体の器形はあまり丸みをもたない。底部は平底である。口縁部と凸帯貼付け部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整後ナデを加えているが、胴部下半から底部にかけてはハケ目調整が残っている。胴部内面はナデ調整。口径56cm、最大径59cm、底径10.2cm、器高73.5cm。

以上から、小形甕と大形甕を用い接合式で組合せた甕棺墓で、中期の終わり頃のものといえよう。

#### 4) 第4号甕棺墓 (SK-04) (Fig. 188・192, PL. 28)

調査区の西南部からやや中央部寄りのSK-02・03・05の間に位置し、SK-48・49間の陸橋部をSK-01～05で塞ぐような状態で配置されている。検出面で径1.1m前後の不整円形を呈する30cm前後遺存の墓壙掘り方をもち、墓壙掘り方下面から斜めに甕棺埋置のための穴を掘って人形甕を52°の角度で埋置している。墓壙は掘り方検出面から70cm弱の遺存で、甕棺はS-47°-Eの方位で埋置されており、口縁部から胴部にかけての一部が棺底に落ち込んでいた。なお、墓壙に木蓋等の痕跡はみられなかった。

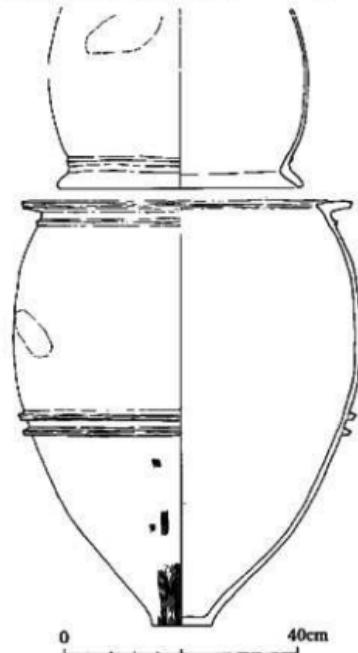


Fig. 191 第3号甕棺実測図

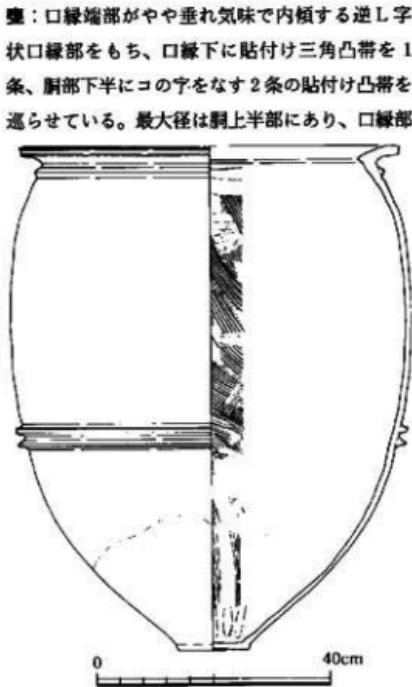


Fig. 192 第4号甕棺実測図

甕：口縁端部がやや垂れ気味で内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁下に貼付け三角凸帯を1条、胴部下半にコの字をなす2条の貼付け凸帯を巡らせている。最大径は胴上部にあり、口縁部

下がすぼまり、全体の器形はやや丸みがある。底部はやや上げ底気味で、底部から13cm前後の器壁が7mm前後ともっとも薄くなっている。口縁部・凸帶部は横ナデ調整、胴部外面はナデ調整が施され、口縁部直下の内面は工具による横ナデ、下はハケ目調整が施されている。口径65cm、最大径68.4cm、底径12.2cm、器高86.7cm。

以上から、大形甕を用いた单棺で、中期後半から中期終わり頃のものといえよう。

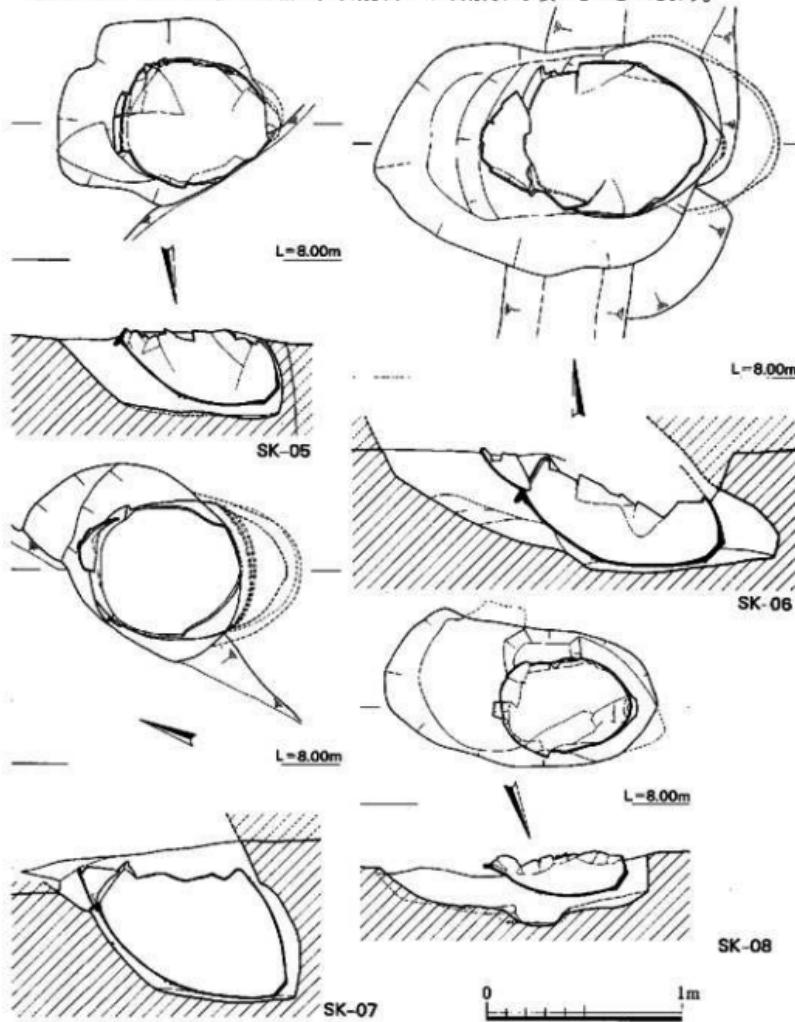


Fig. 193 第5～8号壺棺基 (SK-05～08) 実測図

### 5) 第5号壺棺墓 (SK-05)

(Fig. 193・194, PL. 28)

調査区の西南部からやや中部寄りの SK-04 の北、SK-49 の南端部付近に位置し、煉瓦造り建物基礎によって壺棺胴部の一部が破壊されている。墓墳は40cm前後の遺存で、大形壺を44°の角度で埋置しているが、口縁部から胴上半部の大半を欠失している。埋置方位は S-82°-E である。大形壺のみ検出したが、上壺が削平によって欠失した可能性もある。

**壺：**口縁端部がやや垂れ気味で内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁下に三角凸帯1条、胴部中央にコの字をなす3条の貼付け凸帯を巡らし、底部はやや上げ底気味である。最大径は胴上半部にあり、口縁部直下がすぼまり、胴下半部の器壁がもっとも薄くなっている。全体の器形はやや丸みをもっている。口縁部・凸帯貼付け部は横ナデ調整、胴下半部外面はハケ目調整後ナデが加えられ、胴部上半部外面および胴部内面はナデ調整が施されている。胴部上半に黒斑がみられる。  
口径55.8cm、最大径61.7cm、底径11.1cm、器高79.8cm。

以上から、大形壺を用いた單棺（合口の可能性もある）で、中期後半のものといえる。

### 6) 第6号壺棺墓 (SK-06) (Fig. 193・195, PL. 28)

調査区の中央部から南西部寄りの SK-03・11 の間に位置し、現代の排水溝によって削平を受けている。墓墳は60cm前後の遺存で、断面は階段状をなしている。大形の壺と口縁を打ち欠いた中形壺を用い、N-86°-W の方位をとり42°の角度で埋置されている。上壺の大部分および下壺の約半分は、下壺の中に落ち込んでいた。上壺と下壺の組合せ部は呑口式で、黄褐色ロームに黒褐色土を混ぜ目張りされていた。

**上壺：**口縁部と同じ高さで打ち欠き、打ち欠き部は研磨を加えている。最大径は胴上半部にあり、底部は平底である。胴部外面はハケ目調整が施され、打ち欠き部付近はナデが加えられ、胴部内面はナデ調整が施され、粘土つなぎ部には指押え痕がみられる。本来的にはくの字状をなす口縁部をもつものと考えられる。打ち欠き部径47.5cm、最大径54cm、底径11.4cm、器高59.6cm。

**下壺：**口縁端部がやや垂れ気味の内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁下にコの字をなす1条

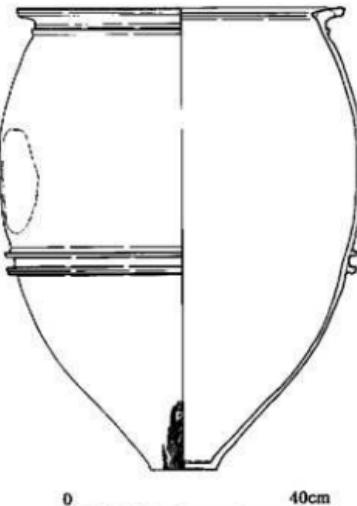


Fig. 194 第5号壺棺実測図

の貼付け凸帯、胴部中央に2条の貼付け凸帯を巡らしている。なお、コの字をなす3条の凸帯はいずれも低い。最大径は胴部中央のやや上にあり、口縁下が少しづばり、全体の器形はあまり丸みをもたない。底部は上げ底気味である。口縁部・貼付け凸帯部は横ナデ調整、胴上半部外面・胴部内面はナデ調整が施されている。胴部中央から胴上半部にかけて黒斑がみられる。口径69cm、最大径77cm、底径12cm、器高102cm。

以上から、口縁部打ち欠きの中形壺と人形壺を用いた呑口式で組合せた合口壺棺墓で、中期後半から中期終わり頃のものといえよう。

#### 7) 第7号壺棺墓 (SK-07)

(Fig.193・196, PL.28)

調査区の中央部から南寄りのSK-11とSK-48の間に位置し、現代の排水溝によって削平されている。墓壙は80~70cmの遺存で、壺棺よりわずかに広く掘られている。2個の大形壺を用いているが、1個は胴部中央から上を打ち欠き、鉢状にし上壺としている。N-21°-Wの方位をとり、42°の角度で埋置されているが、壺の底部は削平によって消失し、下壺の口縁部から胴上半部にかけては棺内に落ち込んでいた。上壺と下壺は接口式で組合せられ、組合せ部は部分的に灰白色粘土による目張りがみられる。

上壺：胴中央部から上を欠き鉢状をしている。打ち欠き部は部分的に研磨が加えられている。コの字状をなす2条の貼付け凸帯を巡らし、急激にすばり底部となっているが底部を消失している。なお、凸帯部下は器壁が薄く

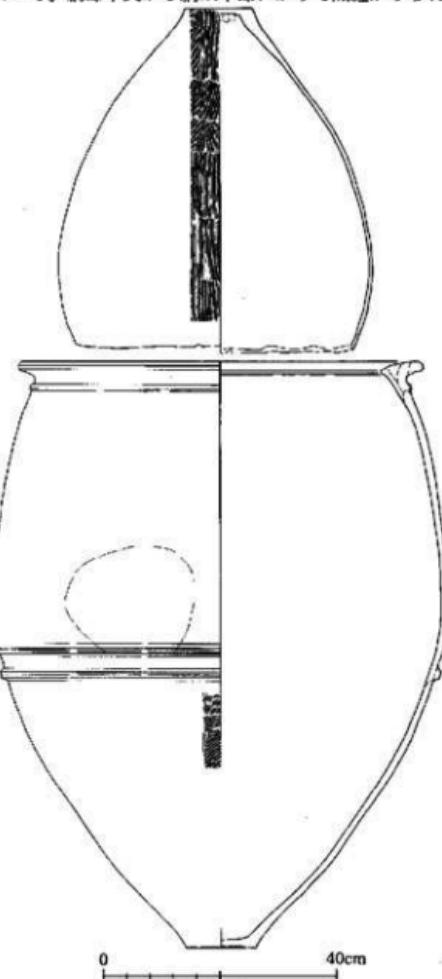


Fig.195 第6号壺棺実測図

なっている。本来的には逆L字状口縁部をもち、口縁直下に1条、胴部下半に2条のコの字をなす凸帯を巡らせた全体的に丸みが強い器形をもっていたと考えられる。凸帯部は横ナデ調整が施され、凸帯部から下の外面はハケ目調整後ナデが加えられ、内面はナデ調整が施されている。最大径は打ち欠き部にあり61.6cm、残存高34.8cm。

**下甕：**やや内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁下に1条、胴部中央よりやや下位に2条のコの字状をなす貼付け凸帯をそれぞれ巡らし、底部近くの器壁をもっとも薄く仕上げている。胴部最大径は上半部にあり、口縁下がややすばまり、全体の器形は卵形を呈している。口縁部および凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。口径79cm、底径10.6cm、器高118cm。

以上から、打ち欠きの大甕と大甕を接口式で組合せた合口甕棺墓で、中期後半のものといえる。

#### 8) 第8号甕棺墓 (SK-08)

(Fig. 193 + 197, PL. 29)

調査区のはば中央部のSK-09+10とSK-48の間に位置し、削平を受け、墓壙は25cm前後の遺存である。大形の甕をS-70°-Eの方位をとり33°の角度で埋置しているが、口縁部から胴上半部は消失している。墓壙底には10cm前後の不整形の掘り込みがみられる。遺存状態が悪いが、单棺か。

**甕：**胴下半部にコの字状をなす2条の貼付け凸帯を巡らし、凸帯下は急激にすぼまり、平底の底部となっている。本来的にはやや内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁下・胴下半に貼付け凸帯を巡らし、最大径が胴部中央にあり全体の器形が丸みをもっていたと考えられる。凸帯部は横ナデ調整、凸帯部から下はハケ目調整後ナデが加えられ、内面はナデ調整が施されている。

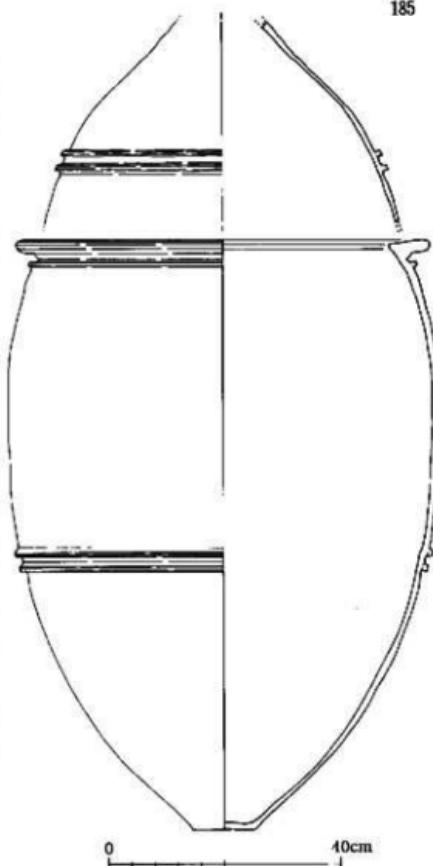


Fig. 196 第7号甕棺実測図

最大径64.9cm、底径10.5cm、残存高65.4cm。

以上から、大形壺を用いた単棺墓で中期後半のものか。

#### 9) 第9号壺棺墓 (SK-09) (Fig. 197・198, PL29)

調査区の中央部からやや西寄りのSK-10に近接し、SK-08の北西に位置している。墓壙の遺存も10cm弱で、S-71°-Eの方位をとり埋置されている中形から大形の壺もほとんど欠失し、床面に接している副部下半までが遺存しているのみである。

**壺：**副部下半から底部の遺存で、胴上半部から口縁部は欠失している。全体の器形は丸みがなく、胴下半部は比較的細身で、器壁も全体的に薄いが、底部近くがもっとも薄くなっている。器内外面ナデ調整が施されている。残存部最大径49cm、底径11cm、残存高38cm。

以上から、中形から大形の壺を用いた壺棺墓で、中期中頃前後のものか。

#### 10) 第10号壺棺墓 (SK-10) (Fig. 198・199)

調査区の中央部からやや西寄りのSK-09とSE-55の間に位置している。S-75°-Eの方位をとり、47°の角度で大形の壺が埋置されているが、口縁部から胴中央部までは削平によって欠失している。墓壙は20cm前後の遺存である。単棺か。

**壺：**胴下半部から底部の遺存である。凸帶部から下位と考えられ、底部は上げ底となっている。本来的には内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁下と胴部中央に凸帶を避けさせ、全体の器形はやや丸みをもつと考えられる。胴部外面はハケ目調整後底部近くを除き、ナデを加えている。内面はナデ調整が施されている。底部近くに黒斑がみられる。残存部径58.6cm、底径13cm、残存高41.1cm。

以上から、大形の壺を用いた単棺で、中期後半のものか。

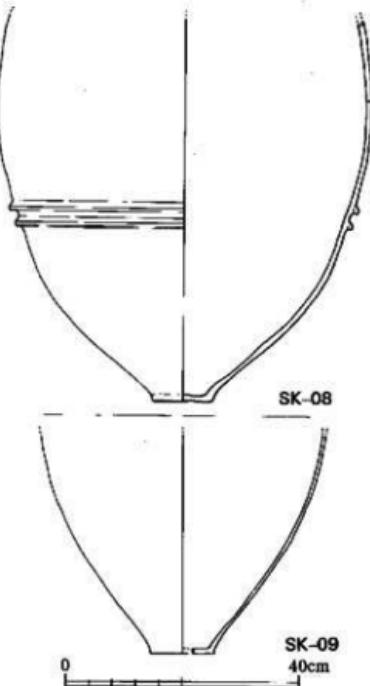


Fig. 197 第8・9号壺棺実測図

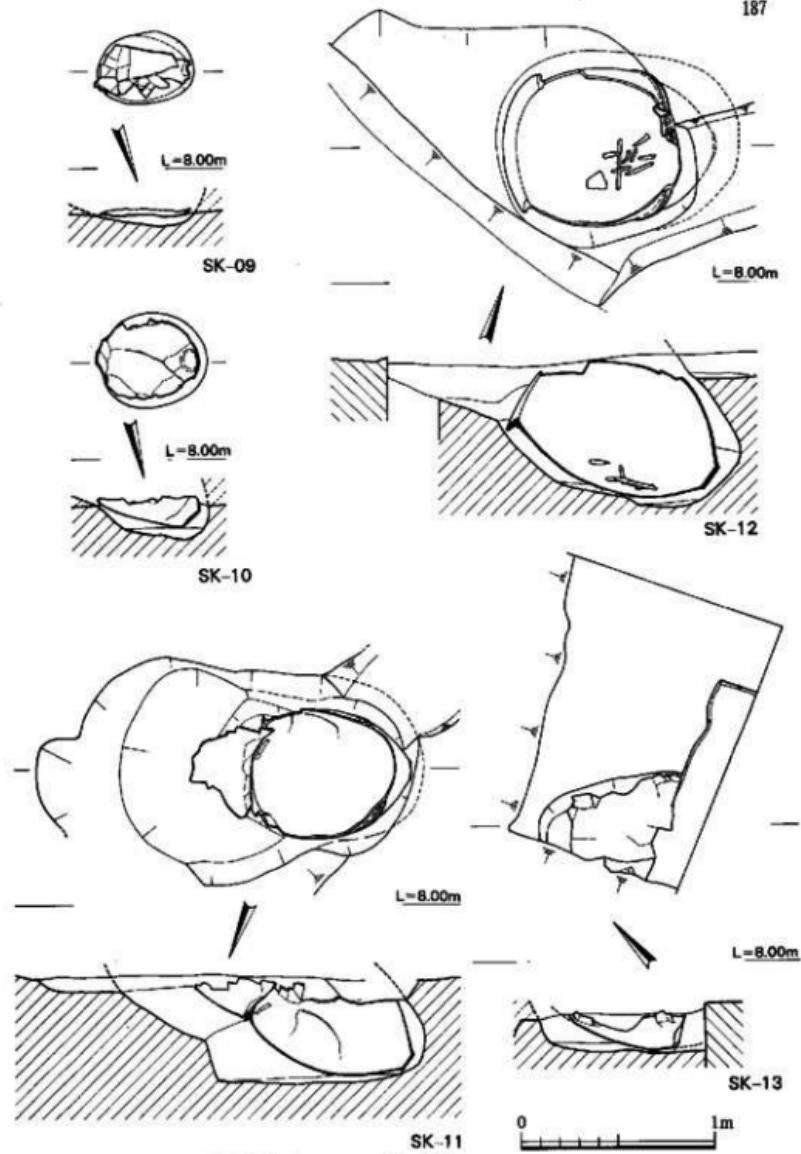


Fig. 198 第9~13号壺棺墓 (SK-09~13) 実測図

## 11) 第11号壺棺墓(SK-11) (Fig. 198-200, PL. 29)

調査区の南側中央部に位置し、SK-06の東、SK-07の南にあたり、現代の排水溝によって削平されている。墓壙は50cm前後遺存している。N-69°-E の方位をとり、38°の角度で2個の大形の壺を接口式で組合せ埋置している。上壺の胴下半部が削平により欠失しているが、上壺の胴上半部から口縁部、下壺の口縁部から胴部中央にかけては上圧により棺底に落ち込んでいた。なお、組合せ部には灰白色および黄白色粘土がみられることから、目張りをしていたと考えられる。

**上壺：**胴部中央から口縁部が遺存している。口縁端部がやや垂れ気味の内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁部下に三角の貼付け凸帯を1条、胴部中央にコの字状をなす1条(2条か)の貼付け凸帯を巡らしている。最大径は胴上半部にあり、口縁部に向かって大きくすぼまり、全体の器形は丸みをもっている。口縁部および貼付け凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。口径47.2cm、最大径57.4cm、残存高38.1cm。

**下壺：**内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁下に貼付け三角凸帯1条、胴下半部に端部が垂れ気味のコの字状をなす貼付け凸帯を巡らしている。最大径は胴上半部にあり、口縁部ですぼまり、全体の器形は丸みをもっている。底部は上げ底気味である。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。口径61.5cm、最大径68cm、底径10.2cm、器高70.9cm。

以上から、2個の大形の壺を用い接口式で組合せた合口壺棺墓で、中期後半のものといえる。

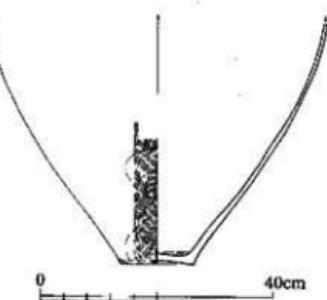


Fig. 199 第10号壺棺実測図



Fig. 200 第11号壺棺実測図

## 12) 第12号壺棺墓 (SK-12) (Fig. 198・201, PL. 30)

調査区の南側中央部のSK-07の東、SK-47の北に位置し、現代の排水溝2条に切られている。墓壙は一辺1m前後の隅丸方形を呈し、墓壙底から斜めに壺棺埋置のための壕を掘り込んでいるが、排水溝で破壊され、削平を受けている。棺は大形の甕を用い、S-71°-Wの方位をとり、36°の角度で埋置されているが、口縁から胴部の上面は棺内に落ち込んでいた。棺底には人骨の一部が遺存していた。墓壙に木蓋等の痕跡は確認できなかつた。単棺。

甕：完存している。口縁端部がやや重ね気味のやや内傾する逆L字状口縁をもち、口縁部下に貼付け三角凸帯1条、胴部中央よりやや下位にコの字状をなす2条の貼付け凸帯を巡らし、底部はやや上げ底氣味である。最大径は胴上半部にあり、口縁部下がややすぼまっており、全体の器形はやや丸味をもつてゐる。胴部中央より少し上に外側からの焼成後の穿孔があり、穿孔部の器面は部分的に研磨している。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整を施しており、口縁部平坦面から胴部外面は丹が塗布されている。口径78.7cm、最大径81.8cm、底径14cm、器高102.1cm。

以上から、大形の甕を用いた単棺で、中期後半のものといえる。

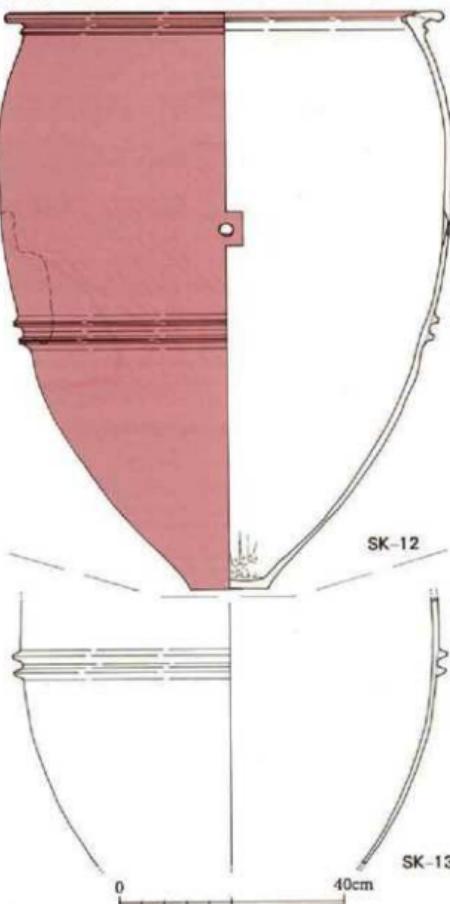


Fig. 201 第12・13号壺棺実測図

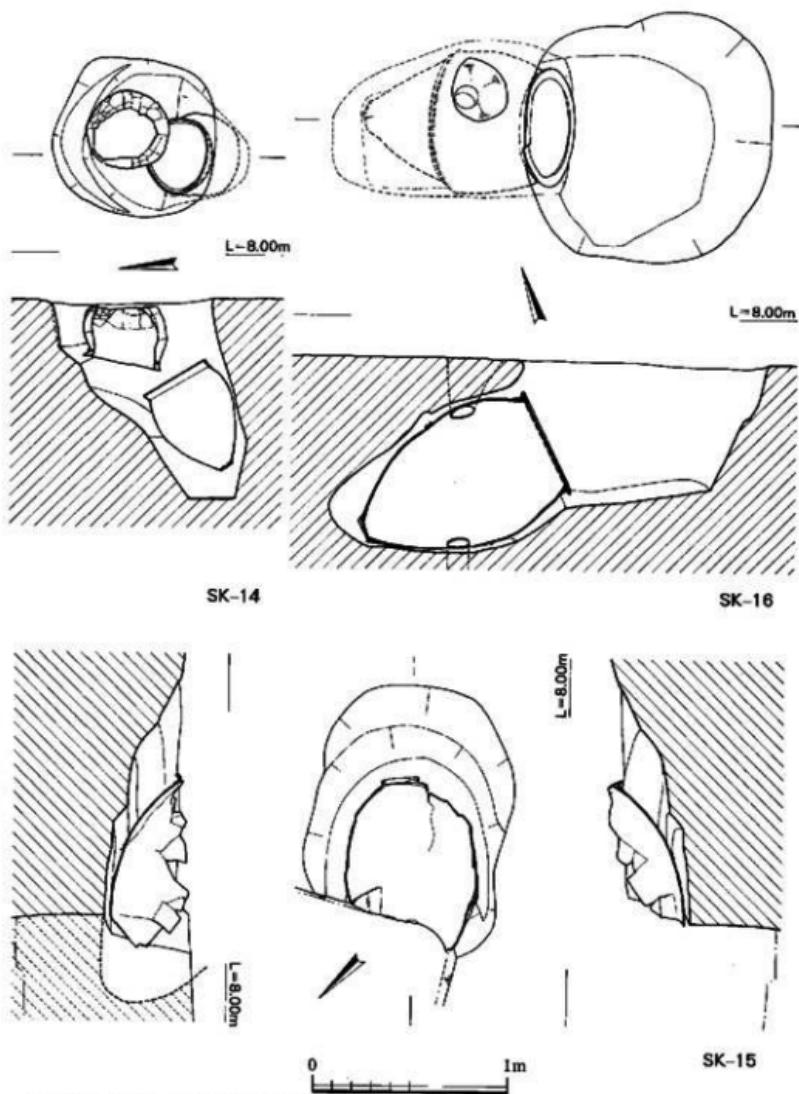


Fig. 202 第14~16号壺棺墓 (SK-14~16) 実測図

## 13) 第13号壺棺墓 (SK-13) (Fig. 198・201, PL.30)

調査区の西側中央部の比較的攪乱が浅かった部分に位置している。大形の壺を用い、S-48°-E の方位をとり埋置されているが、大半は削平を受けている。胴部中央部が20cm前後遺存の墓壙に貼り付いた形で遺存していた。本壺棺墓から、壺棺墓が西北部に分布していたことが推定できる。

**壺：**胴中央部のみの遺存である。胴部中央に比較的高い三角凸帯が2条張り付いている。凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。最大径78.1cm、残存高47.8cm。

大形の壺を用いた壺棺墓の検出は、墓域を推考することができ、墓壙の遺存状態から調査区の西側の壺棺墓の掘り込み面が高かったことが推定できる。本壺棺墓は中期中頃のものか。

## 14) 第14号壺棺墓 (SK-14) (Fig. 202・203, PL.30)

調査区の中央部に位置し、SK-48の東側にあたる。検出面での墓壙は平面形方形を呈し、一辺1m前後を測り、1m強遺存し、断面形は急階段上をなしている。棺は巾形の2個の壺を用い、N-5°-E の方位をとり57°の角度で埋置されているが、上壺の底部は棺内に落ち込んでいた。なお、上壺と下壺はほぼ同じ口径をもち、下壺は空洞部が多かったことから組合せ部は接口式と考えられるが、大きくずれがある。埋置時のずれか。

**上壺：**完存している。くの字状をなす口縁部をもち、口縁部下に1条の貼付け三角凸帯を巡らしている。最大径は胴上半部にあり、口縁部下がすばまり全体の器形はやや丸みをもち、底部は上げ底気味である。口縁部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整を施し、胴上半部はナデが加えられており、内面はナデ調整が施されている。口径40.4cm、最大径43.7cm、底径10.4cm、器高49.8cm。なお、口縁部内径は35.4cmを測る。

**下壺：**完存している。くの字状をなす口縁部をもち、口縁部下に1条三角張付け凸帯を巡らしている。最大径は胴上半部にあり、口縁部下がややすぼまり、底部は上げ底気味である。口縁部は上壺とともに立ち上がりが急であり、内面の口縁部と胴部の境界の稜線は明瞭である。口縁部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整後、部分的にナデを加え、内面はナデ調整が施されている。口径39.4cm、最大径44.3cm、底径10.5cm、器高53.2cm。なお、口縁部内径は34cmである。

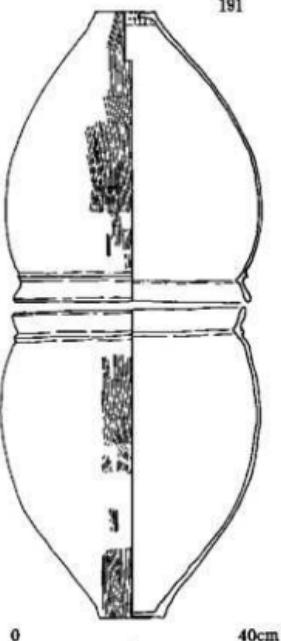


Fig. 203 第14号壺棺実測図

以上から、2個の中形の壺を用い、接口式（覆口式？）で組合せた合口壺棺墓で、後期初頭のものといえる。本調査区で唯一の小児墓の可能性があるもので、時期的にももっとも新しく、分布も他の検出壺棺墓と異なっている。

15) 第15号壺棺墓 (SK-15) (Fig. 202・204, PL.30)

調査区の中央部からやや北寄りの SK-27 と SE-56 の間に位置し、煉瓦造り建物基礎に破壊されている。墓壙は 35~40cm の遺存で、断面形は階段状をなしている。棺は大形の壺を用い、S-45°-E の方位をとり、35° 前後の角度で埋置されているが、底部は破壊され欠失し、口縁部から胴上半部の大半も削平によって欠失している。埋置方位が隣接して位置する SK-16・26・27 と近いことからも单棺と考えられる。墓壙に木蓋等の痕跡はみられない。

壺：口縁部は約半残存し、胴部下半から底部は欠失している。口縁端部はやや垂れ気味で平坦な逆 L 字状をなす口縁部をもち、口縁部下に三角貼付け凸帯 1 条、胴部中央に垂れ気味のコの字状をなす 2 条の貼付け凸帯を巡らしている。最大径は凸帯部にあり、全体の器形はやや丸みがある。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。なお、口縁部直下から胴下半部まで帶状に黒色帯がみられる。口径 66.4cm、最大径 69.5cm、器高 78.7cm。

以上から、大形の壺を用いた単式壺棺墓で、中期後半のものといえよう。

16) 第16号壺棺墓 (SK-16) (Fig. 202・205, PL.31)

調査区の中央部から北寄りの SK-17・39 の間に位置している。本調査区のなかでは唯一完存に近い状態で検出できた。墓壙は検出面で平面形隅丸方形を呈し、一辺 125cm を測る。豎壙の西側床面近くから斜めに棺埋置のための壙を掘り込んでいる。墓壙は 90cm 前後の遺存である。棺は大形の壺を用い、S-70°-E の方位をとり、27° の角度で埋置されている。壺棺は、現代のボーリング孔が貫通している。なお、墓壙内はしまった暗褐色から黒褐色土で埋められていたが、壺棺内には多量のビール瓶が詰まっていた。これはボーリング孔から棄てられたものが詰まつたものと考えられる。棺内には埋土が詰まつていないことか

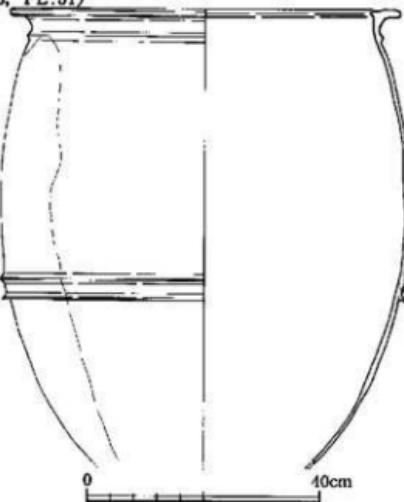


Fig. 204 第15号壺棺実測図

らなんらかの蓋の施設があったと考えられるが、木蓋等の痕跡は確認できなかった。

**壺：**完存である。口縁両端部がやや重れ気味の幅の短いT字状をなす口縁部をもち、口縁下に1条の三角貼付け凸帯、胴部中央にコの字状をなす2条の貼付け凸帯を巡らし、底部は平底である。最大径は胴部凸帯があり、口縁部ですばり橢形をなし、底部近くの器壁がもっとも薄くなっている。口縁部・凸帯部は横ナデ調整が施され、胴下半部の内外面はハケ目調整後ナデが加えられ、胴中央部から上部内外面はナデ調整が施されており、内面の粘土つなぎ目には指押え痕がみられる。口径60cm、最大径74.8cm、底径13.2cm、器高104.5cm。

以上から、大形の壺を用いた単式の壺棺墓で、中期巾頃のものといえる。

#### 17) 第17号壺棺墓 (SK-17) (Fig. 206・207, Pl. 31)

調査区の北側中央部に位置し、SK-16・19の間にあたり、SK-18と接している。墓壙は検出面で平面形隅丸長方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.2mを測る。堅壙の北西隅床面近くから棺埋置のための斜壙を掘り込んでいる。墓壙は70cm強の遺存である。棺は中形と人形の甕を用い、N-87°-E の方位をとり、24°の角度で埋置されているが、後世の削平および土圧によって、上甕の底部から下甕の口縁部にかけての一部は棺内に落ち込んでいた。大形の甕を下甕としているため、組合せ部は呑口式となり、組合せ部には黄褐色ロームによる目張りがみられる。

**上甕：**完存している。くの字状をなす口縁部をもち、口縁部下に三角貼付け凸帯を巡らし、底部は平底であるがやや丸みを帶びている。最大径は胴上半部にあり、口縁部下がややすばり、全体の器形はやや丸みをもっている。

口縁部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整後ナデが加えられ、胴内部はナデ調整が施されている。胴上半部に黒斑があり、口縁部下から胴下半部にかけて黒色帯がみられる。口径42.2cm、最大径46.7cm、底径10.1cm、器高58.6cm。

**下甕：**完存している。内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁部下に三角の貼

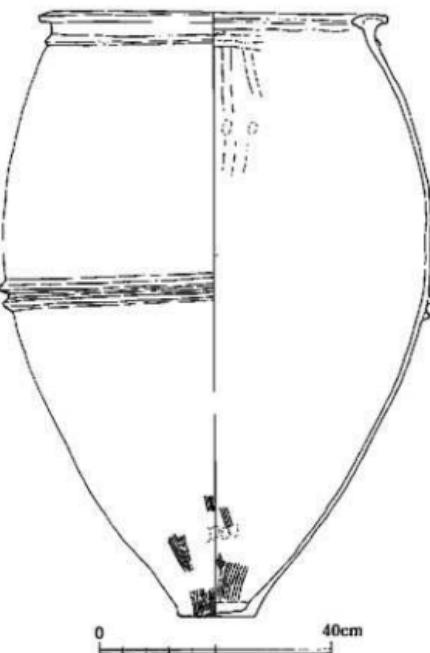


Fig. 205 第16号壺棺実測図

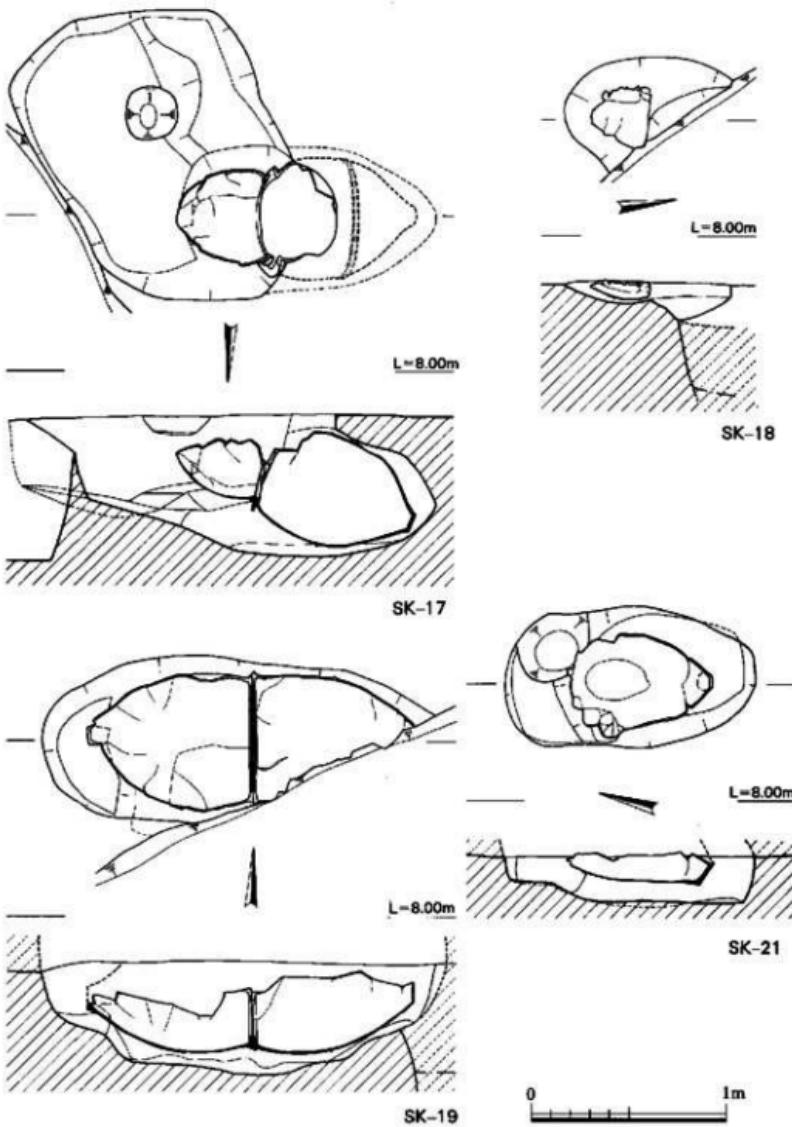
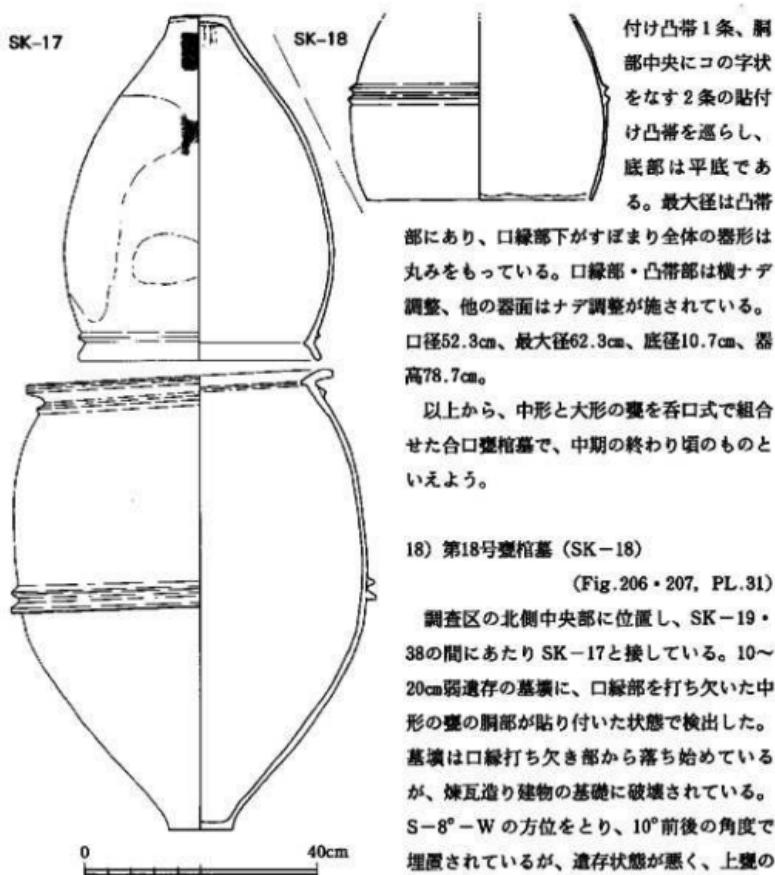


Fig. 206 第17~19・21号壺棺墓 (SK-17~19・21) 実測図



#### 18) 第18号壺棺墓 (SK-18)

(Fig. 206・207, PL. 31)

調査区の北側中央部に位置し、SK-19・38の間にあたりSK-17と接している。10~20cm弱遺存の墓壙に、口縁部を打ち欠いた中形の壺の胴部が貼り付いた状態で検出した。墓壙は口縁打ち欠き部から落ち始めているが、煉瓦造り建物の基礎に破壊されている。S-8°-W の方位をとり、10°前後の角度で埋置されているが、遺存状態が悪く、上壺の胴中央部が残っているのみで下壺は破壊され消失している。

上壺：口縁部打ち欠き、底部は欠失。胴中央部に三角の貼付け凸帯2条を巡らしている。最大径は凸帯部にあり、全体の器形は丸みをもっている。打ち欠き部は研磨を加え、凸帯部は横ナデ調整、胴内外面はナデ調整を施している。打ち欠き部径38.8cm、最大径45.2cm、残存高31cm。下壺は消失。

以上から、上壺に中形の壺を用いた合口壺棺墓で、中期中頃のものといえよう。

## 19) 第19号壺棺墓 (SK-19) (Fig. 206・208, PL. 31)

調査区の北側中央部に位置し、SK-17の北にあたり、北側を煉瓦造り建物基礎に破壊されている。墓壙は検出面で平面形椭円形を呈し、長軸2.1m、短軸0.9m前後を測り、45~50cm遺存している。大形の壺2個を用い、N-88°-Eの方位をとり、ほぼ水平(3°)に接口式で組合せ埋置している。上下壺はつぶれた状態で検出したが、下壺の底部が欠失している。組合せ部には黄褐色ロームによる目張りがみられた。

**上壺：**完存している。やや内傾するT字状をなす口縁部をもち、胴上半部にM字状をなす2条の貼付け凸帯を巡らしており、底部はやや上げ底気味である。最大径は胴上半部にあり、口縁部下がわずかにすぼまっている。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施され、内面の粘土つなぎ目には指押え痕がみられる。口径63cm、最大径65.7cm、底径13cm、器高84cm。

**下壺：**底部のみ欠失。ほぼ平坦なT字状をなす口縁部をもち、胴部中央よりやや上位にみかけ2条のM字状をなす凸帯を巡らしている。最大径は胴上半部にあり、口縁部下がややすぼまっている。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、胴部外面はハケ日調整後ナデを加え、胴部内面はナデ調整を施している。口径66.7cm、最大径68.9cm、残存高79cm。

以上から、大形の壺2個を接口式で組合せた合口壺棺墓で、中期前半のものといえる。本調査区で

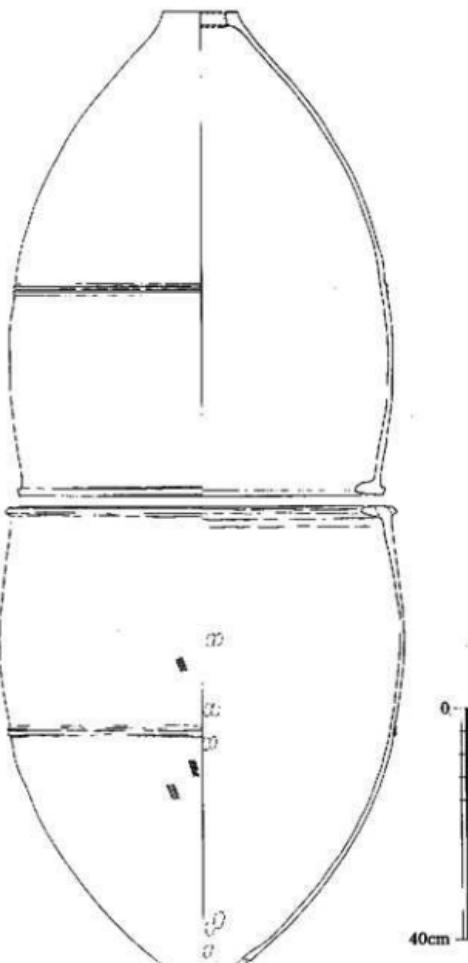


Fig. 208 第19号壺棺実測図

は古い壺棺  
墓の一つで  
ある。

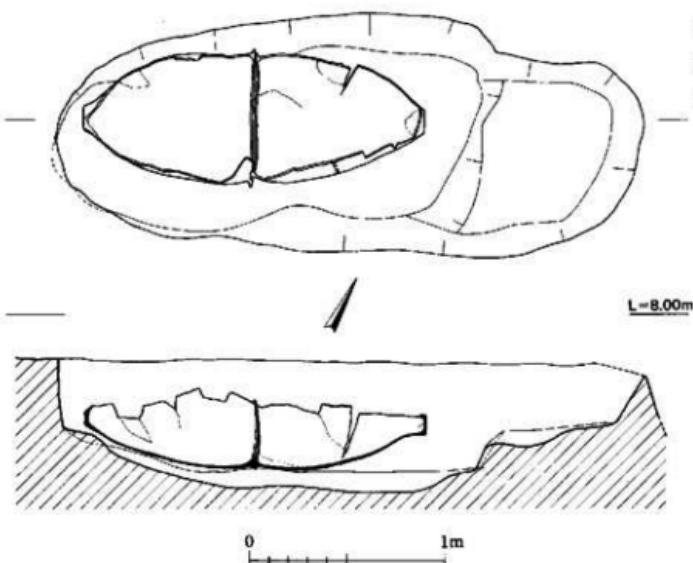


Fig. 209 第20号壺棺墓 (SK-20) 実測図

#### 20) 第20号壺棺墓 (SK-20) (Fig. 209・211, PL. 32)

調査区の北側中央部から西寄りに位置し、SK-19・25の間にあたる。墓壙は検出面の平面形は長楕円形を呈し、長軸3m、短軸1.2m強を測り、65cm前後の遺存である。墓壙床面は船状をなし、北東側が棚状をなしており壁壙があった可能性がある。棺は、大形の壺を2個用い、N-62°-Eの方位をとりほぼ水平(-1°)に埋置しているが、上下壺の上半分は土圧等によりつぶれた状態で検出した。上下壺は接口式で組合せられ、組合せ部には黄褐色ロームによる目張りがみられた。

**上壺：**完存している。やや内傾気味のT字状をなす口縁部をもち、胴中央部よりやや下位に1条の三角貼付け凸帯を巡らし、底

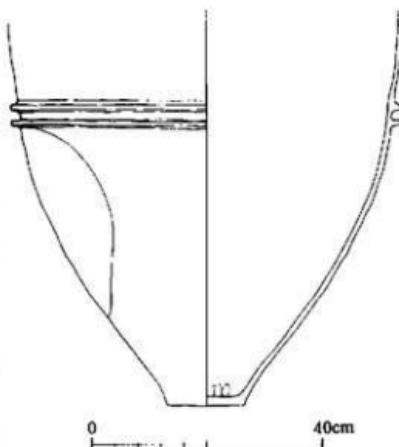


Fig. 210 第21号壺棺実測図

部は平底である。最大径は口縁部であり、口縁部下がややすばまり、胴上半部に胴部最大径がある。器壁は底部近くがもっとも薄く6mm前後である。口縁部と凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。口径62.9cm、胴部最大径62.5cm、底径10.6cm、器高85.1cm。

**下蓋：完存している。内傾するT字状をなす**

口縁部をもち、胴部中央に1条の貼付け三角凸帯を巡らし、底部は平底である。最大径は口縁部にあり、胴部中央から上は直線的に口縁部下まで垂直に立ち、胴下半部の器壁がもっとも薄くなっている。口縁部と凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。口径65.1cm、底径10cm、器高86.1cm。

以上から、大形の甕2個を接口式で組合せた合口甕棺墓で、中期前半のものといえる。

#### 21) 第21号甕棺墓 (SK-21) (Fig. 206・210)

調査区の西北部から中央部寄りに位置し、SK-22の北にあたる。墓壙は20cm前後の遺存で、棺は大形の甕を用い、N-16°-Wの方位をとり36°の角度で埋置されているが、柱穴に切られ、削平を受け胴上半部から口縁部は欠失している。棺底には赤色顔料（水銀朱、第9章参照）があり、人骨の骨片が検出できた。遺存状態が悪く、合口甕棺墓か単式甕棺墓なのかは不明である。

**甕：胴中央部から底部が遺存し、口縁部は欠失している。胴部中央（やや下寄りか）にコの字状をなす2条の貼付け凸帯を巡らし、底部は平底である。本来的には逆L字状をなす口縁部をもっていたと考えられる。器壁は底部近くがもっとも薄くなっている。凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施され、胴下半部に黒斑がみられる。残存部最大径68.6cm、底径13.4cm、残存高67.3cm。**

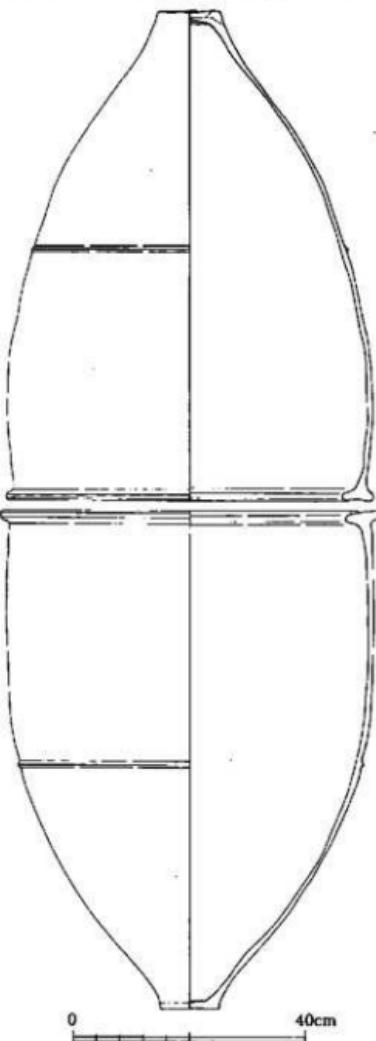


Fig. 211 第20号甕棺実測図

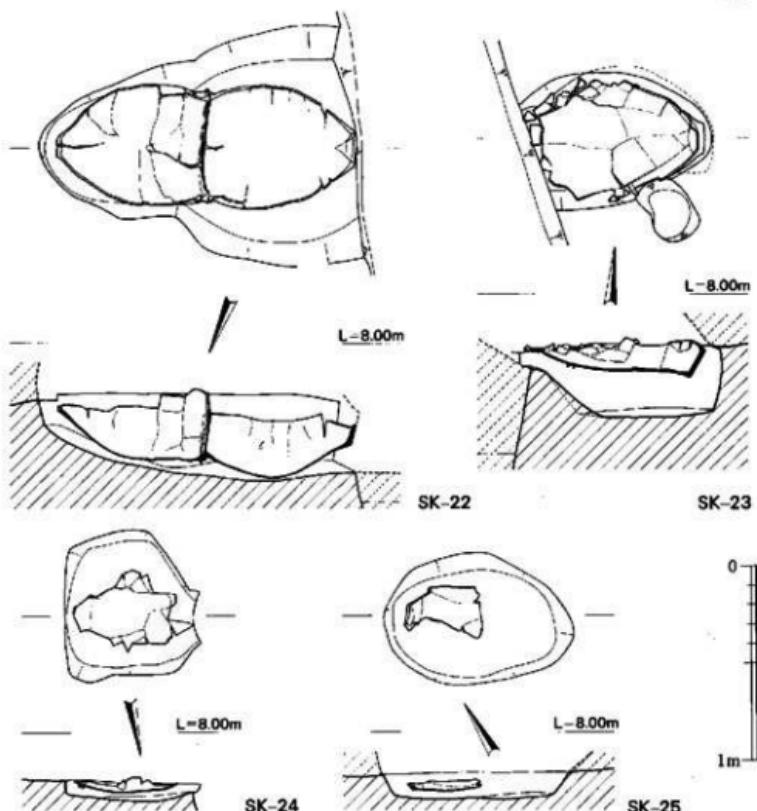


Fig. 212 第22~25号壺棺墓 (SK-22~25) 実測図

以上から、大形の壺を用いた壺棺墓で、中期後半のものか。本壺棺墓は、SK-48・49などで構成される方形区画のほぼ中央部に位置すると考えられること、本調査区検出の壺棺墓の中では唯一、水銀朱をもっていることから本基地群の中心をなす墓の一つといえよう。

## 22) 第22号壺棺墓 (SK-22) (Fig. 212・213, PL. 32)

調査区の西北部から中央部寄りに位置し、SK-21・23の間にあたり、SK-24に切られている。基壇は45cm前後の造存で、西側を煉瓦造り建物の基礎によって破壊されている。棺は大形の壺2個を用い、S-68°-Wの方位をとりほぼ水平(-8°)で埋置されているが、上下壺の上半分は土圧等によってつぶれた状況で検出した。組合せ部は接口式で、黄褐色ロームによる目

張りがみられた。

**上蓋**：完存している。口縁内面端部が突起状をなし、逆し字状を呈する口縁部をもち、胴中央にM字状をなす貼付け凸帯を巡らし底部は上げ底気味である。最大径は胴上半部にあり、口縁部に向かってすぼまり全体の器形は丸みをもち、胴下半部の器壁がもっとも薄い。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整後ナデを加え、内面はナデ調整が施されている。口径53.5cm、最大径63.8cm、底径12.3cm、器高74.3cm。

**下蓋**：ほぼ完存しているが、底部のみが欠失している。内側に大きく張り出し、外に傾斜するT字状口縁部をもち、口縁部下に1条の三角貼付け凸帯、胴中央部にM字状をなす貼付け凸帯を巡らしている。最大径は胴上半部にあり、口縁部下がややすぼまり全体の器形はやや丸みをもち、器壁は胴下半部がもっとも薄くなっている。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整が施されている。口径55cm、最大径58.9cm、残存高74.3cm（推定高77cm）。

以上から、2個の大形の甕を用い、接口式で組合せた合口甕棺墓で、中期前半のものといえる。本墓地検出甕棺墓のなかではもっとも古い時期のものか。

### 23) 第23号甕棺墓 (SK-23) (Fig. 212・214)

調査区の西北部からやや中央部寄りに位置し、SK-22・29の間にあたる。墓壙は40cm前後の遺存で、棺は人形の甕を用い、S-86°-Wの方位をとり29°の角度で埋置されているが、西側を煉瓦造り建物の基礎によって破壊されており、口縁部から胴上半部を欠失している。本来的には合口の甕棺墓か。

**甕**：胴中央部から底部が遺存している。胴部中央に比較的高い三角凸帯を2条巡らし、底部はやや上げ底気味である。凸帯から上は垂直に立ち上がっており、T字形を呈する口縁部をもつ

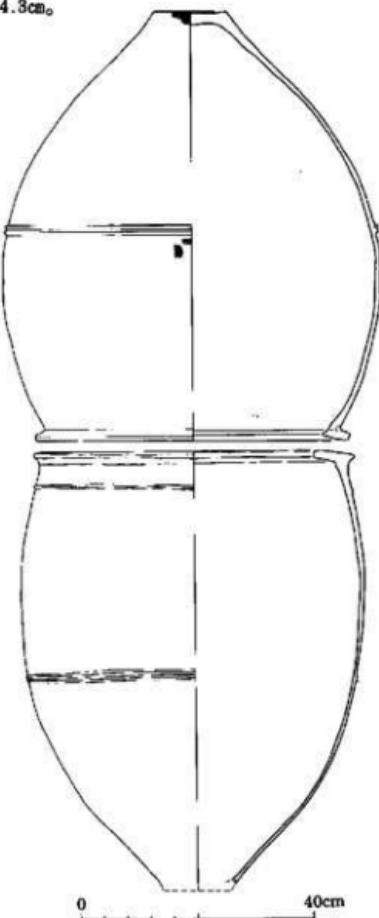


Fig. 213 第22号甕棺実測図

ものか。凸帯部は横ナデ調整、他の器  
面はナデ調整を施し、底部近くに黒色  
部がみられる。残存部最大径75cm、底  
径17.2cm、残存高76.6cm。

以上から、大形の壺を用いた壺棺墓  
(合口か)で、中期中頃のものか。

#### 24) 第24号壺棺墓 (SK-24)

(Fig. 212・216, PL.32)

調査区の西北部からやや中央部寄り  
に位置し、SK-22を切っている。墓壙  
は10cm前後の遺存で、棺は人形の壺を  
用い、S-80°-E の方位をとり埋置さ  
れているが、削平を受けほとんどが消  
失し、胸部中央から下半部が墓壙に貼  
り付いた状態で検出し  
た。

壺：胸部中央から下半分  
にかけて約 $\frac{1}{2}$ 周が遺存し  
ている。胸部中央に比較  
的高くシャープなコの字  
状をなす貼付け凸帯を2  
条巡らせている。最大径  
は凸帯部にあり、下ふく  
らみで全体の器形は丸み  
をもっている。凸帯部は  
横ナデ調整、胸部外面は  
ハケ目調整、内面はナデ  
調整が施されている。最  
大径63cm、残存高51.4  
cm。

以上から、大形の壺を  
用いた壺棺墓で、中期の

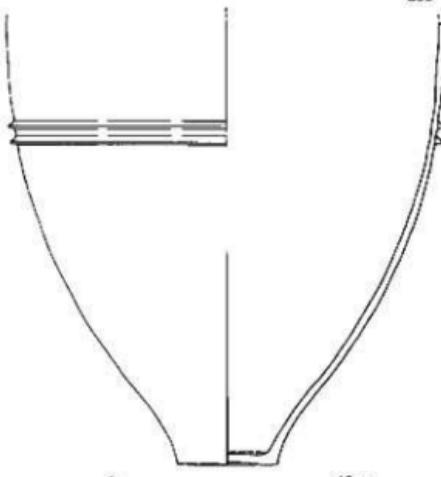


Fig. 214 第23号壺棺実測図

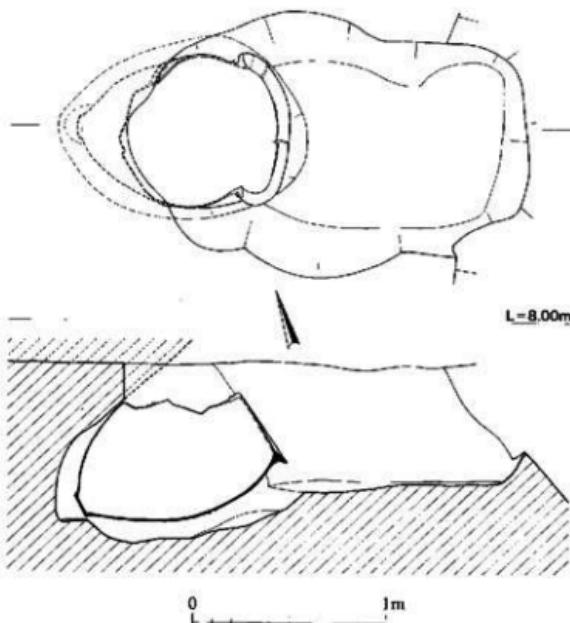


Fig. 215 第26号壺棺墓 (SK-26) 実測図

終わり頃から後期初頭のものか。

25) 第25号壺棺墓 (SK-25) (Fig. 212・216, PL.33)

調査区の北側中央部からやや西寄りに位置し、SK-20の西にある。墓墳は15cm弱の遺存で、棺は大形の壺を用い、N-59°-Eの方位をとり埋置されているが、洞下半部から底部にかけて墓壇に貼り付いた形で検出したが、大半は削平を受けて破壊されている。また、底部近くは土圧および重機によってつぶれ、取り上げることができなかった。壺：洞下半部の約1/2周のみ復元できた。器面はナデ調整を施している。残存部最大径60cm、残存高26.5cm。

以上から、大形の壺を用いた壺棺墓で、埋葬時期は遺存状態が悪くわからぬ。

26) 第26号壺棺墓  
(SK-26)

(Fig. 215・216)  
調査区のほぼ中央部に位置し、SK-27・34の間にあたり、SK-48と

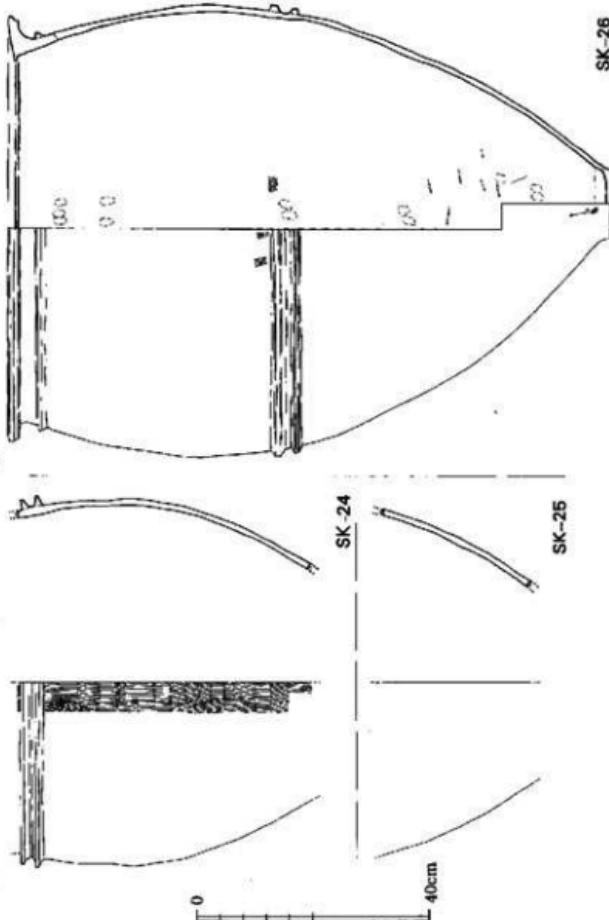
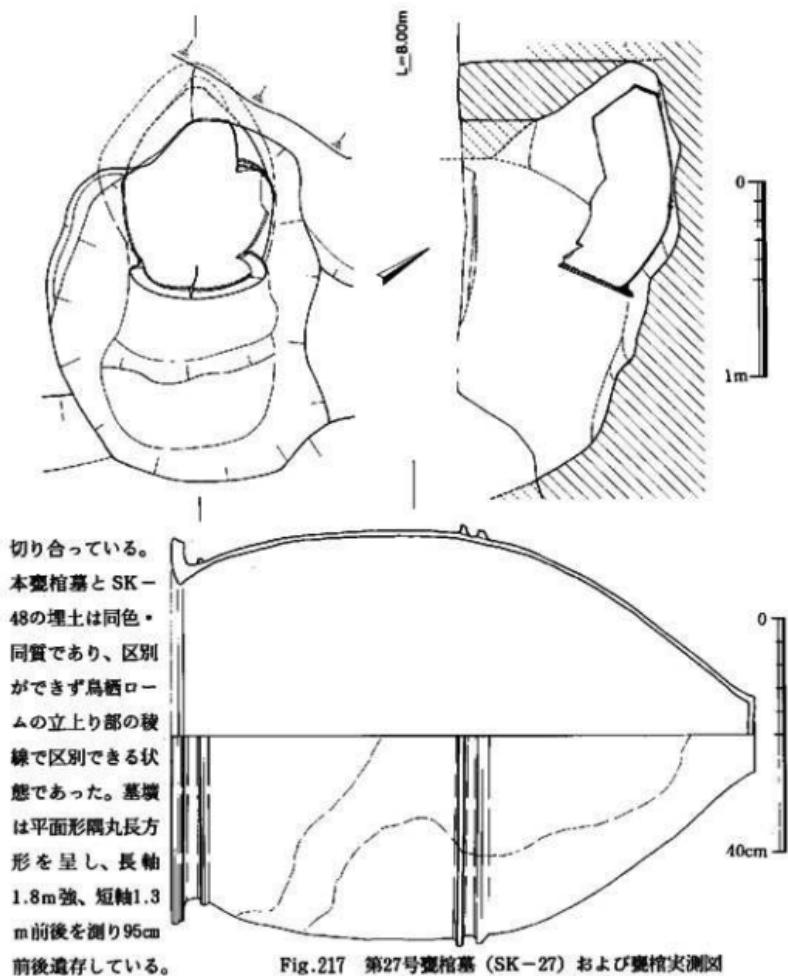


Fig. 216 第24~26号壺棺実測図



壁構床面はほぼ平坦で、西側の床部近くに棺埋置のための斜溝を掘り込んでいる。棺は大形の  
壇を用い、N-72°-E の方位をとり27°の角度で埋置されているが、口縁部から胸部にかけて  
の天井部は土圧によって棺内に落ち込んでいた。木蓋等の痕跡は検出できなかった。

蓋：完存している。口縁端部が垂れ気味の内傾する逆L字状をなす口縁部をもち、口縁部直下  
に1条、胸部中央よりやや上位に2条のコの字状をなす貼付け凸帯を巡らし、底部は平底であ

る。最大径は凸帯にあり、口縁部はすばまり全体の器形は卵形をなし、底部は比較的薄い。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整後ナデが加えられ、内面は工具によるナデ調整が施され、粘土つなぎ目に指押え痕がみられる。口径73.5cm、最大径78.1cm、底径11.9cm、器高137cm。

以上から、大形の甕を用いた単式の甕棺墓で、中期後半のものといえる。

#### 27) 第27号甕棺墓 (SK-27) (Fig. 217, PL.33)

調査区の中央部から北寄りに位置し、SK-16・26の間にあたり、SK-39を切り、SK-48と切り合っている。本甕棺墓とSK-48の埋土は、SK-26と同じように同色・同質で新旧関係はわからなかった。墓壙は平面形隅丸方形を呈し、北西部小口に棺埋置のための斜溝を掘り込んでおり、1.5m前後遺存している。棺は大形の甕を用い、S-58°-Eの方位をとり22°の角度で埋置されているが、甕の口縁部から胴下部にかけての天井部は土圧によって棺内に落ち込んでいた。墓壙の断面は階段状をなし、木蓋等の痕跡は検出できなかった。

甕：完存している。やや内傾する逆L字状をなす口縁部をもち、口縁部下にコの字状をなす貼付け凸帯1条、胴部中央に比較的高いシャープなコの字状をなす2条の貼付け凸帯を巡らし、底部は上げ底気味である。最大径は凸帯部にあり、口縁部下がすばまり全体の器形は卵形をなし、底部は比較的薄い。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、他の器面はナデ調整を施している。口縁部下から胴下部にかけて帶状に黒色帯がみられる。口径66cm、最大径72cm、底径12.3cm、器高101cm。

以上から、大形の甕を用いた単式の甕棺墓で中期後半のものといえる。

#### 28) 第28号甕棺墓 (SK-28) (Fig. 218, PL.33)

調査区の中央部からやや西寄りに位置し、SE-55の北東にあたる。墓壙は15cm前後の遺存で、棺は人形の甕を用い、S-87°-Eの方位をとり39°の角度で埋置されているが、削平を受け大半は消失し、底部から胴下部のみ遺存している。

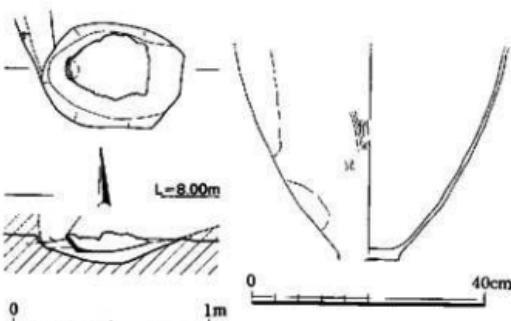


Fig. 218 第28号甕棺墓 (SK-28) および甕棺実測図

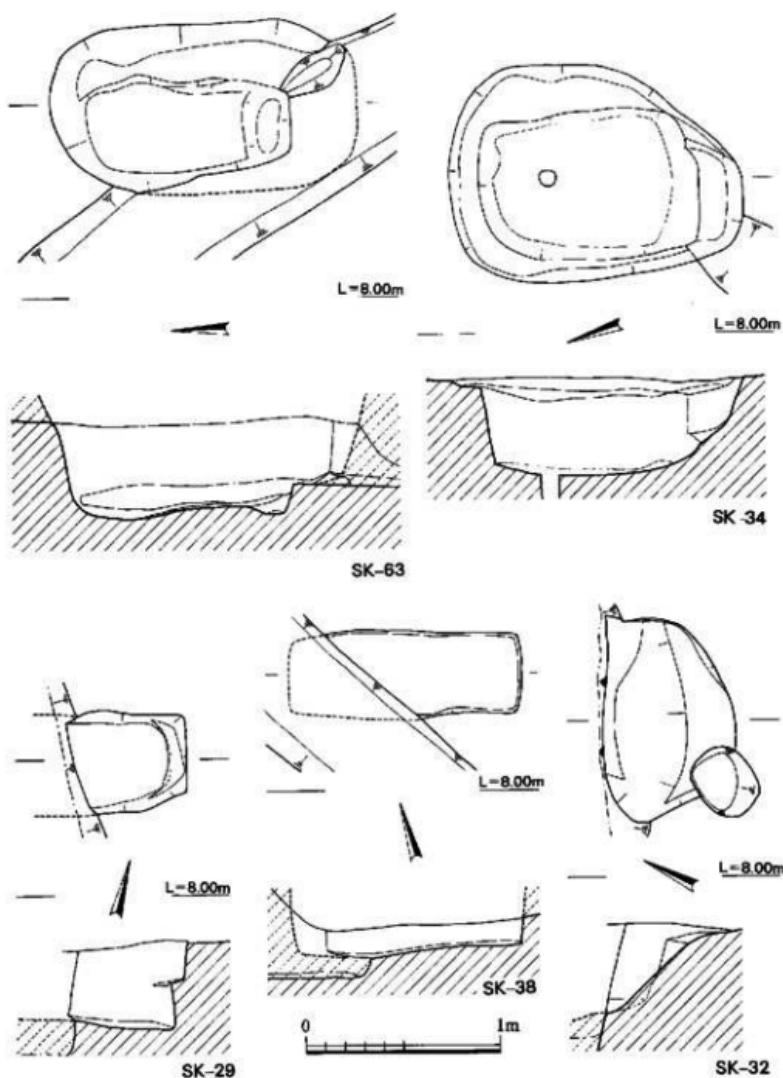


Fig. 219 第29・32・34・38・63号土壤・土壤墓 (SK-29・32・34・38・63) 実測図

壺：胴下半部から底部が遺存している。底部はやや上げ底気味で、胴部外面はハケ目調整後ナデを加え、内面はナデ調整を施している。残存部最大径46.3cm、底径10cm、残存高36cm。

以上から、大形の壺を用いた墓棺墓で、遺存状態が悪く時期限定はできない。

Tab. 7 土壇・土壤墓一覧表

No.	形 状	器 形 (m)			長 軸 方 位	備 考	掲出番号 図版番号
		短径	長 径	深 さ			
SK-29	長 方 形	0.40	0.60以上	0.45以上	N - 77° - E	土壤墓	219
SK-30	隅丸長方形	0.65	1.50以上	0.48以上	N - 36° - E	土壤墓	
SK-31	隅丸長方形	1.10	1.05	0.27以上	N - 65° - E	壺棺墓墓壙？	
SK-32	不整円形か	0.95	0.68以上	0.50以上	S - 26° - E	壺棺墓墓壙？	219
SK-33	不整円形か	0.45	0.79	0.25以上	S - 16° - E	壺棺墓墓壙？	
SK-34	隅丸長方形	1.12	1.52	0.50以上	N - 18° - E	土壤墓	219
SK-37	不整円形か	1.00	1.08	0.29以上	S - 38° - E	壺棺墓墓壙？	
SK-38	長 方 形	0.41	1.00以上	0.16以上	N - 75° - W	土壤墓	219
SK-39	隅丸長方形	1.30	1.55以上	0.55以上	S - 78° - E	壺棺墓墓壙？	
SK-57	長 円 形	0.65	1.00	0.33以上	N - 86° - E	土壤	
SK-58	長 円 形	0.90	1.35	0.32以上	S - 24° - W	壺棺墓墓壙？	
SK-59	隅丸長方形	0.60	1.75	0.45以上	N - 74° - E	土壤墓	
SK-63	隅丸長方形	0.85	1.53以上	0.48以上	N - 1° - E	土壤墓	
SK-66	不 整 円 形	1.25	1.50	0.77以上		土壤(古墳時代)	219

### 29) 壺棺墓墓壙と考えられる土壤 (Fig.219, Tab. 7)

本調査区では、11基の平面形が楕円形や不整円形・方形を呈する土壤が検出された。これらの土壤のうち、SK-46は平面形方形を呈し、柱痕跡は確認できなかったが柱穴の可能性が高い。SK-66は、6世紀後半の土壤である。SK-46・66を除くといずれも壺棺墓や土壤墓と分布が同じであり、壺棺墓墓壙の可能性が高い。壺棺墓墓壙の可能性が高い土壤は、SK-31～33・35～37・39・57・58の9基である。

### 30) 土壤墓 (SK) (Fig.219, Tab. 7)

本調査区では、SK-29・30・34・38・59・63の6基の土壤墓を検出した。いずれも壺棺墓の分布と重なっており、SK-48・49などで構成される区画内に位置している。いずれも副葬遺物や共伴と考えられる遺物の出土はなかったが、方形区画外に位置するものがないことから弥生時代中期前半から後半のものと考えられる。

SK-29：調査区の西北部からやや中央部寄りに位置し、SK-23の南にあたる。西側を煉瓦造り建物基礎によって破壊されている。床面はほぼ平坦で、小口の壺は床面はやや内傾気味に立ち上がっている。木棺墓か。

SK-30：調査区の西北部からやや中央部寄りに位置し、SK-29の東にあたる。床面はほぼ平坦で、壁は床面から開き気味に立ち上がっている。

SK-34：調査区の中央部からやや西寄りに位置し、SK-08・26の間にあたる。掘り方は平面形隅丸長方形を呈し、中央に長軸90cm、短軸70cmの棺（木棺墓か）を埋置している。成人棺か。

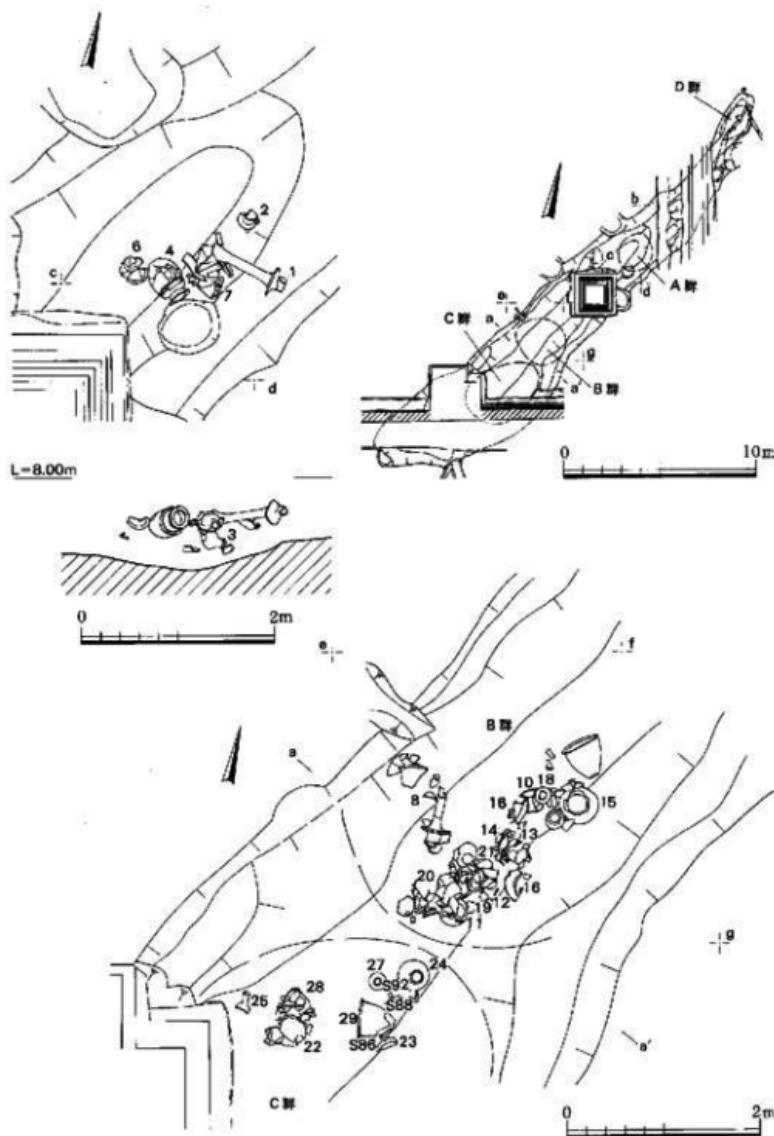


Fig. 220 第48号祭祀土塚 (SK-48) 遺物出土状態実測図

SK-38：調査区の北側中央部に位置し、SK-17の東にあたり、北西側小口を煉瓦造り建物基礎によって破壊されている。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。棺内からは特に小口付近の埋土中に帯状をなす灰白色粘土塊が検出できたが、鋼板・小口板などの痕跡は検出できなかった。木棺か木蓋土壤墓と考えられる。

SK-59：調査区の西北部からやや中央部寄りに位置し、SK-20・22の間にあたる。床面はやや皿状をなし、ほぼ中央部に長軸35cm、短軸30cm、深さ10cmの楕円形の掘り込みがある。

SK-63：調査区の北側中央部に位置し、SK-38・48の間にあたり、南側小口を煉瓦造り建物基礎によって破壊されている。棺は長径95cm、短径45cmで、組合せ式木棺と考えられ、南側小口には小口板の痕跡がみられた。

### 31) 第48号祭祀土壤 (SK-48) と出土遺物 (Fig. 220・221, 卷頭図版, PL. 34・35)

調査区のほぼ中央部に位置し、最大幅4m強、長さ26.5mで、N-33°-Eの主軸方位をもつ溝状の土壤である。SC-64・SK-66に切られ、煉瓦造り建物によって寸断されている。横断面形は場所で異なり、皿状をなす所、逆台形状をなす所がある。床面も一様ではなく、凹凸があるが、概して北側が浅く南端が深い。埋土は、上から黒褐色粘質土・茶褐色粘質土・黄茶褐色粘質土の順になっており、最上層の黒褐色粘質土は土壤b-dラインから南の中央部に分布し、多量の土器片（後期後半までの）を含んでいる。その下の層は20~40cm前後の厚さをもっているが遺物の量は極端に少ない。その下の茶褐色を基調とした土層から下は土器片が大きくなり、完形品も混じるようになる。本土壤では、床面および床面直上に完形品が集中する所が4ヶ所確認できた。これをA~D群とした。A~D群の完形集中区はいずれも床面が一段深くなり、独立した土壤状をなしている。完形遺物は丹塗りしたもののが90%以上を占め、A・B群では筒形容器台や暗文をもつものなど日常雑器とは考えられず、祭祀土器と考えられる。また、SK-49も本土壤と同じ規模をもつと考えられること、直角に配置されていること、両土壤間にほぼ同時期を中心とした壺棺墓を主体とする墓地群が形成されていること、祭祀土器が両土壤で多量に出土していることから、本土壤はSK-49などとともに墓地を区画する墓地祭祀の土壤と考えられる。

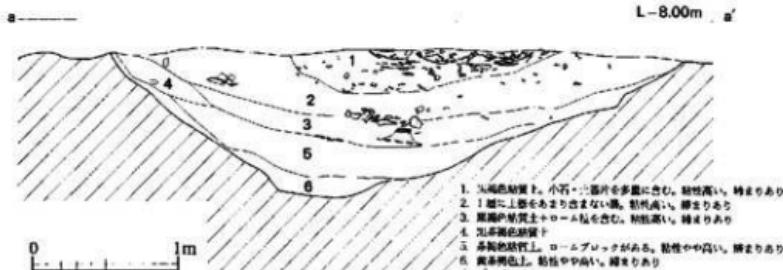


Fig. 221 第48号祭祀土壤 (SK-48) 土層断面図

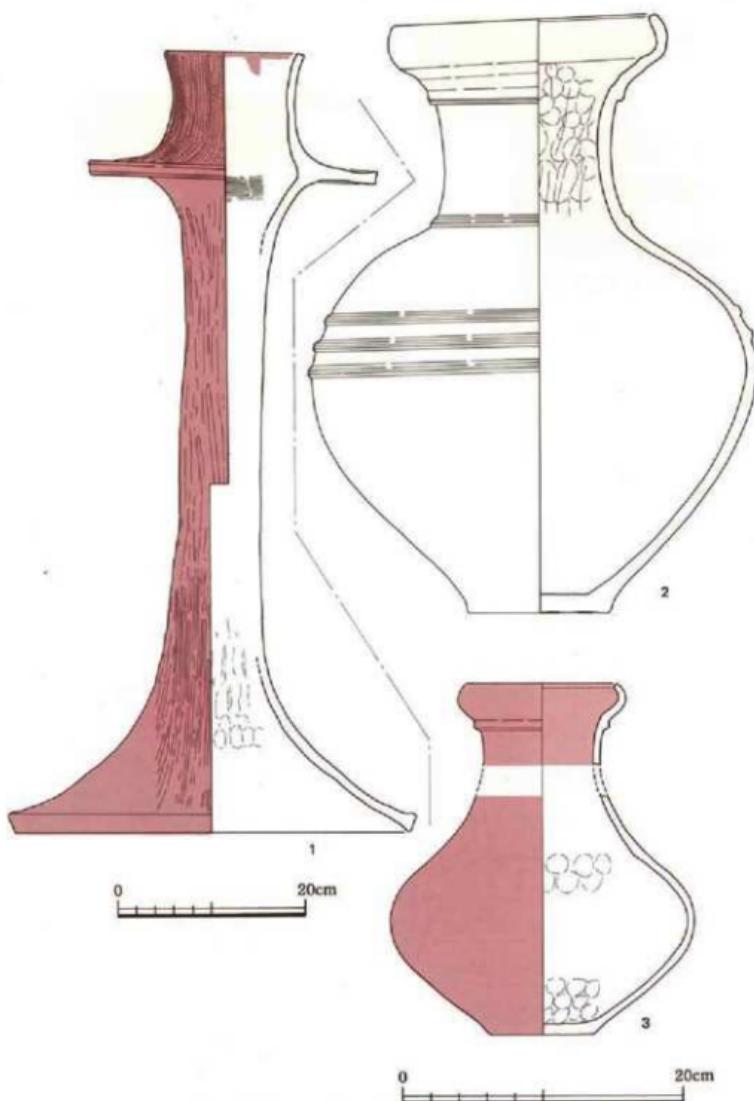


Fig. 222 第48号祭祀土壤A群出土土器实测图(1)

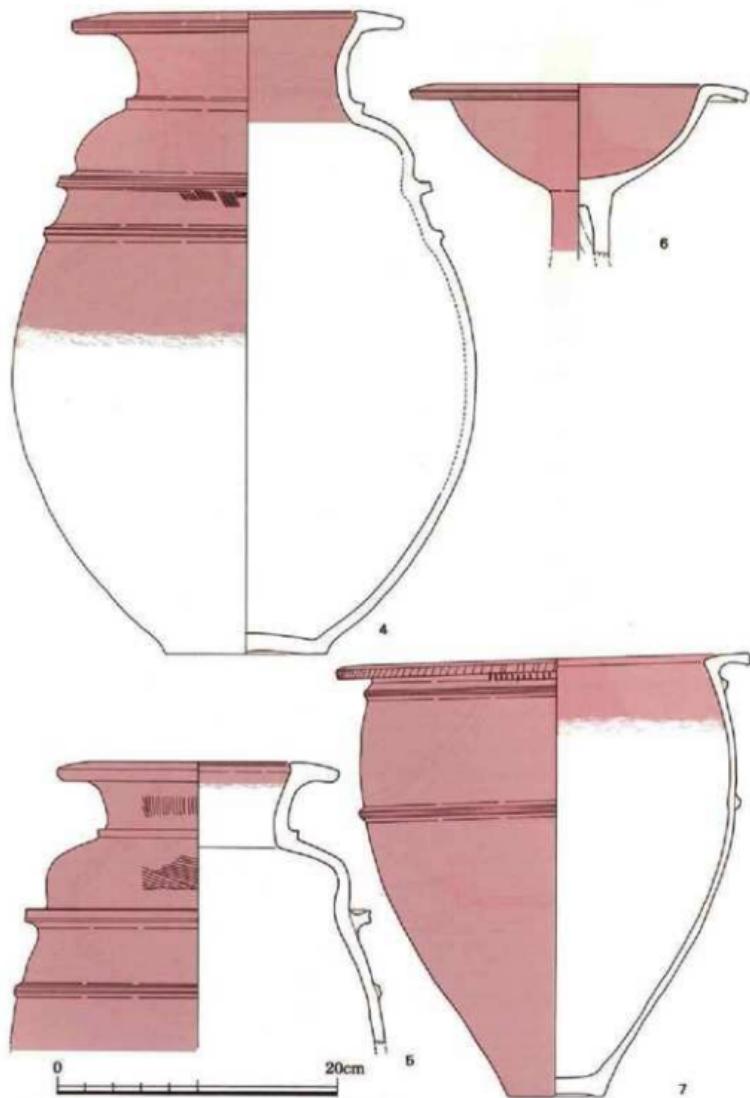


Fig. 223 第48号祭祀土壤A群出土土器実測図(2)

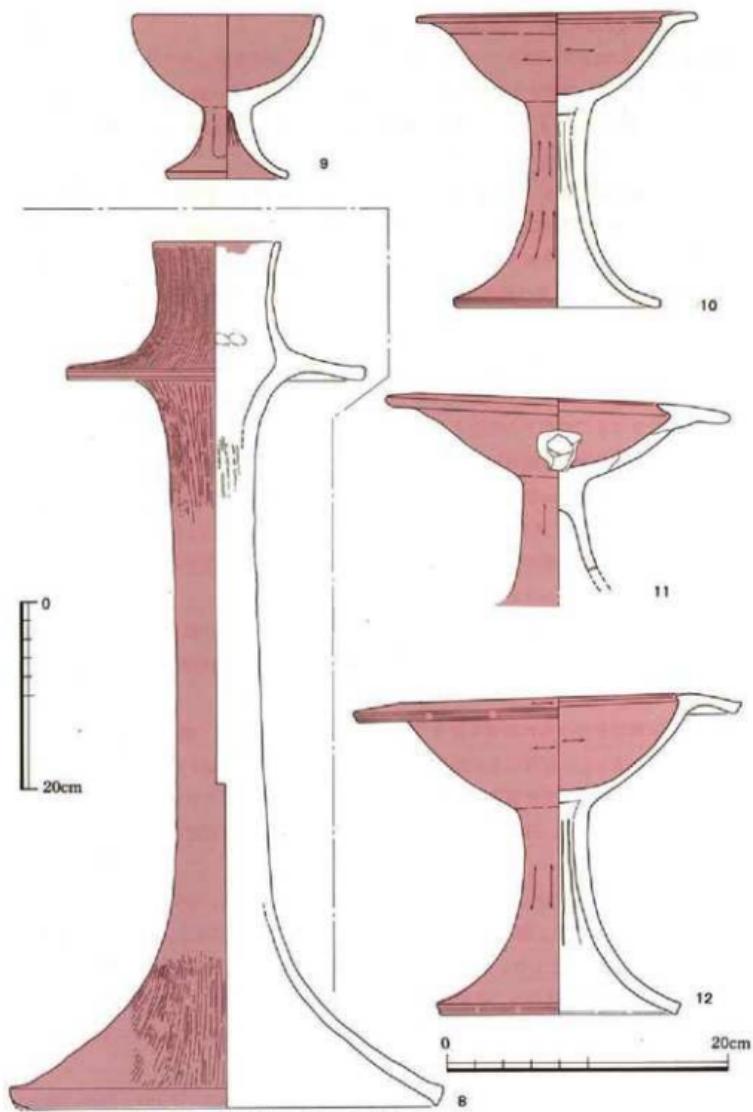


Fig. 224 第48号祭祀土壤B群出土土器実測図(1)

出土遺物 (Fig.222~234, 卷頭図版, PL. 35 ~ 37)

**A群出土土器** (Fig.222・223) : A群は溝状をなす土壤の中央部からやや北寄りのb~dポイントの間のSK-27と相対する位置にあたり、床面からやや浮いた状態 (15~40cm上) で筒形器台1点 (1)、瓢形土器 (4・5)・袋状口縁壺 (2・3) 各2点、高环 (6)・壺形土器 (7) 各1点の計7点の土器がまとめて出土した。

1は口径15cm、鈎部径30.8cm、底径43.5cm、器高84.8cmを測る。鈎部から口縁部にかけての受け部は横ナデ調整、鈎部外面はヘラ状工具による縦方向の研磨状の丁寧なナデ調整が施され、筒部内面は絞り痕・指押痕がみられる。底部から口縁部にかけての外面は丹塗りで、鈎部から口縁部にかけての受け部外面には2mm前後の間隔で幅1mm前後の線描きの赤彩の暗文が描かれている。

2は胴部中央から上位にかけて3条、頸部と頸部の境に1条、袋状をなす口縁部下に1条のM字退化形の凸帯を巡らしている。頸部から胴部外面に横方向の研磨が施されている。器高43cm。3は袋状をなす口縁部下の頸部との境に丸みを持つ三角凸帯を巡らしている。口縁部は横ナデ調整、頸部から胴部外面は縦方向の研磨が施されており、外面から頸部内面にかけて丹が塗布されている。器高25cm前後。4は錐状口縁部をもち、頸部と胴部の境に三角凸帯、胴上半部にM字退化形の凸帯2条を巡らし、胴部中央に最大径をもっている。口縁部から頸部内面・凸帯部は横ナデ調整、外面の頸部・胴下半部は縦方向、胴上半部は横方向の丁寧な研磨が施され、外面から頸部内面にかけては丹が塗布されている。器高46.2cm

6は端部が垂れ気味の平坦面の広い口縁部をもっている。口縁部は横ナデ調成、内面は横方向、脚部は縦方向研磨、坏部外面は縦方向のハケ目調査後横方向の研磨が施され、器面は丹が塗布されている。

7は端部に刻目を持つ垂れ気味の逆L字状をなす口縁部をもち、口縁下・胴上半部にM字退化形の凸帯を巡らし、底部は上げ底である。頸部に暗文ふうの沈線があり、口縁平坦部・胴下半部から胴上半部の外面は横方向、胴下半部から底部近くにかけては縦方向の丁寧な研磨、内面はナデ調整が施され、外面から内面の口縁部付近は丹が塗布されている。口径29.7cm、底径7cm、器高31.5cm。

**B群出土土器** (Fig.224~226) : B群はA群の南7m前後にあたり、ほぼ底面から40cm上にかけて、筒形器台 (8) 1点、壺形土器 (13~19) 7点、高环 (9~12) 4点、壺形土器 (20・21) 2点など多量の土器が出土した。図化したものは完形および器形のわかるものである。

8は口径13.7cm、鈎部径32cm、底部46.6cm、器高93.7cmの筒形器台で、1より約10cm高い。器面調整は1と同じで、受け部外面には赤彩の線描きによる幅1mmの暗文が1.5~4mm間隔で描かれている。

壺形上器には瓢形土器 (13)・広口壺 (14~16・98)・袋状口縁壺 (17・18:複合口縁を含

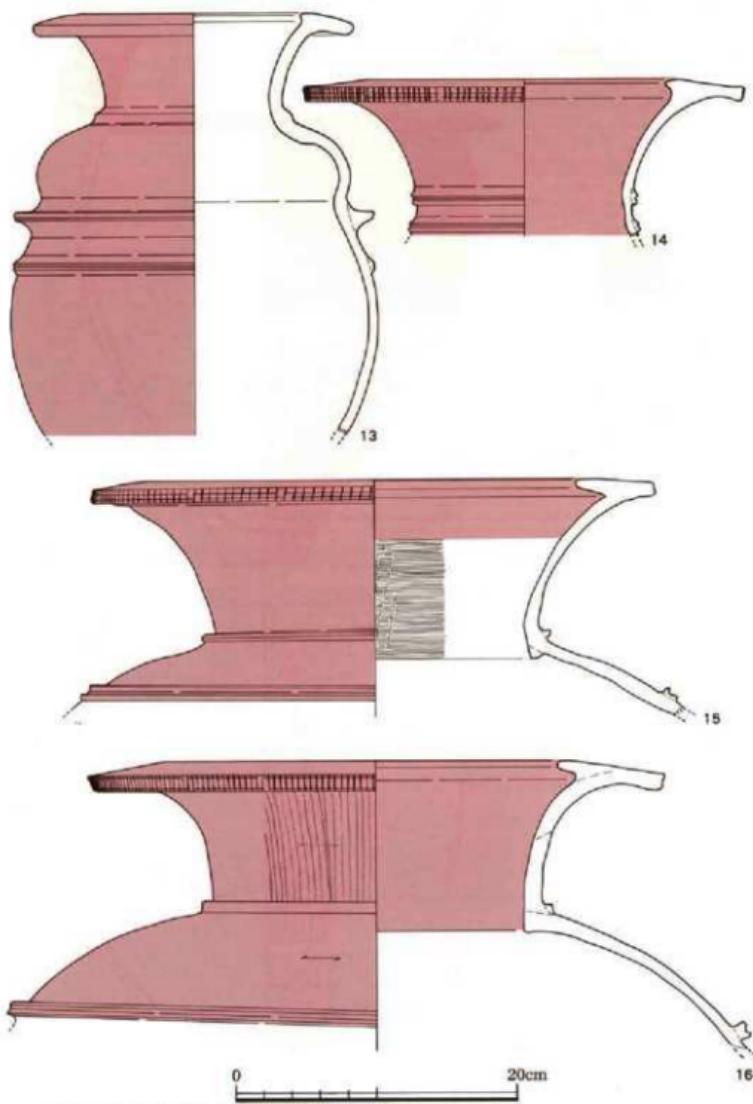


Fig. 225 第48号祭祀土壙B群出土土器実測図(2)

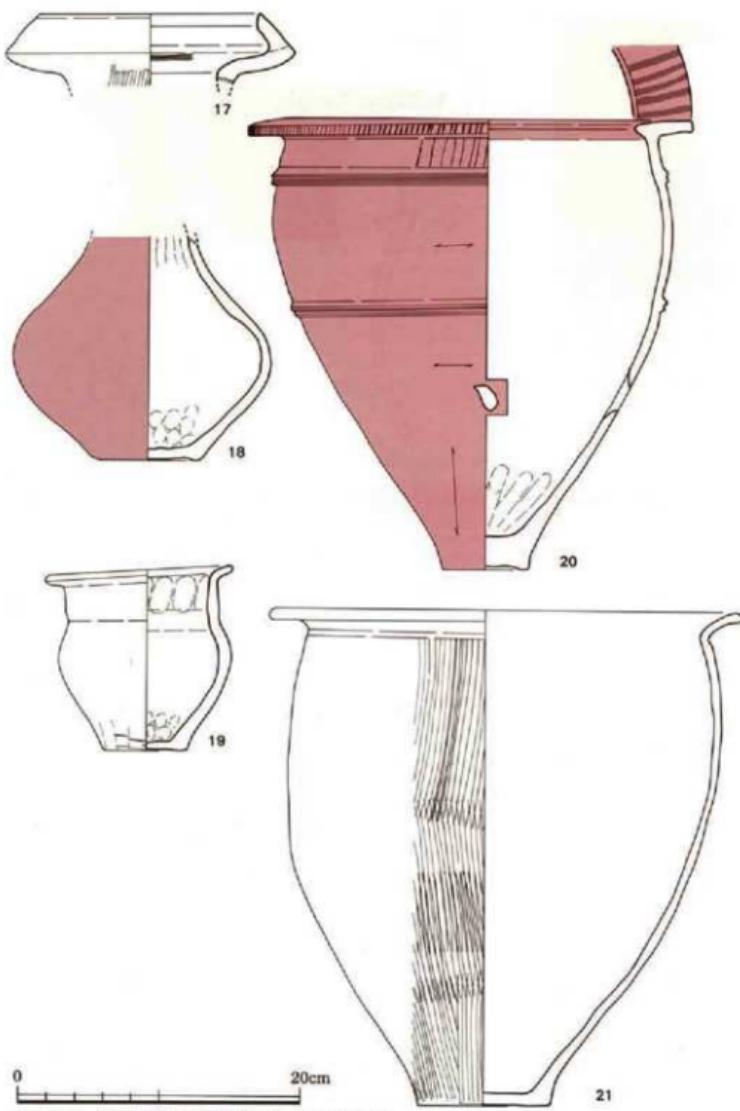


Fig. 226 第48号祭祀土壤B群出土土器実測図(3)

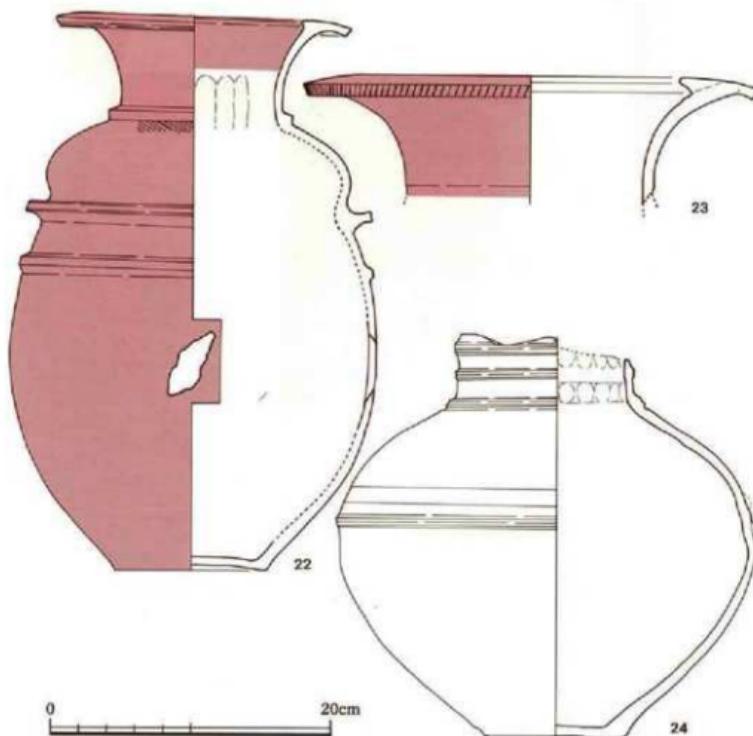


Fig. 227 第48号祭祀土壤C群出土土器実測図(1)

む)・小形壺(19)がある。広口壺は端部に刻目をもつ鋸状口縁をもち、頸部と胴部の境に15・16は1条の貼付け三角け凸帯、14はM字状をなす貼付け凸帯(以下、M字とする)2条を巡らしている。15・16とも内面の頸部と胴部の境は明瞭で、ここから外面は丹が塗布され、16の頸部外面には幅1mmの赤彩の線描きによる暗文が5mm間隔でみられる。口径は14が31.6cm、16が41.4cm。17は混入品か。19は胴が張らず、頸部が比較的明瞭な小形壺で、内面も頸部が明瞭である。口径13.4cm、器高13.2cm。

9~12はいずれも壺部内外面は丹が塗布されている。9は台付鉢のほうが妥当かもしれないが、脚部内面まで丹が塗布されている。10~12は平坦部の幅が広い鋸状口縁をもち、11の環部には焼成後の穿孔がある。壺部内外面は横方向、脚部外面は縦方向の研磨が施されている。9

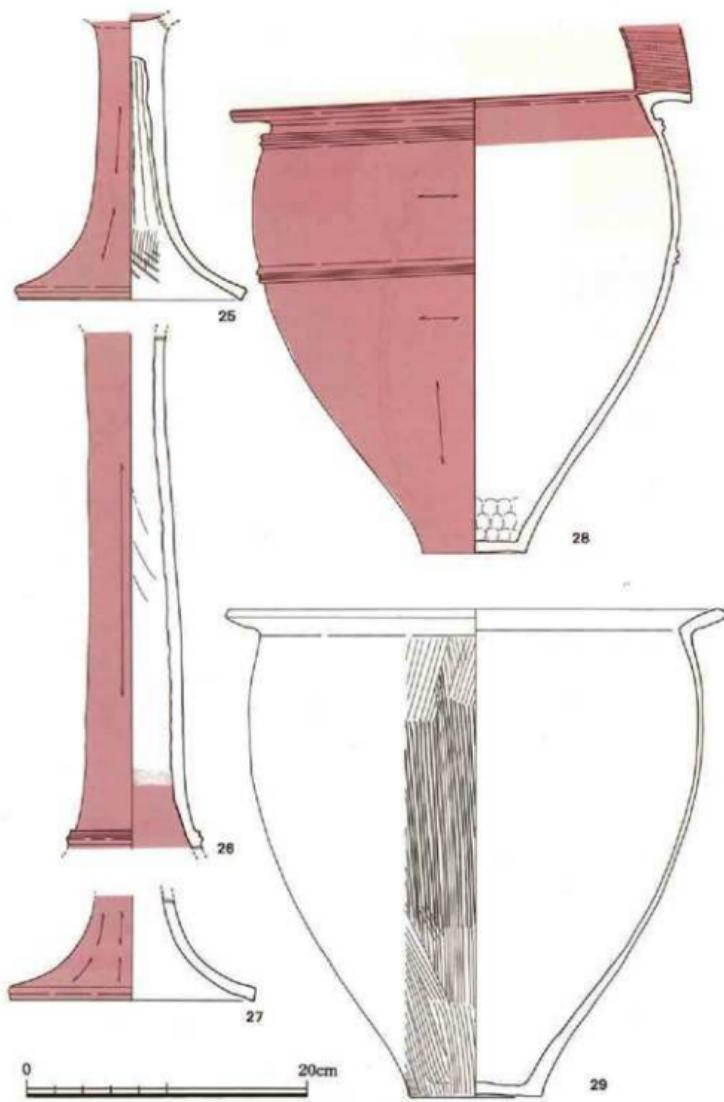


Fig. 228 第48号祭祀土群C群出土土器実測図(2)

FIG.229 第48号祭祀土壙出土土器測量圖(1)

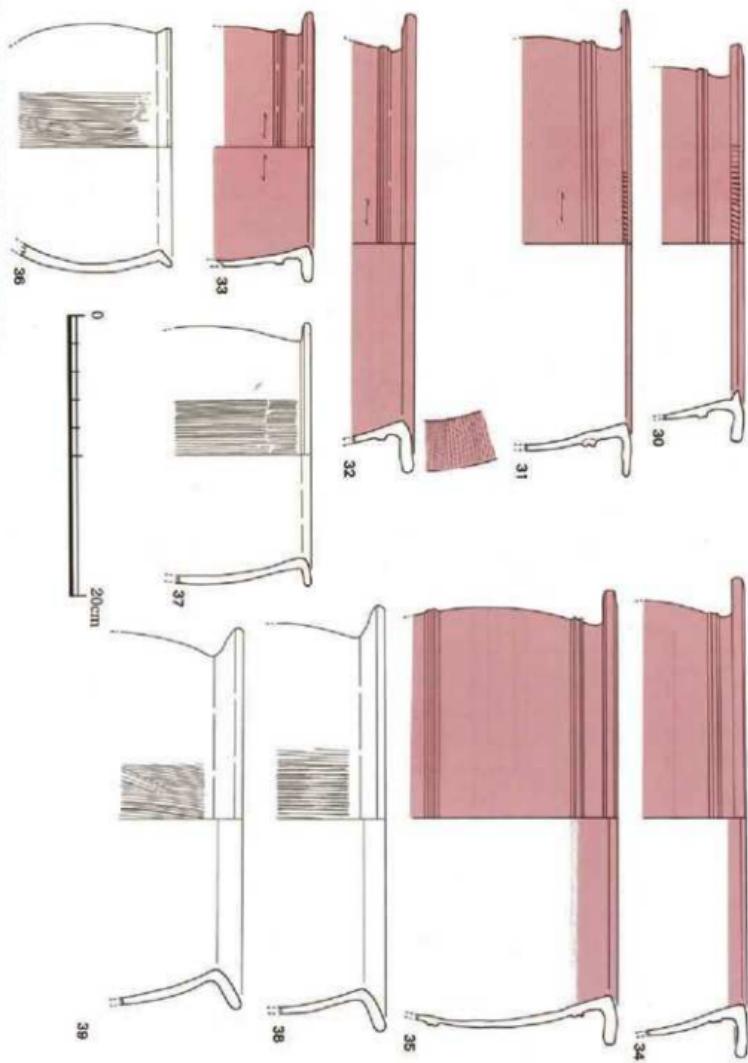
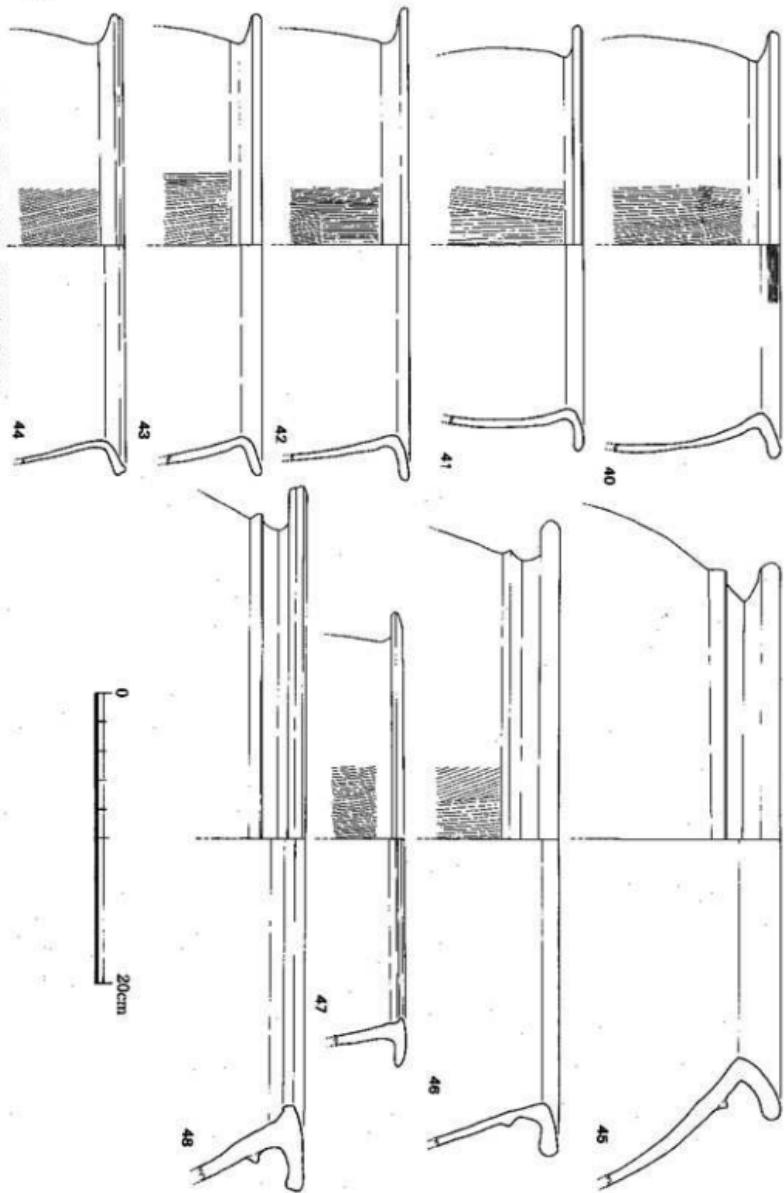


Fig. 230 第48号祭祀土塚出土土器実測図(2)



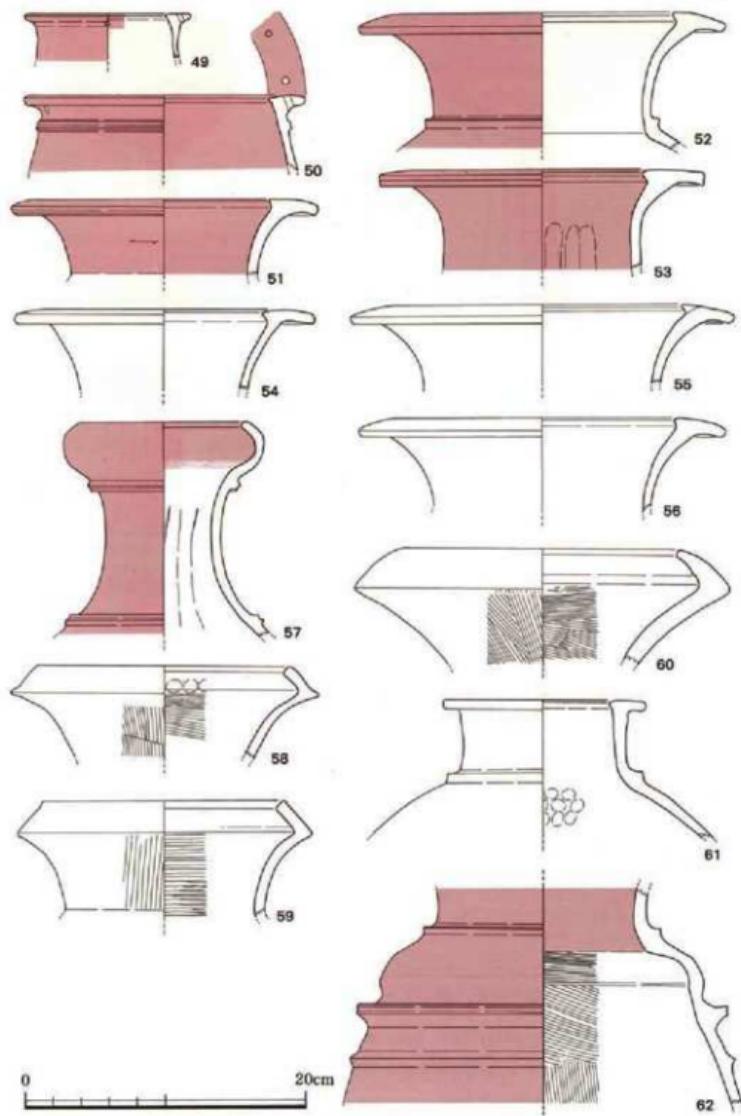


Fig. 231 第48号祭祀土壤出土土器实测图(3)

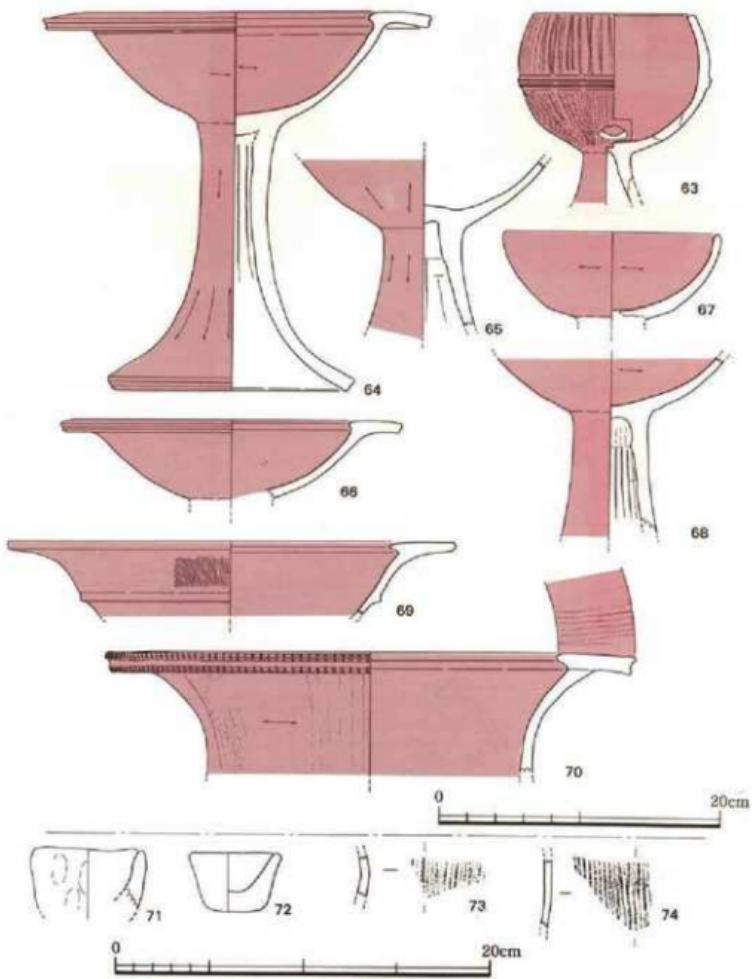


Fig. 232 第48号祭祀土壤出土土器実測図(4)

は口径13.7cm、器高16.7cm。10は口径20.2cm、器高20.9cm。12は口径27.8cm、器高22.8cm。

20は端部に刻目を施したやや内傾気味の逆L字状をなす口縁部をもち、胴上半部にある胴部最大径を挟むような形でM字凸帯が巡っている。口縁平坦部から胴下半部外面にかけては横

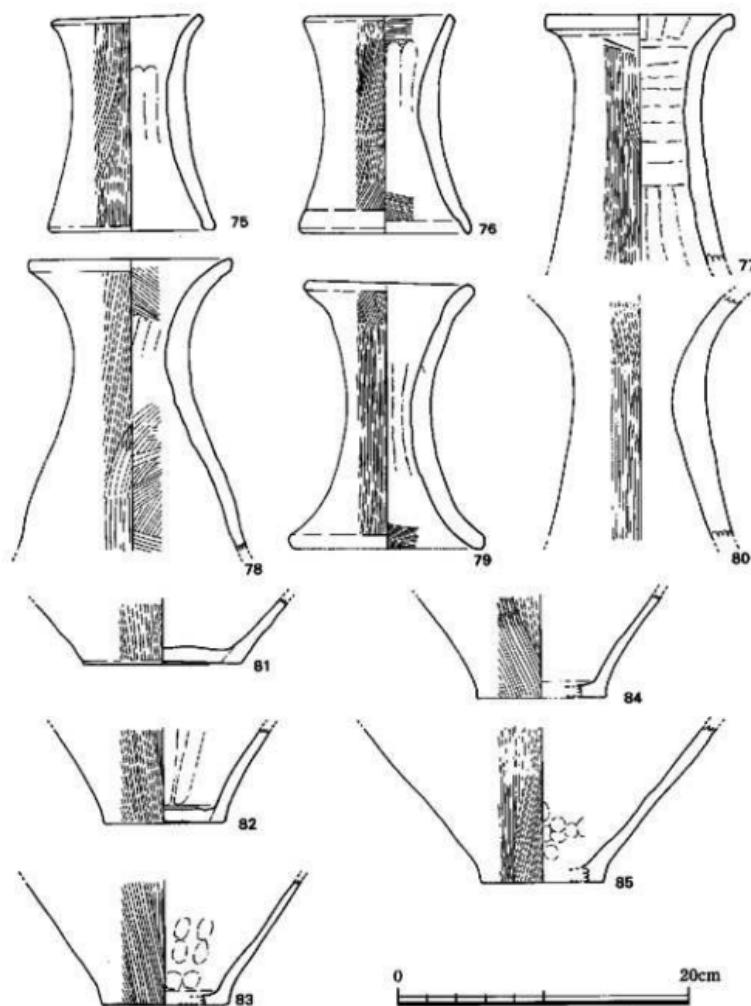


Fig. 233 第48号祭祀土壙出土土器実測図(5)

方向、胴下半部から底部にかけての外面は縦方向の研磨が施され、丹が塗布されている。口縁部平坦面には幅4mm前後で5~7mm間隔、口縁部と胴部上位凸帯間には線描きによる赤彩の暗文がみられる。20は口径31.7cm、器高32cm。21は口径33cm、器高は35.6cm。

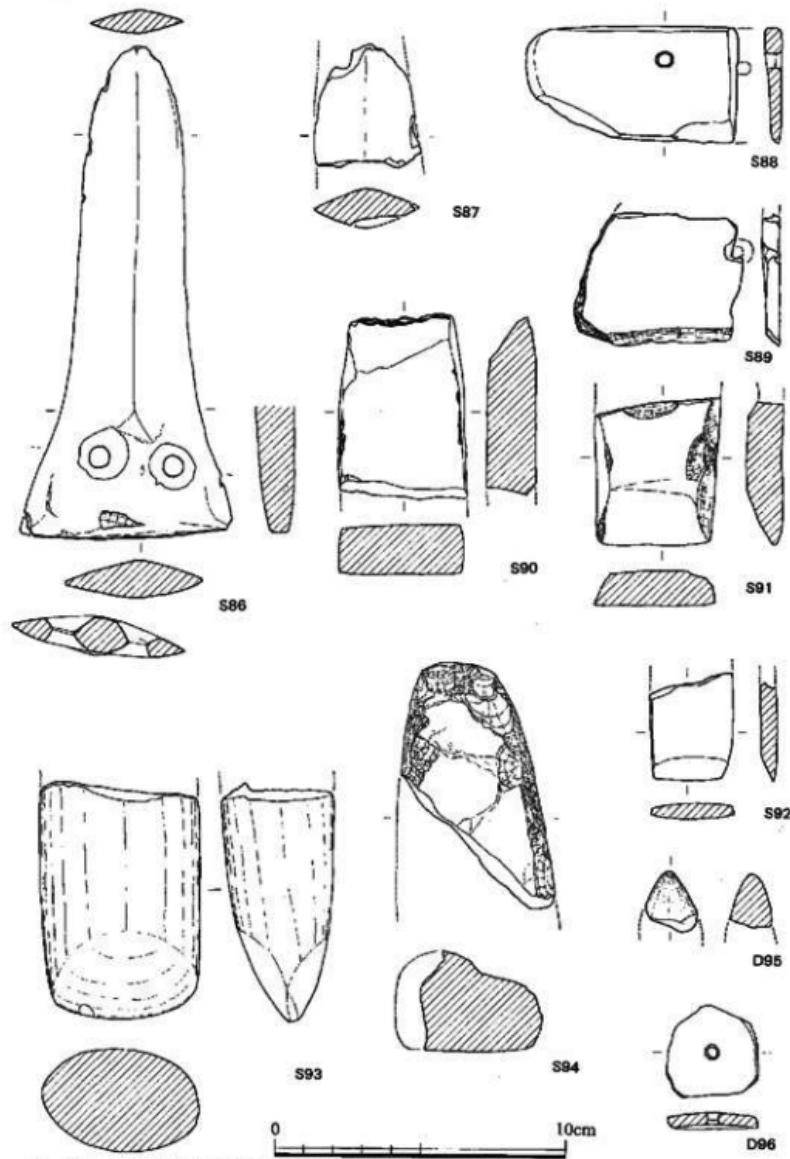


Fig. 234 第48号祭祀土壤出土石器・土製品実測図

C 群出土遺物 (Fig.227・228・234) : C 群は B 群の南にほぼ接するような形で位置し、床面直上 (20cm前後上) から床面にかけて遺物が出土した。本群は南へ延びているが、煉瓦造り建物基礎によって寸断されている。出土遺物として、壺形土器 (22~24) ・高壺 (25~27) ・甕形土器 (28・29) などの土器と石器がある。

壺形土器には甕形土器 (22) 1点、広口壺 (23・24) 2点がある。22は鋸状口縁をもち、頸部と胴部の境に1条の三角凸帯、胴部上位に2条のコの字状をなす凸帯を巡らし、底部は上げ底である。胴部最大径はやや下位にあるが張りが少なく、全体の形は他に比べ細長い。なお、胴部最大径のところに焼成後の穿孔がみられる。頸部外面は縦方向、胴下半部外面は横方向の研磨、胴上半部外面はハケ目調整後横方向の研磨が加えられている。外面および頸部内面上位は丹が塗布されている。口径20.9cm、器高40cm。24は広口壺と考えられ、頸部に2条、胴部と頸部の境に1条、胴部中央に2条のM字退化形の貼付け凸帯を巡らしている。最大径30.2cm、残存高28.5cm。23は口径32.5cm。

25~27はいずれも脚部で外面は縦方向の研磨が加えられ、丹が塗布されている。26は背の高い脚部で、裾部に1条のM字状をなす凸帯を巡らしている。

28は逆L字状口縁部をもち、口縁部下・胴上半部にM字凸帯を巡らし、底部は上げ底気味である。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、胴部外面の上半分は横方向、下半分は縦方向の研磨が加えられ、口縁部から外面は丹が塗布され、口縁部平坦面には赤彩の線描きによる暗文が描かれている。口径33.1cm、器高32.7cm。29はくの字状をなす口縁部をもち、胴部最大径は胴上半部にあり、底部は上げ底である。口縁部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整が施されているが、煤の付着はない。口径35.5cm、器高35cm。

石器として、石戈 (S86) ・石庖丁 (S88) ・扁平片刃石斧 (S90・S92) がある。石戈は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス (以下、AnTHとする) 製で、基部は平基式で、穿孔は表裏から行なわれ、鉢部の横断面形は菱形をなしている。器長16.9cm、基部幅 (7.3cm)、最大厚1.3cm。S90・S92とも頁岩製で、前者は頭部片で幅4.4cm、最大厚1.7cm。後者は刃部片で幅2.9cm、最大厚0.55cm。

D 群出土土器 (Fig.232) : D 群は土壙の北端部近くに位置し、高壺 (64) と鉢形土器 (整理過程で紛失) と土器片が、床面から50cm前後上でまとまって出土した。

64は平壠部幅が広い鋸状口縁部をもっている。壠部は横方向、脚部外面は縦方向の研磨が加えられ、壠部・脚部外面には丹が塗布されている。脚部端部は横ナデ調整、脚裾部内面はナデ調整が施され、輪部近くは絞り痕がみられる。口径27.8cm、器高27.1cm。

その他の出土土器 (Fig.229~233) : 本土壙からは、最上層および第3層から床面まで多量の土器が出土した。出土土器は突帯文土器から弥生時代後期前半までのものを含んでいるが、ここでは中期中葉以降のものを図化し、紹介する。なお、鉢形土器も一定量出土しているが、現

在、収蔵場所が整理の過程でわからぬいため図化できなかった。機会をみて紹介していくことにする。出土土器は壺形土器・壺形土器・高环・器台・脚付鉢・手捏ね土器・底部類・陶質土器などがある。

壺形土器(30~50)は、逆L字状口縁部をもち、口縁部下にM字凸帯を巡らすもの(A型)、内傾する逆L字状口縁部をもち、口縁部下に三角凸帯を巡らすもの(B型)、くの字状口縁部をもつもの(C型)に大別できる。A型はすべて口縁部は平坦面がほぼ水平であるが、口縁端部に刻み目をもつもの(30・31)、刻み目をもたないもの(32~35・50)がある。A型は胴部外面に横方向の研磨が加えられ、丹が塗布されている。32は、口縁部平坦面に赤彩の線描きによる暗文が描かれている。50は、口縁部平坦面に蓋組合せの穿孔がみられる。口径で大きさをみていくと、30cm前後のものが多いが、33は19.3cm、50は20cmである。B型として46~48がある。口径は48が49cmである。C型として36~45があり、45は口縁部下に三角凸帯を巡らし、胴部外面もナデ調整を施している。他はすべてハケ目調整が施されている。大きさを口径でみると、28cm前後のものがほとんどである。49は口径11.9cmのT字状口縁部をもつ小形のもので、口縁部に焼成前の穿孔がみられる。

壺形土器として、広口壺・複合口縁壺・瓢形土器などがある。広口壺は51~56・70(52・55・56は同一個体)があり、いずれも鋸状口縁をもっている。70は端部に刻み目をもち、口縁部から頸部内面は横ナデ調整、頸部外面は横方向の研磨が加えられており、その上に丹が塗布されている。頸部には6cm前後の間隔で、6本から10本を1組とする、口縁部平坦面には4mmから6mm間隔の赤彩の線描きによる暗文がみられる。口径38.2cm。51~53は丹が塗布されている。口径は54が21.2cm、55が27.2cm。57が袋状口縁壺、58~60が複合口縁壺、61は逆L字状口縁部をもつ短頸壺、62は壺形土器。

高环として、環部が塊形をなすもの(67)と鋸状口縁をもつもの(66・69)があり、65・68も鋸状口縁部をもつと考えられる。69は外面に三角凸帯を巡らしている。口径31.6cm。いずれも丹が塗布されている。63は胸部中央にM字退化形の凸帯を1条巡らす塊形の鉢に脚をもつ脚付鉢である。口縁部から鉢部内面および凸帯部はナデ調整、鉢部外面は横方向、脚部は縦方向の研磨が加えられ、丹が塗布されている。鉢部外面には、赤彩の線描きによる暗文が描かれている。口径11.5cm、残存高13.3cm。68はC群出土の27と同一個体。

71・72は手捏ねで鉢形に整形した小形の手捏ね土器で、71は前期のものか。75~80は器台。81~85は底部で、いずれも壺形土器。

73・74は外面に網目の叩きが施された淡灰色を呈する軟質の陶質土器である。  
その他の出土石器・土製品(Fig.234): S87・S89・S91はAnTH製で、石戈・石庖丁未製品・扁平片刃石斧である。S93は今山産出玄武岩製人形蛤刃石斧、S94はAnTH製石斧の頭部である。D95は土製投弾、D96は土器片再利用の土製釣錘車である。

以上から、本土墳はSK-49などと一連のもので、溝状をなし、墓地を区画した祭祀土壤とい

えよう。A～D群の土器は中期後半から末のもので、最上層の土器は後期後半のものを含んでいるところから、中期後半に掘削使用され後期後半に廃絶し、後半に埋没してしまったものといえよう。

### 32) 第49号祭祀土壤 (SK-49) と出土遺物 (Fig.235. 卷頭図版, PL. 35)

調査区の西側に位置し、SK-51を切り西北部へ延びている。幅3～5mで、断面形はV字に近い逆台形状をなし、1.6m前後遺存している。N-52°Wの方位をとり、SK-48の延長部と直交する。埋土は、下から黄褐色粘質土（ローム再堆積）・黒色粘質土（第15層）・黄褐色～黒褐色粘質土（第10層）・暗褐色粘質土（第8層）・黒褐色～褐色粘質土と堆積している。遺物は上から下までむらなく出土したが、第8層に完形品が多く、第10・15層でも比較的多く出土した。完形の土器等遺物は丹を塗布したものが多いが、SK-48でみられた遺物の集中はなく、第8・10層の土壤の中心部で帯状に点々と出土した。

#### 出土遺物 (Fig.236～242, 卷頭図版, PL. 35～37)

**出土土器 (Fig.236～239)**：出土土器として、壺形土器・壺形土器・高环・蓋形土器・鉢形土器・器合・手捏ね土器・陶質土器などがある。

壺形土器は、逆L字状口縁部をもつものとくの字状口縁部をもつものがあり、下層にいくにしたがって逆L字状口縁部をもつものが多くなる。1はくの字状をなす口縁部をもち、胴部最大径は上半部にあり、底部はほぼ平底である。口縁部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整、

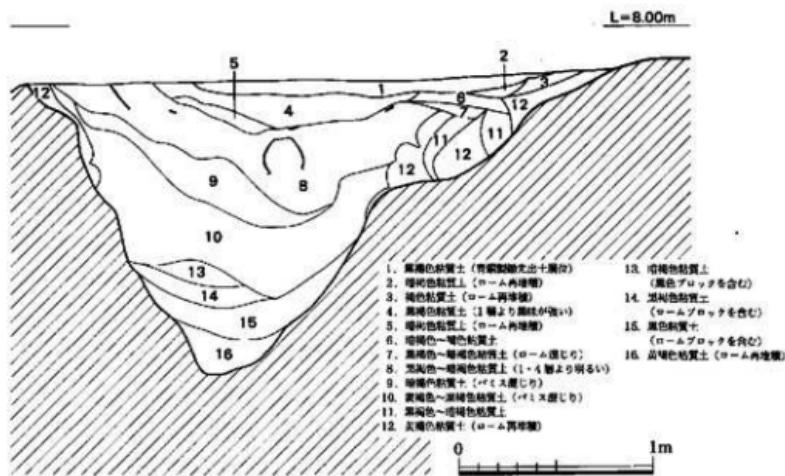


Fig. 235 第49号祭祀土壤土層断面図 (西北西から)

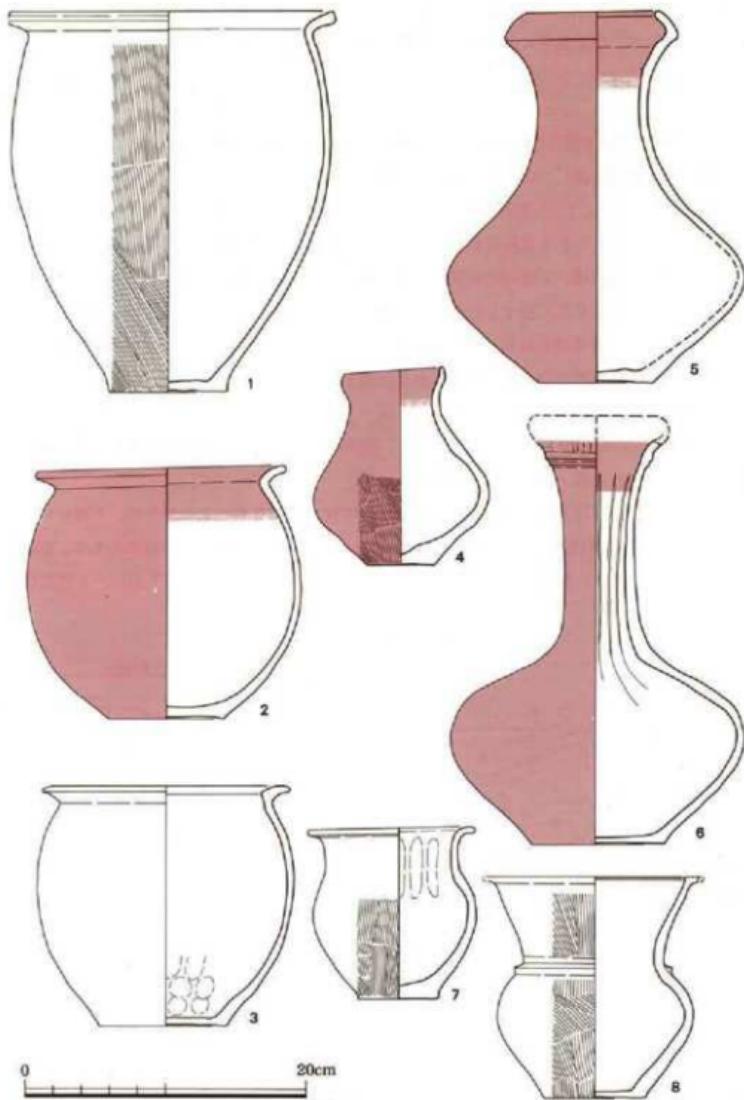


Fig. 236 第49号祭祀土壤出土土器実測図(1)

内面はナデ調整が施されている。口径23.4cm、器高26.9cm。20は粗雑な造りで、器壁が厚く、指整形痕が内外面に残っている。口縁部は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整が施されている。口径13.4cm、最大径14.5cm、底径5.5cm、器高15cm。

壺形土器として、無類壺（2・3）・袋状口縁壺（4～6・17・18）・小形壺（7・8・19）・広口壺（9）などがある。2はくの字状口縁部をもち、3は輪状口縁部の退化形の口縁部をもつ。2は胴中央部、3は中央部よりやや上位に最大径をもち、やや径が大きい上げ底気味の底部をもっている。2の胴部外面には研磨が加えられ、内面はナデ調整が施され、外面から内面口縁部下まで丹が塗布されている。口径は2が17.9cm、3が17.7cm、器高は2が18cm、3が17cm。袋状口縁壺は、小形で頸部が太いもの（4）、複合口縁壺（5）、口縁部と頸部の境に三角凸帯を巡らすもの（7・18）、M字凸帯を巡らすもの（6）がある。18は不明瞭であるが、いずれも外面は研磨が加えられ、丹が塗布されている。6・17の凸帯上位に赤彩の線描きによる暗文が描かれている。4は口径7cm、器高14cm。5は口径9.5cm、器高26.5cm。6は残存高28.8cm。7は頸部が不明瞭なもので、口径12cm、器高12.3cm。8は輪状口縁部をもち胴部と頸部の境に三角凸帯を巡らす小形広口壺で、口径（16cm）、器高16.6cm。19は外面に丹が塗布され、胴部から頸部への移行部に赤彩の線描きによる暗文が描かれている。9は重ね気味の口縁端部に刻み目のある輪状口縁部をもち、頸部と胴部の境、胴部中央にそれぞれ連続した3条の貼付け凸帯を巡らせた広口壺である。胴部中央に最大径があり、底部はやや丸みを帯びた平底で、胴部はやや細長である。口縁部・凸帯部は横ナデ調整、頸部から胴部にかけての外面はハケ目調整、内面はナデ調整が施され、外面から

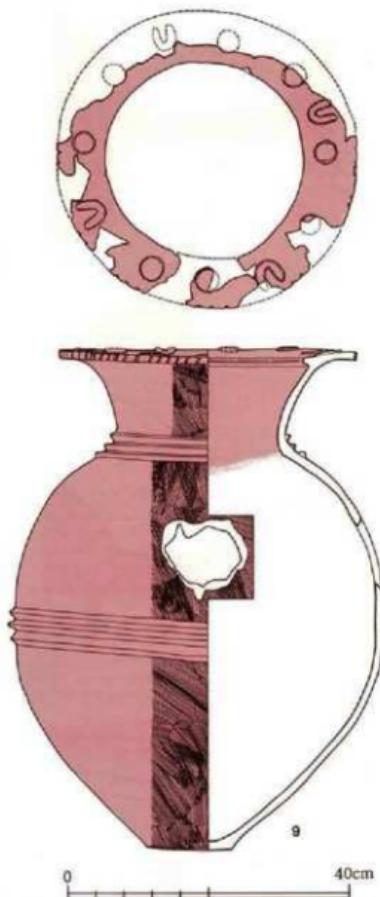
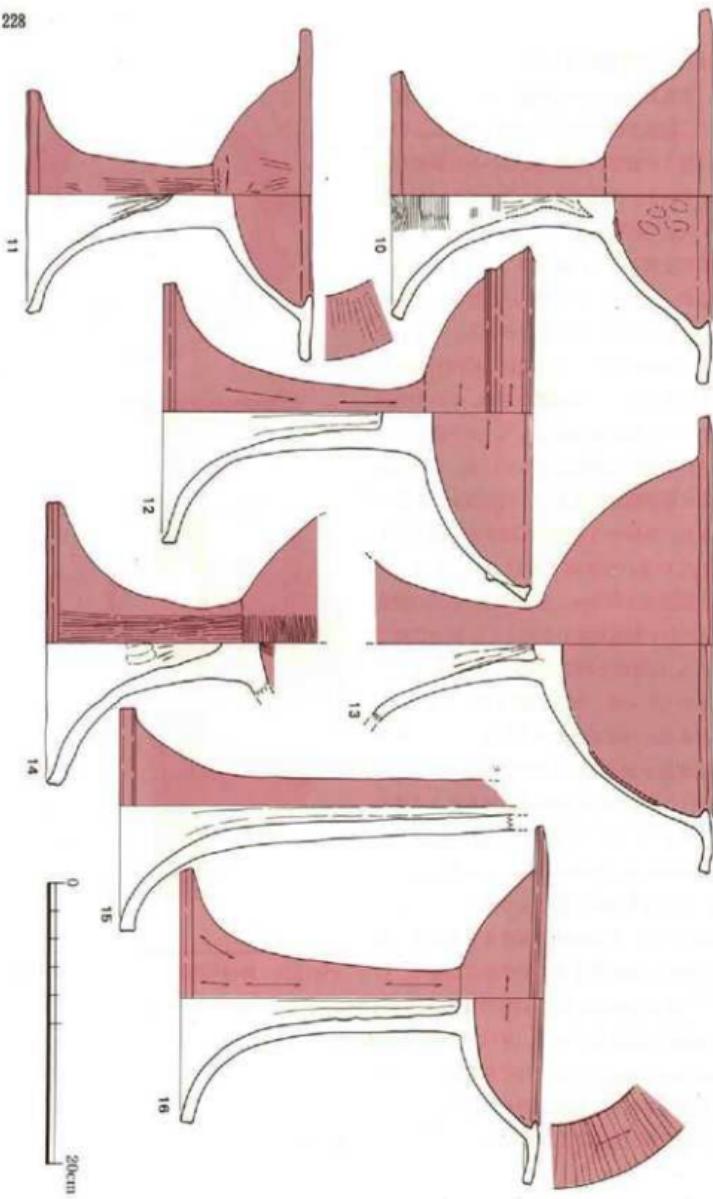


Fig. 237 第49号祭祀土壙出土土器実測図(2)

Fig. 238 第49号祭祀土坑出土器物图(3)



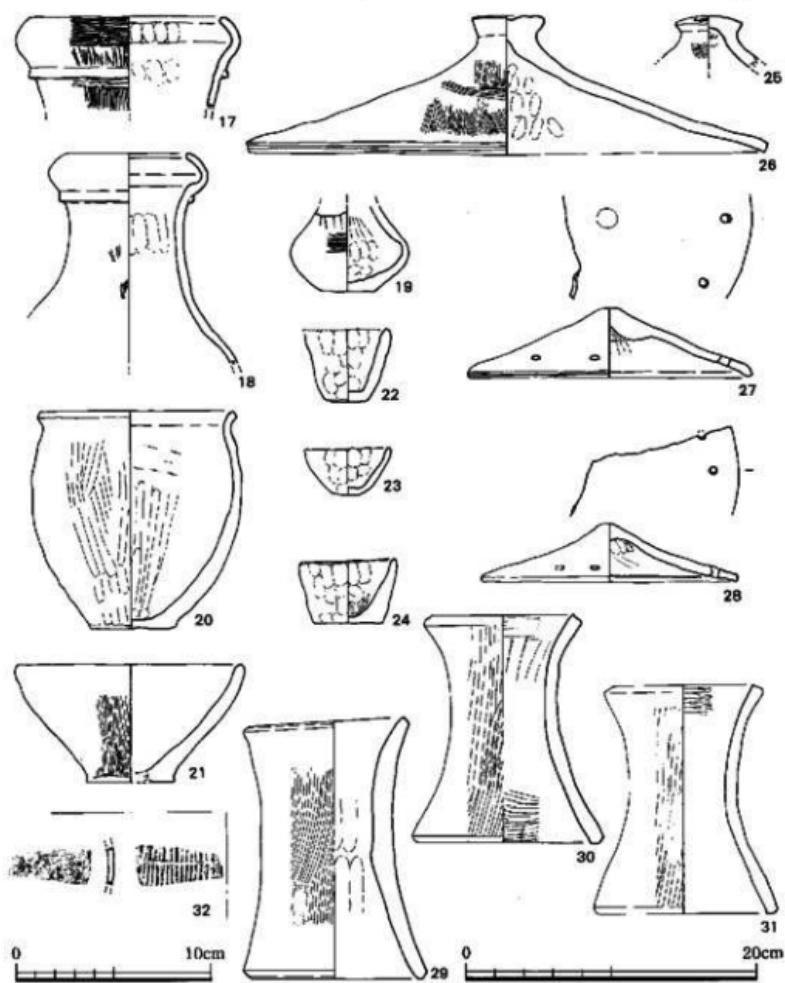


Fig. 239 第49号祭祀土壙出土土器実測図(4)

頸部内面にかけて丹が塗布されている。口縁部平坦面には間隔はまちまちであるが、円形の間に外向きのU字形を挟んだ浮文が4対設けられている。口径42.2cm、器高72cm。器形から、在地的な土器ではなく、東九州地域の移入品か。

高环は鋸状口縁部をもつものが大半を占めているが、墳形をなすもの、わずかに内側に突起

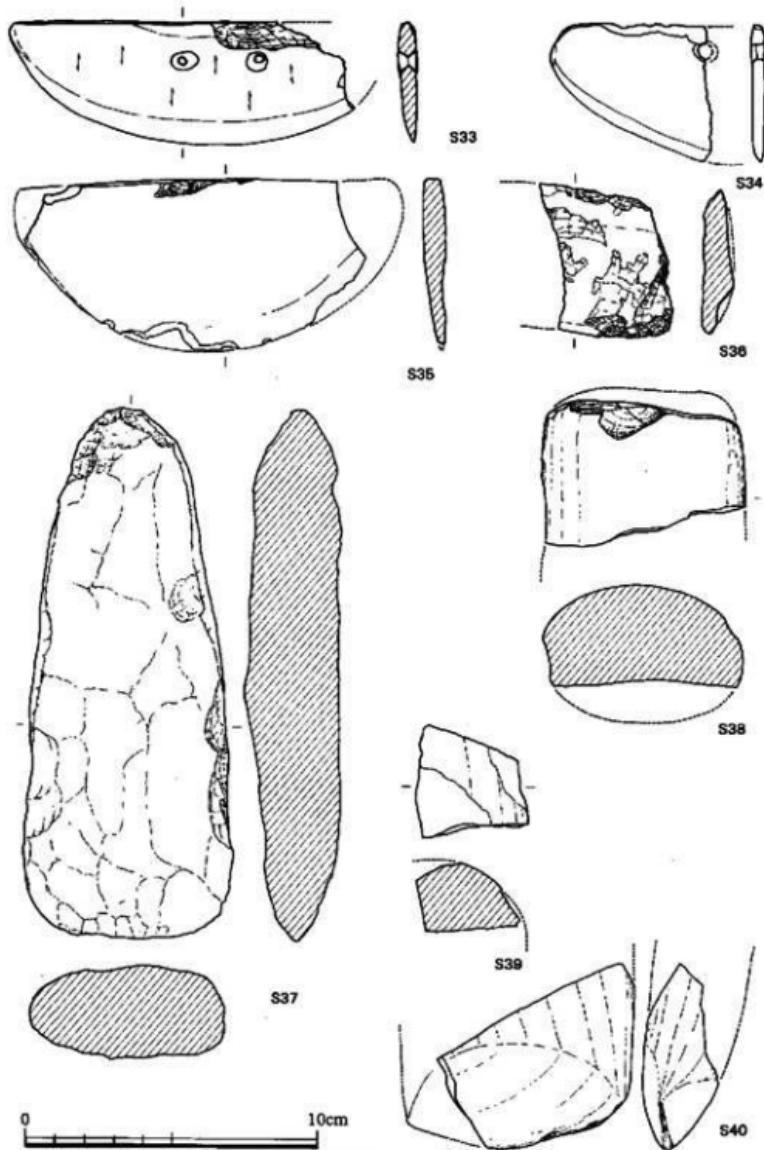


Fig. 240 第49号祭祀土壙出土遺物実測図(1)

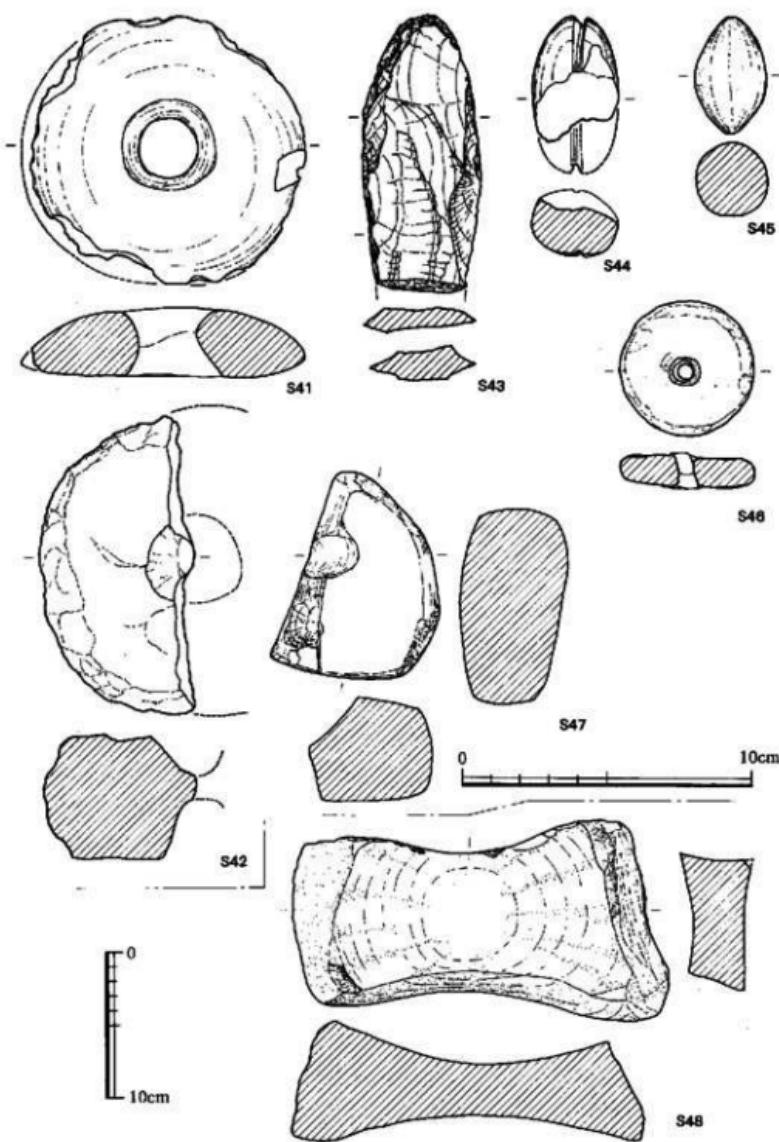


Fig. 241 第49号祭祀土壙出土遺物実測図(2)

状に張り出し、坏部外面上位にM字凸帯を巡らすもの(12)などがあり、いずれも坏部・脚部外面に丹が塗布されている。11・16の口縁部平坦面には、赤彩の線描きによる暗文が描かれている。10は口径27cm、器高22.9cm。11は口径23.8cm、器高20.1cm。12は口径25.1cm、器高26.2cm。16は口径25.4cm、器高26.2cm。

蓋形土器として、天井部をつまみ状に造り出すもの(25・26)、無頸壺蓋(27・28)がある。

25は口唇部に巡線が巡り、口縁部・つまみ下の

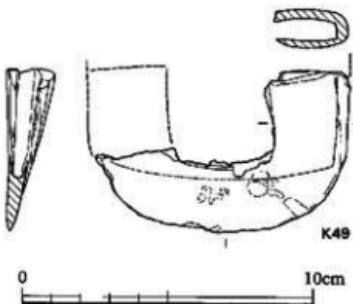


Fig. 242 出土青銅製鎌先実測図

天井部外面は横ナデ調整、その下外面はハケ目調整、内面はナデ調整が施されている。口径35.8cm、器高9.4cm。25と26は壺形土器の蓋か。27・28は笠状をなし、2個対の焼成前の穿孔がある。口径は27が19.8cm、28が17.8cm、器高は27が4.9cm、28が4cm。

21は鉢形土器で、口径16cm、器高8.1cm。22~24は手捏ね土器で、23は盃状をなし、他はぐい呑状をなしている。口径は22が5.8cm、23が6cm、24が6.5cm、器高は5cm、3.2cm、4.3cm。29~31は器台。

32は外面に繩目の叩きが施された灰白色を呈する軟質の陶質土器の胴部片である。

**出土石器・土製品(Fig. 240~241)**：S33~S36はAnTH製で、S33・S34は石庵丁、S35は石庵丁未製品、S36は石錐である。S37は安山岩製の始刃石斧未製品か。敲打によって整形しているが未研磨である。S38~S40は今山産出玄武岩製太形始刃石斧片である。S41は砾岩製で研磨によって刃部を造り出しており、環状石斧状をなしている(環石?)。S42は滑石製有孔製品。S43は古銅輝石安山岩製の打製石剣か。S44は滑石片岩製の切れ目石鍬、47は凝灰岩製、S48は砂岩製の砥石である。S48は金属器用砥石で枕状をなし、5面が底面として使用されている。D45は土製投弾、D46は土製紡錘車である。

**出土青銅製鎌先(K49)**：片方の袋部が欠損しているが、遺存状態は良く、淡青緑色を呈し、白銅質である。器長5.6cm、刃部幅(8.7cm)、刃部長1.8cm、袋部内法長3.8cm、刃基部厚0.6cm、袋部内法厚0.5cm。

以上から、本土墳はSK-48とともに墓地を区画する祭祀土壤といえよう。出土遺物は中期後半から後期初頭のものが主体をなし、後期前半から中頃のものが少量、最上層で出土した。中期後半に掘削使用され、後期前半には廃絶されていたといえよう。

#### 4. 壁穴住居址 (SC) と出土遺物

本調査では、13基の壁穴住居址（以下、住居址とする）を検出した。いずれも平面形は隅丸方形を呈するもので、調査区の東側に分布し、弥生時代前期の貯蔵穴群、中期から後期初頭の墓地群と分布を異にしている。特に調査区の北東部は各時期の住居址が切り合っており、検出時は共燃層の鳥栖ローム層がみえない状態であった。検出時には6世紀後半の須恵器があり、破壊された竈の露胎があり、同時期の住居址が所在していると考えられた。しかし、調査期間の制約があり、黒褐色～茶褐色土を10cm前後下げ造構を検出した結果、古墳時代後半期の住居址は検出できず、検出できたのは弥生時代終末期から古墳時代前半期のものである。

##### 1) 第60号壁穴式住居址 (SC-60) (Fig.243, PL. 38)

調査区の東南部に位置し、煉瓦造り建物の基礎によって東側を破壊されている。平面形は方形を呈し、一辺4.5m前後を測り、10cm前後の遺存である。中央に炉があり、南辺の中央に不整形の土壇があり、これを囲むように幅90cm前後の削り出しのベットが造り出されている。また、壁には幅5~15cmで8cm前後の深さをもつ暎溝が巡っている。主柱はベットの内側コーナー部に位置し、4本である。

出土土器 (Fig.244)：本住居址は削平を受けていたが、床面で一括の比較的良好な土器が出土した。出土土器として、土師器の壺形土器・壺形土器・高杯・鉢形土器がある。

壺形土器は1~3があり、1は肩の張りが少ない胴部から屈曲して外反し、口縁部となり端部は丸く仕上げている。3は二重口縁部をもつものであり、2は胴部外面に叩きが施されている。口径は1が12.8cm、3が16.1cm。

8・9は二重口縁で同一個体と考えられ、口縁部の屈曲部に1.2~1.5cm間隔で浮文があり、屈曲部から口縁部にかけて

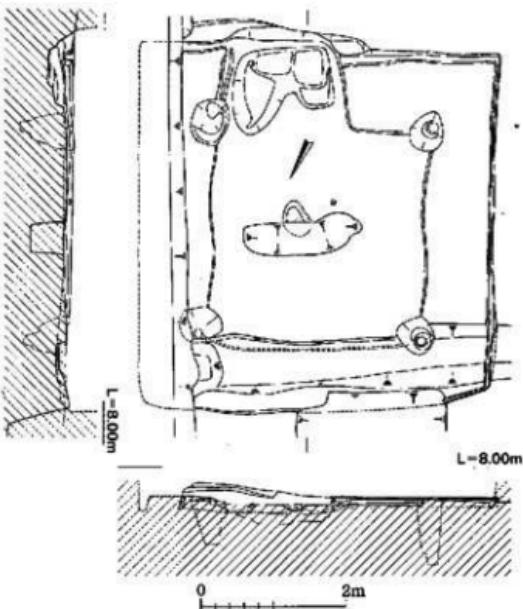


Fig. 243 第60号壁穴式住居址 (SC-60) 実測図

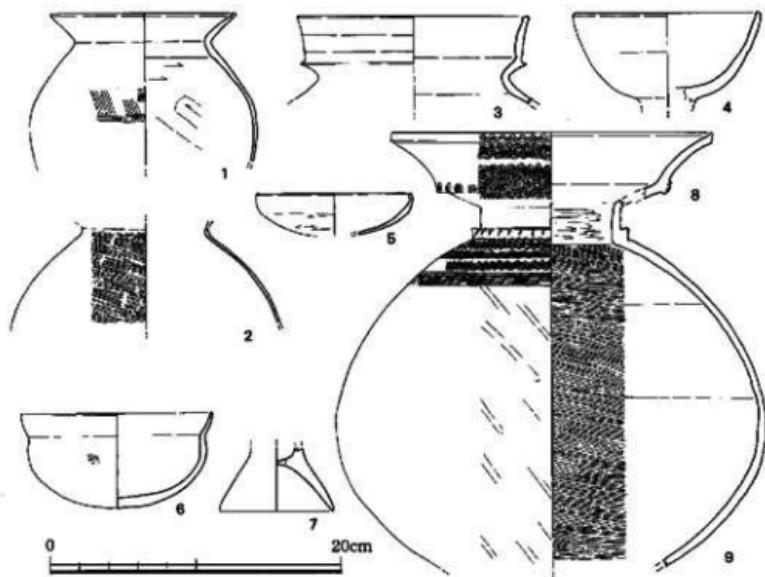


Fig. 244 第60号竪穴式住居址出土土器実測図

は櫛描き波状文が、屈曲部下には暗文が施文されている。また、胴部と頸部の境には凸帯が通り、胴肩部まで刺突文と櫛描き波状文が交互に施文されている。外面から内面頸部までは研磨、頸部内面はハケ目調整が施されている。口径22.3cm、器高(33cm)。

4は高杯、5は壺状をなす鉢形土器、6は小形丸底土器、7は脚付鉢形土器か。5は口径10.8cm、器高(3.1cm)。6は口径23.2cm、器高6.5cm。

以上から、4本柱を中心とし、中央に炉、周りにベットを巡らす方形の住居址で古墳時代初頭の

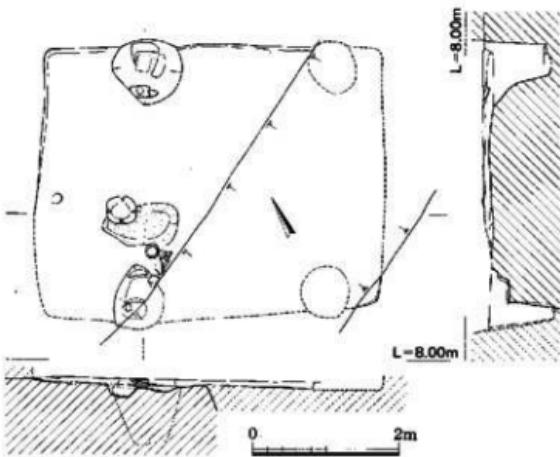


Fig. 245 第62号竪穴式住居址 (SC-62) 実測図

ものといえる。

## 2) 第62号竪穴式住居址 (SC-62) (Fig.245)

調査区の西側からやや中央寄りに位置し、SE-61の東にあたる。北・南側のコーナー部が遺存しており、 $3.5 \times 4.6\text{m}$ の平面形方形を呈する住居址で、炉をもち、主柱は4本か。

**出土土器 (Fig.246)**：本住居址からは、壺形土器（1）、鉢形土器（2・3）など少量の土器が床面で出土した。1は口径20.5cm、2は口径9.7cm、器高6.05cm。

以上から、炉をもつ方形の住居址で、弥生時代終末期のものといえよう。

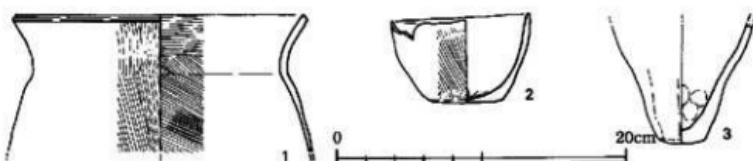


Fig. 246 第62号竪穴式住居址出土土器実測図

## 3) 第64号竪穴式住居址 (SC-64) (Fig.247・248, 卷頭図版, PL. 38)

調査区の北側中央部からやや東に位置し、SK-48を切り、SD-68に切られ煉瓦造り建物によって破壊されている。平面形は長方形を呈し、長軸4.5m、短軸4.25mを測り、10cm強の遺存である。壁に沿って幅20cm弱で4cm前後の深さをもつ壁溝があり、中央に炉があり、南辺中央に長軸65cm、短軸45cmを測り、20cm前後の深さをもつ土壤の付設がある。主柱穴は炉を挟んだ形で位置し、床面は叩きしめられている。本住居址は遺存状態が悪いにもかかわらず、土壤および床面から比較的まとまった土器が出土した。

**出土土器 (Fig.249)**：1～7は土壤出土のもので、8・9は

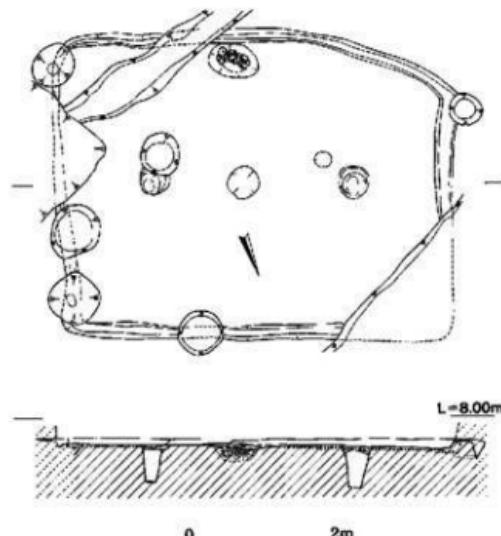


Fig. 247 第64号竪穴式住居址 (SC-64) 実測図

床面から出土したものである。土壤内出土土器には、高坏・小形丸底壺・小形器台があり、住居址床面出土土器には、高坏・小形器台のほか球状をなす甕形土器の胴部片がある。

1～4・9は高坏で、坏底から屈曲して開き口縁部にいたる坏部をもち、脚裾部が屈曲して開き底部となるものである。3の坏部外面、4の脚部外面にハケ目調整が施されているほかは、坏部および脚部外面は横方向の研磨が加えられている。1は口径15.6cm、器高13.3cm。9は口径20cm、器高16.2cm。

5・6・8は小形器台で、8の受け部および脚部外面は丁寧な横方向の研磨が加えられている。5は口径8.5cm、底径11.2cm、器高8.3cm。8は口径9cm、残存高5.6cm。7は小形丸底壺で、頸部が締まっている。口縁部外面は横ナデ調整、胴部は上半部がハケ目調整後、下半部がヘラ削り後ナデが加えられ、口縁部内面はハケ目調整、胴部はナデ調整が施されている。口径10.1cm、器高9.4cm。

以上から、2本柱を支柱とし、中央に炉、南辺に付設土壤をもつ長方形の住居址で、古墳時代前半期（5C初頭）のものといえる。

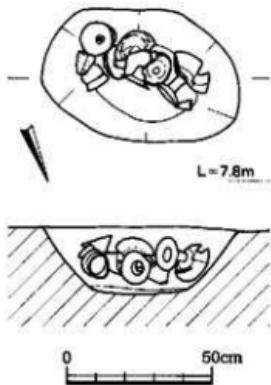


Fig. 248 住居址内土壤遺物  
出土状態実測図

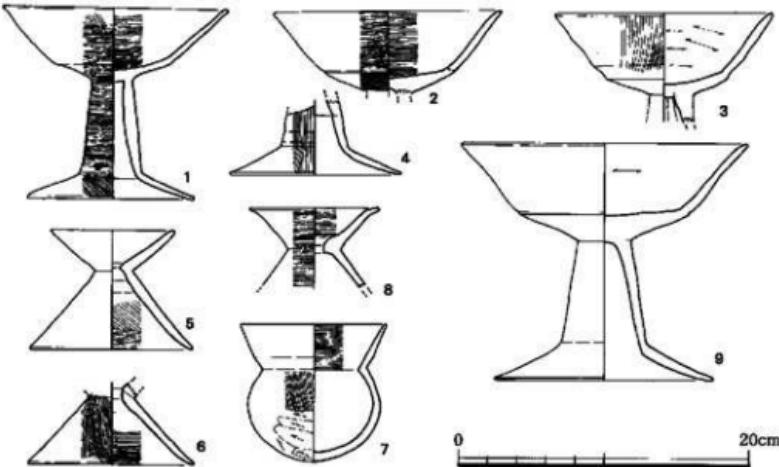


Fig. 249 第64号竪穴式住居址出土土器実測図

4) 第67号竪穴式住居址  
(SC-67) (Fig.250, PL. 38)

調査区の北東部に位置し、SC-70の北にあたりSC-77を切り、SD-69に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸5.9m、短軸5.65mを測り、25cm強遺存しているが、北西部のコーナー部は煉瓦造り建物基礎によって破壊されている。中央に炉があり、北東部に50cm前後の深さをもつ長軸3m、短軸1.15m前後の土壤が付設されている。付設土壤を挟んだ形で80~110cmの幅をもち10cm(床面から)の高さをもつ削り出しのベットが巡っており、幅20cm前後で5cmの深さをもつ壁溝が巡っている。柱穴は炉を挟んで2個

ベット内側の各コーナー部にある。床面は叩きしめられている。柱穴がそれぞれ重なっており、炉が2個あること、壁溝と壁に空間をもつところがあることから、床面を共有した建替えの住居址と考えられる。

**出土遺物 (Fig.251)** : 本住居址の中央部床面で小形器合(3)、土壤から壺形土器(1)、砥石(S4)、ベット床面で壺形土器(2)と壺形土器が出土した。以上のほか、本住居址からは多量の壺の胴部片が覆土から出土している。1はやや長めの丸い胴部から屈曲して外反し、口縁部となっている。口縁部は横ナデ調整、胴肩部外面はハケ目調整具による波線を巡らし、胴中央部から底にかけてハケ目調整、胴部内面はヘラ削りが施されている。口径18.1cm、器高26.75cm。2は二重口縁壺で、口縁部の屈曲部に2.5cm前後の間隔で浮文があり、頸部と胴部の境に三角凸帯が巡り刺突文が、口縁部の屈曲部内外面に櫛描き波状文が施文されている。口径24.8cm。S4は凝灰岩製で、表裏が砥面として使用されている。

以上から、中央に炉をもち土壤・ベットを付設し6本柱を主柱とした建替え住居址で、古墳時代前期(4C前半)のものといえよう。

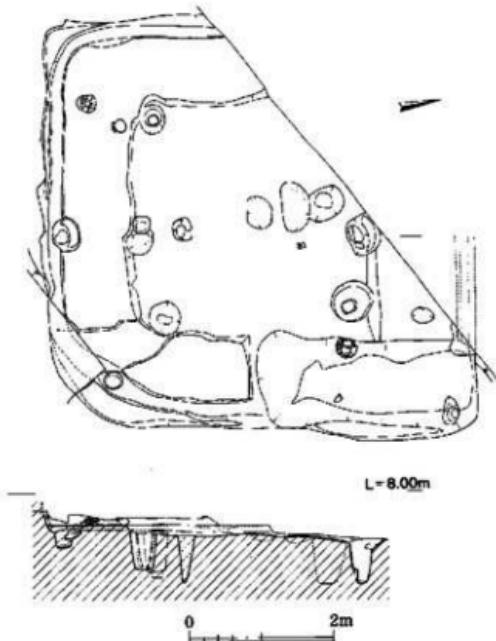


Fig. 250 第67号竪穴式住居址 (SC-67) 実測図

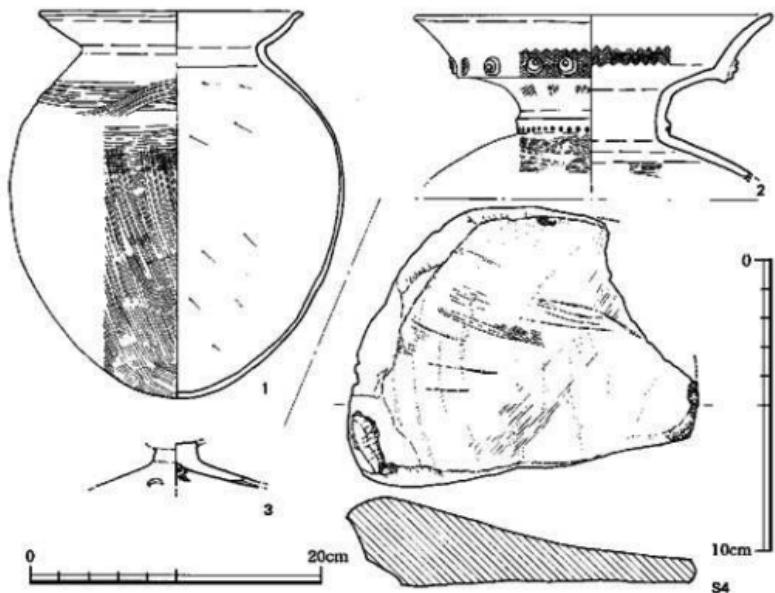


Fig. 251 第67号竪穴式住居址出土遺物実測図

## 5) 第70号竪穴式住居址 (SC-70) (PL. 38)

調査区の東側中央部に位置し、SC-62・67の間にあたりSC-80を切り、SD-69に切られ中央部は煉瓦造り建物の基礎によって破壊されている。平面形は台形を呈し長軸6.6m、短軸5.6mを測り、20cm前後の遺存である。幅70cm前後で13cmの高さ（床面から）をもつコの字形の貼ベットがあり、南辺中央部に40cm前後の深さをもつ土槽が付設され、壁溝が巡っている。中央に炉をもち、主柱は2本か。

**出土遺物 (Fig. 252) :** 床面およびベット面で変形土器などが出土した。出土遺物としては変形土器と白玉がある。1～4はいずれもくの字状をなす口縁部をもち、2の口縁端部に刻み目が施され、屈曲部に貼付け三角凸帯を巡らした長胴の変形土器である。すべて口縁部は横ナデ調整、胴部内外面ともハケ目調査が施されている。1は口径24cm、器高42.5cm。2は口径35.4cm、3は口径24.8cm、残存高32.2cm。4は口径20.9cm。S5は滑石製白玉で、径6.5mm、器高0.5mm。

以上から、本住居址は貼ベットをもつ方形の住居址で、弥生時代終末期のものといえよう。

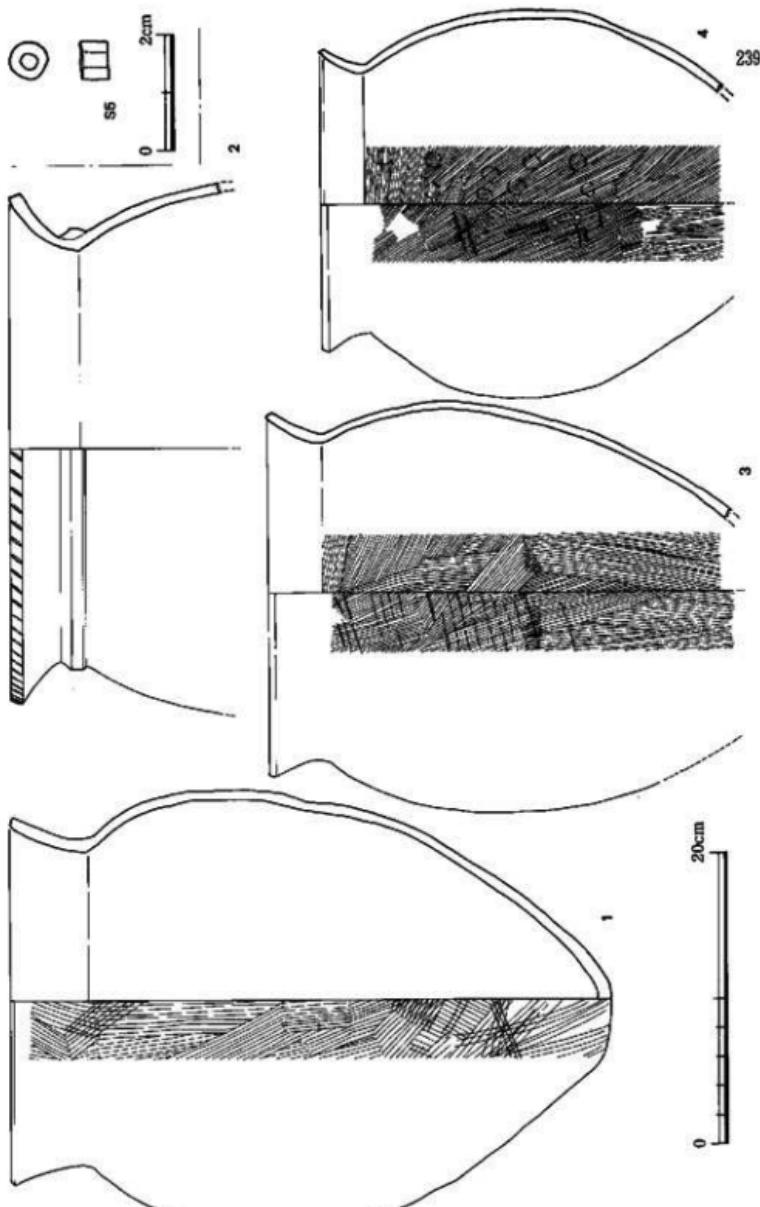


Fig. 252 第70号竪穴式住居址出土土器実測図

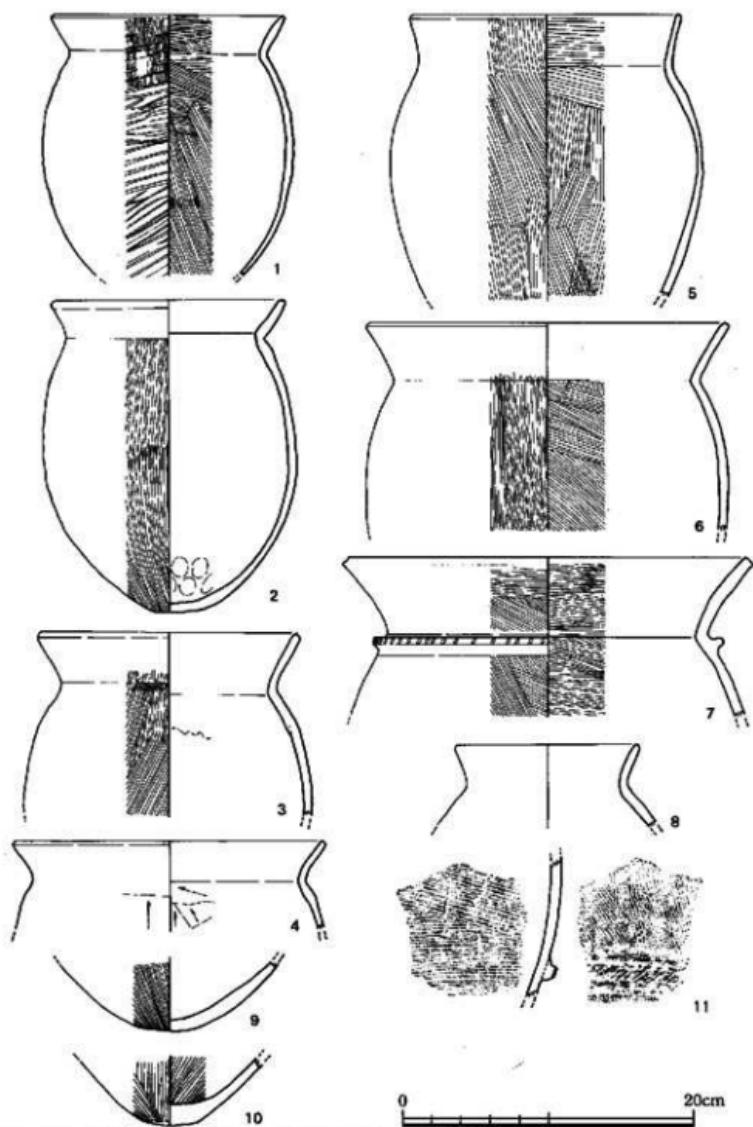


Fig. 253 第71号竖穴式住居址出土遗物实测图(1)

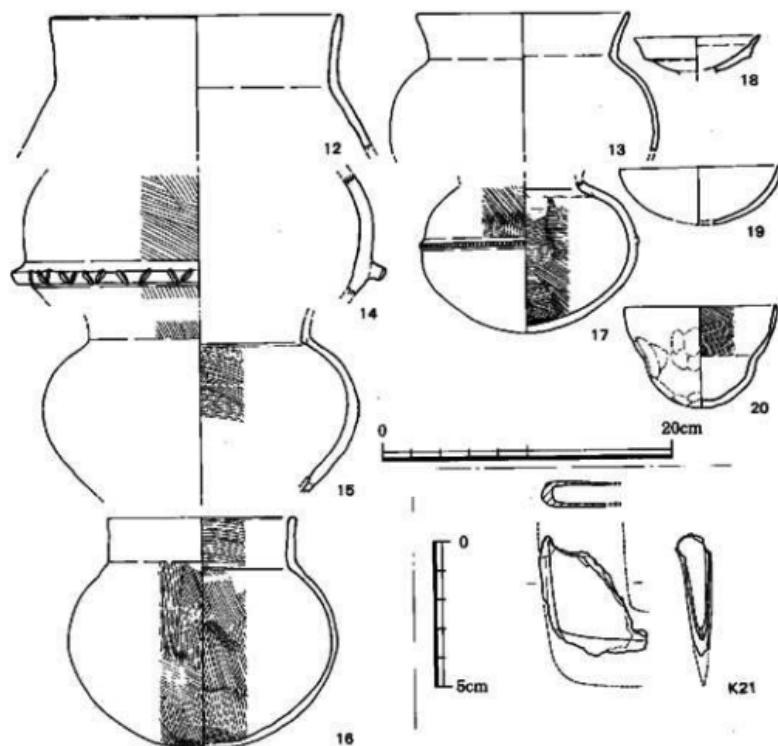


Fig. 254 第71号竪穴式住居址出土土器実測図(2)

## 6) 第71号竪穴式住居址 (SC-71)

調査区の西側中央部に位置し、SC-70の東にあたり、SC-74・75を切り SE-73に切られ、煉瓦造り建物基礎によって中央部を破壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、一辺6.1m前後を測り25cm前後遺存している。幅70~80cmで10cm前後の高さ（床面から）をもつコの字の貼ベットをもち、主柱穴はベットの内側コーナー部にあり、幅20cm弱で5cm前後の壁溝が巡っている。床面および貼ベットは叩きしめられ、壁は床から垂直に立ち上がっている。

**出土遺物 (Fig.253・254)**：本住居址の床面およびベット上から比較的まとまった土器などの遺物が出土した。出土土器として菱形土器・壺形土器・器台・小形鉢形上器・小形丸底土器がある。

1~12はくの字状をなす口縁部をもつ長脣の菱形土器である。1は、口縁部から脣上部の外

面はハケ目調整後叩き、胴部外面は叩き、内面はハケ目調整が施されている。口径16cm、残存高18.7cm。2・3の胴部外面はハケ目調整、胴部内面はナデ調整が施されている。2は口径16.2cm、器高21.2cm。3の口径は18.1cm。7は口縁部直下に刻み目凸帯を巡らし、5～7は口縁端部がヨコナデ調整、他の器面はハケ目調整が施されている。5は口径18.8cm、残存高19.2cm。6は口径25cm。7は口径28.4cm。4・8・12の口径は21.5cm、12.8cm、20.2cm。9・10は丸底気味の平底。11は胴部凸帯で凸帯端部に板状工具の木口を押しつけている。

13～17は壺形土器で、いずれも球状をなす胴部をもっている。16は胴部から屈曲して垂直に立ち上がり口縁となる直口壺で、口径13.6cm、器高15.6cm。13・15は16よりやや開き気味に立ち上がり口縁となる直口壺で、13の口径は14.8cm。14は胴中央部よりやや下に、17は胴中央部に刻み目凸帯を巡らし、17の胴上半部外面はハケ目調整後研磨、下半部外面は研磨を加えている。18は小形器台と考えられ、口径8.7cm。19は壺状をなす小形鉢形土器で、口径11cm、器高(4cm)。20は小形丸底土器で外面は指捺え後ナデを加え、内面口縁部はハケ目調整、胴部はナデ調整が施されている。口径10.6cm、器高7cm。

K21は青銅製鋤先で、残存長4.2cm、袋基部幅0.6+αcm。

以上から、本住居址は4本柱を主柱とし、コの字のベットをもつ隅丸方形の住居址といえよう。

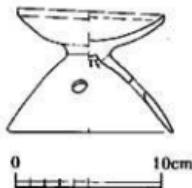
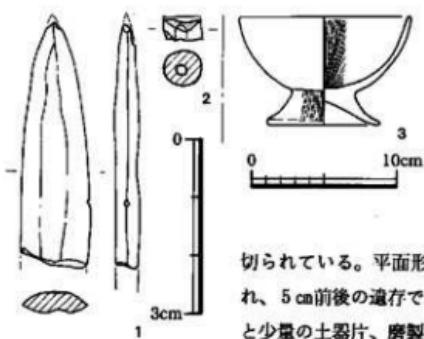


Fig. 255 第72号堅穴式住居址出土土器実測図

#### 7) 第72号堅穴式住居址 (SC-72) と出土遺物 (Fig.255)

調査区の東側中央部に位置し、SC-71を切っていると考えられるが、削平を受け南側の一部が5cm前後遺存しているのみである。床面は叩きしめられ、幅15cm前後で3cm前後の深さをもつ壁溝を確認し、床面から小形器台1点が出土した。

小形器台は壺状をなす受け部をもち、内湾気味に広がる脚部に焼成前の穿孔が3ヶ所みられ



る。口径10.2cm、器高8.4cm。

以上から、本住居址は古墳時代初頭のものといえよう。

#### 8) 第77号堅穴式住居址 (SC-77) と出土遺物 (Fig.256)

調査区の北東部に位置し、SC-67に切られている。平面形は一辺4m前後の方形を呈すると考えられ、5cm前後の遺存である。床面は叩きしめられ、台付鉢形土器と少量の土器片、磨製石鎌・白玉が出土した。

Fig. 256 第77号堅穴式住居址出土遺物実測図

3は塊形をなす鉢形土器に脚台がついた台付鉢形土器で、脚台部内面は横ナデ調整、他の器面は丁寧な研磨が加えられている。口径12cm、器高7.5cm。1はAnTH製の磨製石鎌の鋒部で、横断面形は丸みをもつ六角形を呈している。残存長4.1+αcm、最大厚0.3cm。2は滑石製臼玉で、径0.65cm、器高(0.5cm)。

#### 9) その他の堅穴式住居址(SC)

SC-65は一辺4m前後の方形の住居址で、10cm前後遺存している。幅70cm前後、高さ10cm前後(床面から)の削り出しふィットが巡り、東側中央部に長軸1m、短軸70cm、深さ20cmの長方形を呈する土壤の付設がある。壁溝も巡っている。

SC-74~76は3cm前後遺存する方形の住居址で、床面は叩きしめられている。

SC-80はSC-70に切られている。一辺5.1m前後の方形を呈する住居址で、壁溝が巡っている。SC-70はSC-80の建替えか。

### 5. 古代の遺構と出土遺物

本調査区では、古墳時代後期から平安時代初期にかけての遺構を検出し、遺構および北東部に部分的遺存していた整地層から古代の遺物が出土した。検山した遺構としてSE-55・56・61・73の井戸4基、SB-79の掘立柱建物1棟、SD-68・69の溝2条、柱穴多数がある。なお、SK-66は古墳時代後期(6C後半)の土壙である。掘立柱建物は1棟確認したのみであるが、本来的には全域に広がっていたと考えられる。

#### 1) 第55号井戸(SE-55)(Fig.257~260, PL.39)

調査区の中央部からやや西寄りに位置し、SK-10・28の間にあたる。検出面では長軸1.8m、短軸1.7mの不整形で、暗茶褐色土を覆土としていた。少し下げるとき断面が隅丸方形となり、鳥栖ローム層・八女粘土層を掘り貫き、含水層である青灰色砂層中の標高4.5m前後まで達している。

**出土遺物:** 1~12は土師器、13~25は須恵器である。1は、底部からわずかに外反しながら体部をのばし、底部にはヘラ切離し後に板状圧痕がある。内外面、とくに外底に漆喰様の付着物がみられる。2は、明橙色の色調を呈する須恵器の坏であるが、内底はヘラ磨きされている。3は高台を体部寄りに貼り付けた椀で、高台の高さ1.3cmで、外側に張っている。内面に刺突痕が十数個みられる。4は、黒色土器Aで、内面は横方向、部分的に斜め方向に比較的丁寧にヘラ磨きを施し、口縁外面も幅8mmほど焼している。高台は体部側で短く直立し、接地面は斜めである。口径15.4cm、高さ5.8cm。5は高坏の脚部で、脚内は黒色を呈する。6は小片であるが、

244

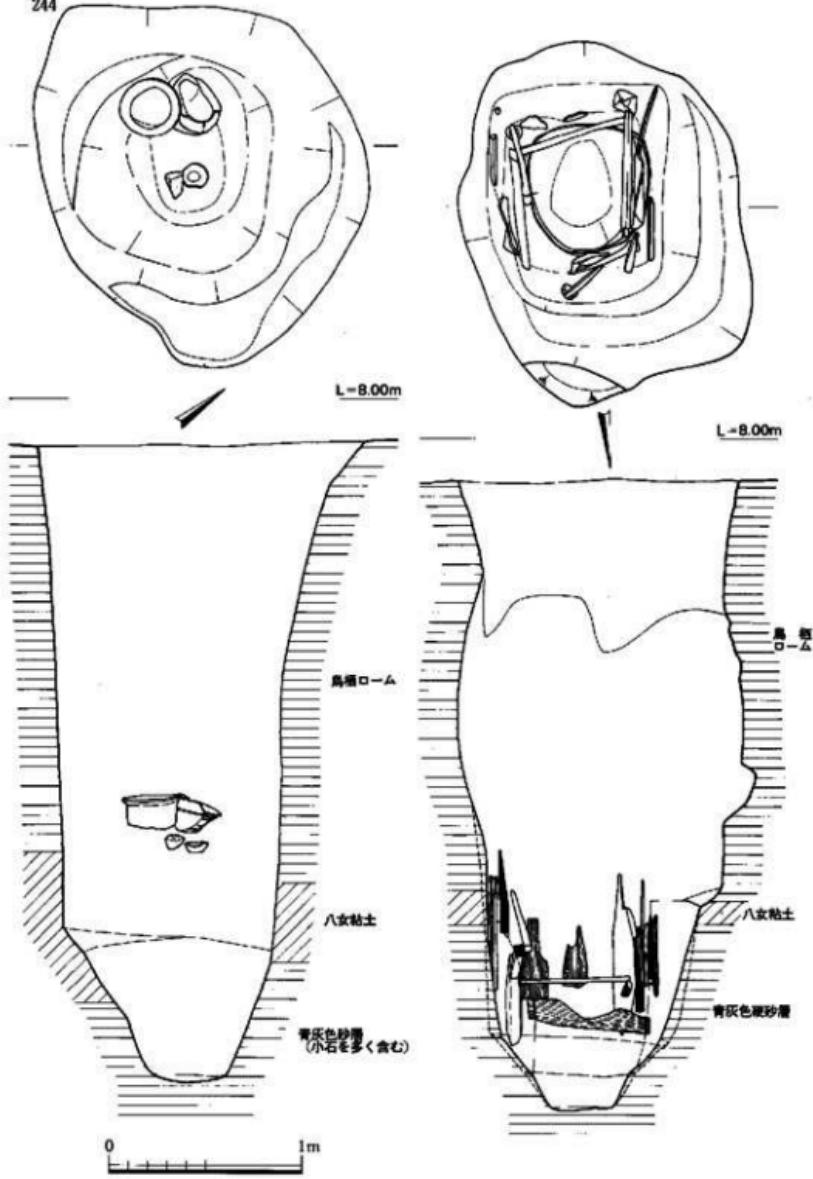


Fig. 257 第55・56号井戸 (SE-55・56) 断測図

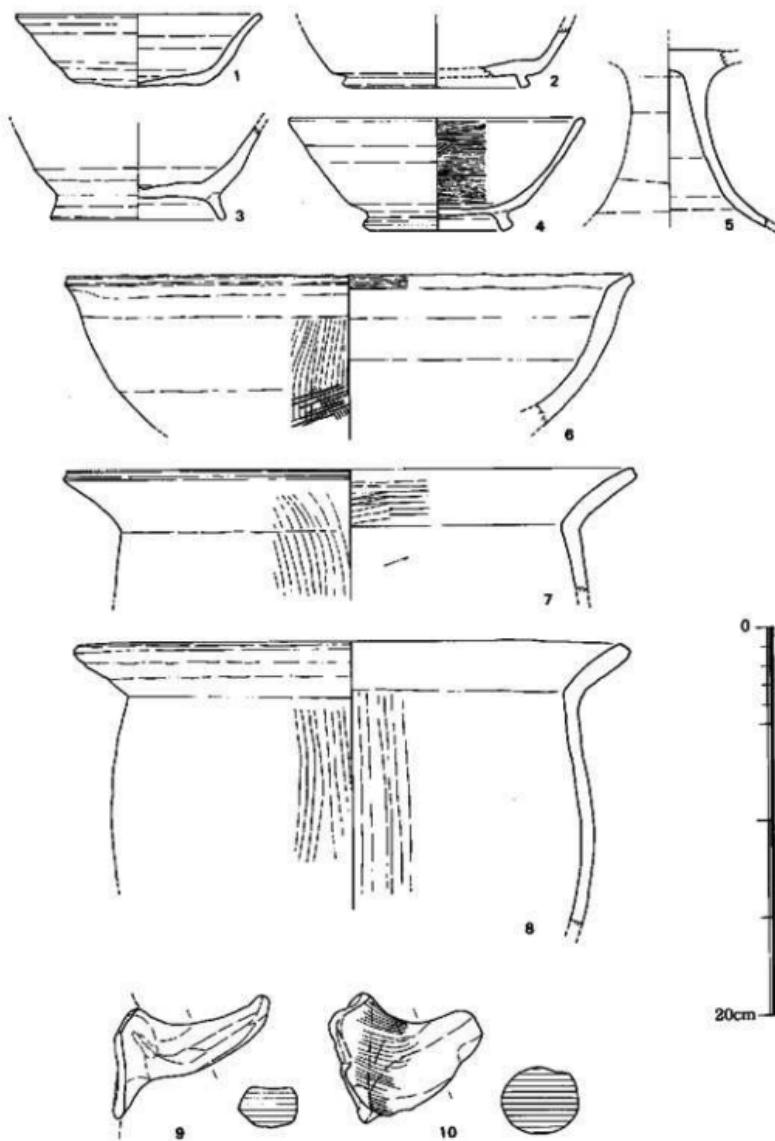


Fig. 258 第55号井戸出土遺物実測図(1)

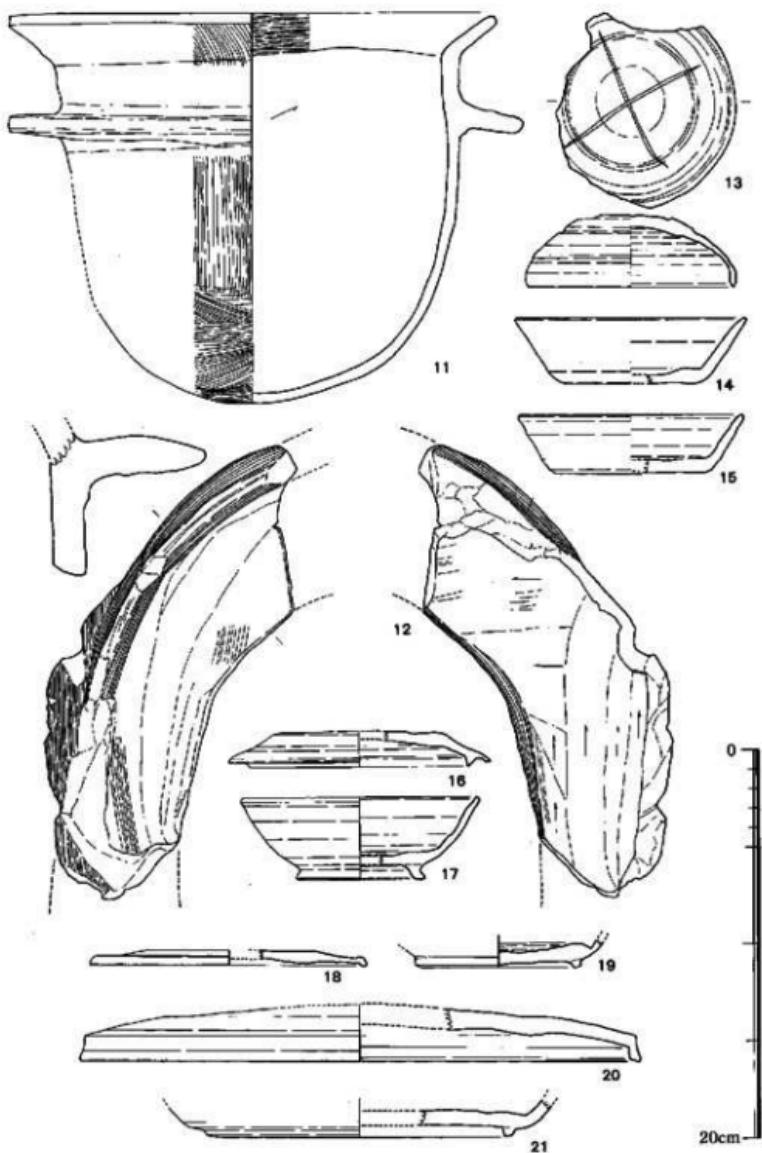


Fig. 259 第55号井戸出土遺物実測図(2)

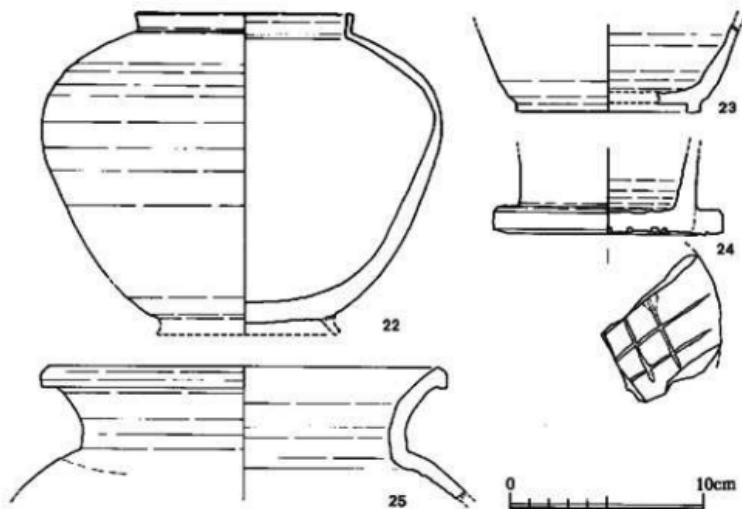


Fig. 260 第55号井戸出土遺物実測図(3)

径29cmほどの土鍋で、外面は縦位にハケ目調整され、口縁内側は横位のハケ目、内面はヘラ削り調整で、橙色を呈す。7・8は壺で、胴部上半部を完全に残す8は、口径28.8cm、胴部外面は縦方向のハケ目、内面は強くハケ目を縦位に施し小石が移動している。口縁の内外はヨコナデ調整している。焼成もよく、堅く焼きしまり、口唇付近は赤化している。9と10は、瓶の把手であるが、9は細く長く、10はずんぐりした形である。11は羽釜であるが類例の乏しい形態である。鈎の部分のみ手捏ねで、凹凸があり全周で波打っており、普通の壺形土器に鈎を貼り付けて作られたとみられる。鈎より下は煤が全面にわたって付いているが、頸部より上と内面は橙色を呈する。内側はヘラ削り、口縁と鈎の接合部はヨコナデ調整している。口径25.2cm、高さ20.1cmを測る。12は壺の鈎部分の破片であり、結局、この井戸には煮沸道具のセットがそろって廃棄されていたことになる。

13以下は須恵器であり、このうち7世紀後半に属する13・16・17・25と、14・15・18～24の8世紀中葉から9世紀にかけての一群に分けられる。13は壺蓋で天井部に窯印の刻線がある。16は返りをもつが粗製品でSK-61の2などに類似する。17は器高は低いが高台のつくりに8世紀以前の特徴をのこしている。25も外面に平行叩き文を印し、口づくりもシャープである。これらに対し、後出の一群のうち無高台の壺形品の14・15は特徴に乏しいが8世紀のもので、牛頭28号窯などにもみられる。高台の付いた19は8世紀代、23は高台の貼り付け位置がより後出の特徴をもち8世紀後半から9世紀前半と考えられる。18の壺蓋も時期的にこれに平行し、

偏平で、口縁端部の退化が著しい。20・21・22は8世紀前半から中葉に位置づけられる須恵器である。20は、口径29cmをはかる蓋で、折りまげられた口縁のつくりが鋭く、天井部分は回転ヘラ削りされている。21は皿で、低い高台の径は16cmである。22はいわゆる葉巻で、短い頸部、胴部最大径を中位よりわずかに上にもち胴下半はヘラ削りにする。高台部分は欠損している。このタイプは大宰府政庁の出土品など類例も多く、8世紀前半と考える。口径11.4cm、胴部最大径20.8cm。24は筒形容器の底部で、格子文の刻線を入れる。この種のものに同位層に竹管文を施すものもしられている。

この井戸の出土品は、7世紀後半のものを含んでいるが主体は8世紀中葉から9世紀前半である。

以上から、青灰色砂層中の湧水を利用した方形の井戸で、8世紀中葉から9世紀前半にかけて使用されたといえよう。

## 2) 第56号井戸 (SE-56) (Fig.261, PL.40)

調査区のほぼ中央部に位置し、SK-15の西にあたる。検出面では長軸1.8m、短軸1.45mを測る不整形を呈し、SE-55と同じ暗茶褐色を覆土としていた。鳥栖ローム層と八女粘土層まではほぼ垂直に掘り込み、10~15cmの八女粘土層を掘り貫き、青灰色硬砂層を掘り込み標高4.52mまで達している。また、本井戸は八女粘土層の流れ出しを防ぐために木組みが設けられている。まず、八女粘土層上面から60cm前後、平面形が1.2m前後の方形になるように掘削し、白色粘土と黄褐色粘土に黒褐色土を混入し、固めて貼り詰め厚さ3~5cmのスギの板目材を用いた板材(70cm前後)、4~7cmの角材(スギ板目材利用)を用いて一辺75cm前後の方形容れを作り、そのなかに径60cm弱の曲物を置き井筒としている。

**出土遺物：**須恵器と土師器を検出した。1~9は土師器、10~18は須恵器である。1は小壺で、口径3.9cm、高さ3.5cmをはかり、肩が角張った形態の縁模様づくりで、底部は非常に薄い。2は焼成のよい皿で、内外の体部を丁寧にヨコナデにし底部はヘラ切り離しのままである。復元口径で17.7cmをはかる。3は明橙色の椀で、短く直立する高台を付ける。内底はヘラ磨きの痕跡が認められる。4・5は類似の壺の口縁部で、「く」字形に曲げた口縁の外面にも縦位のハケ目が見られる。6・7は瓶の把手で、7には石英粒が多く含まれている。8は大形の高壺の脚部、橙色で、ヨコナデ調整である。9は竈の鉗の一部である。須恵器の壺蓋の10は、口端はシャープであるが、ほとんど折り返しがなく、11は粗製で、嘴状を呈する。12も粗製の無高台壺で、内底には指紋が残るほど強くナデ調整され、外底には板状圧痕がある。13・14・15の壺に共通するのは高台貼り付け位置が底部の端部にあることである。13と14の法量はほぼ同じで、口径12cm、高さ4cm前後である。15は非常に焼きがあまく瓦質状で、外面は黒灰色、内面は灰色を呈し外観では須恵器と異なる。外底には板状の圧痕が明瞭にみられる。16は高台がや

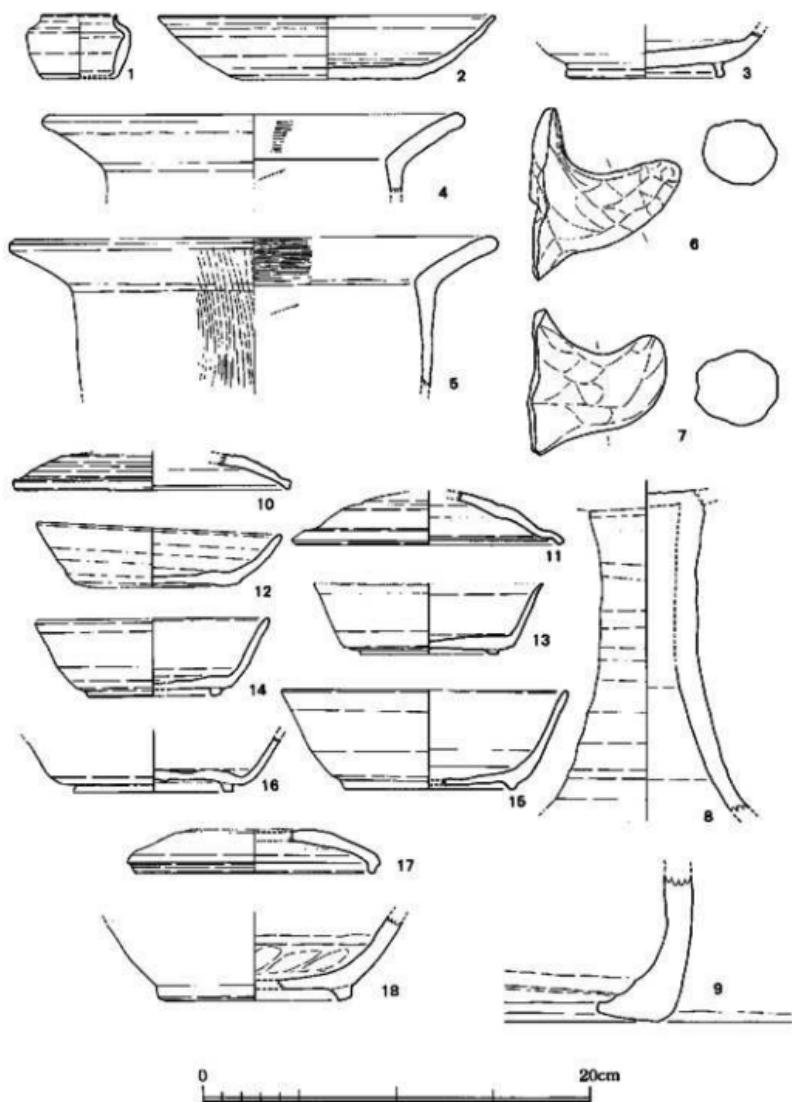


Fig. 261 第56号井戸出土遺物実測図

や内側に貼付され、焼成もよい。18は壺の底部で、内面に指痕がついている。

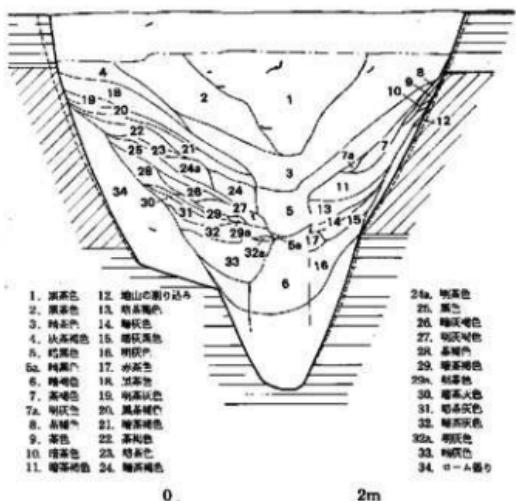
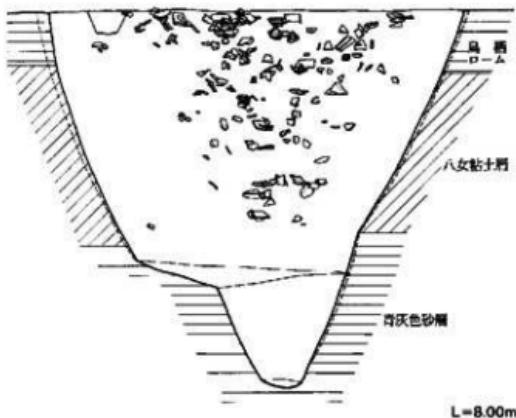
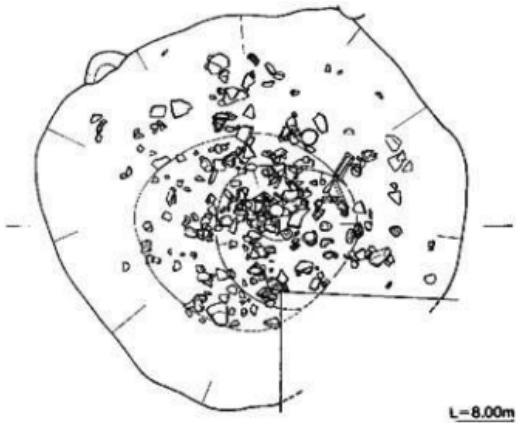
これらの遺物は8世紀後半から9世紀前半代とおもわれる。

以上から、青灰色硬砂層中の湧水を利用した木組枠をもち、曲物を井筒とした井戸で、8世紀後半から9世紀前半にかけて使用されたといえよう。

### 3) 第61号井戸 (SE-61) (Fig.262~268, PL.40・41)

調査区の中央部からやや東寄りに位置し、SC-64・SB-79の南にあたる。検出面では4m前後を測る隅丸方形を呈し、黒みの強い暗茶褐色土を覆土としていた。鳥栖ローム層・八女粘土層を掘り貫き、青灰色硬砂層中の標高3.95m前後まで掘り込んでいる。掘り方は断面形が桶状をなし、標高5m前後で跳り場ができる。木製の曲物等井筒枠は検出できなかったが、土層断面から径60cm前後の井筒があったことが想定できる。遺物は上から下までむらなく出土したが、特に井筒と考えられる径60cm前後のものが多く出土した。

**出土遺物:** この遺構からは、土師器、須恵器、瓦を検出し、すべての遺物について出土レベル



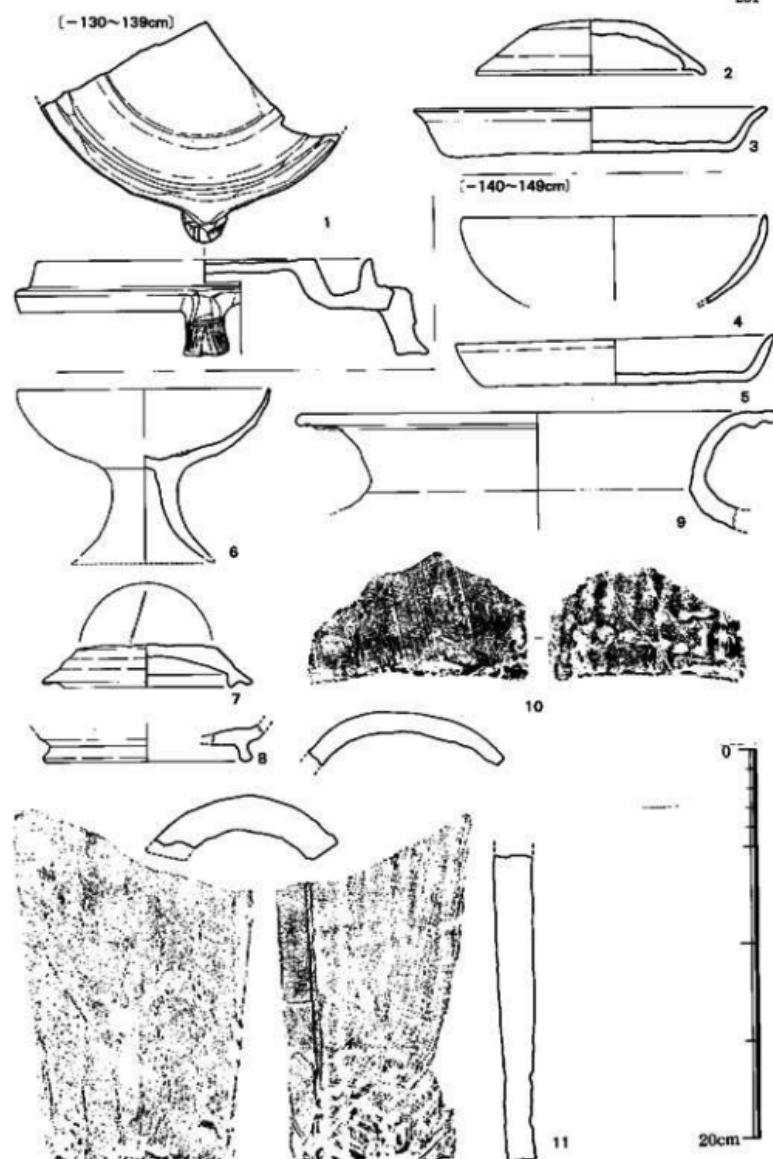
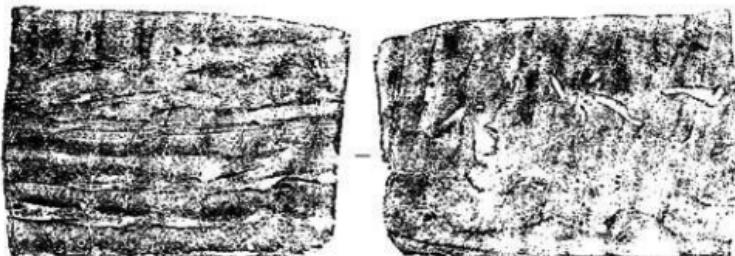


Fig. 263 第61号井戸出土遺物実測図(1)

252



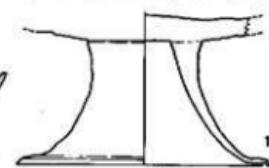
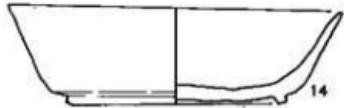
12



13



[-150~159cm]



0

20cm

Fig. 264 第61号井戸出土遺物実測図(2)

を測定して取り上げたので、遺物の集中する - 2 m までは 10 cm ごとにまとめて記す。

[ - 130 ~ 139 cm ] 埋土の最上層出土で、1 は須恵器獸脚付き円面甕。口径 19.5 cm、陸部径は 11.4 cm、海は比較的深く 1.9 cm をはかり凹凸のある底には墨が固着している。陸部は平滑で、内堤はなく、ここにも墨が少し付着している。短い獸脚は 1 本遺存し、上半は荒く面取り状に削り成形し、下半は 15 本の隆線を斜行させて爪を表現している。脚がつく周縁はヘラによりやや荒く削られている。脚接地面には砂が付着し、ザラザラである。裏面は灰色を呈し、表面の黒色と対照的で、陸部裏がナデで荒く調整され、屈曲部はケズリ調整である。脚数は復元面形から判断して 6 脚であろう。2・3 は須恵器で、返りのある坏蓋の 2 は小型の粗製品で、天井部は未調整である。3 は口径 18.6 cm、高さ 2.3 cm をはかる皿形品で、口縁を外反し、内底の周縁に幅 1 cm ほどの浅い溝を巡らす。

[ - 140 ~ 149 cm ] 4 ~ 6 は土師器、7 ~ 9 は須恵器である。4 は橙褐色で、薄手の坏形品で、6 も同質の高坏であり、ともに器面が剝離しており調整はよくわからない。5 の皿形品は、3 の須恵器と似ている同形品であり、内底の巻き上げ痕の上にヘラ刻み線が横方向に十数本みられる。7 は 2 と類似の坏蓋であり、天井は降灰のため褐灰色、内面は暗赤色を呈する。8 は坏身の小片であり、高台は踏んぱり気味である。9 は硬質の壺で、内面胴部に青海波文。10 の丸瓦は、内外とも赤褐色を呈し、凸面はサラ様工具により縦位に搔目がみられ、叩打の痕跡は観察できない。凹面には布目跡と横骨結綴の紐跡がみられる。11 も丸瓦で、赤褐色、凸面は 10 と同様な搔目がその下の格子叩打文を消している。凹面はやや粗い布目で、側面は丁寧に削られ凹凸側面とともに面取りされている。12 は灰色、須恵器質で、焼成のよい平瓦である。凸面は縦方向に強いナデ調整がされ、ヘラきずはみられるが叩打文は認められない。凹面には布目の痕跡はなく、強いナデが、端部では横位、中央では縦位にみられ、側面は削られている。13 の平瓦は、褐灰色、凸面は縦方向に強いナデ調整され、胎土中の石英粒などにより擦痕が多くみられるが、叩打文の痕跡は観察できない。凹面には通常の布目痕がつけられているが、側面寄りの約 5 cm は縦方向にナデ調整され、側面はヘラ削りと、面取りがされている。これは瓦質に近い胎土である。

[ - 150 ~ 159 cm ] 14・15 は須恵器で、14 の坏は口径 17.2 cm、低く短い高台がつき腰に稜をもち、内底はナデ調整である。15 は浅い皿形をつける高坏で、脚は漸移的に開き、端部はわずかに肥厚させ折り上げている。14 の坏形品と共伴例は多い。16 の平瓦は赤褐色ではあるが通有のもので、凹面は布目の上に横骨痕が強くついて凹凸をなし、端部には削りがなされている。凸面は粗い条線の叩打文である。

[ - 160 ~ 169 cm ] 17 は土師器壺で、「く」字形の口縁に小さい段がつき、口径 23 cm に復元できる。18 は石英粒を多く含む胎土の坏蓋であり、2・7 よりもやや大きく、口径 15.4 cm である。19・20 は平瓦で、19 は 16 の同類品であり、凹面の布目は強いナデにより消されている。20 も赤褐色、

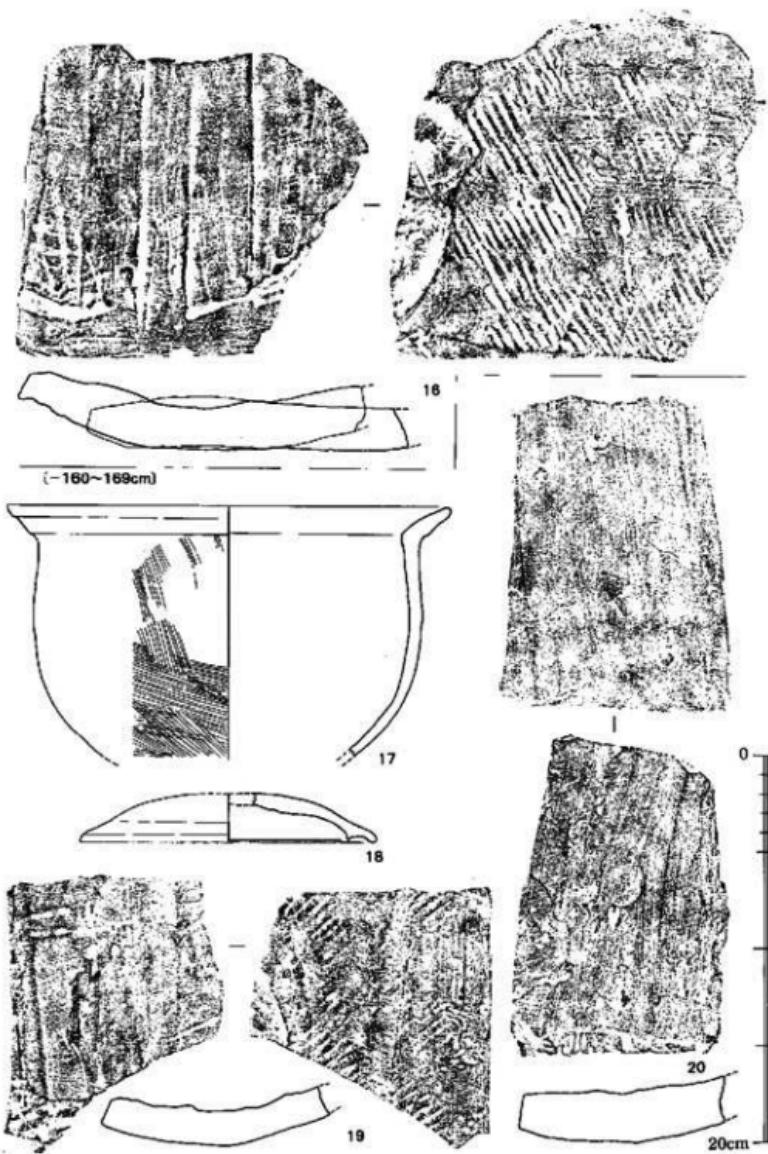


Fig. 265 第61号井戸出土遺物実測図(3)

凹面の布目は端部を除いて強いナデにより消され、凸面も同様にナデ調整され、叩打文は認められない。側面、端部とともに「岸」字にヘラ削りされている。胎土中に白い細かい粒子が混入している。

[−170～179cm] 21は、土師器の壺で、肩部内面は斜行のヘラ削り、外面はハケ目調整である。22の須恵器高环は体部と脚部に各3本の沈線を巡らし、脚端部もシャープなつくりであり、その内面に横位置の「キ」字形のヘラ刻線が記されている。口径8.7cm、高さ8.5cm、やや赤みを帯びた灰色である。

[−180～189cm] このレベルで検出した23の丸瓦は赤褐色の土師器質で、凸面は横位の条線叩打文、凹面はナデにより布目を消し、側面に近い部分はクシ状のものにより縦方向に調整し布目が消されている。側面はヘラにより削られる。遺存部分から復元して直径10cmほどの小形の半截瓦と思われる。

[−190～199cm] 24の土師器壺は、赤褐色、薄い器肉、胎土は精良である。肩部にやや脱い穂をつくり、頸部は内外ともにヨコナデ調整をしている。25は須恵器坏蓋で、口径18.7cm、水盤をした灰色精製土を使用し、天井部は削り調整をしている。

[−200～250cm] このレベルの間で検出した遺物のうち29は土師器、28は平瓦、他は須恵器である。26は円面鏡の小片で、前記1に比べて小形であり、口径13.9cmを測る。陸部は周縁より高く、海は深さ1cm、脚部に開口の上縁が遺存している。27は壺の口縁で、頸部にはヨコナデの上に縦方向のハケ目が見られる。28は赤褐色の土師器質であり、凸面は格子状叩打文を施した後、乱雑な不定方向の削りがされている。29の土師器壺は、ヨコナデの口頸部につづく脚部外面は条線の叩打文をヘラ削りで消している。赤褐色で器肉は薄い。口径19.6cm。30の坏蓋は、返りはまだ長く、高さは3.5cm。31の高环は22の類品であるが脚部の沈線がこれにはない。33は14とよく似た坏で、短い高台をついている。34は天井部を削る坏蓋であり、胎土中に多くの石英粒を含み灰色に焼成されている。

[−250～最下層] 図示した3点はすべて須恵器で、35は坏部に1本の沈線を巡らし、細い脚部にも細かい回転痕を残している。36は、身に返りをもつ形で、外面は自然釉が全面につき灰褐色を呈する。37は横瓶の破片である。これら最下層の須恵器はいずれも古墳時代のものであり、6世紀後半～7世紀初めと考えられる。

この井戸埋土からの出土遺物のうち−250cm以下の遺物を除く、深さ約120cmまでの埋土中のものは7世紀後半から8世紀中葉の間にはいる。このなかにはこの時期をさかのぼるものも含まれているが、比較的年代比定が可能な須恵器坏類でみると、2・7・22・31はこの井戸開窓初年の7世紀後半を、3・14・15・25・33の須恵器坏類はこの井戸の埋没年代である8世紀前半・中葉の年代を、おのおの示している。したがって、年代の比定しがたい1の円面鏡はこの間の時期に属し、さらに最上層の出土位置という点を勘案すれば、この鏡の発達年代は8世紀

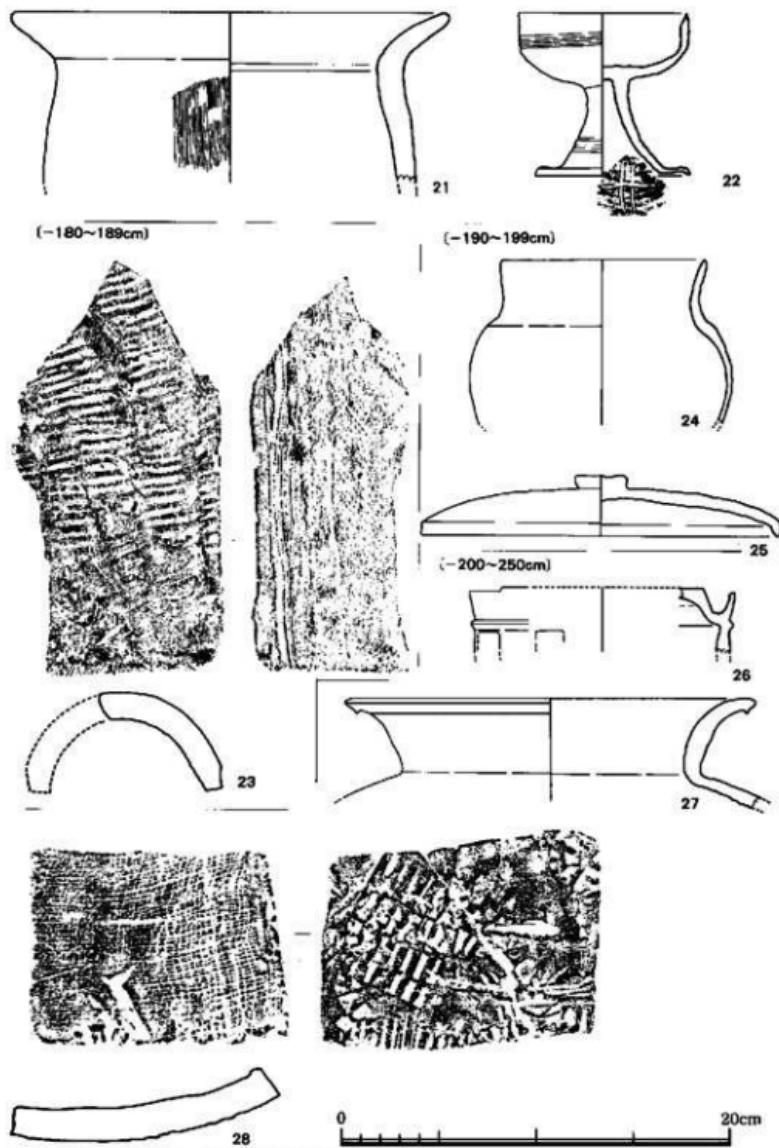


Fig. 266 第61号井戸出土遺物実測図(4)

中葉と考えられよう。福岡県内の獸脚円面鏡の出土例は少なく、形状の全体が同えるものも少數のようであり、本品は良好の例である。春日市御供田遺跡例は7世紀前半と報告されているが、本例はそれより後出である。

また、9点図示した瓦は白鳳・奈良前期のものと異なる特徴を有している。胎土において、いわゆる瓦質のものではなく、赤褐色の土器質や、12のように須恵器そのものの胎土がこれらに共通した特徴といえる。調整を中心とした技法上の特徴は、10、11の丸瓦のように凸面の叩打文を仕上げの段階で擦り消したり、23のように凹面の布目を部分的にナデにより消していく。平瓦においても、16・19・28の凸面では、ナデや削りにより叩打文の一部を消し、12・13・

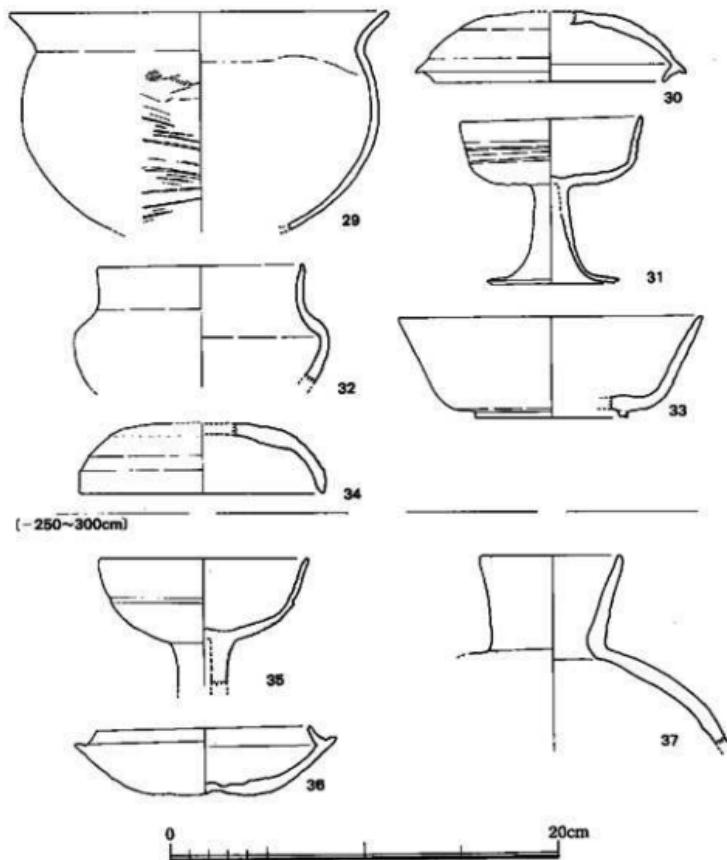


Fig. 267 第61号井戸出土遺物実測図(5)

20では叩打文の痕跡は認められず、凸面すべて縦方向のナデ調整をしている。凹面は、13・19・20・28のように布目をナデにより部分的に消し、20においては布目は端部のごく一部にみられるに過ぎず、さらに12においてはこれはまったく認められない。しかしこれらも側面と端面は例外なく丁寧に削られ、面取りさえみられる。胎土と技法上のこれらの特徴は、太宰府市神の前窯跡出土瓦の特徴に共通し、さらに既に報告した那珂遺跡群第22次調査（博多区竹下5丁目420番地）SX-04出土品にもみられる。

『神の前窯跡』太宰府町文化財調査報告書第2集 太宰府町教育委員会 1979

『那珂遺跡3 - 那珂遺跡群第22次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第253集 1991

横田賛次郎「福岡県出土の鏡について」九州歴史資料館研究論集9 1983

以上から、青灰硬砂中の湧水を利用した隅丸方形の井戸で、7世紀後半から8世紀前半にかけて使用されたと考えられる。

#### 4) その他の遺構

SE-73は調査区の東側中央部に位置し、SC-71を切っている。平面形は隅丸方形で、径2.8m前後を測る。井筒が南東部に片寄っており、鳥柄ローム層・八女粘土層を掘り貫いているが、煉瓦造り建物基礎と井筒が重なっているため完掘できなかった。含水層まで達していると考えられる。出土遺物として須恵器の壺・壺と土師器の壺などがある。取り上げ遺物は6世紀末から7世紀初頭のものがほとんどであるが、7世紀後半にかかると考えられる須恵器の壺などがあり、6世紀末から7世紀後半まで使用された方形の井戸であるといえよう。

SB-79は調査区の北東部から中央部寄りに位置し、SC-64を切りSD-68に切られている（Fig. 269）。主軸方位をN-16°-Eにとり、桁行5.5m、梁行4.5mの3×3間の総柱の掘立柱建物である。SD-68に切られていることから古墳時代後期（7C前半頃）の倉庫といえる。

SD-68はSC-64・SK-66・SB-79を切っている。幅40~60cmで、20cm弱遺存する断面形U字の東西溝である（N-90°-E）。SD-69はSC-67・70を切っている。SD-68と直交し、ほぼ同じ幅・深さである。蛇行しながらもほぼ南北の主軸方位をもっている。SD-68・69は出土須恵器・土師器から8世紀前半から9世紀前半にかけてのものといえよう。



Fig. 268 出土鉄器  
実測図

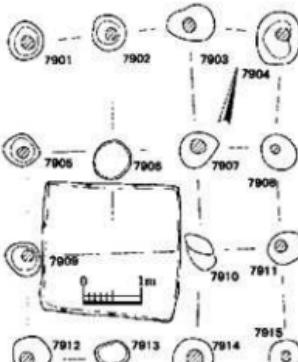


Fig. 269 第79号掘立柱建物  
(SB-79) 実測図

## 6. その他の遺構と出土遺物

本調査区では、SB-79 や竪穴住居址の柱穴のほかに柱穴を270個検出した。調査区の中央部から西側に分布している柱穴は径20~70cm前後で、30cm前後以下の遺存であるがいずれも遺物はわずかで、柱痕跡もほとんどのが検出できなかった。遺物として、少量の8世紀から9世紀の須恵器・土師器が出土したのみである。調査区の北東部に分布している柱穴は径20~110cm前後で、15~60cm遺存している。これらの柱穴群は柱痕跡が検出できるものと、できないものがあり、前者は掘立柱建物、後者は竪穴式住居址の柱穴と考えられる。SB-79以外は煉瓦造り建物基礎などで寸断されており、建物としてまとめることができなかった。この柱穴群は、出土遺物から弥生時代終末から9世紀中頃のものまである。

調査区の北東部は前述したように、古墳時代後期の住居址群が分布していたと考えられ、須恵器の壺・甕、土師器の甕・高壺など5世紀前半から7世紀前半にかけての遺物が出土した。

図示した鉄器(Fig.270)は、調査区の西側の遺構検出中に採集した板状鉄斧である。器長4.8cm、幅4.6cm、最大厚0.6cmで、横断面形状は長方形、刃部は両刃である。この鉄斧は採集場所がSK-49の付近であり、SK-49出土遺物の可能性が高く、弥生時代中期後半から後期前半の間のものといえよう。類例として、比良遺跡第30次調査第18号井戸出土のものがある。

註、菅波正人氏より教示を受けた。

## 7. まとめ (Fig.271)

本調査区は那珂遺跡群の北西部の標高8m前後に位置し、標高7.5m前後の鳥栖ローム面で遺構を検出した。検出遺構として、弥生時代前期の貯蔵穴、同中期から後期初頭の甕棺墓・土塙墓・土壌・祭祀土壌、同終末期から古墳時代前半期の竪穴式住居址、古墳時代後期から古代(9C中頃)の井戸・掘立柱建物がある。ここでは弥生時代前期をI期、同中期から後期初頭をII期、同終末期から古墳時代前半期をIII期、古墳時代後期から古代をIV期とする。

I期: 13基の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は隅丸方形のもの4基(SK-51など)、隅丸方形に近い長方形のもの6基(SK-42など)、隅丸長方形のもの1基(SK-40)、円形のもの2基(SK-47・52)である。出土土器からみると夜臼式と板付I式共伴が7基(SK-45など)、板付II式単純が1基(SK-40)、板付II式と亀の甲式共伴のもの3基(SK-47など)となる。本調査区検出の貯蔵穴群は、前期前半から中頃のものが調査区南西部に集中し、前期後半から末にかけてのものは平面形が円形を呈し、前時期の周縁部に点在している。

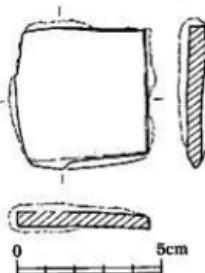


Fig. 270 採集鉄器実測図

二期：甕棺墓28基，土塘墓6基，甕棺墓基塘？

9基、溝状をなす土壤2基を検出した。甕棺墓の棺にはすべて甕形土器が用いられ、大形のものが多いが、中形のものを使っているものもある。甕は城之越式併行期のものが古く、桜馬場式併行期のものまである。波田式併行期のものを中期前半、須玖式を中期中葉、立岩式併行期を中期後半、立岩式併行期のものとくの字状口縁部をもつ甕が組合わさるものを中期末、桜馬場式併行期を後期初頭として位置づけた。中期前半は3基(SK-20など)、中期中葉は5基(SK-16など)、中期後半のものが多く11基(SK-21・26など)、続く中期末のもの5基(SK-6・17など)、後期初頭は2基(SK-14・24)、中期のもの2基(SK-25・28)と遺存している。SK-48はN-33°-E、SK-49はN-57°-Wの主軸方位をもち、直交関係にある。SK-48・49は中期後半に掘削され、後期前半までに使命を失っており、一連のもので墓地を区画し、祭祀を行なった土壤といえる。甕棺墓の主軸方位は一見規格性がないようにみえるが、中期後半および続く中期末のものは区画に

規制され、配置されていると考えられる。SK— Fig. 271 各時期違法分布図(1/1000)  
 21は朱が検出されたもので、区画の中央部を向き、他のものは外を向いている。この区画は墳丘墓の可能性が高いといえよう。

Ⅲ期：炉をもち隅丸方形を呈する堅穴式住居址13基を検出した。SC-64は5世紀初頭と考えられ、2本柱を主柱としており、他の住居址と異なっている。他の住居址は4・6本の主柱穴でベットをもち弥生時代終末期から古墳時代初頭のものである。弥生時代終末期のものが大半を占めている(SC-62・70・71など)。古墳時代初頭のSC-60・67は、臺・二重口縁壇など搬入系土器を含んでいる。

IV期：占墳時代後期の掘立柱建物1棟と土壙1基、井戸1基（SE-73）と古代の井戸3基（SE-55・56・61）が検出された。古代の出土遺物および遺構配置は、周辺地区に官衙が想定できる。

本調査区では各時期とも多大な成果を得た。なお、各時期の諸問題については結章で扱う。

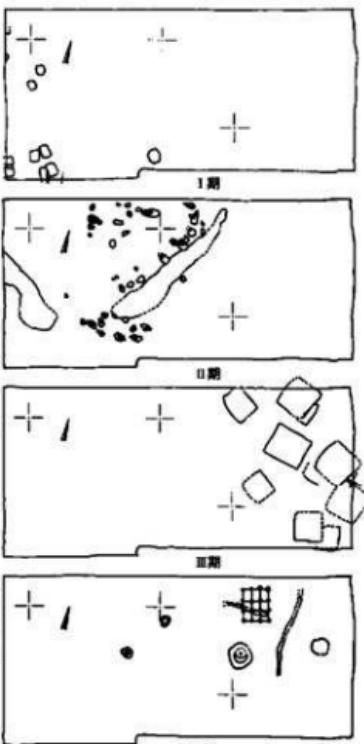


Fig. 271 各時期遺據分布圖(1/1000)

## 第9章 自然科学的分析

### 1. 赤色顔料について

福岡市埋蔵文化センター

本田光子

宮内庁正倉院事務所

成瀬正和

那珂遺跡第14・21次調査出土の復元式～板付I式期の丹塗磨研土器8点に用いられた赤色顔料と第21次調査SK-21出土の赤色顔料について顕微鏡観察とX線分析を行い、赤色顔料の種類と特徴を調べた。試料の一覧と分析結果および推定される赤色顔料の種類を第1表に示した。

#### 試料

土器の赤色塗彩の残りはその埋蔵環境に大きく左右されるが、焼成前塗彩である丹塗磨研土器は比較的影響を受けにくい。今回の土器8点は丹塗磨研の手法で赤彩されたものであるが、今見られる状態は少しづつ異なる。那珂第14次出土の6点がほぼ同じ埋蔵環境にあったものと仮定して観察すると、No.317・319・320・322とNo.318・321は表面の色・状態が違う。前者は暗い赤色で赤色顔料が厚く濃く残っている。後者は明るい赤色で赤色顔料は薄く、残りが悪い。前者は精製された胎土の鉢、小型壺で、後者は大型壺である。第21次調査のNo.308大型壺、No.309鉢は土器自身の残りが悪く、器面が荒れ赤色顔料は少量しか付着していない。No.309にはわずかであるが厚く濃く残っている部分（点）がある。

No.327は墓棺内出土であるが、土砂の中に点々と見える程度である。赤色物の凝集した部分を選び、土砂を分離した。

#### 顕微鏡観察

実体顕微鏡、光学顕微鏡により反射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。土器の赤彩に用いられる顔料や墳墓出土の赤色顔料はベンガラ（酸化第二鉄）と朱（硫酸水銀）であるが、両者は特に微粒のものが混在していかなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

No.317～322・308・309の土器資料は土器片をそのままで反射光により40～100倍で検鏡し、赤色顔料の有無、その種類、付着残存状態を観察した。赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作成し、透過光・反射光40～400倍で検鏡した。No.327も同様にプレパラートを作成し検鏡した。

#### 蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。土器資料は土器そのものを測定試料とした。No.327は検鏡試料の残りを研和し、測定試料とした。宮内庁正倉院事務所設置

の理学電機工業製蛍光 X 線分析装置を用い、X 線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10~65° の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

### X 線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機製文化財測定用 X 線回折装置を用い、X 線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4 mm、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30~66° の条件で行った。その他の条件は適宜設定した。土器資料は土器片そのものを測定試料とした。No.327は蛍光 X 線分析に用いたものと同一のものを試料板に付け試料とした。

### 結果

顕微鏡観察・X 線分析の結果とそれによって明らかとなつた顔料の種類を第1表に示す。

土器資料 No.317・319・320・322・309はベンガラ粒子からなるが、No.318・321・308には顕著なベンガラ粒子はわずかで、大半はいわゆる広義のベンガラと呼んでいる赤い土砂の粒子からなる。また、出土ベンガラにはいわゆるパイプ状粒子と呼ばれている管状粒子が含まれることがあるが、今回の試料には見いだせなかった。もっとも、今回の土器資料はいずれも焼成前塗彩であり、器面はかなり磨かれており、しかも焼けているので本来の粒子の形状を推定するのは難しい。

第1表 赤色顔料の分析結果

No.	試白	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	写真(遺物No.)
		鉄	水銀	赤鉄鉱	土砂			
317	第14次包含層出土土器	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 56 (1)
318	第14次包含層出土土器	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 56 (2)
319	第14次包含層出土土器	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 56 (3)
320	第14次包含層出土土器	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 56 (4)
321	第14次包含層出土上器	-	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 56 (5)
322	第14次包含層出土上器	-	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 56 (6)
308	第21次SK-51出土土器	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 18I(1146)
309	第21次SK-48出土土器	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 172(1002)
327	第21次SK-21出土赤色物	+	+	-	+	朱	朱	Fig. 210

\* + は検出、- は未検出を表す

墳墓出土の No.327は朱粒子からなり、ベンガラは認められなかった。朱粒子は最大径が約20~30ミクロン程度で、特に細かくはなかった。試料の土砂の分離作業が不充分であったので粒度分布の測定は行っていない。

蛍光 X 線分析では水銀および鉄の有無のみを表中に記した。赤色顔料の主成分元素としては327に鉄と水銀が、そのほかは鉄のみが検出された。このほか、マンガン、ストロンチウム、

ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として胎土部分に由来するものなので、省略した。ただし土器資料では鉄は胎土部分に必ず含まれ、採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものと区別は困難である。

X線回折では辰砂（Cinnabar 赤色硫化水銀）、赤鉄鉱（Hematite 酸化第二鉄）の有無のみについて記した。赤色顔料の主成分鉱物としては No.317・319・320・322に赤鉄鉱を、No.327に辰砂を同定した。この他、石英・長石などが確認されたが、それは主として胎土部分あるいは混入土砂に由来するものなので、やはり省略している。赤色顔料の付着量が少ないものについては、X線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合もあり、このような試料については最終的には検鏡結果と蛍光X線分析による水銀の有無から推定した。

#### 考察

##### 第14・21次調査出土土器

今回の資料はすべていわゆる丹塗磨研土器であるが、肉眼観察のとおり赤色塗彩の方法あるいは赤色顔料に差があるようと思われる。第14次出土の小型壺と鉢4点はX線回折で赤鉄鉱が同定され、検鏡結果でもベンガラがはっきり認められる。これに対し人型壺は赤鉄鉱は確認されず、検鏡によるベンガラも赤土に近い。第21次出土の2点は両者とも残りが悪く、赤鉄鉱は認められていない。ただし、検鏡によれば大型壺（308）は赤土に近く、鉢（309）ははっきりとベンガラ粒子からなる。試料器面の状態が悪いためにX線回折で赤鉄鉱が認められないものでも、顕微鏡的には赤色顔料が確認できることを示す。これは焼成後塗彩の土器では普通のことであり、縄文土器の赤色顔料では試料が少なすぎてX線回折により赤鉄鉱が認められなくても、ベンガラ粒子は必ず認められる。第14次出土のNo.318・321は第21次出土のNo.308と同じケースであり、No.308・318・321とそれ以外の土器の赤色塗彩の違いは、酸化第二鉄の含有量の差を示し、前者が低く、後者は高い。前者は酸化第二鉄含有量の少ない非結晶の褐鉄鉱を多く含むベンガラを用い、後者は赤鉄鉱の多いベンガラを用いたものと考えられる。この酸化鉄含有量の少ない明るい発色は純度の高いベンガラを使わないでも赤く焼くことができる技術ともいえよう。今回の結果をそのまま器種による差と受け止めるには資料数が少なすぎるが、今後はこの観点から試料を選定する必要があろう。

一般に縄文土器の赤色塗彩にはその当初からベンガラが使われ、朱（硫化水銀 HgS）は後期後半を中心比較的多く用いられている。晩期には「土器にはベンガラ、木器には朱」という赤色顔料使用についての規制が認められる地域があり、亀ヶ岡式土器の文化圏との関わりのなかで理解されてきた。今までの分析例によれば、北部九州地方では晩期前半まで朱とベンガラが同じように使われ、晩期後半以降にはベンガラが主流となる。今回はたまたま焼成前塗彩の丹塗磨研土器だけを分析したため当然赤色顔料としてはベンガラのみであった。漆器に用いられた赤色顔料を見ると、夜白式～板付I式期には朱（硫化水銀 HgS）とベンガラの両者が認め

られる。また、板付I～板付II式期の彩文土器でも両者が認められている。今後、縄文晩期後半から弥生時代初頭の焼成後塗彩の土器の赤色顔料（残りは良くないであろうが）をあらためて調査したい。

#### 第21次調査 SK-21の朱

北部九州地方にみられる壺棺墓内出土の赤色顔料は朱（硫化水銀 HgS）が主流であり、今回のSK-21出土赤色顔料も朱（硫化水銀 HgS）であった。最近、中期初頭の壺棺墓（小郡市北松尾口遺跡）から初めてベンガラを確認したが、これが時期・地域の問題なのかどうか資料数の増加が望まれるところである。

壺棺墓内出土の朱（硫化水銀 HgS）は時期によりその粒度が異なる。中期後半から後期初頭の壺棺墓出土朱はその細かさ・均一性において傑出している。今回の朱はこれから外れいる。

今後、土砂の分離、粒度分布の測定方法を検討し改めて調査したい。

#### 参考文献

- 金子裕之（1981）「特殊な木漆器－愛媛県船ヶ谷遺跡の場合」『月刊文化財』218
- 成瀬正和（1983）「長行遺跡出土の赤色塗彩土器について」『長行遺跡』船北九州市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- 本田光子（1986）「小型彩文壺形土器に用いられた赤色顔料について」『藤崎遺跡IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第138集
- 成瀬正和（1987）「四箇遺跡出土の赤彩上器について」『四箇周辺遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第172集
- 成瀬正和・本田光子・岡田文男（1991）「彩文土器木胎漆器の赤色顔料について」『比東遺跡群10』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第225集
- 本田光子・成瀬正和（1992）「十器の赤色塗彩に用いられた赤色顔料について」『比恵遺跡群11』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第289集
- 岡田文男（1992）「福岡市内出土の縄文晩期から古墳時代にかけて漆器の漆塗膜調査」『比恵遺跡群11』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第289集
- 本田光子・成瀬正和（1992）「土器の赤色塗彩に用いられた赤色顔料について」『脇山A遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書
- 本田光子（1992）「小郡市北松尾口遺跡出土の赤色顔料について」小郡市文化財調査報告書

## 2. 那珂遺跡群第14次調査によって得られた試料の花粉分析

北九州大学文学部 野井英明

那珂遺跡群第14次発掘調査区は、弥生時代前期から弥生時代後期にかけての遺跡である。本論では、その発掘調査の際に得られた試料の花粉分析によって、同遺跡立地点とその周辺の古環境の復元を試みた。

### 1 試料

那珂遺跡群第14次発掘調査区の土層は、阿蘇4火碎流堆積物の末端相である八女粘土層が形成する段丘の縁、または、この段丘上で八女粘土を削り込んだ凹地に堆積したものを主体とする。

花粉の抽出を試みた試料は、那珂遺跡群第14次調査区の北側壁から採取した12点と西側壁から採取した3点である。

花粉化石が検出された土層は西側壁から採取した3点であり(図1)、これら以外の試料からは花粉化石がまったく検出されないか、または、分析に十分な数の花粉化石が得られなかった。分析に十分な数の花粉化石が得られた3点の試料の岩層は、暗灰色粘質土(試料番号2・3)と黒色粘質土(試料番号1)である。これらの試料が得られた層準は、試料を採取した西側壁では詳細な土層区分が行われていないが、今回の発掘で検出された遺物包含層の最下部である板付1・突尖文土器包含層(第21層)より下位の無遺物層である第25層と第28層にあたると考えられる。したがって、今回の花粉分析によって、那珂第14次調査区において、同遺跡が立地する少し前の時代植生と古環境が推定できる。

### 2 分析法

花粉の抽出は、KOH法、 $ZnCl_2$ 飽和水溶液による比重分離、アセトリシス法を組み合わせた方法によって行った。同定は光学顕微鏡の400倍を用い、結果は、木本類を基数とする花粉ダイアグラム(図2)で示した。

### 3 結果

花粉分析によって、以下に示す花粉化石が得られた。

#### 木本類

*Pinus*(マツ属)、*Abies*(モミ属)、*Tsuga*(ツガ属)、*Alnus*(ハンノキ属)、*Carpinus*(シデ属)、*Lepidobalanus*(コナラ属)、*Cetis-Aphananthe*(エノキ・ムクノキ属)、*Mallotus*(アカメガシワ属)、*Myrica*(ヤマモモ属)、*Castanopsis*(シイノキ属)、*Cyclobalanopsis*(アカガシ属)、*Ligustrum*(ハイノキ属)、*Ilex*(モチノキ属)、*Elaeagnus*(グミ属)。



図1. 調査区西側壁土層断面概略  
図および花粉分析試料採取層準

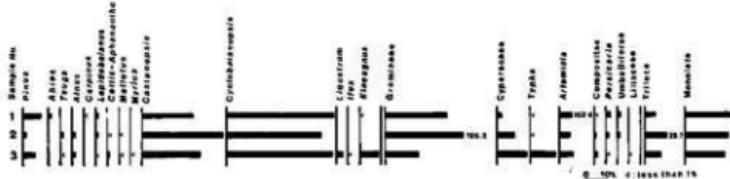


図2. 花粉ダイアグラム

### 草本類

Gramineae (イネ科)、Cyperaceae (カヤツリグサ科)、*Typha* (ガマ属)、*Artemisia* (ヨモギ属)、Other Compositae (その他のキク科)、*Persicaria* (クデ属)、Umbelliferae (セリ科)、Liliaceae (ユリ科)。

これらの花粉化石のなかで、木本類のうち高木類は3層準を通じて大きな変化はなく、アカガシ亞属とシノキ属で80%を占め優占する。これらのはかに、マツ属が数%ずつ出現し、これらの3分類群で木本類の90%近くを占める。草本類は、3層準で木本類(高木類)に比べると、大きな組成の変化がみられる。試料番号3では、イネ科・カヤツリグサ科・ガマ属・ヨモギ属が10ないし30%ずつ出現する。試料番号2では、イネ科が100%を越える高率で出現し優占するが、ガマ属は、ほとんど見られなくなる。試料番号3では、イネ科は、50%程度まで減少し、替わってヨモギ属が優占する。

### 4 考察

花粉化石組成から、本遺跡が立地する少し前の植生と環境は、以下のように推定することができる。

植生の中心となる森林植生は、3層準を通じて大きな変化はなく、シイ類と常緑のカシ類が主体をなす照葉樹林が、ほとんど人の手が入らないまま、本遺跡周辺地域の人部分を占めていた。

しかし、本遺跡の立地地点は、試料番号3の層準で、ガマ属・カヤツリグサ科がともに20%近くづつ出現し、堆積物が暗灰色粘質土であるところから、この時代は、常時、水に覆われた沼澤であったと考えられる。試料番号2の時代になるとガマ属がほとんどみられなくなり、カヤツリグサ科も減少することから、本遺跡の位置を覆っていた水面はなくなり、湿地化した。試料番号1の時代になると、本遺跡の位置の排水は、さらに良くなり、乾燥した土地に比較的多く生えるヨモギ類がみられるようになる。

このように、今回分析した3試料から、本遺跡の立地地点が、周辺が照葉樹の自然林で囲まれた沼澤地から、しだいに排水の良い比較的乾燥した土地に変化していく過程を読み取ることができる。本遺跡は、この沼澤地が干上がった後、人間が住み着いて形成されたものであると考えられる。

### 3. 金属器の保存処理

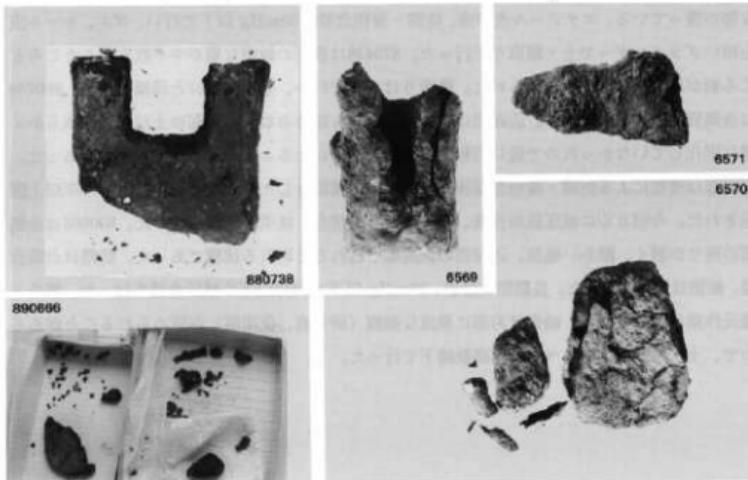
福岡市埋蔵文化センター 本田光子

第10・18・21次出土の鉄製品9点、銅製品4点の金属器について、調査報告・展示・収蔵を目的とした保存処理を行った。出土金属器は、表面からの観察のほかにX線による透視と錆も含めた材質の分析を経て、脱塩・錆取り・樹脂含浸の処理作業を行うのが理想であるが、実際にはさまざまな条件により限られた処理しかできない。今回は短期間に遺物の形状を明らかにすること、一部は展示・貸出に耐えること、長期間の密閉容器内収納が続けられることを当面の目的とした。作業の方針、処理工程を以下に述べる。処理遺物の一覧を第1表に示す。

#### 鉄製品

鉄製品は写真に示すように、おもに赤金鉱に起因すると思われる内部からの亀裂・表層剥離あるいは層状剥離の進行、砂や石を噛みこみ膨れ上がった硬い表層等に覆われている。このため、現状のままで表面の土・錆だけを落とすことはまず不可能なので、全点について合成樹脂を含浸させ遺物の強化後錆取り作業を行うことにした。土・錆取り作業中にナフサ蒸気の吸入を避けるため、樹脂含浸後の乾燥期間は長く置いた。錆取りは、刃部を出すなど「実測図が取れる」状態までを目安に行った。

洗浄（温湯あるいはアルコール）→乾燥→バラロイドNAD10の20%ナフサ溶液を70mmHg 2



金属器保存処理前状態

~3時間→昼夜浸漬→乾燥の工程を1~2回行った後グラインダー、エアーブレイシブ等を用いて土・鏽取りを行った。さらにもう一度前記の工程を繰り返し、アラルダイトラビッドで接合・復元した。補填にはアラルダイトラビッドにフェノール樹脂のマイクロバルーンを混ぜた物を用いた。補彩はリキテックスを用いた。

#### 銅製品

鋸先4点である。今のところ塩基性塩化銅は表面的には認められないが、原則として次のような工程でベンゾトリアゾールを用いた防錆処理を行い樹脂含浸をした。洗浄(エタノール)→ベンゾトリアゾール2~3%エタノール溶液の含浸2~3回→バラロイドB72アセトン・トルエン混合溶液の含浸→針・カッター・メス・グラインダー・エアーブレイシブを用い土・鏽取り後バラロイドB72の含浸1~2回。樹脂濃度は遺物の状態に合わせ、3~20%を用いた。接合はセメダインCを用い、補填にはセメダインCにフェノール樹脂のマイクロバルーンを混ぜて用いた。補彩はリキテックスを使用した。それぞれの遺物の残り具合は異なるので、それぞれの状態に見合う方法を選び処置を行った。

No890667は金属質がしっかり残り辺縁部の剥落もないが、表面を上と鏽が固化した硬い緻密な層が覆っている。エタノール洗浄後、防錆・樹脂含浸を30mmHg以下で行い、ゴム、セーム皮を用いグラインダーで土・鏽取りを行った。870428は表面の緻密な層がやや軟らかくところどころ剥がれ、脆い部分が認められた。鏽取りはメスで行い、他は890667と同様である。880738は金属質の残りはやや悪い。辺縁部は特に脆く亀裂も認められる。表面の土は比較的軟らかく鏽に固化していなかったので脆い辺縁部以外は筆、針によるエタノール洗浄で充分であった。辺縁部は塗布による防錆・樹脂含浸後、メスで土・鏽取りした。このままの状態で一年以上展示された。今回さらに減圧樹脂含浸、土・鏽取り、接合、補填・補彩を行った。890666は金属質の残りが悪く、細かい亀裂、辺縁部の剥落等で触れると崩れる状態であった。防錆は点滴含浸、樹脂は塗布含浸した。長期間乾燥後、20mmHg以下で30分以下の減圧含浸を行った。接合・復元作業は途中である。鋸先は刃部に垂直な擦痕(研ぎ痕、使用痕)が認められることがあるので、土・鏽取りはなるべく実体顕微鏡下で行った。

第1表 金属器保存処理一覧

	処理No.	器種	材質	図
第10次	870452	鎌	鉄	
	870426	鎌	鉄	
	870427	素材?	鉄	
	870428	鋸先	鋼	Fig. 8
第18次	880738	鋸先	鋼	[図8] 6 Fig. 1-25, K1
	8569	斧	鉄	[図8] 6 Fig. 1-7, K6
	8570	手斧	鉄	[図8] 6 Fig. 1-25, K4
	8571	鎌	鉄	[図8] 6 Fig. 1-25, K2
第21次	8572	鎌?	鉄	[図8] 6 Fig. 1-9, K17
	8573	素材	鉄	[図8] 6 Fig. 1-25, K3
第22次	890666	鋸先	鋼	Fig. 242, K21
	890667	鋸先	鋼	Fig. 242, K49
次	8749	手斧?	鉄	Fig. 270

## 第10章 結 章

### 1. 弥生時代初頭の土器

愛媛大学教養部 田崎 博之

本書で報告した那珂遺跡第10・14・21次調査では、貯蔵穴と考えられる土壤と谷地形に堆積した黒色の遺跡包含層から、弥生時代初頭前後の土器群が比較的まとまって出土した。那珂遺跡の北側に隣接して同じ台地上に営まれた比恵遺跡でも、古くは第3・4次調査、近年では第8・24~26・28・30・31次調査で該期の資料が増加している。そのなかで貯蔵穴出土の土器群には、比較的短い期間に投棄されたと考えられる状態で出土したもののが含まれる。また、貯蔵穴は造構の上半部分が削平され、後世の混入と考えられるものも極めて少ない。さらに出土量も多い。比較的安定度の高い良好な資料といえよう。

ここでは、こうした那珂・比恵遺跡の資料に板付遺跡の資料を加えて、壺を基準として①~④式の4つの小様式を設定・概観し、その編年的な位置付けを考える。

①式：板付遺跡 G-7 a・b 区上層の土器群を基準とする。

壺には如意形口縁をもつ壺 A と、繩文時代晩期後半の刻目凸帯文土器の系譜をひく壺 B に区分される。壺 A は如意形口縁がほとんど屈曲せず、胴部が底部へ向かってほぼ直線的にすぼまるものが基本である。他に胴部上半が直立気味で下半が直線的にすぼまるものが含まれるが、いずれも胴部のプロポーションは細身である。口唇全面にキザミを施すものがある。基本的に、口唇の正面から工具を押捺・押し引き・切り取るようにしてキザミを施す。一部、①式以前の「板付祖型壺」と呼ばれる直口縁の壺と同様に、斜上方から工具を押捺するものが含まれる。また、②式の壺 A のキザミと同じく、工具を口唇下端を中心として水平に動かして口唇全面にキザミを施すものがあるが、②式とくらべキザミは深く明瞭である。壺 A の成形手法は粘土の接合状態を観察できる資料が少ないので、粘土紐を巻き上げる手法と、幅広の粘土帯を積み上げる手法とが共存するようである。前者の手法がとられた例として、②式との共存資料である板付遺跡 E-5・6 区 7 層出土の壺 A がある。また、板付遺跡 G-7 a・b 区上層の壺 A のなかには口縁下に幅広の粘土を貼付する例があり、後者の手法の存在を示唆する。

壺 B には胴部上半が「く」字形に屈曲する壺 BI と、直口縁で直線的に胴部がすぼまる壺 B II がある。壺 A がなく壺 B のみで壺が構成されて、①式直前に位置付けられる板付遺跡史跡整備のための1991年度確認調査 I 地点 SC-01、同遺跡 G-7 a・b 区中層、E-5・6 区 8 層の土器群と比較すると、①式の壺 BI は胴部上半の屈曲が緩やかで上半部が立ってくる。壺 B II は胴部上半が若干ふくらみ、砲弾状に近いプロポーションとなる。壺 BI・B II とともに口縁部の凸帯は、口縁部には接して貼布される。キザミの切り込みは深くても凸帯の中ほどまで、

やや浅い。成形技法から粘土紐で作られたものと、粘土帯で作られたものがある。前者で成形されるものが多いようである。

壺 A と壺 B の比率は、壺 A が若干上まわる。

②式：那珂遺跡第21次調査 SK-45、比恵遺跡第26次調査 SC-50<sup>10</sup>からの出土土器を基準とする。①式との共存資料には前述の板付遺跡 E-5・6 区 7 層に加えて、那珂遺跡第10・14次調査の谷地形に堆積した黒色の遺物包含層、後述する③式との共存例としては、比恵遺跡第28次調査 SK-01・03 出土の土器群がある。

壺 A は如意形口縁がほとんど屈曲しないものに加え、典型的な如意形に屈曲するものと、口縁を整形する際に指頭で強く折り曲げるために内面に不明瞭な稜がつくものがみられる。胴部のプロポーションがほぼ直線的に底部へ向かいますばまるもの、胴部上半が直立気味で下半が直線的にすばまるものの 2 つがある。量的には後者が①式とくらべ多くなるが、前者を大きく上まわることはない。口唇部にキザミを施すものには、口唇の正面から施すものと、工具を水平に動かして口唇下端を中心として下半部に施すものがある。後者のキザミは大きく、外見上ほぼ前者と同様な効果をあげている。胴部外面の調整は①式と比較して、ハケメをナデ消すものが多い。しかし、ほとんどはナデが不充分で、ハケメが不明瞭ながら残る。成形手法は良好な資料が少なく不明確である。那珂遺跡第21次調査 SK-45 などで、胴部外面を横方向にハケメを施す例が少數あり、粘土紐で成形手法が②式の段階まで残ることを示している。

壺 B には、①式と同じく壺 B I と壺 B II がある。壺 B I は胴部上半がほとんど屈曲せず、ほぼ直線的にひろがる。比恵遺跡第28次調査の SK-03 の例はその典型であり、幅広の粘土帯を積み上げて成形されている。壺 B I ・ 壺 B II ともに凸帯は小形化し、キザミも浅く不明瞭なものが多い。

壺 A と壺 B の比率は、①式とくらべ壺 B が極端に少くなり、那珂・比恵遺跡とともに小破片の資料ばかりである。

③式：出土量は少ないが、比恵遺跡第8次調査の SK-102<sup>11</sup>の資料を基準としておく。量の不足は②式との共存例である那珂遺跡第21次調査の SK-47<sup>12</sup>や、④式と共に存する比恵遺跡第30次調査の SU-6・7・10・12・16・21・22 の資料で補っておく。

壺 A では典型化した如意形口縁をもつものと、口縁を強く折り曲げて内面に不明瞭な稜をもつものがほとんどである。①・②式にみられた屈曲が目立たないものもあるが、量はきわめて少ない。胴部の形状は②式とほとんど変わらないが、胴部下半がわずかにふくらみ、①・②式とくらべ比較的安定感のあるプロポーションをもつものが少量ながらみられる。口唇部にキザミを施すものには口唇の下半に大きなキザミをつけたものと、口唇下端に密に施すものがある。比率的には後者が多い。口唇全面にキザミをつけるものもあるが、I・II 式のものとくらべ、浅く小さく、間隔も一定しない。胴部外面の調整はハケメの後に軽くナデを施すものや、

ハケメを施したまま仕上げたものが圧倒的に多い。成形時の粘土の接合を観察できるものはすべて粘土帯成形で、粘土帯を2~3段積み上げて縦方向にハケメを動かして器面を整え、その上部にふたたび1~2段の粘土帯を積み器面調整を繰り返すという工程で成形されている。こうした工程で甕を作る手法は、後述する④式を含めて、北部九州地方の弥生時代に普遍的に用いられている。こうした手法の確立は縦方向のハケメが登場する①式まで遡る可能性が強いが、一般化するのは③式の段階と考えてよさそうである。

甕Bは②式よりさらに出土量が少くなり、甕全体の数%を占める程度であり、甕Aが甕の主体となる。那珂遺跡と比恵遺跡の③式の甕Bは破片資料のみであるが、①・②式でみられた甕B I・甕B IIという区分は解消される。砲弾形に近い洞部をもつと考えられ、口縁端に接して細く小さな凸帯を巡らせる。また、胴部上半にも凸帯を貼布する。凸帯にはキザミが施されるが、浅く不明瞭なキザミである。胴部外面はナデ仕上げされることが多い。①・②式の甕Bとは同一系譜上にあるとはい、同じ範囲でとらえるには無理がある。

④式：那珂遺跡第14次調査SK-01<sup>11</sup>、比恵遺跡第30次調査SU-17・25<sup>12</sup>から出土した土器群を指標とする。

甕Aには定型化した如意形口縁をもつものが圧倒的に多く、口縁を整形する時に指頭で強く折り曲げたものが続く、胴部下半のふくらみが目立ち、口縁直下がわずかにくびれるものがあらわれる。口唇部にキザミをもつものは、ほとんどが下端にヘラ状工具で施される。キザミは①~③式とくらべ小さい。

甕Bは破片資料だけであるが、砲弾形もしくは口縁部付近が若干すぼまる丸みを帯びたプロボーションをもつものと考えられる。口縁部凸帯は③式とくらべて大形となるが、キザミは同様に浅く小さい。胴部にも凸帯が貼付されるが、キザミをもたないもの、2条の凸帯を巡らすものがみられる。胴部外面の調整はハケメの後にナデを行うものがほとんどであるが、ナデが不充分でハケメが不明瞭ながら観察できる。

甕Aと甕Bの比率は③式とくらべ甕Bが若干増加するが、甕全体の10%を起えることはない。

以上、甕を中心として①~④式の4つの小様式を設定したが、それぞれの遺構での共存関係から①→②→③→④式（古→新）の時間的に連続した先後関係を確認できる。また、④式を含み直統する土器群として、比恵遺跡第25次調査7~2層の資料をあげることができる。この資料は、かつて筆者が設定した板付II式新段階～須玖I式古段階（弥生時代前期末～中期初頭）を主体とする。これに先行する③・④式は甕Aを指標とすれば、森貞次郎氏が1952~1924年の板付遺跡の調査成果により設定された板付II式の範囲でとらえられ、③式は筆者の板付II式古段階、④式は板付II式中段階とできる。また、③・④式の甕Bはかつて「亀の甲タイプ」と呼ばれていた甕である。分布の中心は佐賀・筑後平野から中部九州地方にあり、福岡平野では出

土量は少ない。しかし、壺Aとともに弥生時代前期土器を構成しており、別様式として設定せず、壺Aと系譜を異にするものとして板付II式の範疇に入れておきたい。

問題となるのは①～②式の位置付けである。壺Aを見ると、口縁部や肩部の形状、キザミの施し方からほとんどは森氏の板付I式でとらえられる。しかし、②式の一部には板付II式的な要素を具えたものが含まれる。これをもって②式を板付II式の範疇でとらえるべきとの考え方もある。ただし、森氏は壺との対応をはかっていないが板付I式の精製小壺に新古の別があるとしている。それと対応する壺として、①・②式の壺Aを考えてよいのではないだろうか。また、壺Bは森氏の設定した夜臼式の壺にあたる。しかし、一定の時間幅をもち共存する2者の壺を対しておのの様式として扱うことは混乱を招く。そこで夜臼式の様式名を壺Aが登場する以前の刻目凸帯文土器單純期に限定して用い、前述した板付II式での2つの異なる系譜をひく壺Aと壺Bという捉え方と同様に考え、①・②式を板付I式の範疇とし、①式をその古段階、②式を新段階とする。

那珂遺跡と比恵遺跡に板付遺跡の資料を加えて、壺を基準として4つの小様式を設定し、板付I式古段階と新段階、板付II式古段階と中段階に位置付けられることを述べた。ただし、時間と紙面の都合により、他の器種の細かな区分について触れることができなかった。別稿でこれを補いたい。

小稿を草するにあたり、二宮忠司、山口謙治、吉留秀敏、菅波正人の諸氏からご教示をいただきました。記して感謝いたします。

(注)

- (1)山崎純男 1980『弥生文化成立期における土器の編年的研究』『鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢』
- (2)山口謙治編 1980『板付』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第73集)
- (3)1990年福岡市教育委員会調査実施。二宮忠司氏の教示による
- (4)本書に報告
- (5)吉留秀敏編 1991『比恵遺跡群(10)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第255集)
- (6)本書に報告
- (7)(5)と同じ
- (8)柳沢一男編 1985『比恵遺跡第8次調査概要』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第116集)
- (9)本書に報告
- (10)菅波正人編 1992『比恵遺跡群(11)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第289集)
- (11)本書に報告
- (12)(3)と同じ
- (13)(6)と同じ
- (14)田崎博之 1988「土器と集団(一)」『九州大学文学部九州文化史研究所紀要』第33号
- (15)森貞次郎・岡崎敬 1961『福岡県板付遺跡』『日本農耕文化の生成』
- (16)森貞次郎 1966『北九州』『日本の考古学』

## 2. 福岡平野における首長系譜について

吉留 秀敏

今回報告した剣塚北古墳は、近世初期以前に埴丘の削平を受けていたため、その存在は記録や伝承がなく、まったく新たな発見となった。復元すると比較的小規模な前方後円墳であることが判明した。既に埴丘や主体部を失っており、周溝の一部とそこから出土した埴輪だけが唯一の資料である。とはいっても、福岡平野において前方後円（方）墳は古墳時代全期間を通じて23基しか確認されていない。小規模ではあるが前方後円墳は各地域の首長層を中心とした階層に採用されたとみられており、この発見を軽視することはできない。ここでは、剣塚北古墳の発見を通じて表出した幾つかの問題のうち、本地域の首長墓系譜を再検討してみたい。

那珂川、御笠川流域の狭義の福岡平野は、低平な丘陵地帯を含めると約100㎢の面積がある。前方後円（方）には埴丘全長が30m以下のものが約10基ある。また、この地域で最大規模の古墳は45~80mのものであり、現在9基を数える。これが福岡平野における首長の系譜を示していると考えられる。さてこれらを詳細にみると、その分布状態から三群5小グループに区分される。三群とは福岡市博多区を中心とする那珂川下流域と、福岡市南区、春日市、那珂川町の那珂川上流域、そして福岡市博多区から太宰府市にかけての御笠川東岸である。また、那珂川下流域は博多グループと那珂グループに、同上流域は東岸と西岸に小区分される。

博多グループには前1期に方墳である博多1号墳（20m）、前3期に埴輪をもつ博多1号墳（56m+）がある。このグループには他にも埴輪をもつ古墳の存在が予測される。

那珂グループは前1期の那珂八幡古墳（84m）、前3~4期の井尻B1号墳（18m+）、前4~後1期の剣塚北古墳（30m+）、後1~2期の東光寺剣塚古墳（75m）がある。このグループでは前3期~後1期にかけて、他にも2~3基の古墳の存在が予測されている。

那珂川西岸グループは前1期の前方後方墳である妙法寺2号墳（18m）、前2期の卯内尺古墳（54m+）、前2~3期の老司古墳（75~76m）、後1期の小丸1号墳（25m）がある。他に横穴式石室をもつ浦ノ田4号墳（40m+）、妙法寺1号墳（24m）、大万寺前古墳（24m）、小丸2号墳などがあるが、時期は明確でない。また、大型円墳では後3期の穴観音古墳（28m）がある。

那珂川東岸グループでは前1期の須玖御腰古墳（30m）、前2期の安徳大塚古墳（64m）、前4期の貝徳寺古墳（47m）、後1期の日拝塚古墳（47m）、後2期の下白水大塚古墳（40m+）、中原1群1号墳（24m）がある。他に横穴式石室をもつ竹ヶ本古墳（22m）、上白水天神山古墳（35m）、塙原1号墳（37m）などがあるが、時期は明確でない。

御笠川東岸グループには既に消滅した古墳が多い。前1期の赤坂山支群（？）、その後は大型円墳となり、前3期の笹原古墳（28m）、前4期の成屋形3号墳（35m+）、後3期の今里不動古墳（30m）がある。なお、大型円墳の丸山古墳、成屋形古墳は、規模、時期が明確でない。

このように、近年の調査を通じて、各グループごとの古墳分布と編年的序列を知ることができるようになった。この中でも博多グループと那珂グループの多くの古墳は、ここ5年間の調査による発見であり、福岡平野の首長系譜を考える上で重要な成果となった。福岡平野では古墳時代以降の開発が著しく、古く墳丘を失ったものが多い。今後も新たな古墳の発見が予測される。そうした点を留意しながら各グループの動きを再度確認したい。

まず、各小グループごとに規模の大小はあるものの一時期1基ずつ系譜が辿れる可能性が高い。また、後2期以降に那珂川東岸・西岸グループではおそらく同時期に複数の前方後円墳の築造がみられる。御笠川東岸では前3期、他では後3期に前方後円墳の築造はなくなり、大型円墳にかわる。こうしたグループでは特に埴輪にも差異を認めることができる。たとえば那珂グループでは5世紀中葉から二次調整構ハケを多用し、那珂川東岸ではそれはない。こうした点は、それは背景とする工人集団とそれに関わる首長の差を示すと考えている。

最大規模の古墳は各時期にはほぼ1基あり、御笠川東岸を除く小グループ間を移動している。まず前1期は那珂八幡（那珂）、前2期は安徳大塚（東岸）から卯内尺（西岸）、前2～3期の老司（西岸）、前3期には博多1号（博多）、前4期には貝徳寺（東岸）、後1期には日拝塚（東岸）、後1～2期の東光寺剣塚（那珂）、後2期には下白水大塚（東岸）と変遷する〔〔〕内はグループ名〕。この他に浦ノ田4号（西岸）と今回発見した剣塚北（那珂）がこの系譜に含まれる可能性がある。本地域の系譜を通して各々の変動が大きく、一グループに三代以上連続して築造されることはない。いわば輪番的な首長系譜を示す。そのなかで特筆すべき特色は老司古墳における初期横穴式石室の採用であろう。これ以降、本地域は他に先がけて横穴式石室を使用している。墳丘規模は最初の那珂八幡古墳を除くと、老司古墳と東光寺剣塚古墳にピークがある。

さて、都出比呂志は京都市桂川流域の首長系譜の分析を通じて、各地域の首長権の移動が大王権力周辺の政治的変動に対応するものと論じた（『古墳時代首長系譜の継続と断絶』『待兼山論叢』22（1988））。その中で全国的な画期として5世紀前葉、5世紀後葉、6世紀前葉の時期を示している。極めて示唆的な研究であるが、本地域に対応させる検討は紙数の都合もあり、ここでは保留しておく。

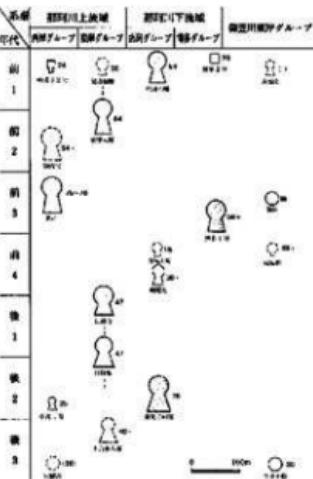


Fig. 273 福岡平野の首長墓系譜

### 3. アサヒビル工場内遺跡の調査から

山口 譲治

那珂遺跡群第10~12・14~17・21次調査（以下、第〇次とする）を1987年度から3ヶ年度にわたって実施した。調査実施総面積は13,451.7m<sup>2</sup>である〔重要遺跡確認調査として実施した東光寺剣塚古墳（第15次）の約8,800m<sup>2</sup>を含む〕。那珂遺跡群の北西部に位置するアサヒビル工場内の8ヶ所の調査および試掘調査で、弥生時代から中世の各時期の遺構が検出でき、多種多様な遺物が出土するとともに那珂台地北西部の開析谷の拡がりを復元できることができ、多大なる成果を得た。

第10・14次から那珂台地の西隣がわかるとともに、西台地隣から谷部に弥生時代前期前半から古墳時代後期後半にかけての遺物包含層が堆積した後、古墳時代の6世紀末頃から大規模な整地が実施され、中世になると西台地隣の整地掘削が行なわれ、谷部に水田が営まれたことがわかった。また、第21次検出の遺構遺存状態および試掘調査から、第10・17次の間に東光寺剣塚古墳前方部墳丘端から西約40mに達する深い開析谷があることがわかるとともに、第21次調査区は西に大きく張り出した丘陵の南部に位置していることがわかった。第10・21次間の谷の南北幅は25~30mか。

以下、弥生時代前期から中期前半、弥生時代中期後半から後期前半、弥生時代後期後半から古墳時代前半期、古墳時代後半期から古代に分け、各時期の様相について調査成果から述べていくこととする。

#### 1) 弥生時代前期前半から中期前半

第10次の南部と第14次の北西部で前期前半（田崎の板付I式土器新段階）の遺物包含層、第21次で前期前半から前期末（田崎の板付I式土器新段階から板付II式土器新段階）の貯蔵穴13基、第14次で前期後半の貯蔵穴1基を検出した。遺物包含層は前期前半の単純層で、台地隣では鳥糞ローム層上に堆積しており谷部では10cm前後の厚さをもち、ほぼ水平の層をなし地山である八女粘土層の80cm上に堆積している。谷部ではこの時期の包含層の上35cmに弥生時代中期後半の包含層が堆積しているが、この間および八女粘土層との間は無遺物層で、他時期遺物包含層は検出できなかった。前期前半の包含層は水田耕土の可能性があるが、畦畔・水路・耕土上面の足跡がなく、下層上面に鉄分の沈澱がみられないことなどから水田址とはいえないだろう。出土土器については、田崎の論稿（本章1）を参照していただきたい。

那珂遺跡および同一台地上に所在する比恵遺跡で本格的に人の居住を示す遺構・遺物が検出できるのは、第21次のSK-45など7基の貯蔵穴群、第10・14次の遺物包含層の前期前半の時期からである。同時期の遺物は、他調査では那珂第5次、比恵遺跡第3・4・12・24~26・30次で出土しており、遺構は比恵第26次の堅穴式住居址（SC-50）と貯蔵穴がある。続く前期後

半の遺物は、前述調査区のほかに那珂第4・23・31次、比恵第8次で出土しており、遺構としては、那珂第23次、比恵第3・4・8・30・31次で貯蔵穴、那珂第4・31次、比恵第8次で壇棺墓・木棺墓がある。

那珂・比恵での人の居住は、比恵の北端部、那珂の西縁部・東縁部の開折谷に沿った部分で前期前半の新段階に始まり、台地際に沿って拡がったことがわかる。那珂第4・31次周辺は中期前半までの墓地と考えられ、比恵第8次周辺も同様の時期の墓地と考えられる。しかし、中期前半から始まる那珂第15・16・21次、比恵第4・6・16次の墓地は弥生時代後期初頭までの壇棺墓を主体とする墓地群で、中期前半までの墓地群と性格を異にすると考えられる。

## 2) 弥生時代中期後半から後期前半

第11次で井戸1基、第14次で井戸2基(SE-05・06)、第15次で壇棺墓8基(中期前半を含む)と竪穴式住居址、第16次で壇棺墓35基、木棺・土墳墓14基、祭祀土壤1基(SK-53)からなる墓地を検出した。また、第21次では壇棺墓28基(中期前半を含む)、壇棺墓草塙?9基、土墳墓6基、祭祀土壤2基(SK-48・49)からなる墓地を検出し、この墓地は方形区画をなす墳丘墓と考えられる。ここでは壇棺墓を主体とする墓地に視点をあて、壇棺・墳丘墓について述べ、本時期の那珂・比恵遺跡の様相をみていくことにする。

壇棺墓は、第15・21次調査で中期前半のものがある、後期初頭まで連続した墓地群に所在していることからここで扱うこととする。壇棺は、城之越式併行期(横口編年のKIIa式)のもの(第21次SK-22上葉)、波田式(KIIb式)および併行期のもの(第21次SK-20など)を中期前葉、須玖式(KIIIa式)および併行期のものを中期中葉、立岩式(KIIb式)および併行期のもの(第16次SK-28、第21次SK-27など)を中期後葉、中期後葉から後期への過渡的なもの(KIIIc式)とくの字状口縁の直下に三角凸帯を巡らし、胸部最大径が胴上半部にある壇と組合さるもの(第16次SK-40、第21次SK-17など)を中期末、桜馬場式併行期(KIVa式)のもの(第16次SK-25、第21次SK-14など)を後期初頭とした(Fig. 274)。第15次は中期前葉2基、同後葉6基、第16次は中期後葉21基、同末11基、後期初頭2基、不明1基、第21次は中期前葉3基、同中葉5基、同後葉11基、同末5基、後期初頭2基、不明2基である。

第21次検出の墳丘墓は、長軸26.5m(30m)、幅3.5m、深さ2m前後の規模をもちN-33°-

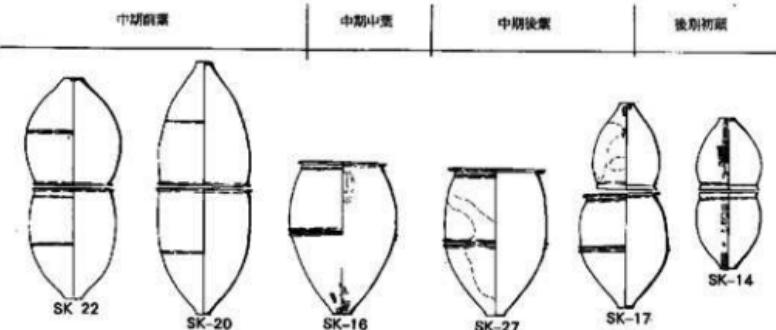


Fig. 274 第21次調査検出壇棺変遷図

E の方位をとり溝状をなす祭祀土壙 (SK-48) と直交する SK-49などの溝状をなす土壙によって一辺35m前後を測る方形区画をなし、甕棺墓の遺存状態から1.5m前後（検出面から2.5m前後）の墳丘をもっていたと考えられる (Fig. 275)。墳丘墓とした根拠は、SK-21が方形区画の中央部に位置し棺内に朱をもっていること、SK-48の上場付近に位置する墓の遺存が比較的良いのに比べ、中央部の墓の遺存が悪いこと、SK-48・49の堆積土層が区画内からの流土と考えられること (Fig. 221・235)、SK-21は中央に向かって埋置されているのに比較し、SK-08・15・17・26・27・39などが外に向かって埋置されていること、区画内に弥生時代後期後半から古墳時代の生遺構が検出できることなどがあげられる。本墳丘墓は、SK-48・49の山土器および区画内甕棺墓の配置から中期中葉から後葉の過渡期に築造され、後期初頭にかけて一定階級の人が埋葬されたと考えられる。墳丘墓内には20～30人の甕棺墓を主体とする棺に埋葬されたと考えられる。また、墳丘築造前には中期前葉から中葉にかけての墓があり、中期末から後期初頭にかけての墓が区画からはみ出した状態で位置している。この墓地は、一定階級の地縁、血族集団の墓地といえよう。

第15・16次検出の甕棺墓は一連のもので、30基前後で構成される数支群がまとまり、東西約30m、南北約100mの拡張をもつ中期前半から後期にかけての大墓地と考えられる。第21次検出の甕棺墓がすべて壺と壺の組合せであるに比較し、第15・16次は鉢・広口壺・瓢形土器など組合せ方が多様であり、第16次 SK-09・20のような土器蓋土壙などもある。第15・16次の墓地は、より一般的な集団墓地といえよう。

那珂・比恵遺跡では、ほかに墓地は那珂第4・31次周辺のもの、比恵第6・16次周辺のもの、比恵第8次のもの、比恵第4次のものがある。那珂第4・31次周辺のもの、比恵第8次のものは前期末から中期前半の墓地で、比恵第6次周辺のもの、比恵第4次のものは那珂第21次の墓地と同じ性格をもつと考えられる。

第21次では、墓地に対する祭祀がSK-48で良好な形で検出できた。B群でみると、筒形器台1個、甕2個、広口壺3個、瓢形土器1個、袋状口縁壺1個、短頸壺1個、高壺4個からなり、壺・短頸壺各1個を除きすべて丹を塗布し、筒形器台・壺・広口壺・高壺各1個には暗文が施文されている。このセット関係はA・C群も共通している。第16次のSK-53でも筒形器台と甕が出土しており、墓地祭祀と考えられるがいずれも破片である。三輪町栗田遺跡では筒形器

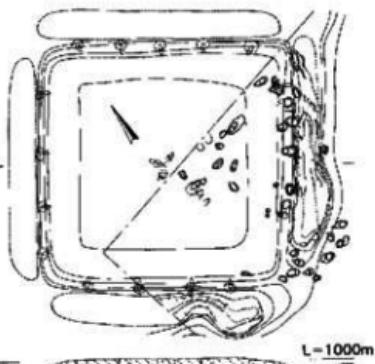


Fig. 275 第21次調査検出墳丘墓模式図(1/8)

台・広口壺・無頸壺・高杯・壺などが、墓地祭祀として使用されている。第21次のものは、溝状をなす土壙の3ヶ所前後に土器のセットを置いたと考えられるのに比較し、栗田遺跡は、壺・棺墓の墓塚や墓塚の近くに不整形の土壙を掘り、筒形器台と広口壺を数個配置したのち、土器を破碎して入れていると考えられるが、祭祀場所・祭祀セットが異なり、筒形器台・壺・広口壺・高杯と特殊土器を使用する共通点がある。祭祀行為・セット関係が異なることは、時期差・地域差・埋葬者集団の差なのかは今後の課題といえよう。

本時期の堅穴式住居址は那珂第8次・比恵第17次で検出されているにすぎないが、井戸は那珂第13・34次など、比恵第6・7・9次など各調査区で検出されており、集落は那珂・比恵台地全域に拡がっていたと考えられる。また、那珂第20・23次検出の溝は台地を縦断しており、200m以上の長さをもち、比恵第15次検出の溝は台地を縦断しており、50m以上の長さをもつことが確認されている。溝の横断面形が逆台形を呈し、遺存状態から3m以上の幅をもち、深い環溝の一部であると考えられ、本時期から環溝集落が形成されたといえよう。

### 3) 弥生時代後期後半から古墳時代前半期

第10次で弥生時代後期後半の井戸2基、第12次で古墳時代初頭の井戸1基、第14次で後期後半の井戸3基、第15・16次で古墳時代初頭の溝1条、第21次で終末期から5世紀初頭の堅穴式住居址13基を検出した。第12・16・21次の井戸・溝・堅穴式住居址からは、在地系土器に混じって比較的まとまった移入土器が出土した。第16次山土のものが五様式系・庄内式系で、ほかは布留式系のものである。第16次SD-37→第12次井戸・第12次SC-60→第21次SC-67の順となろう。

那珂・比恵遺跡群は、弥生時代中期後半から成長し、同終末期から古墳時代初頭に福岡平野の一大拠点となったといえる。本調査検出遺構・出土遺物はそれを証左するものであるといえよう。

### 4) 古墳時代後半期から古代 (Fig. 272)

古墳時代後半期の遺構として、第10次で掘立柱建物(以下、建物)7棟・土壙・溝、第14次で堅穴式住居址7基、第21次で井戸を1基検出し、第15・17次で2基の前方後円墳を確認した(本章2参照)。第10次の建物群・溝、第14次の住居址群は6世紀後半から7世紀前半のもので、前者は豪族居館と推定でき、集落復元の参考となろう。

古代の遺構として、第10次で溝、第14次で建物と井戸、第16次で溝、第21次で建物・井戸・溝を検出した。第14次SB-15・17はほぼ真北の方位をとる8世紀後半の建物で、第10次SD-04に区画されている。第14次SB-16、第21次SB-79、第16次SB-50は前者区画に先行するといえよう。第14次SE-07、第21次SE-61の出土遺物を考慮すると、律令官人の居住を推定できる。

第8・16次検出溝は官衙を区画すると考えられ、那珂郡衙との関連は今後の課題といえよう。

# 図 版



1) 第10次調査全景（南から）



2) 第20号掘立柱建物検出状況（東から）

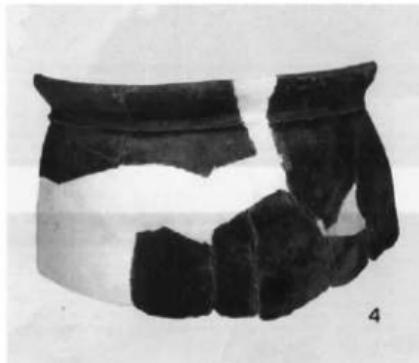
PL. 2



1) 第11次調査検出井戸（東から）



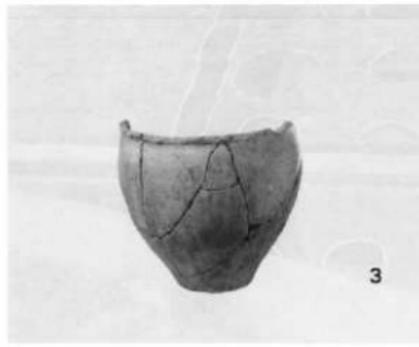
6



4



8

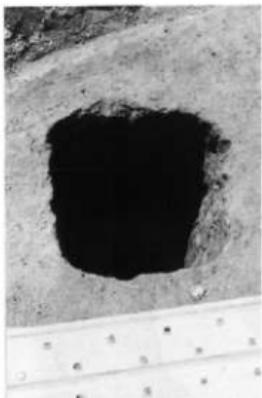


3



5

2) 井戸出土土器



1) 第12次調査検出井戸



2) 井戸土層断面および土器出土状態



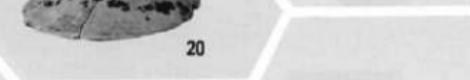
15



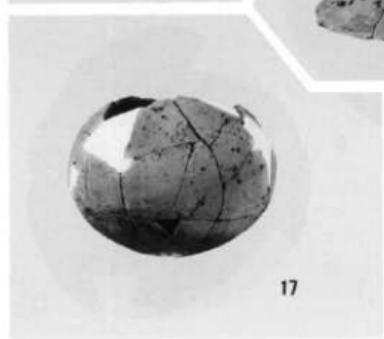
13



4



20

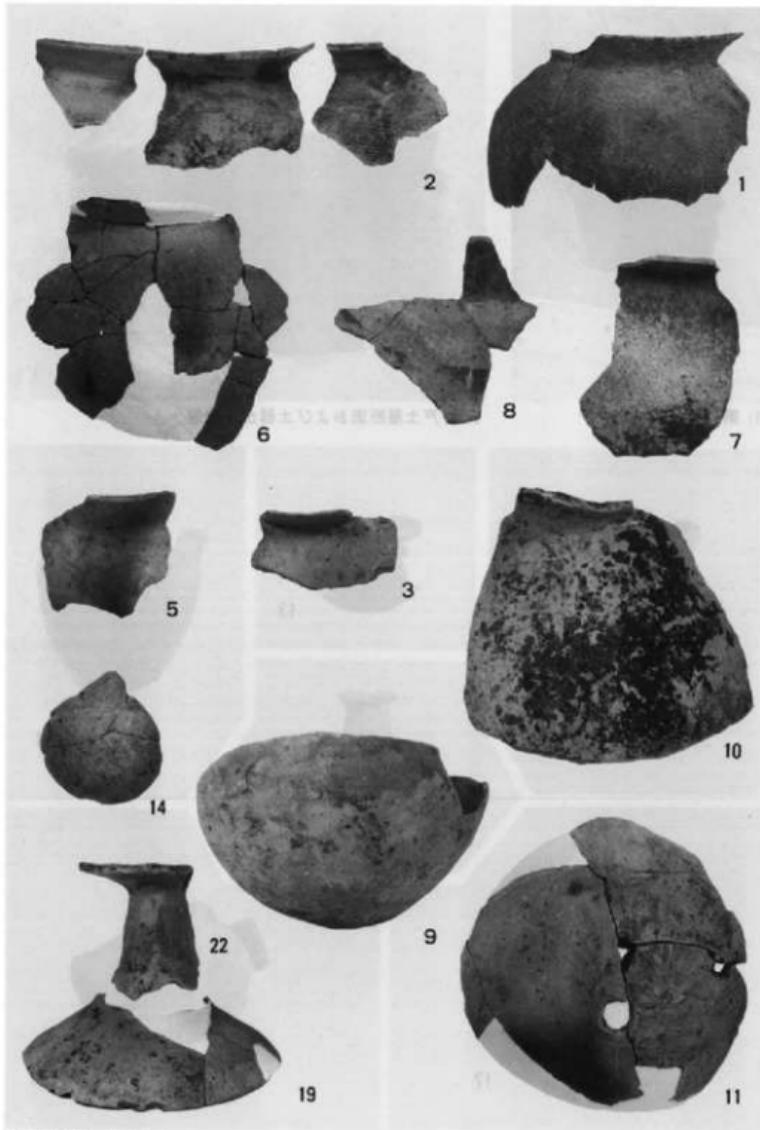


17

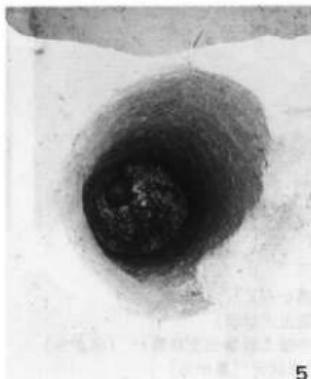


16

3) 井戸出土土器(1)



1) 井戸出土土器(2)



1) 第14次調査区全景（西から）

2) 調査区全景（西から）

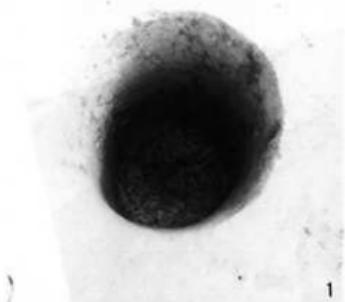
3) 調査区全景（東から）

4) SE-03（西から）

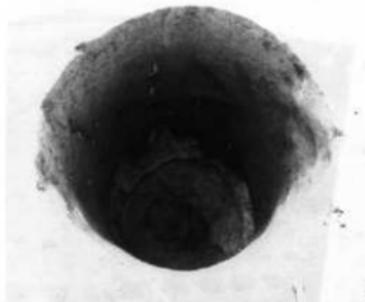
5) SE-04（東から）

5

PL. 6



1



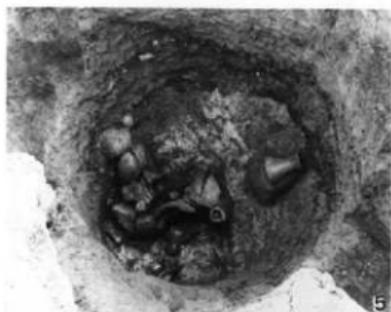
2



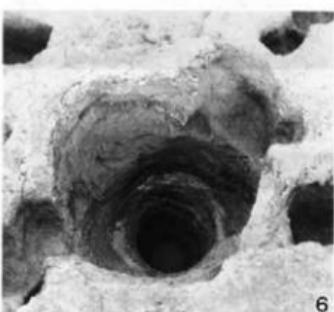
3



4



5



6

- 1) SE-05
- 2) SE-06
- 3) SE-07 (西から)
- 4) SE-07 (発出土状況) (北から)
- 5) SE-19 (中部土器群出土状況) (北から)
- 6) SE-19 完掘状況 (東から)



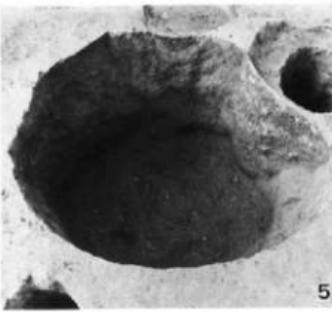
2



3



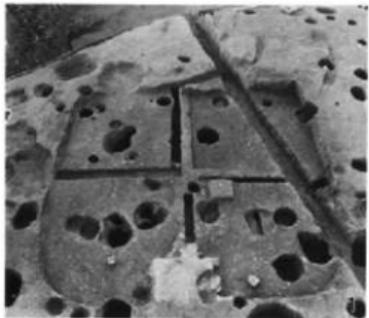
4



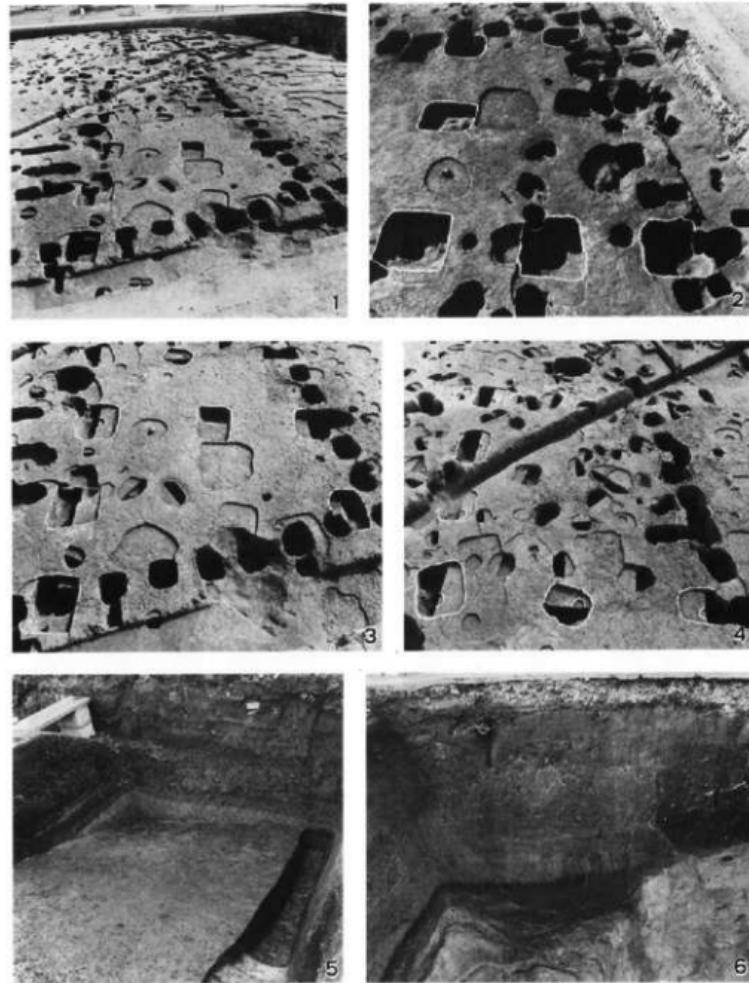
5

- 1) SK-01 (西から)
- 2) SK-01 遺物出土状態 (東から)
- 3) SK-01 土層 (西から)
- 4) SK-08 (南から)
- 5) SK-08 完掘状況 (南から)

PL. 8



- 1) SC-09 (西から)
- 2) SC-09 カマド (西から)
- 3) SC-20 (西から)
- 4) SC-20 カマド (北から)
- 5) SC-20~25 (南から)



- 1) SB-15・16 (北から)
- 2) SB-15 (東から)
- 3) SB-15 (北から)
- 4) SB-16 (北から)
- 5) 調査区北側包含層 (東から)
- 6) 調査区北側包含層 (南から)

PL. 10



4



5



6

1) 第16次調査区全景（北から）  
2) 調査区北半（北から）  
3) 調査区9区（北から）

4) 調査区全景（南から）  
5) 調査区南半（南から）  
6) 作業風景



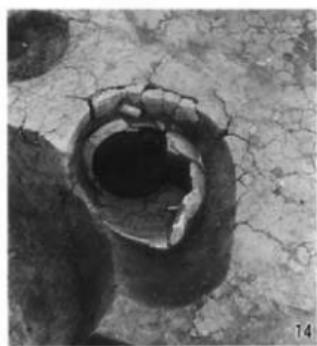
7)SK-01 (東から)  
8)SK-03 (北から)  
9)SK-04 (北西から)  
10)SK-05 (北西から)  
11)SK-06 (東から)



12



13



14



15



16



17

12) SK-07 (北東から)

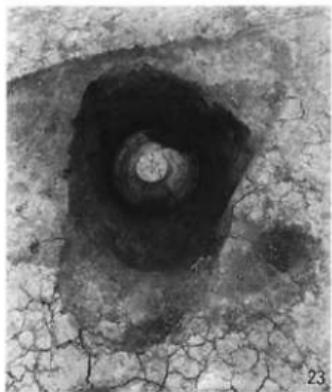
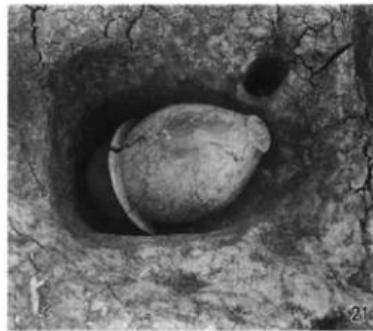
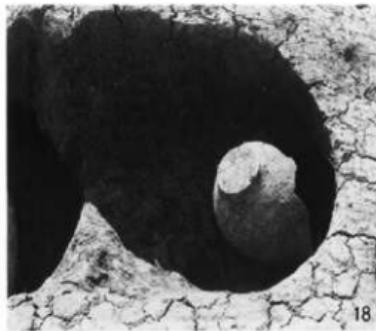
13) SK-07 (南から)

14) SK-08 (東から)

15) SK-09 (南から)

16) SK-10 (東から)

17) SK-11 (東から)



18 SK-19 (北から)

19 SK-20 (北西から)

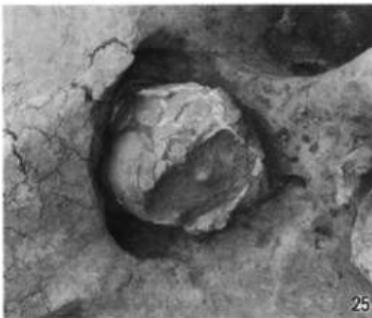
20 SK-20 (北西から)

21 SK-21 (南東から)

22 SK-22 (北から)

23 SK-24 (北から)

PL. 14



24 SK-25 (西から)

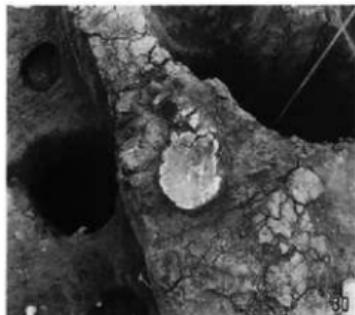
25 SK-25 (西から)

26 SK-26 (西から)

27 SK-27 (西から)

28 SK-28 (南から)

29 SK-28 (西から)



30



31



32



33



34



35

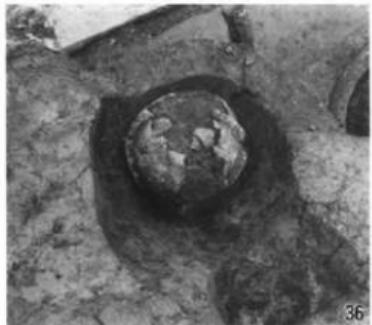
30 SK-29 (北から)

31 (右) SK-30 (東から)  
(左) SK-31

32 SK-33 遺物出土状態 (南から)

33 SK-33 (北から)

34 SK-34 (北東から)  
35 SK-35 (東から)



36



37



38



39



40



41

36 SK-36 (東から)

37 SK-38 (北西から)

38 SK-39 (東から)

39 SK-40 (東から)

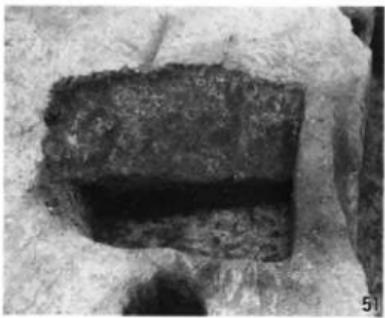
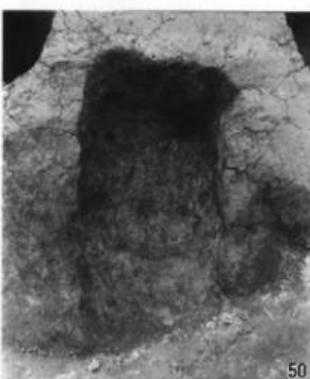
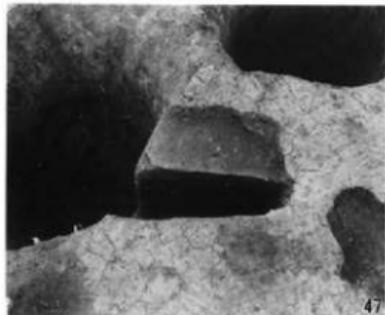
40 SK-41 (北から)

41 SK-42 (西から)



42 SK-43 (南から)  
43 SK-44 (北東から)  
44 SK-12 (西から)  
45 SK-12 土層 (北から)  
46 SK-12 完掘状況 (北から)





47 SK-13 土層断面（南から）

48 SK-13 完掘状況（東から）

49 SK-14 土層断面（西から）

50 SK-14 完掘状況（北から）

51 SK-15 土層断面（北から）

52 SK-15 完掘状況（東から）



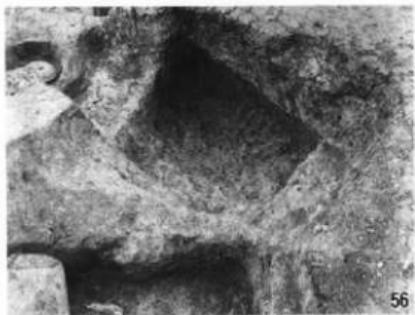
53



54



55



56



57

53 SK-16 土層断面（西から）

54 SK-16 完掘状況（北東から）

55 SK-17 遺物出土状態（北東から）

56 SK-17 完掘状況（西から）

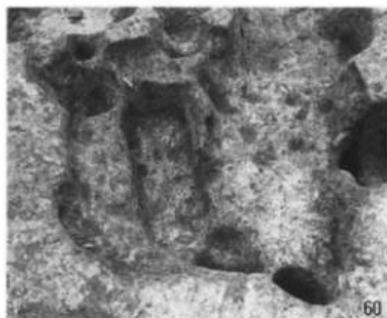
57 SK-18 完掘状況（北から）



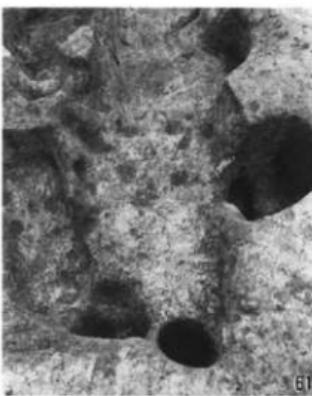
58



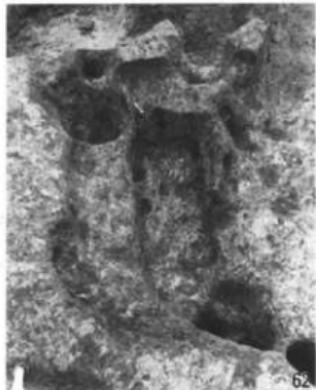
59



60



61



62



63

58 SK-32 土層断面（南から）

59 SK-32 完掘状況（東から）

60(右) SK-48 (西から)

(左) SK-47

61 SK-47 完掘状況（西から）

62 SK-48完掘状況（西から）

63 SK-48 完掘状況（西から）

63 SK-53 (東から)



64



65



66



67



68



69

64 SK-54・55 (東から)

65 SK-56 (北西から)

66 SD-37 全景 (北から)

67 SD-37 遺物出土状態 (南から)

68 SD-37 土層断面 (南から)

69 SD-37 土層断面 (北から)



70 SD-02 土層断面（東から）

71 SD-50（東から）

72 SD-50（西から）

73 SD-50 土層断面（東から）



1)



2)



3)



4)



5)



6)

1) 第17次調査古墳周溝土層断面（東から）

2) 古墳周溝土層断面（東から）

3) 古墳周溝内遺物出土状態（西から）

4) 古墳周溝完掘状況（西から）

5) 古墳周溝内遺物出土状態（西から）

6) 古墳周溝内埴輪第17群出土状態（北から）



1) 古墳周溝内遺物出土状態（西から）

2) 拡張区全景（東から）

3) SD-01 土層断面（北から）

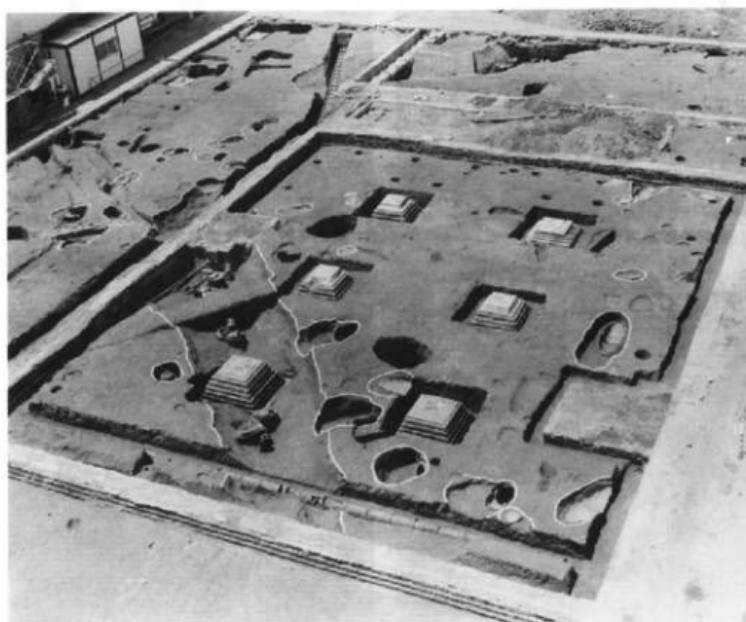
4) 調査風景

5) 後円部周溝確認状況（東から）

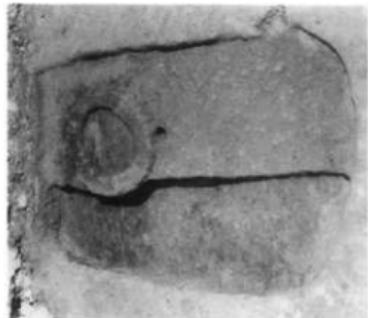
6) 宅電所内周溝確認立会調査風景



1) 第21次調査全景（西から）



2) 弥生時代遺構分布状態（東から）



1) 第40号贮藏穴検出状況



2) 第41号貯藏穴遺物出土状態



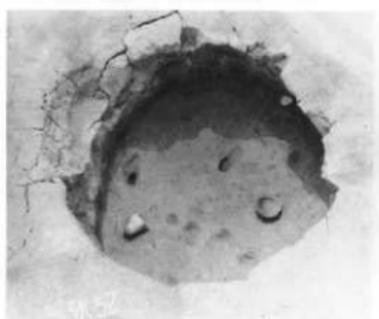
3) 第43号貯藏穴発掘状況



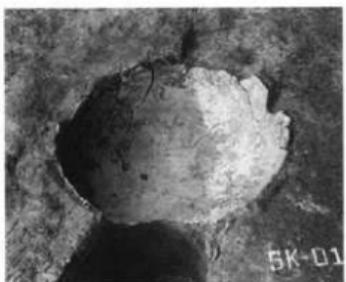
4) 第45号貯藏穴発掘状況



5) 第47号貯藏穴遺物出土状態



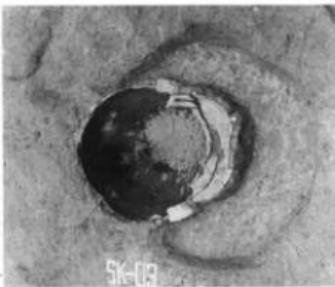
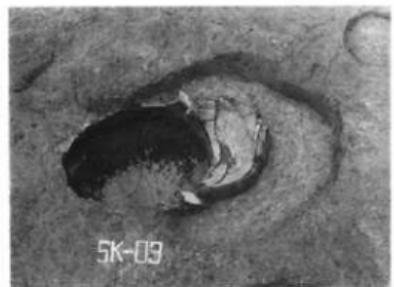
6) 第52号貯藏穴遺物出土状態



1) 第1号壺棺墓完掘状況(左:南西から 右:南から)



2) 第2号壺棺墓完掘状況(左:南西から 右:東から)



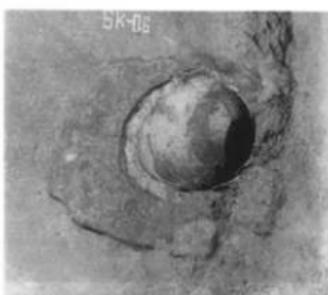
3) 第3号壺棺墓完掘状況(左:南から 右:東から)



1) 第4号壺棺墓完掘状況（南東から）



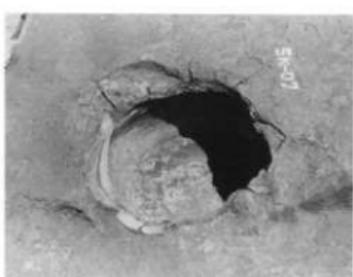
2) 第5号壺棺墓完掘状況（南東から）



3) 第6号壺棺墓完掘状況（左：東から 右：南から）



4) 第7号壺棺墓完掘状況（左：北東から 右：北西から）





1) 第8号壺棺墓完掘状況（左：東から 右：北東から）



2) 第9号壺棺墓完掘状況（北東から）



3) 第10号壺棺墓完掘状況（北から）



4) 第11号壺棺墓完掘状況（左：南から 右：東から）

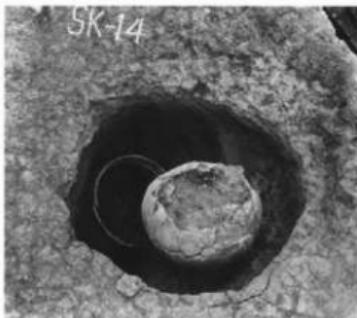




1) 第12号壺棺墓完掘状況（左：北東から　右：南西から）



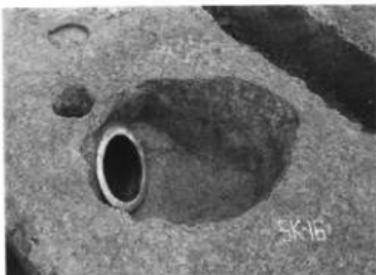
2) 第13号壺棺墓完掘状況（西から）



3) 第14号壺棺墓完掘状況（南東から）



4) 第15号壺棺墓完掘状況（左：南東から　右：南西から）



1) 第16号斂棺墓完掘状況（左：南西から　右：南東から）



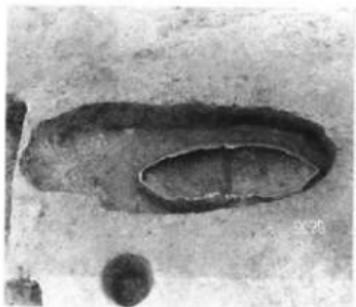
2) 第17号斂棺墓完掘状況（左：南から　右：東から）



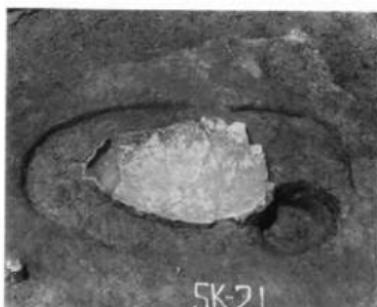
3) 第18号斂棺墓完掘状況（北東から）



4) 第19号斂棺墓完掘状況（北から）



1) 第20号壺棺墓完掘状況（北から）



2) 第21号壺棺墓完掘状況（東から）



3) 第22号壺棺墓完掘状況（北から）



4) 第23号壺棺墓完掘状況（北から）



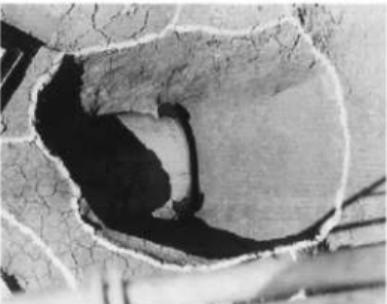
5) 第24号壺棺墓完掘状況（北から）



6) 第25号壺棺墓完掘状況（南から）



1) 第26号墓棺室完掘状況（左：南東から　右：北東から）



2) 第27号墓棺室完掘状況（左：南東から　右：南西から）



3) 第28号墓棺室完掘状況（北東から）  
4) 墓棺室分布状況（東から）



1) 第48号祭址土壤全景 (東から)



2) 第48号祭址土壤土層断面 (南から)



1) 第48号祭祀土壙B部土器出土状態



2) 第49号祭祀土壙遺物出土状態（西から）



3) 第49号祭祀土壙遺物出土状態（南西から）



4) 第48号祭祀土壙甕・壺出土状態



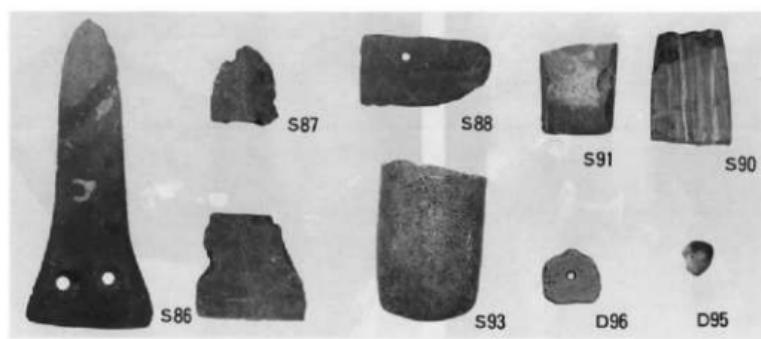
5) 第48号祭祀土壙甕・高壺出土状態



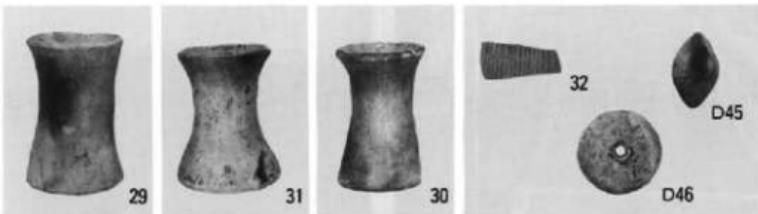
6) 第48号祭祀土壙遺物出土状態



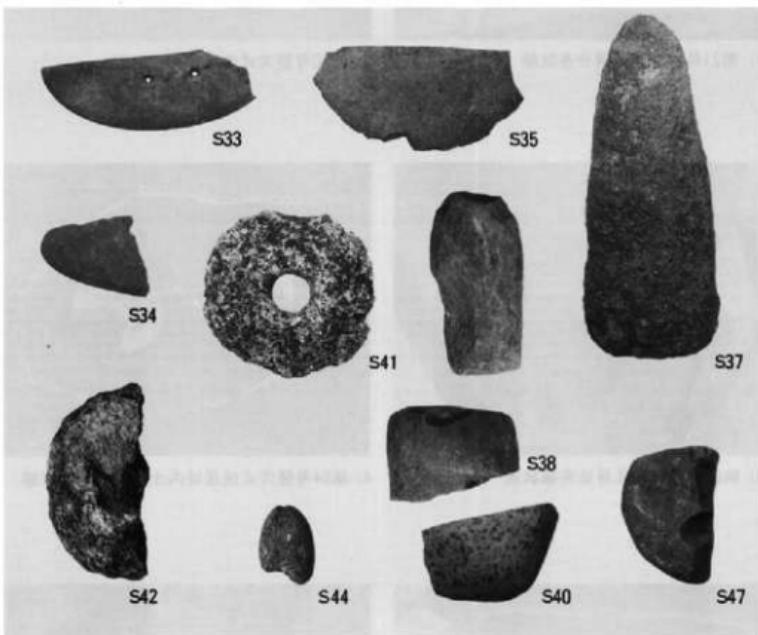
1) 第48号祭祀土壤出土土器



2) 第48号祭祀土壤出土土器·土製品



1) 第49号祭祀土壤出土土器および土製品



2) 第49号祭祀土壤出土石器



3) 第71号竪穴式住居址  
出土青銅製鉗先



4) 将集板状铁斧



1) 第21号次調査造構分布状況（西から）



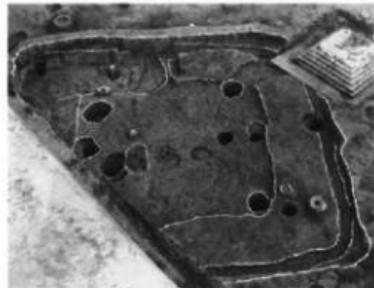
2) 第60号竪穴式住居址完掘状況



3) 第64号竪穴式住居址完掘状況



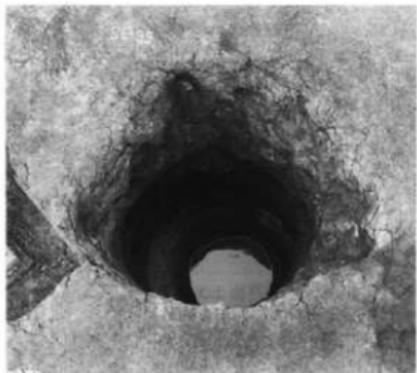
4) 第64号竪穴式住居址内土壤遺物出土状況



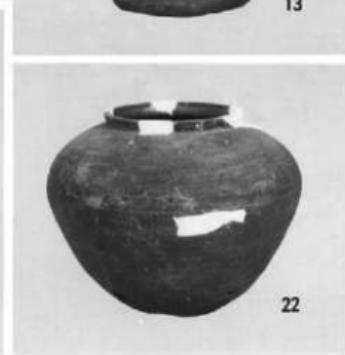
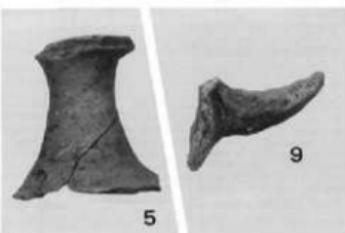
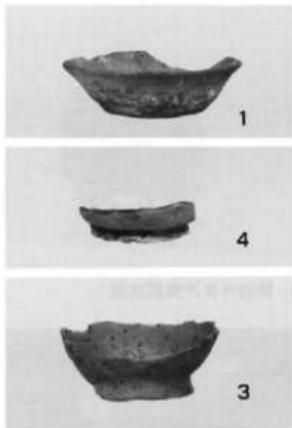
5) 第67号竪穴式住居址完掘状況



6) 第70号竪穴式住居址遺物出土状況



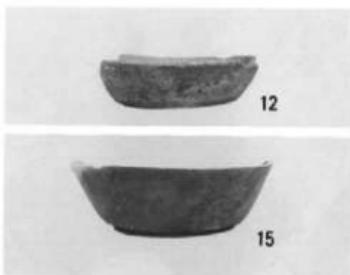
1) 第55号井戸完掘状況



2) 第55号井戸出土土器



1) 第56号井戸発掘状況



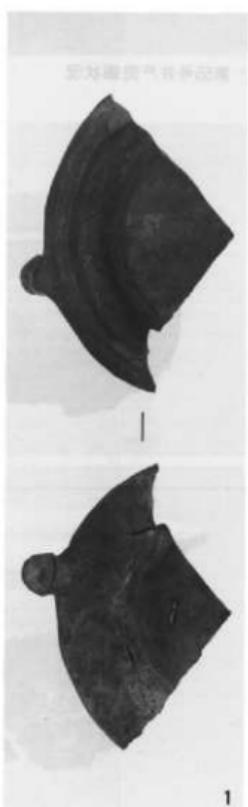
2) 第56号井戸出土土器



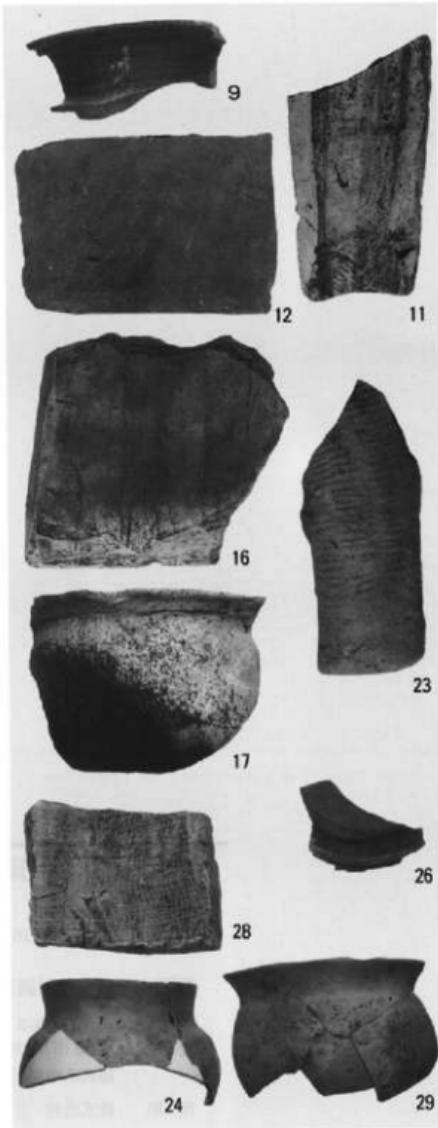
3) 第61号井戸土層断面



4) 第61号井戸発掘状況



5) 出土獸脚甌



1) 第61号井戸出土遺物

---

## 那珂 5

-第10・11・12・14・16・17・21次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第291集

1992年3月13日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大神一丁目8番1号

印刷 株式会社 川島弘文社

---

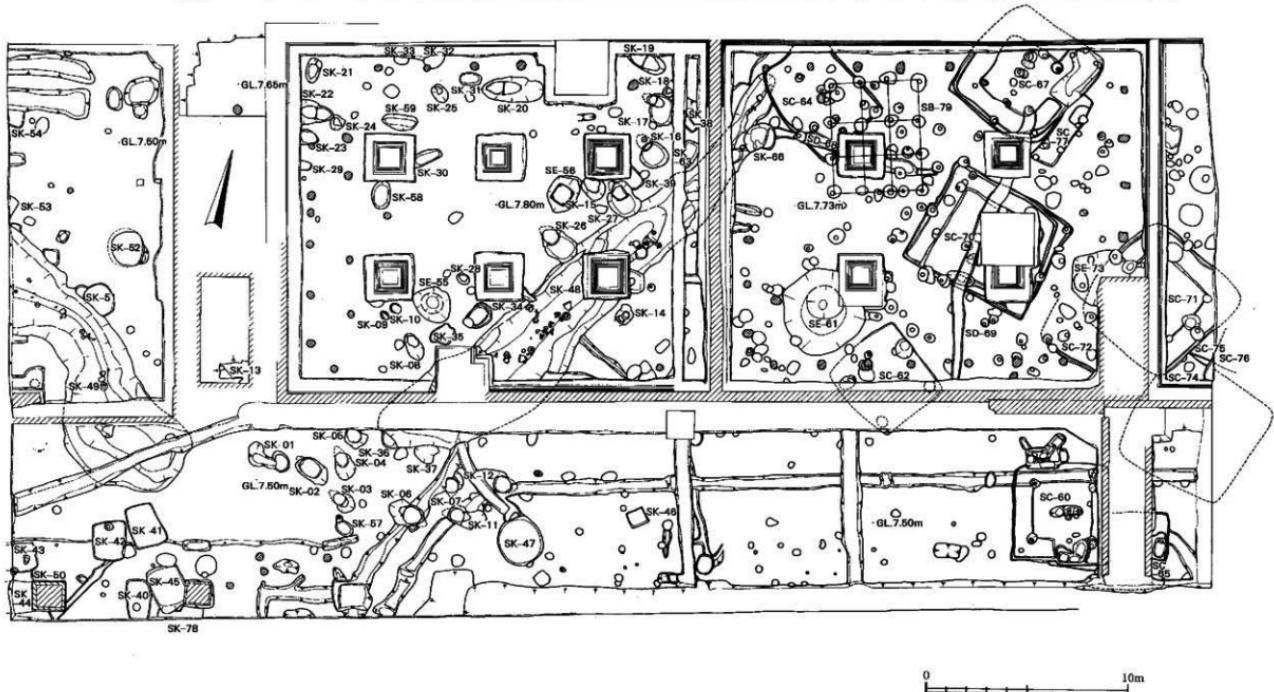


Fig.164 第21次調査遺構配置図